

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 256

城 殿 山 遺 跡
和 田 谷 遺 跡
マキサヤ 遺 跡

一般国道2号（玉島・笠岡道路）
改築工事に伴う発掘調査2

2022

岡山県教育委員会



1 遺跡遠景（北東上空から）



2 2区遠景（北上空から）



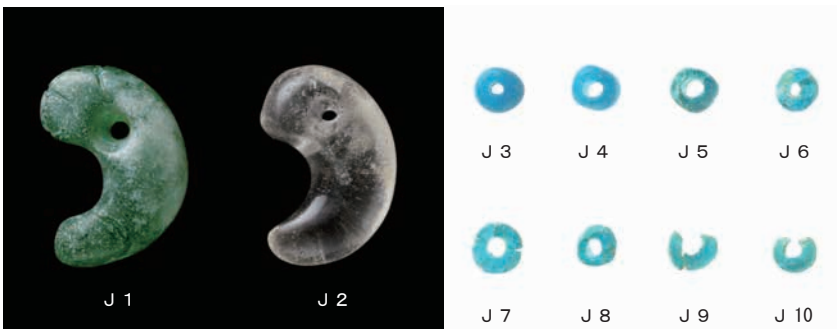
1 埋葬施設 1 (西から)



3 埋葬施設 4 (西から)



2 上：埋葬施設 1 出土鉄剣 (M1)
下：布痕跡拡大



4 埋葬施設 4 出土玉類



5 埋葬施設 4 玉類出土状況
(西から)



1 遺跡全景（西から）



2 土坑20遺物出土状況（南から）



1 河道 1 北地区土器出土状況（北から）



2 河道 1 北地区底面土器（北東から）



3 河道 1 北地区底面土器68（東から）



4 河道 1 出土縄文土器

序

一般国道2号は大阪府大阪市を起点とし、福岡県北九州市に至る延長約670kmの主要幹線道路です。玉島・笠岡道路は、倉敷市玉島阿賀崎から笠岡市西大島新田に至る延長13.9kmの国道2号バイパスであり、地域高規格道路「倉敷福山道路」の一部を構成します。県西部の慢性的な交通混雑を緩和し、沿線地域の発展を図ることを目的としています。

岡山県教育委員会では、計画路線内に所在する埋蔵文化財の取り扱いについて、関係機関と協議を重ねてまいりましたが、現状のまま保存することが困難な部分についてはやむを得ず記録保存の措置を講じることとし、発掘調査を実施いたしました。

本書は、平成27～29年度・令和2年度に一般国道2号（玉島・笠岡道路）改築工事に伴って実施した、浅口市鴨方町六条院西に所在する城殿山遺跡・和田谷遺跡と浅口郡里庄町新庄に所在するマキサヤ遺跡の発掘調査記録を収載しています。

調査の結果、城殿山遺跡では、弥生時代から古墳時代初頭にかけての墳墓がみつき、鉄剣、鉄鏃、勾玉やガラス玉などの貴重な副葬品が出土しました。和田谷遺跡では、奈良時代の鍛冶炉、平安時代から鎌倉時代にかけての大規模な掘立柱建物が多数みつき、地域の中でも有力な集落の様相が明らかになりました。マキサヤ遺跡では、河道から縄文時代後期前葉を中心とする土器が多く出土しており、西日本の縄文土器編年を補強する資料として注目されます。

これらの調査成果を収めた本書が、地域の歴史研究に寄与するとともに、埋蔵文化財の保護・保存のために活用され、また学術研究のための資料として、広く役立つならば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書作成にあたりましては、国土交通省中国地方整備局岡山国道事務所をはじめとする関係機関や地域住民の皆様から御理解と御協力を賜りました。ここに厚くお礼申し上げます。

令和4年3月

岡山県古代吉備文化財センター
所長 大橋 雅也

例 言

- 1 本書は、岡山県教育委員会が一般国道2号（玉島・笠岡道路）改築工事に伴い、国土交通省中国地方整備局岡山国道事務所と岡山県の委託契約に基づき実施した、城殿山遺跡・和田谷遺跡・マキサヤ遺跡の発掘調査報告書である。契約事項は文化財課が行い、発掘調査及び報告書作成は岡山県古代吉備文化財センターが担当した。
- 2 城殿山遺跡は浅口市鴨方町六条院西3163ほかに、和田谷遺跡は浅口市鴨方町六条院西2839-1ほかに、マキサヤ遺跡は浅口郡里庄町新庄3885ほかに所在する。
- 3 確認調査は平成26～28年度・令和元年度に小嶋善邦・河合忍・松尾佳子が担当し調査面積は316㎡である。本発掘調査は平成27～29年度・令和2年度に実施した。平成27年度は高田恭一郎・柴田英樹・小林利晴・河合・松尾・石田爲成・藤井翔平・森本直人が担当し、調査面積は和田谷遺跡が5,450㎡、マキサヤ遺跡が2,250㎡である。平成28年度は柴田・石田・森本が担当し、調査面積は和田谷遺跡が2,400㎡、マキサヤ遺跡が2,873㎡である。平成29年度は澤山孝之・氏平昭則・森本が担当し、調査面積は和田谷遺跡2,315㎡である。令和2年度は渡邊恵里子・松尾・北門幸二郎が担当し、調査面積は城殿山遺跡1,175㎡である。
- 4 発掘調査及び報告書の作成にあたって「一般国道2号（玉島・笠岡道路）改築工事に伴う埋蔵文化財保護調査指導会」（平成28年度までは「一般国道2号（玉島・笠岡道路）改築工事に伴う埋蔵文化財保護対策委員会）」を設け、次の委員各位から指導・助言をいただいた。記して謝意を表す。なお、（ ）は依頼時の所属機関名である。

岩崎 志保（岡山大学埋蔵文化財調査研究センター）〈平成29年度から〉
澤田 秀実（くらしき作陽大学）〈平成28年度まで〉
清家 章（岡山大学）〈平成28年度から平成29年度まで〉
富岡 直人（岡山理科大学）〈令和元年度から〉
新納 泉（岡山大学）〈平成27年度から〉
根木 修（元岡山市教育委員会）〈平成27年度のみ〉
福本 明（倉敷市教育委員会）〈平成29年度まで〉
間壁 葎子（元倉敷考古館）〈平成27年度から〉
光本 順（岡山大学）〈令和元年度から〉
- 5 本書の作成は、平成28年度・令和元～3年度に実施し、高田・澤山・柴田・渡邊・氏平・松尾・石田・藤井・森本・北門が担当した。
- 6 本書の執筆は、調査担当者が分担し、文責は節及び各項目、あるいは遺構ごとの文末に示した。また、編集は各遺跡毎に行い城殿山遺跡は渡邊、和田谷遺跡は澤山・石田、マキサヤ遺跡は松尾が担当した。全体の編集は石田が行った。
- 7 本書に関係する遺構・遺物については、次の諸氏に鑑定・分析を依頼し有益な教示を得た。記して謝意を表す。

石材の鑑定・堆積土層の鑑定 鈴木茂之（岡山大学）

織布の鑑定 東村純子（福井大学）
鉄剣の鑑定 ライアン・ジョセフ（岡山大学）
土器の胎土分析・赤色顔料の分析・黒曜石の産地同定

白石 純（岡山理科大学）

施釉陶器の鑑定 高橋照彦（大阪大学）

縄文土器の鑑定 千葉 豊（京都大学）

8 本書に関係する遺物の分析については、次の機関と業務委託契約を行い実施した。

ガラス玉の成分分析 独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所

鉄滓の分析 日鉄テクノロジー株式会社

樹種同定・放射性炭素年代測定 株式会社パレオ・ラボ、パリノ・サーヴェイ株式会社

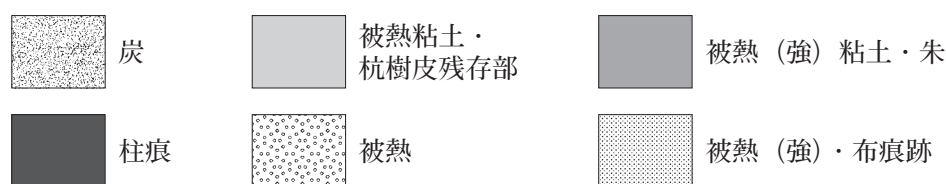
土壌の花粉分析 パリノ・サーヴェイ株式会社

9 遺物写真の撮影については、江尻泰幸の協力と援助を得た。

10 本書に関連する遺構・遺物の図面・写真等は、岡山県古代吉備文化財センター（岡山市北区西花尻1325-3）に保管している。

凡 例

- 1 本書に用いた高度値は標高である。
- 2 遺構全体図及び遺構図が示す北方位は平面直角座標第V系（世界測地系）の座標北である。
- 3 調査区配置図・遺構全体図・報告書抄録等に記載したグリッド値・経緯度は世界測地系による。
なお、和田谷遺跡については、 $X = -165,220$ を1、 $Y = -69,800$ をAとした20m間隔のグリッドを設け、X軸では1から南へ20mごとに2、3の順に、Y軸では東へA、Bの順に表した（第52図）。マキサヤ遺跡については、 $X = -166,080$ を1、 $Y = -71,220$ をAとした20m間隔のグリッドを設け、X軸では1から南へ20mごとに2、3の順に、Y軸では東へA、Bの順に表した（第208図）。両遺跡で遺構の位置を記述する際には、このグリッドの北西隅を基準とし、5Dなどと呼称する。
- 4 本報告書に掲載した地図のうち、第2・3図は国土地理院発行の「電子地形図25000」を使用し、加筆したものである。また、第273図は「地理院タイル（陰影起伏図）」を加工して作成したものである。
- 5 土層と遺物の色調は『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修 財団法人日本色彩研究所色票監修）、『新版色の手帖』（永田泰弘監修 小学館 2002）に準拠している。
- 6 遺構・遺物の縮尺は個々に明記している。
- 7 全体図では遺構名に次のような略称を用いている。
竪穴住居：住 段状遺構：段 掘立柱建物：建 柱穴列：列 埋葬施設：埋
土坑：土 竪穴遺構：竪 鍛冶炉：炉 被熱面：被 たわみ：た ピット：P
- 8 遺構・遺物の番号は、各遺跡ごとに、それぞれ種類別に通し番号を付している。
- 9 遺物番号は、土器・瓦は番号のみ、それ以外は次の記号を番号の前に付した。
土製品：C 石製品：S 玉類：J 木製品：W 金属製品：M
- 10 遺構図における炭や被熱粘土、朱の分布範囲、被熱による変色範囲や柱痕、遺物図における杭樹皮残存部や布痕跡については、次のように表現した。



- 11 土器実測図の中軸線左右の白抜きは、小破片のため口径復元に不確実性があることを示す。
- 12 本書で用いた時代区分は、一般的な政治史区分に準拠し、それを補うために文化史区分や世紀を併用している。なお、7世紀代については、ここでは古墳時代を表記として用いた。弥生時代後期～古墳時代初頭の時期区分上での表現については、各執筆者の意向に沿っているが、一部、高橋編年（高橋 護「上東式土器の細分編年基準」『研究報告』7 岡山県立博物館 1986、高橋 護「弥生時代終末期の土器編年」『研究報告』9 岡山県立博物館 1988）を用いている。

目 次

巻頭図版

序

例言

凡例

目次

第1章 遺跡の位置と環境	1
第2章 発掘調査及び報告書作成の経緯と経過	5
第1節 調査に至る経緯	5
第2節 発掘調査の経過	8
第3節 報告書作成の経過	10
第4節 日誌抄	10
第5節 発掘調査及び報告書作成の体制	13
第3章 城殿山遺跡	17
第1節 調査の概要	17
第2節 1区の調査	18
1 概要	18
2 室町時代以降の遺構・遺物	19
第3節 2区の調査	22
1 概要	22
2 弥生時代の遺構・遺物	24
3 室町時代以降の遺構・遺物	34
第4節 小結	40
第4章 和田谷遺跡	41
第1節 調査の概要	41
第2節 古墳時代以前の遺構・遺物	45
1 概要	45
2 段状遺構	51
3 土坑	58
4 溝	60
5 その他の遺構・遺物	66
第3節 奈良～平安時代の遺構・遺物	73
1 概要	73
2 掘立柱建物	79
3 段状遺構	93

4	柱穴列	96
5	土坑	98
6	竪穴遺構	106
7	鍛冶炉	111
8	被熱面	112
9	溝	112
10	たわみ	114
11	その他の遺構・遺物	115
第4節 鎌倉時代以降の遺構・遺物		123
1	概要	123
2	掘立柱建物	128
3	柱穴列	134
4	土坑	137
5	被熱面	140
6	溝	140
7	たわみ	142
8	河道	143
9	その他の遺構・遺物	143
第5節 小結		147
第5章 マキサヤ遺跡		149
第1節 調査の概要		149
第2節 縄文時代の遺構・遺物		152
1	概要	152
2	土坑	153
3	たわみ	154
4	河道	155
5	その他の遺物	170
第3節 弥生～古墳時代の遺構・遺物		171
1	概要	171
2	竪穴住居	172
3	土坑	175
4	集石	178
5	たわみ	180
6	河道	180
7	その他の遺物	181
第4節 平安時代以降の遺構・遺物		182
1	概要	182
2	柱穴列	183

3	土坑	184
4	たわみ	185
5	河道	185
6	護岸	186
7	その他の遺物	189
第5節	小結	190
第6章	自然科学的分析	191
第1節	岡山県浅口市城殿山遺跡出土ガラス玉の自然科学的調査	191
第2節	城殿山遺跡出土炭化材の放射性炭素年代測定	196
第3節	和田谷遺跡・城殿山遺跡出土遺物の胎土分析及び赤色顔料分析	199
第4節	和田谷遺跡出土炭化材の放射性炭素年代測定	202
第5節	和田谷遺跡出土炭化材の樹種同定	204
第6節	和田谷遺跡出土鍛冶関連遺物の分析調査	206
第7節	マキサヤ遺跡及び和田谷遺跡の樹種同定・放射性炭素年代測定・花粉分析	217
第7章	総括	229
第1節	路線内遺跡の調査成果	229
第2節	城殿山遺跡の位置付け	235
第3節	和田谷遺跡の遺構及び遺物について	241
第4節	マキサヤ遺跡河道1出土縄文土器について	247

遺構一覧表・遺物観察表・新旧遺構名称対照表

図版

報告書抄録

目 次

〈第1章〉		第32図 埋葬施設 6 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/3)	31
第1図 遺跡位置図 (1/1,500,000) ……………	1	第33図 石列 (1/40)・周辺出土遺物 (1/4) ……	33
第2図 周辺遺跡分布図 (1/50,000) ……………	2	第34図 2区遺構全体図② (1/300) ……………	34
〈第2章〉		第35図 土坑 2 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……	35
第3図 予定路線と調査対象遺跡 (1/25,000) ……	5	第36図 土坑 3 (1/30) ……………	35
第4図 マキサヤ遺跡確認調査トレンチ配置図 (1/2,500) ……………	7	第37図 土坑 4 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……	35
第5図 和田谷遺跡確認調査トレンチ配置図 (1/2,500) ……………	7	第38図 土坑 5 (1/30) ……………	35
第6図 城殿山遺跡確認調査トレンチ配置図 (1/2,500) ……………	7	第39図 土坑 6 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/3) ……	36
第7図 マキサヤ遺跡・和田谷遺跡・城殿山遺跡 位置図 (1/15,000) ……………	9	第40図 土坑 7 (1/30) ……………	36
第8図 マキサヤ遺跡旧調査区配置図 (1/2,500) ……………	9	第41図 土坑 8 (1/30) ……………	36
第9図 和田谷遺跡旧調査区配置図 (1/2,500) ……	9	第42図 土坑 8 出土遺物 (1/4) ……………	37
〈第3章〉		第43図 土坑 9 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……	37
第10図 遺跡周辺地形図 (1/2,000) ……………	17	第44図 溝 6 (1/30)・出土遺物 (1/3) ……	37
第11図 1区遺構全体図 (1/300)・南壁断面図 (1/100) ……………	18	第45図 溝 7 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……	37
第12図 1区南半遺構全体図 (1/100) ……	19	第46図 溝 8 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……	38
第13図 掘立柱建物 1 (1/60) ……………	20	第47図 溝 9 (1/30) ……………	38
第14図 柱穴列 1 (1/60) ……………	20	第48図 遺構に伴わない遺物 (1/4・1/3・1/2) ……	39
第15図 柱穴列 2 (1/60) ……………	20	第49図 2区主要遺構全体図 (1/400) ……	40
第16図 土坑 1 (1/30) ……………	20	〈第4章〉	
第17図 溝 1 (1/30) ……………	21	第50図 遺跡周辺地形図 (1/2,000) ……………	41
第18図 溝 2 (1/30) ……………	21	第51図 基本土層柱状模式図 (高さ1/80、幅任意) ……………	42
第19図 溝 3 (1/30) ……………	21	第52図 和田谷遺跡全体図 (1/800) ……	43・44
第20図 溝 4 (1/30) ……………	21	第53図 古墳時代以前の遺構全体図 (1/1,000) ……	45
第21図 溝 5 (1/30) ……………	21	第54図 古墳時代以前の遺構全体図① (1/400) ……	46
第22図 2区調査前・後地形測量図 (1/400) ……	22	第55図 古墳時代以前の遺構全体図② (1/400) ……………	47・48
第23図 調査区断面図 (1/100) ……………	23	第56図 古墳時代以前の遺構全体図③ (1/400) ……	49
第24図 2区遺構全体図① (1/150) ……………	24	第57図 段状遺構 1 (1/60)・出土遺物 (1/4) ……	51
第25図 埋葬施設 1 (1/40)・棺内検出状況 (1/30) ……………	25	第58図 段状遺構 2 (1/60) ……………	52
第26図 埋葬施設 1 出土遺物 (1/4・1/3) ……	26	第59図 段状遺構 3 (1/60) ……………	52
第27図 埋葬施設 2 (1/30) ……………	27	第60図 段状遺構 3 出土遺物 (1/4・1/3) ……	53
第28図 埋葬施設 3 (1/30) ……………	27	第61図 段状遺構 4 (1/60) ……………	54
第29図 埋葬施設 4 (1/40)・出土遺物① (1/4) ……	28	第62図 段状遺構 4 出土遺物 (1/4・1/2) ……	55
第30図 埋葬施設 4 棺内検出状況 (1/30)・ 玉出土状況 (1/2)・出土遺物② (1/1) ……	29	第63図 段状遺構 5 (1/60)・出土遺物 (1/4) ……	55
第31図 埋葬施設 5 (1/40)・出土遺物 (1/4・1/3) ……………	30	第64図 段状遺構 6 (1/60)・出土遺物 (1/4) ……	56
		第65図 段状遺構 7 (1/60) ……………	56
		第66図 段状遺構 7 出土遺物 (1/4) ……	57
		第67図 段状遺構 8 (1/60) ……………	57
		第68図 段状遺構 8 出土遺物 (1/4) ……	58
		第69図 土坑 1 (1/30) ……………	58
		第70図 土坑 2 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……	58

第71図	土坑3 (1/30) ……………	59	第107図	掘立柱建物11 (1/60)・出土遺物 (1/4) ……………	91
第72図	土坑4 (1/30) ……………	59	第108図	掘立柱建物12 (1/60)・出土遺物 (1/4) ……………	92
第73図	土坑4 出土遺物 (1/4) ……………	60	第109図	段状遺構9 (1/60)・出土遺物 (1/4) ……	93
第74図	土坑5 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	60	第110図	段状遺構10 (1/60) ……………	93
第75図	溝1 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/2) ……	61	第111図	段状遺構11 (1/60・1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	94
第76図	溝2 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/2) ……	61	第112図	段状遺構11出土遺物 (1/4・1/3) ……	95
第77図	溝3 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/3・1/2) ……………	62	第113図	段状遺構12 (1/60)・出土遺物 (1/4) ……	95
第78図	溝4 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	63	第114図	柱穴列1 (1/60)・出土遺物 (1/4) ……	96
第79図	溝5・6 (1/30) ……………	63	第115図	柱穴列2 (1/60) ……………	96
第80図	溝7・8 (1/30)・溝7出土遺物 (1/4) ……	64	第116図	柱穴列3 (1/60)・出土遺物 (1/4) ……	97
第81図	溝8～11 (1/30) ……………	64	第117図	柱穴列4 (1/60) ……………	97
第82図	溝12 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/3) ……	65	第118図	柱穴列5 (1/60)・出土遺物 (1/4) ……	97
第83図	谷部木製品出土状況 (1/60) ……………	66	第119図	柱穴列6 (1/60)・出土遺物 (1/4) ……	98
第84図	谷部断面 (1/60) ……………	67	第120図	柱穴列7 (1/60) ……………	98
第85図	谷部出土遺物① (1/4) ……………	68	第121図	柱穴列8 (1/60) ……………	98
第86図	谷部出土遺物② (1/4) ……………	69	第122図	土坑6 (1/30) ……………	99
第87図	古墳時代以前の柱穴出土遺物 (1/4) ……	70	第123図	土坑7 (1/30) ……………	99
第88図	古墳時代以前の包含層・遺構に伴わない 遺物① (1/4) ……………	70	第124図	土坑8 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/3) ……	99
第89図	古墳時代以前の包含層・遺構に伴わない 遺物② (1/3・1/2) ……………	71	第125図	土坑9 (1/30) ……………	100
第90図	古墳時代以前の包含層・遺構に伴わない 遺物③ (1/4・1/3) ……………	72	第126図	土坑10 (1/30) ……………	100
第91図	奈良～平安時代の遺構全体図 (1/1,000) ……………	73	第127図	土坑11 (1/30) ……………	100
第92図	奈良～平安時代の遺構全体図① (1/400) ……………	74	第128図	土坑12 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……	101
第93図	奈良～平安時代の遺構全体図② (1/400) ……………	75・76	第129図	土坑13 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……	101
第94図	奈良～平安時代の遺構全体図③ (1/400) ……………	77	第130図	土坑14 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……	102
第95図	掘立柱建物1 (古) (1/60) ……………	80	第131図	土坑15 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……	102
第96図	掘立柱建物1 (新) (1/60) ……………	81	第132図	土坑16 (1/30) ……………	102
第97図	掘立柱建物1 出土遺物 (1/4・1/3) ……	82	第133図	土坑17～19 (1/30) ……………	103
第98図	掘立柱建物2 (1/60) ……………	83	第134図	土坑19出土遺物 (1/4) ……………	103
第99図	掘立柱建物3 (1/60) ……………	84	第135図	土坑20 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……	104
第100図	掘立柱建物4 (1/60) ……………	85	第136図	土坑21 (1/30) ……………	104
第101図	掘立柱建物5 (1/60)・出土遺物 (1/4・1/3) ……………	86	第137図	土坑22 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……	105
第102図	掘立柱建物6 (1/60) ……………	87	第138図	土坑23 (1/60)・出土遺物 (1/4) ……	105
第103図	掘立柱建物7 (1/60) ……………	87	第139図	土坑24 (1/30) ……………	105
第104図	掘立柱建物8 (1/60)・出土遺物 (1/4) ……………	88	第140図	土坑25・26 (1/30) ……………	106
第105図	掘立柱建物9 (1/60)・出土遺物 (1/4) ……………	89	第141図	竪穴遺構1 (1/80)・出土遺物① (1/3) ……………	107
第106図	掘立柱建物10 (1/60) ……………	90	第142図	竪穴遺構1 出土遺物② (1/4) ……	108
			第143図	竪穴遺構2・3 (1/60) ……………	109
			第144図	竪穴遺構2 出土遺物 (1/4) ……………	109
			第145図	竪穴遺構3 出土遺物 (1/4・1/3) ……	110
			第146図	鍛冶炉1 (1/30)・出土遺物 (1/3) ……	111
			第147図	鍛冶炉2～4 (1/30) ……………	111
			第148図	鍛冶炉5 (1/30)・出土遺物 (1/3) ……	112
			第149図	被熱面1 (1/30) ……………	112

第150図	溝13 (1/30) ……	112
第151図	溝14 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/3) ……	113
第152図	溝15・16 (1/30)・溝15出土遺物 (1/4) ……………	113
第153図	溝17・18 (1/30) ……	113
第154図	溝19 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……	113
第155図	溝20～22 (1/30) ……	114
第156図	たわみ1 (1/60) ……	114
第157図	たわみ2 (1/60)・出土遺物 (1/4) ……	114
第158図	たわみ3 (1/60)・出土遺物 (1/4) ……	115
第159図	たわみ4 (1/60) ……	115
第160図	谷部出土遺物③ (1/4) ……	115
第161図	柱穴1・2 (1/30) ……	115
第162図	奈良～平安時代の柱穴・ピット出土遺物① (1/4) ……	116
第163図	奈良～平安時代の柱穴・ピット出土遺物② (1/3) ……	117
第164図	奈良～平安時代の包含層・遺構に伴わない 遺物① (1/4) ……	118
第165図	奈良～平安時代の包含層・遺構に伴わない 遺物② (1/4) ……	119
第166図	奈良～平安時代の包含層・遺構に伴わない 遺物③ (1/4) ……	120
第167図	奈良～平安時代の包含層・遺構に伴わない 遺物④ (1/3) ……	121
第168図	奈良～平安時代の包含層・遺構に伴わない 遺物⑤ (1/3) ……	122
第169図	鎌倉時代以降の遺構全体図 (1/1,000) ……	123
第170図	鎌倉時代以降の遺構全体図① (1/400) ……	124
第171図	鎌倉時代以降の遺構全体図② (1/400) ……………	125・126
第172図	鎌倉時代以降の遺構全体図③ (1/400) ……	127
第173図	掘立柱建物13 (1/60) ……	128
第174図	掘立柱建物14 (1/60)・出土遺物 (1/2) ……………	129
第175図	掘立柱建物15 (1/60) ……	130
第176図	掘立柱建物15出土遺物 (1/4) ……	131
第177図	掘立柱建物16 (1/60) ……	131
第178図	掘立柱建物17 (1/60) ……	132
第179図	掘立柱建物18 (1/60)・出土遺物 (1/4) ……………	133
第180図	掘立柱建物19 (1/60) ……	134
第181図	柱穴列9 (1/60)・出土遺物 (1/4) ……	134
第182図	柱穴列10 (1/60) ……	135
第183図	柱穴列11～14 (1/60) ……	136
第184図	柱穴列15 (1/60)・出土遺物 (1/4) ……	137
第185図	土坑27～29 (1/30) ……	137

第186図	土坑30 (1/30) ……	138
第187図	土坑31 (1/30) ……	138
第188図	土坑32 (1/30) ……	138
第189図	土坑33 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……	139
第190図	土坑34 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……	139
第191図	土坑35 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……	140
第192図	被熱面2 (1/30) ……	140
第193図	溝23・24 (1/30) ……	140
第194図	溝25～30 (1/30) ……	141
第195図	溝31 (1/30) ……	142
第196図	溝32 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……	142
第197図	溝33 (1/30) ……	142
第198図	溝34 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……	142
第199図	たわみ5 (1/60) ……	142
第200図	たわみ6 (1/60)・出土遺物 (1/4) ……	142
第201図	河道1 (1/60)・出土遺物 (1/4) ……	143
第202図	谷部出土遺物④ (1/4・1/3) ……	143
第203図	鎌倉時代以降の柱穴出土遺物 (1/4・1/3・1/2) ……	144
第204図	鎌倉時代以降の包含層・遺構に伴わない 遺物① (1/4) ……	144
第205図	鎌倉時代以降の包含層・遺構に伴わない 遺物② (1/4) ……	145
第206図	鎌倉時代以降の包含層・遺構に伴わない 遺物③ (1/3・1/2) ……	146
〈第5章〉		
第207図	遺跡周辺地形図 (1/2,000) ……	149
第208図	マキサヤ遺跡全体図 (1/800) ……	150
第209図	南壁断面模式図 (1/500) ……	150
第210図	調査区断面図 (1/100) ……	151
第211図	縄文時代の遺構全体図 (1/800) ……	152
第212図	縄文時代の遺構全体部分図 (1/400) ……	152
第213図	土坑1 (1/30) ……	153
第214図	土坑2 (1/30)・出土遺物 (1/3) ……	153
第215図	たわみ1 (1/60) ……	154
第216図	たわみ2 (1/60)・出土遺物 (1/3) ……	154
第217図	たわみ3 (1/60)・出土遺物 (1/3) ……	155
第218図	たわみ4 (1/60)・出土遺物 (1/3) ……	155
第219図	河道1 (1/300)・断面図 (1/80) ……	156
第220図	河道1北地区土器出土状況 (1/80) ……	158
第221図	河道1北地区出土遺物① (1/3) ……	158
第222図	河道1北地区出土遺物② (1/4・1/3) ……	159
第223図	河道1北地区出土遺物③ (1/4・1/3) ……	160
第224図	河道1北地区出土遺物④ (1/3) ……	161
第225図	河道1北地区出土遺物⑤ (1/3) ……	162
第226図	河道1北地区出土遺物⑥ (1/4・1/3) ……	163
第227図	河道1北地区出土遺物⑦ (1/4・1/3) ……	164

第228図	河道1南地区上層出土遺物 (1/4・1/3)	165	第255図	柱穴列1 (1/60)・出土遺物 (1/2)	184
第229図	河道1南地区下層土器溜まり出土状況 (1/30)	165	第256図	土坑11・12 (1/30)	184
第230図	河道1南地区下層出土遺物① (1/3)	166	第257図	たわみ8 (1/60)・出土遺物 (1/4)	185
第231図	河道1南地区下層出土遺物② (1/4・1/3)	167	第258図	河道2断面図 (1/80)・杭 (1/10)・出土遺物 (1/4)	185
第232図	河道1南地区下層出土遺物③ (1/4)	168	第259図	護岸1横木 (1/10)	186
第233図	河道1出土遺物① (1/3)	168	第260図	護岸1平・立面図 (1/100)・断面図 (1/30)・杭 (1/10)	187・188
第234図	河道1出土遺物② (1/2)	168	第261図	遺構に伴わない遺物 (1/4・1/3)	189
第235図	河道1出土遺物③ (1/3・1/2)	169	〈第6章〉		
第236図	遺構に伴わない遺物 (1/3・1/2)	170	第262図	化学組成によるカリガラスの細分	195
第237図	弥生～古墳時代の遺構全体図 (1/800)	171	第263図	暦年較正結果	197
第238図	弥生～古墳時代の遺構全体部分図 (1/400)	172	第264図	和田谷遺跡と児島周辺の製塩土器の比較	201
第239図	竪穴住居1 (1/60・1/30)・出土遺物 (1/4)	173	第265図	和田谷遺跡 (須恵器、土師器)と上竹西の坊遺跡との比較	201
第240図	竪穴住居2 (1/60)・出土遺物 (1/4)	174	第266図	和田谷遺跡 (須恵器、土師器)と上竹西の坊遺跡との比較	201
第241図	土坑3 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/2)	175	第267図	暦年較正結果	203
第242図	土坑4 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/2)	176	第268図	鍛造剥片3層分離型模式図	211
第243図	土坑5 (1/30)・出土遺物 (1/4)	176	第269図	Fe-O系平衡状態図	211
第244図	土坑6 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/2)	177	第270図	マキサヤ遺跡の暦年較正結果	219
第245図	土坑7 (1/30)	177	第271図	マキサヤ遺跡の花粉化石群集	223
第246図	土坑8～10 (1/30)	178	〈第7章〉		
第247図	集石1 (1/60)・出土遺物 (1/4)	178	第272図	路線内遺跡の消長	229
第248図	集石2 (1/60)・出土遺物 (1/4・1/2)	179	第273図	マキサヤ遺跡周辺の縄文遺跡 (1/80,000)	230
第249図	たわみ5・6 (1/60)	180	第274図	小型器台の変遷 (1/6)	235
第250図	たわみ7 (1/60)・出土遺物 (1/4・1/3・1/2)	180	第275図	茎指数の分布	236
第251図	河道1出土遺物 (1/4・1/2)	181	第276図	主要遺跡分布図	240
第252図	遺構に伴わない遺物 (1/4・1/2)	181	第277図	9世紀代岡山県内掘立柱建物の総長	241
第253図	平安時代以降の遺構全体図 (1/800)	182	第278図	9世紀代岡山県内の掘立柱建物 (1/150)	242
第254図	平安時代以降の遺構全体部分図 (1/400)	183	第279図	河道1出土縄文土器	247
			第280図	地区別 有文・無文土器組成	248

表 目 次

〈第2章〉		〈第6章〉			
表1	確認調査一覧	6	表5	調査対象	191
表2	本発掘調査一覧	8	表6	蛍光X線分析結果	194
表3	現地説明会 (現地公開) 一覧	12	表7	測定試料及び処理	196
表4	文化財保護法に基づく文書一覧	15・16	表8	放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果	197
			表9	和田谷遺跡出土土器の胎土分析結果 (%)	200

表10	城殿山遺跡出土赤色顔料が含まれる土壌の分析 (%)	200	表33	和田谷遺跡 掘立柱建物一覧	254
表11	測定試料及び処理	202	表34	和田谷遺跡 段状遺構一覧	254・255
表12	放射性炭素年代測定及び暦年校正の結果	203	表35	和田谷遺跡 柱穴列一覧	255
表13	樹種同定結果一覧	204	表36	和田谷遺跡 土坑一覧	255
表14	供試材の履歴と調査項目	211	表37	和田谷遺跡 竪穴遺構一覧	256
表15	供試材の化学組成	212	表38	和田谷遺跡 鍛冶炉一覧	256
表16	出土遺物の調査結果のまとめ	212	表39	和田谷遺跡 溝一覧	256
表17	マキサヤ遺跡の樹種同定結果	218	表40	和田谷遺跡 たわみ一覧	256
表18	マキサヤ遺跡の放射性炭素年代測定結果	219	表41	和田谷遺跡 土器観察表	257～265
表19	マキサヤ遺跡の花粉分析結果	222	表42	和田谷遺跡 土製品観察表	265・266
	(第7章)		表43	和田谷遺跡 石製品観察表	266
表20	県内刀剣類出土の弥生時代墳墓	231	表44	和田谷遺跡 木製品観察表	266
表21	緑釉陶器産地・時期一覧	244	表45	和田谷遺跡 金属製品観察表	267
表22	型式別集計	248	表46	和田谷遺跡 新旧遺構名称対照表	268
表23	底部形態別集計	249	表47	マキサヤ遺跡 竪穴住居一覧	268
	(遺構一覧表・遺物観察表・新旧遺構名称対照表)		表48	マキサヤ遺跡 柱穴列一覧	269
表24	城殿山遺跡 掘立柱建物一覧	252	表49	マキサヤ遺跡 土坑一覧	269
表25	城殿山遺跡 柱穴列一覧	252	表50	マキサヤ遺跡 集石一覧	269
表26	城殿山遺跡 埋葬施設一覧	252	表51	マキサヤ遺跡 たわみ一覧	269
表27	城殿山遺跡 土坑一覧	252	表52	マキサヤ遺跡 土器観察表	269～275
表28	城殿山遺跡 溝一覧	252	表53	マキサヤ遺跡 土製品観察表	275
表29	城殿山遺跡 土器観察表	252・253	表54	マキサヤ遺跡 石製品観察表	275・276
表30	城殿山遺跡 玉類観察表	253	表55	マキサヤ遺跡 木製品観察表	276
表31	城殿山遺跡 金属製品観察表	253・254	表56	マキサヤ遺跡 金属製品観察表	276
表32	城殿山遺跡 新旧遺構名称対照表	254	表57	マキサヤ遺跡 新旧遺構名称対照表	276

写真目次

	(第2章)		写真13	コンピューテッドラジオグラフィ画像	193
写真1	和田谷遺跡現地説明会 (H27.2.20)	12	写真14	オートラジオグラフィ画像	193
写真2	マキサヤ遺跡現地公開 (H28.12.9)	12	写真15	試料No. 1 (PLD-43883:埋葬施設1)	196
写真3	城殿山遺跡現地説明会 (R2.7.7)	12	写真16	試料No. 2 (PLD-43884:土坑3)	196
	(第3章)		写真17	和田谷遺跡出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真	205
写真4	埋葬施設4出土青銅片 (1/1)	29	写真18	製錬滓 (炉内滓)・椀形鍛冶滓の顕微鏡写真	213
写真5	埋葬施設6奥壁 (西から)	32	写真19	椀形鍛冶滓・鍛冶滓の顕微鏡写真	214
写真6	石列検出状況 (北西から)	33	写真20	椀形鍛冶滓の顕微鏡写真	215
	(第4章)		写真21	微細遺物の顕微鏡写真・EPMA調査結果	216
写真7	溝3調査状況 (南東から)	50	写真22	マキサヤ遺跡の木材 (1)	226
写真8	掘立柱建物1・2 (南西から)	78	写真23	マキサヤ遺跡の木材 (2)	227
写真9	掘立柱建物9調査状況 (西から)	78	写真24	和田谷遺跡の木材	227
	(第5章)		写真25	マキサヤ遺跡の花粉化石	228
写真10	竪穴住居2の調査状況 (北西から)	171			
写真11	護岸1の調査状況 (南から)	187・188			
	(第6章)				
写真12	城殿山遺跡出土玉類の顕微鏡写真	192			

巻頭図版目次

〈城殿山遺跡〉

巻頭図版 1

- 1 遺跡遠景（北東上空から）
- 2 2区遠景（北上空から）

巻頭図版 2

- 1 埋葬施設 1（西から）
- 2 上：埋葬施設 1 出土鉄剣（M1）
下：布痕跡拡大
- 3 埋葬施設 4（西から）
- 4 埋葬施設 4 出土玉類
- 5 埋葬施設 4 玉類出土状況（西から）

〈和田谷遺跡〉

巻頭図版 3

- 1 遺跡全景（西から）
- 2 土坑20遺物出土状況（南から）

〈マキサヤ遺跡〉

巻頭図版 4

- 1 河道 1 北地区土器出土状況（北から）
- 2 河道 1 北地区底面土器（北東から）
- 3 河道 1 北地区底面土器68（東から）
- 4 河道 1 出土縄文土器

図版目次

〈城殿山遺跡 1区〉

- 図版 1 1 1区から北を望む（南東上空から）
2 1区全景（南西上空から）
3 掘立柱建物 1・柱穴列 1（北西から）

- 図版 2 1 柱穴列 2（南から）
2 土坑 1（東から）
3 溝 5（北東から）

〈城殿山遺跡 2区〉

- 図版 3 1 埋葬施設 1～5（北上空から）
2 埋葬施設 4～6・石列（西から）
- 図版 4 1 埋葬施設 1～3（北東から）
2 埋葬施設 1（北から）
3 埋葬施設 1 鉄剣出土状況（西から）

- 図版 5 1 埋葬施設 2（南から）
2 埋葬施設 3（南東から）
3 埋葬施設 4・5（西上空から）

- 図版 6 1 埋葬施設 4（東から）
2 埋葬施設 4（西から）
3 埋葬施設 5（西から）

- 図版 7 1 埋葬施設 6（西から）
2 埋葬施設 6（北西から）
3 石列（南西から）

- 図版 8 1 土坑 2（北から）
2 土坑 3（南西から）
3 土坑 9（南東から）

- 図版 9 1 埋葬施設 1・4・5 出土土器
2 石列・周辺出土土器
3 溝 7 出土土器

- 4 遺構に伴わない土器
- 5 金属製品

〈和田谷遺跡〉

- 図版 10 1 遺跡全景（北西上空から）
2 遺跡全景（南東上空から）

- 図版 11 1 溝 1～6（北西から）
2 掘立柱建物 1・2、段状遺構 9、柱穴列 1（南西から）

- 図版 12 1 掘立柱建物 3～5（北東から）
2 掘立柱建物 10～12（東から）

- 図版 13 1 掘立柱建物 1（南から）
2 掘立柱建物 8（北西から）
3 掘立柱建物 9・19（北西から）

- 図版 14 1 掘立柱建物 13・柱穴列 9（北から）
2 掘立柱建物 14（北東から）
3 掘立柱建物 15（北東から）

- 図版 15 1 段状遺構 1（南西から）
2 段状遺構 1 被熱面（南西から）
3 段状遺構 2・3（西から）

- 図版 16 1 段状遺構 4（北西から）
2 段状遺構 8（南から）
3 段状遺構 9（西から）

- 図版 17 1 段状遺構 11（西から）
2 段状遺構 11 土器溜まり（南西から）
3 段状遺構 11 被熱面（南西から）

- 図版 18 1 土坑 2（南西から）
2 土坑 14 土器出土状況（西から）
3 土坑 19 土器出土状況（南から）

- 図版19 1 土坑20土器出土状況（東から）
2 土坑22（東から）
3 竪穴遺構1（南西から）
- 図版20 1 鍛冶炉1（南西から）
2 鍛冶炉2（南西から）
3 鍛冶炉3（南東から）
- 図版21 1 鍛冶炉4（南西から）
2 鍛冶炉5（南西から）
3 谷部木製品出土状況（南西から）
- 図版22 1 段状遺構3出土土器
2 段状遺構4、土坑2・4出土土器
3 溝3・7出土土器
- 図版23 1 谷部（古墳時代）出土土器
2 掘立柱建物1出土土器
3 段状遺構11・12、土坑13・14出土土器
- 図版24 1 土坑19・20・22出土土器
2 竪穴遺構1・2出土土器
- 図版25 1 竪穴遺構3出土土器
2 溝15出土土器
3 谷部（古代）出土土器
4 柱穴・ピット（古代）出土土器
5 遺構に伴わない土器（古代）①
- 図版26 1 遺構に伴わない土器（古代）②
- 図版27 1 遺構に伴わない土器（古代）③・瓦
2 掘立柱建物15・柱穴列9・土坑35出土土器
3 柱穴（中世）出土土器
4 遺構に伴わない土器（中世）
- 図版28 1 土製品
- 図版29 1 石製品
- 図版30 1 木製品
2 金属製品
- 〈マキサヤ遺跡〉
- 図版31 1 遺跡全景（北西上空から）
2 土坑1（北東から）
3 土坑2（南東から）
- 図版32 1 たわみ1～4（南東から）
2 河道1南半上層（北から）
3 河道1北地区土器溜まり（南から）
- 図版33 1 河道1北地区集中部①（南から）
2 河道1北地区集中部②（南東から）
3 河道1北地区底面土器68周辺（東から）
- 図版34 1 河道1北地区底面土器36・95（東から）
2 河道1南地区下層土器溜まり上部（北西から）
3 河道1南地区下層土器溜まり下部（北から）
- 図版35 1 調査地南西部全景（北から）
2 竪穴住居1（南西から）
3 竪穴住居2（北西から）
- 図版36 1 土坑3（西から）
2 土坑4（北から）
3 土坑5（北から）
- 図版37 1 集石1上面（東から）
2 集石1完掘状況（北西から）
3 集石2上面（北東から）
- 図版38 1 集石2完掘状況（北東から）
2 たわみ6（北西から）
3 柱穴列1（北から）
- 図版39 1 土坑11（東から）
2 土坑12（北東から）
3 河道2・護岸1北端（北東から）
- 図版40 1 河道2・護岸1（南東から）
2 護岸1南半（南東から）
3 護岸1南端W11～W13周辺（南東から）
- 図版41 1 土坑2、たわみ2～4出土土器
2 河道1北地区出土土器①
- 図版42 1 河道1北地区出土土器②
- 図版43 1 河道1北地区出土土器③
- 図版44 1 河道1北地区出土土器④
- 図版45 1 河道1北地区出土土器⑤
2 河道1南地区上層出土土器
- 図版46 1 河道1南地区下層出土土器①
- 図版47 1 河道1南地区下層出土土器②
2 河道1出土土器（縄文時代晩期）
3 遺構に伴わない縄文土器
- 図版48 1 弥生土器・土師器
- 図版49 1 石製品
- 図版50 1 木製品
2 土製品
3 金属製品

第1章 遺跡の位置と環境

地理的環境

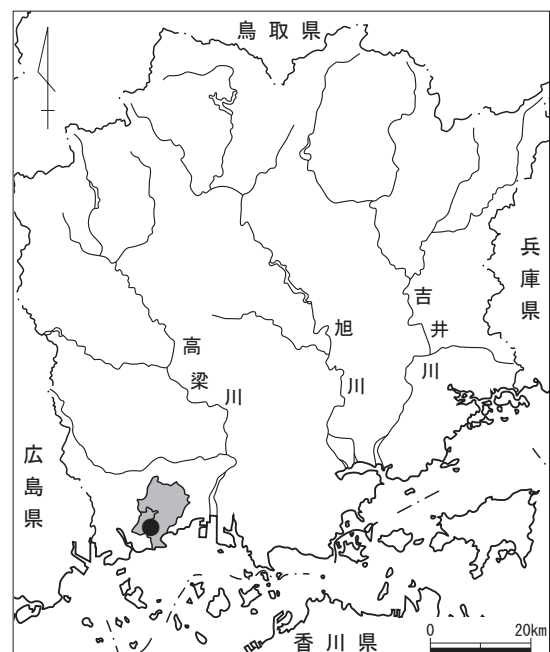
城殿山遺跡（第2図1、以下同）・和田谷遺跡（2）は浅口市鴨方町六条院西、マキサヤ遺跡（3）は浅口郡里庄町新庄に所在する。同市・町は瀬戸内沿岸山地と瀬戸内沿岸平野に属し、北部に遙照山山地、南部に寄島山地が南西から北東方向に延びている。また、遙照山山地南麓と寄島山地北麓の裾部には丘陵地が広がり、平野部を取り囲むように分布している。一方、寄島山地南麓はリアス式海岸を呈し、寄島地域でみられる平地の少ない海岸線となる。城殿山遺跡は寄島山地を構成する泉山山塊の西縁辺部の丘陵頂部、和田谷遺跡はその丘陵裾部に立地する。両遺跡は和田谷・三田和・幅・宇根の集落群の総称である「向月」と呼ばれる下郷地区に所在する。こうした集落群は古くから山塊丘陵の谷川を単位とする共同体が営まれた名残とされる。マキサヤ遺跡は毛野無羅山から北東方向に延びる尾根の東側裾部に立地し、また、毛野無羅山と茶白山で形成される狭小の谷から広がる扇状地上にもあたる。

歴史的環境

周辺の主な遺跡をみると、古くは旧石器時代まで遡る。瀬戸内海沿岸部では浅口市寄島町寄島の三郎島遺跡（80）、内陸部では浅口市鴨方町益坂の和田遺跡（31）で石器が出土しており、当地域での人間活動の萌芽がみえる。

縄文時代の遺跡は、浅口市寄島町東安倉の安倉八幡遺跡（78）周辺で縄文土器や石器の出土が知られている。調査地の西に隣接する笠岡市域には、笠岡市横島の大殿洲遺跡（90）や笠岡工業高校遺跡（88）、笠岡市西大島の津雲貝塚（国史跡、86）や原貝塚（85）がある。津雲貝塚では埋葬方法が分かる人骨や石器・骨角器の装身具から縄文人の精神文化の一端が明らかになった。また、出土した後期中葉土器は「津雲A式」と呼ばれる瀬戸内地域の標式土器となっている。

弥生時代に入ると遺跡数は増加する。浅口市鴨方町六条院中から六条院東にかけての堅川流域の丘陵斜面部には遺跡がいくつか存在し、仏堂遺跡（48）では弥生時代前期の土器がみついている。伴ノ木遺跡（54）では土坑や柱穴を発掘調査で確認しており、弥生時代中期の土器が多数出土している。六条院中の里見川流域では丘陵から延びる低台地上に森山遺跡（45）があり、調査によって弥生時代中期から後期の竪穴住居などが確認され、土器や石器、分銅形土製品が出土している。浅口市金光町佐方の丘陵頂部に位置する大鳥内遺跡（53）は、弥生時代後期の集落跡で竪穴住居が



第1図 遺跡位置図 (1/1,500,000)



- 1 城殿山遺跡 2 和田谷遺跡 3 マキサヤ遺跡 4 園井土井遺跡 5 園井城跡 6 本谷遺跡 7 黒井遺跡 8 大内峠遺跡 9 七原鉄遺跡 10 沖の店遺跡
 11 内平遺跡 12 引野中世墓 13 向山廃寺跡 14 鷲尾(山)城跡 15 里見山中遺跡 16 奥迫古墳 17 上川1・2号墳 18 観音塚古墳 19 金比羅古墳
 20 梅山古墳 21 大岩塚古墳 22 古屋堂1～6号墳 23 本村1・2号墳 24 広浜城跡 25 上名口荒神塚古墳 26 上名口古墳 27 鴨山城跡 28 鴨方藩陣屋跡
 29 日吉塚古墳 30 宮の脇古墳 31 和田遺跡 32 安芸守山城跡 33 向原遺跡 34 向原古墳 35 安芸守山西南1～3号墳 36 小三宅1・2号墳 37 阿坂古墳
 38 朝鮮谷1・2号 39 占見廃寺 40 山崎1・2号窯 41 金地古墳 42 赤鉢遺跡 43 徳乗寺山古墳 44 畳屋古墳 45 森山遺跡 46 三ヶ田遺跡 47 西の岡遺跡
 48 仏堂遺跡 49 畑岩屋塚古墳 50 山/神塚古墳 51 算用ヶ岡塚古墳 52 鴻の巣山遺跡 53 大鳥内遺跡 54 伴ノ木遺跡 55 天神山塚古墳 56 古寺跡1～4
 号墳 57 上原塚古墳 58 侍山塚古墳 59 向ヶヶ塚古墳 60 永広塚古墳 61 軽部荒神塚古墳 62 奥の原遺跡 63 竜王山西方古墳 64 泉山城跡 65 真山戸
 山下原古墳 66 四位村窯跡 67 不動坊寺院跡 68 真山戸山不動坊窯跡 69 生石山文殊院跡 70 六道遺跡 71 宇根西側遺跡 72 頓宮又次郎墓 73 土居
 遺跡 74 荒神山遺跡 75 円珠院石造大宝塔 76 竜王山城跡 77 殿山古墳 78 安倉八幡遺跡 79 福井古墳 80 三郎島遺跡 81 青佐山遺跡 82 青佐山台場
 跡 83 青佐山城跡 84 茶臼山城跡 85 原貝塚 86 津雲貝塚 87 鳴ヶヶ端城跡 88 笠岡工業高校遺跡 89 横島城跡 90 大股洲遺跡 91 量剛寺跡

第2図 周辺遺跡分布図 (1/50,000)

検出されており、土器やサヌカイトなどが出土している。このように弥生時代の集落は中小河川を臨む丘陵・台地の縁辺部を中心に形成されていた様子が窺え、低地や微高地では認められていない。また、弥生時代の墳墓としては、浅口市鴨方町益坂の和田遺跡（31）が知られている。後期末の木棺墓・土坑墓群が調査されており、このうち2基の木棺墓から特殊器台や直口壺・高杯、勾玉・水晶玉・管玉・ガラス小玉が出土していることから、首長墓と考えられる。

古墳時代前期では、浅口市鴨方町六条院東に所在する鴻の巣山遺跡（52）が初期の古墳とされ、庄内式土器と類似する土器群が出土している。これに続く古墳として、箱式石棺を主体部とする小規模な円墳が造営される。浅口市鴨方町六条院中の堅川上流域で四条原古墳群を構成する侍山塚古墳（58）は2基の箱式石棺をもち、このうち1号石棺の内部は朱塗りの可能性がある。算用々岡塚古墳（51）でも2基の箱式石棺が存在し、人骨や剣等が出土したと伝わる。

古墳時代後期には横穴式石室墳が増加する。前期に引き続き四条原古墳群では、古寺跡1～4号墳（56）・上原塚古墳（57）・永広塚古墳（60）・軽部荒神塚古墳（61）などが築かれ、盛んな造墓活動が認められる。特に天神山塚古墳（奥壁幅2m、55）・向ヶ市塚古墳（同1.75m、59）・真山戸山下原塚古墳（同1.75m、65）の石室規模は大きく、有力層の古墳と考えられる。また、遙照山山地南麓の浅口市鴨方町地頭上に所在する宮の脇古墳（30）は、直径14mの円墳と推定され、横穴式石室内から金銅装大刀・銅釧・耳環などが出土しており、当地域の最有力墳と目される。里庄町域では虚空蔵山南東麓に古墳群が形成されており、里庄町里見の金比羅古墳（19）は全長9.1m、幅1.4mの無袖の石室をもつ。この他、寄島山地側では浅口市寄島町東安倉の殿山古墳（市史跡、77）や浅口市寄島町福井の福井古墳（市史跡、79）などの横穴式石室墳が認められる。なお、浅口市・里庄町域では前方後円墳は確認されていない。

その他、浅口市寄島町の安倉八幡遺跡（78）や三郎島遺跡（80）で製塩土器が出土している。また、『続日本紀』の霊亀二（716）年八月癸亥条に「備中国浅口郡犬養部鴈手の焼塩」の記事がみられるように、旧浅口郡域では古墳時代から古代にかけて製塩が行われていたようである。

古代の遺跡をみると、遙照山山地南麓の丘陵南端に位置する浅口市金光町占見の占見廃寺（39）では礎石が検出され、複弁八葉蓮華文軒丸瓦、平城宮6225系軒丸瓦、平城宮6663系軒平瓦、均整唐草文軒平瓦などが出土している。創建時期は7世紀後半で、8世紀中葉に整備または修理が行われている。この占見廃寺の東方には、奈良時代の瓦窯である山崎1・2号窯（40）が築かれている。

平安時代には、山上の寺院が知られている。笠岡市今立の虚空蔵山の一角に向山廃寺跡（13）があり、布目瓦が採集されている。笠岡市西大島・大島中の御嶽山山頂には量剛寺跡（市史跡、91）があり、山上伽藍跡とされる礎石が残り、布目瓦が出土している。

中世の遺跡では、和田谷遺跡（2）のすぐ南に館跡と推定される土居遺跡（73）があり土塁の跡が残る。また、笠岡市園井の園井土井遺跡（4）では堀と柵で区画された館跡が、笠岡市今立の本谷遺跡（6）は集落跡が調査で確認されている。なお、城殿山遺跡（1）内の丘陵頂部には『太平記』に登場する頼宮又次郎の墓（72）と伝承されている石灰岩製の宝篋印塔が存在しており、現代に至るまで信仰の対象となっている。また、古墓では浅口市鴨方町小坂西の引野中世墓（12）、笠岡市今立の黒井遺跡（7）などがあり、五輪塔や骨蔵器が確認されている。

当地域は中世土器の生産地としても知られている。浅口市鴨方町小坂西に所在する沖の店遺跡（10）では、土師器の椀や皿を焼成した窯跡がみつかり、浅口市鴨方町六条院中の真山戸山不動坊窯

跡（68）では亀山焼の窯が数基操業していたとみられる。里庄町里見の里見山中遺跡（15）では亀山系瓦質土器の窯跡が調査されており、近世から明治・大正期にかけて隆盛した大原焼のルーツと考えられる。

中世山城は比較的近接した位置関係で所在している。浅口市寄島町青佐・笠岡市大島中の青佐山城跡（83）は瀬戸内海に面する独立丘陵上に築かれ、曲輪と豎堀が確認されている。浅口市六条院西・寄島町東安倉の竜王山城跡（76）は3つの頂部を細長い曲輪でつないでおり、全長300mを超える規模をもつ。浅口市鴨方町鴨方の鴨山城跡（27）は東西約150m、南北約350mを測る浅口郡域最大の山城である。これらの城はいずれも細川管領家の末裔であり安芸毛利氏配下の細川通董が居城したとする故事来歴をもつ。竜王山城跡の西麓には細川通董の供養塔と伝わる円珠院石造大宝塔（市指定文化財、75）がある。

近世には、備前岡山藩の支藩である鴨方藩が寛文12（1672）年に設置され、その後所領支配の拠点として浅口市鴨方町鴨方に鴨方藩陣屋跡（28）が置かれた。幕末の文久3（1863）年には、鴨方藩によって浅口市寄島町青佐の青佐山台場跡（市史跡、82）が海岸防備のために築かれている。

（澤山・石田）

主要参考文献

- 島田貞彦・清野謙次・梅原末治「備中国浅口郡大島村津雲貝塚発掘報告」『京都帝国大学文学部考古学研究報告』第五冊 京都帝国大学 1920
- 町誌編纂委員会『寄島町誌』1966
- 里庄町誌編集委員会『里庄町誌』1971
- 岡山県教育委員会「和田遺跡 向原遺跡 宮の脇古墳 阿坂古墳 沖の店遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』42 1981
- 笠岡市史編さん委員会『笠岡市史』第1巻 1983
- 鴨方町史編纂委員会『鴨方町史』本編 1990
- 金光町史編纂委員会『金光町史』本編 2003
- 笠岡市教育委員会『笠岡の文化財』2004
- 亀田修一『吉備の古代寺院』吉備人出版 2006
- 浅口市教育委員会『森山遺跡』浅口市埋蔵文化財発掘調査報告1 2008
- 浅口市教育委員会『竹林寺天文台遺跡』浅口市埋蔵文化財発掘調査報告2 2009
- 定金司郎『浅口市の地質時代を考える』浅口市教育委員会 2009
- 岡山県教育委員会「宮原遺跡 奈良井古墳 奈良井遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』237 2013
- 里庄町教育委員会『里見山中遺跡』里庄町埋蔵文化財発掘調査報告1 2014
- 浅口市教育委員会『竹林寺天文台遺跡2』浅口市埋蔵文化財発掘調査報告3 2016
- 岡山県教育委員会「新池尻遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』248 2019
- 岡山県教育委員会『岡山県中世城館跡総合調査報告書』第2冊一備中編一 2020
- 笠岡市教育委員会『津雲貝塚総合調査報告書』笠岡市埋蔵文化財発掘調査報告6 2020

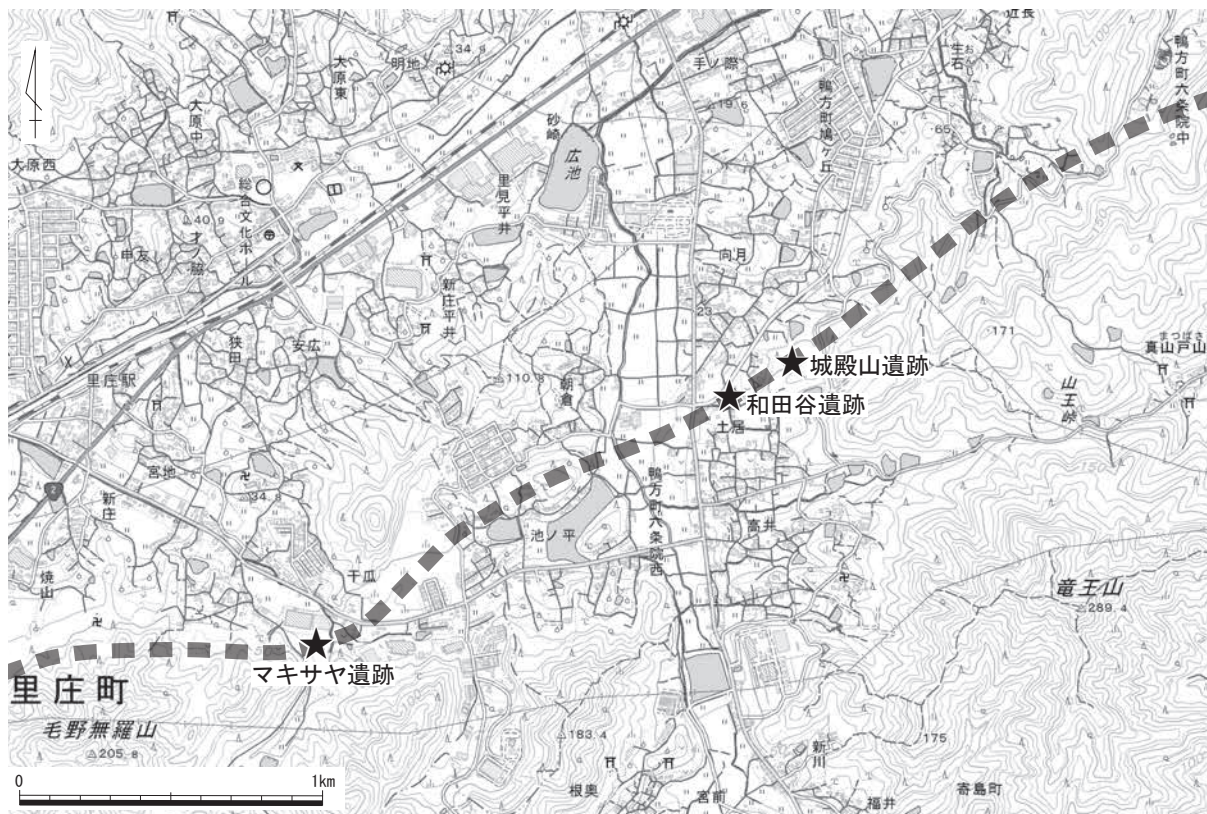
第2章 発掘調査及び報告書作成の経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

一般国道2号は大阪市を起点とし、北九州市に至る延長約670kmの主要幹線道路である。玉島・笠岡道路は、倉敷市玉島阿賀崎から笠岡市西大島新田に至る延長13.9kmの国道2号バイパスであり、地域高規格道路「倉敷福山道路」の一部を構成する。県西部の慢性的交通混雑を緩和し、沿線地域の発展を図ることを目的とし、平成12年度に都市計画決定された。すでにI期として倉敷市玉島阿賀崎(玉島西IC)、浅口市金光町佐方(浅口金光IC)間4.5kmが、平成27年3月に開通している。

路線内の埋蔵文化財の取扱いについては、平成12年度の都市計画決定以前から、岡山県教育庁文化財課(当初は文化課、以下県文化財課)と事業を管轄する国土交通省中国地方整備局岡山国道事務所(以下国道事務所)間で協議を重ねてきた。まず、平成10年10月に国道事務所から「直轄道路事業の実施に伴う埋蔵文化財の取扱いについて」文書によって、計画区域内における埋蔵文化財包蔵地の有無、名称、位置、及び法的手続きについての照会があった。同年12月に県文化財課は、埋蔵文化財包蔵地5か所を提示し、事業計画地の決定後に再確認の必要があるとするとともに、特に笠岡市に所在する史跡津雲貝塚の指定範囲と計画区域が近接することから、その保存協議について強く要望した。

平成15年12月、平成10年の県文化財課回答に基づき、倉敷市玉島阿賀崎から浅口市金光町佐方間の



第3図 予定路線と調査対象遺跡 (1/25,000)

事業計画地が決定したことから、国道事務所から再照会があり、対応協議を進めた。この後、事業進捗、用地買収の進展に応じ、玉島西IC・浅口金光IC間のⅠ期区間について、平成20年度に胎金寺跡（浅口市金光町須恵）の確認調査を実施したが、遺跡の広がりには認められなかった⁽¹⁾。平成20年度には浅口金光IC以西のⅡ期区間が事業着手され、浅口市金光町佐方の宮原遺跡、奈良井遺跡について平成22年に確認調査を行い、翌平成23年度に両遺跡と奈良井古墳の記録保存調査を実施した⁽²⁾。

平成25年12月、国道事務所から浅口市金光町佐方以西の計画地について改めて「直轄道路事業の実施に伴う埋蔵文化財の取扱いについて」の照会があり、県文化財課は津雲貝塚のほか、浅口市鴨方町内の散布地等4か所と宝篋印塔（頓宮又次郎墓）、浅口郡里庄町内の散布地1か所の所在を示した。以降、これらの取扱い協議が本格化し、事業地内の埋蔵文化財包蔵地については、その広がりと内容を把握するため確認調査を実施し、その結果に基づいて記録保存調査の必要性とその範囲を判断することとした。なお、重要課題であった津雲貝塚については、平成25・26年度に笠岡市教育委員会の津雲貝塚総合調査と連携して試掘確認調査を実施し、事業地内には遺跡が広がらないことを確認した⁽³⁾。

確認調査は平成26年5月に里庄町新庄の散布地から着手した（表1、第4図）。東方への緩斜面に3本のトレンチを設定し、弥生～中世の遺物包含層を確認したことから、マキサヤ遺跡と名称して2,250㎡を調査対象とした。次いで同年6月、浅口市鴨方町六条院西の丘陵裾部から西方への緩斜面地に広がる3か所の散布地について8本のトレンチを設定し、確認調査を実施した（表1、第5図）。この結果、弥生～中世の遺構・遺物を検出し、和田谷遺跡と名称し7,850㎡を調査対象とした。

平成27年6月30日付で国道事務所は文化財保護法第94条に基づく「埋蔵文化財発掘の通知」を提出し、県文化財課は発掘調査の実施を勧告した。以上の経緯を経て、平成27年10月から和田谷遺跡、マキサヤ遺跡の記録保存調査に着手した。

さらに、マキサヤ遺跡調査中、東方への遺跡の広がりが予想され、平成28年1月に再度確認調査を実施した（表1、第4図）。この結果、河道堆積中に縄文時代後期中葉の土器がみられ、この時期の遺構が存在すると判断し、平成28年度に2,873㎡を追加対象として記録保存調査を実施した。和田谷遺跡においても南側に遺跡が広がることが推測され、平成28年5月に確認調査を実施し、遺構・遺物を認めた（表1、第5図）。このため平成29年度に新たに2,315㎡について記録保存調査を実施した。

和田谷遺跡北東方の丘陵に位置する城殿山東南麓遺跡については用地交渉が進まず、ようやく令和

表1 確認調査一覧

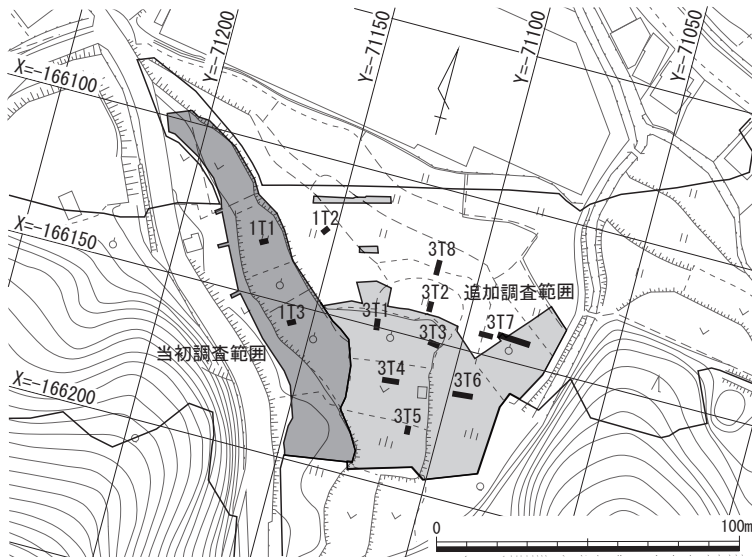
	対象地	調査期間	調査面積	トレンチ番号	調査担当者
1	名称未定(里庄町№92)〈マキサヤ遺跡〉	H26.5.12～H26.5.14	18㎡	T1～3	小嶋善邦
2	名称未定(鴨方町№189) 名称未定(鴨方町№190)〈和田谷遺跡〉 土居遺跡	H26.6.16～H26.6.26	48㎡	T1～8	小嶋善邦
3	マキサヤ遺跡	H28.1.12～H28.1.19	100㎡	T1～9	小嶋善邦
4	和田谷遺跡	H28.5.23～H28.5.26	37㎡	T1～3	河合 忍
5	城殿山東南麓遺跡〈城殿山遺跡〉	R1.8.1～R1.8.9	113㎡	T1～5	松尾佳子

元年8月に確認調査を実施し、中～近世の遺構・遺物を検出した(表1、第6図)。また、谷を挟んだ西側丘陵頂部に所在する宝篋印塔(頓宮又次郎墓)については、その地下遺構の有無を確認するため、移転にあわせて令和元年12月に立会調査を行った。その結果、弥生時代の遺構・遺物を確認し、周囲に弥生時代の遺跡が広がることが判明し、城殿山東南麓遺跡とした箇所とともに、城殿山遺跡と名称して、令和2年度に1,175㎡について記録保存調査を行う運びとなった。

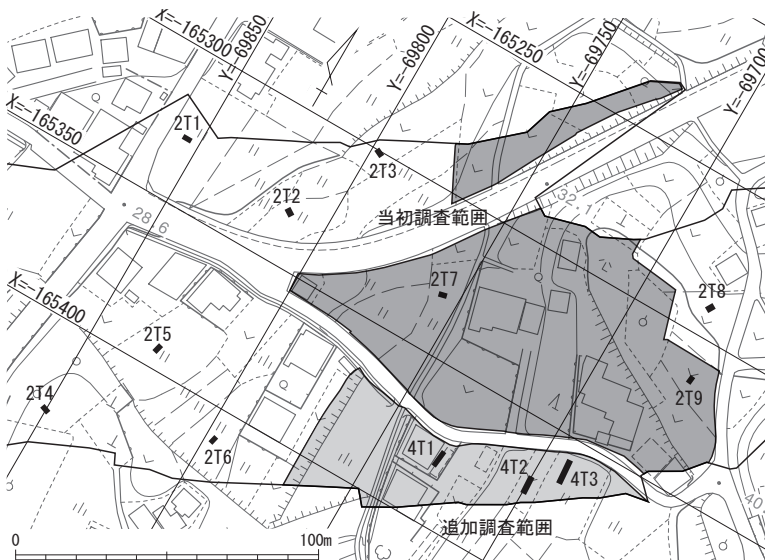
(大橋)

註

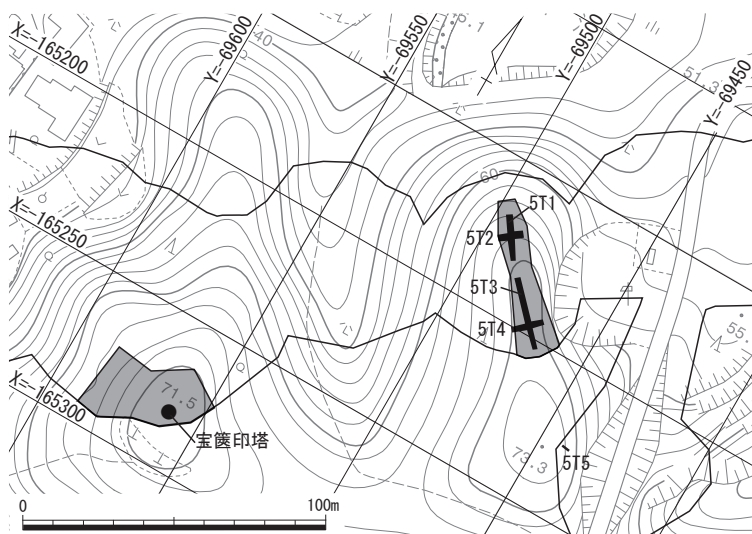
- (1) 岡山県教育委員会「一般国道2号玉島笠岡道路建設に伴う確認調査」『岡山県埋蔵文化財報告』38 2009
- (2) 岡山県教育委員会「宮原遺跡 奈良井古墳 奈良井遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』237 2013
- (3) 岡山県教育委員会「一般国道2号(玉島笠岡道路)改築工事に伴う確認調査」『岡山県埋蔵文化財報告』44 2014
岡山県教育委員会「一般国道2号(玉島笠岡道路)改築工事に伴う確認調査」『岡山県埋蔵文化財報告』45 2015
笠岡市教育委員会『津雲貝塚総合調査報告書』笠岡市埋蔵文化財発掘調査報告6 2020



第4図 マキサヤ遺跡確認調査トレンチ配置図 (1/2,500)



第5図 和田谷遺跡確認調査トレンチ配置図 (1/2,500)



第6図 城殿山遺跡確認調査トレンチ配置図 (1/2,500)

第2節 発掘調査の経過

平成27年10月から令和2年7月にかけて、城殿山遺跡、和田谷遺跡、マキサヤ遺跡の計3遺跡の発掘調査を実施した。詳細は表2に示したが、各遺跡の調査面積は、城殿山遺跡が1,175㎡、和田谷遺跡が10,165㎡、マキサヤ遺跡が5,123㎡で3遺跡の合計は16,463㎡である。

平成27年度は、調査員8名の2班体制で和田谷遺跡及びマキサヤ遺跡の発掘調査を実施した。和田谷遺跡は調査区を1～8区に分け、1～4区を1班が、5・6区を2班が担当して実施し、弥生時代から中世にかけての遺構・遺物を確認した。マキサヤ遺跡は、1～3区の調査を2班が担当して実施し、縄文時代から中世にかけての遺構・遺物を確認した。

平成28年度は、調査員3名の1班体制で平成27年度に引き続き、和田谷遺跡及びマキサヤ遺跡の発掘調査を実施した。和田谷遺跡は、調査地北端部の7区と東端部の8区の調査を実施し、古墳時代～中世にかけての遺構・遺物を確認した。マキサヤ遺跡は、平成27年度の確認調査の結果を受けて新たに追加になった4・5区の調査を実施した。河道から縄文土器の良好な資料を検出するなど成果をあげ、平成28年12月にマキサヤ遺跡の発掘調査を終了した。

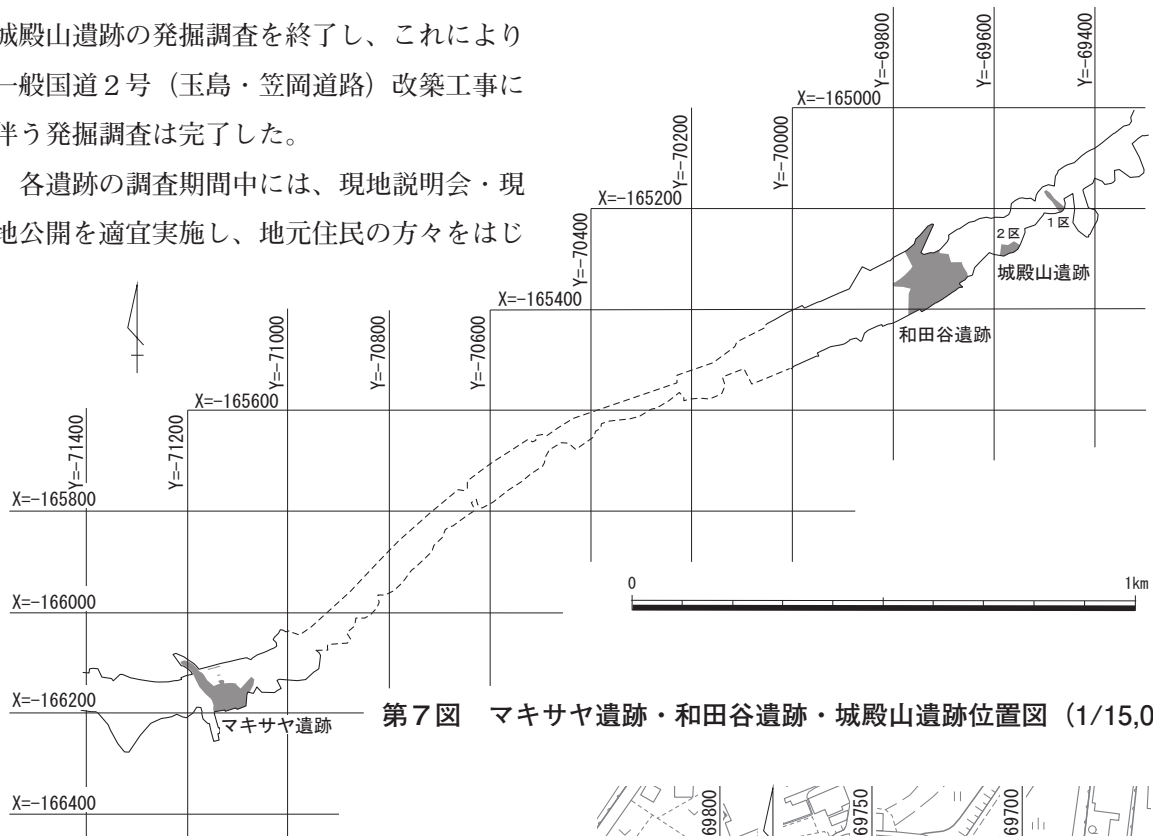
表2 本発掘調査一覧

遺跡名	調査区	調査年度	調査期間	調査面積 (㎡)		遺物数 (箱)		調査担当者
城殿山遺跡	1区	R2	R2.4.7～ R2.5.26	495	1,175	1	6	渡邊恵里子・松尾佳子・北門幸二郎
	2区		R2.4.21～ R2.7.31	680		5		
和田谷遺跡	1区	H27	H27.10.14～ H27.11.10	1,000	5,450	3	52	高田恭一郎・小林利晴・河合 忍・ 藤井翔平
	2区		H27.10.27～ H27.12.1	600		4		
	3区		H27.12.21～ H28.3.14	1,450		13		
	4区		H27.11.24～ H28.3.1	1,450		20		
	5区		H28.1.6～ H28.3.14	740		1		
	6区		H28.1.15～ H28.3.14	210		11		
	7区	H28	H28.4.11～ H28.6.3	480	2,400	7	45	柴田英樹・石田為成・森本直人
	8区		H28.4.11～ H28.9.12	1,920		38		
	9区	H29	H29.8.28～ H29.11.16	710	2,315	12	27	澤山孝之・氏平昭則・森本直人
	10区		H29.8.2～ H29.12.6	785		9		
	11区		H29.10.17～ H29.12.20	820		6		
			計	10,165		124		
マキサヤ遺跡	1区	H27	H27.10.27～ H28.1.28	340	2,250	1	16	柴田英樹・松尾佳子・石田為成・ 森本直人
	2区		H27.10.14～ H28.1.28	1,000		2		
	3区		H27.10.14～ H28.1.28	910		13		
	4区	H28	H28.5.16～ H28.12.21	1,603	2,873	9	26	柴田英樹・石田為成・森本直人
	5区		H28.9.6～ H28.12.21	1,270		17		
				計	5,123		42	

平成29年度は、調査員3名の1班体制で和田谷遺跡の発掘調査を実施した。調査対象地は、南端部の9～11区で、平成28年度の確認調査で新たに遺構・遺物を検出したことにより追加された。調査の結果、弥生時代から中世までの遺構・遺物を確認した。調査は平成29年12月に終了し、これをもって和田谷遺跡の発掘調査は全て終了した。

令和2年度は、調査員3名の1班体制で城殿山遺跡の発掘調査を実施した。令和元年度の確認調査及び立会調査の結果を受けて、調査区を丘陵別に1・2区に分けて調査を行い、弥生時代から中世までの遺構・遺物を確認した。令和2年7月に城殿山遺跡の発掘調査を終了し、これにより一般国道2号（玉島・笠岡道路）改築工事に伴う発掘調査は完了した。

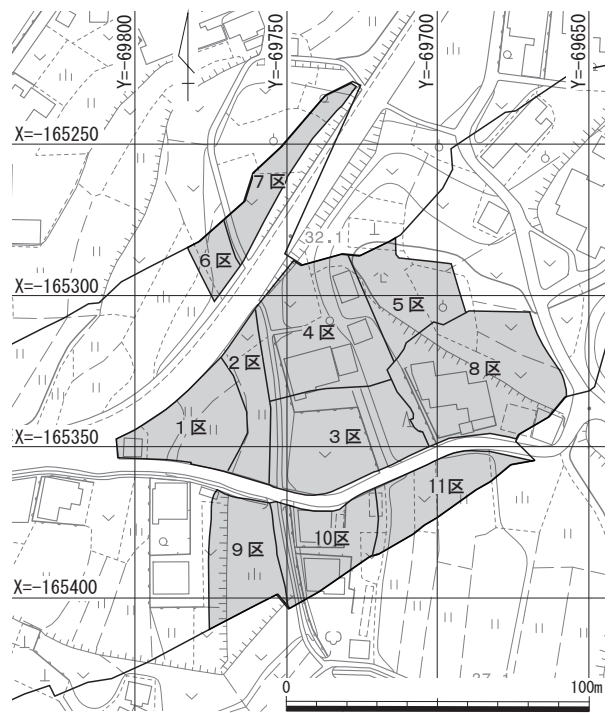
各遺跡の調査期間中には、現地説明会・現地公開を適宜実施し、地元住民の方々をはじめ



第7図 マキサヤ遺跡・和田谷遺跡・城殿山遺跡位置図 (1/15,000)



第8図 マキサヤ遺跡旧調査区配置図 (1/2,500)



第9図 和田谷遺跡旧調査区配置図 (1/2,500)

めとして、県の内外から多くの参加者を得た（第4節表3）。

また、埋蔵文化財保護調査指導会（旧埋蔵文化財保護対策委員会）を調査期間中に開催し、検出した遺構や出土遺物の評価などについて、教示や指導を受けた（平成27年11月、平成28年2・7・11月、平成29年11月、令和2年7月の計6回）。（石田）

第3節 報告書作成の経過

報告書の作成は、平成28年7月から令和4年3月の間に、発掘調査と併行あるいは中断した期間を挟みながら、のべ3年5か月をかけて行った。年度毎の体制と担当職員については第5節のとおりであるが、整理対象遺跡が複数あり、年度毎の担当職員にも変更があったため、進捗状況を把握し作業を進めるにあたっては労力を要した。整理作業は、平成28年度は主に和田谷遺跡及びマキサヤ遺跡を、令和元年度は和田谷遺跡を、令和2年度はマキサヤ遺跡及び城殿山遺跡を対象として行い、令和3年度は各遺跡の残りの作業及び全体の編集作業を実施した。対象とした遺構数は、調査時の3遺跡の合計で201遺構、遺物数は整理箱に換算して172箱である。

遺物の洗浄・注記作業は、基本的に発掘調査事務所で行ったが、一部は文化財センターにおいて実施した。遺物実測、トレース、写真撮影、金属製品の処理についても文化財センターで実施し、その一部は整理作業員が担当した。図面のトレースは、遺構をデジタルトレース、遺物実測図を手描きトレースとした。遺物写真は、デジタルカメラで撮影しているが、現場で撮影した写真にはデジタルとフィルムカメラが混在しているため、フィルムはスキヤニングを行い、デジタルデータによる編集作業を行った。遺構・遺物のトレース作業が終了次第、割り付けと文章の執筆を随時進めた。なお、報告書全体の編集作業は、従来どおり割り付け用紙を使用して行った。

報告書作成期間中には、埋蔵文化財保護調査指導会（旧埋蔵文化財保護対策委員会）において、作業の進捗状況や内容について報告を行い、教示や指導を受けた（平成28年7月・11月、平成29年2月、令和元年8月、令和2年1月、令和3年1・9月の計7回）。（石田）

第4節 日誌抄

平成26年度

平成26年

- 5月12日（月） 名称未定（里庄町No.92）確認調査開始
- 5月14日（水） 名称未定（里庄町No.92）確認調査終了
- 6月16日（月） 名称未定（鴨方町No.189）・名称未定（鴨方町No.190）・土居遺跡確認調査開始
- 6月26日（木） 名称未定（鴨方町No.189）・名称未定（鴨方町No.190）・土居遺跡確認調査終了

平成27年度

平成27年

- 10月1日（木） 発掘調査事業開始
- 10月13日（火） 発掘調査資材搬入
- 10月14日（水） 和田谷遺跡1区、マキサヤ遺跡2・3区調査開始
- 10月27日（火） 和田谷遺跡2区、マキサヤ遺跡1区調査開始
- 11月10日（火） 和田谷遺跡1区調査終了
- 11月12日（木） 第1回埋蔵文化財保護対策委員会開催
- 11月24日（火） 和田谷遺跡4区調査開始
- 12月1日（火） 和田谷遺跡2区調査終了

12月21日（月） 和田谷遺跡3区調査開始
平成28年

1月6日（水） 和田谷遺跡5区調査開始
1月12日（火） マキサヤ遺跡確認調査開始
1月15日（金） 和田谷遺跡6区調査開始
1月19日（火） マキサヤ遺跡確認調査終了
和田谷遺跡3区調査開始
1月25日（月） 和田谷遺跡5区調査開始
1月27日（水） 和田谷遺跡4区・マキサヤ遺跡3区ラジコンヘリコプターによる空中写真撮影
1月28日（木） マキサヤ遺跡1～3区調査終了
2月4日（木） 第2回埋蔵文化財保護対策委員会開催
2月20日（土） 和田谷遺跡・マキサヤ遺跡現地説明会開催
3月1日（火） 和田谷遺跡4区調査終了
3月14日（月） 和田谷遺跡3・5・6区調査終了
3月17日（木） 大阪大学において、高橋照彦教授による施釉陶器鑑定指導
3月31日（木） 発掘調査事業終了

平成28年度
平成28年

4月1日（金） 発掘調査事業開始
4月11日（月） 和田谷遺跡7・8区調査開始
5月16日（月） マキサヤ遺跡4区調査開始
5月23日（月） 和田谷遺跡確認調査開始
5月26日（木） 和田谷遺跡確認調査終了
6月3日（金） 和田谷遺跡7区調査終了
7月1日（金） 報告書整理作業開始
7月22日（金） 第1回埋蔵文化財保護対策委員会開催
8月25日（木） 和田谷遺跡現地公開開催
9月2日（金） 和田谷遺跡8区ラジコンヘリコプターによる空中写真撮影
9月6日（火） マキサヤ遺跡5区調査開始
9月12日（月） 和田谷遺跡8区調査終了
11月9日（水） 第2回埋蔵文化財保護対策委員会開催
12月9日（金） マキサヤ遺跡現地公開開催
12月21日（水） マキサヤ遺跡4・5区調査終了

12月28日（水） 発掘調査事業終了
平成29年

2月20日（月） 第3回埋蔵文化財保護対策委員会開催
3月31日（金） 報告書整理作業終了

平成29年度
平成29年

8月1日（火） 発掘調査事業開始
8月2日（水） 和田谷遺跡10区調査開始
8月28日（月） 和田谷遺跡9区調査開始
10月17日（火） 和田谷遺跡11区調査開始
11月6日（月） 埋蔵文化財保護調査指導会開催
11月16日（木） 和田谷遺跡9区調査終了
12月6日（水） 和田谷遺跡10区調査終了
12月13日（水） 和田谷遺跡現地公開開催
12月20日（水） 和田谷遺跡11区調査終了
12月28日（木） 発掘調査事業終了

令和元年度
平成31年

4月1日（月） 報告書整理作業開始
令和元年

8月1日（木） 城殿山東南麓遺跡〈城殿山遺跡〉確認調査開始
8月9日（金） 城殿山東南麓遺跡〈城殿山遺跡〉確認調査終了
8月27日（火） 第1回埋蔵文化財保護調査指導会開催

令和2年

1月21日（火） 第2回埋蔵文化財保護調査指導会開催
3月31日（火） 報告書整理作業終了

令和2年度
令和2年

4月1日（水） 発掘調査事業開始
4月7日（火） 城殿山遺跡1区調査開始
4月21日（火） 城殿山遺跡2区調査開始
5月26日（火） 城殿山遺跡1区調査終了
6月29日（月） 鈴木茂之特命教授（岡山大学）による堆積土層の現地指導
7月7日（火） 城殿山遺跡現地説明会開催

第2章 発掘調査及び報告書作成の経緯と経過

- 7月10日（金） 第1回埋蔵文化財保護調査指導会開催
- 7月31日（金） 城殿山遺跡2区調査終了、発掘調査事業終了
- 8月3日（月） 報告書整理作業開始
- 9月15日（火） 白石純教授（岡山理科大学）による蛍光X線分析指導
- 10月9日（金） 高橋照彦教授（大阪大学）による施釉陶器についての鑑定指導
- 10月12日（月） 東村純子准教授（福井大学）による織布についての鑑定指導
- 12月9日（水） 千葉豊准教授（京都大学）による縄文土器についての鑑定指導

- 令和3年
 - 1月12日（火） 第2回埋蔵文化財保護調査指導会開催
 - 3月31日（水） 報告書整理作業終了
- 令和3年度
 - 令和3年
 - 4月1日（木） 報告書整理作業開始
 - 4月27日（火） ライアン・ジョセフ助教（岡山大学）による鉄剣についての鑑定指導
 - 9月27日（月） 埋蔵文化財保護調査指導会開催
- 令和4年
 - 3月31日（木） 報告書整理作業終了

表3 現地説明会（現地公開）一覧

年度	開催日	遺跡	参加人数
H27	2月20日（土）	和田谷遺跡 マキサヤ遺跡	140名
H28	8月25日（木）	和田谷遺跡	28名
	12月9日（金）	マキサヤ遺跡	100名
H29	12月13日（水）	和田谷遺跡	31名
R 2	7月7日（火）	城殿山遺跡	25名
参加人数計			324名



写真1 和田谷遺跡現地説明会（H27.2.20）



写真2 マキサヤ遺跡現地公開（H28.12.9）



写真3 城殿山遺跡現地説明会（R2.7.7）

第5節 発掘調査及び報告書作成の体制

平成26年度		主 任	山内 基寛
岡山県教育委員会		〈調査第一課〉	
教育長	竹井 千庫	課 長	亀山 行雄
岡山県教育庁		総括主幹(第一班長)	尾上 元規
教育次長	伊藤 史恵	主 幹	小嶋 善邦
文化財課			(確認調査担当)
課 長	山田 寛人	〈調査第二課〉	
参 事(文化財保存・活用担当)	宇垣 匡雅	課 長	高田恭一郎
総括副参事(埋蔵文化財班長)	大橋 雅也		(調査担当)
主 任	岡崎 行康	総括副参事(第一班長)	氏平 昭則
主 任	石田 爲成	主 任	石田 爲成
岡山県古代吉備文化財センター			(調査担当)
所 長	村木 生久	総括主幹(第二班長)	小林 利晴
次 長(総務課長事務取扱)	大崎 智浩		(調査担当)
参 事(文化財保護担当)	光永 真一	主 事	藤井 翔平
〈総務課〉			(調査担当)
総括主幹(総務班長)	岡部 一	〈調査第三課〉	
主 任	宮岡 佳子	課 長	弘田 和司
主 任	山内 基寛	総括副参事(第一班長)	柴田 英樹
〈調査第一課〉			(調査担当)
総括参事(調査第一課長事務取扱)	島崎 東	主 任	松尾 佳子
総括副参事(第一班長)	高田恭一郎		(調査担当)
主 任	小嶋 善邦	主 事	森本 直人
(確認調査担当)			(調査担当)
		総括副参事(第二班長)	渡邊恵里子
		主 任	河合 忍
			(調査担当)
平成27年度		平成28年度	
岡山県教育委員会		岡山県教育委員会	
教育長	竹井 千庫	教育長	竹井 千庫
岡山県教育庁		岡山県教育庁	
教育次長	内田 広之	教育次長	内田 広之
文化財課		文化財課	
課 長	山田 寛人	課 長	小見山 晃
参 事(文化財保存・活用担当)	横山 定	参 事(文化財保存・活用担当)	横山 定
総括副参事(埋蔵文化財班長)	大橋 雅也	総括参事(埋蔵文化財班長)	大橋 雅也
主 幹	物部 茂樹	主 幹	杉山 一雄
主 任	岡崎 行康	主 任	平井 健太
岡山県古代吉備文化財センター		岡山県古代吉備文化財センター	
所 長	宇垣 匡雅	所 長	宇垣 匡雅
次 長(総務課長事務取扱)	成本 俊治	次 長(総務課長事務取扱)	成本 俊治
参 事(文化財保護担当)	光永 真一		
〈総務課〉			
総括主幹(総務班長)	金藤 賢史		
主 任	宮岡 佳子		

主幹	河合 忍	令和3年度	
主事	九富 一	岡山県教育委員会	
岡山県古代吉備文化財センター		教育長	鍵本 芳明
所長	小見山 晃	岡山県教育庁	
次長(総務課長事務取扱)	佐々木雅之 (~10月14日)	教育次長	池永 亘
参事(文化財保護担当)	亀山 行雄	文化財課	
〈総務課〉		課長	小林 伸明
課長	甲元 秀和 (10月15日~)	副参事(文化財保存・活用担当)	尾上 元規
総括副参事(総務班長)	甲元 秀和 (~10月14日)	総括主幹(埋蔵文化財班長)	河合 忍
総括主任(総務班長)	多賀 克仁 (10月15日~)	主幹	松尾 佳子
主任	多賀 克仁 (~10月14日)	主事	九富 一
主任	井上 裕子	岡山県古代吉備文化財センター	
〈調査第三課〉		所長	大橋 雅也
課長	弘田 和司	次長(総務課長事務取扱)	浅野 勝弘
総括副参事(第一班長)	渡邊恵里子 (調査・整理担当)	参事(文化財保護担当)	亀山 行雄
主幹	松尾 佳子 (調査・整理担当)	〈総務課〉	
主事	北門幸二郎 (調査・整理担当)	総括主幹(総務班長)	多賀 克仁
		主任	井上 裕子
		〈調査第三課〉	
		課長	弘田 和司
		総括副参事(第二班長)	氏平 昭則
		主幹	石田 爲成 (整理担当)

調査・整理協力者

富井 眞(京都大学大学院文学研究科附属文化遺産学・人文知連携センター)、水田貴士(浅口市教育委員会)、南 健太郎(岡山大学埋蔵文化財調査研究センター)

表4 文化財保護法に基づく文書一覧

埋蔵文化財試掘・確認調査の報告

番号	文書番号 目付	周知・ 周知外	種類及び名称	所在地	面積 (㎡)	原因	包蔵地 の有無	報告者	担当者	期間
1	岡吉調 第18号 H26.5.16	周知	集落跡 名称未定(里庄町No92)	浅口郡里庄町新庄 3873ほか	18	一般国道2号(玉島・笠岡道路) 改築	有	岡山県古代吉備 文化財センター 所長	小嶋善邦	H26.5.12~ H26.5.14
2	岡吉調 第35号 H26.7.3	周知	集落跡 名称未定(鴨方町No189) 名称未定(鴨方町No190) 土居遺跡	浅口市鴨方町六条 院西2793-2ほか	48	一般国道2号(玉島・笠岡道路) 改築	有(鴨 方町No 190)	岡山県古代吉備 文化財センター 所長	小嶋善邦	H26.6.16~ H26.6.26
3	岡吉調 第104号 H28.1.29	周知	集落跡 マキサヤ遺跡	浅口郡里庄町新庄 3882ほか	100	一般国道2号(玉島・笠岡道路) 改築	有	岡山県古代吉備 文化財センター 所長	小嶋善邦	H28.1.12~ H28.1.19
4	岡吉調 第28号 H28.6.8	周知	集落跡 和田谷遺跡	浅口市鴨方町六条 院西180-16ほか	37	一般国道2号(玉島・笠岡道路) 改築	有	岡山県古代吉備 文化財センター 所長	河合 忍	H28.5.23~ H28.5.26
5	岡吉調 第68号 R1.8.27	周知	集落跡 城殿山東南麓遺跡	浅口市鴨方町六条 院西3163ほか	113	一般国道2号(玉島・笠岡道路) 改築	有	岡山県古代吉備 文化財センター 所長	松尾佳子	R1.8.1~ R1.8.9

第2章 発掘調査及び報告書作成の経緯と経過

埋蔵文化財発掘の通知（法第94条）

番号	文書番号 日付	種類及び名称	所在地	目的	通知者	主な勧告 事項
1	教文理 第504号 H27.6.30	集落跡 和田谷遺跡、マキサヤ遺跡ほか	浅口市鴨方町六条院西 浅口郡里庄町新庄	道路	国土交通省中国地方整備局 岡山国道事務所長	発掘調査

埋蔵文化財発掘調査の報告（法第99条）

番号	文書番号 日付	周知・ 周知外	種類及び名称	所在地	面積 (㎡)	原因	報告者	担当者	期間
1	岡吉調 第54号 H27.10.1	周知	集落跡 マキサヤ遺跡	浅口郡里庄町新庄 3885ほか	2,250	一般国道2号(玉 島・笠岡道路)改築	岡山県古代吉備 文化財センター 所長	柴田英樹・松尾佳子・石田為 成・森本直人	H27.10.1～ H28.3.31
2	岡吉調 第66号 H27.10.1	周知	集落跡 和田谷遺跡	浅口市鴨方町六条 院西2839-1ほか	5,450	一般国道2号(玉 島・笠岡道路)改築	岡山県古代吉備 文化財センター 所長	高田恭一郎・柴田英樹・小林 利晴・河合忍・松尾佳子・石 田為成・藤井翔平・森本直人	H27.10.1～ H28.3.31
3	岡吉調 第1号 H28.4.1	周知	集落跡 和田谷遺跡	浅口市鴨方町六条 院西2880-1ほか	2,400	一般国道2号(玉 島・笠岡道路)改築	岡山県古代吉備 文化財センター 所長	柴田英樹・石田為成・森本直 人	H28.4.1～ H28.12.28
4	岡吉調 第17号 H28.5.16	周知	集落跡 マキサヤ遺跡	浅口郡里庄町新庄 3883ほか	2,740	一般国道2号(玉 島・笠岡道路)改築	岡山県古代吉備 文化財センター 所長	柴田英樹・石田為成・森本直 人	H28.5.16～ H28.12.31
5	岡吉調 第36号 H29.8.1	周知	集落跡 和田谷遺跡	浅口市鴨方町六条 院西2887-1ほか	2,315	一般国道2号(玉 島・笠岡道路)改築	岡山県古代吉備 文化財センター 所長	澤山孝之・氏平昭則・森本直 人	H29.8.1～ H29.12.28
6	岡吉調 第2号 R2.4.1	周知	集落跡 城殿山遺跡	浅口市鴨方町六条 院西3163ほか	1,175	一般国道2号(玉 島・笠岡道路)改築	岡山県古代吉備 文化財センター 所長	渡邊恵里子・松尾佳子・北門 幸二郎	R2.4.1～ R2.7.31

埋蔵文化財発見通知（法第100条第2項）

番号	文書番号 日付	物件名	出土地	出土年月日	発見者	土地所有者	現保管場所
1	教文理 第297号 H26.5.14	土器(弥生土器・土師器・瓦質土 器)、石器(サヌカイト剥片) 計整理箱1箱	浅口郡里庄町新庄 3873ほか 名称未定(里庄町No. 92)	H26.5.12～H26.5.14	岡山県教育委員会教育長 竹井千庫	個人	岡山県古代 吉備文化財 センター
2	教文理 第474号 H26.6.26	土器(須恵器・土師器・瓦質土 器)、石器(サヌカイト剥片) 計整理箱1箱	浅口市鴨方町六条 院西2793-2ほか 名称未定(鴨方町No. 189) 浅口市鴨方町六条 院西2864-1ほか 名称未定(鴨方町No. 190) 浅口市鴨方町六条 院西2245-1ほか 土居遺跡	H26.6.16～H26.6.26	岡山県教育委員会教育長 竹井千庫	国土交通省 個人	岡山県古代 吉備文化財 センター
3	教文理 第1328号 H28.1.20	土器(縄文土器・弥生土器・土師 器・須恵器)、石器(剥片) 計整理箱1箱	浅口郡里庄町新庄 3882ほか マキサヤ遺跡	H28.1.12～H28.1.19	岡山県教育委員会教育長 竹井千庫	国土交通省	岡山県古代 吉備文化財 センター
4	教文理 第1376号 H28.1.29	土器(縄文土器・弥生土器・須恵 器・土師器ほか)、石製品(石包 丁・石鎌・砥石ほか)、金属製品 (古銭ほか) 計整理箱16箱	浅口郡里庄町新庄 3885ほか マキサヤ遺跡	H27.10.13～H28.1.28	岡山県教育委員会教育長 竹井千庫	国土交通省	岡山県古代 吉備文化財 センター
5	教文理 第1598号 H28.3.15	土器(弥生土器・須恵器・土師器 ほか)、石製品(石鎌ほか)、金属 製品(銅銭ほか) 計整理箱52箱	浅口市鴨方町六条 院西2839-1ほか 和田谷遺跡	H27.10.13～H28.3.14	岡山県教育委員会教育長 竹井千庫	国土交通省	岡山県古代 吉備文化財 センター
6	教文理 第294号 H28.5.26	土器(弥生土器・土師器・須恵 器・瓦質土器・亀山焼) 計整理箱1箱	浅口市鴨方町六条 院西2896-1ほか 和田谷遺跡	H28.5.23～H28.5.26	岡山県教育委員会教育長 竹井千庫	国土交通省	岡山県古代 吉備文化財 センター
7	教文理 第799号 H28.9.12	土器(須恵器・土師器ほか)、陶 磁器、石器(石鎌ほか)、金属製 品(銅銭ほか)、土鏝、瓦、鉄滓 計整理箱45箱	浅口市鴨方町六条 院西2880-1ほか 和田谷遺跡	H28.4.1～H28.9.12	岡山県教育委員会教育長 竹井千庫	国土交通省	岡山県古代 吉備文化財 センター
8	教文理 第1255号 H28.12.21	土器(縄文土器・弥生土器・土師 器・須恵器ほか)、石製品(石鎌・ 石匙・石棒ほか)、木製品(木杭 ほか) 計整理箱26箱	浅口郡里庄町新庄 3883ほか マキサヤ遺跡	H28.5.16～H28.12.21	岡山県教育委員会教育長 竹井千庫	国土交通省	岡山県古代 吉備文化財 センター
9	教文理 第1316号 H29.12.27	弥生土器・須恵器・土師器・陶 磁器・石器・木製品 計整理箱27箱	浅口市鴨方町六条 院西2887-1ほか 和田谷遺跡	H29.8.1～H29.12.21	岡山県教育委員会教育長 竹井千庫	国土交通省	岡山県古代 吉備文化財 センター
10	教文理 第790号 R1.8.20	土師器・瓦質土器・瓦 計整理箱1箱	浅口市鴨方町六条 院西3163ほか 城殿山東南麓遺跡	R1.8.1～R1.8.9	岡山県教育委員会教育長 鍵本芳明	国土交通省	岡山県古代 吉備文化財 センター
11	教文理 第730号 R2.8.3	弥生土器・土師器・瓦質土器・ 鉄製品・銅銭・玉ほか 計整理箱6箱	浅口市鴨方町六条 院西3163ほか 城殿山遺跡	R2.4.7～R2.7.31	岡山県教育委員会教育長 鍵本芳明	国土交通省	岡山県古代 吉備文化財 センター

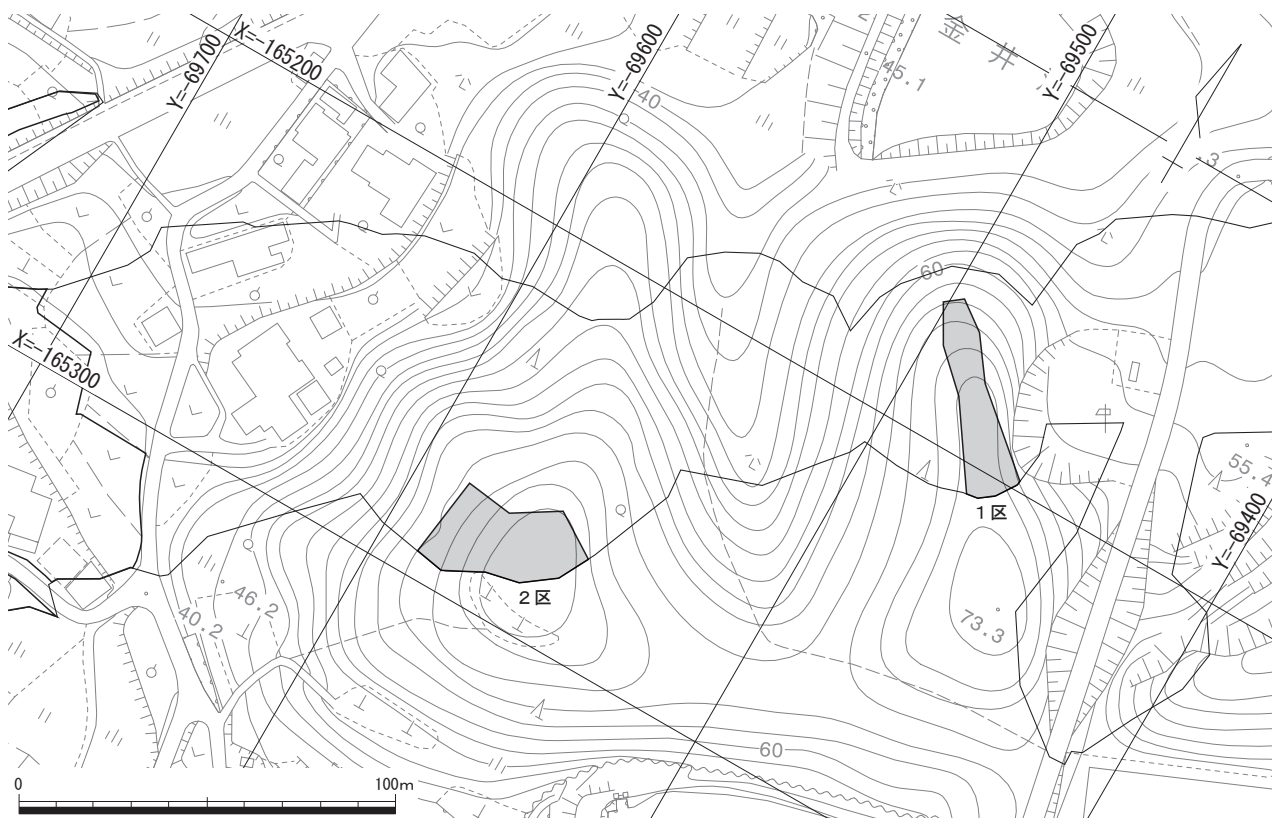
第3章 城殿山遺跡

第1節 調査の概要

調査対象地は、標高221mの泉山から西に延びる丘陵の西端に位置する。比高30mほどの谷を挟んだ2つの小支丘上に分かれており、着手順に、東側を1区、西側を2区と呼称して調査を進めた。

1区は標高68.0～70.5mの北に延びる尾根上に位置する。確認調査の結果を受け、尾根鞍部の東西幅約10m、南北長約50mで発掘調査を実施した。結果、希薄ではあったが、比較的なだらかな西斜面を中心に掘立柱建物や溝を確認した。なお、南側用地外の丘陵頂部の高まりについて古墳の可能性があったが、今回の発掘調査では、古墳時代の遺構・遺物は確認できなかった。

2区は標高73.5mの丘陵頂部に位置する。丘陵西裾部段丘上には和田谷遺跡が立地する。周知の埋蔵文化財包蔵地で、頂部に祀られていた「頓宮又次郎墓」と伝えられる宝篋印塔の移転に伴い土器が出土したため、発掘調査を実施した。地形から、主に頂部平坦部～西側斜面にかけてが調査対象となり、宝篋印塔を中心に室町時代以降の遺構・遺物がみつかり、丘陵頂部から西側斜面にかけて弥生時代後期には墓域として利用されていたことが明らかとなった。(渡邊)



第10図 遺跡周辺地形図 (1/2,000)

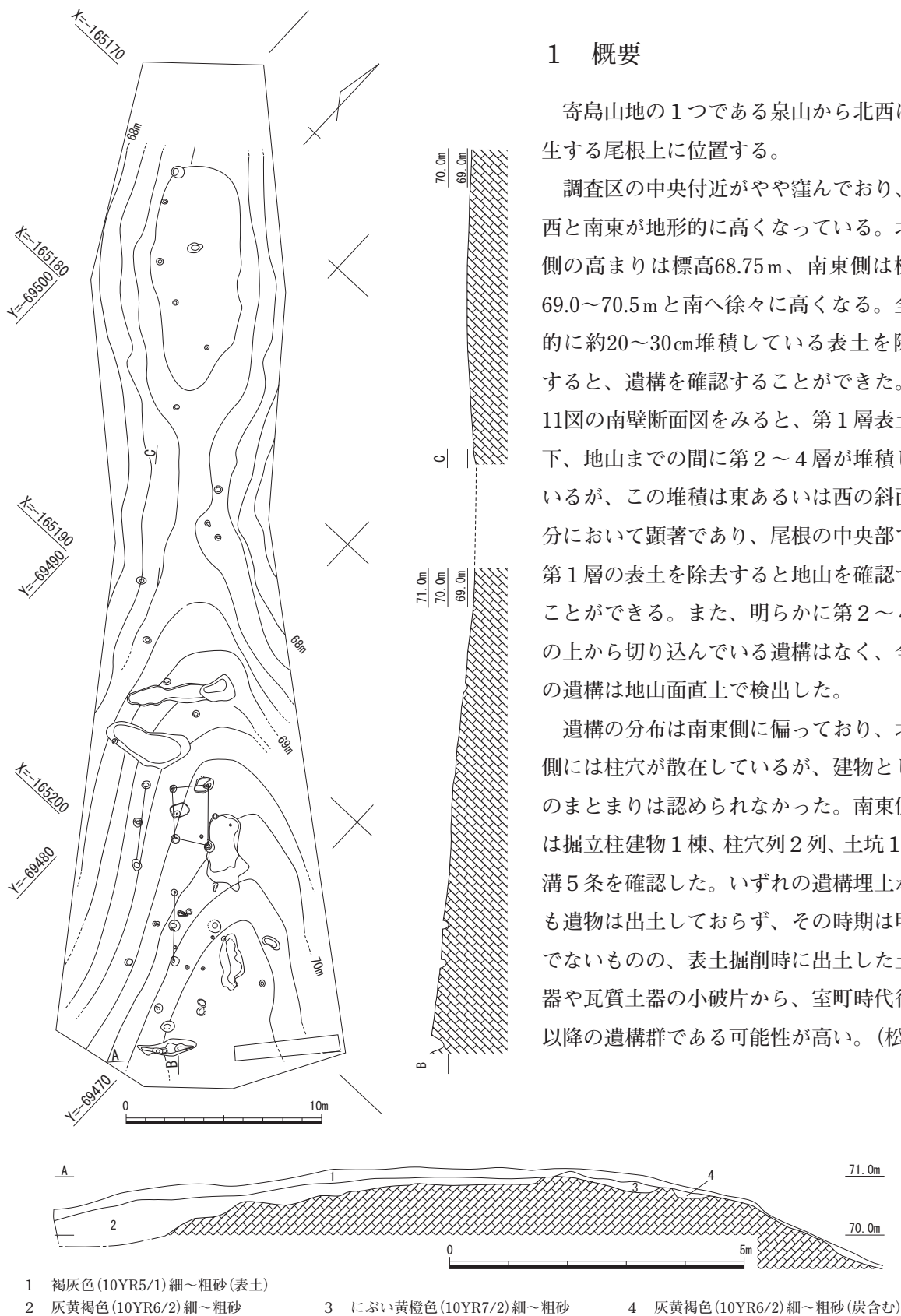
第2節 1区の調査

1 概要

寄島山地の1つである泉山から北西に派生する尾根上に位置する。

調査区の中央付近がやや窪んでおり、北西と南東が地形的に高くなっている。北西側の高まりは標高68.75m、南東側は標高69.0~70.5mと南へ徐々に高くなる。全体的に約20~30cm堆積している表土を除去すると、遺構を確認することができた。第11図の南壁断面図をみると、第1層表土の下、地山までの間に第2~4層が堆積しているが、この堆積は東あるいは西の斜面部分において顕著であり、尾根の中央部では第1層の表土を除去すると地山を確認することができる。また、明らかに第2~4層の上から切り込んでいる遺構はなく、全ての遺構は地山面直上で検出した。

遺構の分布は南東側に偏っており、北西側には柱穴が散在しているが、建物としてのまとまりは認められなかった。南東側には掘立柱建物1棟、柱穴列2列、土坑1基、溝5条を確認した。いずれの遺構埋土からも遺物は出土しておらず、その時期は明確でないものの、表土掘削時に出土した土師器や瓦質土器の小破片から、室町時代後半以降の遺構群である可能性が高い。(松尾)



第11図 1区遺構全体図 (1/300)・南壁断面図 (1/100)

2 室町時代以降の遺構・遺物

調査区南東側に集中している遺構は、掘立柱建物1を中心に分布している。

溝1～5は、掘立柱建物1の南東・北東・北西を「コ」の字形に囲むように掘削され、柱穴列1は掘立柱建物1の南西側に位置することから、目隠しなどの役割を有する可能性がある。また、柱穴列2や建物としてのまとまりは認められない柱穴群はいずれも溝1～5に囲まれた範囲内で確認できた。(松尾)

掘立柱建物

掘立柱建物1 (第12・13図、図版1)

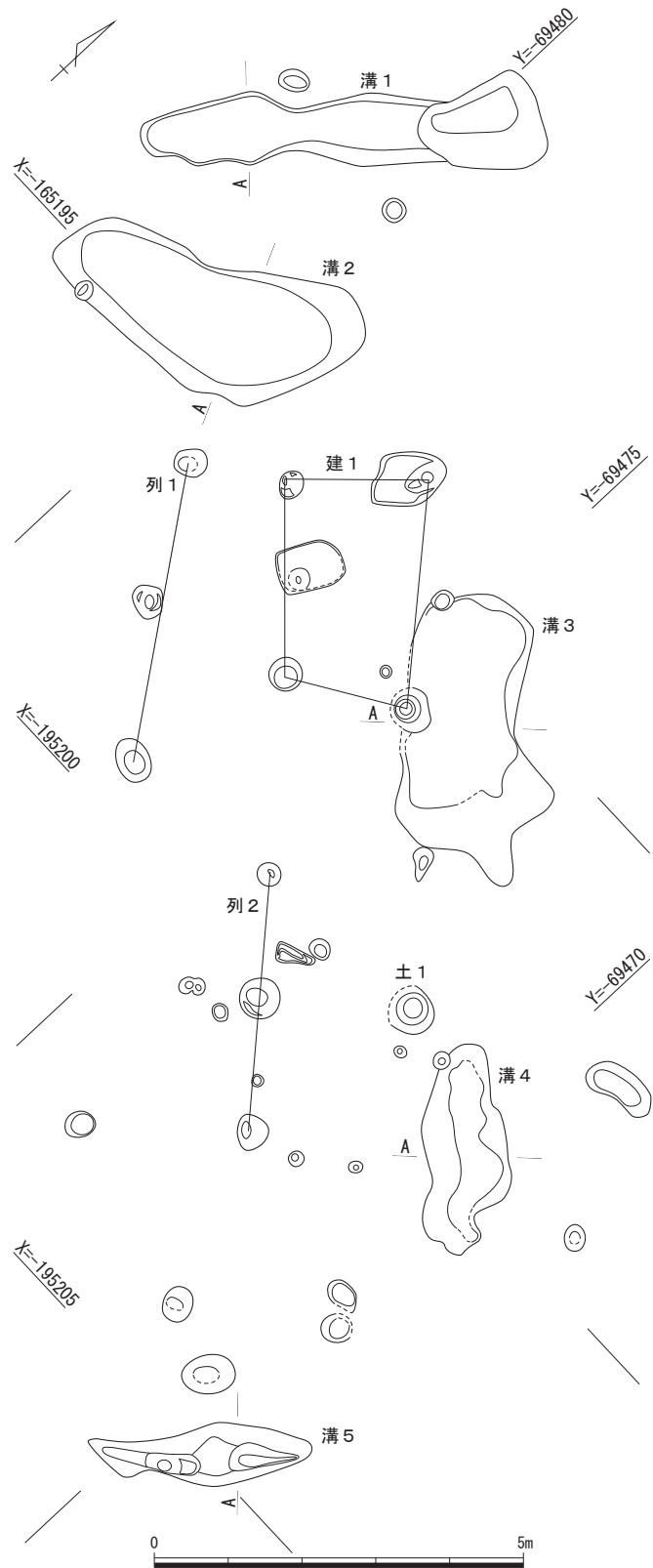
調査区の南東側にある高まりから、北へ下がりかけた場所で、標高69.5m付近に位置する。主軸はN-44°-Wで、地形に沿って建てられたと考えられる。規模は1×1間で床面積4.97㎡、桁行268～310cm、梁行170～172cmを測り、北東辺の桁行がやや広く、柱の通りは悪い。柱穴の平面形は、径35～60cmを測る円形あるいは不整形円形を呈し、深さは最大で30cmほどある。柱穴の埋土は褐灰色粗砂である。

出土遺物はなく、時期は明確ではないものの、周囲の状況等から室町時代後半以降であると思われる。(松尾)

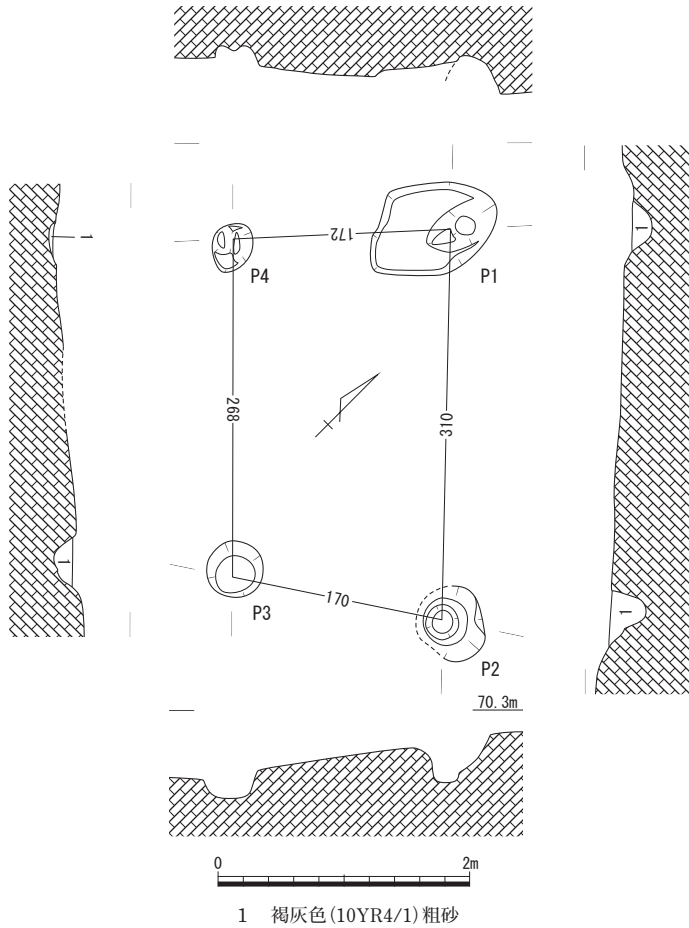
柱穴列

柱穴列1 (第12・14図、図版1)

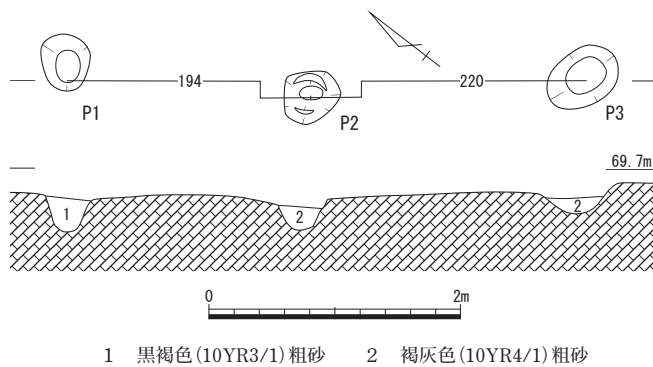
掘立柱建物1の約1.7m南西に位置する2間の柱穴列で、P1～3の柱穴3個が並ぶ。主軸はN-38°-W。全長は414cmで、柱間距離は194～220cmを測る。柱穴の平面形は径20～30cmを測る円形あるいは楕円形を呈する。深さは10～14cm程度で、埋土はP1が黒褐色粗砂、P2・3



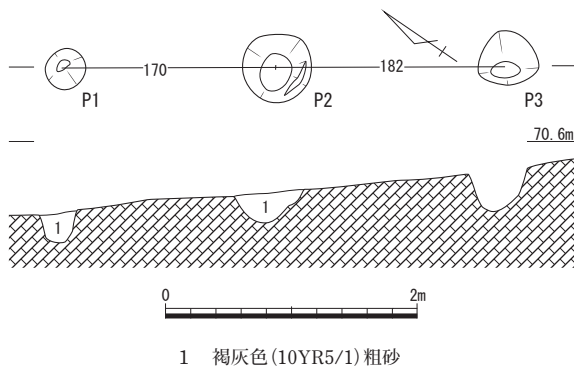
第12図 1区南半遺構全体図 (1/100)



第13図 掘立柱建物 1 (1/60)



第14図 柱穴列 1 (1/60)



第15図 柱穴列 2 (1/60)

が褐灰色粗砂である。

出土遺物はなく時期の確定は難しいが、位置関係等から掘立柱建物 1 と同時期であると考えられる。(松尾)

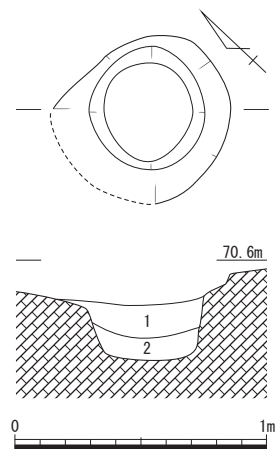
柱穴列 2 (第12・15図、図版 2)

掘立柱建物 1 の南東に位置する 2 間の柱穴列で、P 1 ～ 3 の柱穴 3 個が並ぶ。主軸はN-43° -W。全長は352cmで、柱間距離は170～182cm。柱穴の平面形は径が22～52cmの円形を呈し、検出面からの深さは20～30cm。埋土は褐灰色粗砂。柱穴列 1 のように対になる建物はなく、どのような機能を有しているのか不明確ではあるが、柱穴の埋土等から掘立柱建物 1 及び柱穴列 1 と同時期であろう。(松尾)

土坑

土坑 1 (第12・16図、図版 2)

1 区の南東端付近、溝 4 の北西に隣接する。平面形は直径約70cmの不整形円形、深さは25cmを測る。同調査区の遺構内から遺物は出土しておらず、この土坑も時期については確定し難い。確認調査時に出土した土器片を参考に、中世末頃の遺構である可能性も想定しておく。(北門)

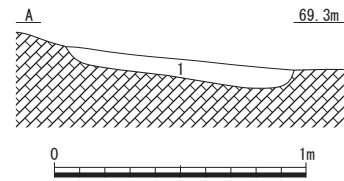


第16図 土坑 1 (1/30)

溝

溝1 (第12・17図)

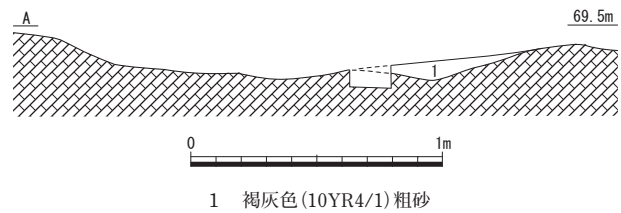
遺構が集中する調査区南東側の北西端に位置する。掘立柱建物1を中心にする、コの字状になる溝群(溝1～5)のうち北西側に位置し、北東-南西方向に掘削されている。全長560cm、上端幅は50～90cm、断面形は皿形で、検出面からの深さは約8cmを測る。埋土は灰黄褐色粗砂である。埋土中から土器などの遺物出土はなく時期の確定は難しいが、周囲の状況等から掘立柱建物1と同時期に機能していたものと考えられる。(松尾)



第17図 溝1 (1/30)

溝2 (第12・18図)

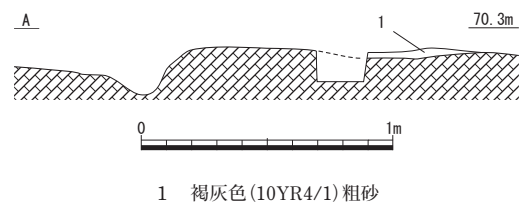
溝1の南東約2mに位置する。溝1とは方向がやや異なり東-西に掘削されている。全長は410cm、上端幅は177cm、断面形は皿形で、検出面から底面までの深さは12cmを測る。埋土は褐灰色粗砂である。遺物の出土はなく明確な時期比定は難しいが、周囲の遺構と同時期であろう。(松尾)



第18図 溝2 (1/30)

溝3 (第12・19図)

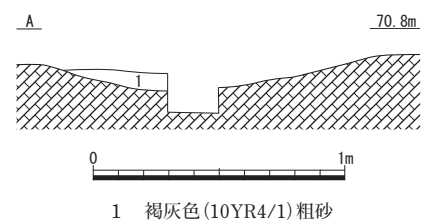
掘立柱建物1の北東側に近接し、北西-南東方向に掘削されている。全長は390cm、上端幅は150～210cmを測る。断面形は皿形を呈し、検出面からの深さは4cmと浅い。埋土は褐灰色粗砂である。他の遺構同様、遺物の出土はない。状況等から掘立柱建物1と同時期であろう。(松尾)



第19図 溝3 (1/30)

溝4 (第12・20図)

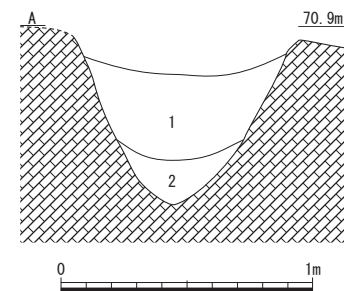
溝3の南東約2.6mに位置する。全長は290cm、上端幅は80～111cmを測る。断面形は皿形で、検出面からの深さは7cm程度。遺物の出土はないが、形状や方向が溝3と似ていることから、同時期に掘削されたと考える。(松尾)



第20図 溝4 (1/30)

溝5 (第12・21図、図版2)

調査区南東端、標高70.5m付近で、今回の調査区内では最も高所に位置する。全長310cm、上端幅40～89cmで、南西-北東方向に掘削される。断面形はV字形で東側と西側がそれぞれ深くなり、底面までの最深は66cm。他の溝群同様に掘立柱建物1と有機的な関係があると判断したが、断面形状が異なる点が気になる。調査区外南東側には尾根の頂部が位置することから、こちらに遺跡の本体が広がる可能性が高い。(松尾)



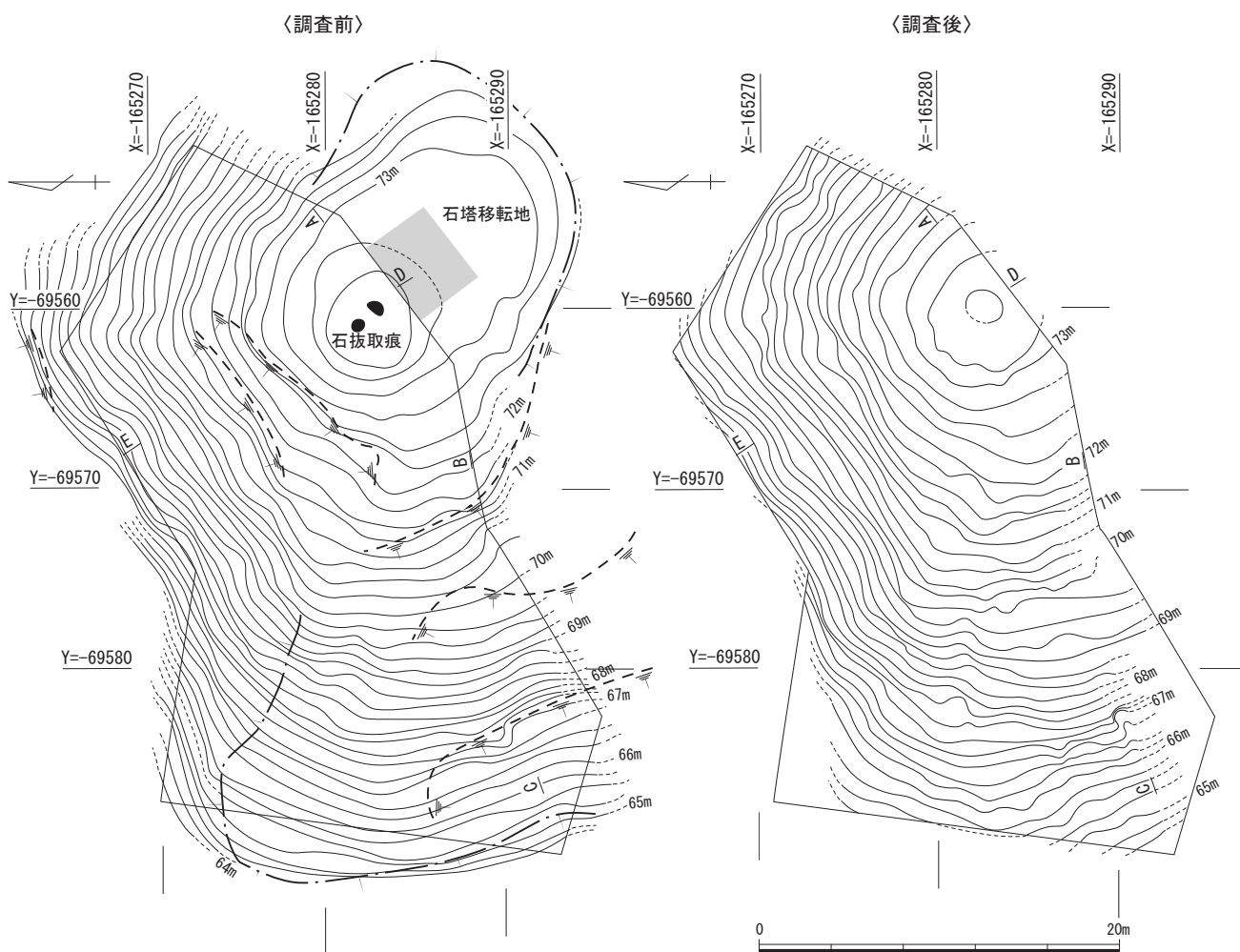
第21図 溝5 (1/30)

第3節 2区の調査

1 概要

丘陵西先端にあたるが、尾根状ではなく、小高い丘状を呈している。頂部には南北20m、東西10m程の小判形の平坦面があり、その北半の径6～7mの高まりに宝篋印塔が建てられていた。この高まりに盛土はなく、地山を削り出して成形したとみられる。地山は不均質な花崗岩で風化・流失が著しく、表土は薄い。北側は表土も流失し、岩盤が露出していた。一方、西側は頂部から標高69m付近にかけて比較的傾斜が緩く、流土（第23図第2層）を除去したところ、テラス状の平坦面が認められ、頂部からテラス状部にかけて弥生時代の埋葬施設を6基確認した。そのうち1基から鉄剣と楽浪系土器が、1基から翡翠製勾玉や水晶製勾玉などの玉類及び青銅片が出土し、特筆される。緩斜面下端では石列もみついている。西斜面石列より下方と東・北斜面では弥生時代の遺構は確認できなかった。

そのほか、頂部から東西両斜面下方にかけて室町時代以降と思われる土坑8基、溝4条などを確認した。遺物も出土したが、遺構に伴うものは少ない。なお、流土底からも瓦質土器が出土しており、中世以降に大きく地形の改変が行われたと推定される。（渡邊）



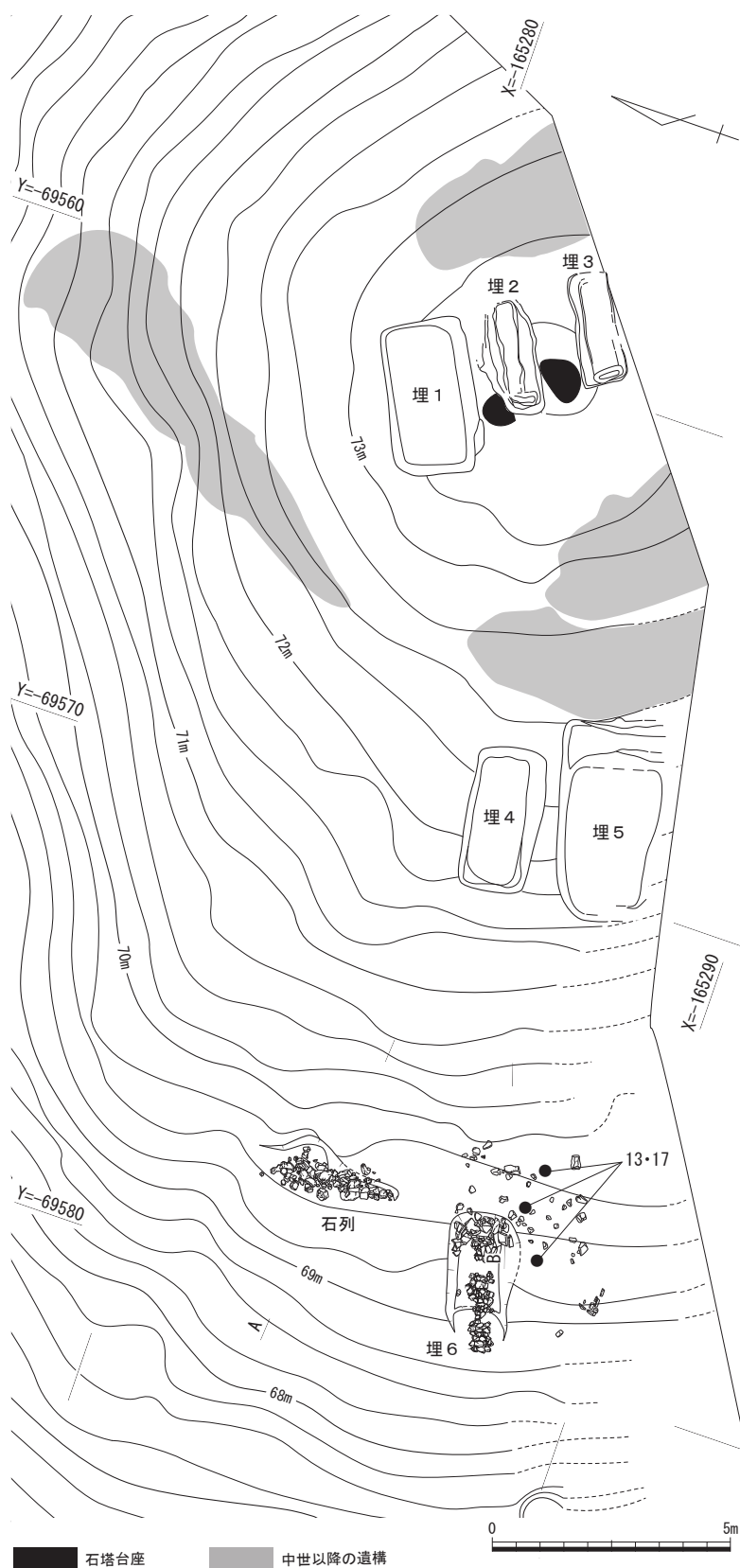
第22図 2区調査前・後地形測量図 (1/400)



- 1 黄灰色(2.5Y4/1)砂質土〈表土影響層〉
- 2 にぶい黄褐色(10YR5/3)粗砂
- 3 にぶい黄橙色(10YR6/4)細砂〈縮まりあり〉
- 4 にぶい黄橙色(10YR7/4)細砂

第23図 調査区断面図 (1/100)

2 弥生時代の遺構・遺物



第24図 2区遺構全体図① (1/150)

第24図は表土（第23図第1層）及び流土（第23図第2層）除去後の状況である。頂部にはほとんど表土は無く地山が露出していた。北側及び東側は急峻で、弥生時代の遺構・遺物は皆無であった。

丘陵頂部は、宝篋印塔台座部分が最も高く、ここを中心とした径7m程の高まりで埋葬施設1～3を確認したが、盛土はない。

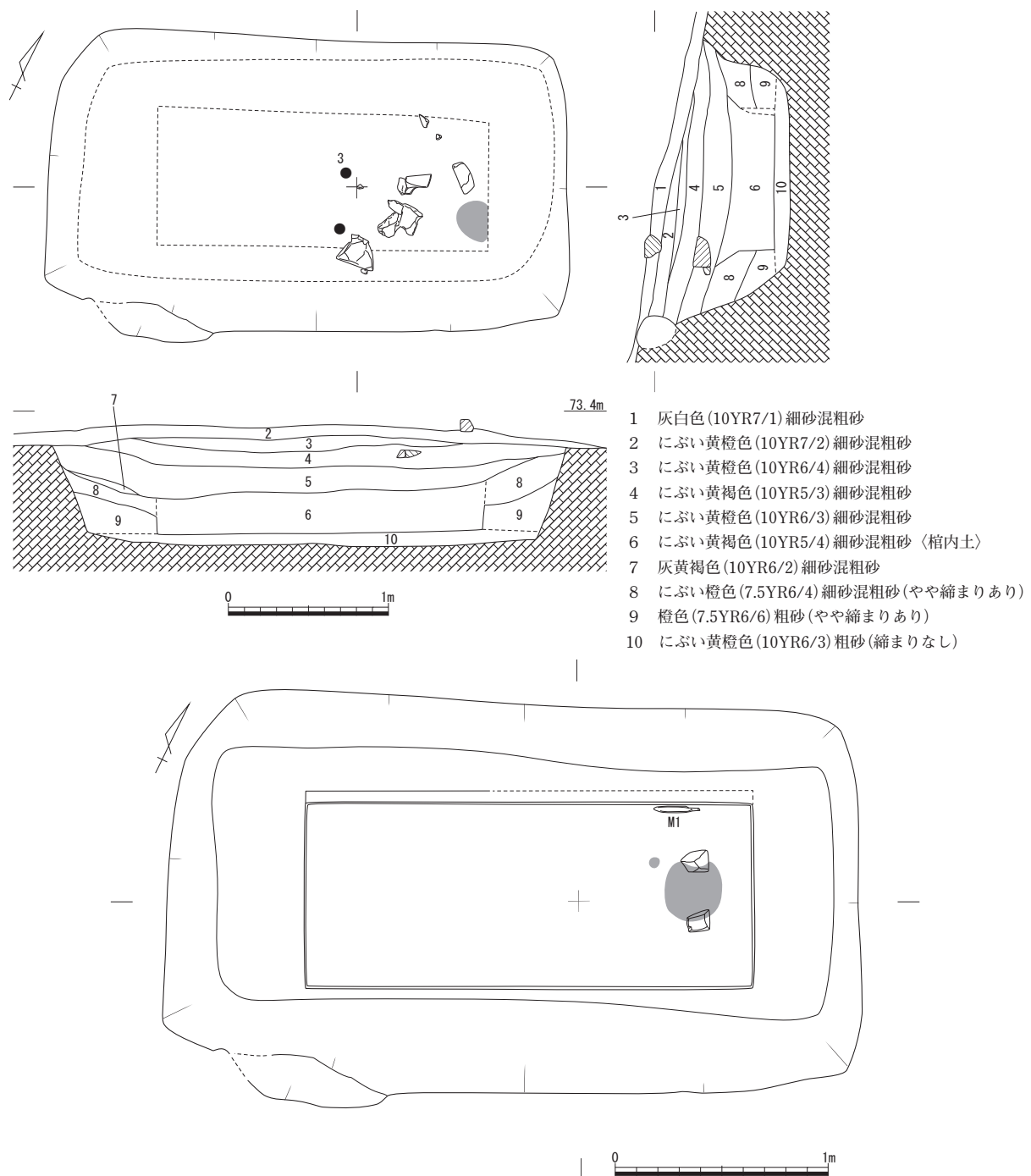
中世の溝6・7を挟んだ西側緩斜面では、標高72m前後（上段）と標高69.5m前後（下段）に平坦部があり、上段で埋葬施設4・5、下段で埋葬施設6を確認した。石列は緩斜面下端にあり、墓域の西端を画する可能性が高い。埋葬施設6はこの石列を壊して構築されていた。これより下方に遺構は確認されていない。なお、埋葬施設5南側の調査区壁面でも墓坑とみられる堆積層が認められている。

埋葬施設1からは楽浪系土器や鉄剣が、埋葬施設4からは翡翠製勾玉・水晶製勾玉などの玉類と青銅片が、埋葬施設5からは比較的大形の鉄鏃が出土している。いずれも類例が少なく、興味深い資料である。埋葬施設1・4・5では供献されたと考えられる土器も出土したが、位置付けは難しい。そのほか、表土や流土内から出土した土器を、上方からの転落や混入も認められるが、墓群に関連する可能性があるとして第33図に掲載している。（渡邊）

埋葬施設

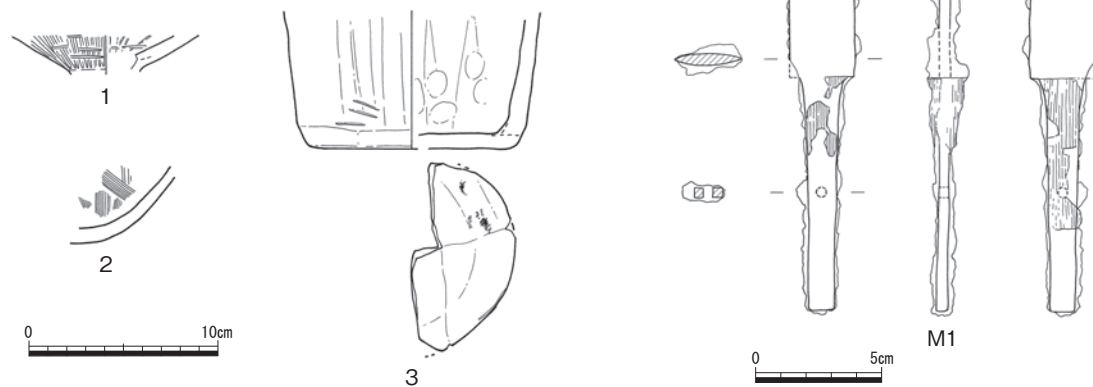
埋葬施設1 (第24~26図、巻頭図版2、図版3・4・9)

尾根頂部で3基並ぶ埋葬施設のうち最も北側に位置する。約10~20cm堆積する表土(第1・2層)を除去すると324cm×182cmを測る長方形の墓坑を確認した。南辺西寄りの一部が外側へ湾曲しているが、浅く窪んでいるのみで、本来の掘り方肩口は内側のラインであると思われる。墓坑埋土(第3~5層)を掘り下げる途中で、20cm程度の角礫が東半に集中して認められた。第5層を除去した段階で墓坑東側から朱、中央で土器片(第25平面図上●印、内1点は第26図3)が出土した。第5層下面を



第25図 埋葬施設1 (1/40)・棺内検出状況 (1/30)

精査したところ、長軸が206cmで小口部幅は東辺80cm、西辺85cmの棺痕跡が認められた（第25図平面図上）。棺痕跡の周囲は約0.5cm幅で鉄分の沈着があり、その内と外とでは埋土色が異なる。すなわち、裏込め土である第8層は地山土に近い橙色、棺内土である第6層は第8層に比べてわずかに白い色調を呈していた。これらのことから、棺内外を区別することができた。次に棺内埋土である第6層を除去する過程で、棺東辺から20cm内側で一对の枕石、その内側径22cmの範囲で朱が認められた。また北側の枕石から北に約20cmの位置で鉄剣M1が出土した。M1は棺側面内側に添うように供えられ、剣身部が西を向き、その先端は上方に若干屈曲している。M1の出土位置から、棺北辺については棺材の内側ラインを示している可能性が高いと思われた。これは、第25図平面図上の棺痕跡検出ライン（点線）をみると、短辺西側と東側で5cmの差があり、調査時には東側の幅80cmに揃えて掘り下げた結果が第25図平面図下となる。すなわち、東西短辺5cmの差は棺材幅を示していると考えられ、第25図平面図下及び南北断面図には棺材幅を想定したラインを点線で図示した。また、他の三辺に関してはこの様な状況は確認できなかったため、棺材の外側ラインであると考ええる。裏込め土である第8・9層を除去すると、第10層が認められた。第10層は最も厚い墓坑中心部が10cm程度あり、周囲にいくほど薄くなる。これは墓坑の地山が花崗岩であり、この岩を削って成形する際に墓坑中心部が最も深く、周囲にいく程に浅くなったため、棺を据え置く際に底面を水平にする必要性から敷かれたものと考えたい。なお、小口板の差し込み痕跡などは検出できなかった。出土遺物である高杯1は第1層中から、甕底部2は第3・4層中から出土。3は第5層底面出土で棺上に置かれたものと想定され、板状の底部からほぼ垂直に立ち上がる胴部をもち、外面下端のみヨコナデ他はタテナデ。鉄剣M1は全長20.7cmを測る長茎短剣で、抜き身に布巻きの状態で副葬されたと推定する。刃部に残る布痕跡の観察から、平組織の織布で、織り密度等から絹の可能性が高いとの鑑定指導を頂いた。時期は弥生時代後期末である。（松尾）



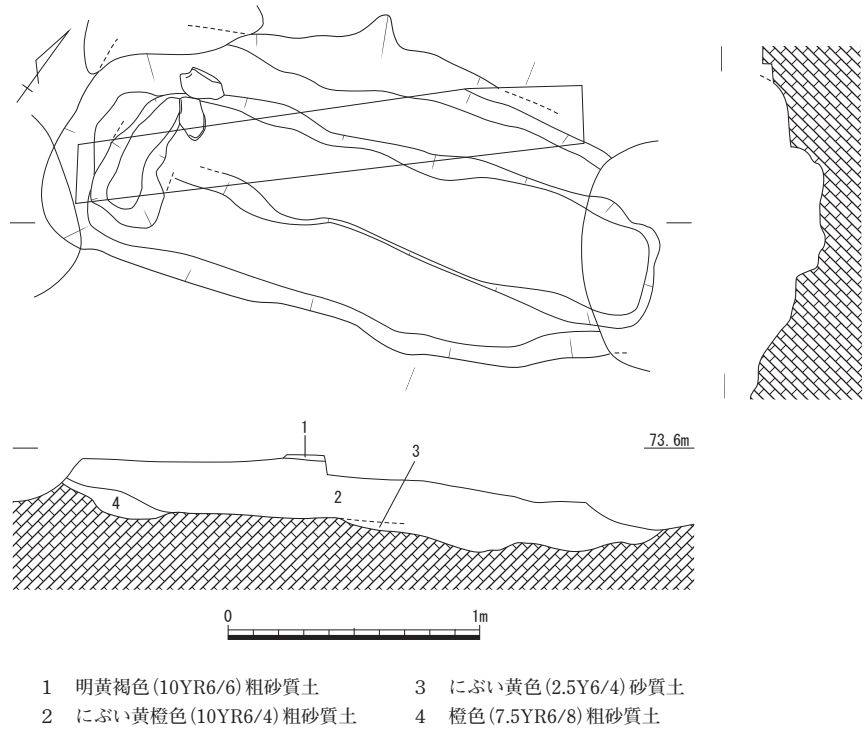
第26図 埋葬施設1出土遺物（1/4・1/3）

埋葬施設2（第24・27図、図版3～5）

埋葬施設1の南50cmに主軸をほぼ揃えて並列している。現状では丘陵頂部最高所に位置する。

西端は宝篋印塔の台石と土坑8に、東端は土坑9に削平され本来の形を留めていないが、残存長240cm、幅110cm、深さ22cmを測る。掘り方は2段で、下段規模は長215cm、最大幅47cmである。上下の埋土にあまり差は無いが、上層の方が砂粒が若干粗い。底面はほぼ平坦である。

西端に長56cm、幅29cm、深さ3cmの小口溝を有する。小口溝北端では掌大の礫が2個出土した。攪乱により原位置ではないため断定できないが、埋葬施設1・3の枕石とは形が異なり、比較的平滑な板石であることから、枕石ではなく、埋葬施設3のように小口板を支える石材と考えている。棺内に朱は認められなかった。遺物はなく、詳細な時期は不明である。(渡邊)

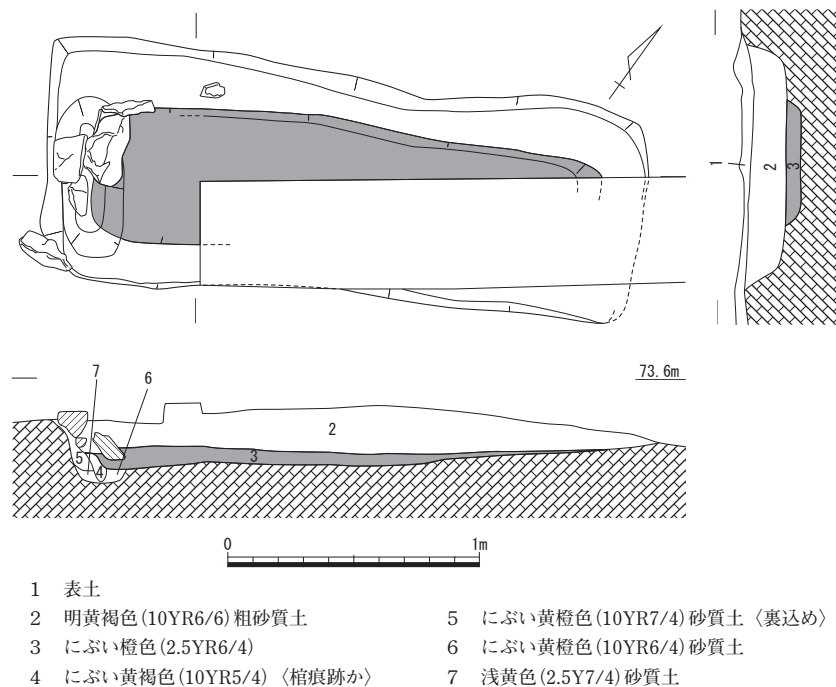


第27図 埋葬施設2 (1/30)

埋葬施設3 (第24・28図、図版3～5)

埋葬施設2の南90cmに並存する。埋葬施設2と主軸が同一で、規模・構造にも共通点が認められる。宝篋印塔建立時の地形の改変や南側溝により削平されているが、上面規模は長236cm、幅80cm、下段規模は長205cm、幅52cm、全体の深さ24cmを測る。底面はほぼ平らである。下段埋土の第3層は朱で赤く染まっていたが、朱の微粒が均質に混在している状況から、朱を混入した土を敷設した可能性も考えられる。

西端には長62cm、幅25cm、深さ6cmの小口溝があり、小口板の痕跡(第4層)も看取できた。第4層の鉛直上で東西の石材の間に2cm程度の隙間が認められることから、石材は小口板を挟むように立て置かれ、小口板を内外から支えていたと推測される。



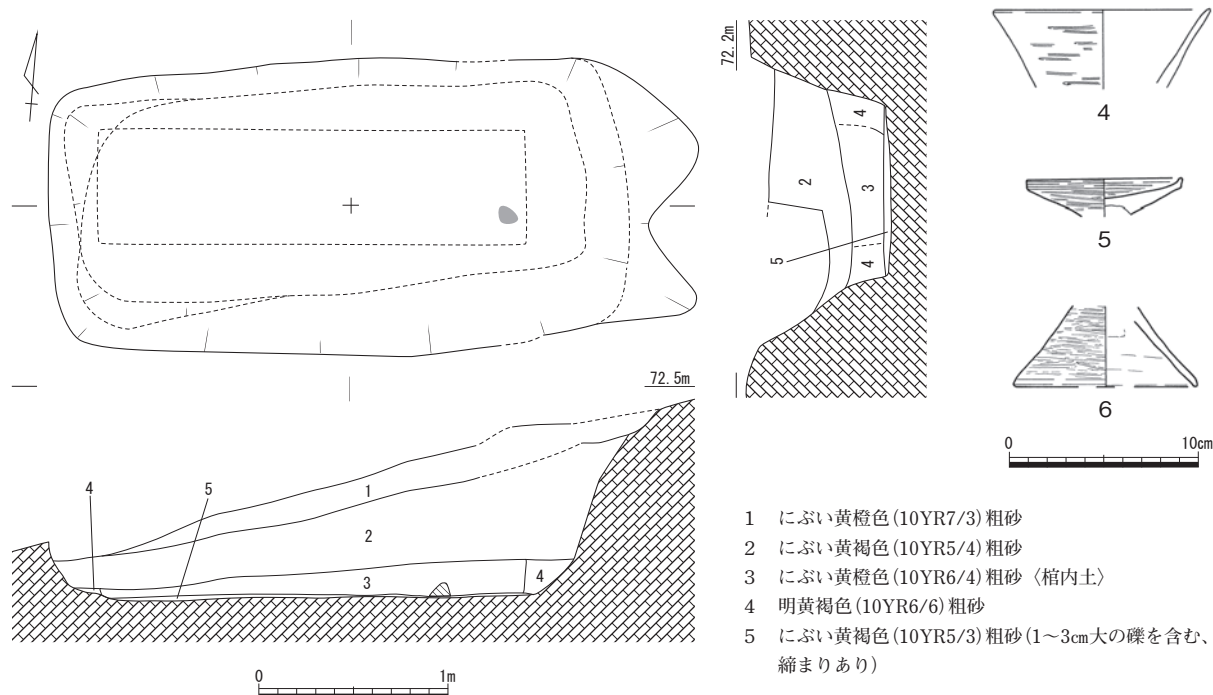
第28図 埋葬施設3 (1/30)

遺物はなく、埋葬施設2との前後関係は不明である。(渡邊)

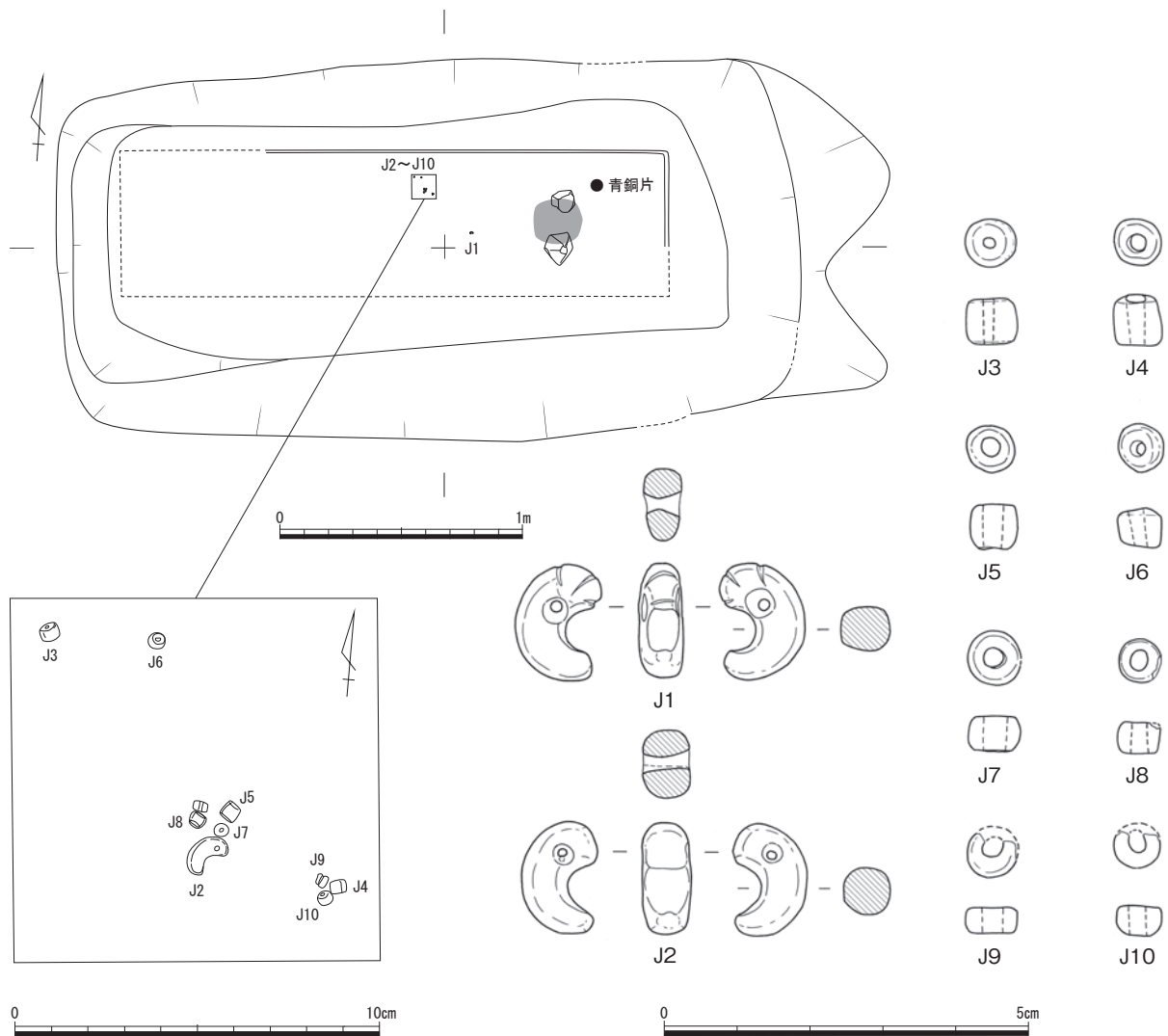
埋葬施設4 (第24・29・30図、巻頭図版2、図版3・5・6・9、写真4)

埋葬施設1～3が所在する尾根頂部から10mほど西へ斜面を下った場所にあり、並存する埋葬施設5の北側に位置する。中世以降の遺物を包含する黄灰色砂質土(表土影響層)を除去し検出した墓坑の平面形は、東側に張り出しをもつ不整長方形を呈し、長軸341cm×短軸155cmを測る。ただし、東端の不定形な張り出し部分は10cm程度と浅く、本来の掘り方は急激に深くなる内側のラインであると思われる、そのように考えると長軸は304cmとなる。

墓坑埋土である第1・2層を掘り下げていく過程で、第1層東端より小型器台5及び脚部6が、第2層中より4が出土した。4は直口壺口縁部としているが、摩滅により調整不明であり、器種は脚裾部の可能性もある。第2層を除去した段階で、墓坑東寄り約10cmの範囲で朱が認められたため、棺内に近い深さまで達していると思われたが、棺内外土の差異が不明瞭であったため、結果として棺痕跡は東辺と北辺の一部のみを確認したにすぎず、他辺については墓坑底面の凹凸等から推定した結果、その規模は226cm×60cmと推測された(第29図)。棺内埋土である第3層を10cmほど掘り下げると、一对の枕石とその内面に径18cmの範囲で朱が認められた。枕石の底を木棺底面と想定し下げると、枕石から30cm程度西側から翡翠製丁字頭勾玉J1が、J1から北北西24cmの位置で水晶製勾玉J2とガラス製小玉J3～10が出土した。出土位置からJ1は被葬者の胸元に、J2～10は連をなして右腕に装着されたものと考えられる。また、対になる枕石の内、東側の枕石から北東へ約10cmの位置で、M2-1・2の青銅製品2点を重なった状態で確認した。いずれも極薄く、M2-1の端には穿孔が認められる。破鏡の可能性が最も高いと思われるものの、錆びの進行が著しいこともあり確実ではない。棺内土である第3層と裏込め土である第4層の区別は非常に難しく、棺痕跡の南辺と西辺については同時に下げざるをえなかった。棺底と想定された位置から墓坑底面までの間には、第5層を2～4cmの厚さで確認することができた。第5層中には1～3cm大の礫が含まれており、全体的に締まりが良い。埋葬施設1における第10層と同じく、棺を水平に据えるために敷かれたものであると思われる。



第29図 埋葬施設4 (1/40)・出土遺物① (1/4)



第30図 埋葬施設4棺内検出状況(1/30)・玉出土状況(1/2)・出土遺物②(1/1)

時期は棺上に置かれたと推定される4が重要になると思われるが、破片が小さく明確にしがたい。弥生時代後期末葉(高橋編年Ⅸ期)、あるいは、墓坑埋土上面から出土し、浅い皿形の受部から短く立ち上がる口縁部をもち、脚部との間に孔が認められない小型器台5の存在を積極的に考慮するならば、古墳時代初頭(高橋編年Ⅹ期)に下る可能性も想定される。(松尾)

埋葬施設5(第24・31図、図版3・5・6・9)

埋葬施設4の南側に並立して位置し、墓坑の一部は調査区外となる。そのため南辺の上端については確認できていない。平面形は、東端に幅40~70cm・深さ12cmのテラスをもつ不整長方形を呈し、規模は長軸408cm×短軸残存207cmを測る。ただし、東端のテラス部分を含めずに計測すると、長軸は360cm程度となる。墓坑を確認する以前の表土除去作業中に、比較的多くの遺物が認められた。中世以降のものが多かったが、その中に混じり、壺7・高杯9や鉄鎌M3が出土した。墓坑埋土である第1層

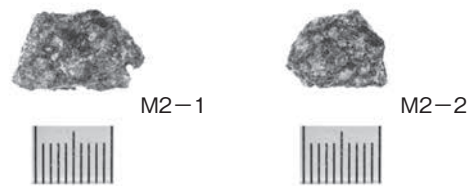
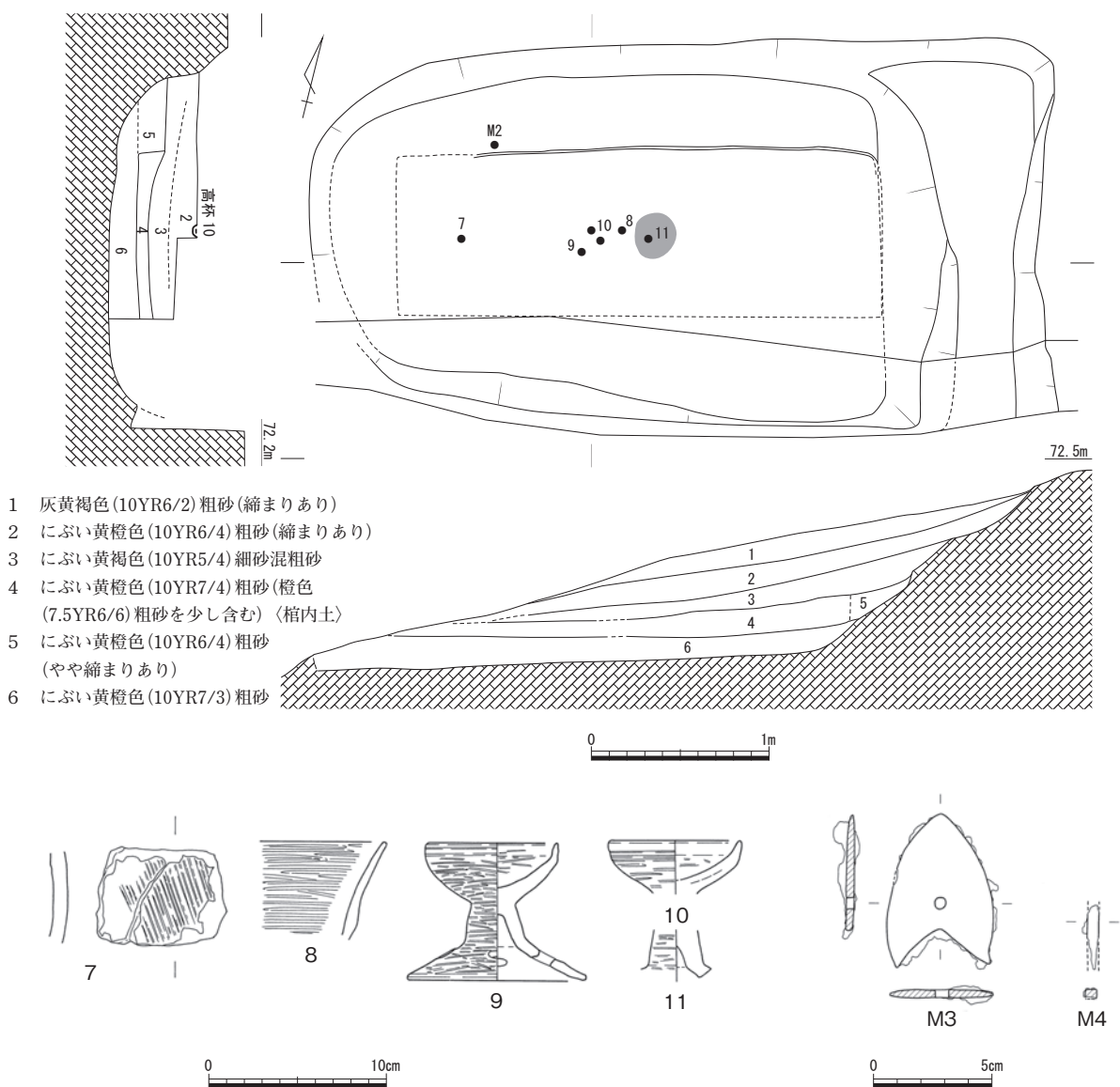


写真4 埋葬施設4出土青銅片(1/1)

掘り下げ中にM4が、第2層上面で高杯10・11が出土した。10・11は、明赤褐色を呈する精緻な胎土や、浅い杯部を有する点などが高杯9と酷似している。第2・3層を除去し、棺内土である第4層上面、すなわち棺上と推測される位置で、高杯の杯部破片8を確認した。胎土や器壁内外面に細かい横方向のミガキを施す点などが高杯9～11とよく似ている。棺内土である第4層と裏込土である第5層との違いについては明瞭でなく、棺痕跡については北辺と北辺から東辺へと屈曲する一部分について確認したにすぎない。したがって棺痕跡の規模（長軸270cm×短軸96cm）について、南辺は墓坑中央で確認した朱と北辺との距離を反転し、西辺は墓坑の上端ラインとの距離などから推定したラインを点線で表現している（第31図平面図）。棺内土である第4層を掘り下げると、墓坑中央付近に径22cmの範囲で朱が認められたが、その他、枕石や副葬品などは出土していない。第4・5層除去後、墓坑底面を確認するために第6層を掘り下げた。墓坑底面である花崗岩の岩盤までは10～20cm程度の厚さがあり、他の埋葬施設に比べると棺底に敷かれた土としては若干厚みがあるように思われた。遺物は比較的多く出土したが、確実に伴うものとしては棺上出土の高杯8、第2層上面より出土した高杯10・11となる。10・11については類例に乏しいが、おおむね弥生時代後期末の範疇であろう。（松尾）

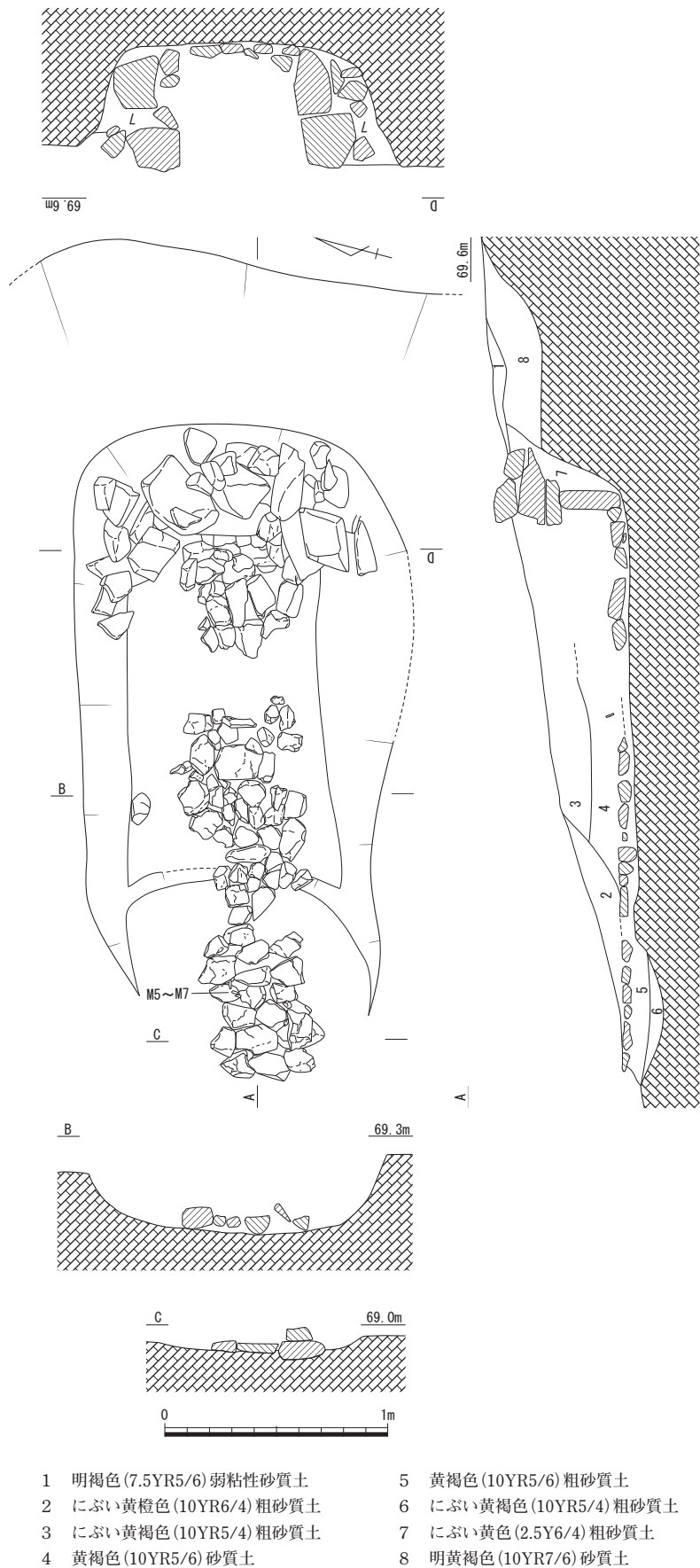


第31図 埋葬施設5 (1/40)・出土遺物 (1/4・1/3)

埋葬施設6 (第24・32図、図版3・7・9、写真5)

標高69.5m付近に位置する。第32図第1層は流土で、石材上面を覆っていた。第2層も上方からの流れ込みの可能性がある。第8層は第33図第2層と同じ石列構築に伴うもので、石材裏込めの第7層が第8層を切っていた。

主軸は東西方向で、東端に「コ」の字状に石を組んでいた。斜面下方にあたる西半は流出した可能性が否定できないが、側壁石材の抜き取り痕は確認できず、元々東端にしか石材を用いなかった蓋然性が高い。掘り方は残存長292cmで、幅は東で150cm、西で130cmを測る。奥壁は幅90cm×高55cm×厚16cmの板石が1枚据えてあり、その上に比較的大きく扁平な角礫が、内側に15cm程せり出すように構築されていた。側壁は両側とも奥から1列のみ、人頭大を超える大きな角礫が2段、平坦面を内側に揃えて積まれていた。



第32図 埋葬施設6 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/3)

床面には拳大の比較的扁平な角礫が、平坦面を水平に揃えて敷かれていた。底面より2cm前後浮いており、石敷き下部に整地土が敷かれていたと考えられる。石敷きの範囲は長250cm、最大幅55cmで、上面のレベルは西端で68.92m、東端で68.98mと、東が若干高い。朱や枕石は無いが、石組の構築状況から、東が頭部の可能性が考えられる。

出土遺物は高杯12とM5～7がある。高杯12は東端石材周辺で出土した。胎土は水漉粘土で、弥生時代末に位置付けられる。M5～7は石敷き上面で、1か所に重なるように出土している。直接接合はしないが、同一個体の可能性があり、この場合、長12cmを超える鉤が破断されていたことになる。

(渡邊)



写真5 埋葬施設6奥壁(西から)

石列

石列1(第24・33図、図版3・7・9、写真6)

西側緩斜面裾部にあたる標高69.50～69.75mで人頭大～拳大の角礫が帯状に広がっていた。北半の一部は列を成し、その南への延長線上は埋葬施設6の東端あたりになる。これより下方は傾斜がさらに急になって弥生時代の遺構が認められないことから、墓域の下(西)端を画す石列と判断した。石材を覆う流土には比較的多く中世土器片が混入していること、平坦部が調査区外南側の墓地造成面と合致することから、中世以降に大規模な地形の改変が行われ、攪乱を受けたと想定される。特に埋葬施設6周辺は多くの石材が散逸した様に見受けられるが、斜面下方に転落した石はあまり残されておらず、埋葬施設6に転用された可能性もある。

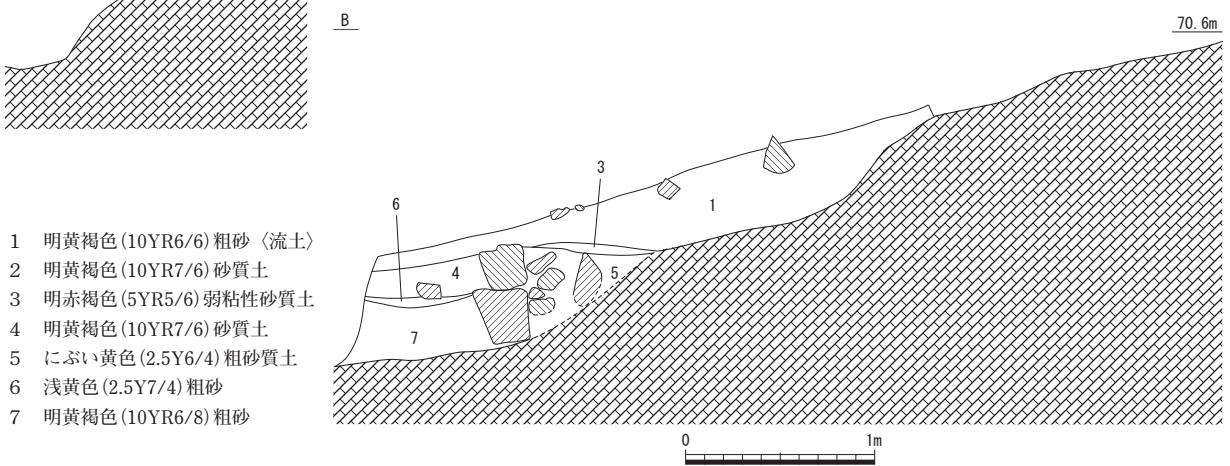
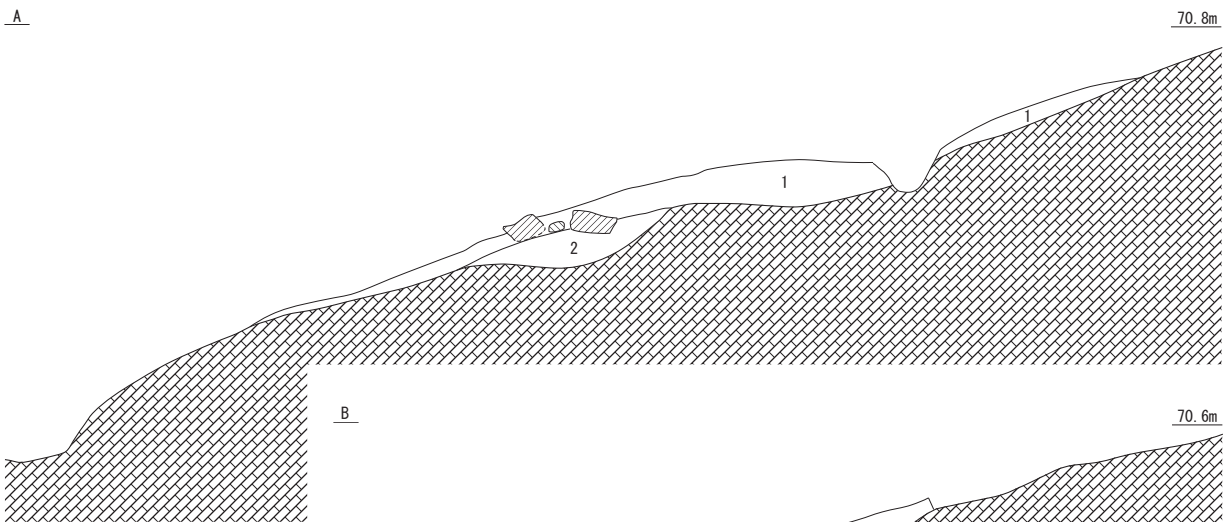
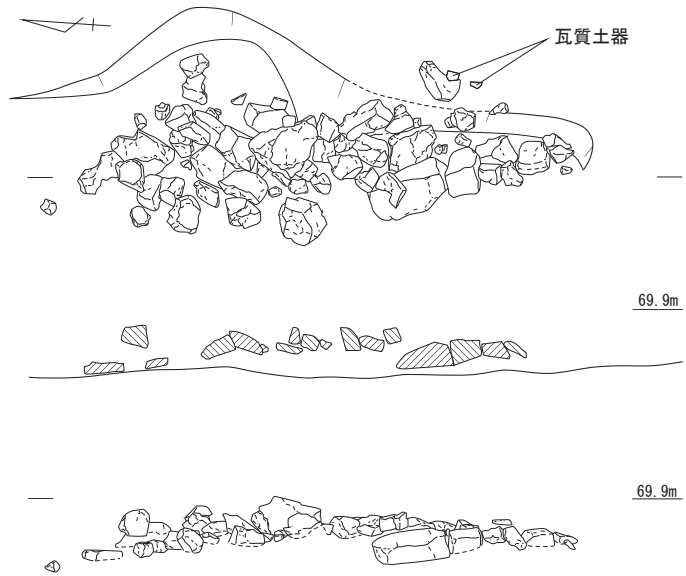
石列が良好に遺存していた範囲はおよそ南北長260cm、東西幅70cmで、特にその南半6石分は西側面と上面を揃えて並べられていた。第33図断面図からは、地山山側を段状にカットして、第2層に石を埋めながら配置した状況が看取される。石材の大きさにばらつきがあり、転石も含まれているが、横長に使用した石材が多く、上面の高低差は少ない。

第33図に示した土器のうち、13・17は埋葬施設6周辺の流土内から(第24図●印)、14は西斜面表土掘削時に、15は埋葬施設6下方の表土掘削時に、16は埋葬施設6南側の流土内から、19は斜面下方の調査区西端近くの表土掘削時に出土した。18は宝篋印塔移転に伴う立会時に宝篋印塔周辺から出土した。13は頸部に突帯を有する壺で、突帯には矢羽根状の刻みを施す。胎土は水漉粘土である。14は二重口縁壺で、竹管文を加えた円形浮文を付す。胎土は精良、細かい砂粒を含む。15は甕で、口縁端部を下方に拡張し、擬凹線を巡らす。胎土に比較的多くの砂粒を含む。16は高杯で、深い杯部を有する。胎土は精良だが、他の土器と比べて色調が薄く、黄色味を帯びる。17は有段の高杯で、外面を緻密に磨き、光沢を有する。胎土は精良だが細かい砂粒を含み、金雲母片がやや目立つ。18は甕で、上方に拡張した口縁端部外面に擬凹線を巡らす。胎土に砂粒を含む。19は高杯脚柱部で、胎土は精良である。いずれも細片で時期の判断は難しいが、15・18が後期後葉以前に遡る一方、16は古墳時代に下る可能性がある。14・17は高橋編年Ⅸ～Ⅹ期に頻出する器形であるが、胎土・焼成・色調は弥生土器と差が無く、弥生時代の範疇で捉えておきたい。これらの土器がどの埋葬施設に伴うか特定できないが、土器の示す時期幅が造墓活動の期間を反映していると捉えられよう。

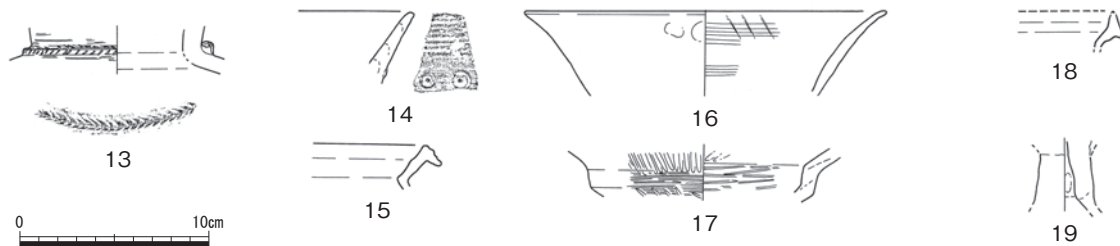
(渡邊)



写真6 石列検出状況（北西から）



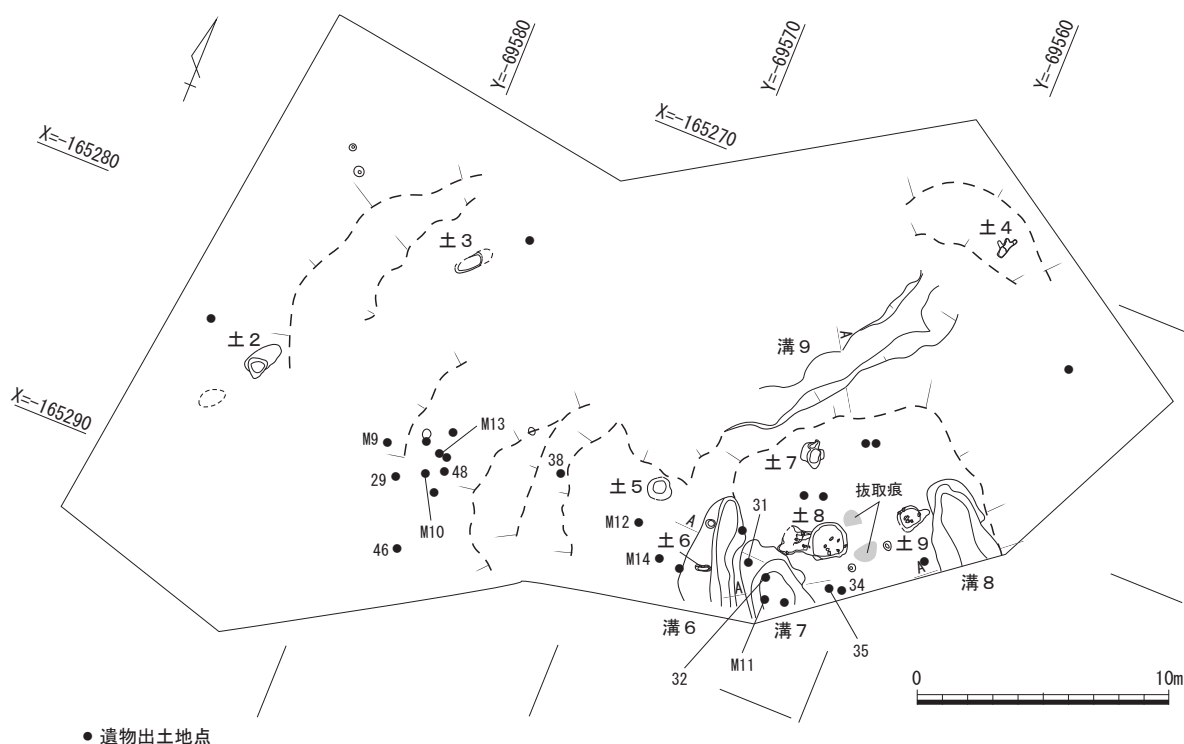
- 1 明黄褐色(10YR6/6)粗砂〈流土〉
- 2 明黄褐色(10YR7/6)砂質土
- 3 明赤褐色(5YR5/6)弱粘性砂質土
- 4 明黄褐色(10YR7/6)砂質土
- 5 にぶい黄色(2.5Y6/4)粗砂質土
- 6 浅黄色(2.5Y7/4)粗砂
- 7 明黄褐色(10YR6/8)粗砂



第33図 石列 (1/40)・周辺出土遺物 (1/4)

3 室町時代以降の遺構・遺物

丘陵頂部には頓宮又次郎の墓と伝わる宝篋印塔があり（調査前に調査区南側へ移転済み）、頓宮（はやみ）と同音である「歯病み」にかけ、歯痛に効くとして地元では信仰されていたらしく、表土中からは室町時代以降の遺物が比較的多く出土している。したがって、頂部の平坦地や斜面部の段などもその時代に造作されている可能性が非常に高い。遺構としては土坑8基、溝4条があり、その多くは頂部に分布していた。また、東あるいは西側の斜面部下方の比較的傾斜が緩やかな部分で、炭を包含し被熱痕跡がある土坑を数基確認している。（松尾）



第34図 2区遺構全体図② (1/300)

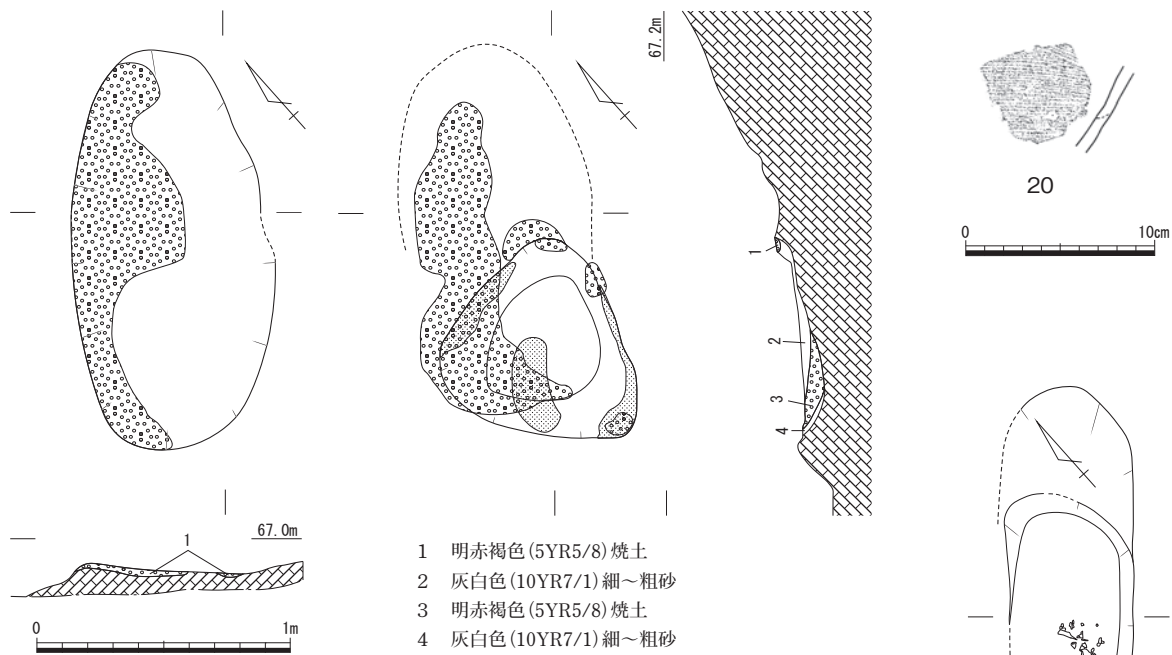
土坑

土坑2 (第34・35図、図版8)

調査区西端で、西側斜面を下った緩斜面部に位置する。当初は、平面形が長軸160cm×短軸78cmを測る長楕円形の範囲で、西側に多くの炭を包含した窪みが認められた（第35図平面図左）。これを除去すると、窪みの南西部に重なる位置で、78×65cmを測る不定形土坑を確認した（第35図平面図右）。この土坑内においても多くの炭が認められ、壁面には被熱痕跡が明瞭に残っていた。幾度となく火を使用した痕跡であると思われるものの、その性格については不明である。南西部の不定形土坑底面に張り付くように鉢形瓦質土器の破片20が出土している。おおむね15世紀代のものであろう。（松尾）

土坑3 (第34・36図、図版8)

土坑2の北東部で、斜面を2mほど上がったやや傾斜の急な場所に位置する。斜面に対し平行して掘削されており、確認した当初から多くの炭片が認められた。平面形は長軸163cm×短軸49cmを測る長楕円形を呈するが、北東端から44cmまでの浅い部分を除くと、長軸は120cmを測る。検出面から底



第35図 土坑2 (1/30)・出土遺物 (1/4)

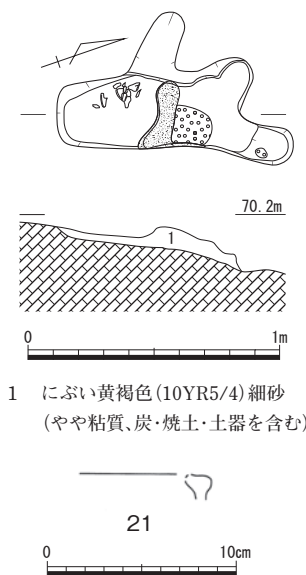
面までの深さは12cmで、断面形は逆台形。埋土中には炭が多く、特に土坑中心から南西寄りで非常に多くの炭片を確認した。ただし被熱痕跡は認められず、その性格は不明である。土器の出土はなく、時期は明確にしがたいが、周囲の状況等から室町時代以降であろう。なお、炭についてAMS年代測定を実施し、15世紀後半を中心とする測定結果を得た。(松尾)

土坑4 (第34・37図)

北斜面の東側で、傾斜がやや緩くなる場所に位置する。平面形が不定形であるのは、比較的新しい時期に削平を受けている結果であろう。長軸72cm×短軸28cm、底面までの深さは8cm程度で、埋土中には炭や焼土、そして土器小破片を含んでいた。土坑の中心部には弱い被熱痕跡が認められる。室町時代のものである。(松尾)

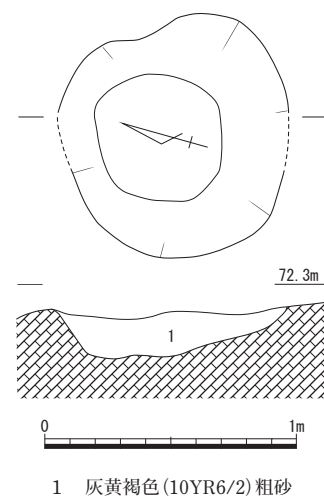
土坑5 (第34・38図)

丘陵頂部から西へやや下がりかけた場所で、埋葬施設4の北東端を削平している。平面形はやや不整な円形を呈し、長軸99cm、短軸92cmを測る。検出面から底面までの深さは18cm、断面形は皿形で、底面は凹凸が認められる。埋土は灰黄褐色粗砂。周囲の状況等から室町時代以降であろう。(松尾)



第37図 土坑4 (1/30)・出土遺物 (1/4)

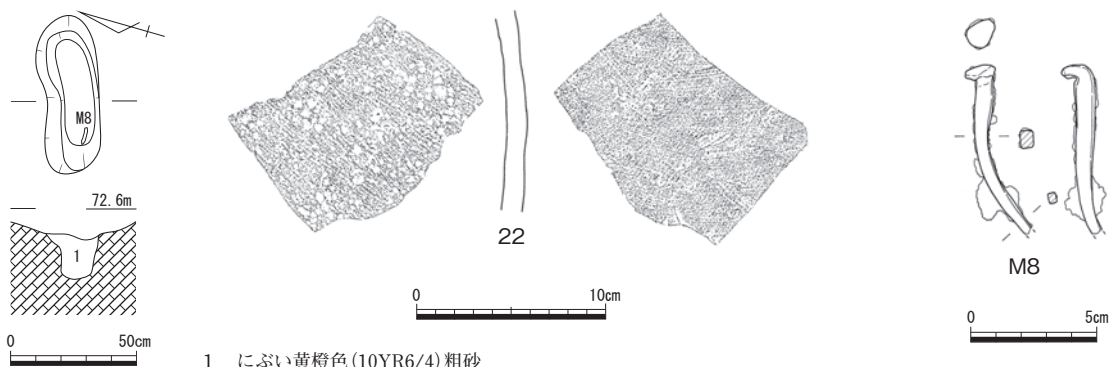
第36図 土坑3 (1/30)



第38図 土坑5 (1/30)

土坑6 (第34・39図、図版9)

丘陵頂部西端で、溝6に西接して確認した。溝6の西側はやや浅くたわんでおり、そのたわみの底面を精査した際に検出している。平面形は長軸63cm×短軸20cmの長楕円形を呈す。断面形はU字形で、検出面から底面までの深さは17cmを測る。出土遺物は備前焼甕胴部片22、鉄釘M8。14世紀後半以降に比定できよう。(松尾)



1 にぶい黄橙色(10YR6/4)粗砂

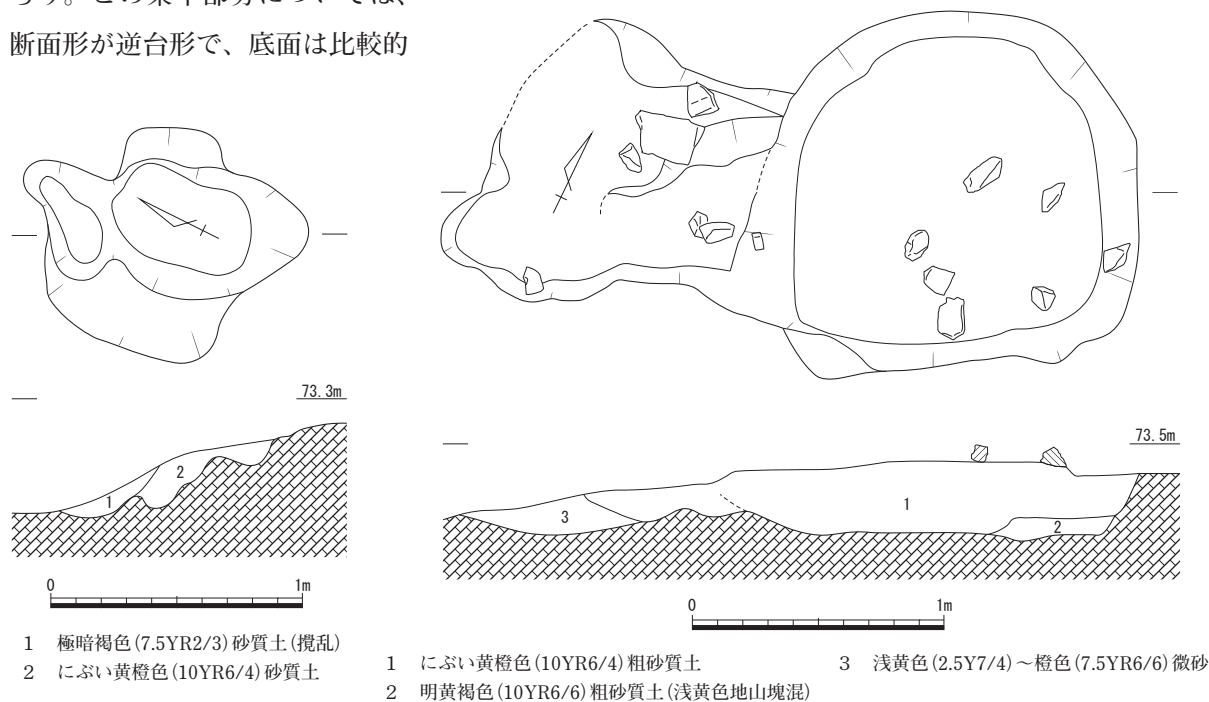
第39図 土坑6 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/3)

土坑7 (第34・40図)

丘陵頂部にある埋葬施設1の北東隅に隣接している。平面形は不整形で、長軸115cm×短軸92cmを測る。底面は凹凸があり、検出面から底面までの深さは16cm程度。出土遺物はなく、詳細な時期は不明であるものの、周囲の状況等から室町時代以降であろう。(松尾)

土坑8 (第34・41・42図)

丘陵頂部にある埋葬施設2の東に位置する。平面形は不整形で、長軸260cm×短軸138cmを測るが、西半は深さ7cm程度のたわみ状を呈しており、主体となるのは東半150cm×140cmの隅丸方形部分であろう。この東半部分については、断面形が逆台形で、底面は比較的

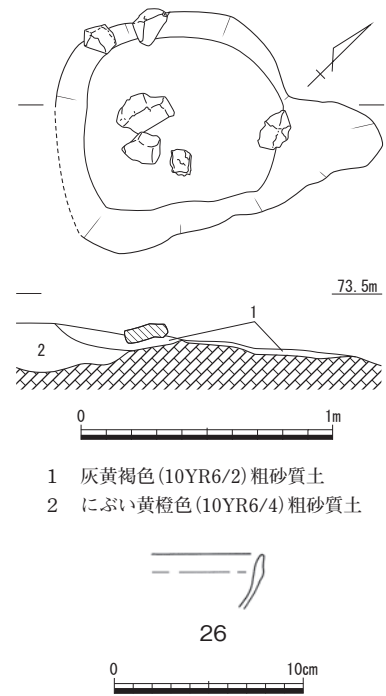


第40図 土坑7 (1/30)

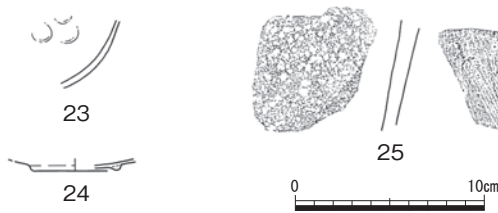
第41図 土坑8 (1/30)

平坦であり、埋土上面あるいは埋土中より周囲から採取される花崗岩の角礫が多くみられた。14世紀後半の土坑であろう。(松尾)
土坑9 (第34・43図、図版8)

尾根頂部にある埋葬施設2東側に位置し、その東端を一部削平する。その状況は、第43図断面図の第1層が土坑9埋土、第2層が埋葬施設2埋土として現れている。平面形は不整形で、長軸130cm×短軸88cmを測る。埋土中には、花崗岩の角礫を含み、土師器碗破片26が出土している。時期は14世紀後半であろう。(松尾)



第43図 土坑9 (1/30)・出土遺物 (1/4)

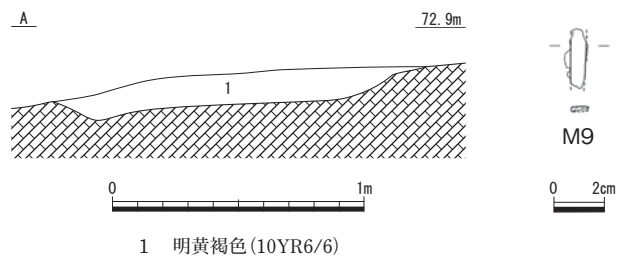


第42図 土坑8出土遺物 (1/4)

溝

溝6 (第34・44図、図版9)

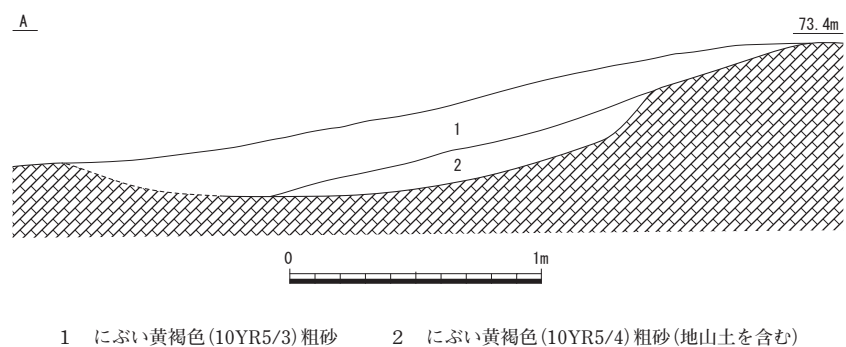
尾根頂部の平坦面から西へ傾斜する変換地点に掘削されている。幅は150~200cm程度で、西側が浅くテラス状になっている。断面形は皿形で、検出面から底面までの深さは12cm。尾根頂部の平坦面は、周囲の地形測量(第22図)から、南東方向へ広がっていることが分かっており、溝6もこの地形に沿って調査区外へと延びている可能性が高い。出土遺物は鉄製品M9のみ。明確な時期は示しがたいが、後述する溝7・8とほぼ同時期に掘削された可能性が高い。(松尾)



第44図 溝6 (1/30)・出土遺物 (1/3)

溝7 (第34・45図、図版9)

溝6と土坑8の間で確認した。掘り方は明瞭ではない。幅は最も広い部分で293cmを測る。断面形は皿



1 にぶい黄褐色(10YR5/3)粗砂 2 にぶい黄褐色(10YR5/4)粗砂(地山土を含む)

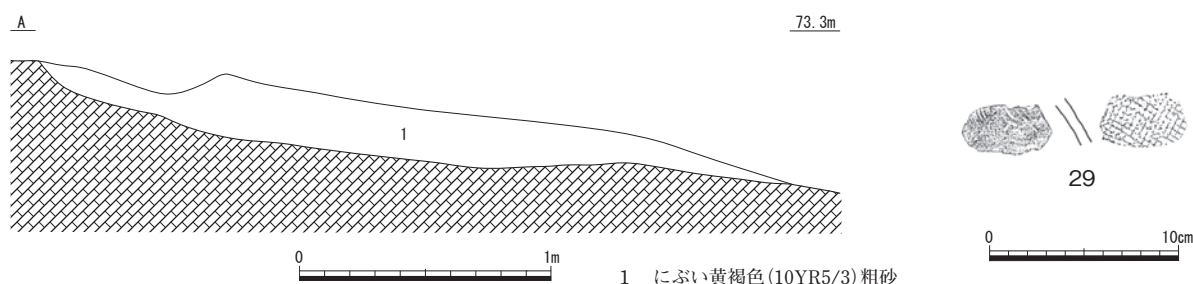


第45図 溝7 (1/30)・出土遺物 (1/4)

形で、検出面から底面までの深さは31cmを測る。溝6との切り合い関係はなく、溝6同様、調査区外へと延びている。埋土中より土師器椀27や亀山焼甕28が出土している。また、埋土上面より第48図の土師器椀33・34、釘M13が認められた。時期は14世紀後半頃のものであろう。(松尾)

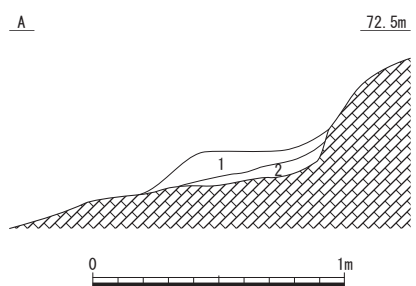
溝8 (第34・46図)

尾根頂部の平坦面東端で、土坑9の東側に位置する。幅は303cmで、検出面から底面までの深さは21cmを測る。頂部平坦面東端に沿って掘削されており、調査区南側へと延びている。溝7同様、埋土がにぶい黄褐色粗砂であることや、尾根頂部に東西対で掘削されている位置関係などから、溝7と同時に掘削され、機能したのと考えたい。埋土中から亀山焼片29が出土している。(松尾)



第46図 溝8 (1/30)・出土遺物 (1/4)

溝9 (第34・47図)



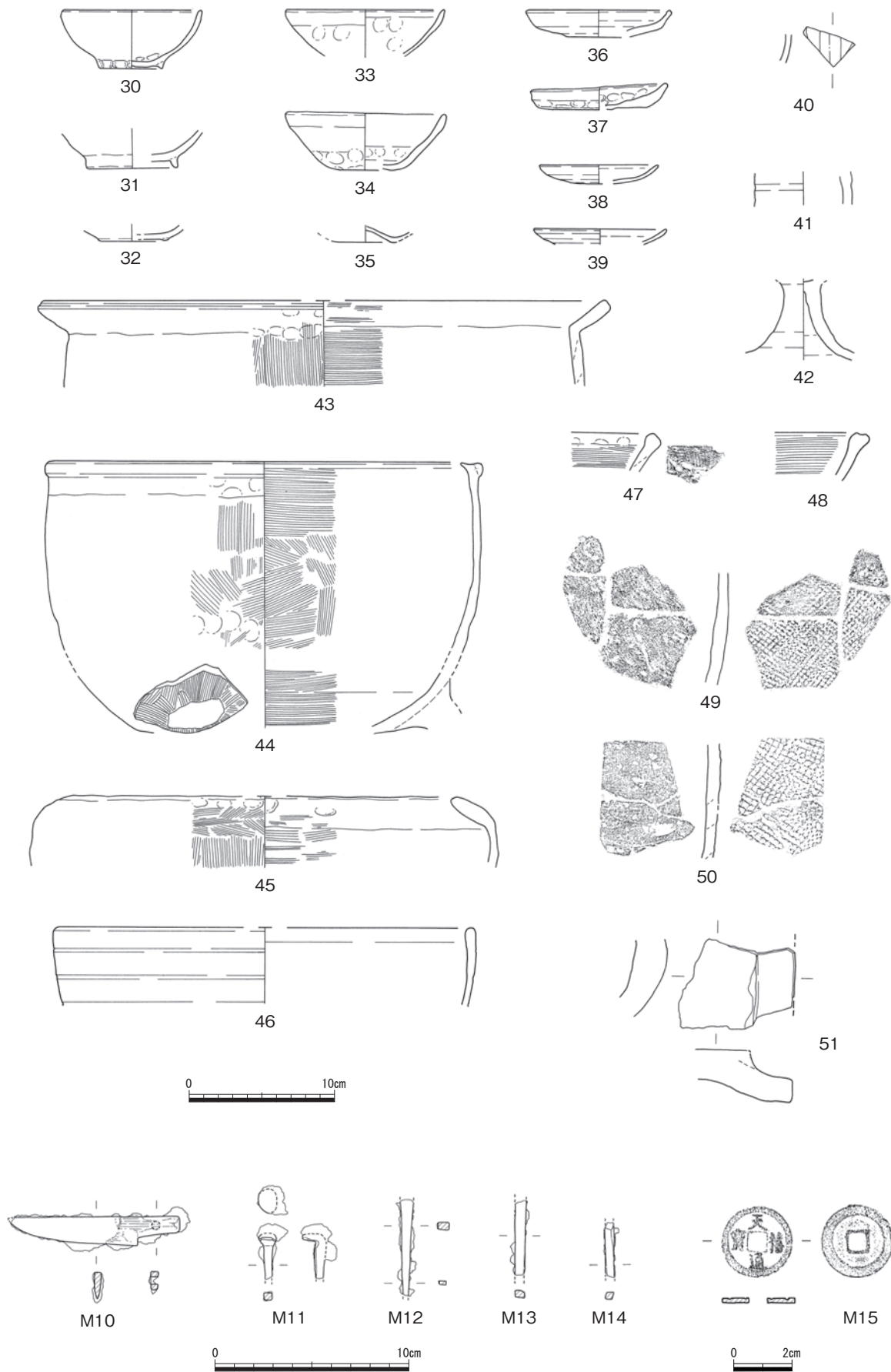
- 1 表土
- 2 明黄褐色(10YR7/6)粗砂
(灰黄褐色(10YR5/2)砂質土が縞状に混)

第47図 溝9 (1/30)

尾根頂部平坦面の北側下方で、調査区北東から南西方向へと斜面を上るように掘削されている。第47図断面図においても明らかなように、尾根頂部側を掘削し、底面を平坦に成形していることが分かる。埋土の第2層が明黄褐色粗砂と灰黄褐色砂質土との互層であるのは、一定期間、面として機能していたことを示すことから、道として利用されていた可能性が高い。したがって、調査区北東側の土坑4が位置するテラス状の平坦面から、尾根頂部の平坦面へと斜面を上るために造作されたと考えたい。出土遺物がなく明確な時期は不明であるが、尾根頂部平坦面に所在する頓宮又次郎の墓と伝わる宝篋印塔との関連が想定される。(松尾)

その他の遺物 (第48図、図版9)

表土掘削中、あるいは遺構に伴わない遺物については、位置等の記録をとりながら掘り進めた。第34図の●印に示した通り、その分布は尾根頂部平坦面と、西斜面のやや傾斜が緩くなる箇所(埋葬施設6周辺)に集中する。土師器椀33・34、土師器皿36・37、鉄釘M13、銅銭M15「天禧通宝」は尾根頂部平坦面から、土師器椀31、瓦質土器鍋48、瓦質土器甕50、鉄製刀子M10、鉄釘M11・14は埋葬施設6周辺の花崗岩礫が散在していた場所から出土した。遺物が示す時期幅は、おおむね14世紀後半から16世紀代を中心とすることから、この時期に地形の改変が行われたと考えられる。その他、須恵器高杯42、須恵器壺41、丸瓦51など古代以前を示す遺物を丘陵裾部にて表採している。(松尾)



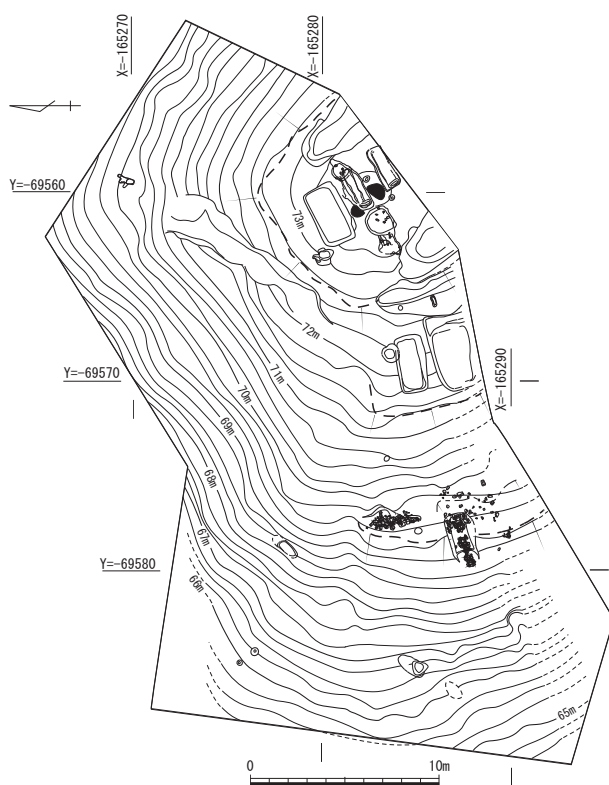
第48図 遺構に伴わない遺物 (1/4・1/3・1/2)

第4節 小結

城殿山遺跡の主な遺構は、1区の室町時代後半と思われる掘立柱建物1棟、柱穴列2列、土坑1基、溝5条、2区の弥生時代の埋葬施設6基、室町時代以降の土坑8基、溝4条などがある。1区では溝で囲まれた建物群が営まれていたと想定されるが、溝1～4が浅く不整形であるのに対し、尾根上方側の溝5がV字状に深い点は注意しなければならない。2区西麓の和田谷遺跡では集落が縮小傾向にあり、短期間とはいえこのような丘陵上に建物が形成される状況は、地域全体の動向を踏まえて検討していく必要がある。一方、2区の室町時代以降の状況からは、明確な居住を伴う活動の痕跡は見出し難い。溝7・8は宝篋印塔を中心に対称的な位置関係にあり、基壇成形に伴う造成の痕跡とみられ、遺構に伴わない完形の土師器皿や銅銭などの出土状況や内容からは「お供え」的な要素が看取できる。頓宮又次郎との関連を示す証拠は見当たらないが、宝篋印塔の製作年代は室町時代前期に遡りうるもので、この頃から宝篋印塔を含めて何らかの宗教活動が行われていたことが窺われる。

弥生時代の埋葬施設については第7章に譲り、ここでは概略を述べるにとどめる(第24図)。流失や削平により盛土や明瞭な区画は認められないが、配置状況や石列の存在から、一種の区画墓と捉えられる。溝6は区画溝の痕跡かもしれない。埋葬形態には①小口溝のある細長い2段掘り(埋2・3以後、埋と省略)、②やや大型で深い箱形(埋1・4・5)、③石組み(埋6)の3者がある。②のうち埋1・4では枕石を有していた。朱は埋1・3～5で認められる。また、埋1の埋土上層から角礫が出土した点も注目される。遺物の出土状況は、①では供献・副葬共にないが、②では棺上や墓坑上から供献されたと思われる土器が出土し、棺内には鉄器や玉などが副葬され、③にも鉄器が棺内に

副葬されていた。これらの違いは時期差もしくは出自や集団差を表すと考えられているが、主軸を揃えた整然とした配置には墓群全体にわたる規制が感じられることから、単一集団による造墓で、時期差を反映するとみている。供献土器から埋葬時期の特定は難しいが、表土や流土内の土器も含めて総合的に判断すれば、後期後葉(高橋Ⅷ期)～終末期(高橋Ⅹ期)の範疇で捉えられよう。副葬品は鉄剣、水晶製勾玉、丁字頭翡翠製勾玉、青銅片など特徴的な分布を示す稀少品で、被葬者の位置付けを考えるうえで重要である。鉄剣に付着した布が絹と判明した点も意義深い。また、水晶製勾玉や楽浪系土器、副葬品の配置からは北部九州や朝鮮半島との関連が想起され、吉備の対外交流を考えるうえでも重要である。一方、特殊器台は出土せず、埋葬施設そのものからも突出した人物の存在はみえない。今後検討すべき問題である。(渡邊)

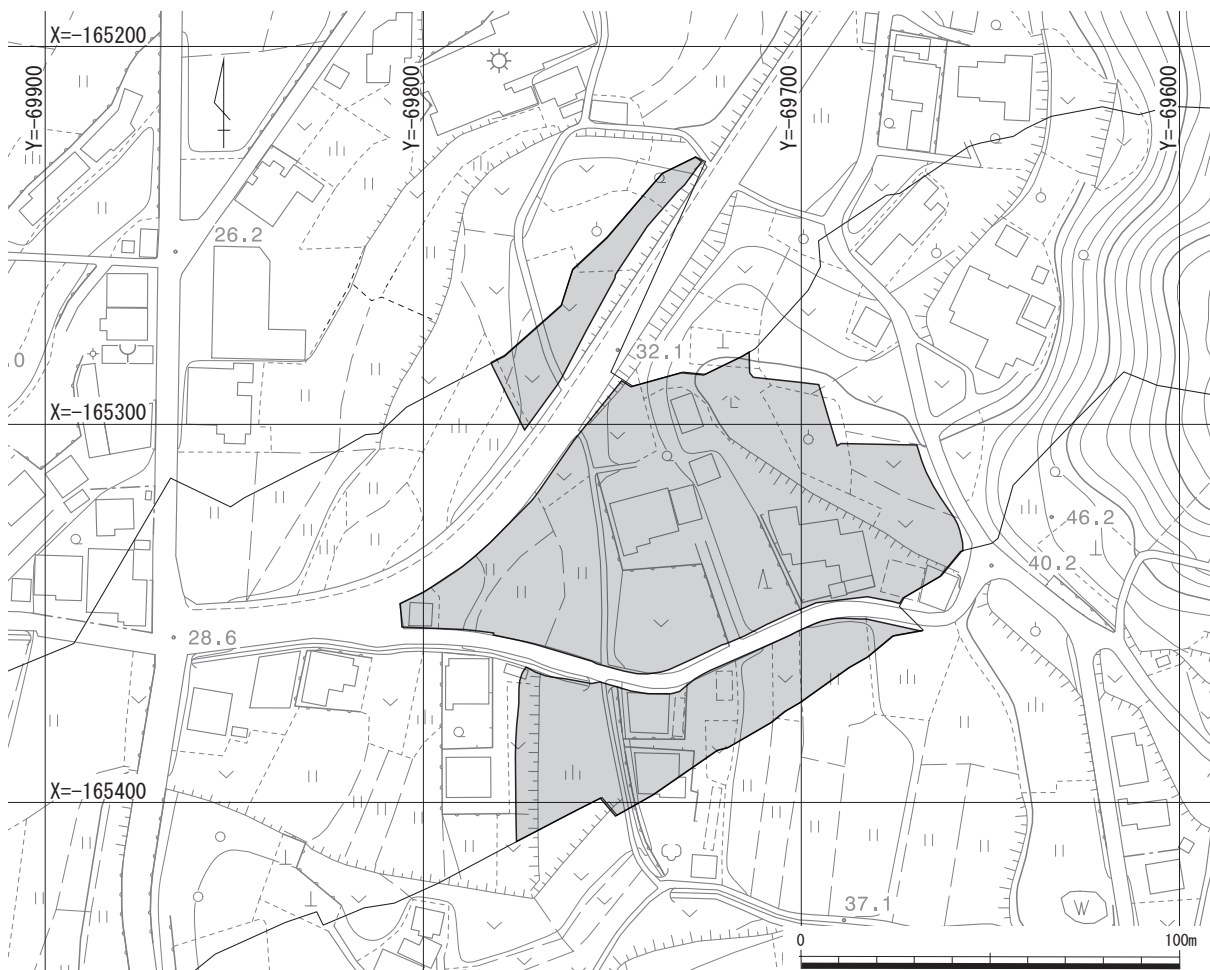


第49図 2区主要遺構全体図(1/400)

第4章 和田谷遺跡

第1節 調査の概要

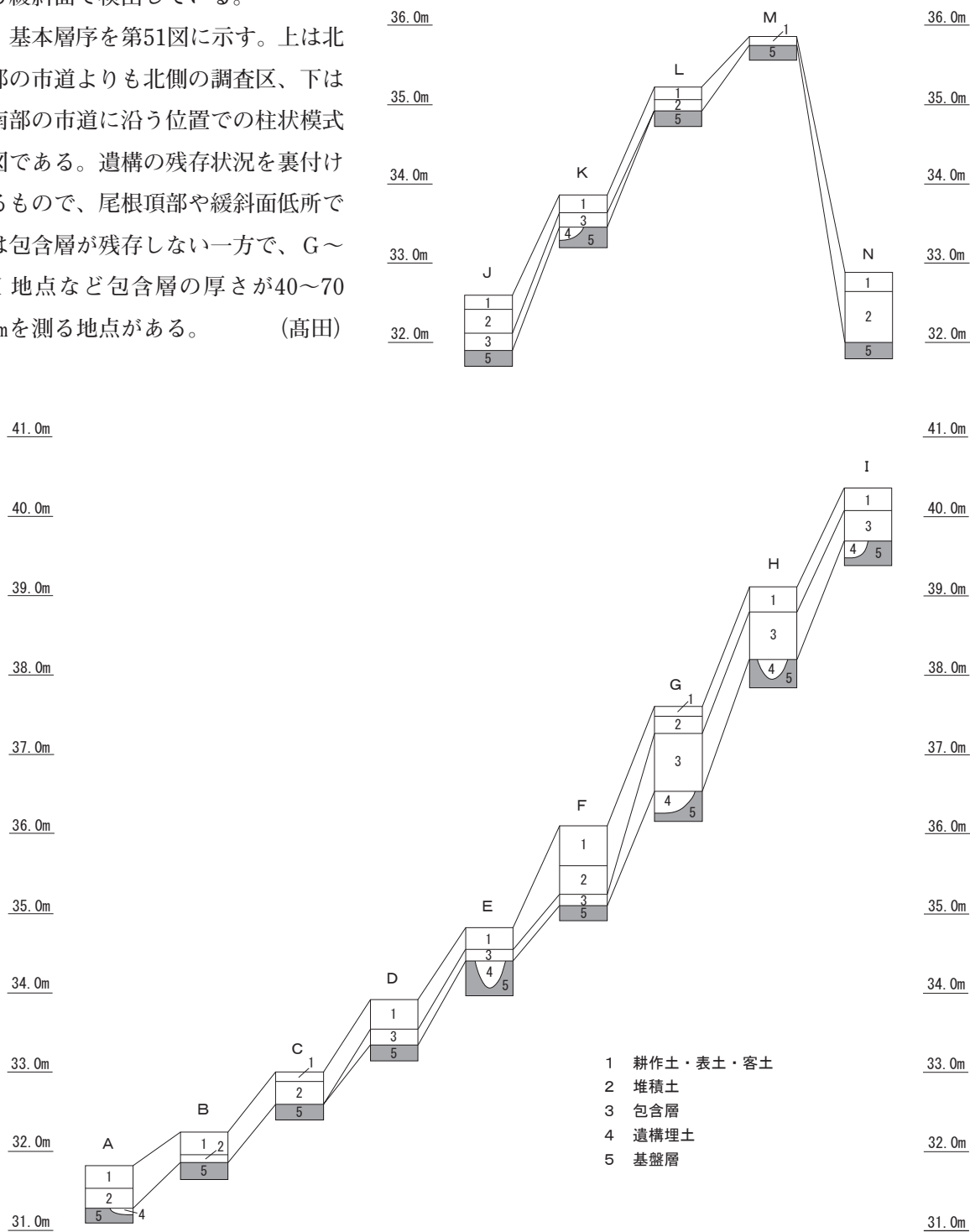
和田谷遺跡は泉山山塊の西端に位置する。調査地は、同山塊から北西に派生する低丘陵の頂部及び西側斜面にあたり、調査地北部を市道大島線が、南部を市道和田谷線がそれぞれ横断する。調査地北東部の低丘陵頂部は、後世の耕作等に伴う土地改変が著しく、遺構は認められなかった。また、その頂部から続く西側急斜面は、本来遺構が築かれなかったと想定されることに加え、後世の宅地造成等が大きく及んでいた。各時代の遺構は、急斜面から緩斜面に変換する地点及びその南西から西側にかけての緩斜面上に広がるが、調査地西端部の緩斜面低所は、本来遺構が希薄であったことに加え、後世の水田耕作に伴う地下げが及んでいるものと考えられる。さらに、南西端の市道南側では、古墳時代から中世までに埋没した谷部を確認しており、南側の土居遺跡が位置する丘陵との間の谷につながると考えられる。



第50図 遺跡周辺地形図 (1/2,000)

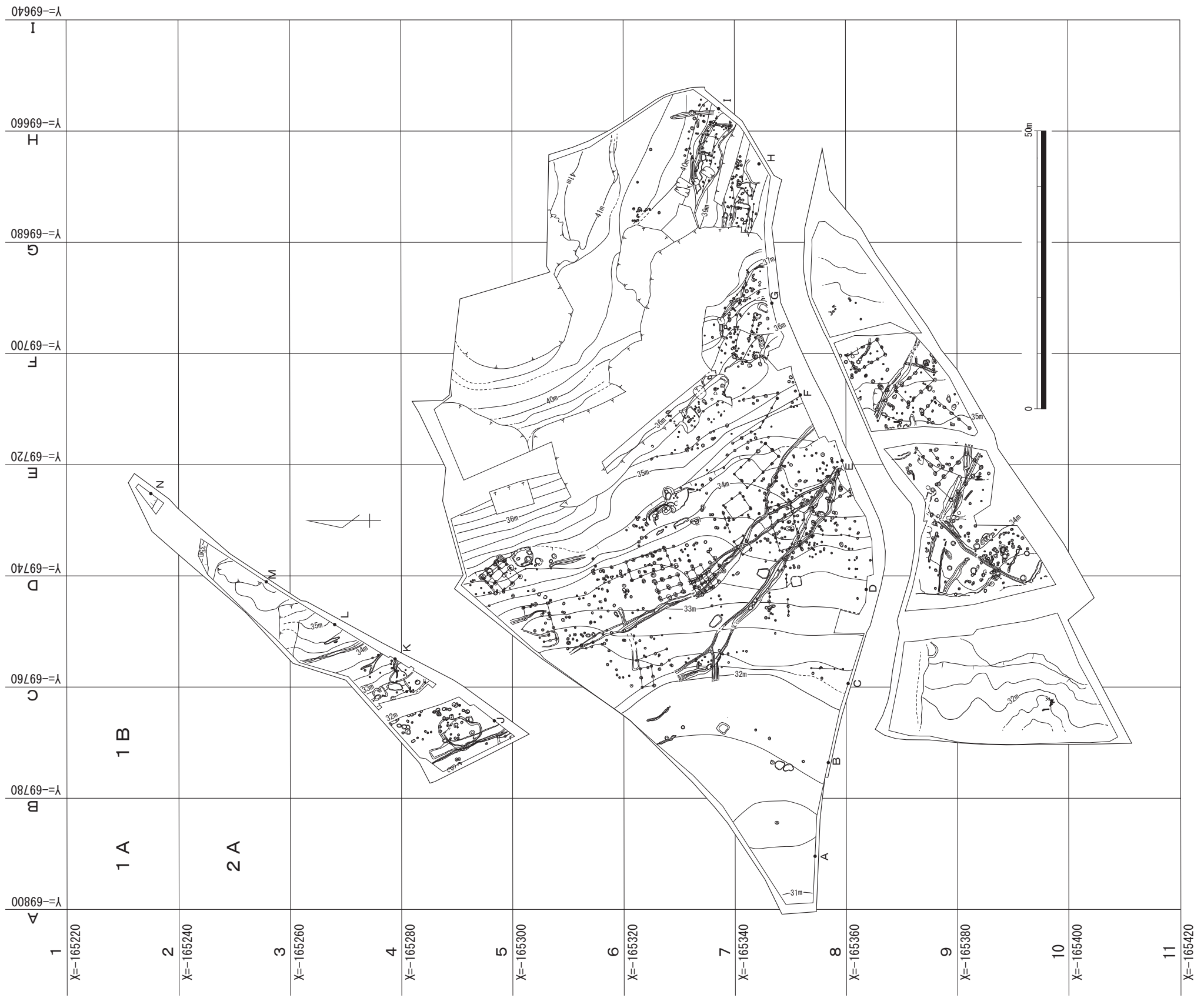
弥生時代中期の遺構は、南東から北西方向の溝群であり、前述の谷の方向に平行する。古墳時代後期は、傾斜変換点付近から緩斜面上位で段状遺構や土坑を検出した。段状遺構には、被熱面を有し、炭・焼土、鉄滓、製塩土器を出土するものがあり、鍛冶や製塩に関連した生産遺構と考えられる。奈良時代は、古墳時代後期とほぼ同一箇所で見穴遺構や鍛冶炉等の生産遺構を検出した。続く平安時代は、掘立柱建物、段状遺構、柱穴列、土坑等を緩斜面全域で検出し、鎌倉時代以降は、掘立柱建物、柱穴列、土坑等を傾斜変換点付近から緩斜面で検出している。

基本層序を第51図に示す。上は北部の市道よりも北側の調査区、下は南部の市道に沿う位置での柱状模式図である。遺構の残存状況を裏付けるもので、尾根頂部や緩斜面低所では包含層が残存しない一方で、G～I地点など包含層の厚さが40～70cmを測る地点がある。(高田)



※柱状図作成位置は、第52図に示す。

第51図 基本土層柱状模式図 (高さ1/80、幅任意)

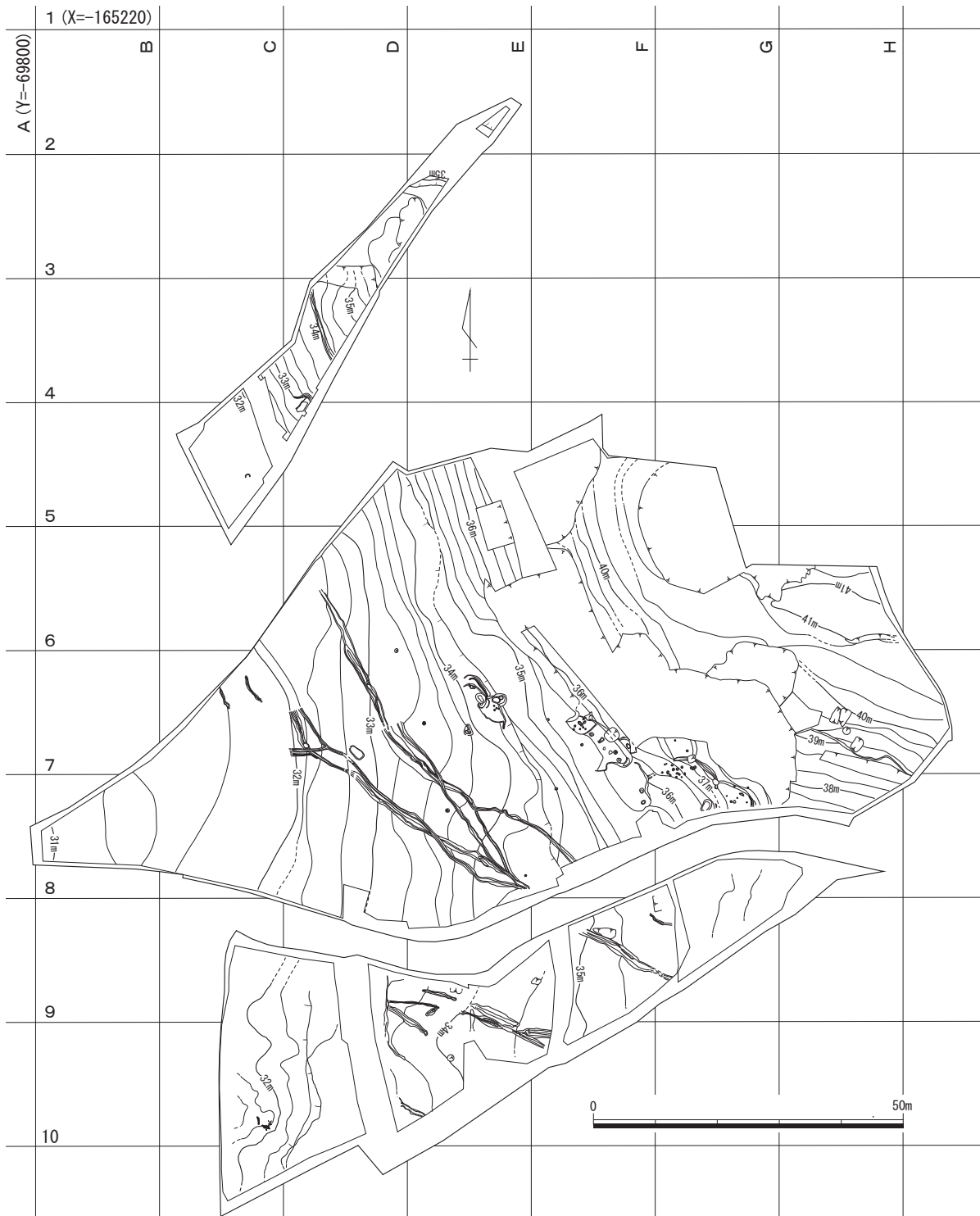


第52図 和谷遺跡全体図 (1/800)

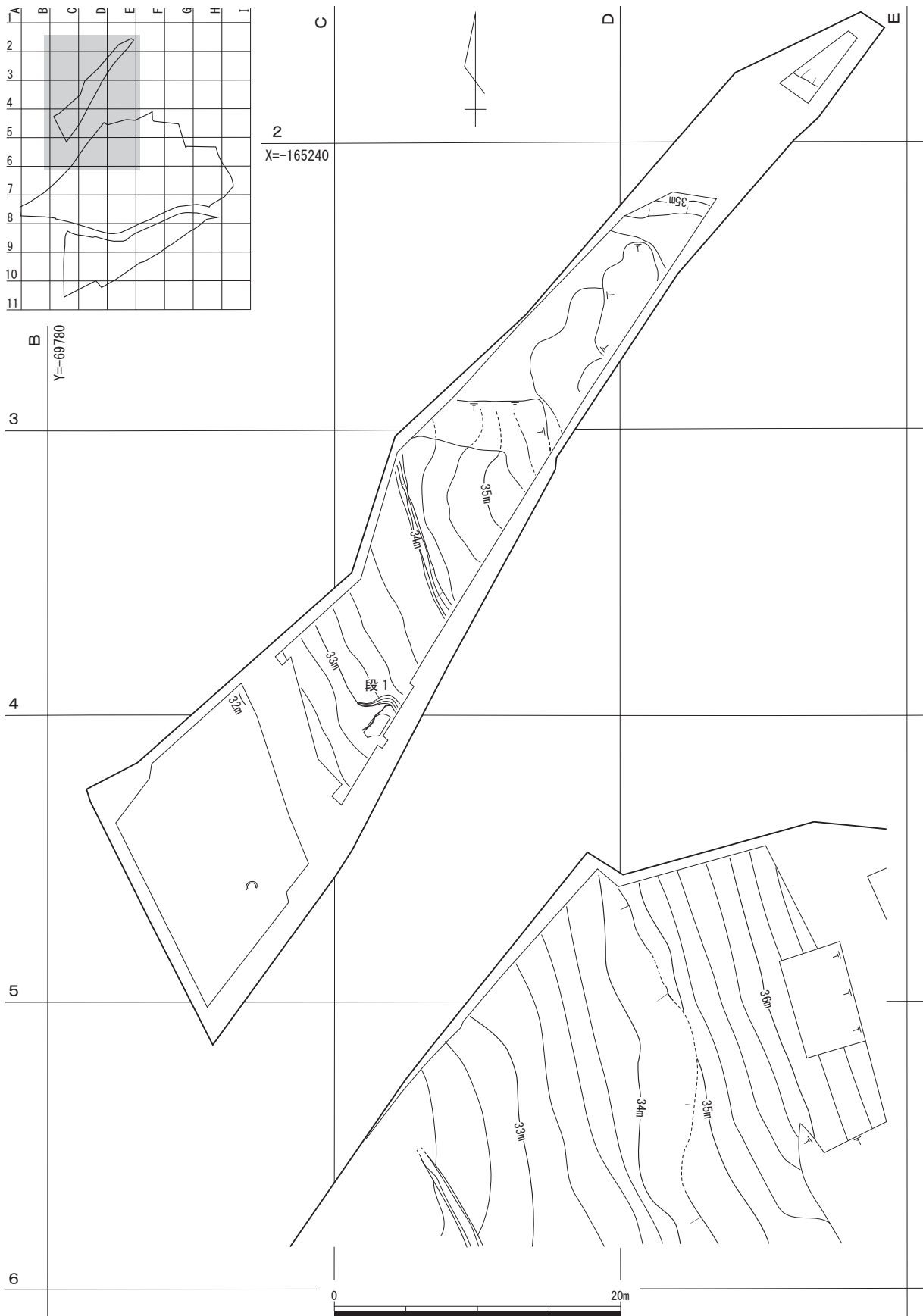
第2節 古墳時代以前の遺構・遺物

1 概要

古墳時代以前の遺構は、おもに弥生時代中期後葉のものと同墳時代後期（6世紀末～7世紀前半）



第53図 古墳時代以前の遺構全体図 (1/1,000)



第54図 古墳時代以前の遺構全体図① (1/400)



第55図 古墳時代以前の遺構全体図② (1/400)



第56図 古墳時代以前の遺構全体図③ (1/400)

の2時期のものが検出されている。

まず、弥生時代中期後葉の遺構であるが、調査区西半部の緩斜面上に位置する溝が中心であり、11条検出されている。このうち、溝の方向や位置から4つ程度のまとまりを抽出することは可能である。溝底は南東から北西方向に向けて傾斜しており、この方向に向けて水が流れていたと推察されるが、この地を含みつつ西へ続く谷の方向に沿うものであり、谷との関係で理解することができる。これらの溝から、完形に近い水差形土器のようなものも出土することから、何らかの祭祀的行為が行われていた可能性がある。溝以外の遺構としては土坑が1基のみにとどまることは、この時期の集落が別の所にあったことをうかがわせるが、包含層出土遺物の多くが調査地南端部で検出された事などを勘案すれば、谷の南に位置する土居地域の低丘陵から東側に続く尾根斜面部までの間に形成されていた可能性が高い。

出土遺物としては、弥生土器のほか、磨製石庖丁・石斧・叩き石、サヌカイト製の打製石鏃・石庖丁・スクレイパーなどが検出されている。弥生土器は壺・甕・高杯・器台などの多器種があることから、先に示したように付近での集落の存在がうかがえる。この中で、完形に近い形で溝3から出土した把手をつける74の水差形土器は県内でも類例が少なく、その出土の西限例でもあることから注目される。土器から判断すると、中期後葉の古いところから最新段階のものが含まれており、近年の暦年代観を参考とすれば、150年ほど存続したことが想定できる。

次に、古墳時代後期の遺構であるが、調査区ほぼ中央の急斜面から緩斜面への変換点（これは丘陵部から谷部への境目に相当する）に形成された段状遺構8基が主体である。その他は土坑4基を数えるのみであるが、炭が充填された大型の土坑2と段状遺構2・3の間は、等高線が乱れており、この場所に形成された古代集落造成時に大きく削平を受けた可能性が考えられる。このことは、調査区南西端の谷部で多く検出されたこの時期の遺物からもうかがい知れ、谷部と段状遺構群との間に、元々は古墳時代後期の集落が広がっていたことを類推することができる。

出土遺物には土師器、須恵器のほか、製塩土器、石錘などが検出されている。なお、段状遺構3からは鉄鉱石由来の製錬滓が、谷からは農具と考えられる木製品がそれぞれ出土しており注目される。遺構に伴わない遺物として鉄鏃や耳環が出土しているが、これについては墳墓由来の遺物の可能性が高い。この他には、炭が広範囲に広がった大型土坑が検出されているが、性格は不明である。出土遺物の中では、製塩土器が目立つ存在であるが、近くに海があった可能性は低いと、集落外から持ち込まれた可能性が高い。このことに関連して、集落がこの位置に営まれた背景の一つとしては、当集



写真7 溝3調査状況（南東から）

落の西側に南北に走る交通路の存在（現県道）が推定されることから（南は峠を越えて瀬戸内海沿岸の寄島地域につながっている）、この交通路を見下ろす要衝の位置を選んだ可能性も考えられる。

集落の存続期間は、出土した須恵器から判断すると、TK209型式～TK217型式の幅でほぼ収まるものと考えられ、6世紀末～7世紀前半代の50年ほどと推測される。

（河合）

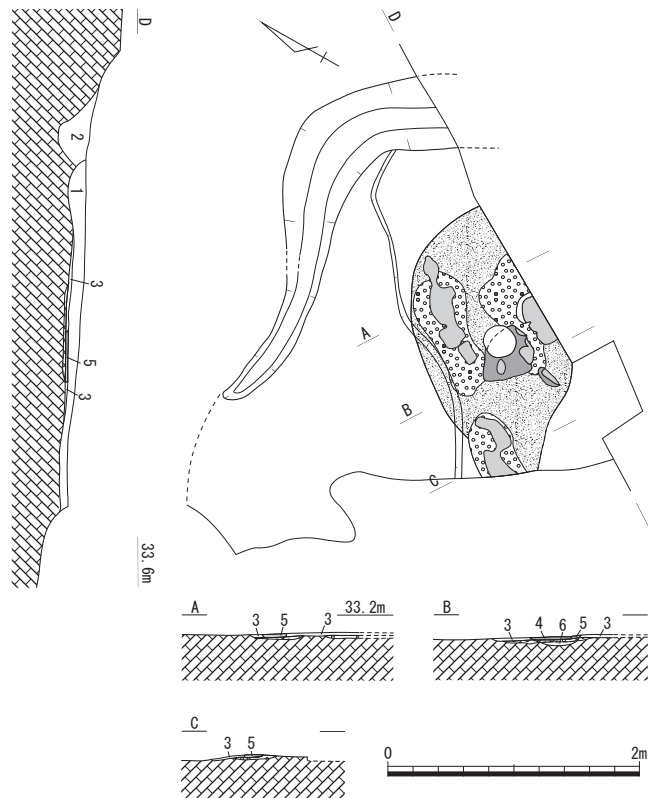
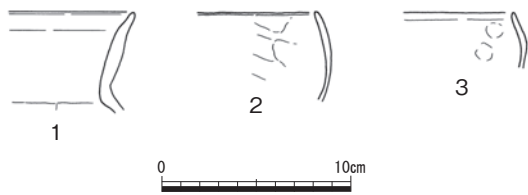
2 段状遺構

段状遺構1 (第54・57図、図版15)

3・4 Cに位置する。調査地北西部、南西向き緩斜面で検出した段状遺構である。規模は検出長で長軸327cm、短軸320cmを測る。大部分が竪穴遺構2と重複しており、床面付近まで削平されている箇所もある。また、東側の大半は調査区外に延びており、全容については不明である。

上方には「く」字状に屈曲した溝が巡り、溝の下方に残存幅260cm程度の平坦面が存在していた。この平坦面の床面付近の覆土には炭及び焼土片が多く混じっており、床面の一部は厚さ約2～3cmの粘土が被熱により橙色に硬化していた。また、黒褐色に還元状態まで強く被熱している部分も認められた。遺構内から鉄滓等は出土していないが、これらの被熱硬化面については、鍛冶等の高温作業の痕跡と考えられる。

出土遺物として土師器甕の口縁部片1と製塩土器2・3がある。いずれも小片で上方溝の埋土中から出土している。製塩土器2・3は無文で薄手のもので、口縁部が内湾している。段状遺構の時期は、出土した土器や遺構の状況から7世紀代と考えられる。(石田)

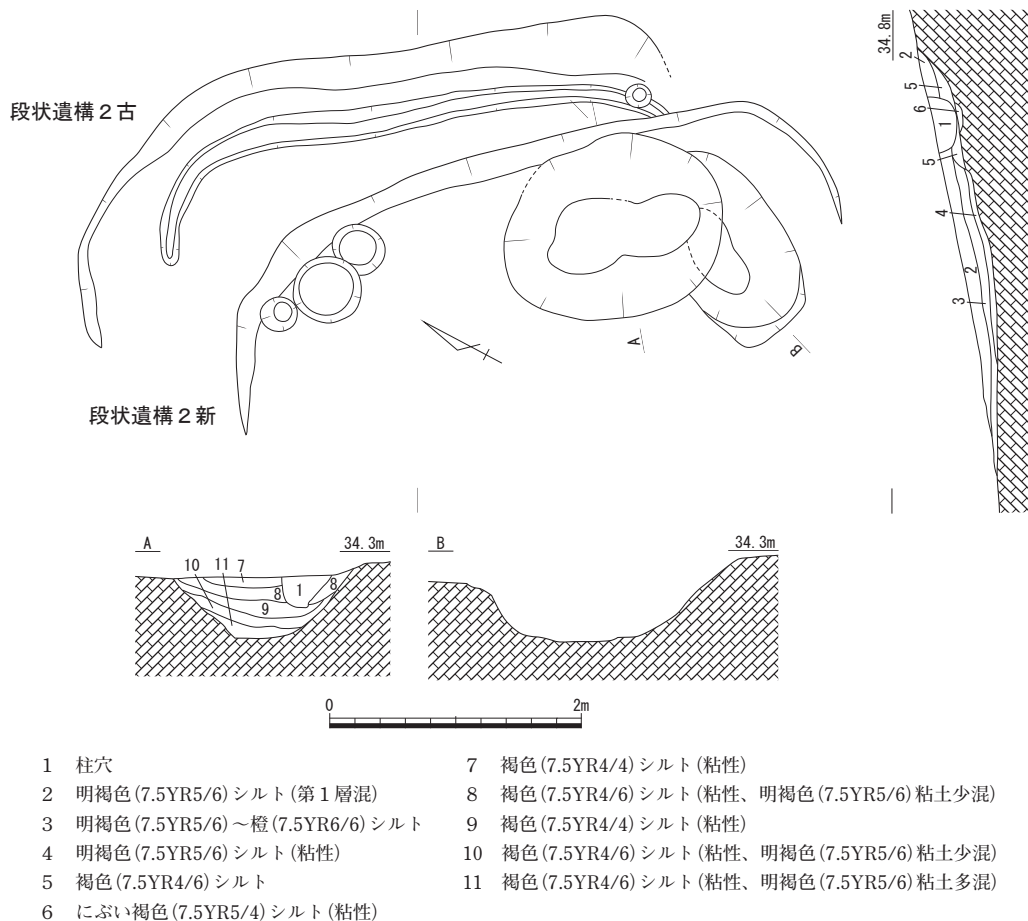


- 1 にぶい黄褐色(10YR5/3)土
- 2 灰黄褐色(10YR4/2)土(炭・焼土混)
- 3 黒褐色(10YR3/1)土(炭・焼土混)
- 4 黒褐色(5YR3/1)粘土(被熱硬化)
- 5 橙色(5YR6/6)粘土(被熱硬化)
- 6 灰黄褐色(10YR5/2)土(焼土混)

第57図 段状遺構1 (1/60)・出土遺物 (1/4)

段状遺構2 (第55・58図、図版15)

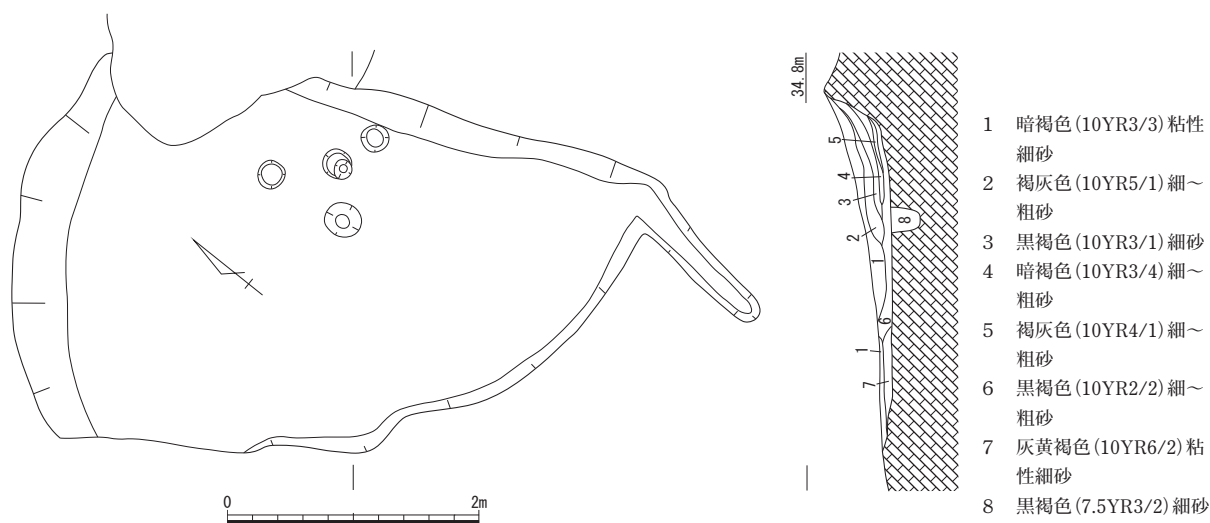
6 Dのほぼ中央で検出された遺構で、丘陵裾部から谷部への地形の変換点を利用して形成されている。平面は下半が後の土地造成等で失われているが、おそらく本来は隅丸方形を呈していたと考えられる。一度の作り替えがあったと推測されるが、その両者の規模は長軸長490～495cmと、ほぼ同規模である。柱穴や土坑はいくらか検出できたが、位置に偏りがあり、この遺構に付属するかは不明である。遺物は検出されていないが、埋土等の特徴と、段状遺構3を切っていることから、この遺構の時期は7世紀前半と考えられる。(河合)



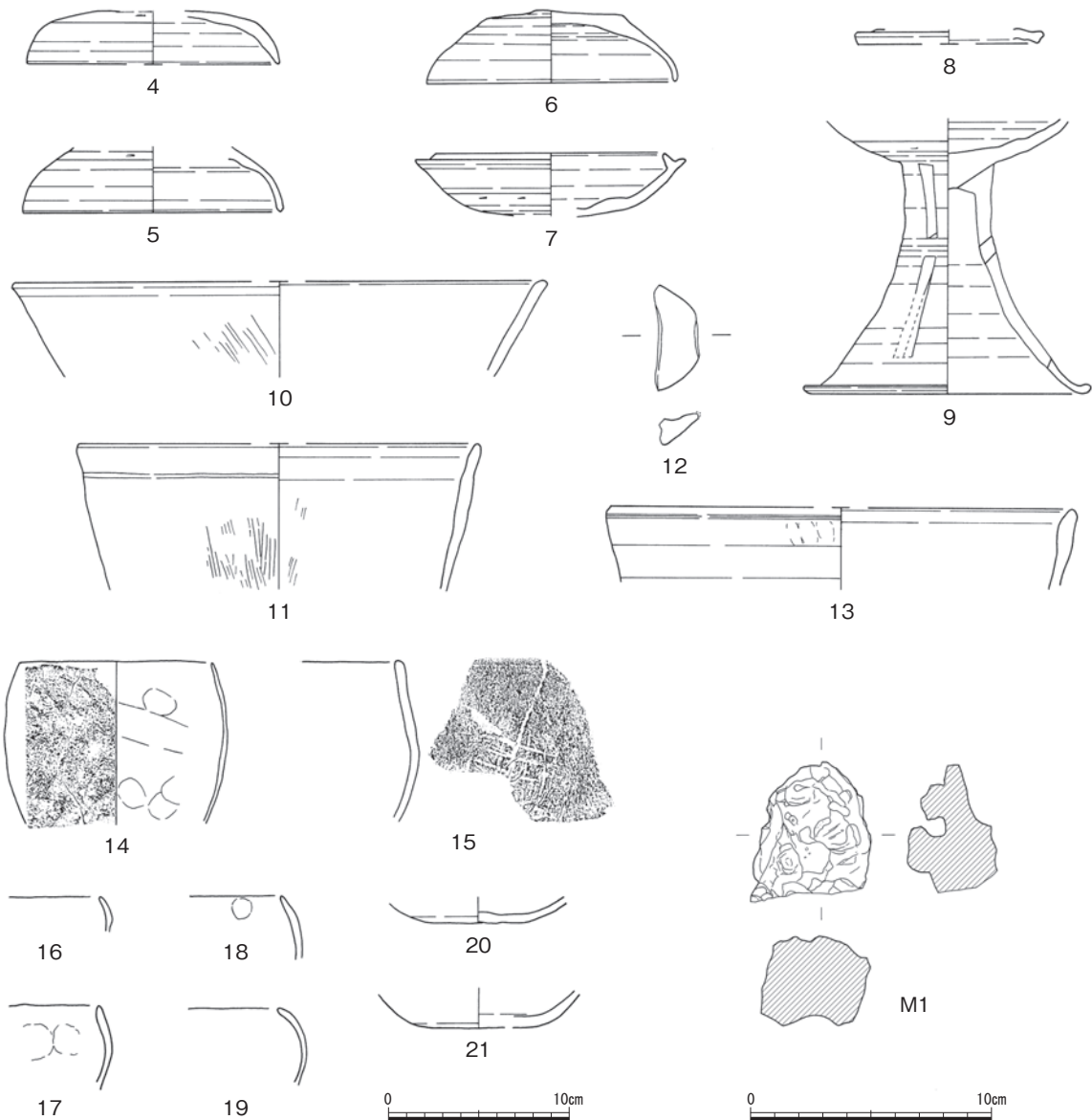
第58図 段状遺構 2 (1/60)

段状遺構 3 (第55・59・60図、図版15・22・30)

段状遺構 2 の南東に隣接した遺構で、段状遺構 2 と土坑 4 に一部切られている。この遺構も丘陵裾部から谷部への地形の変換点を利用して形成されている。平面は下半が後の土地造成等で失われているが、おそらく本来は隅丸方形を呈していたと考えられる。現存の規模は長軸長595cm、短軸長290cm



第59図 段状遺構 3 (1/60)

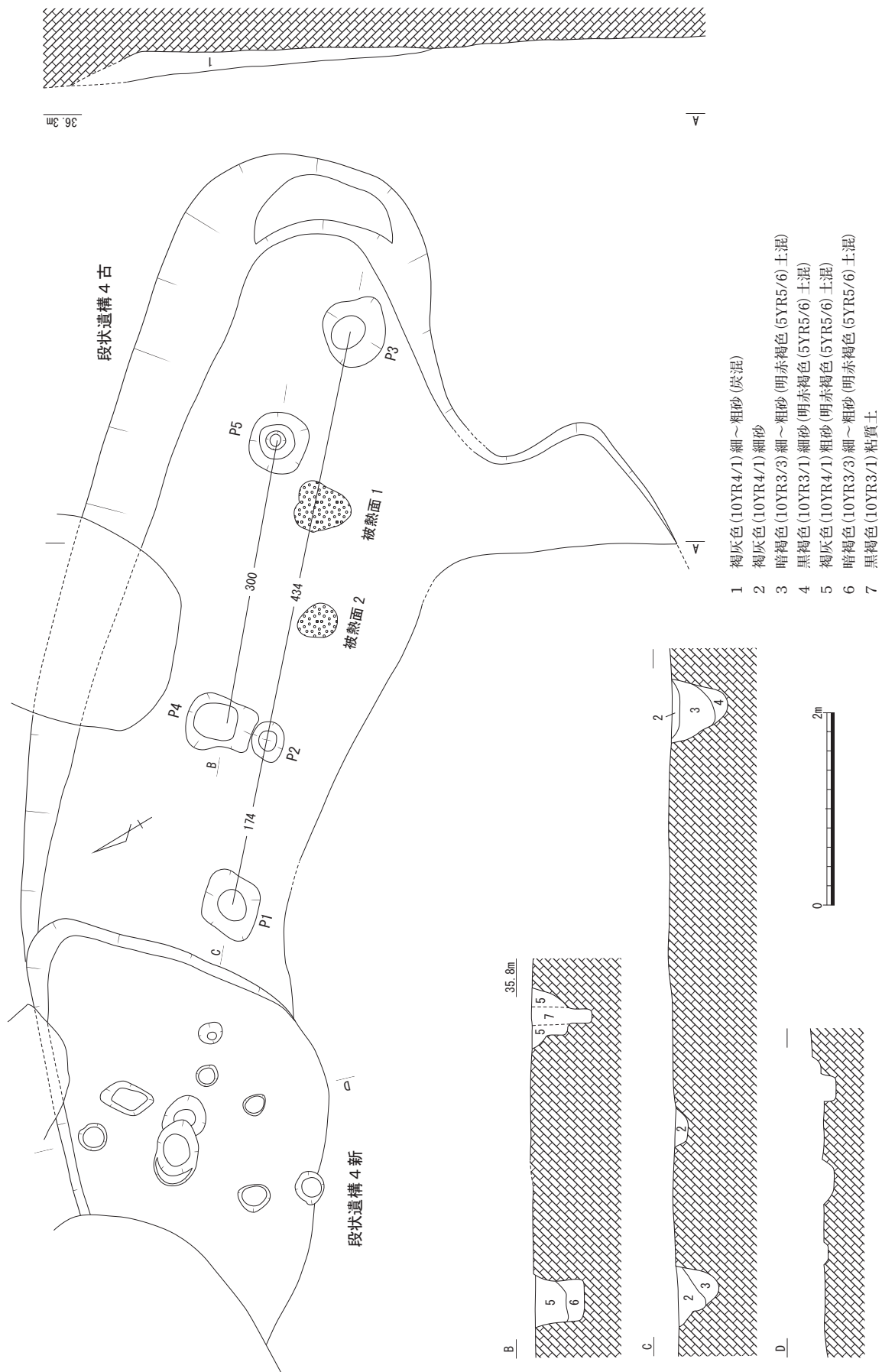


第60図 段状遺構3出土遺物 (1/4・1/3)

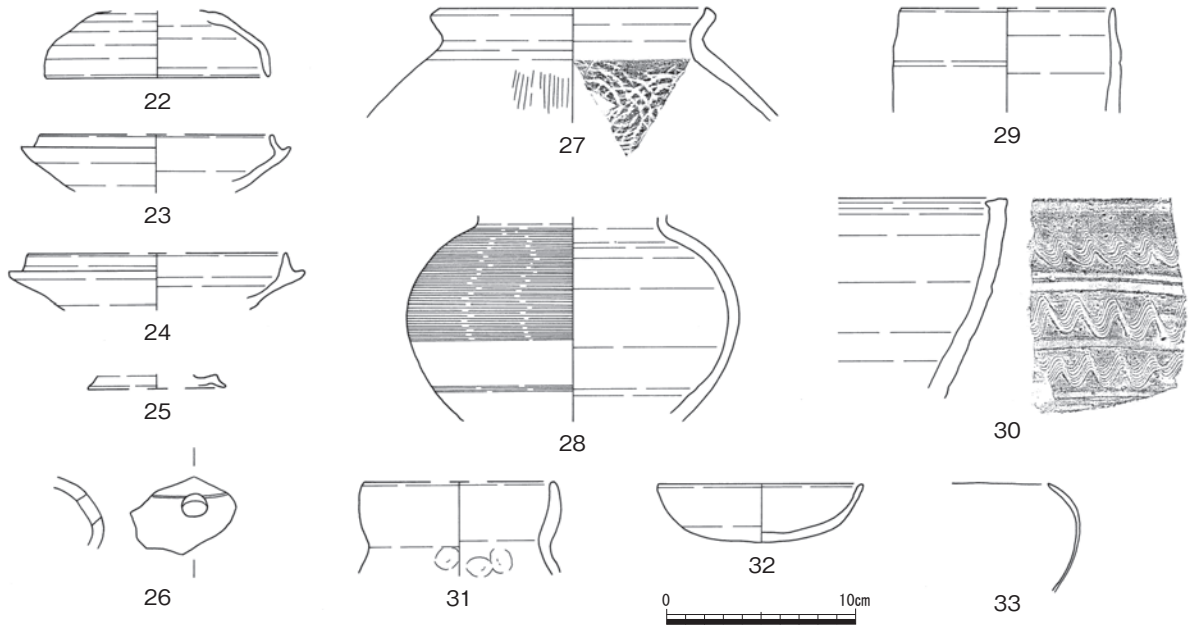
である。柱穴はいくつか検出できたが、位置に偏りがあり、この遺構に付属するかどうかは不明である。遺物は多く検出されており、須恵器杯蓋4～6、杯身7、高杯8・9、土師器甑10～13の他に、製塩土器14～21が8点とまとまっていることが注目される。なお、この遺構から検出された鉄滓M1は科学的分析を実施しており、鉄鉱石を製錬した炉内滓との結果を得ている（第6章第6節を参照）。鉄生産との関わりを考えるうえで、重要な遺物である。この遺構の時期は出土した須恵器の特徴から、6世紀末～7世紀初頭と考えられる。（河合）

段状遺構4（第55・61・62図、図版16・22・29）

段状遺構3の南東約20mの地点に位置し、切り合い関係から新古に分けることができる。段状遺構4古は8×5mほどの平坦面が残っており、その中から5つのピットと、2か所の被熱面を検出した。段状遺構4新は、段状遺構4古の北西端を切っており、3×3mほどの平坦面と、9つのピットを検出した。出土遺物について、22～30は須恵器である。22は杯蓋、23・24は杯身、25は高杯の脚の破片、26は甗、27・30は甗、28は壺、29は椀である。31・32は土師器で、31は甗、32は鉢である。33



第61図 段状遺構 4 (1/60)

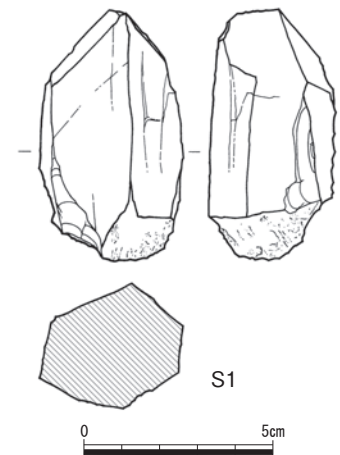


は口縁部が内湾する製塩土器の破片で、器壁の厚みが1～3mm程度と非常に薄いつくりとなっている。倉浦式の製塩土器に類似するが、尖底は出土していない。

S1は6.6×3.7cmを測る煙水晶の原石である。時期は出土遺物から、6世紀末から7世紀前半と考えられる。(藤井)

段状遺構5 (第55・63図)

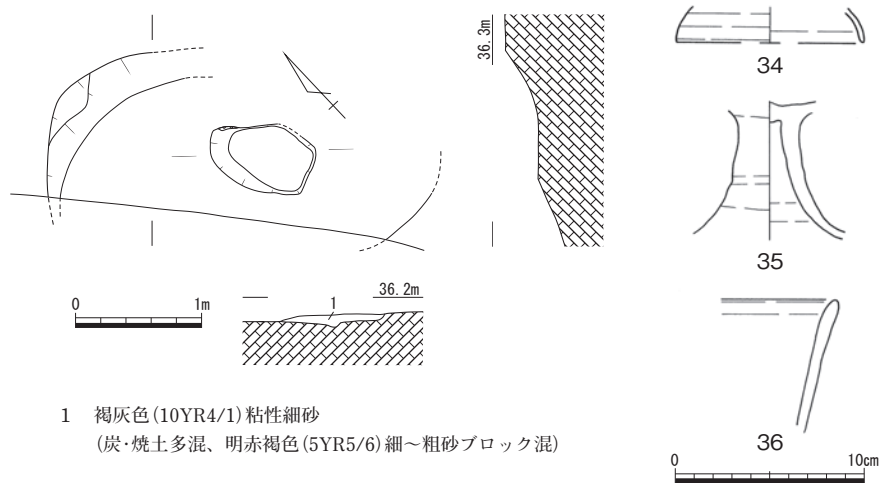
段状遺構4の東側に接して位置する。3×1mほどの平坦面と、その中央で埋土に炭や焼土を多く含む土坑を検出した。出土遺物は、34が須恵器の杯蓋、35が須恵器の高杯の脚部、36が甑の口縁部の破片である。遺構の時期は出土遺物から、6世紀末から7世紀前半と考えられる。(藤井)



第62図 段状遺構4出土遺物 (1/4・1/2)

段状遺構6 (第55・64図)

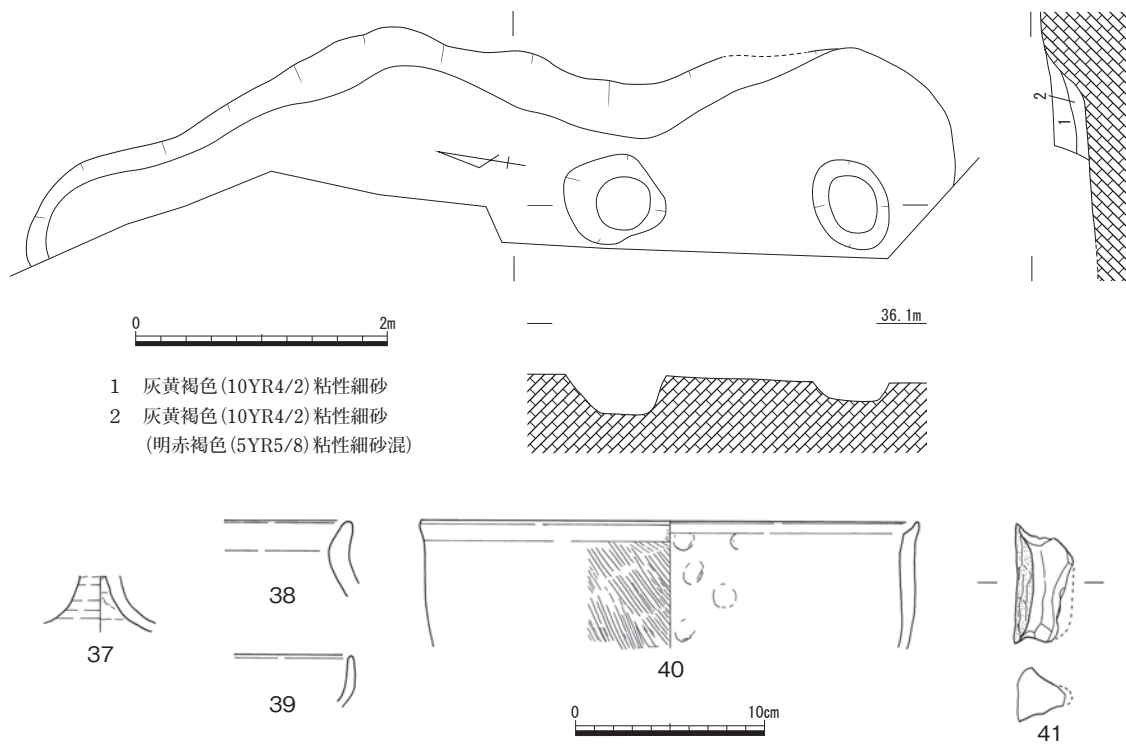
6E南東から7E北東で検出し、段状遺構5の南約3mに位置する。平坦面の大半と南側の掘り方は後世の削平によって消失している。北側の掘り方も不明瞭だが、北西に近接する段状遺構4古に先行して造成された可能性が高い。規模は、現



第63図 段状遺構5 (1/60)・出土遺物 (1/4)

状で長軸長715cm、短軸長165cmを測る。平坦面からは径70~80cm前後の柱穴を2個検出している。

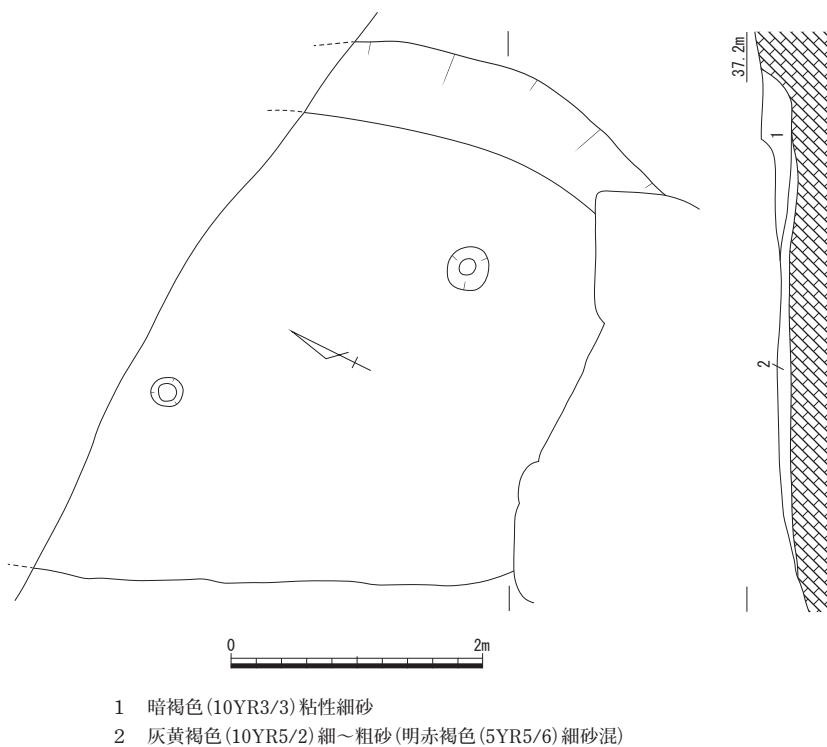
出土遺物は、須恵器の高杯37、土師器の甕38、高杯39、甑40、甑の把手41がある。遺構の時期は、出土遺物から6世紀末~7世紀前半と考えられる。(森本)



第64図 段状遺構6 (1/60)・出土遺物 (1/4)

段状遺構7 (第55・65・66
図)

急斜面から緩斜面に移行する丘陵裾、6Fの南西隅に位置する段状遺構である。段状遺構4・6の約10m東の斜面上方にあり、床面の比高は1.2mを測る。遺構の北側は宅地造成で、南端は現代の土坑や古墳時代後期の溝12によって失われているため全体の平面形態は不明である。検出面の標高は37.0m、床面の標高は36.8mで、山側は浅く窪むものの明確な溝は認められない。断面では掘り方肩



第65図 段状遺構7 (1/60)

口に緩やかな段が認められるが、異なる遺構の重なり合いとは判断できなかった。床面で径26～35cmの柱穴2個を確認しているが、本遺構よりも新しい時期の柱穴の可能性もある。

遺構の流入土出土遺物として須恵器片42～44や土師器片45を図示した。42は杯身の口縁部、43・44は高杯、45は甕である。

遺構の重複関係や出土遺物などから、遺構の時期は7世紀後半と考えられる。(柴田)

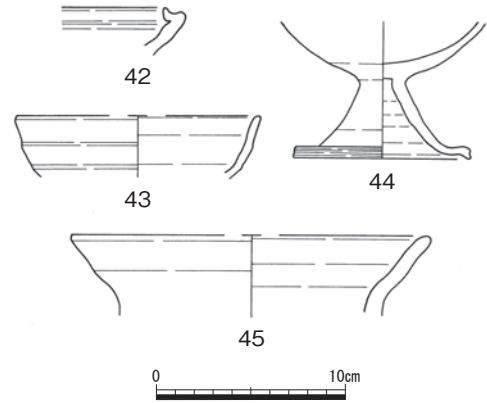
段状遺構8 (第55・67・68図、図版16)

急斜面から緩斜面に移行する丘陵裾、7Fの北東隅に位置する段状遺構である。段状遺構7の約6m南東にあり、それとほぼ同じ高さに造られているが床面は12cm程度高い。遺構の北西側は現代の土坑や古墳時代後期の溝12によって失われている。一方、南東側は調査区外に延びているが、平面形はおおむね隅丸方形になると考えられる。検出面の標高は37.25m、床面の標高は36.96mで、南東の山側には幅23cm、深さ20cmの溝が認められる。床面では円形の柱穴や不整形の窪み、被熱面を確認できた。径17～20cm、深さ10～32cmの3個の柱穴は等間隔に位置するがまっすぐな並びにはならない。径36cmの柱穴に隣接して被熱面が認められる。平面形はやや不整形だがおおむね方形を呈するように見える。1辺は43cm、被熱による赤色化は厚さ5cmを測る。

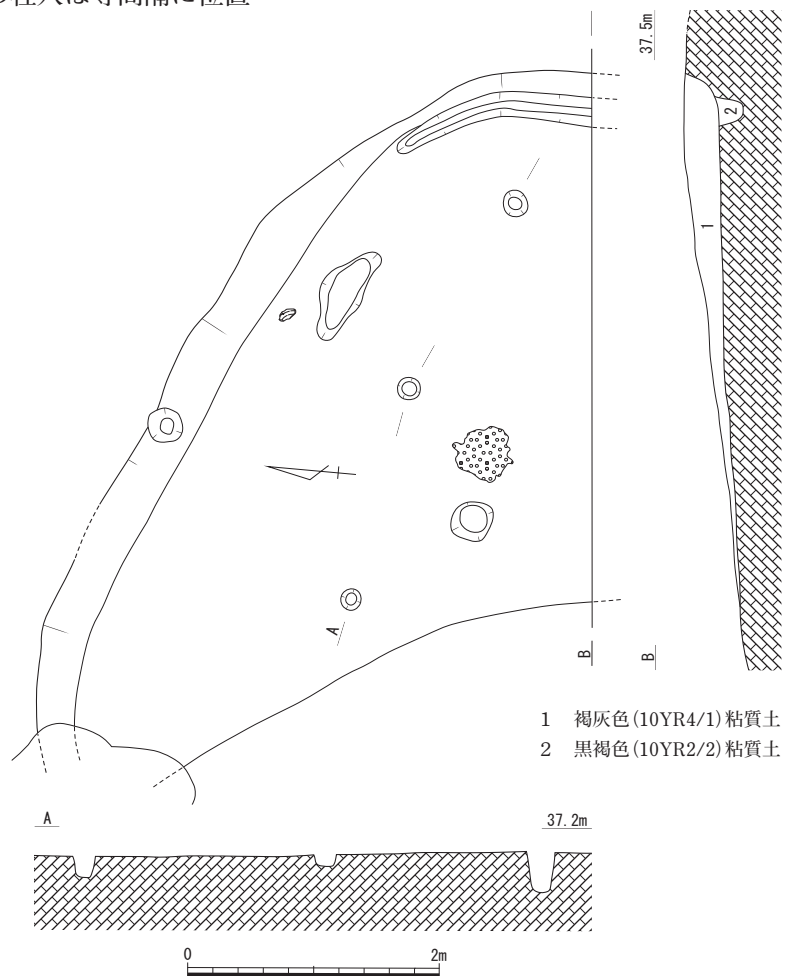
遺構の流入土出土遺物として須恵器片46、土師器片47～49や製塩土器片50を図示した。46は杯蓋の口縁部、47は甕の口縁部でまっすぐ延びて内面端部は窪む。48は高杯で外面下部に緩い稜が認められる。49は粗製の椀で口縁部は内湾し端部は丸く収める。50は尖底の製塩土器の底部である。

溝12と重複関係があるが、出土遺物などから、遺構の時期は7世紀後半と考えられる。

(柴田)

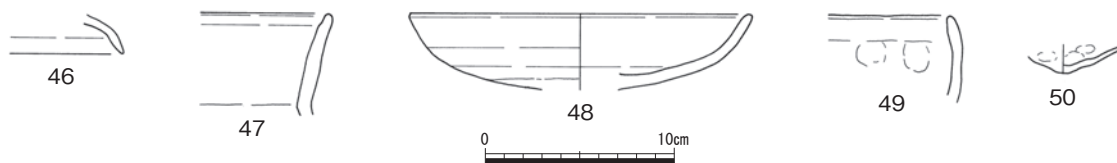


第66図 段状遺構7出土遺物 (1/4)



- 1 褐灰色(10YR4/1)粘質土
- 2 黒褐色(10YR2/2)粘質土

第67図 段状遺構8 (1/60)



第68図 段状遺構8出土遺物 (1/4)

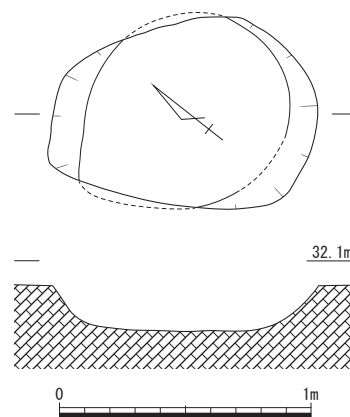
3 土坑

土坑1 (第55・69図)

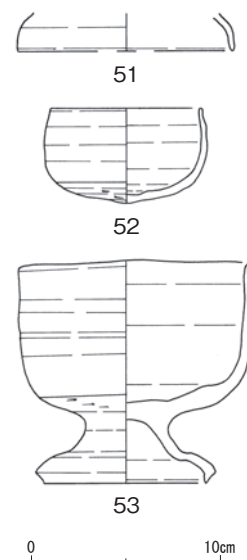
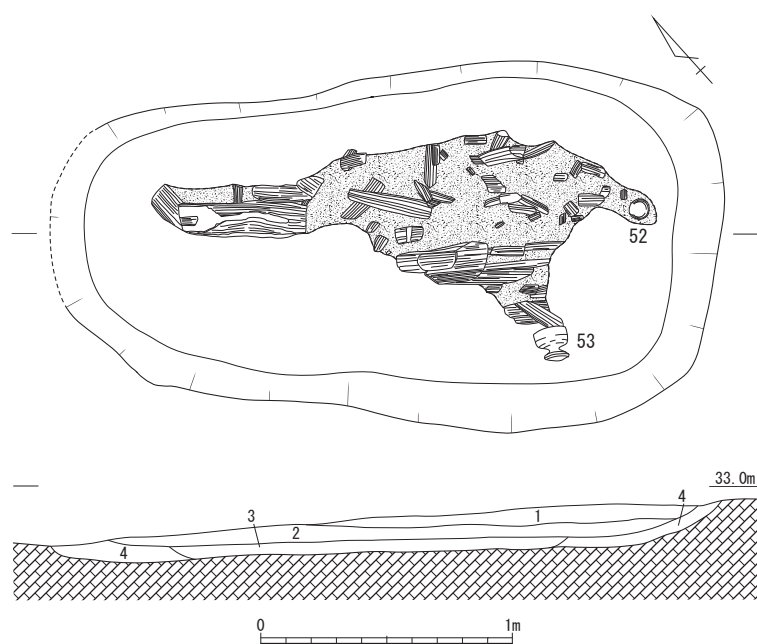
6Cの南西隅で検出された土坑で、長軸長105cm、短軸長75cmであり、深さは18cmを測る。浅い土坑であるが、本来はもう少し深さがあったと推測される。遺物は検出できていないが、弥生時代中期後葉の溝1を切って形成されていることから、それより新しいが弥生時代の範疇に収まると考えておきたい。(河合)

土坑2 (第55・70図、図版18・22)

土坑1の東約7mで検出され、平面は隅丸長方形を呈する。長軸長266cm、短軸長148cm、深さは16cmを測る。埋土には面的に炭を検出し、層状をなしていた。出土遺物はこの炭層に乗るように検出され、うち52・53の須恵器はほぼ完形品である。遺構の形態・規模や遺物の出土状況等から墓である可能性もあるが、詳細な性格は不明で、後世に大きく削平されたものと考えられる。遺構の時期は6世紀末と考える。なお、炭については放射性炭素年代測定を行っており(第6章第4節を参照)、 2σ 暦年代範囲で570-645cal AD (95.4%)の値が出ている。(河合)



第69図 土坑1 (1/30)



- 1 灰褐色(7.5YR4/2)シルト(炭混)
- 2 黒褐色(7.5YR3/2)シルト(炭層)
- 3 にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト(炭混)
- 4 褐色(10YR4/4)シルト

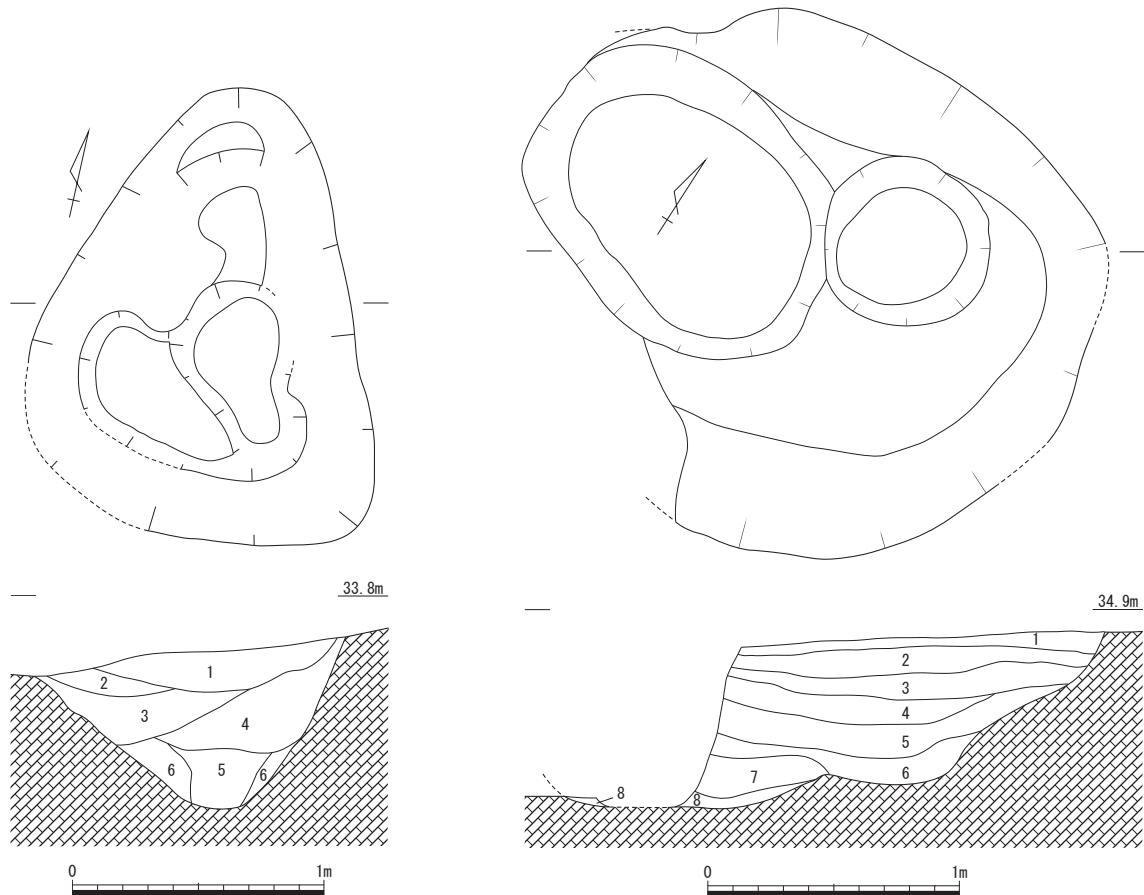
第70図 土坑2 (1/30)・出土遺物 (1/4)

土坑3 (第55・71図)

段状遺構3の南西約3mに位置する土坑で、平面は不整形である。長軸長181cm、短軸長131cmであり、深さは62cmを測る。大きめの遺構であるが、遺物をほとんど含んでおらず、時期・性格は不明である。埋土の状況から段状遺構2または3と近い時期と考えておきたい。(河合)

土坑4 (第55・72・73図、図版22)

段状遺構3の丘陵側(背後)に形成された土坑であり、これを一部切っている。長軸長・短軸長ともに約2m、最大深度63cmであるが、断面で観察すると、2つの土坑が切り合いをもって形成されたことがうかがえる。最大の特徴は埋土に炭を多く含む層が認められることであり、段状遺構廃絶後に火を用いる何らかの施設が設けられていた可能性がある。遺物は須恵器杯蓋54、土師器高杯55、製塩土器56・57があり、6世紀末頃と考えられる。(河合)

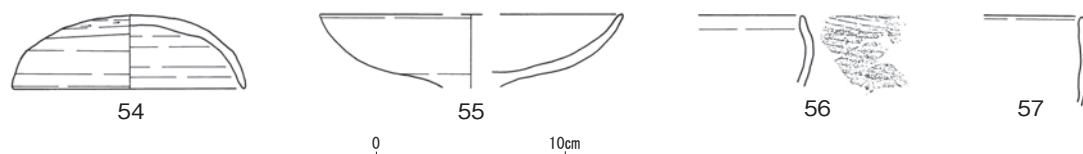


- 1 褐色(7.5YR4/3)シルト
- 2 にぶい褐色(7.5YR5/3)シルト
- 3 にぶい褐色(7.5YR5/4)シルト
- 4 にぶい褐色(7.5YR5/4)シルト
(明黄褐色(10YR6/6)粘土ブロック混)
- 5 にぶい褐色(7.5YR5/3)シルト
(明黄褐色(10YR6/6)粘土ブロック混)
- 6 明黄褐色(10YR6/6)粘土(地山質土)

第71図 土坑3 (1/30)

- 1 にぶい褐色(7.5YR5/4)シルト
- 2 にぶい褐色(7.5YR5/4)シルト(橙色(7.5Y6/6)粘土少混)
- 3 褐色(7.5YR4/4)シルト
- 4 褐色(7.5YR4/4)シルト～粘土
- 5 褐色(7.5YR4/4)シルト～粘土(炭混)
- 6 にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト～粘土(炭混)
- 7 暗褐色(7.5YR3/3)シルト～粘土(炭多混)
- 8 暗褐色(7.5YR3/3)シルト～粘土

第72図 土坑4 (1/30)

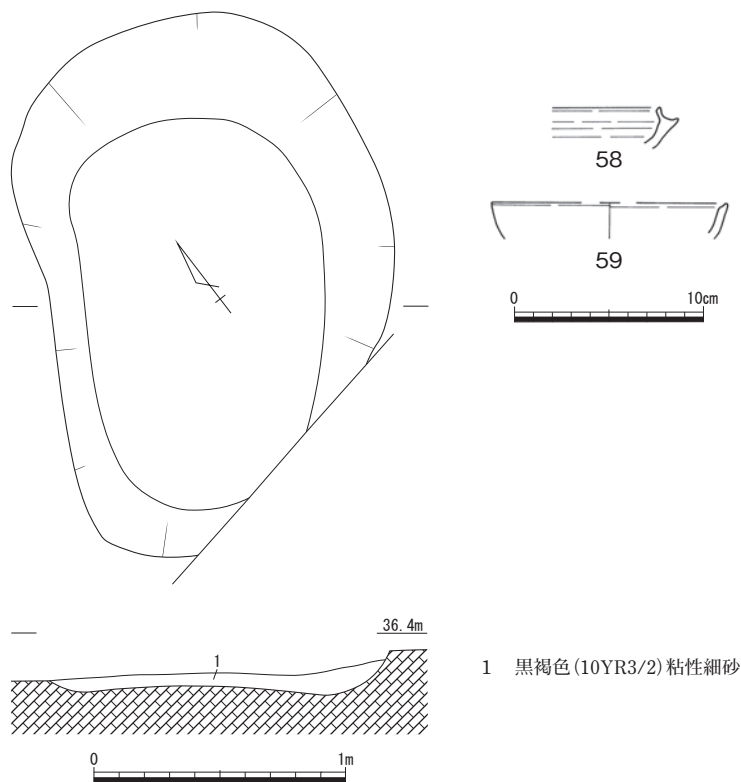


第73図 土坑4出土遺物 (1/4)

土坑5 (第55・74図)

7 F 北側中央付近で検出し、段状遺構8の西約2 mに位置する。南側の掘り方の一部は、土層を観察するための側溝によって切られているが、ほぼ全体を検出している。規模は長軸215cm、短軸135cmで、平面形は不整楕円形を呈する。確認面からの深さは10cmで、断面形は底が平坦な皿形である。位置関係から、段状遺構4～8に関する遺構と考えられる。

出土遺物は、須恵器の杯身58と土師器の高杯59がある。58は口縁部片で、立ち上がりは0.8cm程度と低い。遺構の時期は、出土遺物から6世紀末～7世紀初頭と考えられる。(森本)



第74図 土坑5 (1/30)・出土遺物 (1/4)

4 溝

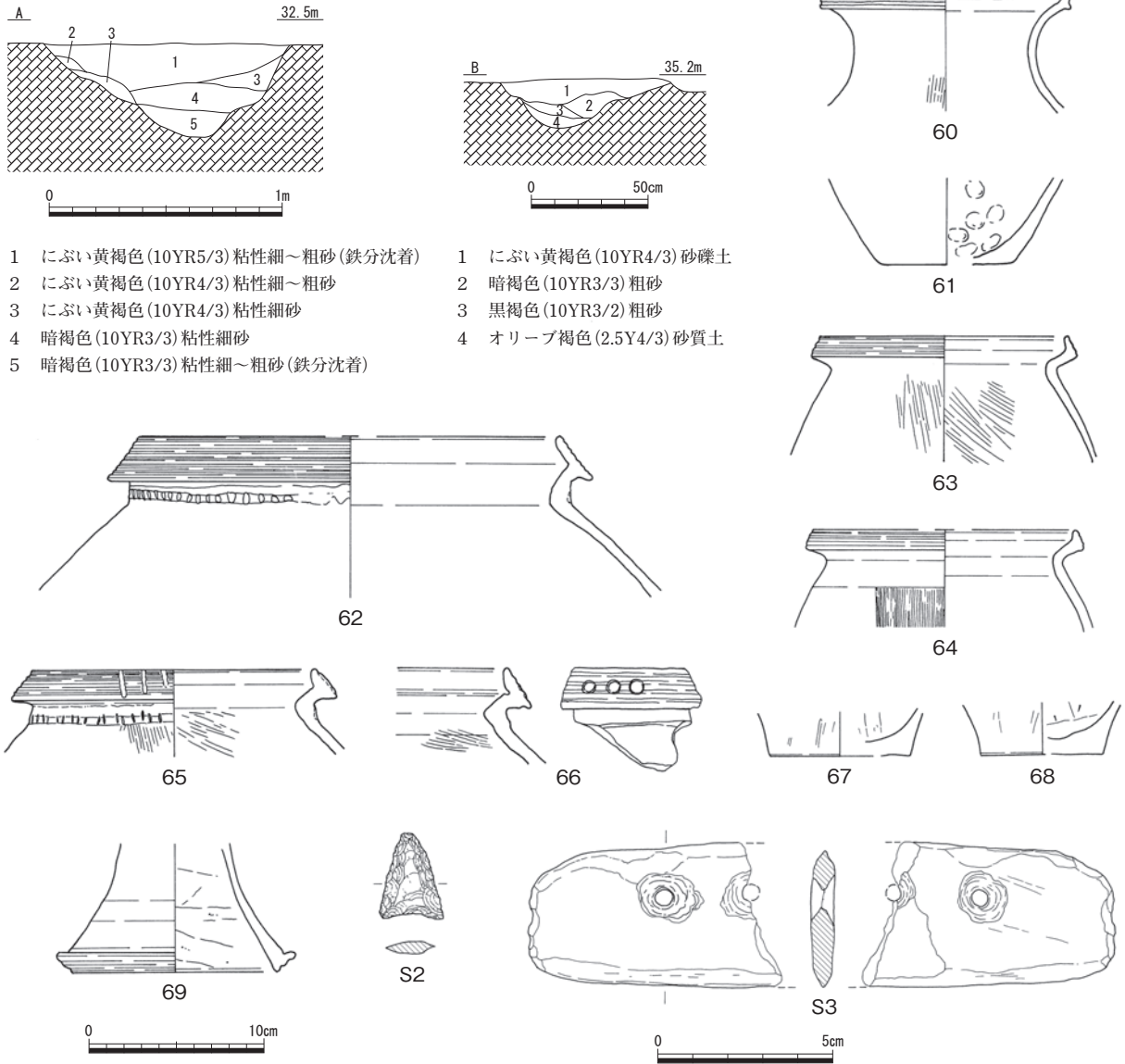
溝1 (第55・56・75図、図版11・29)

6 Cから8 Fにかけて約75 m分検出された溝である。底面の標高から判断すると、南東方向から北西方向に水が流れていたものと判断ができるが、この方向はこの地に深く入っている谷地形に沿っていることから、それとの関係で理解することができる。上端幅は73～106cm、深さは21～40cmであり、中央が一段凹んだ断面形を呈する。この溝を含む弥生時代の溝群は、弥生時代の遺物を比較的多く含むことから、弥生時代に属するものであることは確かであるが、その機能については不明である。

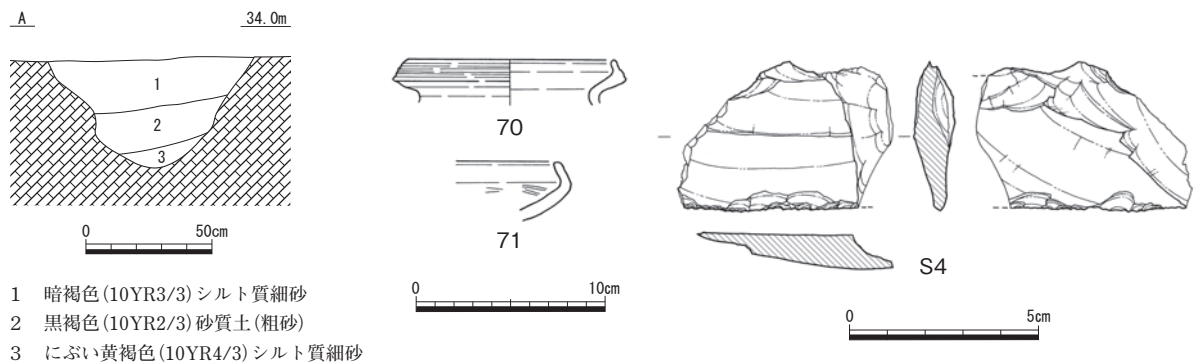
出土遺物には、弥生土器壺60・61、甕62～68、高杯69、サヌカイト製石鏟S 2、磨製石庖丁S 3などがある。出土土器には若干の時期差が認められるが、おおむね中期後葉～末の範疇に収まるものである。(河合)

溝2 (第55・76図、図版11・29)

6 Cから7 Dにかけて溝1と近似した場所でほぼ同じ方向に検出された溝である。部分的に溝1を切っているが、出土遺物からは明確に時期差を指摘できない。溝1同様、南東方向から北西方向に水が流れていたものと判断できる。中間地点での上端幅は82cm、深さは43cmであり、中央が一段凹んだ



第75図 溝1 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/2)



第76図 溝2 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/2)

断面形を呈する。出土遺物は溝1と比べて少なめであり、弥生土器甕70、高杯71、サヌカイト製スクレイパーS4などがある。出土土器は中期後葉の範疇に収まるものであるが、溝1との重複関係を考えると、これより新しいものと考えられる。(河合)

溝3 (第55・56・77図、図版11・22・28・29、写真7)

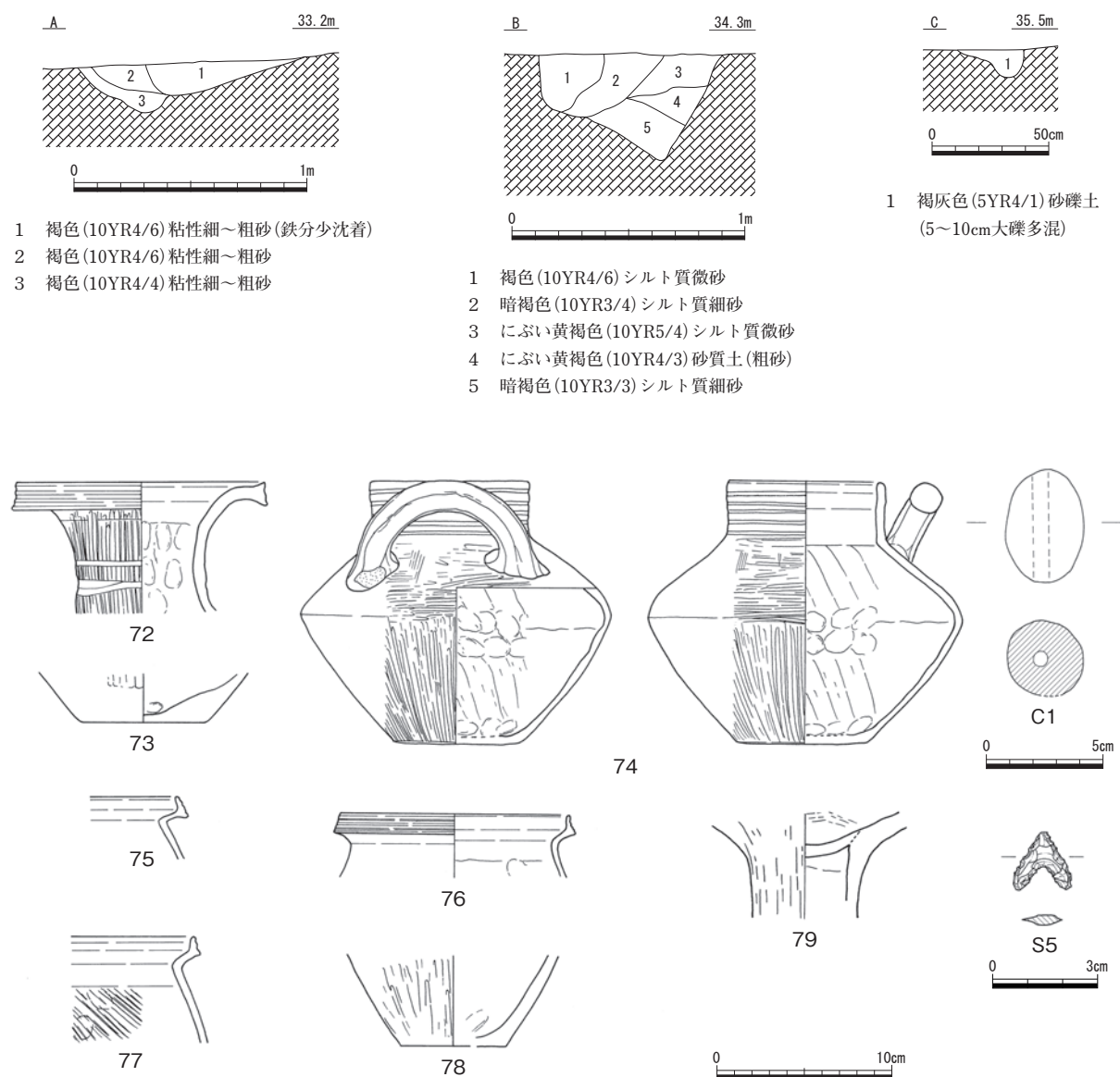
5～8 C～Fに位置する溝で、長さ約80mを検出した。8 Fの標高35.25m付近を最高所として北西方向にやや弧を描くように流走し、5 Cの32.5m付近で途切れる。弥生時代の溝1・2・5とは流走方向を揃えながら近接し、溝4とは交差して同溝が新しいことを確認している。

検出時の上端幅は28～97cm、深さ12～45cmを測り、底面標高は32.84～35.29mとなる。断面形はおおむね皿形を呈するが、場所により椀形や葉研状となったり、二段に落ち込むなど様ではない。埋土も各断面で異なり、上流のE-Fでは大礫を多く含む砂礫土、C-Dでは微砂、A-Bでは細～粗砂となるが、基本は各所の地山土に由来するものと思われる。

出土遺物のうち図示したものは、壺の口縁部72・底部73、把手付壺74、甕の口縁部75～77・底部78、高杯の杯～脚部で円盤充填がみられる79、土錘C1、サヌカイト製石鏃S5である。土器類は溝中位付近で比較的まとまるよう出土したものが多い。

溝の時期は、弥生時代中期後葉と考えられる。

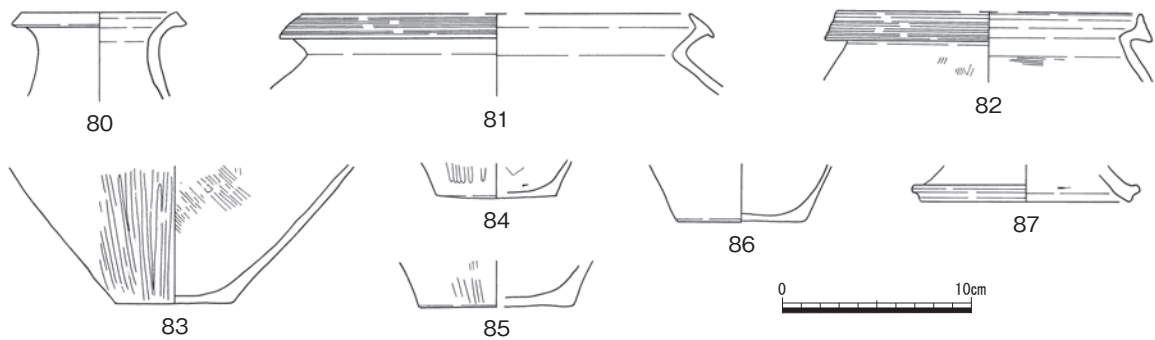
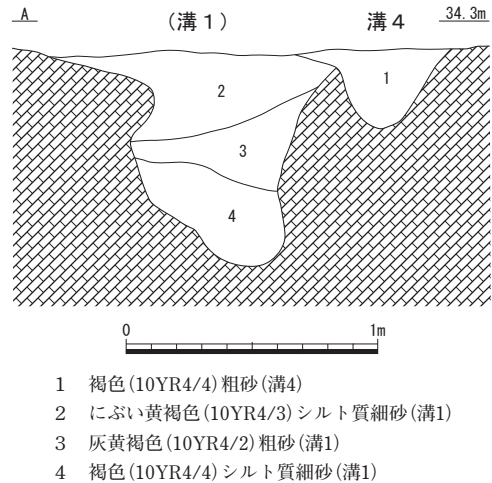
(高田)



第77図 溝3 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/3・1/2)

溝4 (第55・78図、図版11)

7 Dの南東側から端を発し、北西方向に流れ6 Cの東側付近で不明瞭となっていく。溝1・2・5より後出し、溝3と交差しながら流れるがこれに後出している。上端幅は62cm、底面幅は14cmで、検出面からの深さは31cmを測る。底面の標高は33.87mであり、断面形状は碗形である。出土遺物には80~87があり、壺80・83、甕81・82・84~86、高杯87である。弥生土器片が点在して出土しており、時期は弥生時代中期後葉である。(小林)



第78図 溝4 (1/30)・出土遺物 (1/4)

溝5 (第55・79図、図版11)

溝4と重複する位置に端を発し、同溝の東側を並流したのち溝3手前で途切れる溝で、約13mを検出した。その断面形は逆台形を呈し、上端幅31cm、底面幅24cm、深さ15cmを測り、近接する溝に比べると規模が小さい。

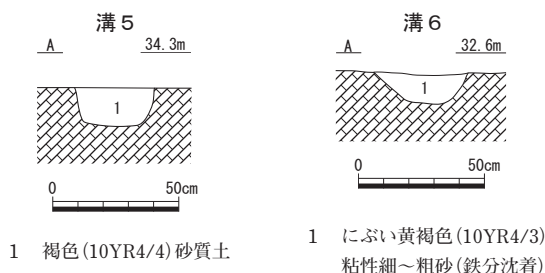
溝の時期は、近接する溝群と同様、弥生時代中期と考えられる。(高田)

溝6 (第55・79図、図版11)

溝1の北西端付近に所在する溝で、流路は溝1から約30度西方向に振っている。この溝の方向は、溝2が北西端付近で枝分かれした流路とも平行するものであるが、地形に影響を受けた可能性もある。残存する上端幅は37cm、深さは12cm程度であり、遺物も確認できないが、重複関係から溝1に先行するものであることが分かる。時期は中期後葉と考えておきたい。(河合)

溝7 (第56・80図、図版22)

9ラインから8 D南側を東から西へ地形に沿って下る溝である。溝8との前後関係は、土層観察により溝7の方が古いと判断した。残存状況は地形上方が良好で幅は最大約1.6mを測るが、下方では削平のためか幅は15cmと狭い。堆積状況は単層で、埋土は土質が地山類似で、断面形状は皿状である。出土遺物は弥生土器の甕と遺構検出時にまとまって出土した脚付直口壺88があり、遺構の埋没時期は弥生時代中期後葉であろう。(氏平)



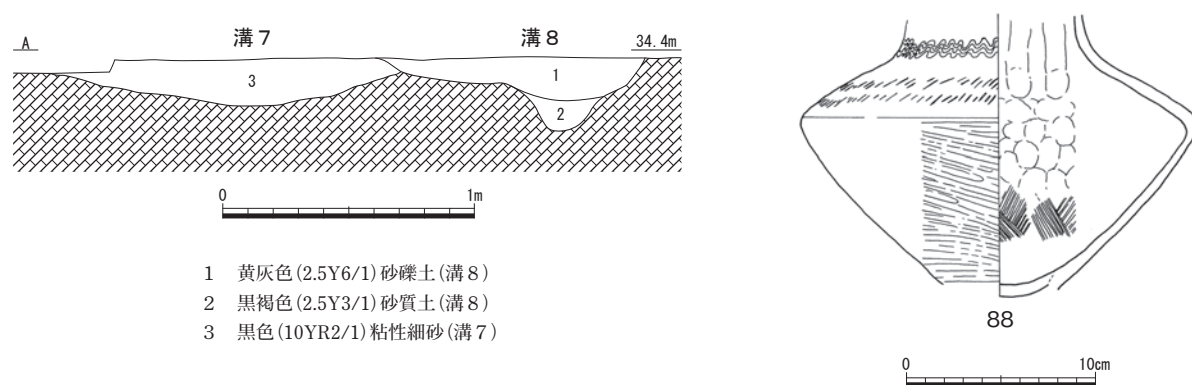
第79図 溝5・6 (1/30)

溝8 (第56・80・81図)

溝7の南に接して東から西へ下る、長さ約26mの溝である。土層観察などにより、切り合いがある溝7・9・10より新しいことが分かった。堆積状況は2～3層に分かれ、埋土の上層部は褐色、下層は黒褐色の色調で、質感は地山に似て砂質が強い。断面形状はV字状を呈するが、底面は均等ではなく凹凸を繰り返している。出土遺物は弥生土器の甕・高杯があり、遺構の埋没時期は弥生時代中期後葉と考えられる。(氏平)

溝9 (第56・81図)

8D南西端で溝8と一部重なる溝で、長さ約2mを測る。検出時の観察により溝8より古いと考えた。堆積状況は単層で、埋土は褐灰色を呈し質感は地山に似る。遺物は出土していないが、埋土の状況より溝8に近い弥生時代中期に埋没したものと思われる。(氏平)



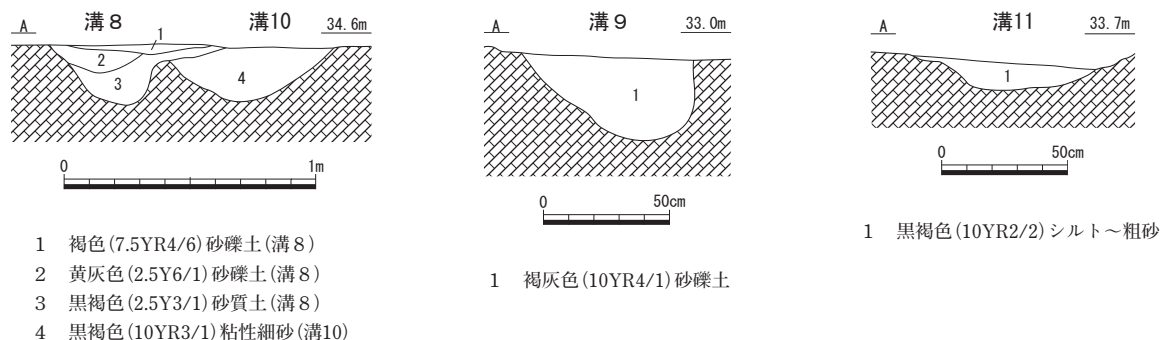
第80図 溝7・8 (1/30)・溝7出土遺物 (1/4)

溝10 (第56・81図)

9D・Eにまたがり溝8と重なる溝で、長さ約6mを測る。断面の土層観察により溝8よりも古いと判明した。堆積状況は単層で、埋土の色調は溝8最下層より黒色に近い。出土遺物は少量で小片であるが、溝8に近い弥生時代中期に埋没したものと思われる。(氏平)

溝11 (第56・81図)

9Dから9Cの南側を東から西へ地形に沿って下る溝である。幅は検出面で最大85cmを測る。堆積状況は黒褐色シルトが灰色・褐色砂質土と混在し、底面付近は粗砂が混ざる。断面形状は皿状を呈する。出土遺物は弥生土器の甕が少量で、この遺構の埋没時期は弥生時代中期の可能性が高い。(氏平)

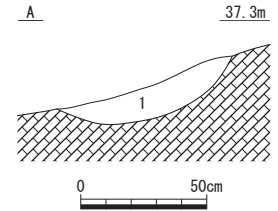


第81図 溝8～11 (1/30)

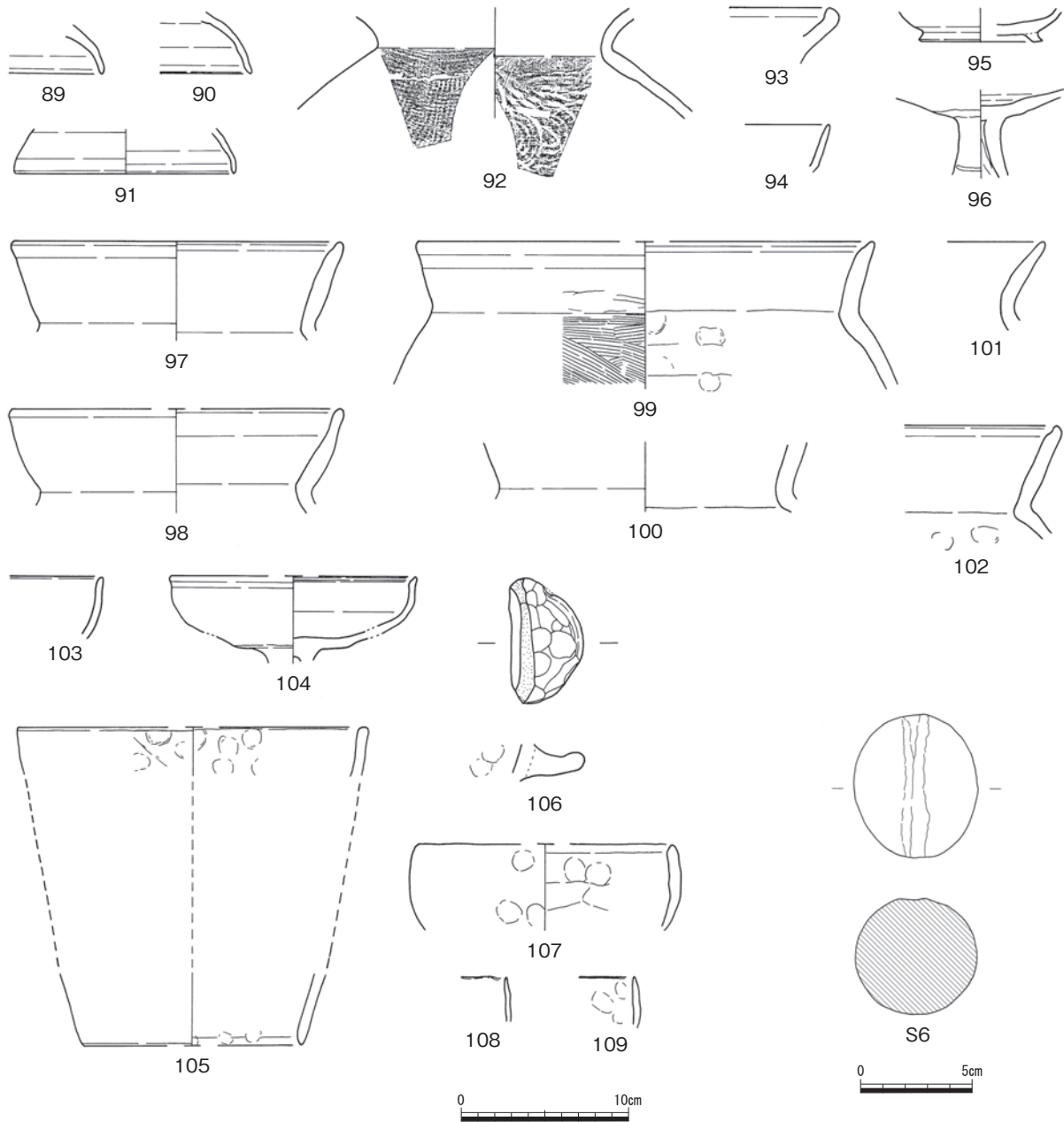
溝12 (第55・82図、図版29)

急斜面から緩斜面に移行する丘陵裾、6Fから7Fにかけて位置する溝である。段状遺構7と8の間にあり、それらとほぼ同じ高さに掘り込まれている。平面形は円弧状であり、段状遺構の一部である可能性もあるが、確認はできなかった。断面形は椀形を呈する。遺構の北側は現代の土坑によって一部が失われ、段状遺構7との重複関係では溝の方が新しいと判断できた。遺構の流入土出土遺物として須恵器片89~96、土師器片97~106、製塩土器片107~109、石錘S6を図示した。95の高台は外方へ開く。土師器甕の口縁端部は丸く収めるものと内面が窪むものがある。

遺構の重複関係や出土遺物などから、遺構の時期は7世紀中頃と考えられる。
(柴田)



1 褐灰色(10YR4/1)細~粗砂



第82図 溝12 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/3)

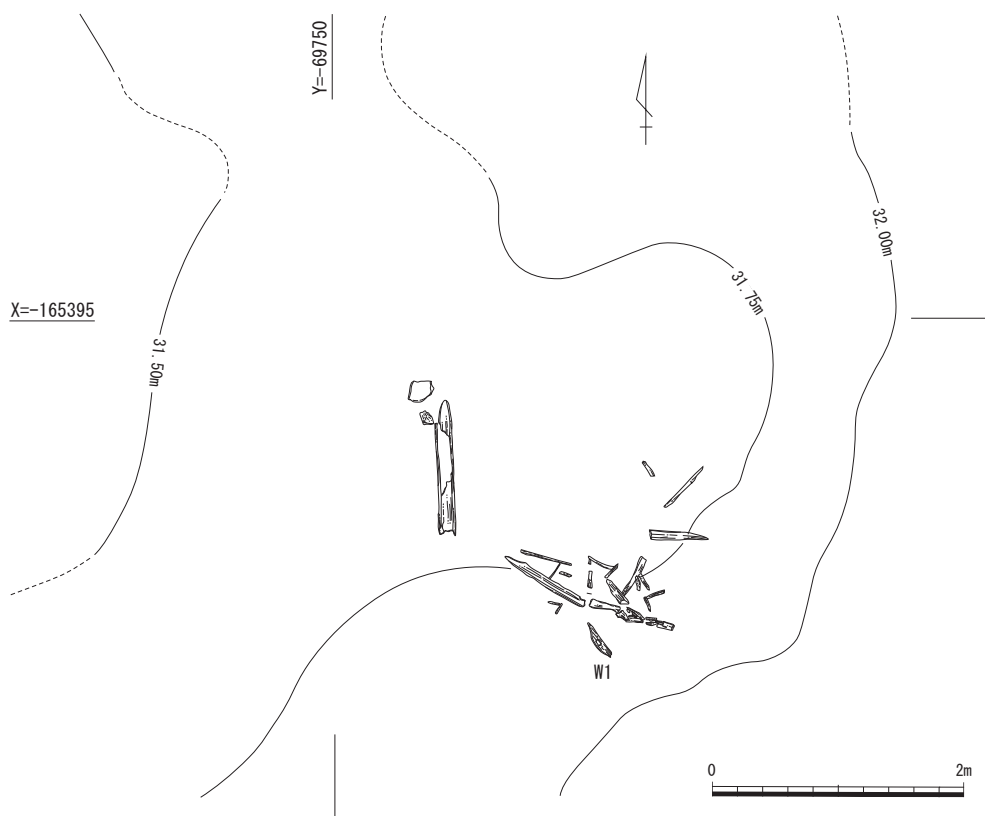
5 その他の遺構・遺物

谷部 (第56・83～86図、図版21・23・30)

谷部は今回の調査対象地の南西側にあたる8～10B・Cで認められた自然地形である。谷頭は8C付近に位置し、肩口は標高約32.5m辺りで検出されたが、調査前に水田として利用されていた当地周辺は、地下げを伴う広範囲の地形改変を受けていたことから、本来の地形や規模などが判然としないところがある。

例えば、この谷筋をみると、おおむね東から西に下がっている調査前の地形とはやや異なった方向となっている。その一方、今回の調査で検出した溝1～11の水流をみると、谷筋とほぼ同様に南東から北西に向かって下がっていることが分かる。このことから、遺跡が立地している丘陵裾部の旧地形は、低位部に向かって南東から北西方向に下がる地形であったと推測される。

谷部の深さは現状で約90cmを測り、出土遺物からおおむね古墳時代から中世までの期間で断続的に埋没が進んだと思われる。堆積土層をみると、第11層の褐灰色(10YR4/1)粘性細砂が古墳時代包含層、第8層の褐灰色(10YR6/1)粗砂、第9層の暗褐色(10YR3/3)粗砂、第10層の灰色(5Y5/1)砂礫土が古代包含層、第6層の黄褐色(10YR5/6)細砂、第7層の明赤灰色(2.5YR7/1)粘質土が中世包含層に相当しており、各土層に他時期の遺物の混在が基本的に認められなかったことから、谷部内では大きな攪乱はなかったと思われる(第84図)。



第83図 谷部木製品出土状況 (1/60)

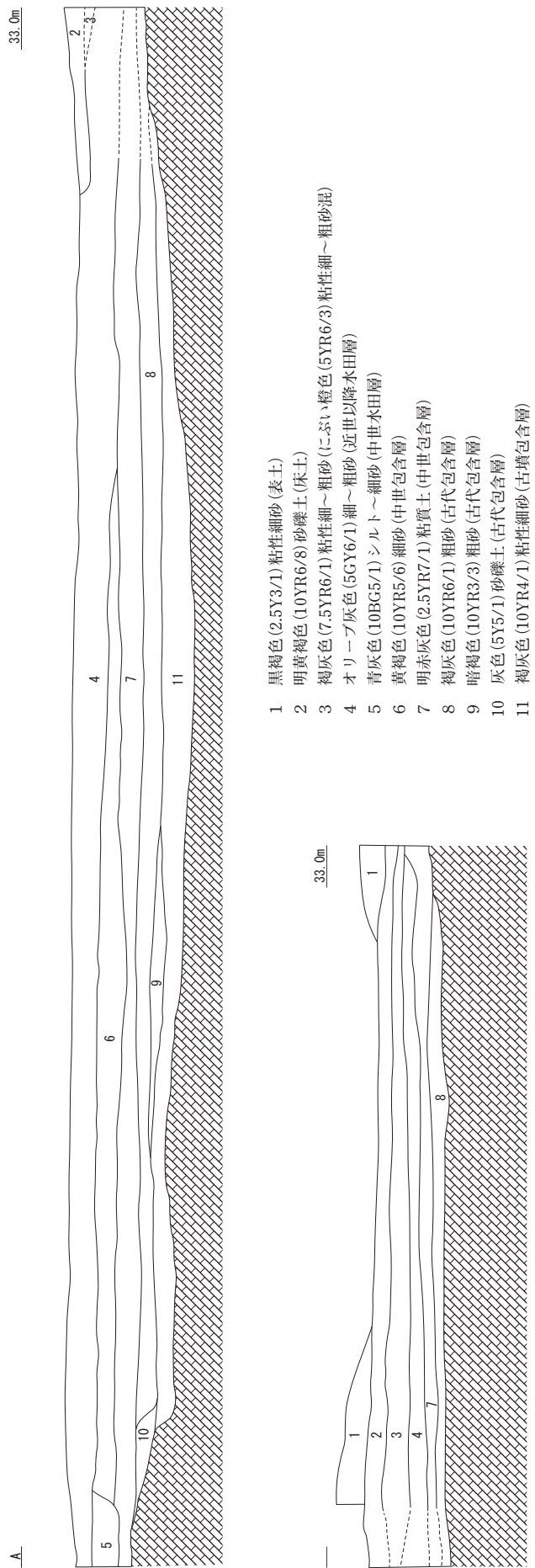
つまり、このことから中世後半以降に行われたとみられる開田に至るまで、当地周辺では掘立柱建物等が建てられるような積極的な土地利用はなされず、集落の広がりはなかったと考えられる。

完掘後の谷部の底面には、東側にある泉山山塊を源とする湧水が現在も認められ、直上にあたる古墳時代包含層の第11層は水分を多く含み、粘性を帯びていた。こうしたことからか、標高31.50~31.75m辺りの谷底のやや窪んだところからは、自然木や木材の溜まりが認められた(第83図)。

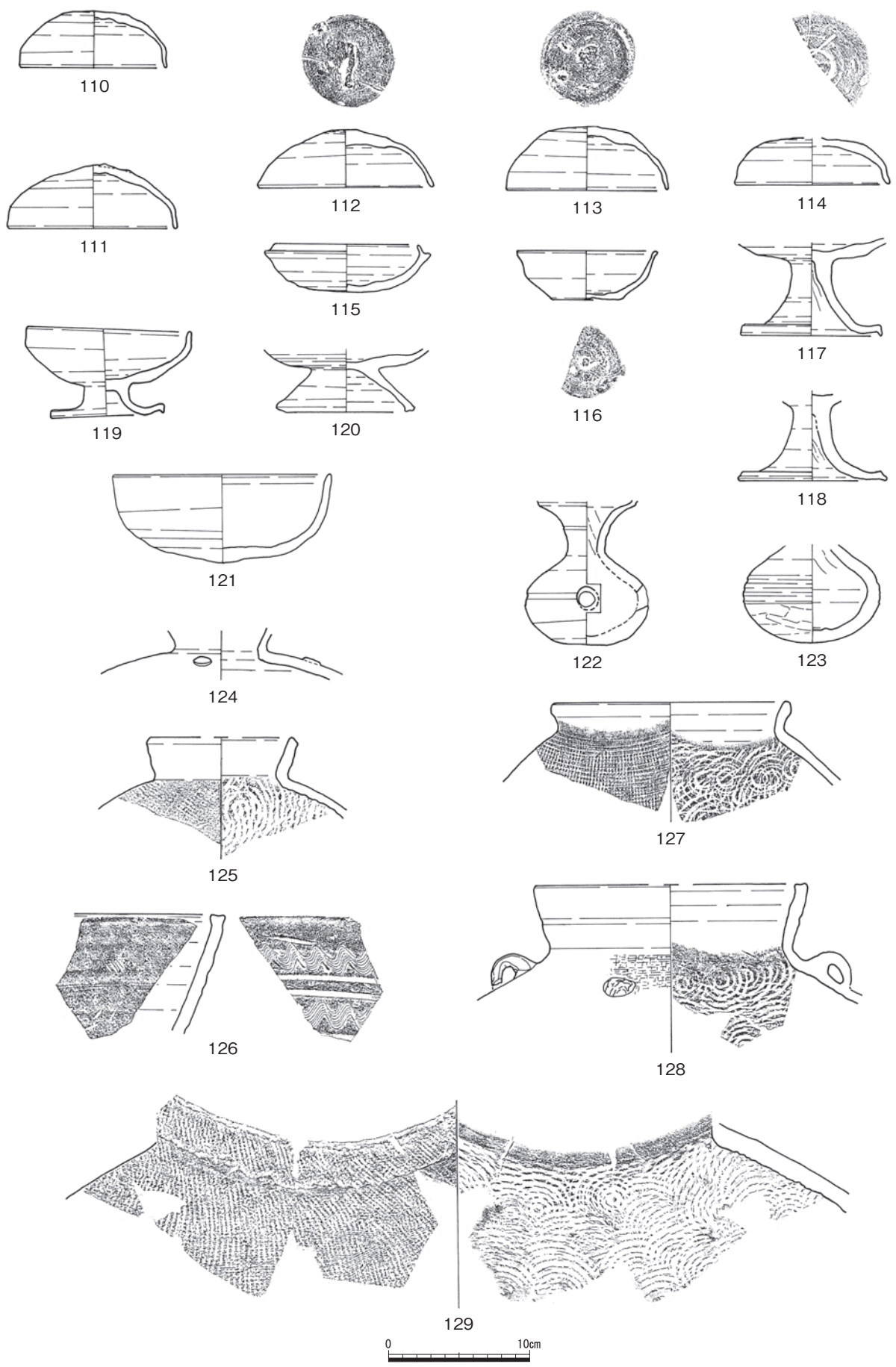
このうち、樹種がヒノキ属との鑑定結果を得た木製品のW1が認められた。その形状から刳掻きの可能性も考えられるが、判然としない。また、木材の一部は何らかの建築部材とも考えられたが、形態を十分に留めていないため、種別は明らかにできなかった。

この他、同層から出土した遺物としては、須恵器の杯蓋110~114、杯身115、椀116、高杯117~120、鉢121、甕122・123、平瓶124、甕125~129や土師器の甕130~133、甕または甌の把手134~136、高杯137~140、椀141~143、製塩土器144などが認められた。

出土遺物は、総じて6世紀末から7世紀前半までの比較的短期間に使用されていた土器と思われ、集落域で検出された段状遺構から出土している遺物量よりも比較的まとまっており、残存状況もよくて磨滅が少ないものも多い。このことから、今回の調査対象地外にあたる南東側付近に同時期の未周知の生活域が広がっていた可能性も考えられる。
(澤山)



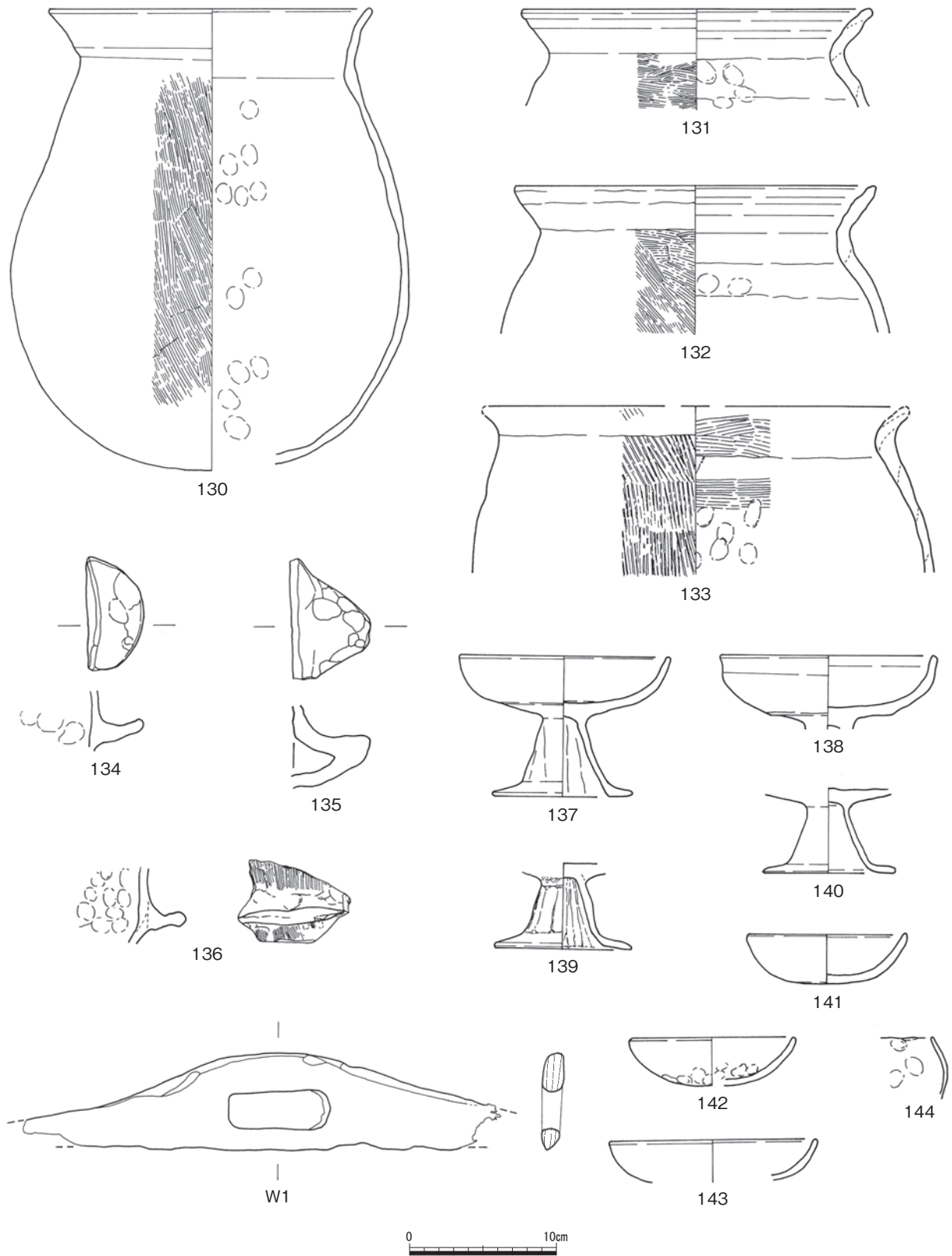
第84図 谷部断面 (1/60)



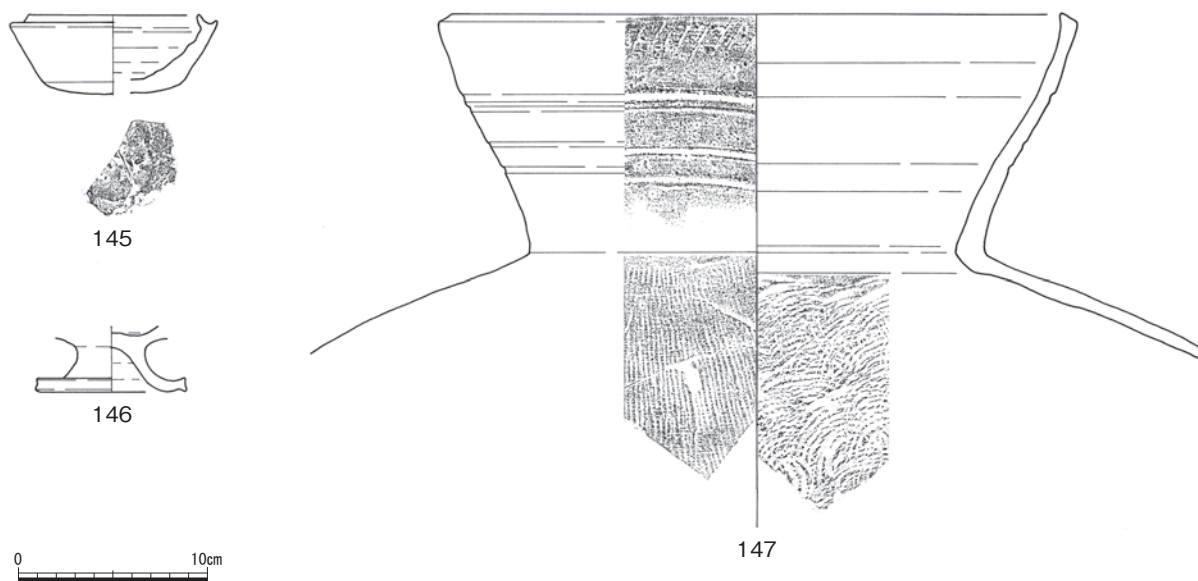
第85図 谷部出土遺物① (1/4)

柱穴 (第54~56・87図)

古墳時代以前と考えられる柱穴は調査区全体でも散漫な分布状況であり、掘立柱建物や柱穴列にはまとまらない。図化できた出土遺物としては、須恵器の杯身145、高杯146、甕147である。(澤山)



第86図 谷部出土遺物② (1/4)



第87図 古墳時代以前の柱穴出土遺物 (1/4)

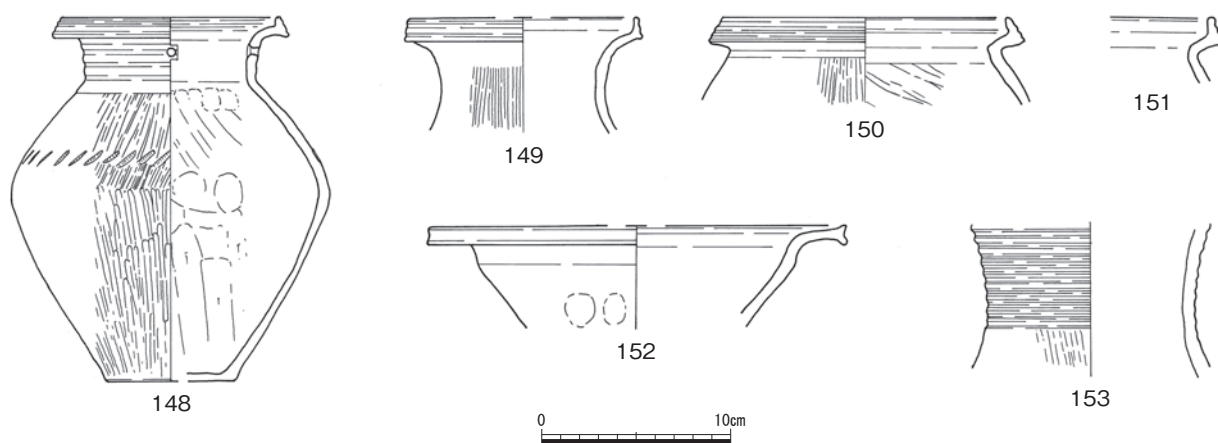
包含層・遺構に伴わない遺物 (第88～90図、図版29・30)

148～153は弥生土器である。148・149は壺、150・151は甕、152は高杯。153は器台の体部で、多条の凹線が施されている。

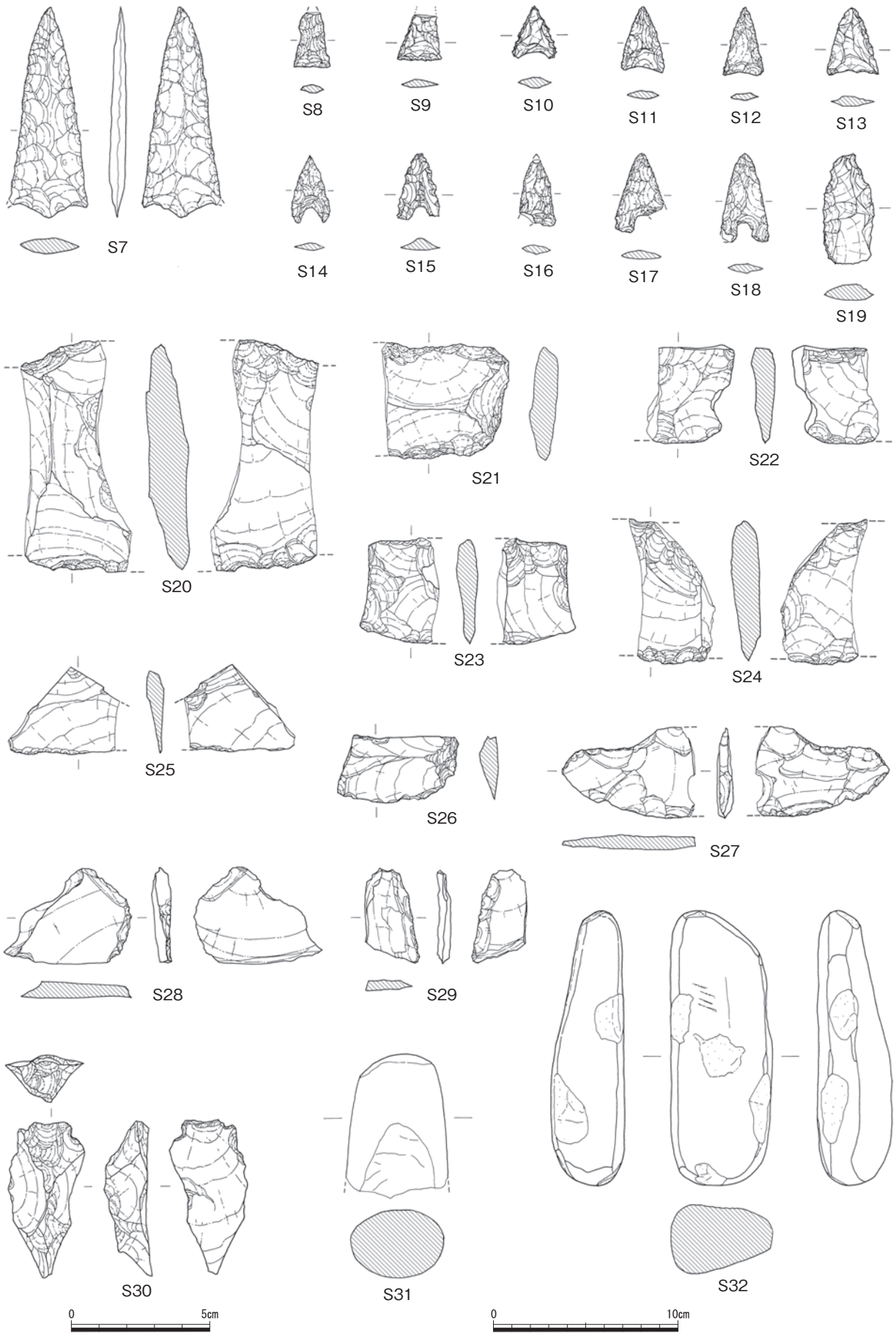
S 7は長さ7.6cmを測る縄文時代草創期の有茎尖頭器である。S 8～18は石鏃で、平基式と凹基式がある。S 15が黒曜石製で、他は全てサヌカイト製である。S 19は石鏃の未製品か。S 20～24はサヌカイト製の打製石庖丁、S 25～27はスクレイパー、S 28・29は使用痕のある剥片、S 30は流紋岩製の石核である。S 31は安山岩製の磨製石斧の基部で、S 32は細粒安山岩製の叩石である。

154～171は須恵器である。154～160は杯蓋で、160の外面には1条の線刻が認められる。161～163は杯身で、161の底部外面にはヘラ切り痕をナデ消したような痕が認められる。164～170は高杯、171は甕である。172～182は土師器である。172～175は甕、176は甌の把手の破片、177は杯身、178～182は高杯である。

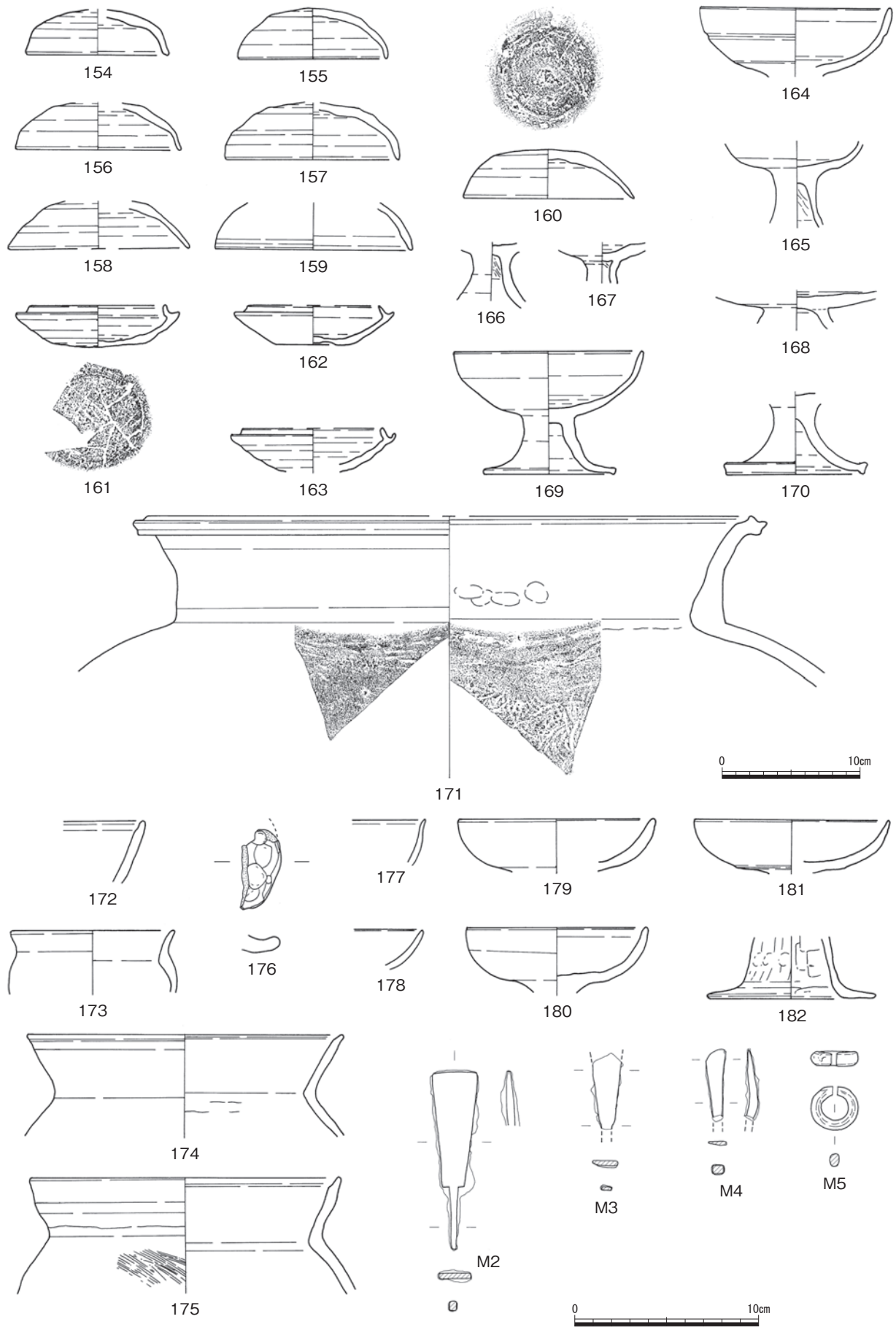
M 2は長さ9.6cmを測る方頭式の鉄鏃である。M 3も鉄鏃と考えられるが、形式は不明。M 4は器種不明の鉄器、M 5は直径2.6cmを測る耳環で、被覆材は白色金に近い色調を呈する。(藤井)



第88図 古墳時代以前の包含層・遺構に伴わない遺物① (1/4)



第89図 古墳時代以前の包含層・遺構に伴わない遺物② (1/3・1/2)



第90図 古墳時代以前の包含層・遺構に伴わない遺物③ (1/4・1/3)

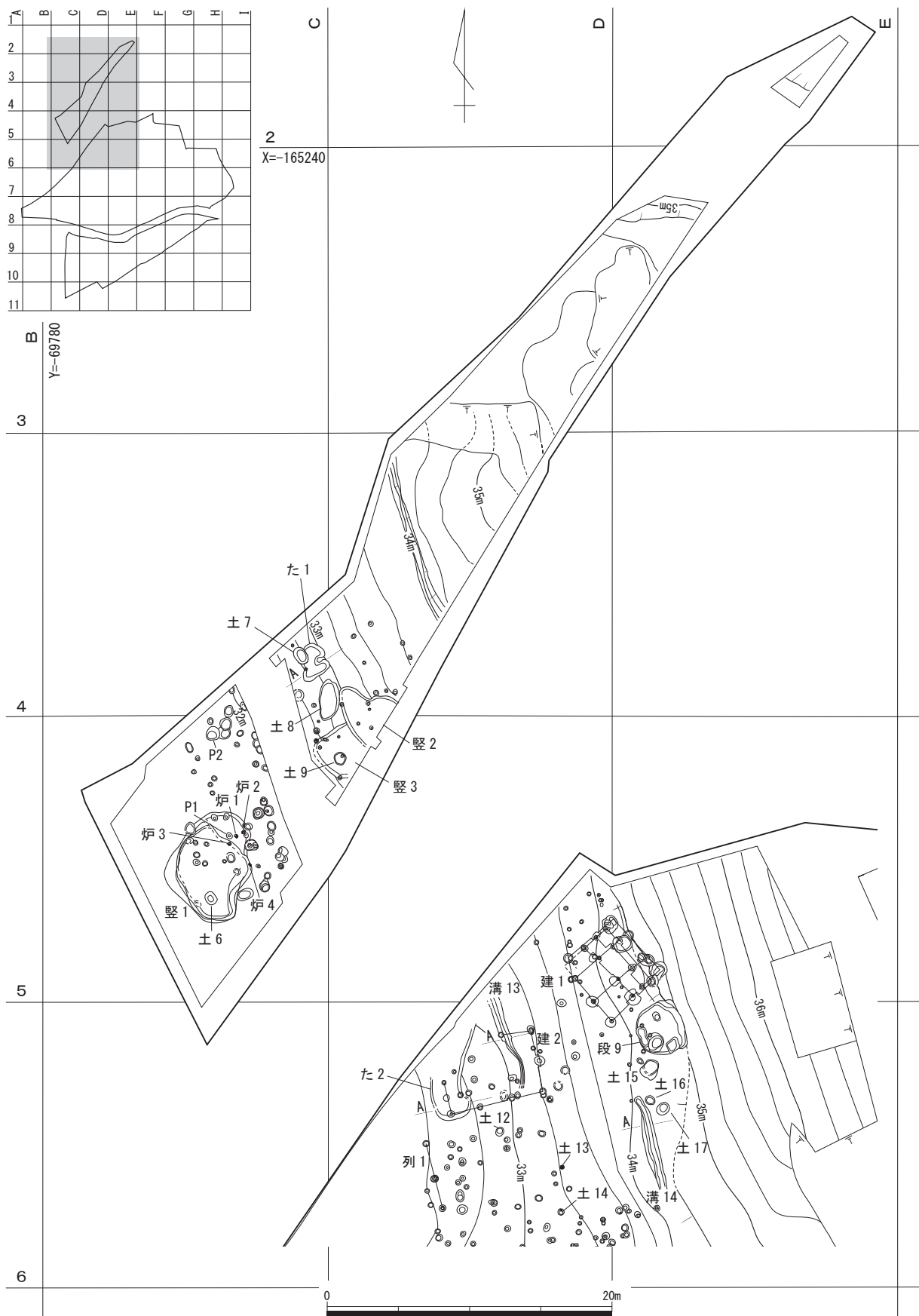
第3節 奈良～平安時代の遺構・遺物

1 概要

本節の時期に該当する遺構は、掘立柱建物12棟、段状遺構4基、柱穴列8列、土坑21基、竪穴遺構



第91図 奈良～平安時代の遺構全体図 (1/1,000)



第92図 奈良～平安時代の遺構全体図① (1/400)



第93図 奈良～平安時代の遺構全体図② (1/400)



第94図 奈良～平安時代の遺構全体図③ (1/400)

3基、鍛冶炉5基、溝10条などである。遺構が多く立地していた範囲は標高32～36mで、東から西へ下がる丘陵の緩斜面にあたる。この間について、第2節の概要で古代の遺構を設けるための削平がなされていた可能性を指摘した。第93図に示したように、4～7D・Eにかけての標高34.0～34.5mで段状の地形加工が認められている。しかし、8C～Eでは調査前までの地形改変が大きかったため、段状部分は確認できなかった。

標高37m以上では攪乱が入っていた地点が多く、検出できた遺構は段状遺構12ほか調査区の南東端部分に限られる。標高32mより下では、竪穴遺構1～3を除き遺構密度は希薄で、調査区西端は谷へ続く低位部になっている。8～10B・Cにかけては自然地形である谷部が入り、古代相当の包含層も確認されている。また、建物8の南側、7・8B～Gに現代の道路と水路が東西方向に通っているが、これらは地形と遺構分布からみて古代当時に谷部であったとは言い難い。

さらに詳細な遺構の配置を確認する。調査範囲の北西端には、竪穴遺構1～3など8世紀後半にあたる遺構が集中している。竪穴遺構1内部には鍛冶炉4基を含み、鍛冶関係作業の中核であったことが分かる。その南側には建物1・2、建物3～5及び6～8からなる3つの建物のまとまりがみられる。建物1は今回の調査で唯一建て替えを確認できた。その周辺には段状遺構9・土坑15～17・溝14など9世紀代にあたる遺構が集まっている。建物2と3の間にも多数の柱穴があり、まとめることはできなかったが建物の存在が想定できよう。土坑12～14は9～10世紀に該当する。建物4と5は近接しながらも棟方向がほぼ90°直交する総柱建物である。建物6・7は他と比べ小規模である。建物7・8の西側にも柱穴が多数あり、建物が存在したかもしれない。

さらに、現代の道路の南側に建物9～12が立地し、北側に段状遺構11・12などが設けられている。建物9・10と11・12は規模が似ており、周辺遺構の時期は9世紀代が多数を占める。段状遺構11・12は8世紀代で、段状遺構11内には製塩土器溜まりと焼土面があり、塩生産関連遺構と言えよう。段状遺構11の周りでは10～11世紀代、段状遺構12では9～10世紀代の遺構が多い。

8～10B・Cの谷部では7世紀後半から10世紀頃の遺物が出土した。下限は黒色土器・灰釉陶器であるが、古代の遺物量は少ない。

遺物では緑釉陶器と製塩土器が注目される。土坑20出土のほぼ完形品の緑釉陶器碗は10世紀後半の近江産である。また、包含層からは9世紀前半から10世紀後半にかけての、京都産の軟質・硬質素地及び近江産のものがみられる。製塩土器は口縁が直立するもの、内湾するものがあり、全体は碗形を呈し底部は尖底である。手捏ね整形の粗製碗・鉢は製塩土器と共に出土することが多く、製塩土器の生産及び使用者が製作したと想定されている。(氏平)



写真8 掘立柱建物1・2（南西から）



写真9 掘立柱建物9調査状況（西から）

2 掘立柱建物

掘立柱建物1 (第93・95～97図、図版11・13・23、写真8)

4・5C・Dにまたがった場所に位置する。南東方向に近接して段状遺構9が、南西方向に7m離れた箇所に掘立柱建物2が存在する。本建物はほぼ同一箇所に数回の建て替えがあったと考えられ、最も古い時期と最も新しい時期の2回分を図化している。どちらも規模は3×2間の総柱建物であり、東側から柱1本幅ぐらいをずらしつつ西側へ建て替えられたと考えている。古い時期のものは、桁行482cm、梁行420cmで、面積は20.24㎡である。新しい時期のものは、桁行507cm、梁行414cmで、面積は20.99㎡となり、ほぼ同じ規模である。

この建物は、桁方向を地形に並行する形に建てられており、梁方向は斜面となっている。現状で検出面の差は、東側と西側では80～90cmほどある。東側から約40cm程の削平を行った後に建てられたと考えているが、この地点の造成土が堅く締まり、また乾燥状態が激しかったため、中央列と西側列の検出は地山直上となってしまった。そのため本来の柱深度は判然とせず、また柱筋の通りもよくない。

時期は、新しい時期の建物の中央と西側にかけての柱穴から、完形に近い190・191・192の土師器や黒色土器が出土しており、9世紀代になると思われ古い時期の建物はそれ以前になる。(小林)

掘立柱建物2 (第93・98図、図版11、写真8)

5Cの北方に位置する。たわみ2と同位置にあり、これに後出し、また北東方向に7m離れた箇所に掘立柱建物1が存在する。規模が3×2間の側柱建物で、桁行659cm、梁行432cm、面積は28.47㎡である。柱間距離は、梁行で約216～228cm、桁行で約206～233cmとなり、桁行は真ん中が一番長くなる。

東側から西側へ下る場所にあり、梁方向が地形に沿っている。検出面は、高い東側と低い西側では約70cmほどの差となるが、特に削平などの地形改変は行っていないと考えている。

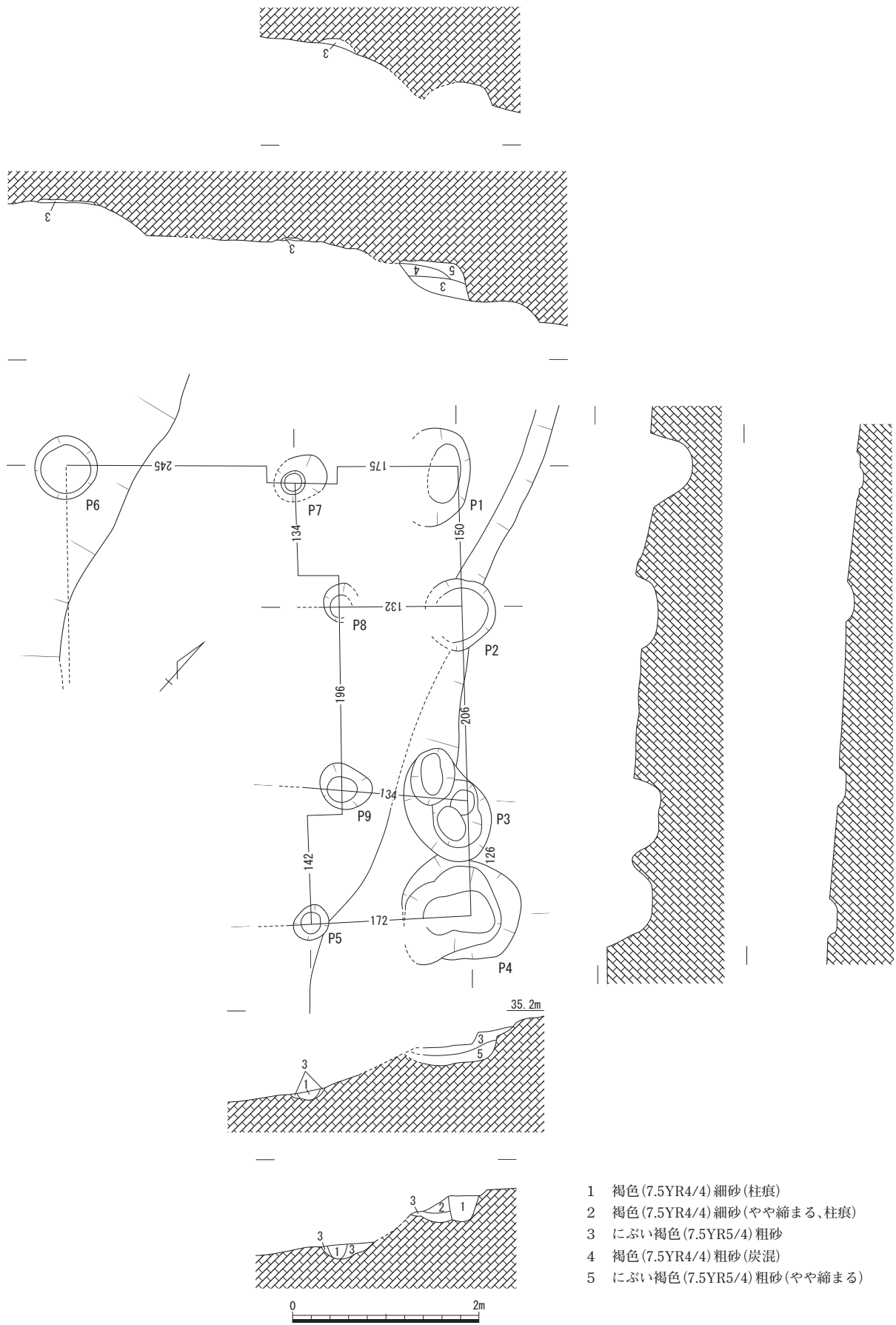
時期は、9世紀前～中葉のたわみ2に後出していることから、同時期もしくはそれ以降になると思われるが掘立柱建物1と並存していた時期もあったと考えている。(小林)

掘立柱建物3 (第93・99図、図版12)

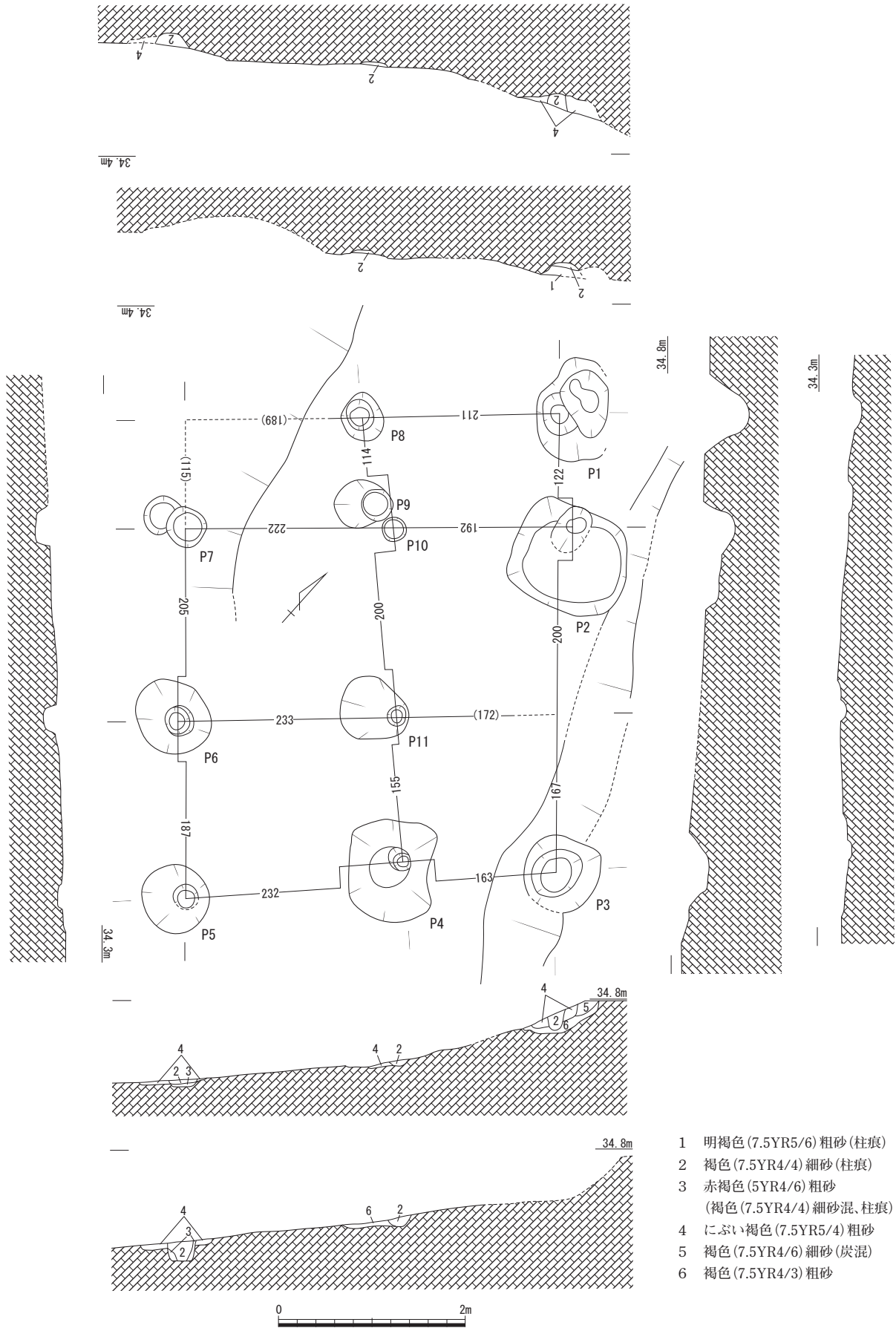
6C・Dで検出された遺構で、桁行が4間で766cm、梁行が2間で348cmであり、面積は26.66㎡を測る。棟方向は北西方向に20°振っている。この方向は等高線に沿うものであり、地形に制約を受けている可能性がある。棟方向が揃うものとしては、2m西側の掘立柱建物4があり、直交するものとしては12m南東に位置する柱穴列4があるが、ともに出土遺物が乏しく、同時期のものであるかどうかは不明である。この遺構の内部では他にも柱穴が検出できたが、この遺構に伴わないものと判断され、床を張らない平地式の建物であると考えられる。出土遺物はないが、周辺の遺構と同様の9～10世紀の範疇と考えておきたい。(河合)

掘立柱建物4 (第93・100図、図版12)

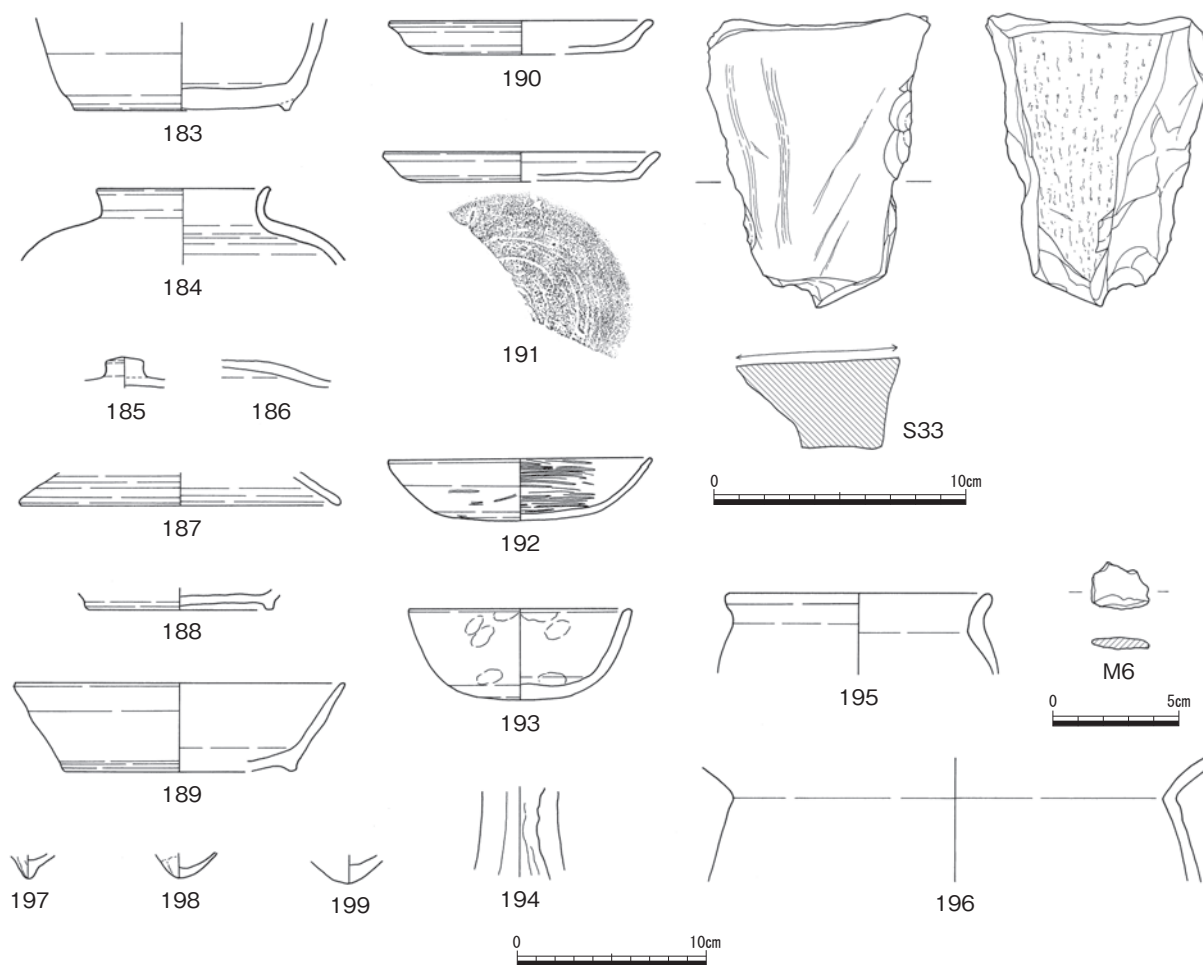
掘立柱建物3の西側に隣接して位置する。規模は3×2間で、桁行442cm、梁行322cm、面積は14.23㎡を測る。総柱建物だが、本来2本あるべき中の柱が1本省略され、中心に1本の柱を配している。柱穴間隔は桁方向が124～228cm、梁方向が140～178cmである。柱穴の規模は直径60～100cmを測るが、柱の抜き取り痕を考慮すると元の柱穴の径は直径60～80cm程度と推測される。柱穴内に残された柱痕から推定される柱の太さは20cm前後である。棟方向はN-20°-Wとなる。詳細な時期を特定できる遺物は出土していないが、周辺の状況から平安時代の建物と考えられる。(藤井)



第95図 掘立柱建物1(古)(1/60)



第96図 掘立柱建物1 (新) (1/60)



第97図 掘立柱建物1出土遺物 (1/4・1/3)

掘立柱建物5 (第93・101図、図版12)

掘立柱建物4の南側に隣接して位置する総柱建物である。規模は3×2間で、桁行457cm、梁行316cm、面積は14.44㎡を測る。柱穴間隔は桁方向が128～177cm、梁方向が137～160cmである。柱穴の規模は直径50～80cmを測るが、柱の抜き取り痕を考慮すると元の柱穴の径は直径50～60cm程度と推測される。柱穴内に残された柱痕から推定される柱の太さは20cm前後である。棟方向はN-63°-Eとなる。出土遺物について、200はP5から出土した須恵器の椀で、底部にヘラ切り痕が認められる。201はP6から出土した須恵器の高杯の脚部片で、混入の可能性が高い。C2はP6から出土した、いわゆる瀬戸内型の棒状有孔土錘である。遺構の時期は出土遺物から11世紀前半頃と考えられる。(藤井)

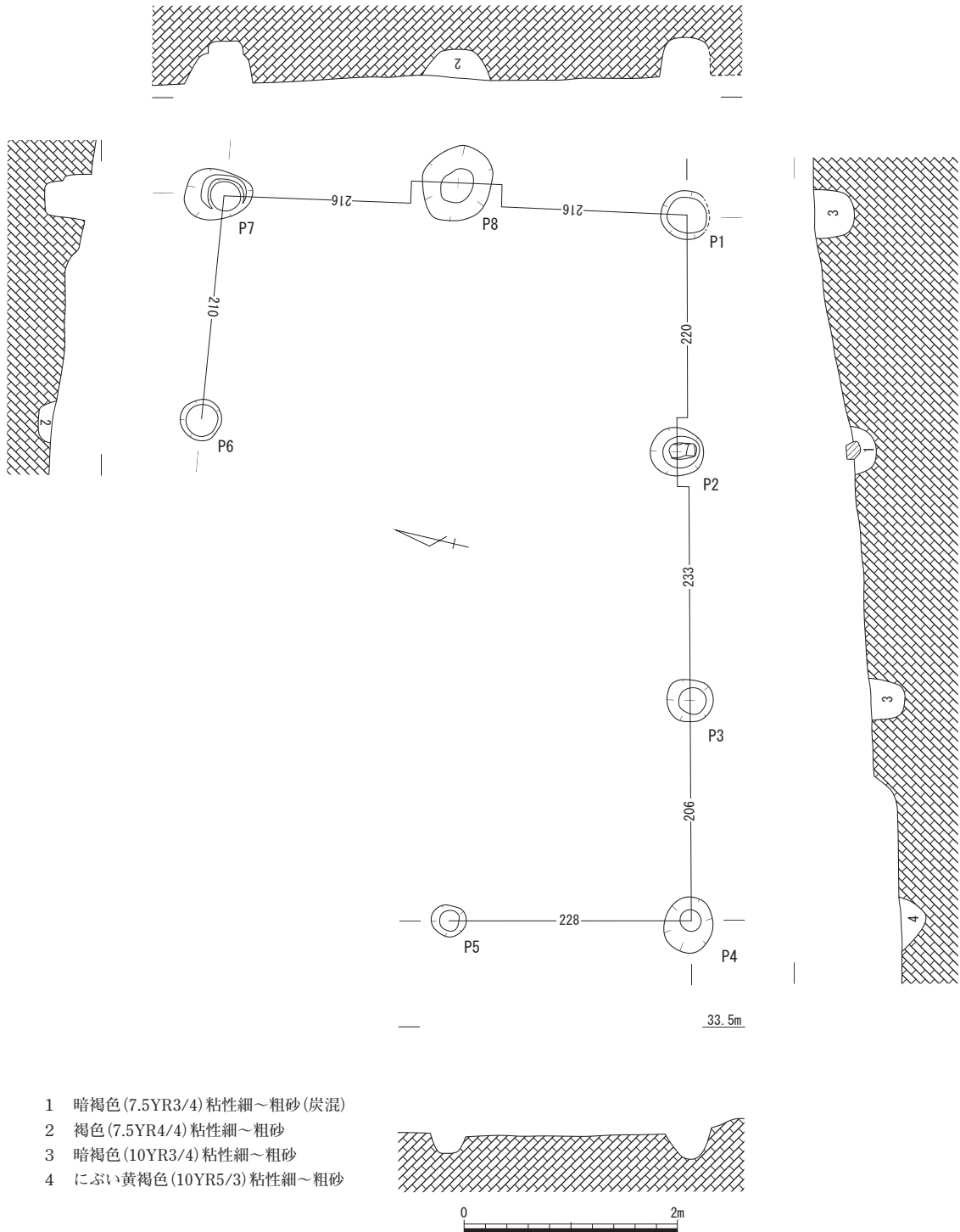
掘立柱建物6 (第93・102図)

7Dの北西端に位置する。北西側約4m離れた箇所には柱穴列3が、北東側約2m離れた箇所に柱穴列4と掘立柱建物7が存在する。また弥生時代の溝3と溝4がちょうど交わる箇所に築かれている。規模が2×1間の側柱建物で、桁行280cm、梁行195cm、面積は5.46㎡である。柱間距離は、桁行で約112～162cm、梁行で約195cmとなる。

本建物の時期は、出土遺物がないが周辺を古代の遺構に囲まれていたため、当期と判断した。ただ弥生時代の溝3・4が交わる箇所に立地し、また規模や柱穴の径もその時代の建物と類似している。このことから弥生時代の建物であった可能性も考えられる。(小林)

掘立柱建物7 (第93・103図)

6・7D境の北側の中央付近に位置する。北西側に近接して柱穴列4があり、南東側約1m離れた箇所に掘立柱建物8が存在する。この2つの遺構とは、一連のグループであった可能性がある。規模が2×1間の側柱建物で、桁行381cm、梁行346cmとなり、梁方向の1間幅がかなり大きい。面積は13.18㎡である。柱間距離は、桁行で約170～205cm、梁行で約318～346cmとなる。柱筋の通りは必ずしも良好ではない。本建物に出土遺物はないが、掘立柱建物8の半分のサイズになるなど共通点があ



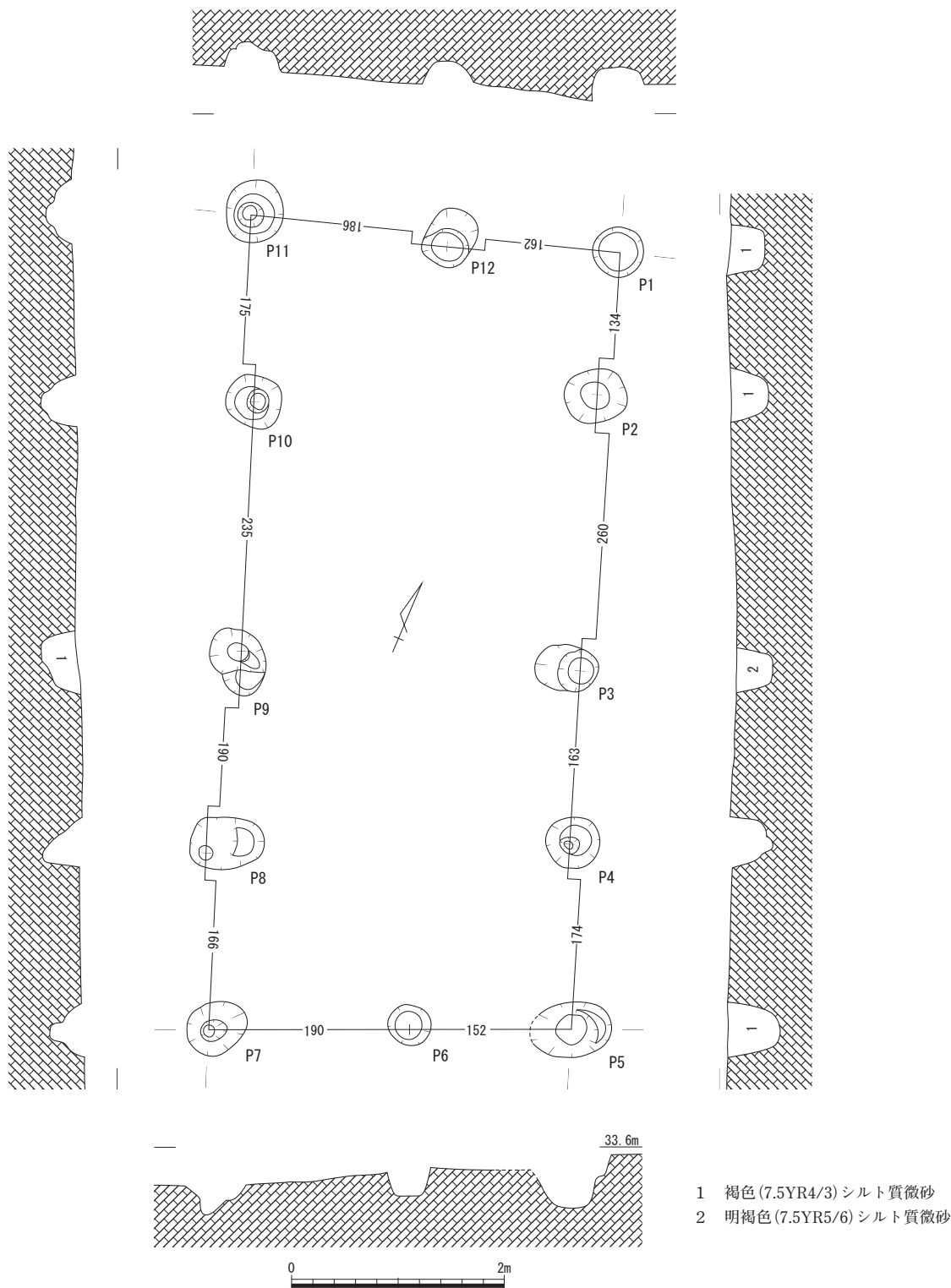
第98図 掘立柱建物2 (1/60)

り、それほど変わらない時期になるのではないか。

(小林)

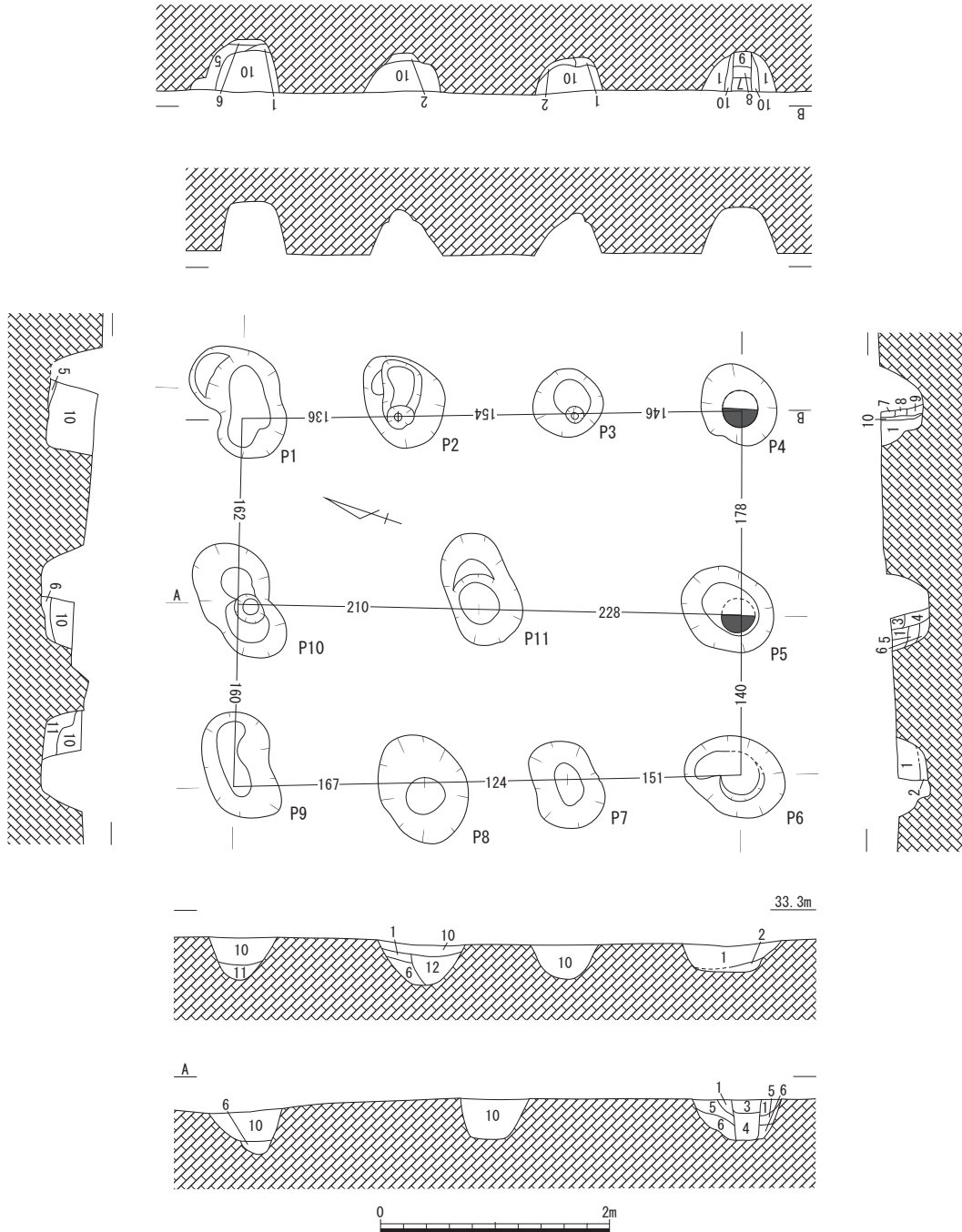
掘立柱建物 8 (第93・104図、図版13)

7 D・Eの北方にまたがって位置する。北西側約1 m離れた箇所掘立柱建物7が、東側約8 m離れた箇所に柱穴列5が存在する。規模が4×2間の側柱建物で、桁行790cm、梁行351cm、面積は27.73㎡である。柱間距離は、桁行で約173~229cm、梁行で約166~184cmとなる。桁行の柱間距離は、両脇



第99図 掘立柱建物 3 (1/60)

にあたる2間が170～190cmとやや短く、真ん中の2間が200cmを超えてやや長くなる。本遺跡から検出された掘立柱建物の中では、面積が比較的大きい部類に入る。しかし柱筋の通りは必ずしも良好ではなく、平面形がやや歪な長方形を呈する。



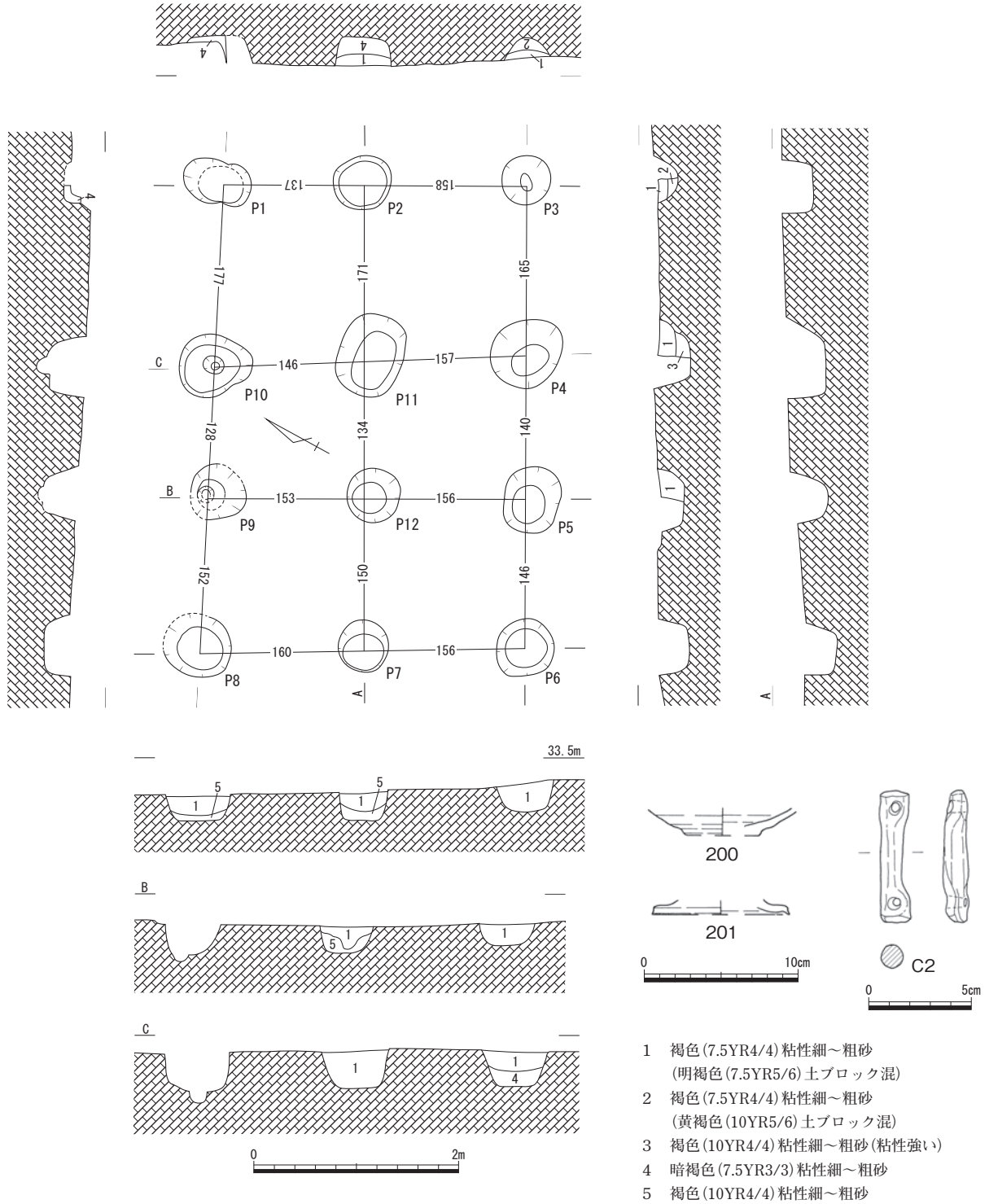
- | | |
|--|--|
| 1 褐色(7.5YR4/4)粘性細～粗砂 | 7 明褐色(7.5YR5/6)粘性細～粗砂(砂質強い) |
| 2 褐色(7.5YR4/4)粘性細～粗砂
(黄褐色(10YR5/6)土ブロック混) | 8 褐色(7.5YR4/4)粘性細～粗砂 |
| 3 にぶい黄褐色(10YR4/3)粘性細～粗砂 | 9 暗褐色(10YR3/4)粘性細～粗砂 |
| 4 褐色(7.5YR4/3)粘性細～粗砂 | 10 褐色(7.5YR4/4)粘性細～粗砂
(明褐色(7.5YR5/6)土ブロック混) |
| 5 褐色(7.5YR4/4)粘性細～粗砂
(黄褐色(10YR5/6)土ブロック混) | 11 暗褐色(10YR3/3)粘性細～粗砂 |
| 6 褐色(7.5YR4/4)粘性細～粗砂 | 12 褐色(7.5YR4/4)粘性細～粗砂 |

第100図 掘立柱建物4 (1/60)

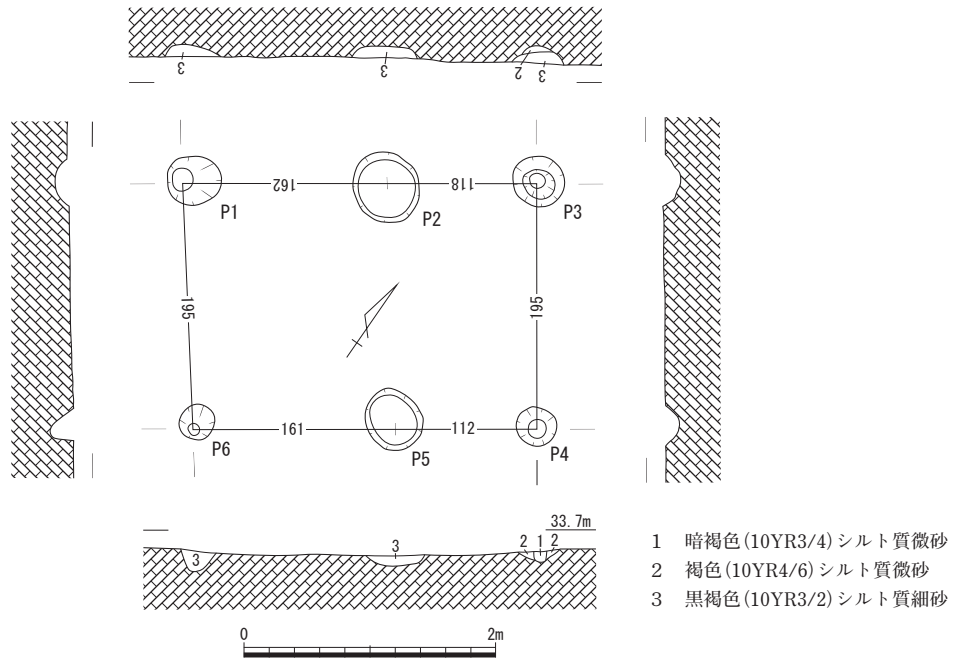
出土遺物として小片ではあるが202製塩土器が存在する。時期は、9世紀代になると考える。同時期の掘立柱建物3・10・11などとは同規模となるが、掘立柱建物10・11が柱穴径が大きく、柱筋の通りもよいのに対し、本建物と掘立柱建物3は柱穴径が小さいなどの違いがある。 (小林)

掘立柱建物9 (第94・105図、図版13、写真9)

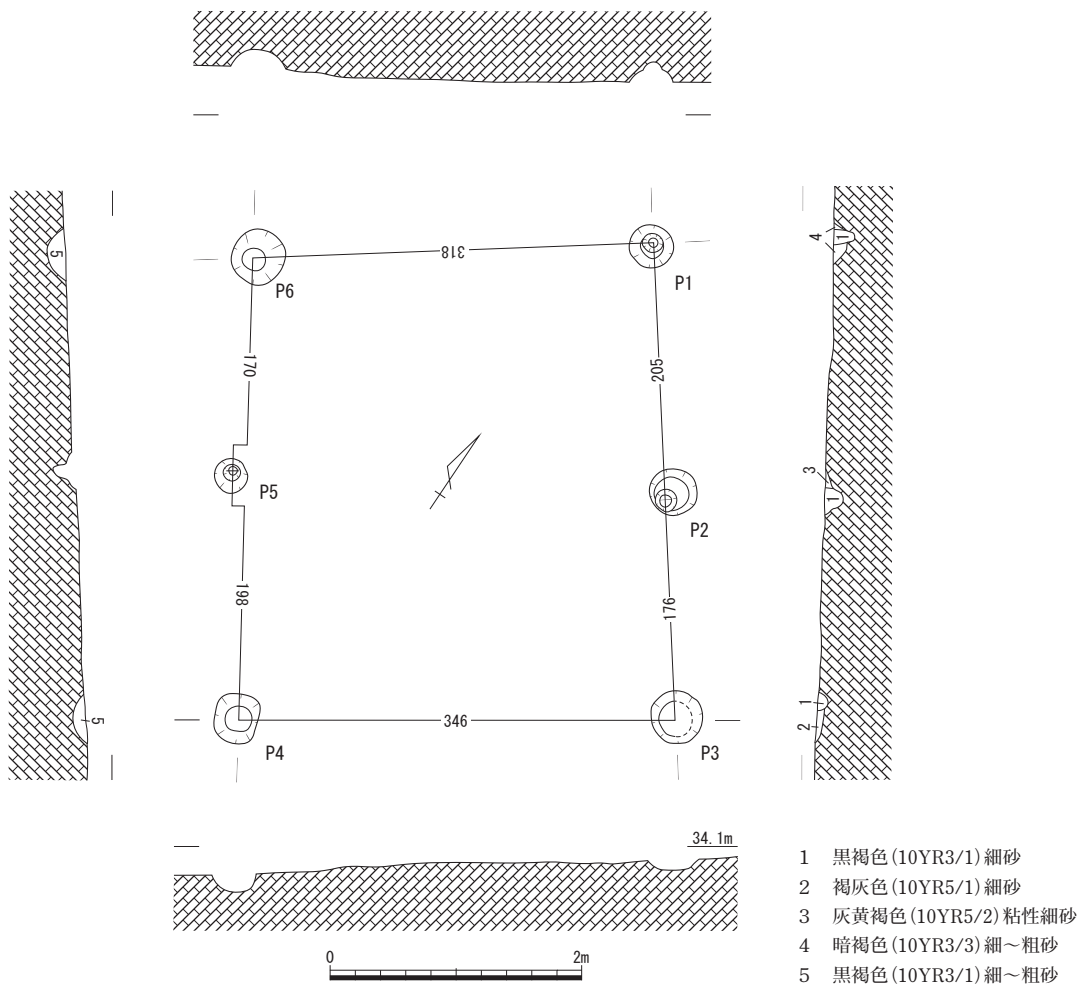
8・9D・Eにまたがる地点に位置する。P1・P10間及びその北西側も精査したが柱穴が検出で



第101図 掘立柱建物5 (1/60)・出土遺物 (1/4・1/3)

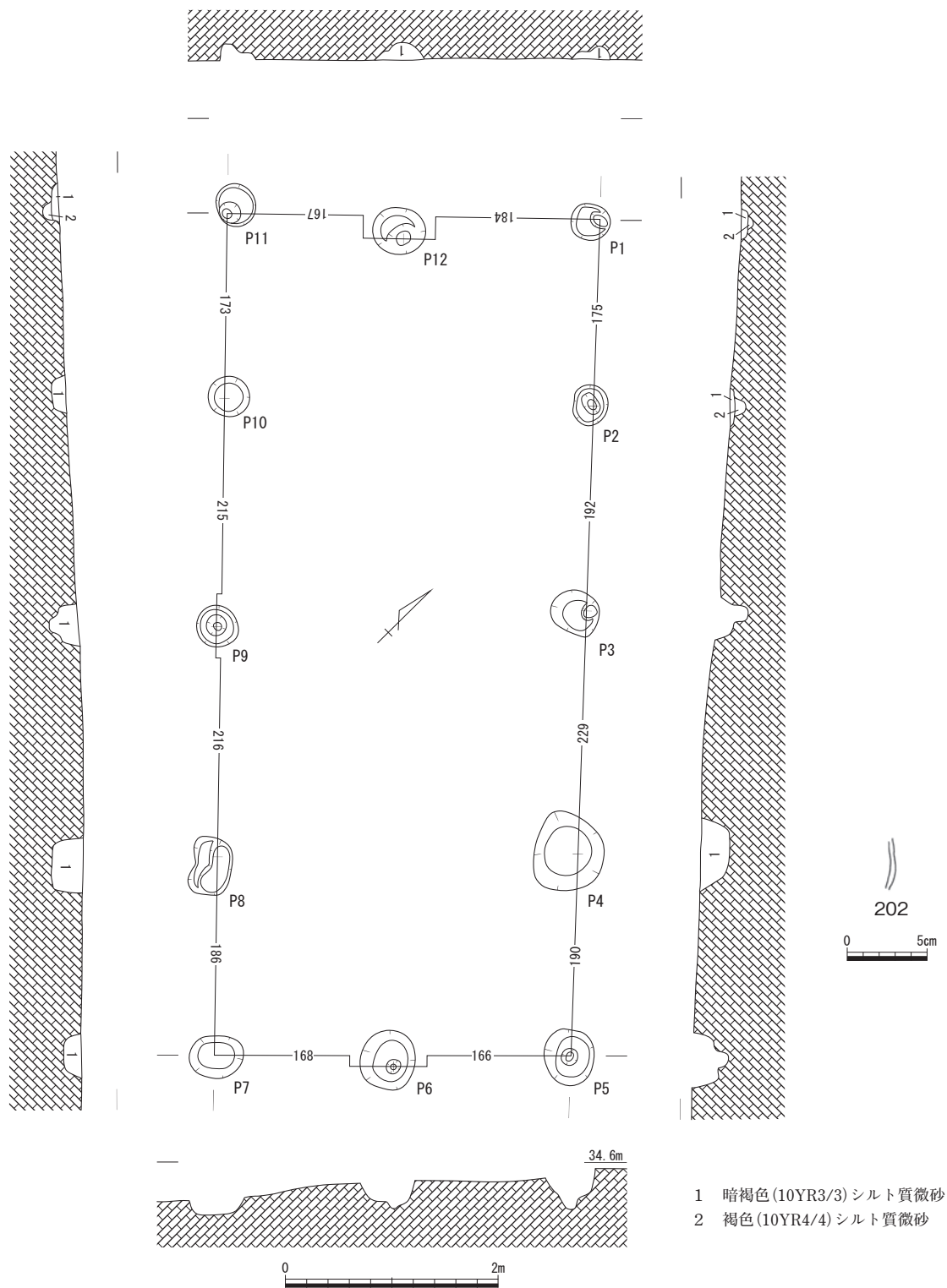


第102図 掘立柱建物6 (1/60)

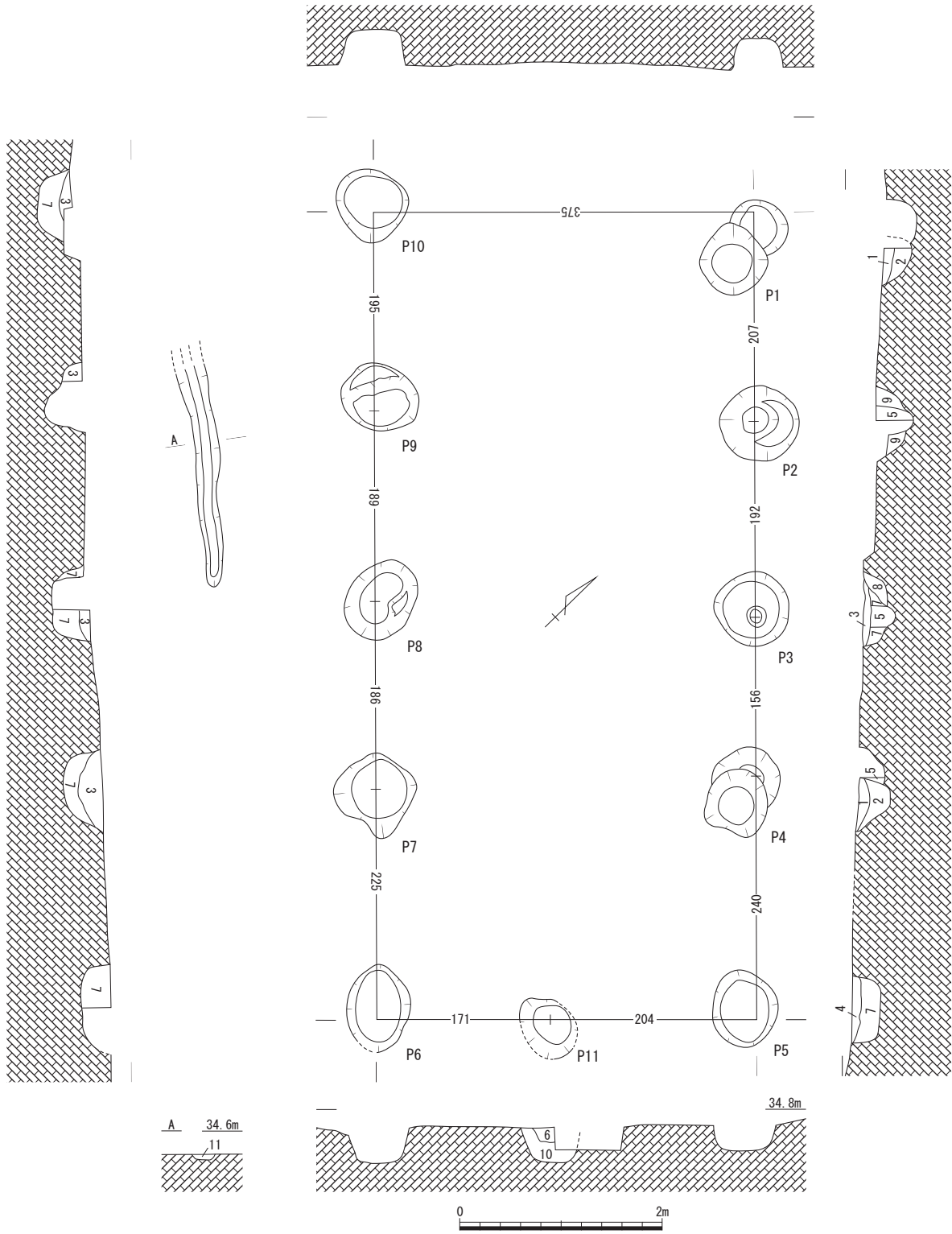


第103図 掘立柱建物7 (1/60)

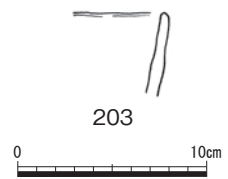
きなかったため、4×2間と考えた。P8・P9南西側1.2mに桁行方向に並行する溝1条を検出したが、これは雨落ち溝と考えられる。柱穴は平面が楕円形を呈するものが多く、直径は65~85cmを測る。堆積状況では、P2・P3で柱痕がみられ、P3の柱痕は直径20cmを測る。またP1・P4では新旧2時期の柱穴が重複することから、1回以上の建て替えがあったことが分かる。埋土の上部第1・3層は地山より白っぽい色調であるが、下部第2・7・10層は褐灰色を呈し地山に似る。出土遺物は須



第104図 掘立柱建物8 (1/60)・出土遺物 (1/4)



- | | |
|--|-------------------------|
| 1 にぶい黄橙色 (10YR6/3) 粘性細砂 | 7 褐灰色 (10YR6/1) 砂礫土 |
| 2 褐灰色 (10YR6/1) 砂礫土 | 8 黒褐色 (10YR3/1) 細砂 |
| 3 にぶい黄橙色 (10YR6/3) 粘性細砂 | 9 にぶい黄橙色 (10YR6/3) 粘質細砂 |
| 4 にぶい黄橙色 (10YR7/3) 粘性細砂 | 10 褐灰色 (10YR5/1) シルト～細砂 |
| 5 褐灰色 (10YR5/1) シルト～細砂 | 11 褐灰色 (10YR6/1) 砂礫土 |
| 6 明黄褐色 (10YR6/8) 粘性細砂
(褐灰色 (10YR5/1) シルト～細砂ブロック混) | |

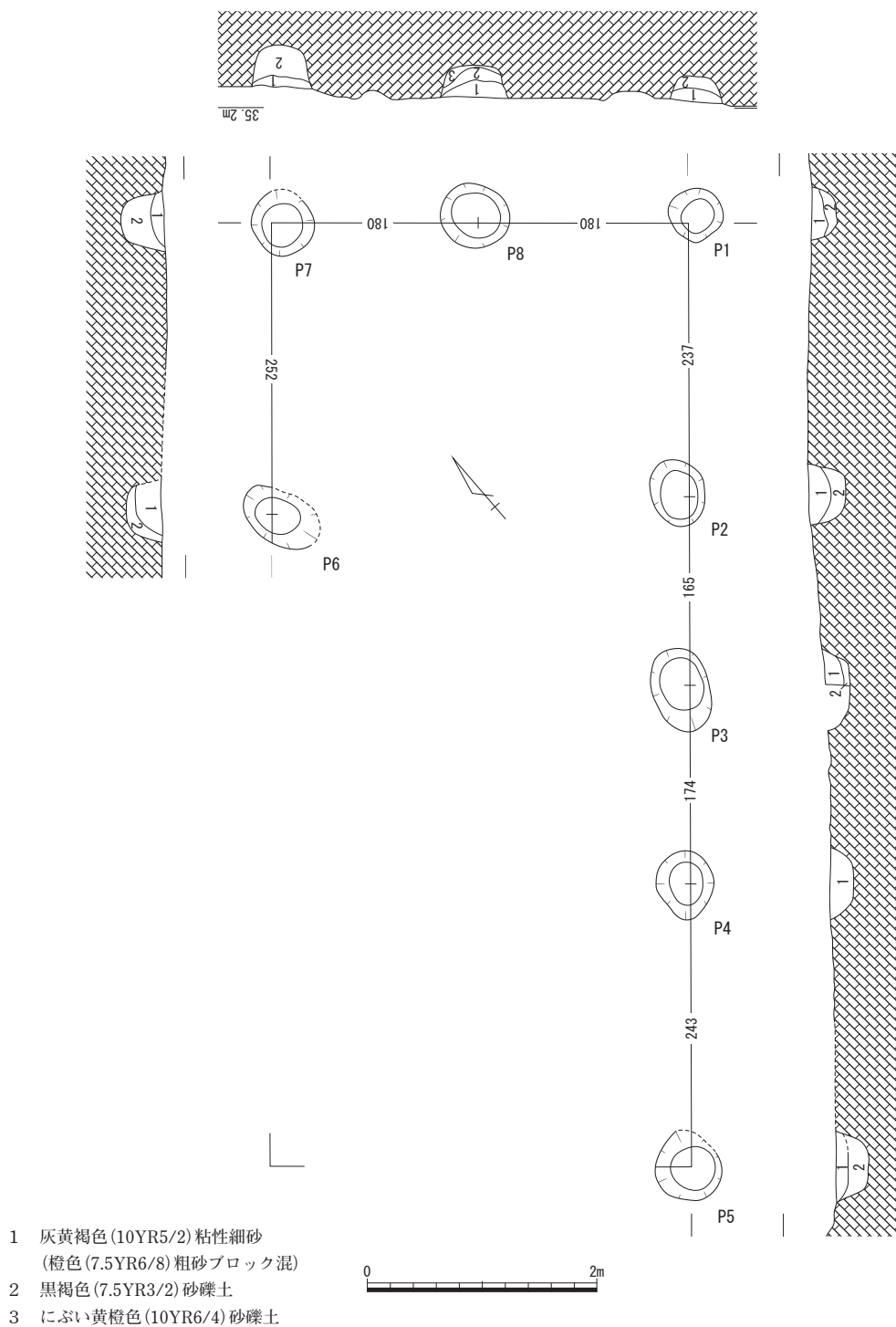


第105図 掘立柱建物9 (1/60)・出土遺物 (1/4)

恵器の杯・甕など、土師器の椀や赤色精製土器と製塩土器203、さらに小片の鉄滓があり、これらから埋没時期は9世紀代と考えられる。(氏平)

掘立柱建物10 (第94・106図、図版12)

掘立柱建物9の東側に位置する。規模は4×2間だが、P5・P6の南西側は調査対象外で、柱穴の有無が確認できなかった。また、現状で面積と柱数が建物8・9とほぼ同じである。柱穴は平面が

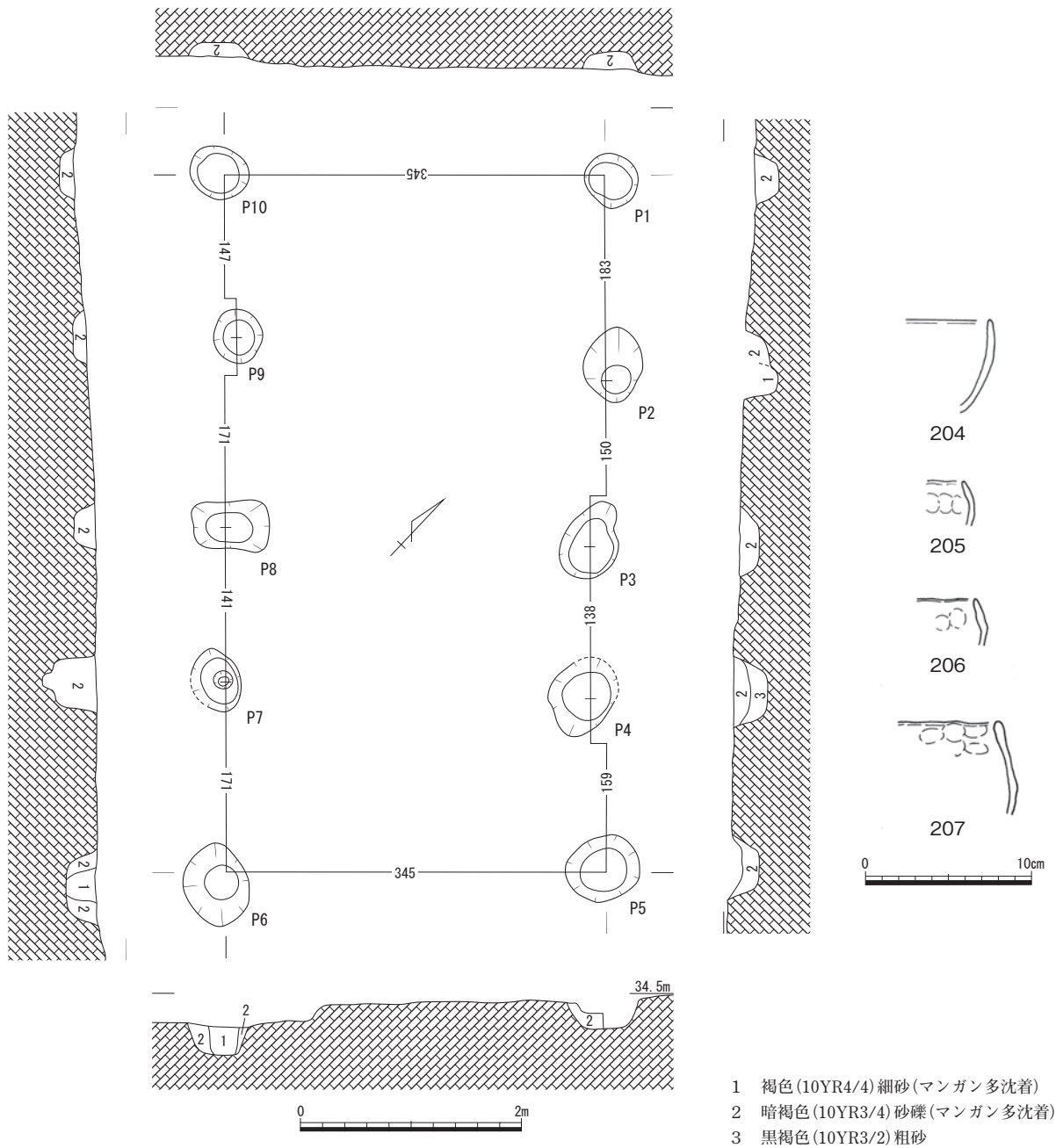


第106図 掘立柱建物10 (1/60)

楕円形を呈するものが多く、直径は45～75cmを測る。堆積状況では柱痕は確認できない。埋土は第1層が地山より若干暗い色調だが、第2層は黒褐色を呈する。出土遺物には須恵器の高杯・甕、土師器の甕・椀・鉢と赤色精製土器を含む皿、製塩土器があり、埋没時期は9世紀代と考えられる。(氏平)

掘立柱建物11 (第94・107図、図版12)

掘立柱建物10の北東側に位置する。桁行方向は建物9・12と類似し、平面規模は建物12とほぼ同じである。柱穴は平面が不整な楕円形を呈するものが多く、直径50～75cmを測る。堆積状況では、P6で直径25cmの柱痕を確認し、P2の第1層も柱痕の可能性もある。また、P7の底面には柱の圧痕か

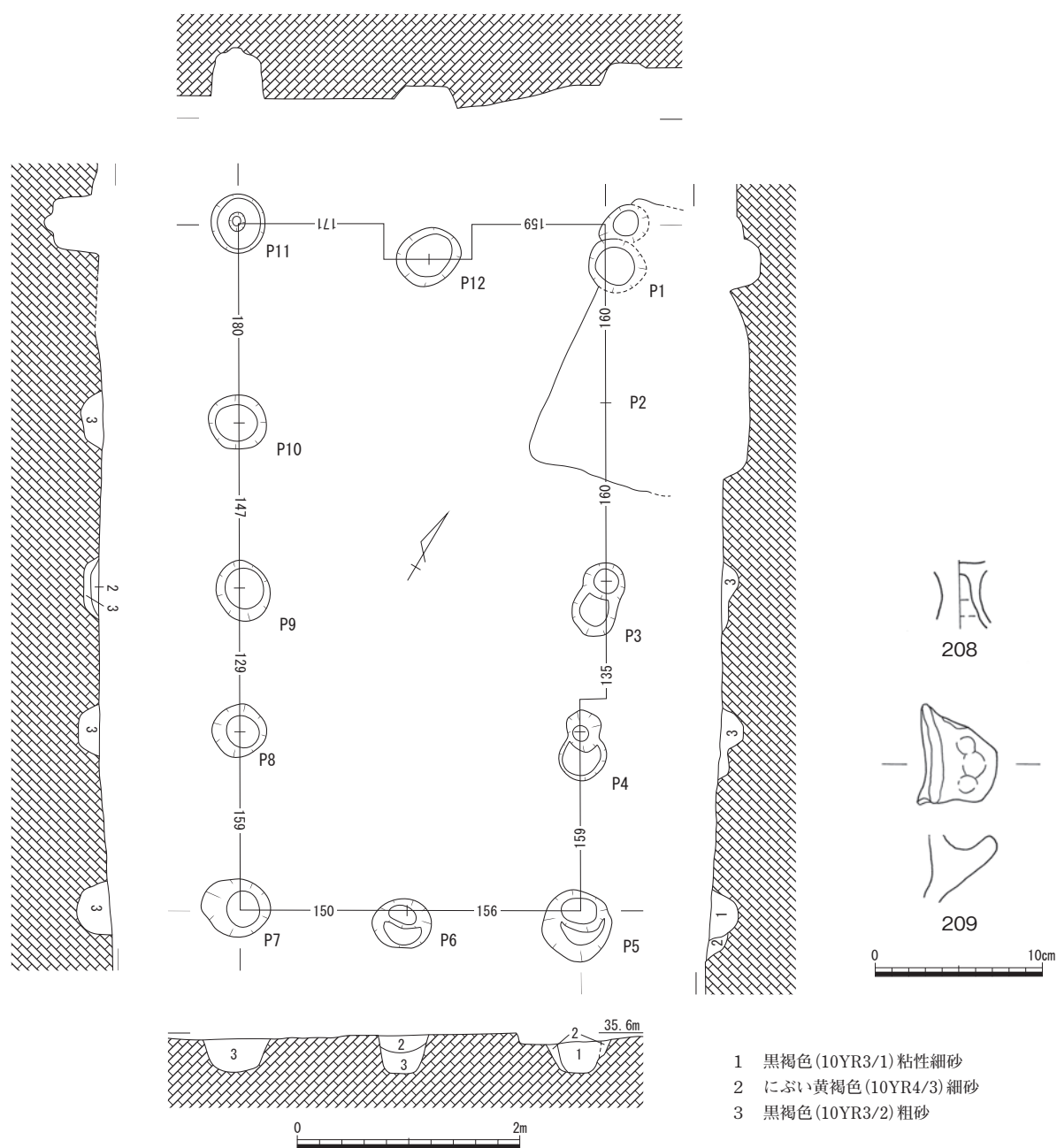


第107図 掘立柱建物11 (1/60)・出土遺物 (1/4)

と思われる窪みが残る。出土遺物は須恵器の高杯・壺・甕、土師器碗204・甕・赤色精製を含む皿、さらに製塩土器205～207があり、時期は建物9などに近い9世紀代であろうか。(氏平)

掘立柱建物12 (第94・108図、図版12)

掘立柱建物11の北東側に位置する。平面規模は建物11とほぼ同じである。柱穴は平面が楕円形を呈するものが多く、直径45～65cmを測る。P11の底面には柱の圧痕かと思われる窪みが残る。またP1・P3・P4では新旧2時期の柱穴が重複している可能性があり、建て替えが想定できる。出土遺物は須恵器が高杯208・杯・甕など、土師器は把手209や碗・赤色精製を含む皿、さらに製塩土器があり、時期は建物9～11と同じ9世紀代と思われる。(氏平)

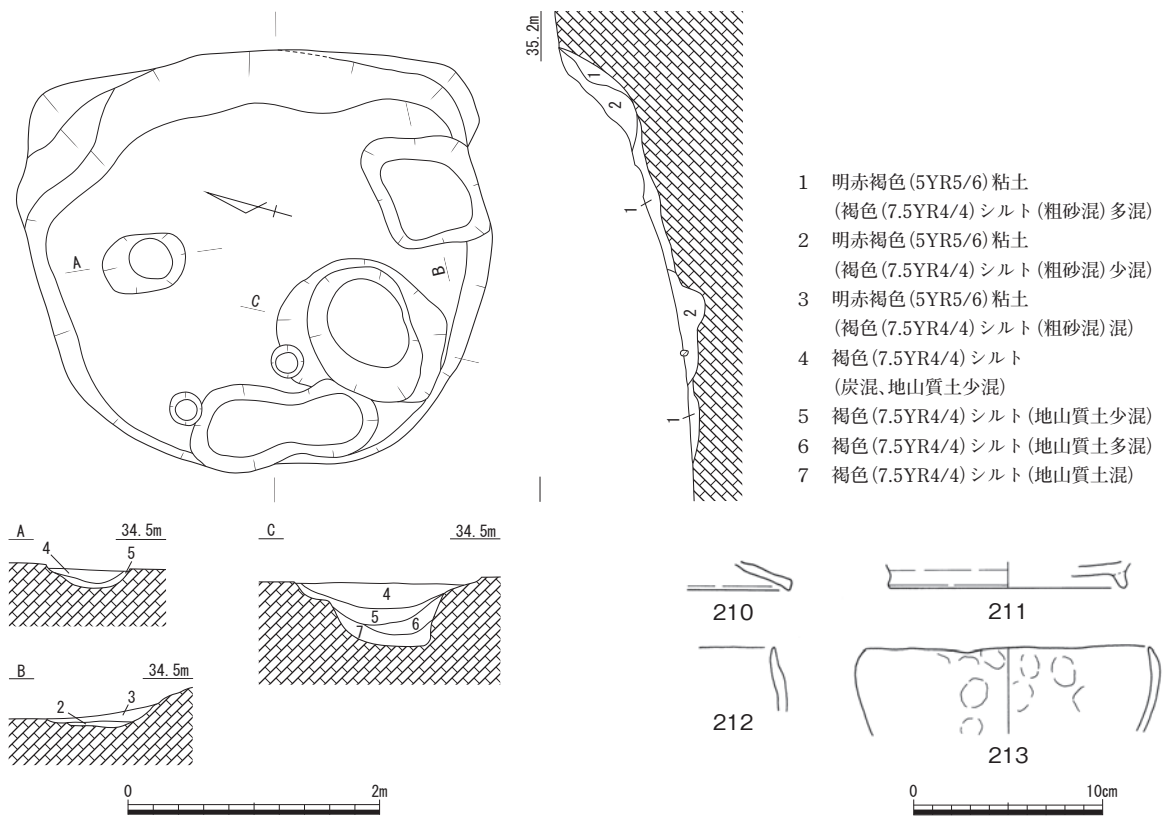


第108図 掘立柱建物12 (1/60)・出土遺物 (1/4)

3 段状遺構

段状遺構9 (第93・109図、図版11・16)

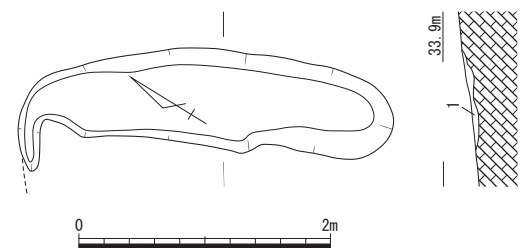
掘立柱建物1の南東約1mに位置する遺構で、平面は円形に近い隅丸方形を呈する。丘陵裾部から谷部への地形の変換点を利用して形成されている。長軸長361cm、短軸長329cmを測り、内部に柱穴上のピットをいくつか検出したが、配置が不規則であるため、この遺構に伴うものでない可能性もある。また、床面は平らではなく、やや斜めになっているため、居住の用途で用いられたかどうか不明である。出土遺物には土師器杯蓋210、杯身211のほか、製塩土器212・213がある。遺構の時期は、出土遺物から9世紀前半と考えられ、近在する大型の掘立柱建物1と時期的な併行関係があるため、関連する施設であるかもしれないが、詳細は不明である。(河合)



第109図 段状遺構9 (1/60)・出土遺物 (1/4)

段状遺構10 (第93・110図)

掘立柱建物3の南東約4mに位置する遺構で、溝と思われる部分がかろうじて残っていると考えられる。現存する長さは297cm、幅は79cmであり、丘陵裾部から谷部への地形の変換点を利用して形成されたものと考えられる。出土遺物は若干の土師器片がある。遺構の時期は判断の材料に乏しいが、土器片と埋土、それから周辺で検出された遺構との関係から、平安時代の範疇と考えておきたい。(河合)

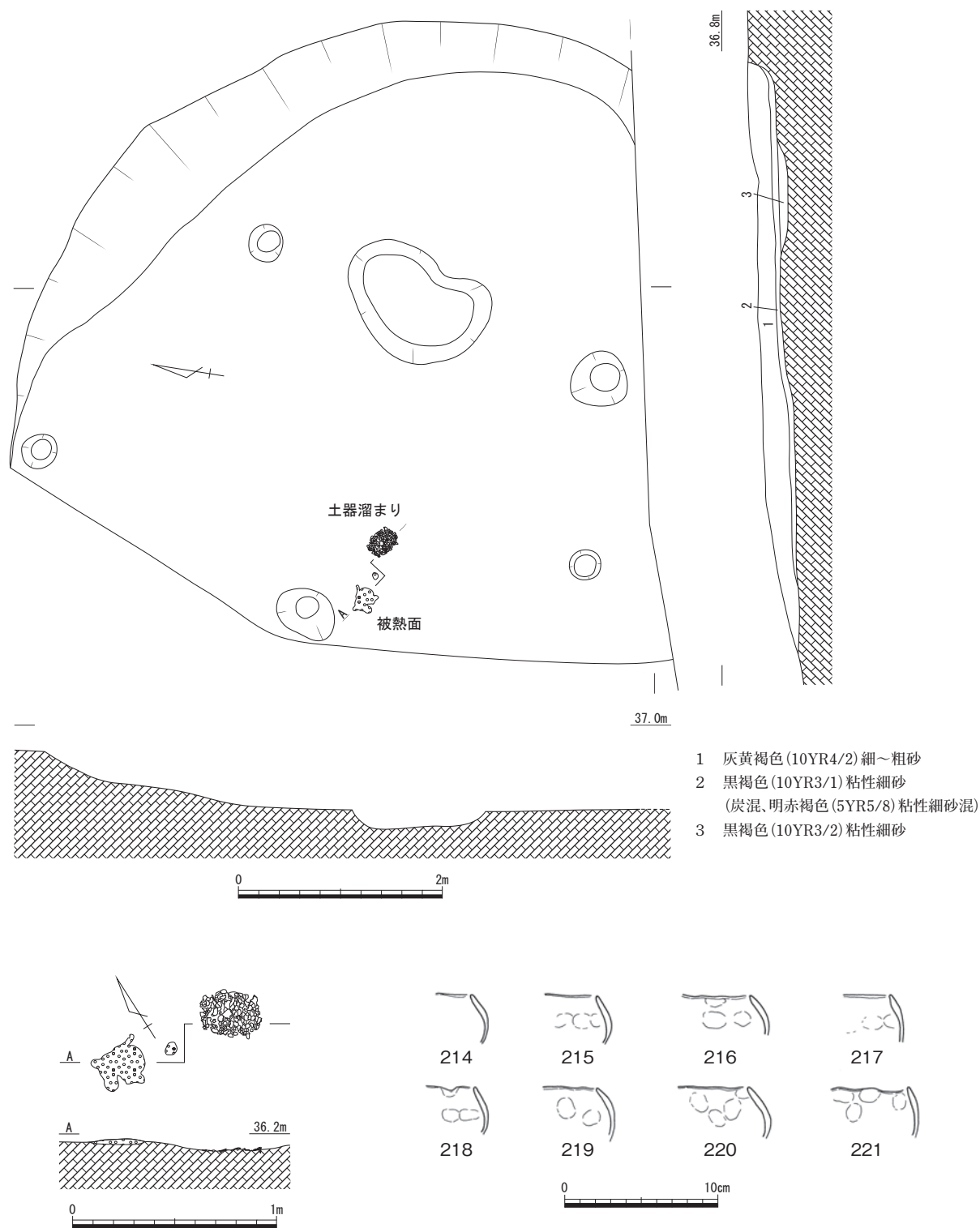


- 1 褐色(7.5YR4/3)シルト
(炭・焼土多混、明黄褐色(10YR6/6)粘土混)

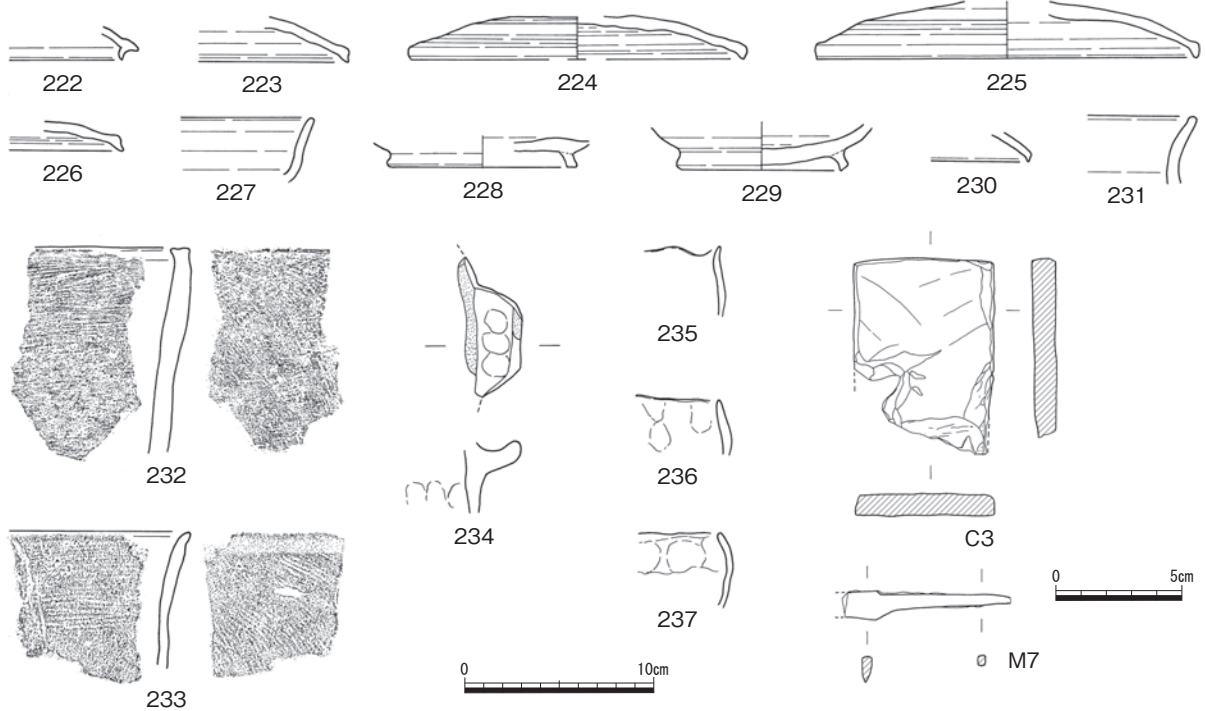
第110図 段状遺構10 (1/60)

段状遺構11 (第93・111・112図、図版17・23・28・30)

急斜面から緩斜面に移行する丘陵裾、7 Fの北西隅に位置する段状遺構である。段状遺構10の約40 m東の斜面上方にある。床面の柱穴の深さは7~35cm、不整形の土坑の深さは18cmを測る。24×20cmを測る被熱面は長方形を呈するように見え、被熱による赤色化は厚さ3 cmを測る。その30cm東に製塩土器片がまとまって出土し、重量は口縁部317.9 g、その他549.0 gを測る。口縁部214~221を図示し



第111図 段状遺構11 (1/60・1/30)・出土遺物 (1/4)



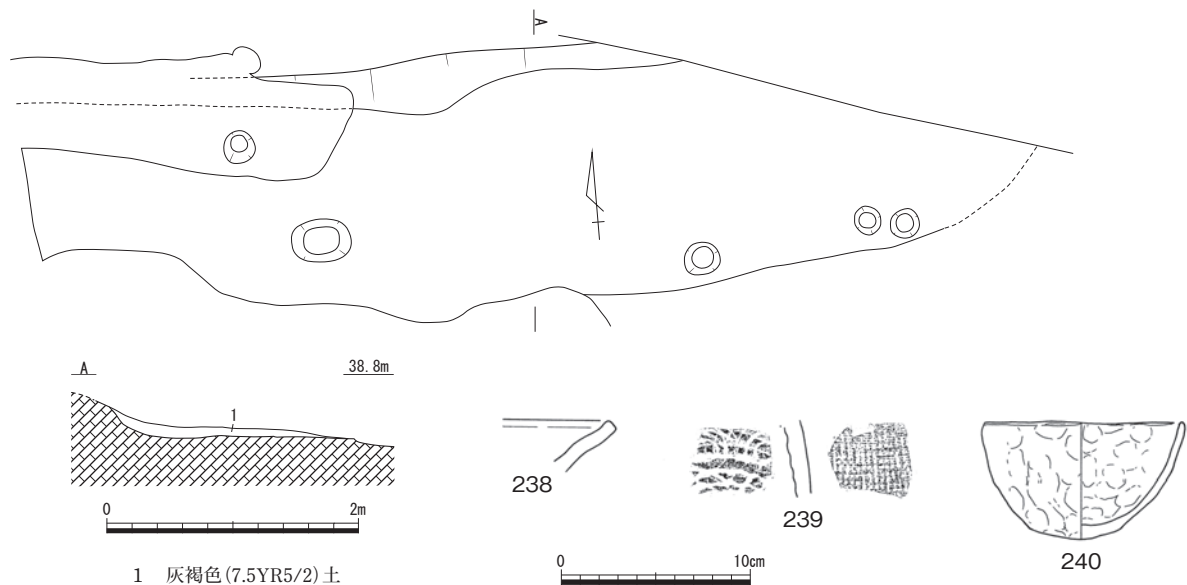
第112図 段状遺構11出土遺物 (1/4・1/3)

た。遺構の流入土出土遺物として須恵器片222～229、土師器片230～234や製塩土器片235～237、須恵器の転用甕C3、刀子M7を図示した。中でも下層出土は225・226・229～231・233・234・236・237、ほぼ床面出土が232である。

出土遺物から、遺構の時期は8世紀中頃と考えられる。(柴田)

段状遺構12 (第93・113図、図版23)

6・7G境で検出した。南側を削平されているが、規模は残存長で長軸800cm、短軸199cmを測る。平坦面では柱穴を5個検出しており、段状遺構に伴う可能性が高い。埋土中から須恵器甕238・239、粗製の土師器碗240が出土している。時期は出土遺物等からみて8世紀と考えられる。(石田)



第113図 段状遺構12 (1/60)・出土遺物 (1/4)

4 柱穴列

柱穴列1 (第93・114図、図版11)

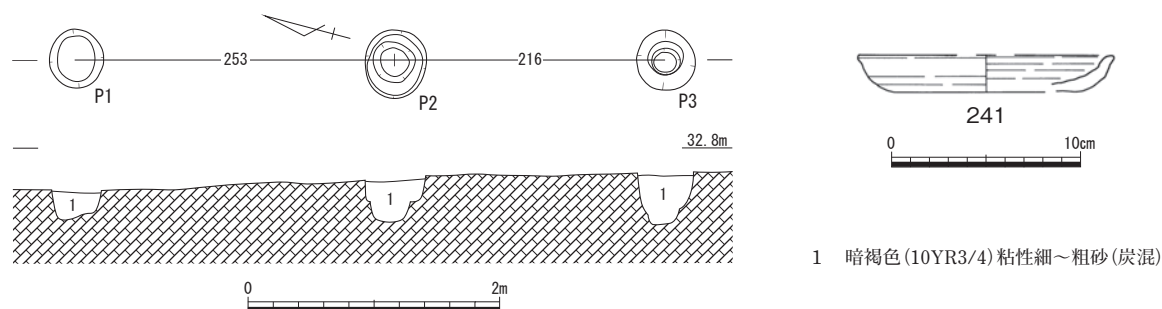
5 Cに位置する。3個の柱穴が南北方向に連なっており、長さは469cm、柱間距離は216～253cmを測る。柱穴の規模は直径45～55cmを測り、柱穴内に残された柱痕から推定される柱の太さは20cm前後である。方向はN-15°-Wとなる。出土遺物は、土師器の皿241がある。遺構の時期は、11～12世紀と考えられる。(藤井)

柱穴列2 (第93・115図)

柱穴列1の南東約30mの地点に位置する。3個の柱穴が南北方向に連なっており、長さは459cm、柱間距離は172～287cmを測る。柱穴の大きさは直径60～80cmで、方向はN-30°-Wとなる。東側の斜面と掘立柱建物群を区画するような構造物が想定される。遺構の時期は、埋土や周辺の状態から平安時代と考えられる。(藤井)

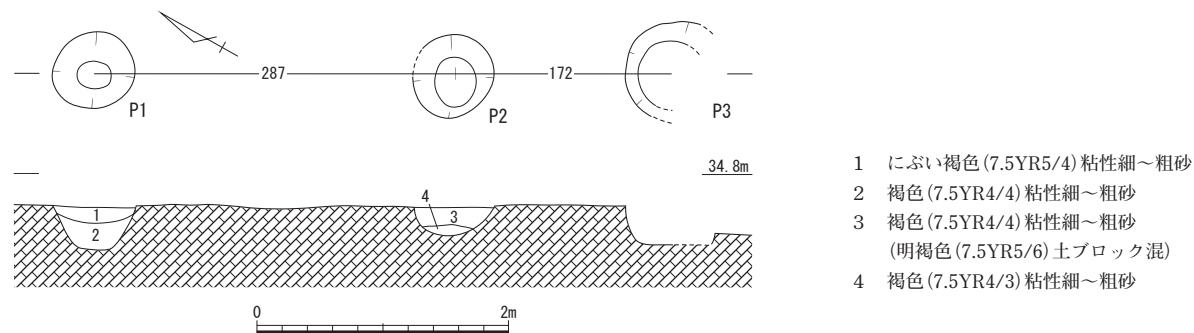
柱穴列3 (第93・116図)

6 Dの南西側に位置する。北から北西側にかけて掘立柱建物3～5が近接して存在する。現状での規模は3間で、柱間距離は130～160cm前後である。本柱穴列は位置関係から、掘立柱建物3～5を遮蔽する機能があったと推定できる。柱穴埋土から須恵器の高杯脚242が出土した。時期は9世紀代であったと考える。(小林)



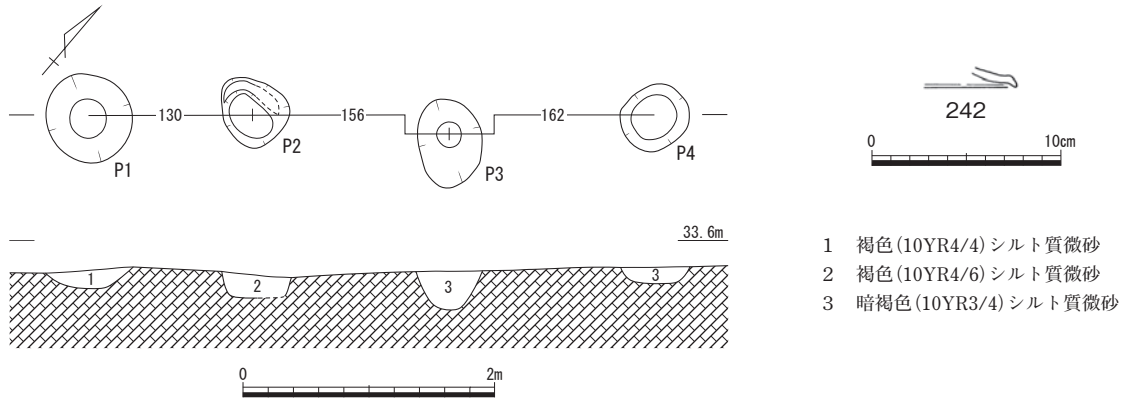
1 暗褐色(10YR3/4)粘性細～粗砂(炭混)

第114図 柱穴列1 (1/60)・出土遺物 (1/4)



- 1 にぶい褐色(7.5YR5/4)粘性細～粗砂
- 2 褐色(7.5YR4/4)粘性細～粗砂
- 3 褐色(7.5YR4/4)粘性細～粗砂
(明褐色(7.5YR5/6)土ブロック混)
- 4 褐色(7.5YR4/3)粘性細～粗砂

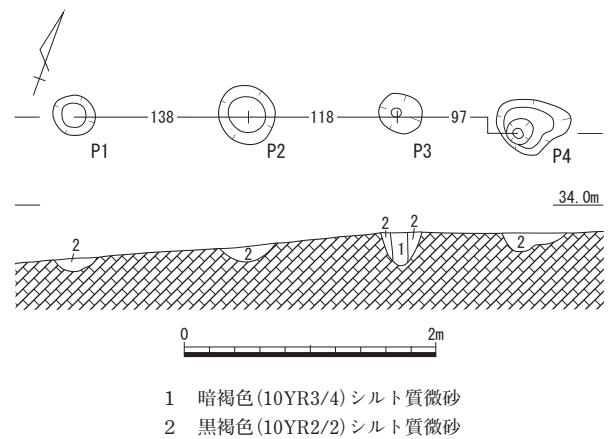
第115図 柱穴列2 (1/60)



第116図 柱穴列3 (1/60)・出土遺物 (1/4)

柱穴列4 (第93・117図)

6 Dの南側に位置する。南東方向に近接して掘立柱建物7が、南西側2 m付近に掘立柱建物6が存在する。本柱穴列は、南東側にある掘立柱建物7・8を遮蔽する機能が推定でき、時期も同様になるであろう。(小林)



第117図 柱穴列4 (1/60)

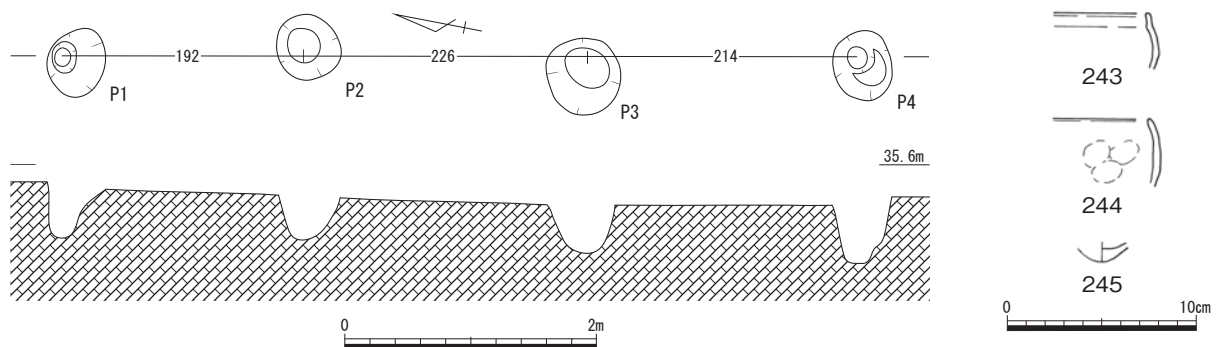
柱穴列5 (第93・118図)

7 Eの中央から北側付近に位置する。西側8 m付近に掘立柱建物8が、東側7 m付近に鍛冶炉5が離れて存在する。規模は3間で、柱間距離は約190～230cmである。本柱穴列は、西側にある掘立柱建物7・8と東側の遺構群を画する役割があったと考える。出土遺物は243～245で、製塩土器である。(小林)

柱穴列6 (第93・119図)

急斜面から緩斜面に移行する丘陵裾、7 Fの北西隅に位置する柱穴列である。柱穴列5の約12m東の斜面上方にあり、検出面の比高は0.9mを測る。5個の柱穴が確認でき、おおむね等高線に平行して東西方向に延びる。柱穴は径24～45cm、深さ5～25cmを測る。P3では径12cmの柱痕跡が認められた。

P3から黒色土器片246、P4から土師器片247が出土している。



第118図 柱穴列5 (1/60)・出土遺物 (1/4)

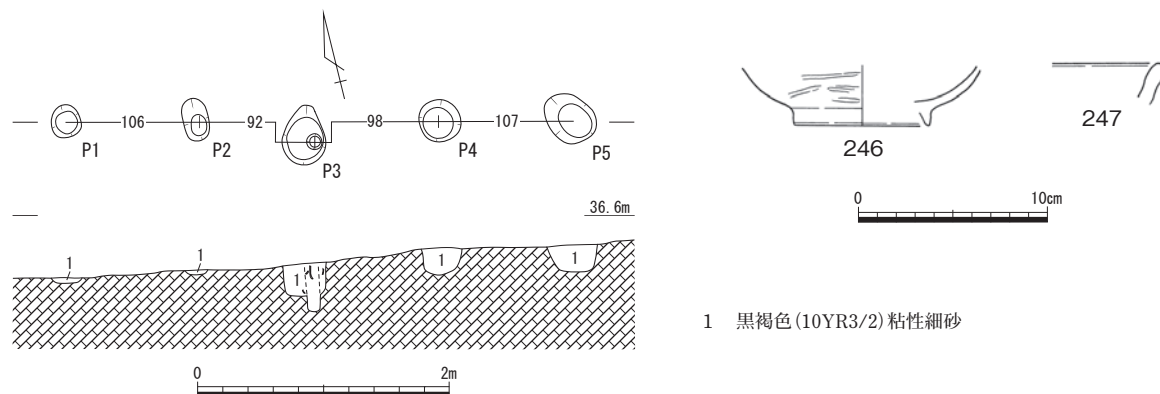
出土遺物から遺構の時期は10世紀後半と考えられる。(柴田)

柱穴列7 (第93・120図)

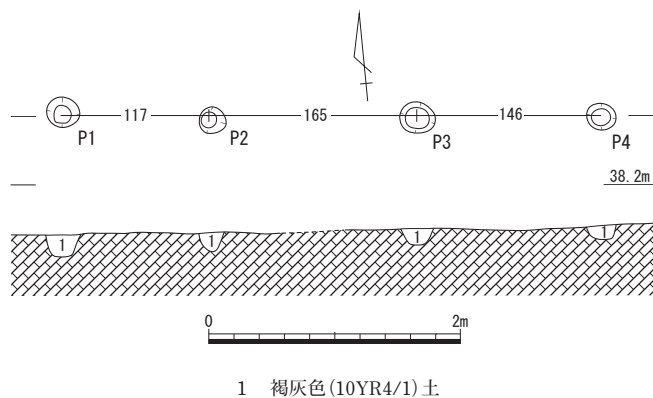
7 Gで検出した柱穴列で、柱穴列8のすぐ西に位置する。規模は3間で、全長は428cmを測り、方向はN-85°-Wを示す。柱穴の規模は長軸で30cm程度と小さい。柱穴埋土から土師器小片が出土しているが図示できるものはなかった。時期は平安時代の範疇と考えられる。(石田)

柱穴列8 (第93・121図)

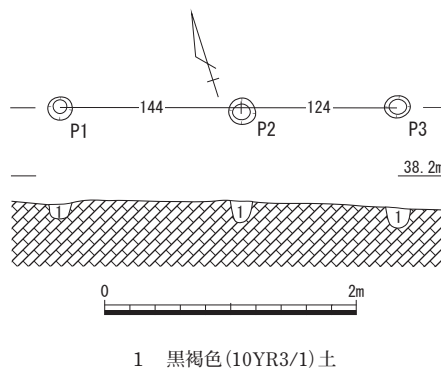
柱穴列7のすぐ東に位置する。規模は2間で、全長は268cmを測り、方向はN-72°-Wを示す。柱穴の規模は長軸で20cm程度と小さい。柱穴埋土から土師器小片が出土しているが図示できるものはなかった。時期は平安時代の範疇と考えられる。(石田)



第119図 柱穴列6 (1/60)・出土遺物 (1/4)



第120図 柱穴列7 (1/60)



第121図 柱穴列8 (1/60)

5 土坑

土坑6 (第92・122図)

4 Bに位置する。竪穴遺構1古の底面で検出した。平面形は不整な円形、断面形は楕形を呈している。規模は長軸が91cm、短軸73cm、検出面からの深さは21cmを測る。図示できる遺物はなかったが、埋土の特徴から奈良時代と考えられる。(石田)

土坑7 (第92・123図)

3 B南東隅に位置する。平面形は楕円形で、断面形は皿状を呈する。規模は長軸が123cm、短軸が

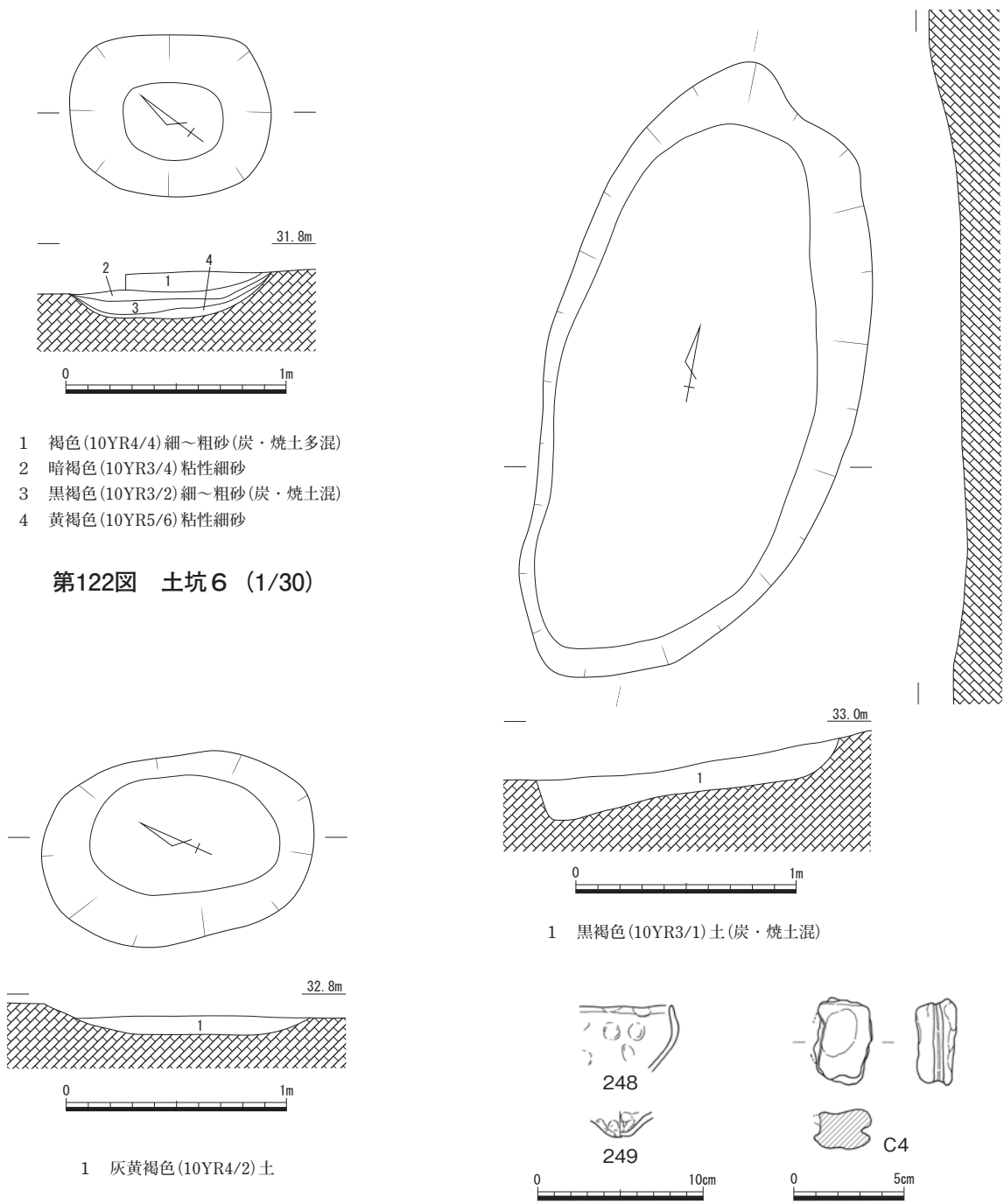
85cmを測る。上部は削平を受けており検出面からの深さは8cmと浅い。図示できる遺物はなかったが、須恵器及び土師器の小片が出土しており、時期は奈良時代の範疇と考えられる。(石田)

土坑8 (第92・124図、図版28)

土坑7の南東約2mに位置する土坑である。平面形は楕円形で、断面形は皿状を呈する。規模は長軸が290cm、短軸が136cm、検出面からの深さは18cmを測る。

埋土中から製塩土器248・249、土錘C4が出土している。図示できなかったが、丹塗り土師器の小片や須恵器・土師器の甕片も出土している。

土坑の時期は、これらの出土遺物からみて、奈良時代と考えられる。(石田)



- 1 褐色(10YR4/4)細～粗砂(炭・焼土多混)
- 2 暗褐色(10YR3/4)粘性細砂
- 3 黒褐色(10YR3/2)細～粗砂(炭・焼土混)
- 4 黄褐色(10YR5/6)粘性細砂

第122図 土坑6 (1/30)

1 黒褐色(10YR3/1)土(炭・焼土混)

1 灰黄褐色(10YR4/2)土

第123図 土坑7 (1/30)

第124図 土坑8 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/3)

土坑9 (第92・125図)

土坑8の南約2.5mに位置する。平面形は不整な円形で、断面形は皿状を呈する。規模は長軸が91cm、短軸が82cmを測る。上部は削平を受けており検出面からの深さは5cmと浅い。図示できる遺物はなかったが、須恵器及び土師器の小片が出土している。時期は奈良時代の範疇と考えられる。(石田)

土坑10 (第93・126図)

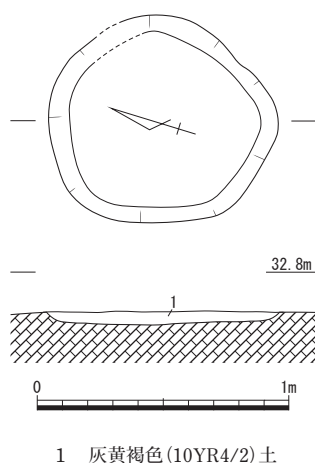
7Bの北西側に位置する。不整形で、規模は74×71cm、深さは14cmを測る。断面形は碗形を呈し、埋土は砂質の上層と粘質の下層に分けられる。検出レベルは標高31.80mであるが、上面は整地による削平を受けている可能性が高い。遺構の時期は古代と考えられる。(藤井)

土坑11 (第93・127図)

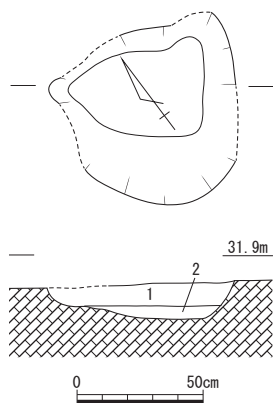
土坑10の北東約10mの地点に位置する。不整形で、規模は191×185cm、深さは38cmを測る。土坑10と同様、上面は整地による削平を受けている可能性が高い。遺物は出土していないが、埋土の状況などから遺構の時期は平安時代と考えられる。(藤井)

土坑12 (第93・128図)

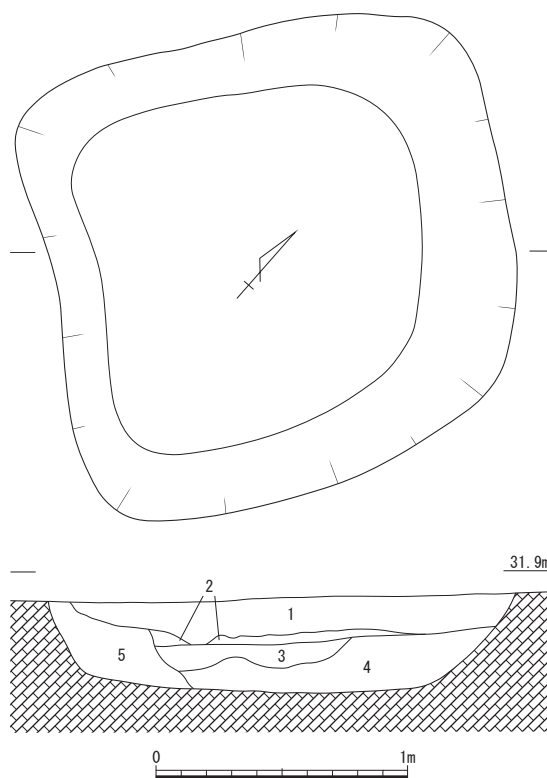
5Cの中央よりやや北側に位置する。北側に近接して掘立柱建物2が存在する。長軸長63cm、短軸



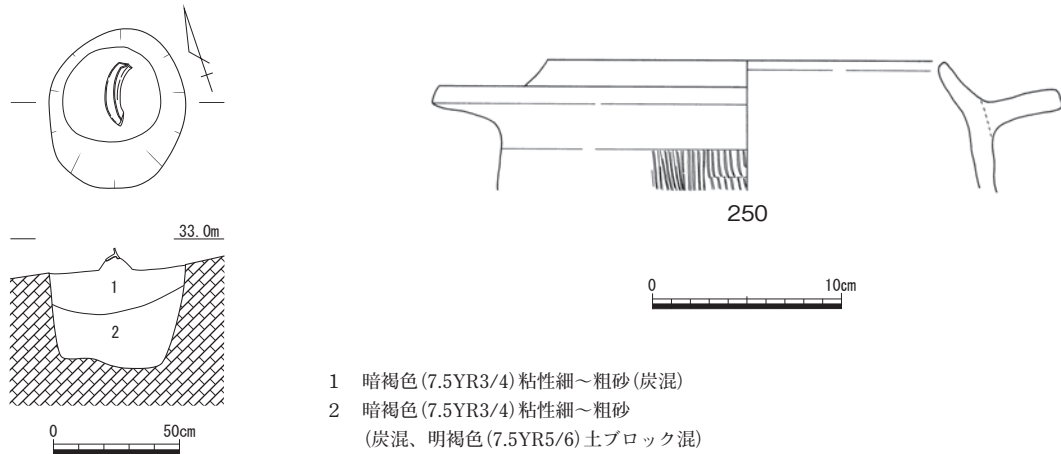
第125図 土坑9 (1/30)



第126図 土坑10 (1/30)



第127図 土坑11 (1/30)



- 1 暗褐色(7.5YR3/4)粘性細～粗砂(炭混)
- 2 暗褐色(7.5YR3/4)粘性細～粗砂
(炭混、明褐色(7.5YR5/6)土ブロック混)

第128図 土坑12 (1/30)・出土遺物 (1/4)

長54cmで、検出面からの深さは43cmになり、底面の標高は32.49mである。平面形状は楕円形で、断面形状は鉢形を呈する。埋土の上面から250が出土し、羽釜もしくは甕形土器の脩部分である。本遺構の時期は、周辺の遺構の状況から9世紀代と考える。(小林)

土坑13 (第93・129図、図版23)

5 Cの中央よりやや南東側に位置する。北側6m付近に掘立柱建物2、南側10m付近に掘立柱建物3があり、そのほぼ中間地点に存在する。長軸長30cm、短軸長26cmの柱穴状の遺構である。埋土から土師器甕251が口縁部を上にした状態で出土し、その中に土師器杯252がやはり正位置で入っていた。埋納遺構と考えられ、時期は9世紀後半であろう。(小林)

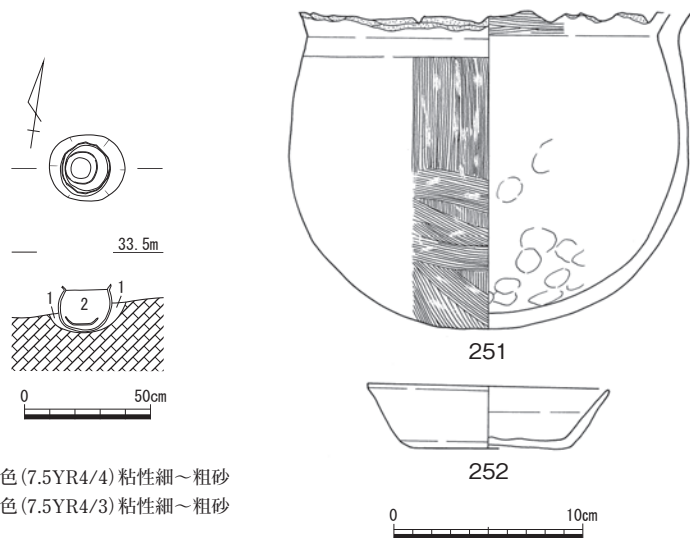
土坑14 (第93・130図、図版18・23)

5 Cの南東側に位置する。南側8m付近に掘立柱建物3が存在する。長軸長46cm、短軸長44cmで、検出面からの深さは23cmである。平面は不整形、断面は碗形を呈する。埋土の上面から、完形に近い形で複数の遺物が出土する。253土師器碗、254・255は黒色土器碗、256～259は土師器杯、260・261は土師器皿、263は灰釉陶器で黒笹90号窯式である。本遺構の時期は、9世紀後葉～10世紀前葉であろう。(小林)

土坑15 (第93・131図)

段状遺構9の南50cmに位置する土坑で、平面は不整形を呈する。長軸長143cm、短軸長125cm、深さ14cmを測り、断面は皿形を呈する。

出土遺物には、土師器杯身264、須恵器杯身265がある。遺構の時期は、出土遺物などから9世紀前半と考えられ、近在するほぼ同時期の掘立柱建物1や段状遺構9との関わりで形成された遺構である可能性がある。(河合)

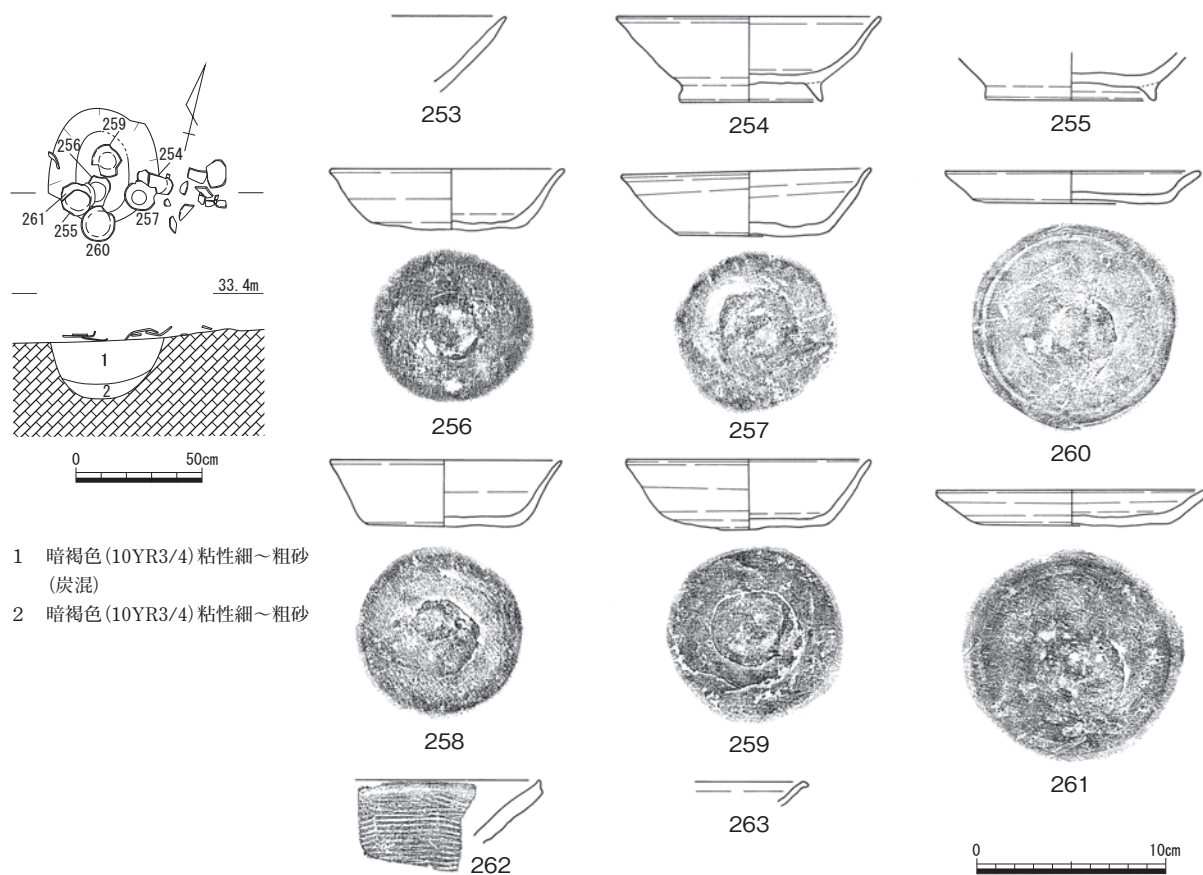


- 1 褐色(7.5YR4/4)粘性細～粗砂
- 2 褐色(7.5YR4/3)粘性細～粗砂

第129図 土坑13 (1/30)・出土遺物 (1/4)

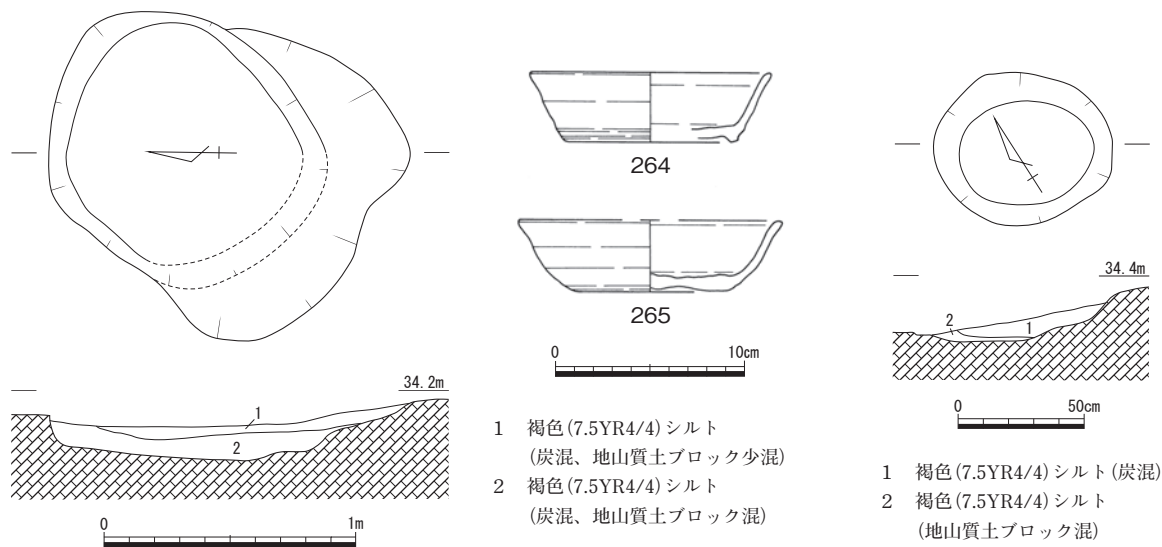
土坑16 (第93・132図)

土坑15の南約1mに位置する土坑で、平面は円形を呈する。長軸長71cm、短軸長60cm、深さ8cmを測り、断面は皿形を呈する。出土遺物はなく、時期を判断する材料に乏しいが、埋土の特徴などから、近在する土坑15や溝14に近い時期と考えておきたい。(河合)



- 1 暗褐色(10YR3/4)粘性細～粗砂(炭混)
- 2 暗褐色(10YR3/4)粘性細～粗砂

第130図 土坑14 (1/30)・出土遺物 (1/4)



- 1 褐色(7.5YR4/4)シルト(炭混、地山質土ブロック少混)
- 2 褐色(7.5YR4/4)シルト(炭混、地山質土ブロック混)

- 1 褐色(7.5YR4/4)シルト(炭混)
- 2 褐色(7.5YR4/4)シルト(地山質土ブロック混)

第131図 土坑15 (1/30)・出土遺物 (1/4)

第132図 土坑16 (1/30)

土坑17 (第93・133図)

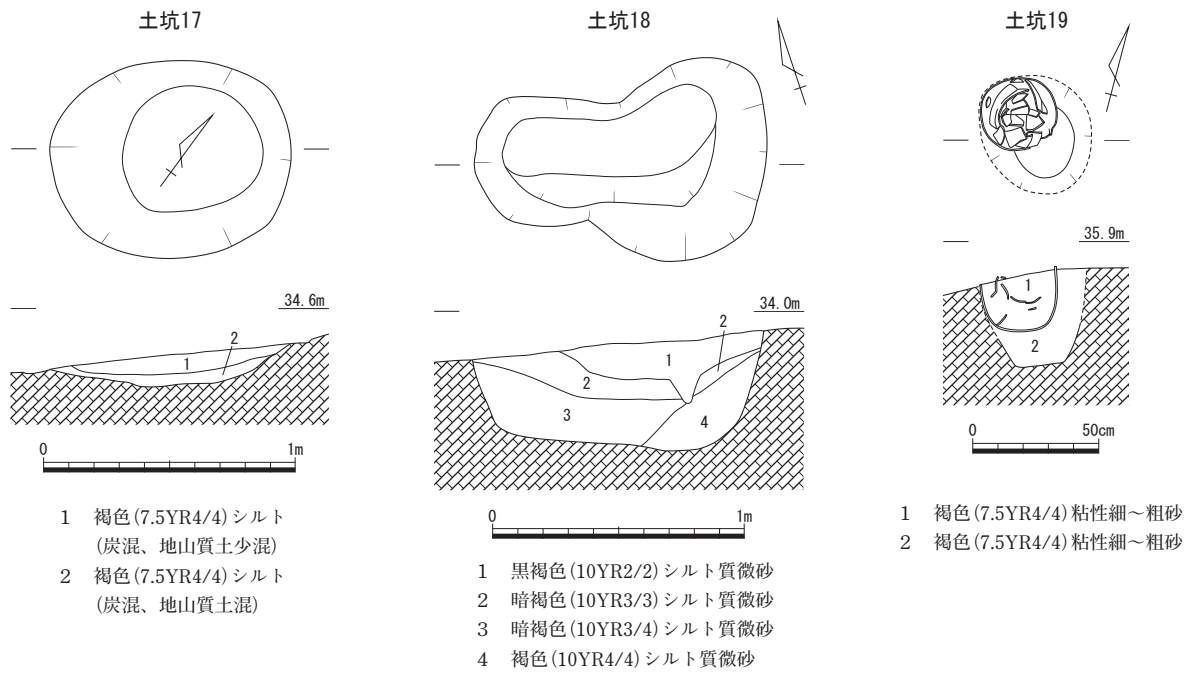
土坑16の南東50cmに位置する土坑で、平面は円形を呈する。長軸長95cm、短軸長78cm、深さ12cmを測る。埋土の特徴などから、近在する土坑16とほぼ同時期と考えておきたい。(河合)

土坑18 (第93・133図)

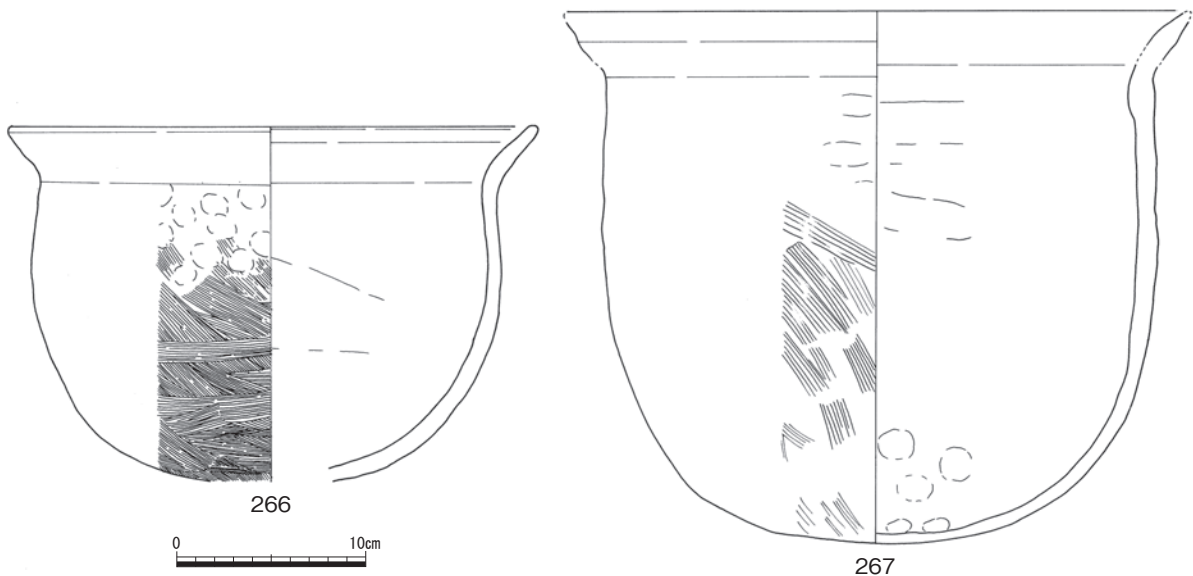
6 Dのほぼ中央付近に位置する。北西側2 m付近に段状遺構10が、南西側4 m付近に柱穴列4が存在する。規模は、長軸長116cm、短軸長47cmを測る。検出面からの深さ44cmで、底面の標高は33.44mを測る。平面形状は不整形で、断面形状は椀形である。(小林)

土坑19 (第93・133・134図、図版18・24)

6 Eの北西側に位置する。直径43～46cmを測る円形の掘り方を有し、検出面からの深さは38cmであ



第133図 土坑17～19 (1/30)



第134図 土坑19出土遺物 (1/4)

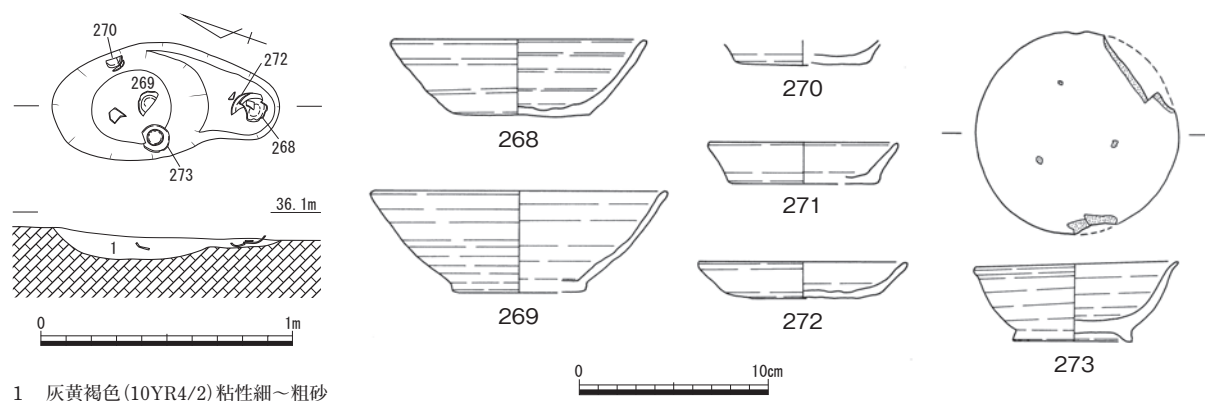
る。土坑内からは2つの甕が出土している。267は土坑内から正立状態でみつかった甕で、口縁部以外はほぼ完形で出土した。266は267の内部から出土した甕で、底部以外はほぼ完形に復元することができた。遺構の時期は、出土遺物から11世紀後半頃と考えられる。(藤井)

土坑20 (第93・135図、巻頭図版3、図版19・24)

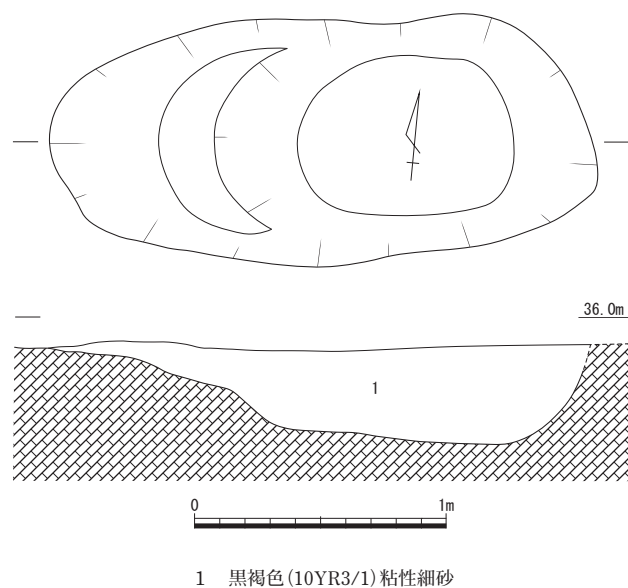
土坑19の南東約7mの地点に位置する。90×46cmの不整楕円形を呈する土坑で、検出面からの深さは9cmである。268・269は須恵器の椀、270・271は土師器の杯、272は土師器の皿、273は口径10.6cm、器高4.3cmを測る近江産の緑釉陶器の椀である。遺構の時期は10世紀後半から11世紀前半であるが、新相を示す268、272は土坑の南半から他の土器とやや離れて出土しており、時期の異なる2つの土坑だった可能性がある。(藤井)

土坑21 (第93・136図)

7F北西で検出し、土坑20の南東約21mに位置する。検出面での長軸は215cm、短軸は91cmで、平面形は不整楕円形である。遺構の時期は、遺物が出土していないため不明瞭だが、東に近接する段状



第135図 土坑20 (1/30)・出土遺物 (1/4)



第136図 土坑21 (1/30)

遺構11の埋土と同じ色調・質であることから、8世紀代の可能性が高い。(森本)

土坑22 (第93・137図、図版19・24)

7G北西に位置する。平面形は不整な円形で、断面形は椀状を呈する。規模は長軸が69cm、短軸が56cm、検出面からの深さは13cmを測る。南側部分を鎌倉時代の掘立柱建物17の柱穴に切られている。埋土は2層からなるが、下層埋土(第2層)は多くの炭片を含んでいた。この下層埋土の上面では土師器杯274・275、土師器皿276～283がまとまって出土した。

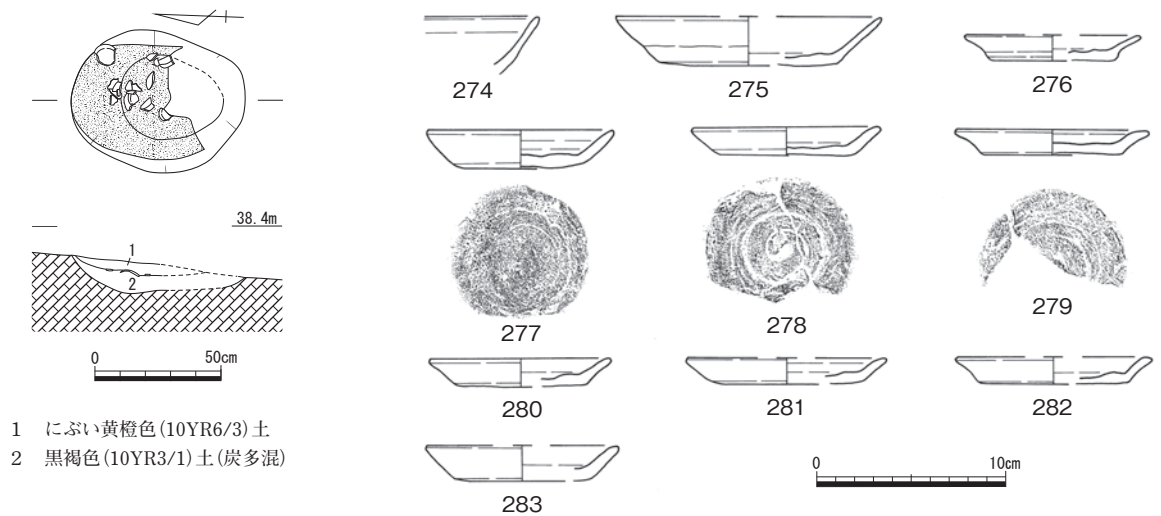
土坑の時期は、出土遺物からみて12世紀前半と考えられる。(石田)

土坑23 (第93・138図)

土坑22の東約4mに位置する土坑である。平面形は不整形で、断面形は皿状を呈する。規模は長軸が336cm、短軸が174cm、検出面からの深さ17cmを測る。埋土中から土師器杯284と甑285が出土した。時期は出土遺物からみて、平安時代の範疇と考えられる。(石田)

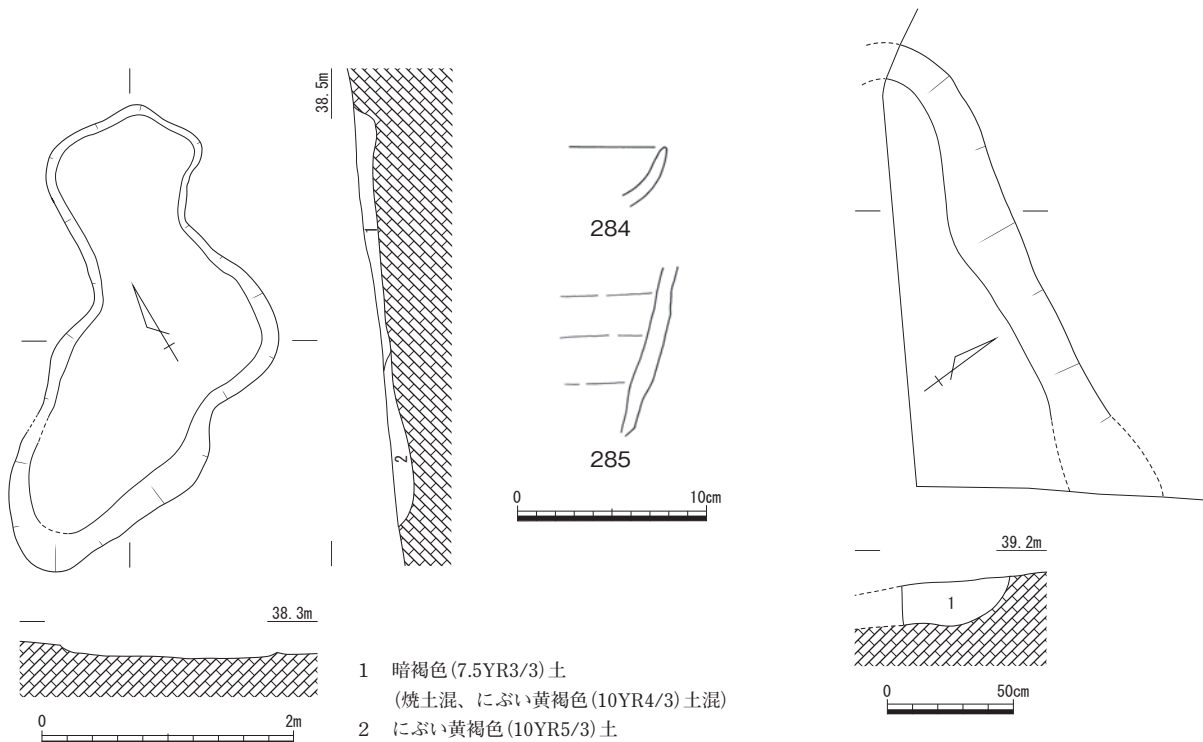
土坑24 (第93・139図)

土坑23の北東約9mに位置する土坑である。平面形は不整形で、断面形は碗状を呈する。規模はいずれも残存長で、長軸175cm、短軸46cm、検出面からの深さ18cmを測る。図示できる遺物はなかったが、土師器と黒色土器の小片が出土している。時期は平安時代に属すると考えられる。(石田)



- 1 にふい黄橙色(10YR6/3)土
- 2 黒褐色(10YR3/1)土(炭多混)

第137図 土坑22 (1/30)・出土遺物 (1/4)



- 1 暗褐色(7.5YR3/3)土
(焼土混、にふい黄褐色(10YR4/3)土混)
- 2 にふい黄褐色(10YR5/3)土

- 1 灰黄褐色(10YR4/2)土

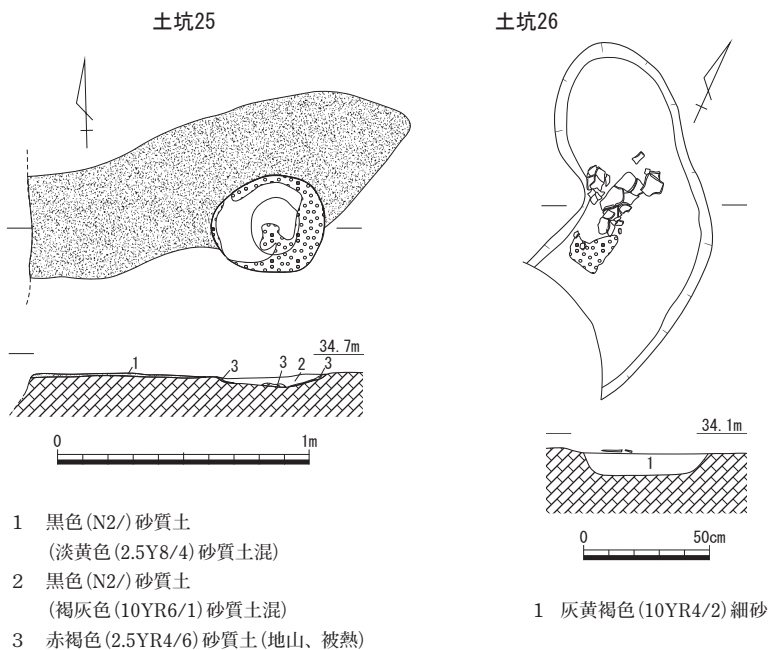
第138図 土坑23 (1/60)・出土遺物 (1/4)

第139図 土坑24 (1/30)

土坑25 (第94・140図)

8 C南東側に位置する。厚さ2 cm程度の炭化物の広がりとし、その中に楕円形を呈する炭化物集中部分を検出した。炭化物集中部分の内部を掘り下げたところ、その厚さは5 cmで、底面は地山が赤色化した被熱面となっていた。被熱面は外周と中央に強く残り、中央部は輪状を呈する。被熱面が熱影響としては弱く、鍛冶炉の可能性は低いだろう。遺物は土師器などで量は少なく、時期は古代であろうか。

(氏平)



第140図 土坑25・26 (1/30)

土坑26 (第94・140図)

9 D北西部に位置する。掘り下げ中、土師器甕片の集中と炭化物を検出したため、周辺を精査して土坑と認識した。全体は不整形を呈する。土師器片は土坑底面より約9 cm浮いた状態でほぼ水平に堆積していた。出土遺物は土師器甕・椀、製塩土器があり、時期は平安時代であろう。(氏平)

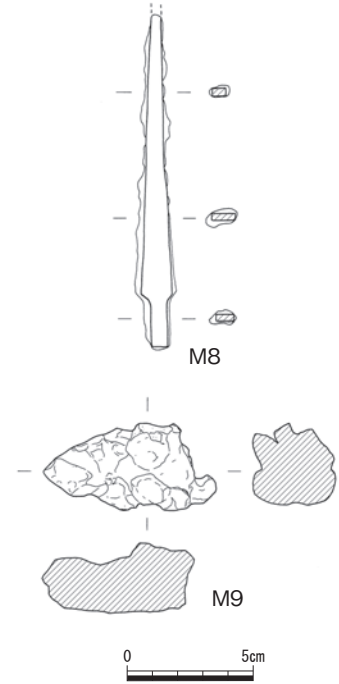
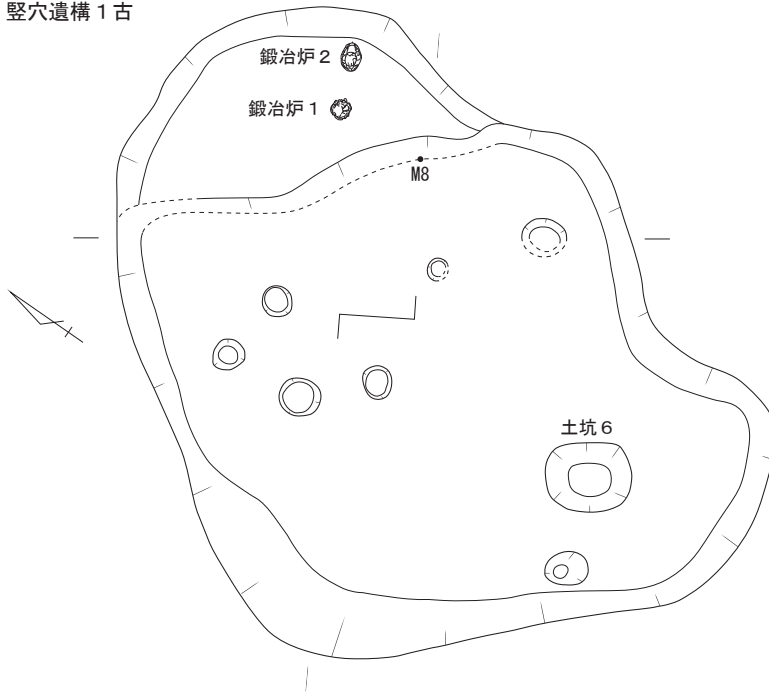
6 竪穴遺構

竪穴遺構1 (第92・141・142図、図版19・24・30)

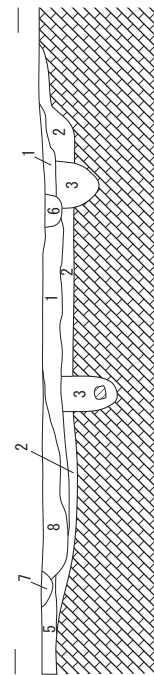
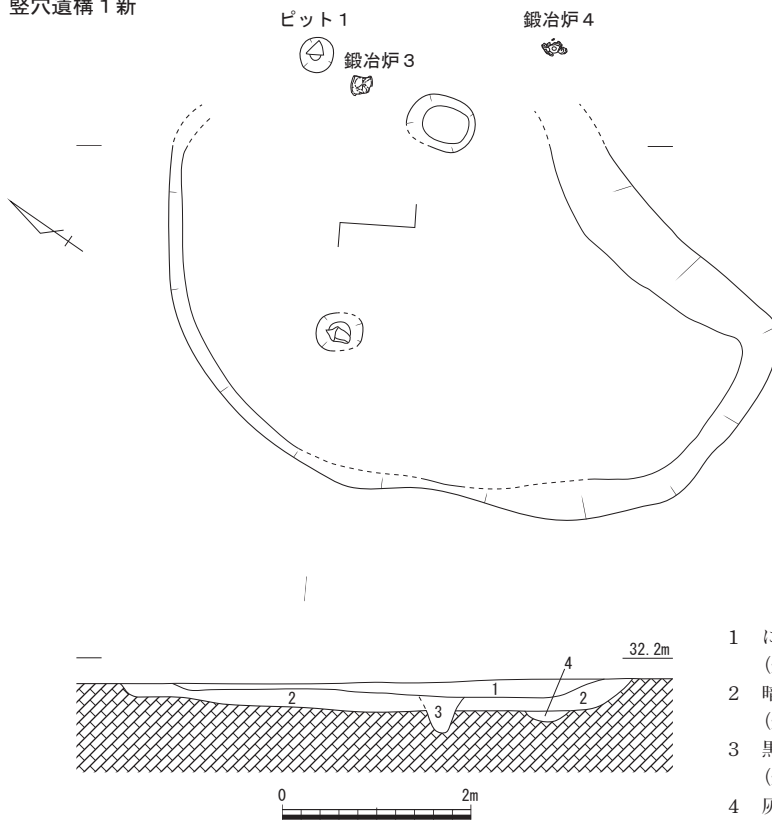
4 Bに位置する。調査地北西部、南西向きの緩斜面において検出した。二つの竪穴が重複しており、新古が存在する。土層の状況から最初に掘削されたものを古段階(竪穴遺構1古)とし、古段階の竪穴がある程度埋まった状態から再掘削されたものを新段階(竪穴遺構1新)とする。なお、古段階では北東上方に平坦面を確認しており、平坦面上に鍛冶炉1・2が構築されていた。また、竪穴底面では土坑6を検出した。新段階に伴う平坦面等は確認できなかったが、古段階と同様に竪穴の北東上方に鍛冶炉3・4が配置されていた。鍛冶炉3の北側に近接するピット1からは、椀形鍛冶滓(第163図M21)や鍛錬鍛冶滓、鍛造剥片が出土した。また古・新段階ともに竪穴の底面でピットをいくつか検出している。竪穴遺構の平面形は古・新段階ともに不整形を呈している。規模はいずれも検出長になるが、古段階で長軸688cm、短軸640cm、深さは33cmになり、新段階で長軸428cm、短軸624cm、深さは20cmを測る。竪穴部分は鍛冶炉1～4の下方における作業空間としての機能が想定される。竪穴と鍛冶炉の組み合わせは、古代における鍛冶工房の一形態と推定され、類例としては広島県庄原市宮脇遺跡でも確認されている(財団法人広島県教育事業団『宮脇遺跡発掘調査報告書』2004)。

出土遺物は土器類として須恵器286～311、土師器312～328、製塩土器329～336がある。須恵器は286～294が杯蓋、295～303は杯身、304・305は皿、306は薬壺の蓋、307～311は甕や壺になる。土師器は312が杯蓋、313～315は皿、316～318は甕、319～328は粗製の椀で胎土は褐色で粗く、いずれもユビオサエ痕が明瞭に残る。319の内面には格子目状のヘラ記号が認められる。製塩土器はいずれも無

竪穴遺構 1古



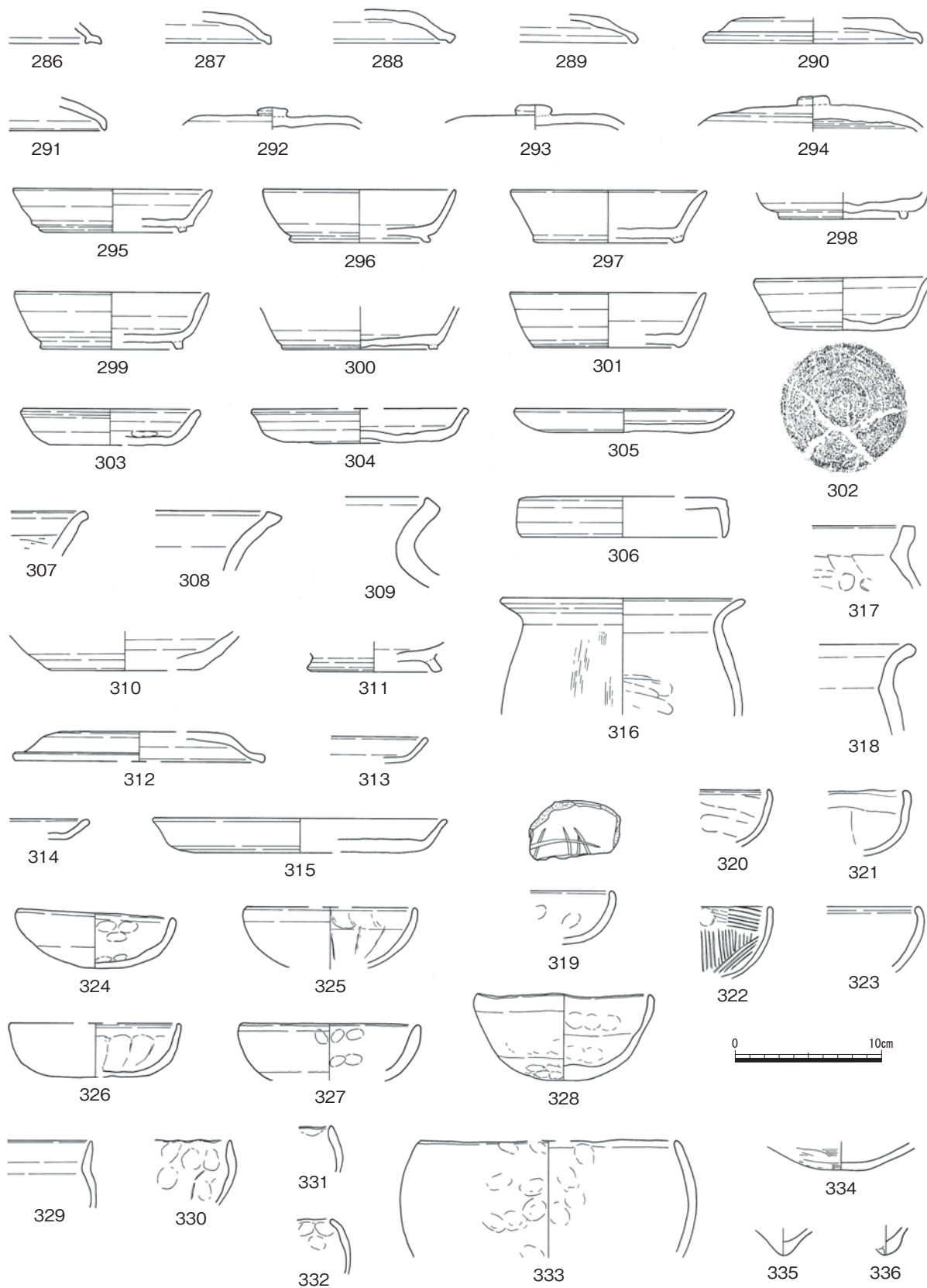
竪穴遺構 1新



- 1 にぶい黄橙色(10YR6/4)細砂
(焼土・炭・土器含む) 竪穴遺構 1 新
- 2 暗褐色(10YR3/3)細～粗砂
(焼土・炭・土器含む) 竪穴遺構 1 古
- 3 黒褐色(10YR3/1)細～粗砂
(焼土・炭含む) 古代ピット
- 4 灰黄褐色(10YR4/2)細～粗砂(焼土・炭含む)
古代ピット
- 5 黄褐色(10YR5/6)細砂 中世包含層
- 6 にぶい黄褐色(10YR5/4)細～粗砂 中世ピット
- 7 にぶい黄橙色(10YR7/4)細砂 溝23(中世)
- 8 褐灰色(10YR5/1)細～粗砂 溝24(中世)

第141図 竪穴遺構 1 (1/80)・出土遺物① (1/3)

文で、やや厚手の329・333・334と薄手の330～332・335・336が存在する。口縁部は段をもつ329と内湾する330～333がある。底部は平底の334、尖底の335・336がある。土器以外には工具と考えられ



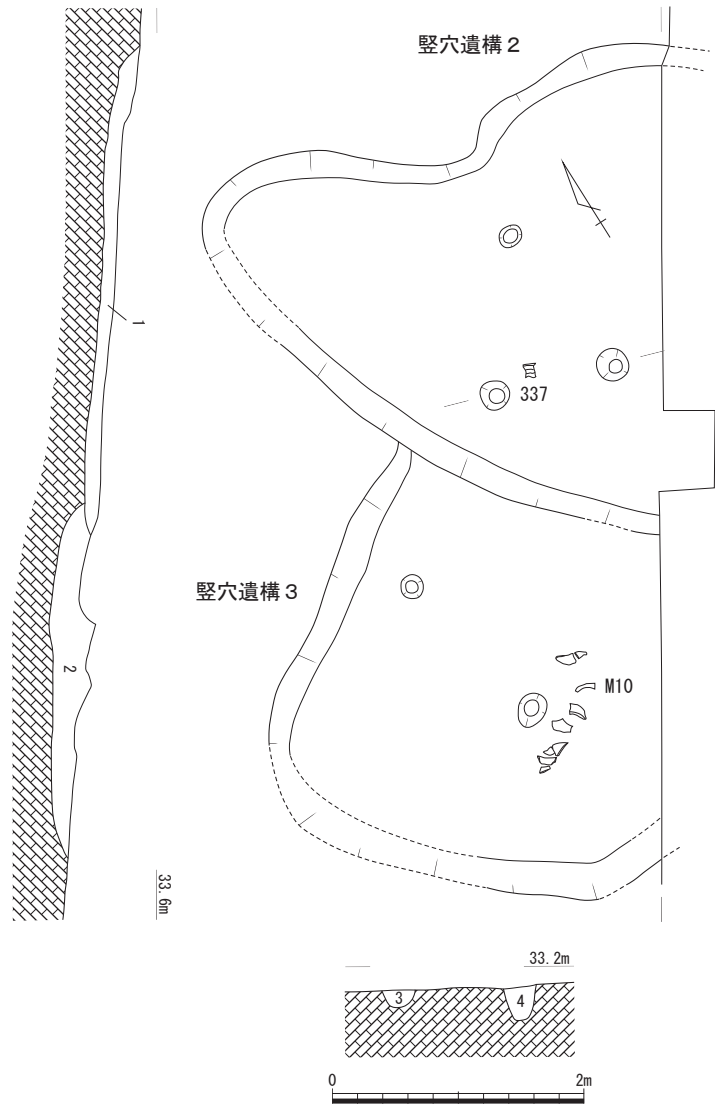
第142図 竪穴遺構1出土遺物② (1/4)

る鉄器M8が1点と鉄滓が重量にして108.6g出土している。鉄滓は鍛冶炉や竪穴遺構周辺のピット及び包含層も含めれば総量で1981.3gが出土している。鉄滓M9は、分析を行っていないが鍛冶滓と推定される。製塩土器の出土については、鍛冶工程の中で塩の利用があったのか、それとも別の用途があったのかは不明であるが、鍛冶遺構との関連が注目される。なお、調査時には出土遺物を古段階と新段階に分けて取り上げたが、両者に明確な時期差が確認できなかったため、まとめて掲載した。出土土器から竪穴遺構1の古・新段階はともに8世紀でも後半を中心とする時期と考えられる。(石田)

竪穴遺構2 (第92・144図、図版24)

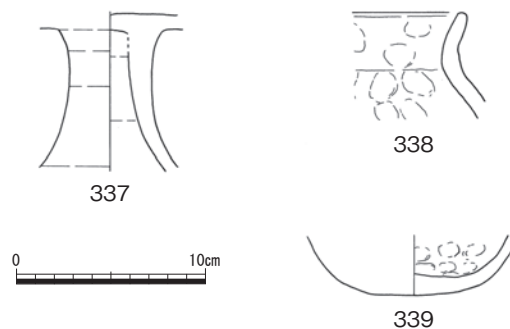
3・4C境に位置する。南東部の大半は調査区外に延びるため、全容は不明である。平面形は不整形を呈し、規模は検出長で長軸457cm、短軸380cm、深さは15cmを測る。また、底部で柱穴3個を確認している。竪穴遺構1と同様に、竪穴遺構2の東上方においても鍛冶炉等が存在していた可能性があるが、鉄滓等は出土しておらず、未調査部分も多いため詳細は不明である。遺物は底面付近で須恵器高杯337が、埋土中から土師器甕338、土師器粗製碗339が出土している。その他、図示できなかったが須恵器の杯蓋片等がある。

出土土器から時期は8世紀と考えられる。(石田)



- 1 灰黄褐色(10YR4/2)土(焼土混 竪穴遺構2)
- 2 黒褐色(10YR3/2)土(焼土混 竪穴遺構3)
- 3 にぶい黄褐色(10YR4/3)土(竪穴遺構2柱穴)
- 4 灰黄褐色(10YR4/2)土(竪穴遺構2柱穴)

第143図 竪穴遺構2・3 (1/60)



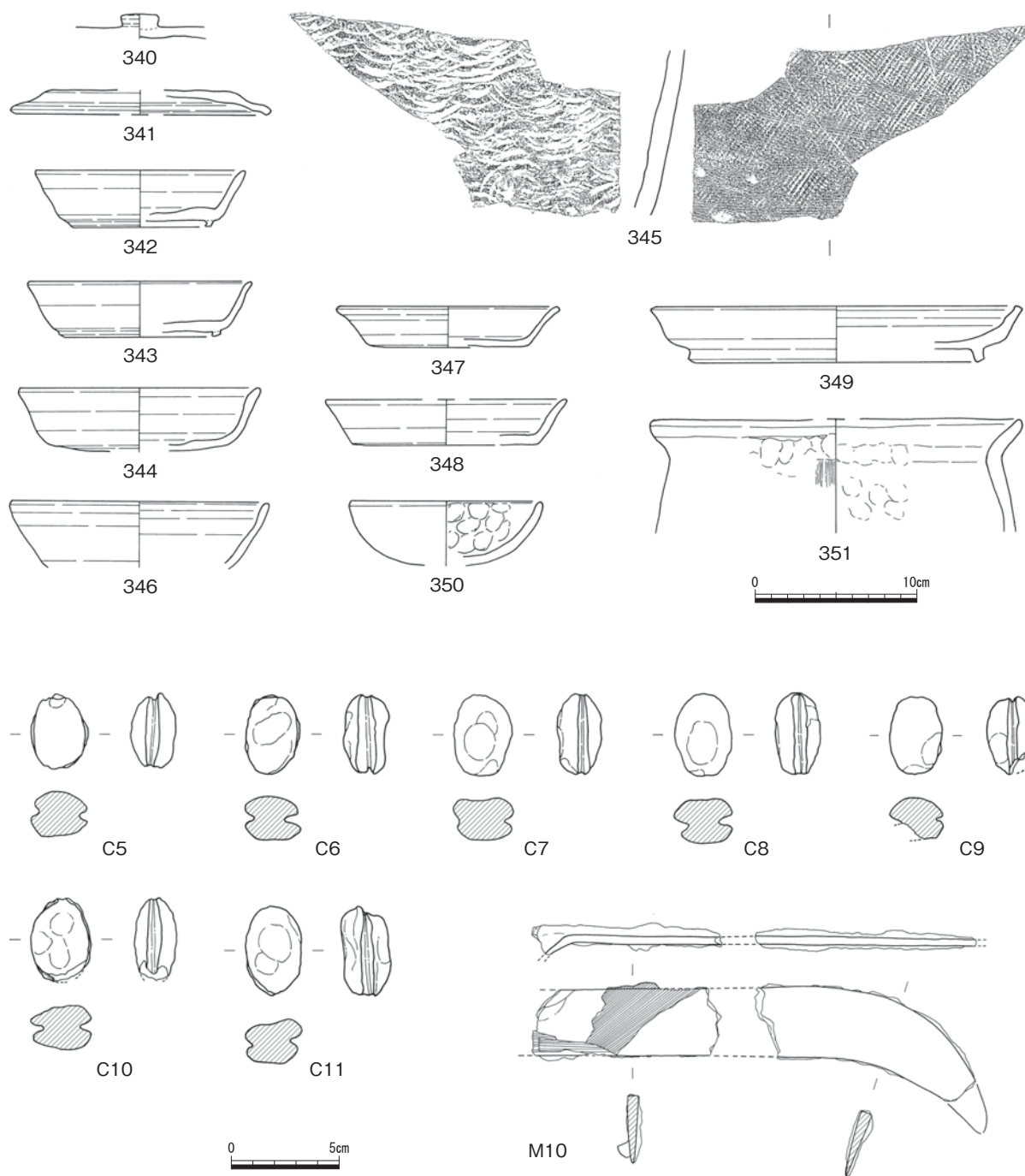
第144図 竪穴遺構2出土遺物 (1/4)

竪穴遺構3 (第92・143・145図、図版25・28・30)

4 B・C境に位置する。東側は調査区外に延びており、北東部を竪穴遺構2に切られているため、全容は不明である。平面形は現状で不整な方形を呈している。規模は残存長で長軸316cm、短軸303cm、深さは36cmを測る。また、遺構に伴う可能性がある柱穴2個を確認している。

埋土中及び遺構の南側底面付近でまとまって遺物が出土している。出土遺物には須恵器杯蓋340・341、須恵器杯身342～344、須恵器甕345、土師器杯346～348、土師器高台付皿349、土師器粗製椀350、土師器甕351がある。その他、有溝土錘C5～11、鉄鎌M10が出土している。

遺構の時期は出土遺物及び遺構の状況から8世紀と考えられる。 (石田)



第145図 竪穴遺構3出土遺物 (1/4・1/3)

7 鍛冶炉

鍛冶炉 1 (第92・146図、図版20・30)

4 Bに位置する。竪穴遺構1古に伴う鍛冶炉で、北東部の平坦面上で検出した。地面を掘り窪めた後、粘土を貼り付けて炉壁を構築しているが、炉は再構築が行われており、下部で古い炉壁の一部を確認している。新しい炉の平面形は円形で、長径22cm、短径21cm、深さは4cmを測る。

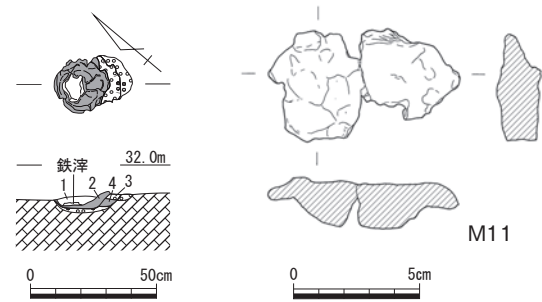
炉壁は全体的に暗青灰色に強く被熱しており、炉床には楕円形鍛冶滓M11が残っていた。また、M11の科学分析を実施したところ(第6章第6節参照)、始発原料は鉄鉱石の可能性が高いことが分かっている。鍛冶炉の時期は竪穴遺構1や周辺で出土した土器から8世紀後半と考えられる。(石田)

鍛冶炉 2 (第92・147図、図版20)

鍛冶炉1の東約50cmに位置する。竪穴遺構1古に伴う鍛冶炉で、北東上方側の平坦面上で検出した。平面は楕円形を呈し、規模は長径35cm、短径29cm、深さ8cmを測る。鍛冶炉1と同様に地面を掘り窪めた後、粘土を貼り付けて炉壁を構築しており、全体的に黒色に強く被熱している。時期は鍛冶炉1と同じく8世紀後半と考えられる。(石田)

鍛冶炉 3 (第92・147図、図版20)

鍛冶炉1の南西約70cmに位置する。鍛冶炉1・2とは異なり、竪穴遺構1新に伴うと考えられる。平面は楕円形を呈し、規模は長径29cm、短径25cm、深さ3cmを測る。地面を掘り窪めた後、粘土を貼り付けて炉壁を構築しており、全体的に暗青灰色に強く被熱している。また、北側に近接するピット1からは楕円形鍛冶滓(第163図M21)や鍛錬鍛冶滓、多量の鍛造剥片が出土しており、鍛錬鍛冶を行っていたようである。時期は8世紀後半と考えられるが、鍛冶炉1・2より新しい段階になる。(石田)

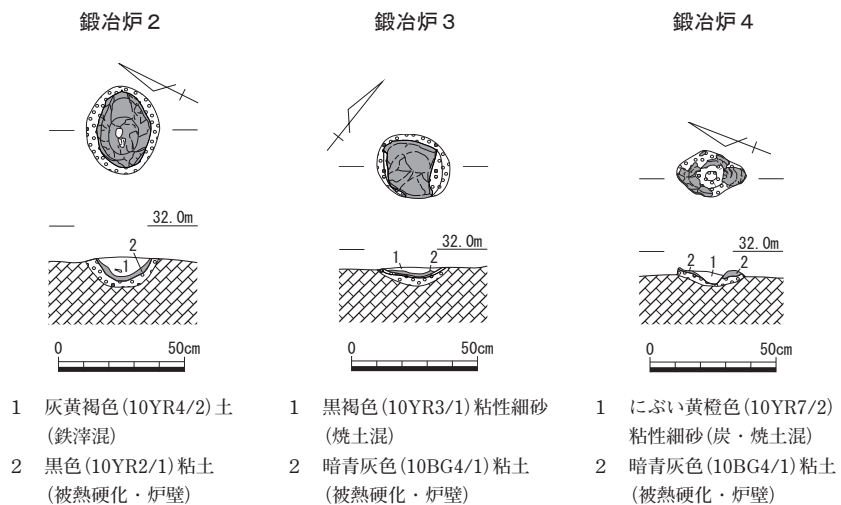


- 1 にぶい黄褐色(10YR7/2)粘性細砂(焼土混)
- 2 暗青灰色(10BG4/1)粘土(被熱硬化・炉壁[新])
- 3 にぶい赤褐色(5YR4/4)細砂(赤色被熱)
- 4 暗青灰色(10BG4/1)粘土(被熱硬化・炉壁[古])

第146図 鍛冶炉 1 (1/30)・出土遺物 (1/3)

鍛冶炉 4 (第92・147図、図版21)

鍛冶炉3の南東約2mに位置し、竪穴遺構1新に伴う。平面は楕円形で、規模は長径27cm、短径18cm、深さ4cmを測る。他の鍛冶炉と同様に地面を掘り窪めた後、粘土を貼り付けて炉壁を構築しており、暗青灰色に強く被熱している。時期は8世紀後半と考えられるが、鍛冶炉1・2より新しい段階になる。(石田)

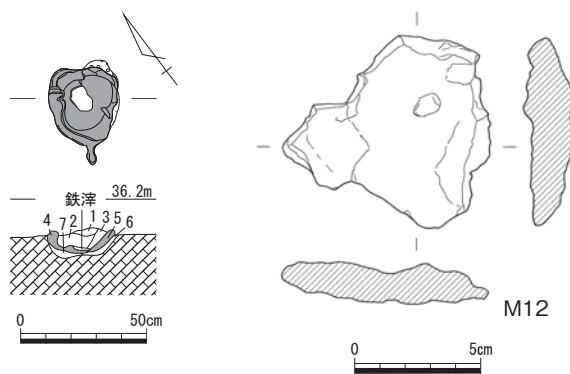


- 1 灰黄褐色(10YR4/2)土(鉄滓混)
- 2 黒褐色(10YR3/1)粘性細砂(焼土混)
- 1 黒褐色(10YR3/1)粘性細砂(焼土混)
- 2 暗青灰色(10BG4/1)粘土(被熱硬化・炉壁)
- 1 にぶい黄褐色(10YR7/2)粘性細砂(炭・焼土混)
- 2 暗青灰色(10BG4/1)粘土(被熱硬化・炉壁)

第147図 鍛冶炉 2～4 (1/30)

鍛冶炉5 (第93・148図、図版21・30)

7 E北東で検出し、鍛冶炉4の南東約82mに位置する。検出面で長軸29cm、短軸27cmを測り、深さは8cmである。平面形は不整円形だが、南西側に突起状の窪みがあり、羽口を設置した痕跡かもしれない。第4層、第5層が粘土を貼って形成した炉面である。よって、最低でも2回は炉面を作り直して、鍛冶を行っている。最終操業面である第4層上面には、椀形鍛冶滓M12が残っていた。時期は古代と考えられるが詳細は不明である。M12を分析したところ(第6章第6節参照)、始発原料は砂鉄で鍛冶炉1等とは時期が異なる可能性がある。(森本)



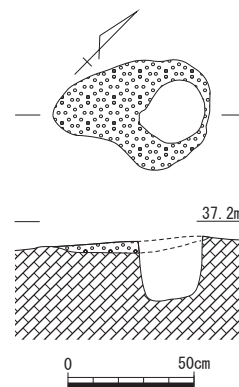
- 1 赤褐色(2.5YR4/6)土(鉄滓・焼土混)
- 2 灰黄褐色(10YR6/2)粘性細砂
- 3 にぶい黄橙色(10YR6/4)土(鉄滓・焼土混)
- 4 黒色(10YR2/1)粘土(被熱硬化)
- 5 青黒色(5BG2/1)粘土(被熱硬化)
- 6 灰白色(10YR7/1)細砂
- 7 黒色(10YR2/1)粘質土(炭混)

第148図 鍛冶炉5 (1/30)・出土遺物 (1/3)

8 被熱面

被熱面1 (第93・149図)

7 Fの北端に位置する被熱面である。段状遺構11の約80cm東の斜面上方にあり、遺構の一部は柱穴により失われている。平面形は南北に長い不整楕円形で、規模は62×44cm、被熱の赤色化は厚さ4cmを測る。遺構の詳細な時期は不明である。(柴田)

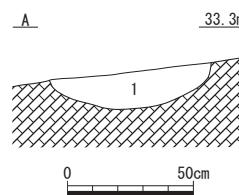


第149図 被熱面1 (1/30)

9 溝

溝13 (第93・150図)

5 Cに北側に位置し、北方向に流れている。同位置にある掘立柱建物2より先出し、また西側4m付近にあるたわみ2とは並存していたと考えている。時期はたわみ2同様9世紀代であろう。(小林)



- 1 暗褐色(7.5YR3/4)粘性細～粗砂(炭混)

第150図 溝13 (1/30)

溝14 (第93・151図)

土坑16の南に位置する。地形に沿って約7m検出した。幅77cm、深さ18cmを測る。出土遺物には須恵器・土師器・黒色土器のほか砥石S34があり、遺物の特徴から9世紀前半と考えられる。(河合)

溝15 (第93・152図、図版25)

6 G中央付近から6 H南西で検出した溝で、東側で湾曲している。出土遺物は土師器の甕359、内面黒色の椀360、皿361、高台付皿362がある。遺構の時期は、10世紀代である。(森本)

溝16 (第93・152図)

6 G中央付近で検出し、西側は溝15に切られる。検出面での上端幅は112cmで、深さは6cmである。遺構の時期は、溝15に先行すること以外は不明だが、周辺でも平安時代の土器細片がみられたため、9～10世紀代と考えたい。(森本)

溝17 (第93・153図)

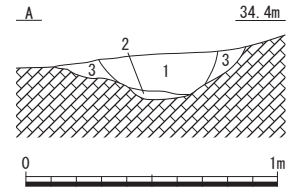
6 G南東付近で検出し、溝16の東約2 mに位置する。上面は後世に大きく削られ、底面近くで検出している。検出面での上端幅は24cmで、深さは7 cmである。溝16と埋土が類似しており、同じ溝になる可能性がある。9～10世紀代と考えたい。(森本)

溝18 (第93・153図)

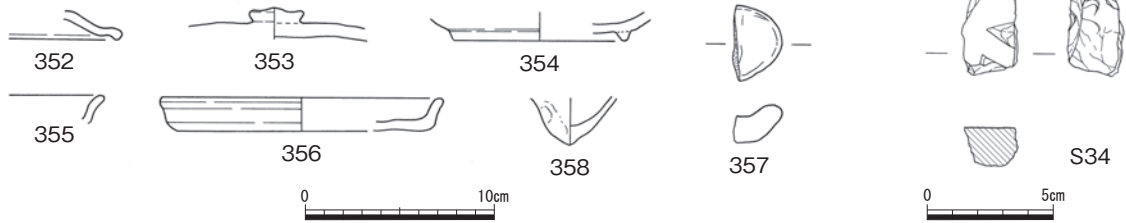
6 H西で検出し、溝17の北東約5 mに位置する。上面は後世に大きく削られ、検出面での上端幅は27cmで、深さは5 cmである。遺構の時期は9～10世紀代と考えたい。(森本)

溝19 (第93・154図)

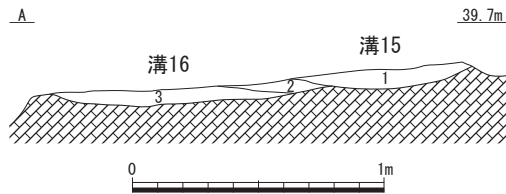
調査対象地の東端、6 Hに位置する溝である。溝18の東に隣接し、等高線に直交してまっすぐ延びる。断面形は椀形を呈し、幅は50～100cmを測る。流入土から黒色土器片363が出土しており、遺構の時期は10世紀中頃と考えられる。(柴田)



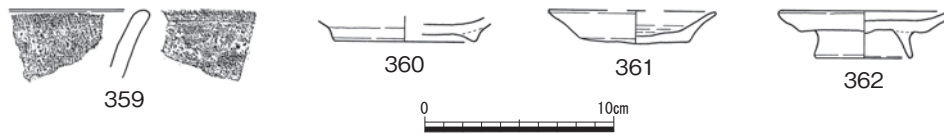
- 1 褐色(7.5YR4/4)シルト
(焼土・炭少混)
- 2 にぶい褐色(7.5YR5/3)シルト
(焼土・炭少混)
- 3 褐色(7.5YR4/4)シルト
(焼土・炭少混 赤褐色(5YR4/6)土混)



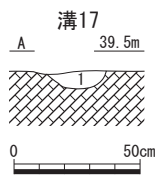
第151図 溝14 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/3)



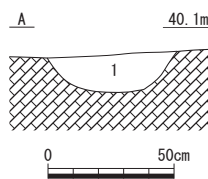
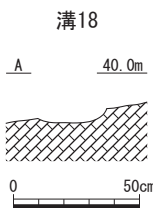
- 1 褐灰色(10YR4/1)細～粗砂(炭混 溝15)
- 2 灰黄褐色(10YR5/2)粘質土(溝16)
- 3 黒褐色(10YR3/1)細～粗砂
(明赤褐色(5YR5/8)粘質土混 溝16)



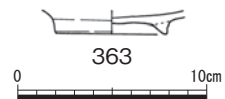
第152図 溝15・16 (1/30)・溝15出土遺物 (1/4)



- 1 黒褐色(10YR3/1)粘性細砂



- 1 暗褐色(10YR3/3)粘性細砂



第153図 溝17・18 (1/30)

第154図 溝19 (1/30)・出土遺物 (1/4)

溝20 (第94・155図)

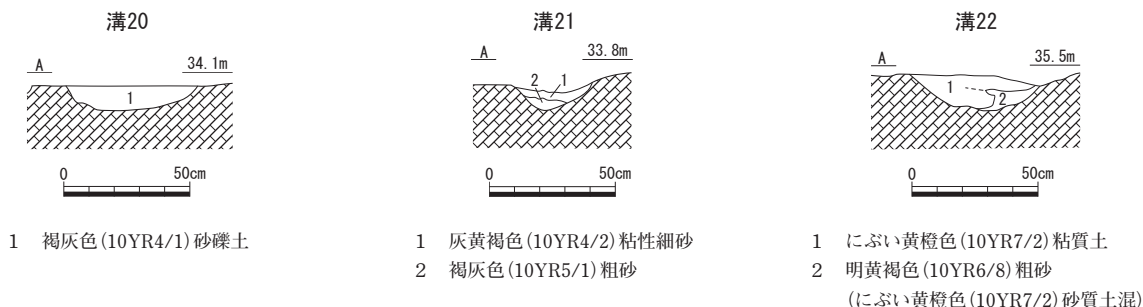
8 D南端を北東から南西へ流れる溝で、長さ約3 m分を検出した。堆積状況は単層で、皿状の掘り方である。出土遺物は須恵器杯、土師器甕・椀・皿、製塩土器があり、埋没時期は平安時代か。(氏平)

溝21 (第94・155図)

9 D西側で長さ約4 m分を検出。出土遺物は土師器甕などが少量で、埋没時期は平安時代か。(氏平)

溝22 (第94・155図)

8 E南東側を北から南へ流れる溝で、幅は52cm、長さ約6 m分を検出した。出土遺物は須恵器甕、土師器甕・椀・鉢・赤色精製を含む皿、製塩土器があり、時期は平安時代と考えられる。(氏平)

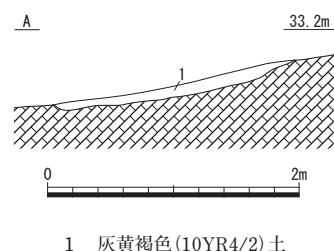


第155図 溝20～22 (1/30)

10 たわみ

たわみ1 (第92・156図)

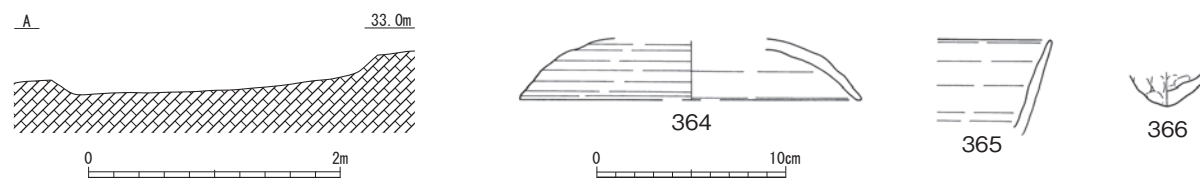
3 B南東隅に位置する。南西向きに緩斜面で検出した。掘り方はあまり明瞭でなく、土坑7に西端を切られる。平面形は不整形で、断面形は皿状を呈する。規模は長軸268cm、短軸192cmを測る。埋土中から須恵器及び土師器の小片が出土している。時期は奈良時代の範疇と考えられる。(石田)



第156図 たわみ1 (1/60)

たわみ2 (第93・157図)

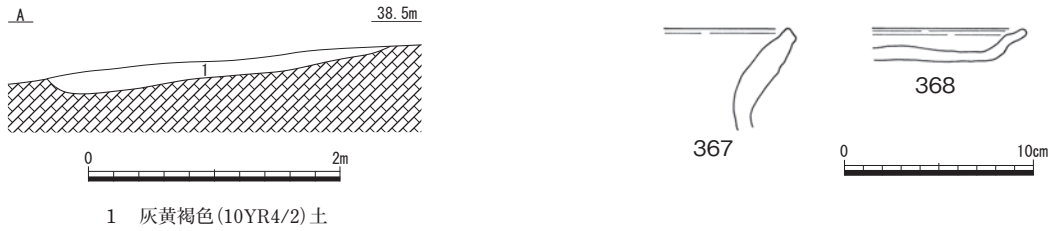
5 Cの中央よりやや北側に位置する。同位置にある掘立柱建物2より先出し、また東側4 m付近にある溝13とは並存していたと考えている。出土遺物には、364土師器杯蓋、365須恵器杯身、366製塩土器があり、9世紀前葉になる。(小林)



第157図 たわみ2 (1/60)・出土遺物 (1/4)

たわみ3 (第93・158図)

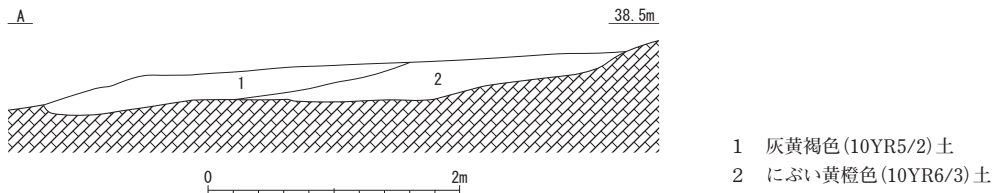
7 Gに位置する。平面形は不整な方形で、断面形は皿状を呈している。長軸は残存長で510cm、短軸は268cm、検出面からの深さは18cmを測る。埋土中から土師器甕367、土師器皿368が出土しており、時期は平安時代と考えられる。(石田)



第158図 たわみ3 (1/60)・出土遺物 (1/4)

たわみ4 (第93・159図)

たわみ3の東約4mに位置する。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸453cm、短軸は残存長で215cmを測る。土師器小片が埋土中から出土しており、時期は平安時代の範疇と考えられる。(石田)

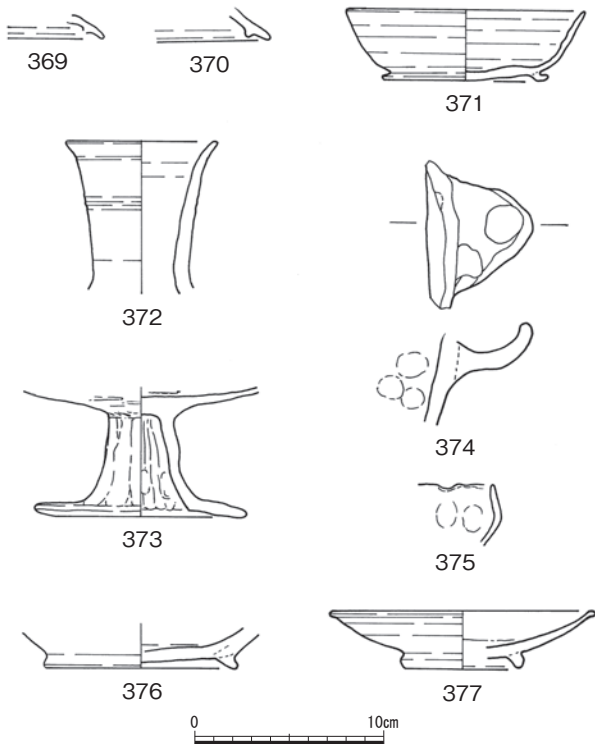


第159図 たわみ4 (1/60)

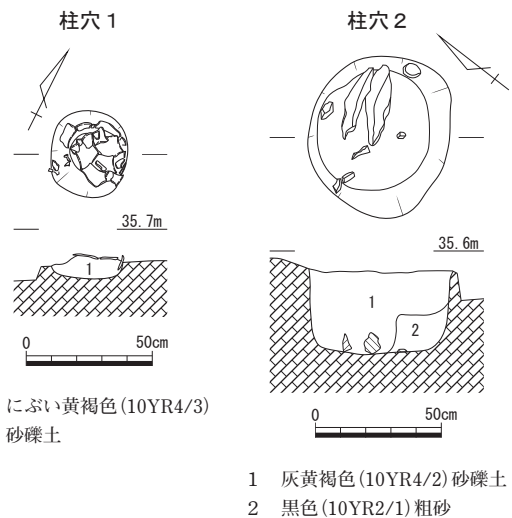
11 その他の遺構・遺物

谷部 (第84・94・160図、図版25)

谷部は先述した8～10B・Cで認められた自然地形である。古代包含層の第8～9層から出土した遺物として、須恵器の杯蓋369・370、杯身371、壺372や土師器の高杯373、甕または甑の把手374、製塩土器375、黒色土器の椀376、灰釉陶器の皿377 (黒笹90号窯式) などが認められ、時期は7世紀後半から10世紀頃と思われる。なかでも、黒色土器と灰釉陶器の出土は、掘立柱建物などの時期の下限を推測する手がかりとなりうる。ただし、全体的に同層からの遺物の出土量は少なく、



第160図 谷部出土遺物③ (1/4)



1 にぶい黄褐色(10YR4/3)砂礫土

1 灰黄褐色(10YR4/2)砂礫土
2 黒色(10YR2/1)粗砂

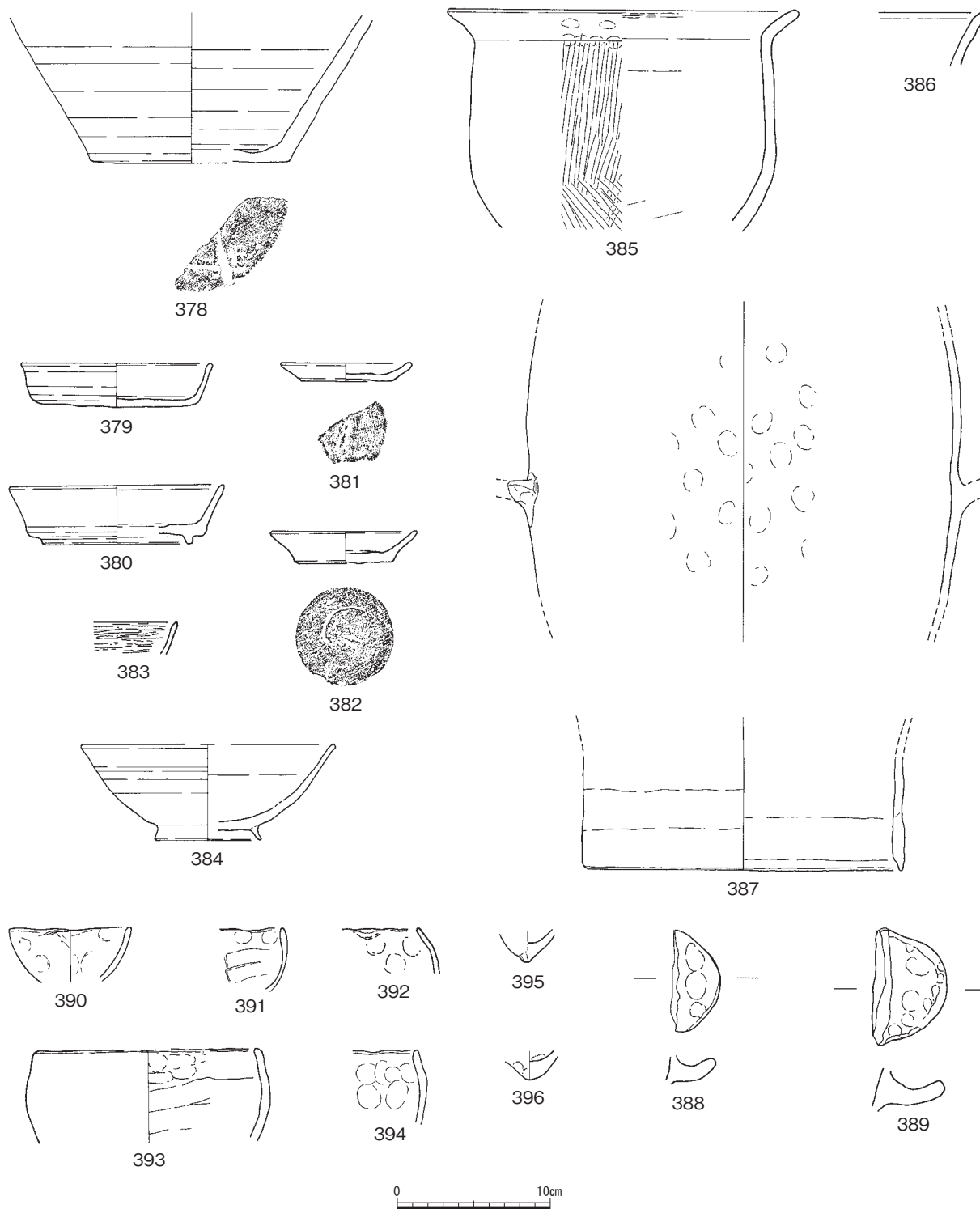
第161図 柱穴1・2 (1/30)

残存状況もあまりよくないものが多い。

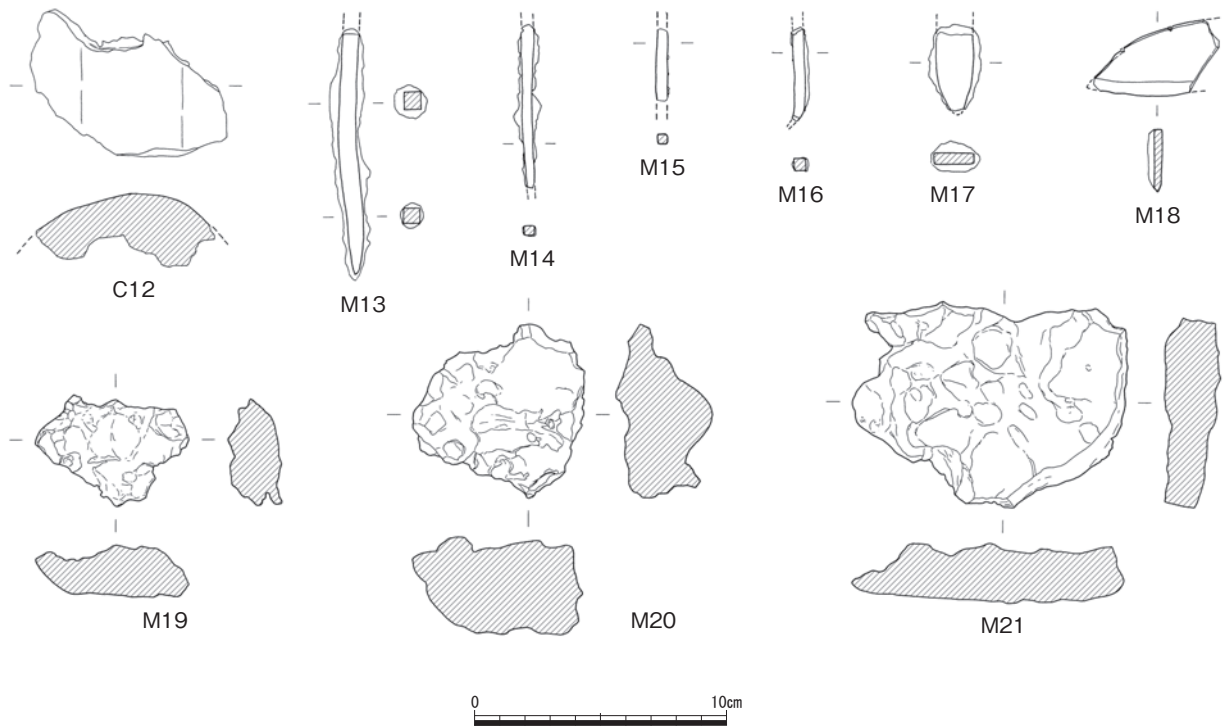
(澤山)

柱穴・ピット (第92~94・161~163図、図版25・28・30)

奈良~平安時代と考えられる柱穴・ピットは、掘立柱建物や柱穴列が多く確認された標高32~35m付近の比較的斜面が緩やかな場所で確認された。このうち8Eの北東隅で検出した柱穴1では、長胴の甕387が掘り方に収まるように出土した。また、この柱穴の約2m東にある柱穴2では、長さ約50cm大



第162図 奈良~平安時代の柱穴・ピット出土遺物① (1/4)



第163図 奈良～平安時代の柱穴・ピット出土遺物② (1/3)

の2個の礫が埋められた状況でみつかった。これらは他の柱穴とやや性格が異なる可能性がある。

各柱穴からの出土遺物としては、須恵器の甕378、土師器の杯身379・380、皿381・382、甕385・386、甑387、甕または甑の把手388・389、製塩土器390～396や黒色土器の椀383・384、土製品では鞆羽口C12、金属製品では釘M13～16、板状鉄器M17、鎌M18などがみつまっている、また、多くの鍛冶炉が検出された4B周辺のピットからは、鉄滓M19、鍛冶滓M20、椀形鍛冶滓M21などが出土している。

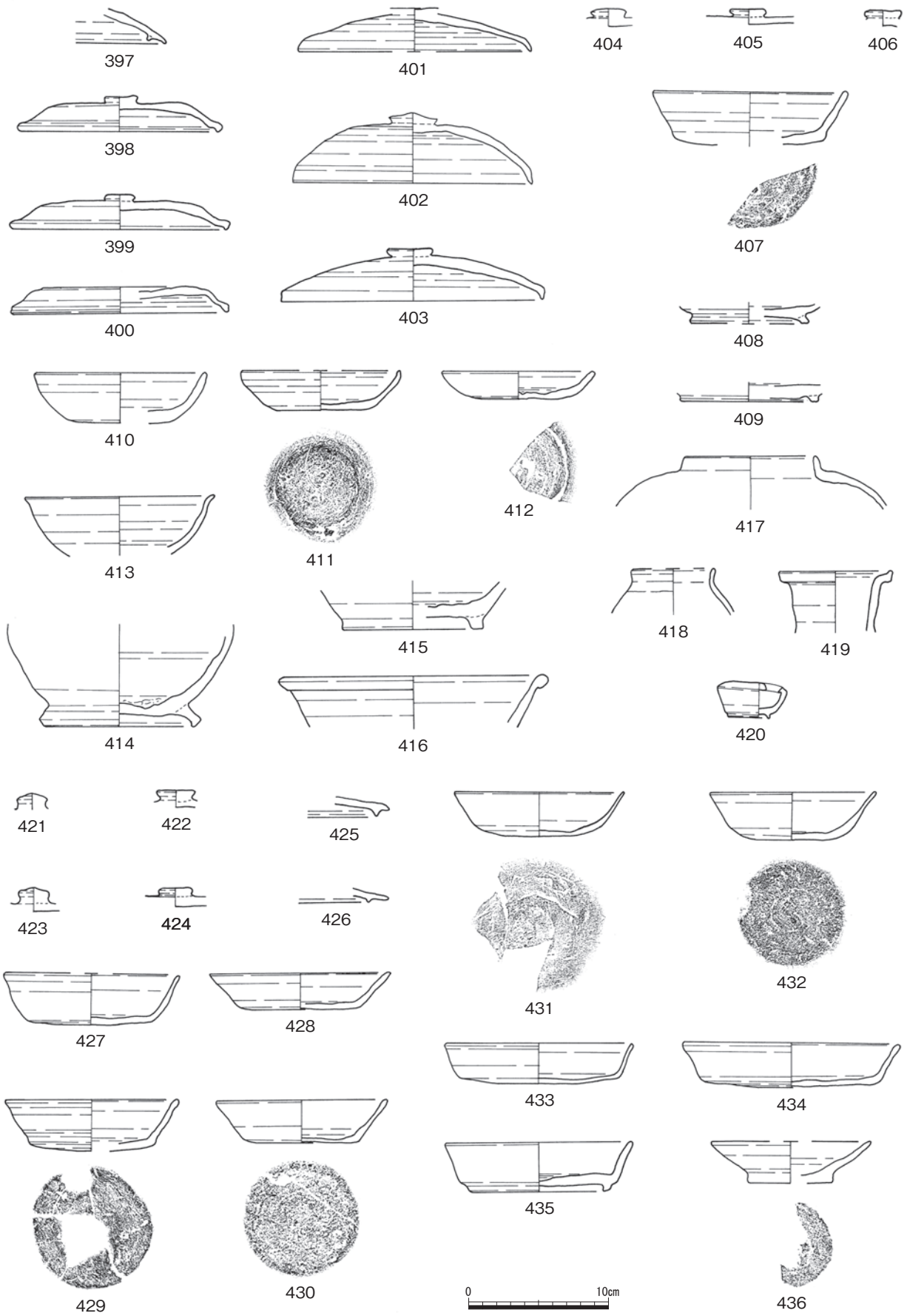
ここで特徴的なのは、煎熬工程を行った痕跡は確認できないものの、小破片ながらまとまった量が出土した薄手・尖底の製塩土器である。これらの土器が柱穴から柱材を抜き取った後に入ったとするならば、掘立柱建物などは塩を消費した時に建っていたとみてよいと思われる。(澤山)

包含層・遺構に伴わない遺物 (第164～168図、図版25～28・30)

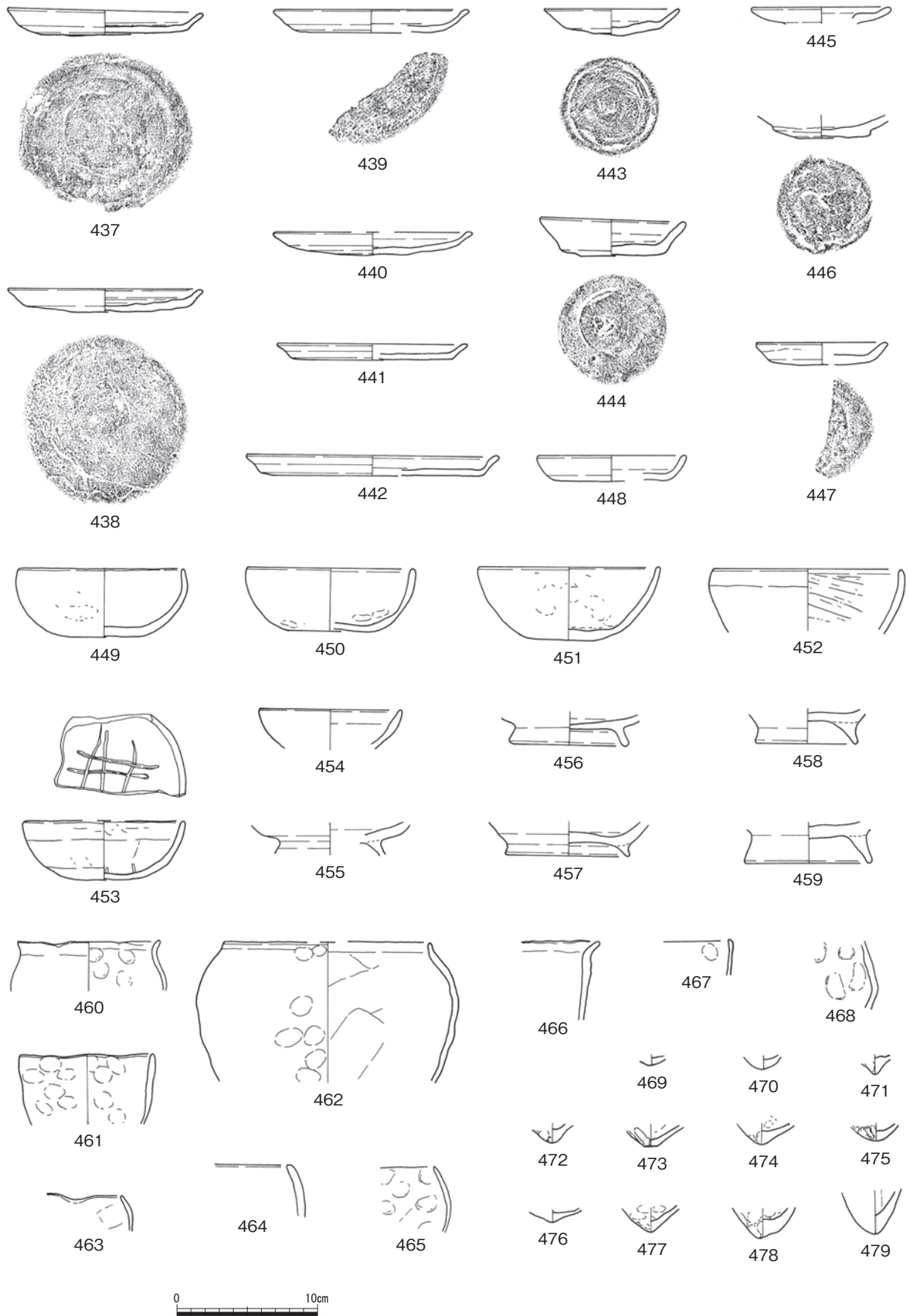
奈良時代から平安時代にかけての遺物は、調査地西端部を除く、ほぼ全域から出土している。斜面堆積土中に包含されていたものが中心になるが、遺構から出土した遺物でも所属時期が異なり直接伴わないと判断したものも含んでいる。

397～420は須恵器である。397～403は杯蓋、404～406は杯蓋のつまみ部の破片になる。407～411は杯身で、412は皿、413は椀である。414～419は壺で、417は薬壺になる。420は小型の水注である。これらの須恵器の多くは8世紀代のもので、一部9世紀前半のものまで含んでいる。

421～459・480・481は土師器である。421・423・433・434・437・439・441・442には赤色顔料の塗布が認められる。421～424は杯蓋のつまみ、425・426は杯蓋、427～434は杯、435は杯身で須恵器を模倣したものであろう。436は円盤高台付き杯で底面はヘラ切りである。437～448は皿で、445は高台付きになる。449～459は椀である。449～454は粗製のもので、胎土は粗く茶褐色を呈する。整形は手捏ねによるため、ユビオサエ痕が顕著である。また、453は内面に格子目状のヘラ記号を施す。

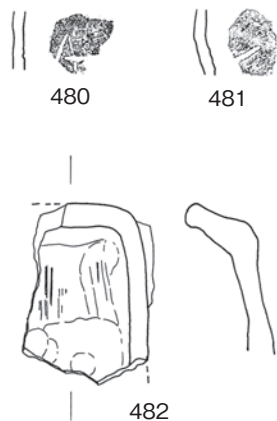


第164図 奈良～平安時代の包含層・遺構に伴わない遺物① (1/4)



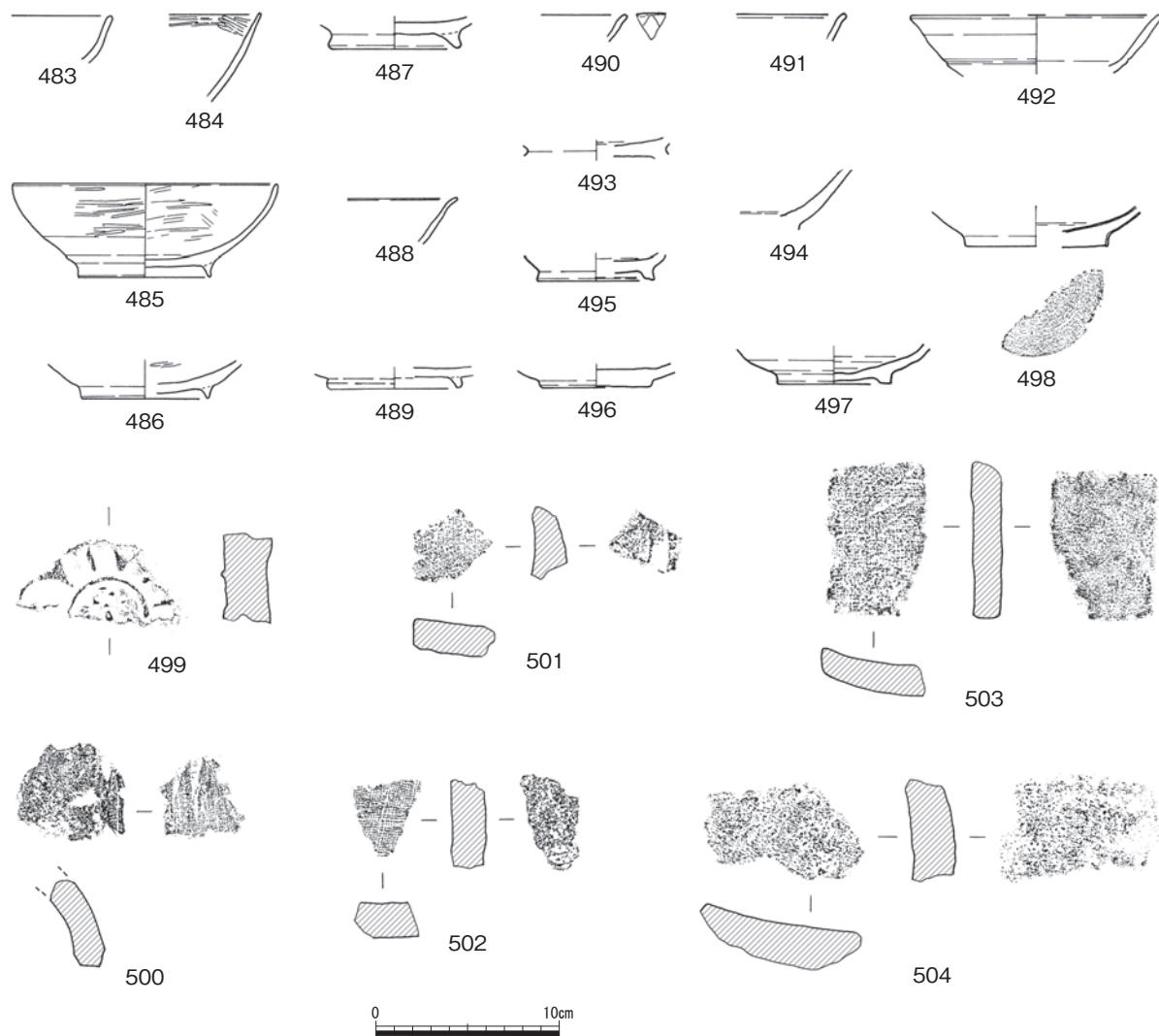
第165図 奈良～平安時代の包含層・遺構に伴わない遺物② (1/4)

同様のへら記号は竪穴遺構1出土の粗製の椀319にも認められる。また480・481は粗製の椀もしくは鉢の体部片で、いずれも記号状の線刻の一部が認められる。これらの粗製の椀や鉢は、手捏ねによる整形が特徴で製塩土器と共に出土するものが多いことから、製塩土器の生産及び使用者が製作した「師乐的土師器」(間壁忠彦・間壁葎子編「広江・浜遺跡」『倉敷考古館研究集報』第14号 1979)と考えられる。

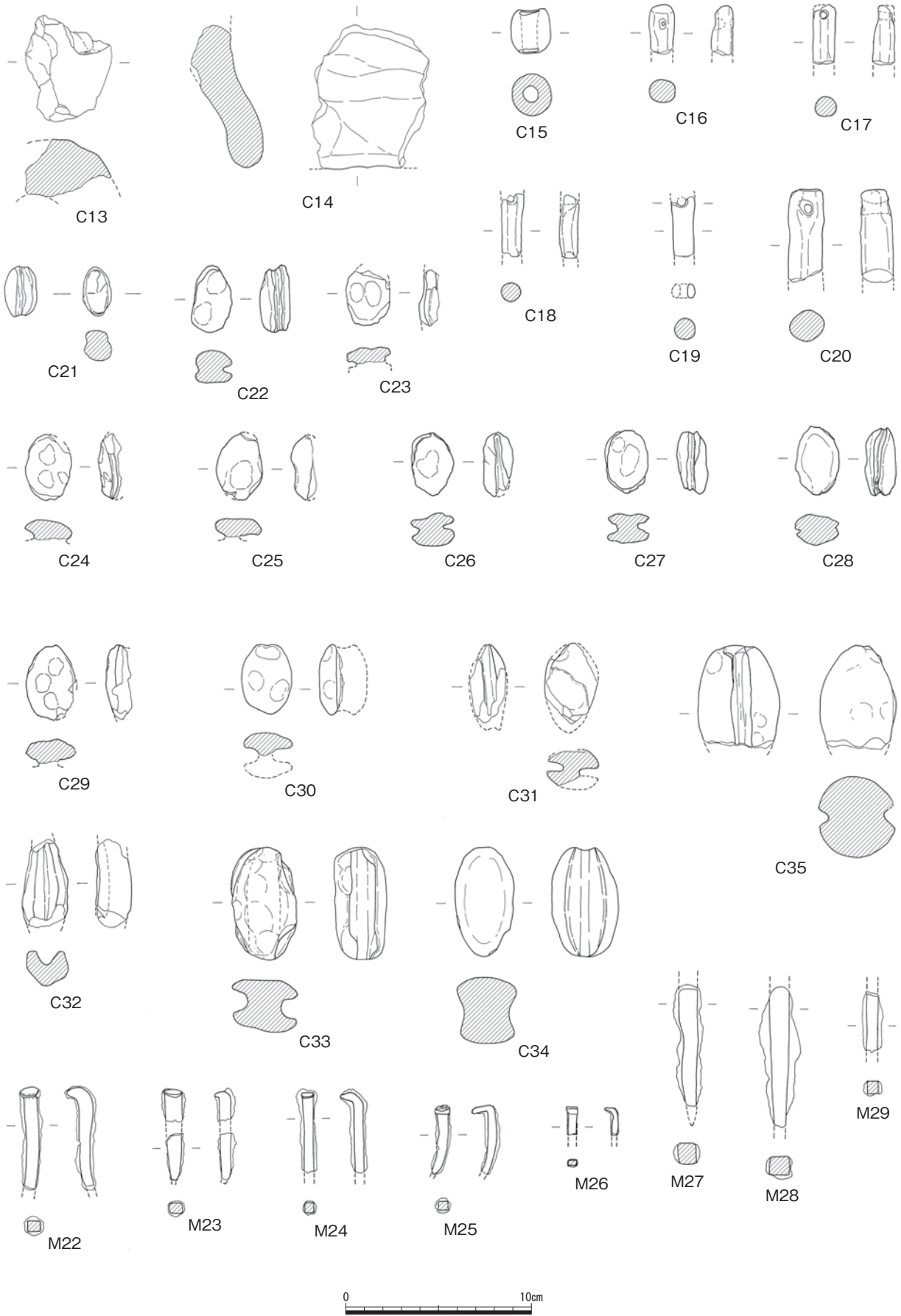


460～479は製塩土器である。いずれも無文で薄手のものである。口縁部は460・466のように屈曲するものや、461・467のように上方にまっすぐ立ち上がるもの、462～465のように大きく内湾するものがある。469～479は内湾する口縁をもつ製塩土器の底部になると考えられ、いずれも尖底である。これらの製塩土器については8世紀代のものと考えられる。

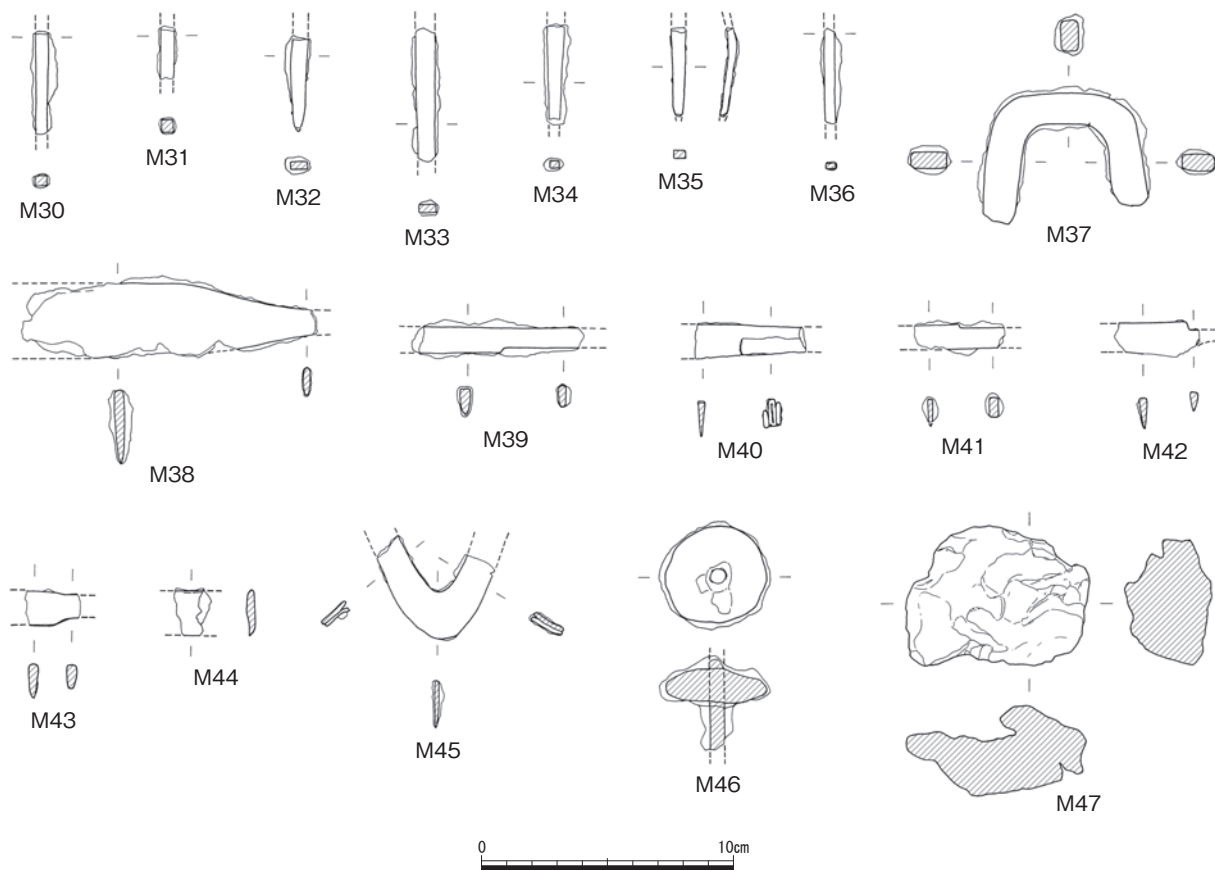
482は土師器の竈である。483～487は黒色土器の椀で、内面が黒色を呈する。これらの土師器や黒色土器は8世紀から12世紀前半にかけて



第166図 奈良～平安時代の包含層・遺構に伴わない遺物③ (1/4)



第167図 奈良～平安時代の包含層・遺構に伴わない遺物④ (1/3)



第168図 奈良～平安時代の包含層・遺構に伴わない遺物⑤ (1/3)

てのものが中心である。

488・489は灰釉陶器である。488は9世紀後半、光ヶ丘1式の椀の口縁部になる。489は9世紀後半、黒笹90号窯式の椀か皿で三日月高台をもつ。碗に転用しており平滑な使用痕と墨痕が残る。

490～498は緑釉陶器である。490は輪花文を施す椀か皿で、10世紀前半の京都産である。491・493・495は濃緑色を呈する椀か皿で、10世紀後半の近江産である。稜椀492は軟質で9世紀前半の京都産、稜椀497は硬質で削出し高台をもち10世紀前半の京都産と考えられる。皿496・椀498は軟質で全面施釉されており9世紀前半の京都洛北産である。

499～504は瓦である。軒丸瓦499の瓦当文は単弁六弁蓮華文である。丸瓦500の凹面には布目が認められる。平瓦501・503の凹面には布目が、平瓦502・504の凹面には布目、凸面には不明瞭だが縄目が認められる。これらの瓦は調査地の東端～南端で出土しており、いずれも平安時代のものと考えられる。調査地外になるが遺跡南東部に当該期の寺院が存在していた可能性がある。

C13～35は土製品である。C13・14は鞆の羽口、C15は管状の土錘、C16～20は棒状土錘、C21～35は有溝土錘である。有溝土錘は長さ3.5cm前後のC21～31と、長さ6cm前後のC33～35の大小二種類が存在する。

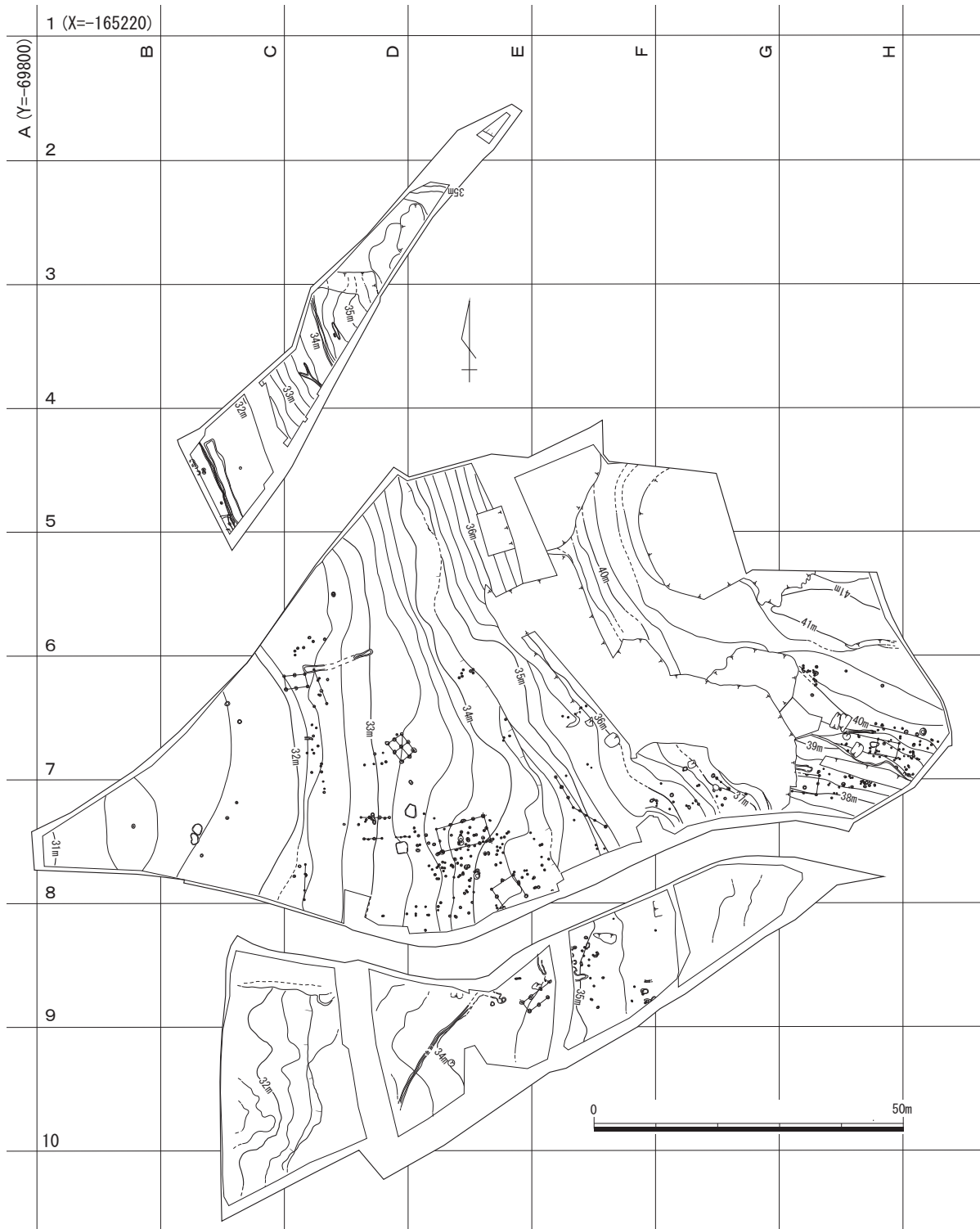
M22～46は鉄製品、M47は鉄滓である。M22～36は釘、M37は「コ」字状を呈する用途不明の鉄器、M38～44は刀子、M45は小型の鋤で儀器の可能性がある。M46は紡錘車、M47は調査地東端部の包含層中から出土した椀形鍛冶滓である。分析の結果（第6章第6節参照）、始発原料は鉄鉱石の可能性が高いことが分かっている。

(石田)

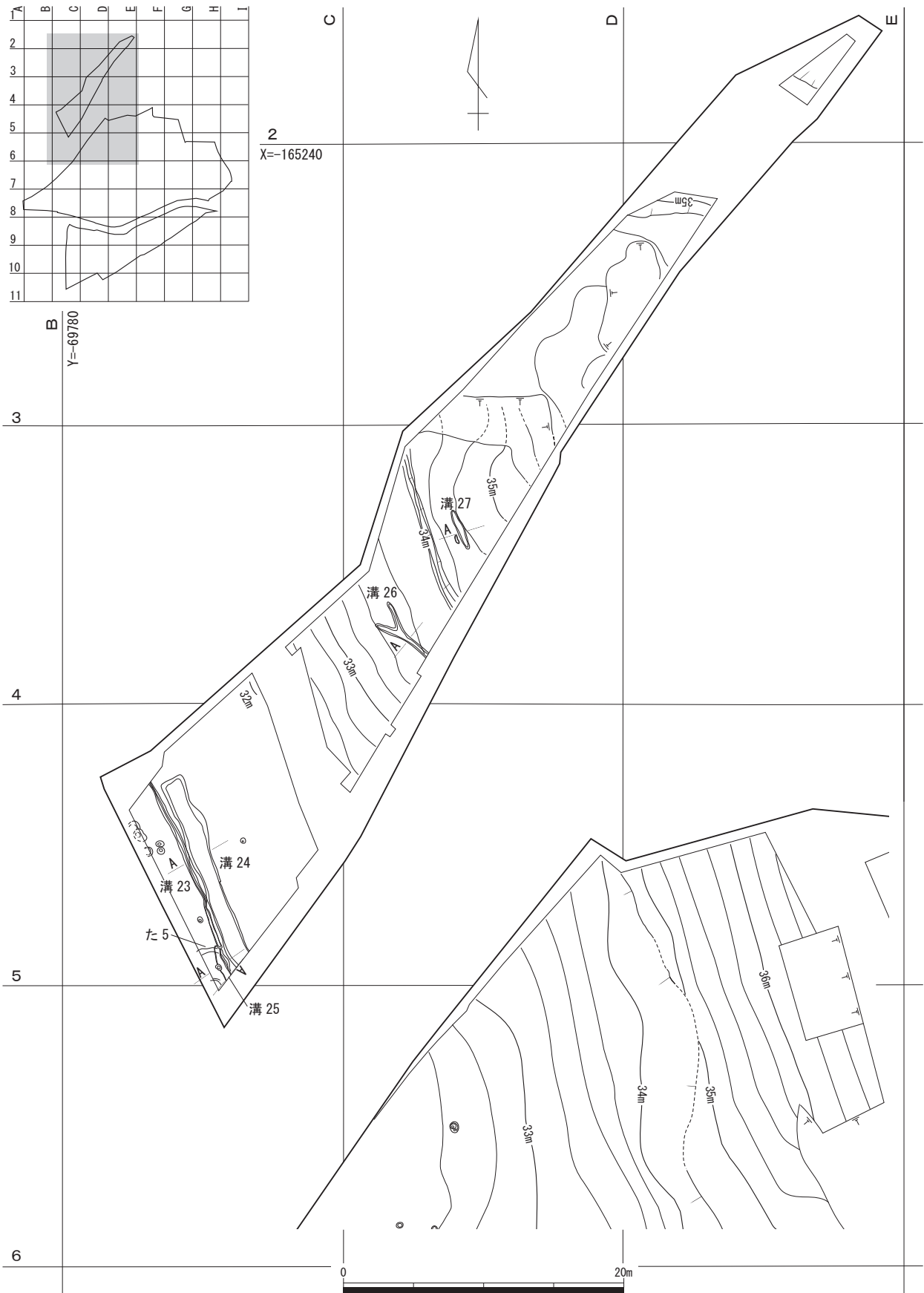
第4節 鎌倉時代以降の遺構・遺物

1 概要

鎌倉時代以降の遺構としては、掘立柱建物7棟、柱穴列7列、土坑9基、被熱面1か所、溝12条、



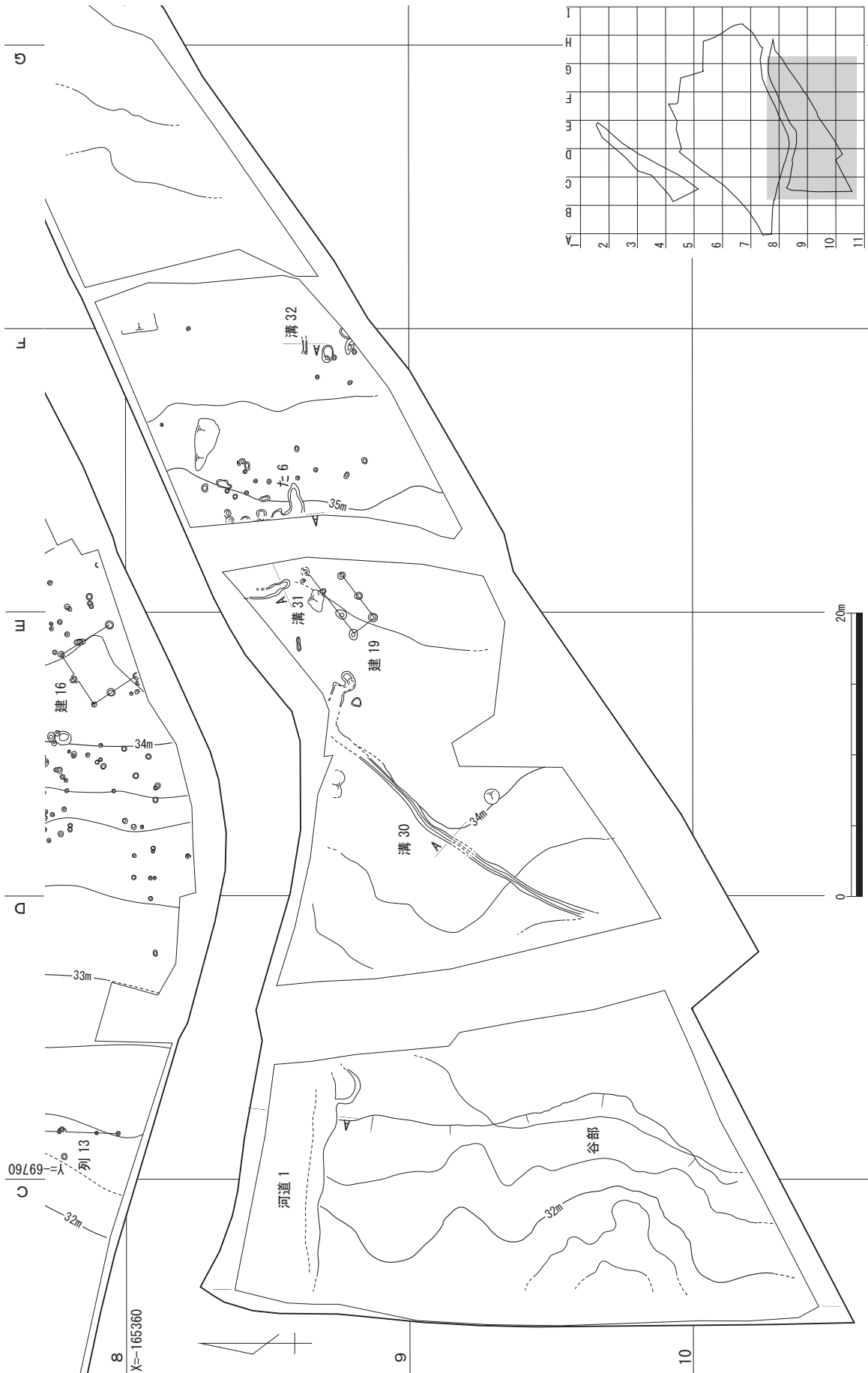
第169図 鎌倉時代以降の遺構全体図 (1/1,000)



第170図 鎌倉時代以降の遺構全体図① (1/400)



第171図 鎌倉時代以降の遺構全体図② (1/400)



第172図 鎌倉時代以降の遺構全体図③ (1/400)

たわみ2か所、河道1条を確認した。

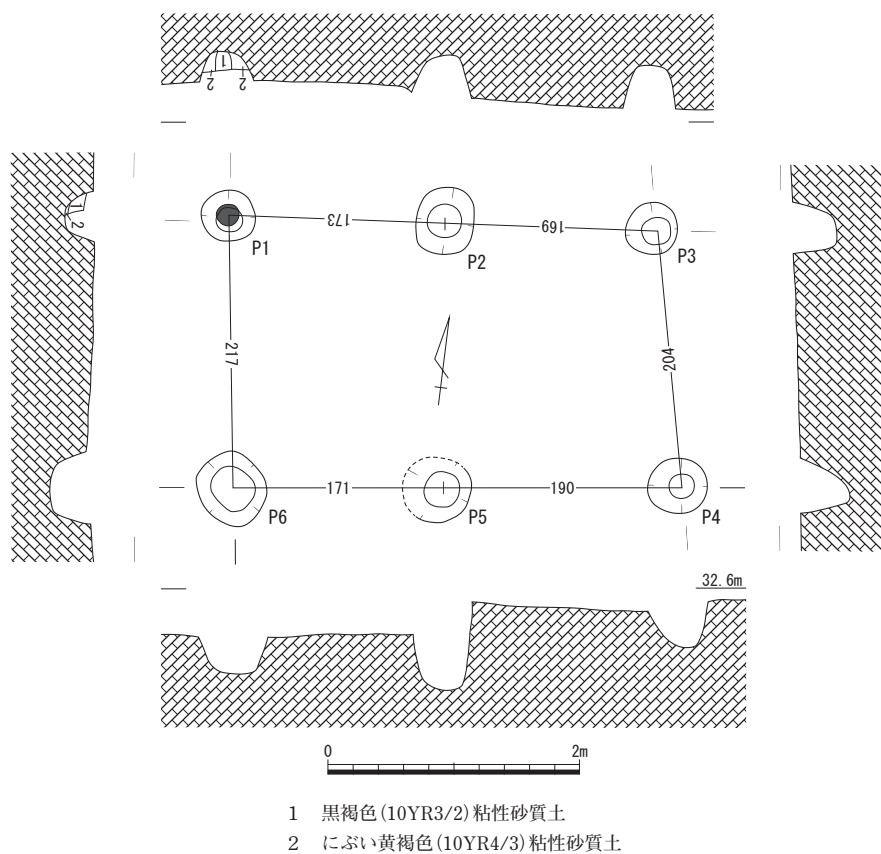
集落の中心的な遺構である掘立柱建物や柱穴列の位置は古代の建物群に比べてやや南下しており、密度もそれほど高くなく散在している。掘立柱建物の分布は、南西側の緩やかな斜面地と北東側斜面地の大きく2か所に分かれ、それらを画すように柱穴列14が位置する。遺物は土師器・瓦質土器・青磁・白磁などの土器類、土製円板・土錘などの土製品、鉄釘・銅銭などの金属製品、砥石などの石製品等が出土した。

調査地の南西隅8～10B・Cで検出した谷部は中世になると浅い窪地となり、上層では中世～近世の水田層を確認した。これは谷部に北接した河道1と共に、周辺で行われた開田時期の一端を示すと考えられる。(松尾)

2 掘立柱建物

掘立柱建物13 (第171・173図、図版14)

6Cの北西隅に位置し、柱穴列9によって山側の斜面から区画されるようにして建っている。規模は2×1間で、桁行361cm、梁行217cm、面積は7.83㎡を測る。柱穴間隔は桁方向が169～190cm、梁方向が204～217cmである。柱穴は円形の掘り方を有し、大きさは直径45～60cm、深いところでは検出面から70cmほど掘り込まれている。柱穴内に残された柱痕から推定される柱の太さは15～20cm前後である。棟方向はN-83°-Eとなる。詳細な時期を特定できる遺物は出土していないが、埋土や周辺の状況から遺構の時期は鎌倉時代と考えられる。(藤井)



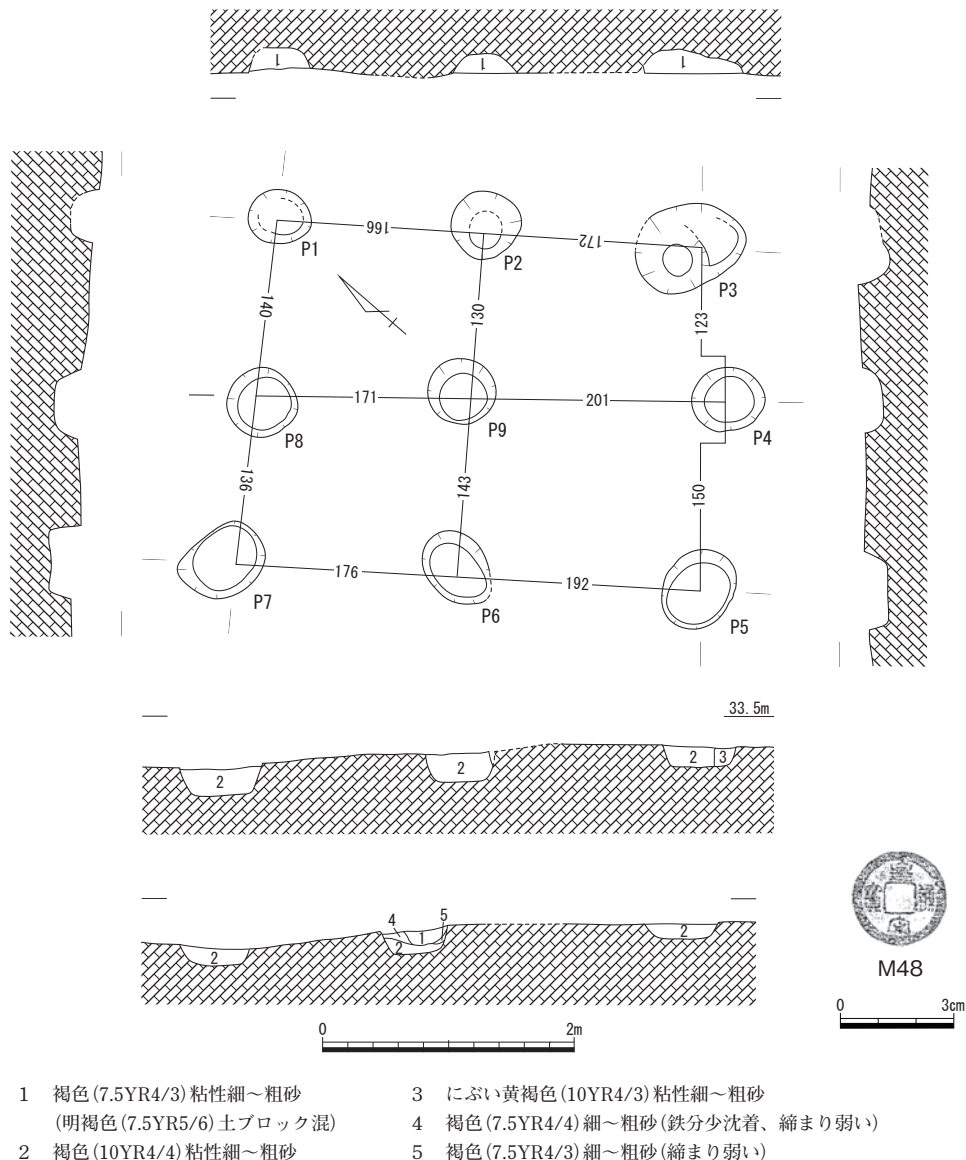
第173図 掘立柱建物13 (1/60)

掘立柱建物14 (第171・174図、図版14・30)

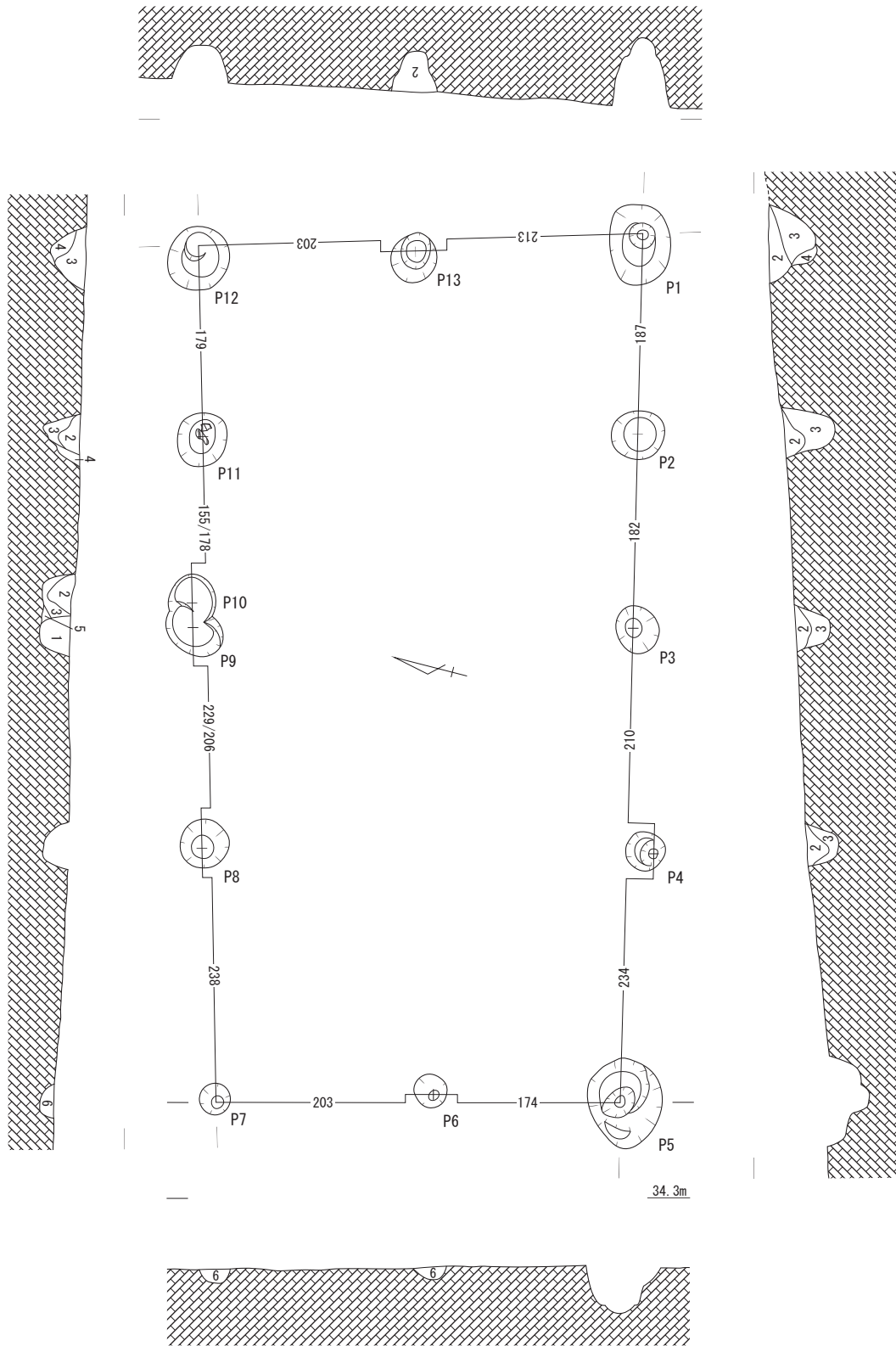
掘立柱建物13の南東約20mの地点に位置する総柱建物である。規模は2×2間で、桁行368cm、梁行276cm、面積は10.16㎡を測る。柱穴間隔は桁方向が166~201cm、梁方向が123~150cmである。柱穴は円形の掘り方を有し、規模は直径40~90cmを測るが、柱の抜き取り痕を考慮すると元の柱穴は直径40~60cm程度と推測される。断面は椀形で、検出面からの深さは15~25cm、柱痕はみつからない。棟方向はN-40°-Wとなる。建物の北半分が平安時代の総柱建物(掘立柱建物5)と重複しており、建て替えが想定されるが、規模が3×2間から2×2間に縮小していることに加え、棟方向が約90°回転している。M48は、P5の上層から出土した北宋銭(皇宋通寶)である。出土遺物や埋土、周辺状況から、遺構の時期は鎌倉時代と考えられる。(藤井)

掘立柱建物15 (第171・175・176図、図版14・27)

掘立柱建物14の南東約17mの地点に位置する。規模は4×2間で、桁行813cm、梁行416cm、面積は33.82㎡を測る。柱穴間隔は桁方向が155~238cm、梁方向が174~213cmである。柱穴は円形の掘り方



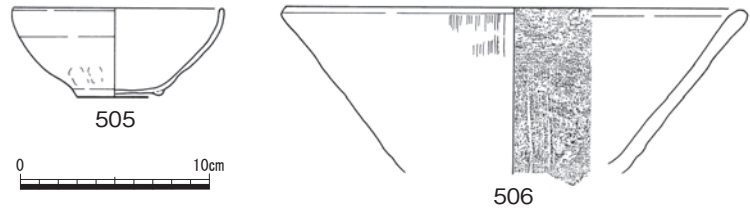
第174図 掘立柱建物14 (1/60)・出土遺物 (1/2)



- 1 褐色 (10YR4/6) シルト質微砂
- 2 褐色 (7.5YR4/6) シルト質微砂 (焼土・炭混)
- 3 暗褐色 (10YR3/3) シルト質微砂
- 4 褐色 (10YR4/4) シルト質細砂
- 5 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 砂質土
- 6 暗褐色 (10YR3/4) シルト質微砂

第175図 掘立柱建物15 (1/60)

を有し、規模は直径30～85cmを測るが、柱の抜き取り痕を考慮すると元の柱穴は直径30～60cm程度と推測される。柱痕から推定される柱の太さは15～20cmである。棟方向はN-75°-Eとなる。

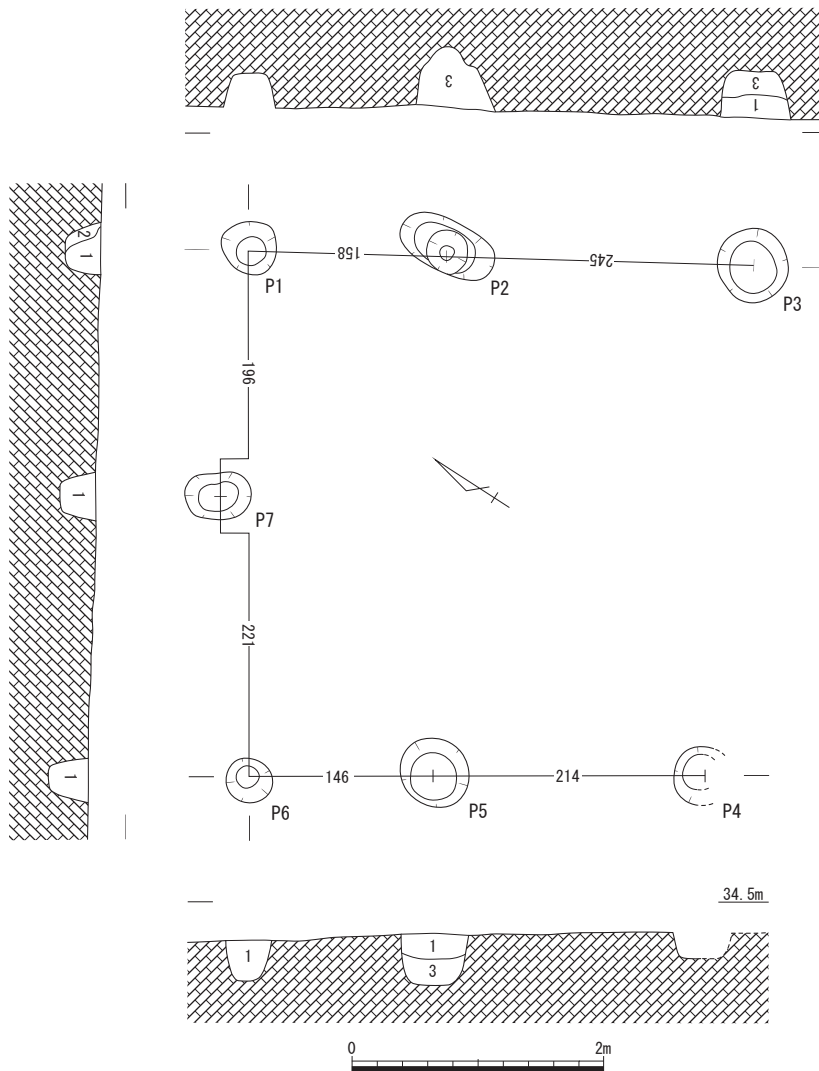


第176図 掘立柱建物15出土遺物 (1/4)

出土遺物について、505は口径10.9cmを測る土師器の椀で、いわゆる吉備系土師器椀である。506は橙色を呈する播鉢の口縁部である。いずれもP13から出土した。遺構の時期は、出土遺物から13世紀後半から14世紀頃と考えられる。(藤井)

掘立柱建物16 (第171・177図)

掘立柱建物15の南東約10mの地点に位置する。規模は2×2間だが、桁行は南東側の調査区外へさ



- 1 暗褐色(10YR3/4)シルト質微砂
- 2 褐色(10YR4/4)シルト質微砂
- 3 黒褐色(10YR3/2)シルト質微砂

第177図 掘立柱建物16 (1/60)

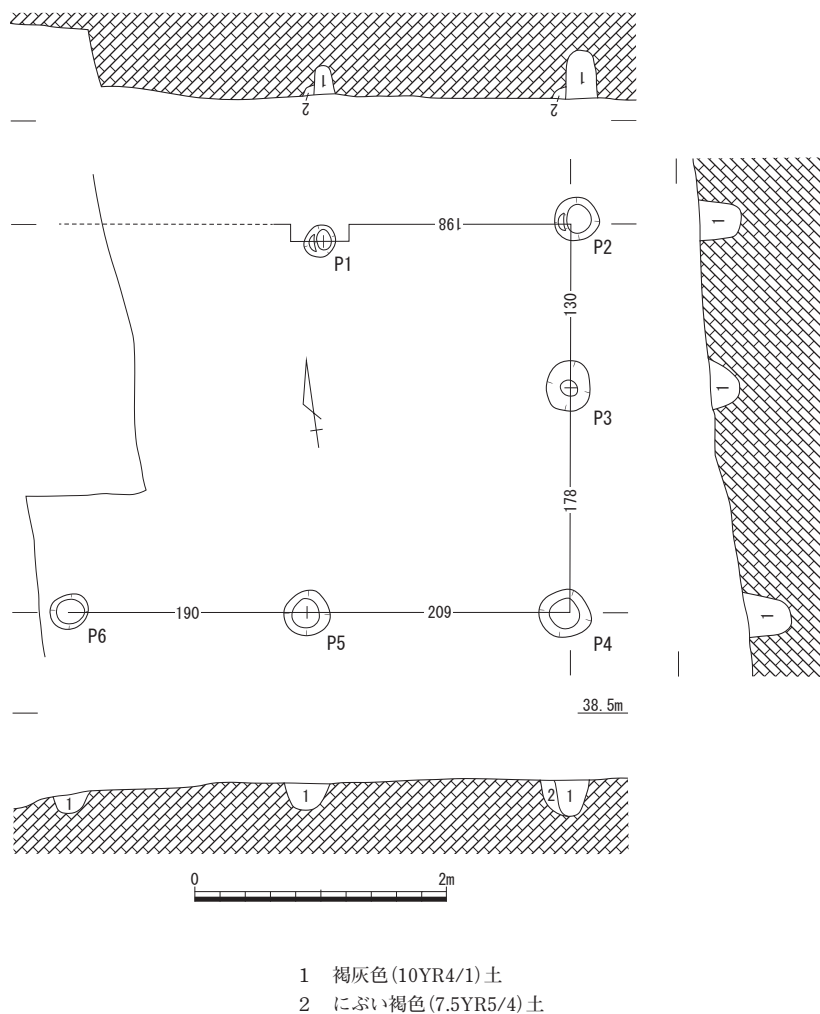
らに続いていると考えられる。現状で桁行403cm以上、梁行417cmを測る。柱穴間隔は桁方向が146～245cm、梁方向が196～221cmである。

柱穴は円形の掘り方を有し、規模は直径40～80cmを測るが、柱の抜き取り痕などを考慮すると元の柱穴は直径40～60cm程度と推測される。断面は楕円で、検出面からの深さは深い所で約50cm、柱痕から推定される柱の太さは15～20cmである。棟方向はN-32°-Wとなる。

詳細な時期を特定できる遺物は出土していないが、埋土や周辺の状態から遺構の時期は鎌倉時代と想定される。(藤井)

掘立柱建物17 (第171・178図)

7 G北西隅、南向きの緩斜面に位置する。西側部分は削平を受けており、桁行2間以上、梁行2間の側柱建物と推定される。規模は桁行399cm以上、梁行308cmで、桁行の柱間は190～209cm、梁行の柱間は130～178cmを測る。柱穴は径25～40cmの円形もしくは不整な円形で、深さは15～36cmを測る。柱痕等は確認できなかったが、断面の状況からP1・P2は柱の抜き取りが行われていると考えられる。出土遺物はP5から土師器細片が出土している程度である。建物の時期は、出土遺物や柱穴が古代末の土坑22を切っている状況から、鎌倉時代と考えられる。(石田)



第178図 掘立柱建物17 (1/60)

掘立柱建物18 (第171・179図)

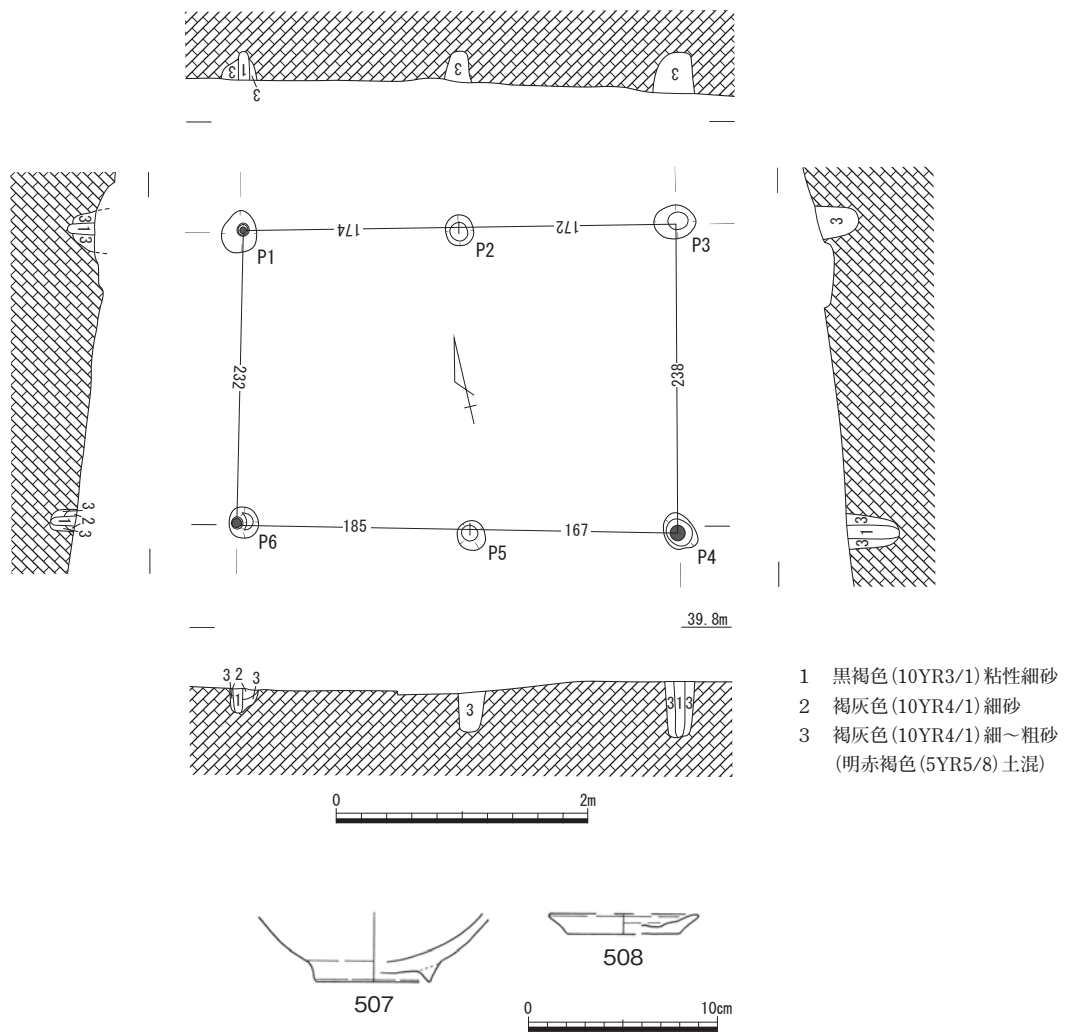
6 G南東で検出し、掘立柱建物17の北東約10mに位置する。2×1間の掘立柱建物である。規模は桁行352cm、梁行238cm、面積は8.38㎡を測る。柱穴は直径20~30cmの円形で、そのうち3個の柱穴からは柱痕を検出している。柱痕の規模からすると、直径10cm程度の柱を据えていたようである。

出土遺物は、吉備系土師器椀507と土師器皿508がある。507の高台は0.8cmで断面三角形を呈する。内面には、周囲と色調の違う筋状痕が認められ、重ね焼きの痕跡の可能性はある。遺構の時期は、出土遺物から13世紀後半~14世紀初頭と考えられる。(森本)

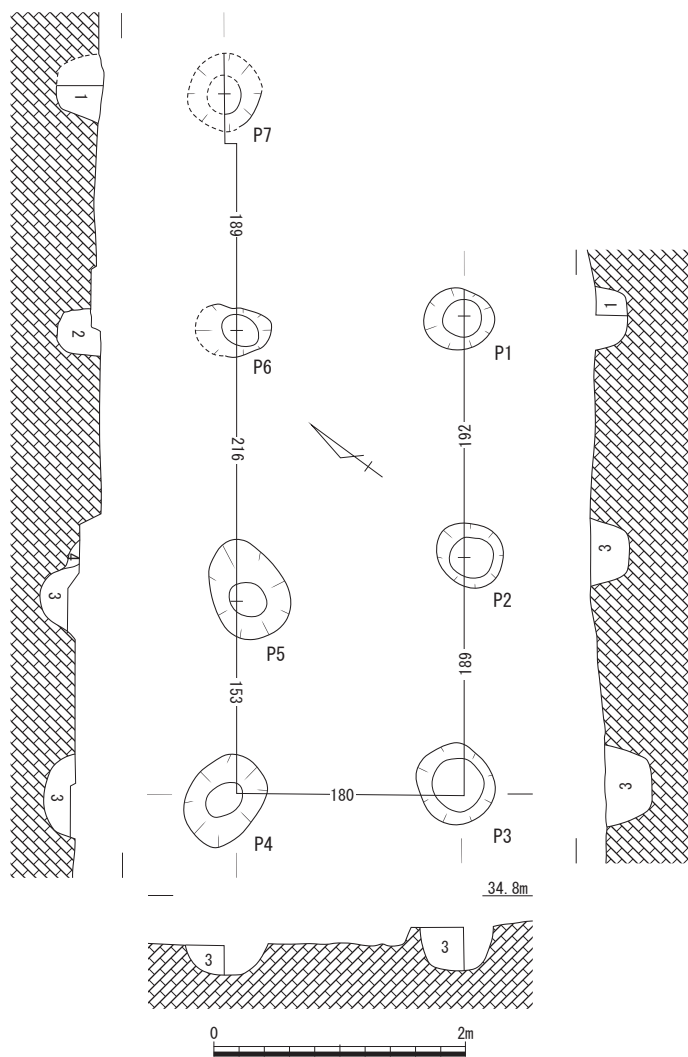
掘立柱建物19 (第172・180図、図版13)

8 D・E境に位置する。P1とP7の北東側は調査対象外に位置するため検出できなかったため、3間以上×1間の構成と考えた。柱穴は平面が楕円形を呈するものが多く、直径は55~80cmを測る。堆積状況は単層が多い。埋土は地山より黒っぽい砂質土で、土質は地山に似る。

出土遺物には須恵器の甕などと土師器があり、内面ナデ調整の須恵器甕片や色調が白色を呈する土師器片を含むため、遺構の埋没時期は鎌倉時代と考えられる。(氏平)

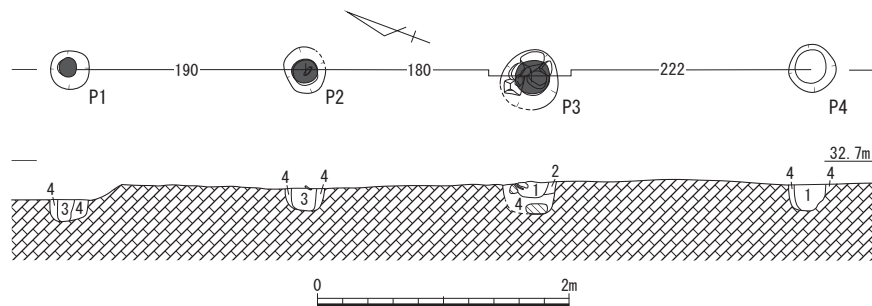


第179図 掘立柱建物18 (1/60)・出土遺物 (1/4)



- 1 褐灰色(10YR4/1)粘質細砂
(暗赤灰色(2.5YR3/1)土ブロック混)
- 2 褐灰色(10YR4/1)粘質細砂
- 3 褐灰色(10YR4/1)砂礫土(マンガン沈着)
- 4 褐灰色(10YR5/1)粗砂

第180図 掘立柱建物19 (1/60)



- 1 黒褐色(10YR3/2)シルト(炭・焼土混、粗砂少混)
- 2 灰黄褐色(10YR4/2)砂質土(粗砂混)
- 3 褐色(10YR4/4)砂質土(粗砂混)
- 4 にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質土(粗砂混)

第181図 柱穴列9 (1/60)・出土遺物 (1/4)

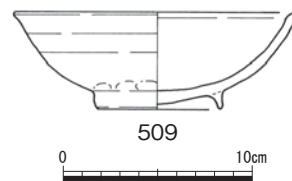
3 柱穴列

柱穴列9 (第171・181図、図版14・27)

6 Cに位置し、4個の柱穴が掘立柱建物13を山側の斜面から区画するように並んでいる。柱穴列の全長は592cm、柱間距離は180~222cmを測る。柱穴の規模は直径30~50cmを測り、柱穴内に残された柱痕から推定される柱の太さは15~20cm前後である。断面は楕円で、検出面からの深さは最大で25cm程度である。方向はN-20°-Wとなる。P3では柱痕の下から礫が出土しており、根石の可能性はある。なお、他の柱穴では根石のような根固めは認められなかった。509はP2から出土した灰白色を呈する土師器の椀で、いわゆる吉備系土師器椀である。口径14.8cm、器高5.2cmを測る。遺構の時期は、13世紀と考えられる。(藤井)

柱穴列10 (第171・182図)

7 Cで検出した柱間3間の柱穴列である。南側の柱穴列11・12とともに等高線に直交する位置にある。また、柱穴列10~12は、先述した掘立



柱建物15の西側にあつて、掘立柱建物15の棟方向にほぼ揃うことと、柱穴埋土が近似していることを指摘できる。各柱穴の規模と柱間は一定しないが、周囲に柱穴が少ないこともあり、柱穴列のまとまりと考へた。遺物は各柱穴から少量の土器片が出土した。柱穴列の時期は、検出状況から鎌倉時代と考へられる。(高田)

柱穴列11 (第171・183図)

柱穴列10の南3mに位置し、方向をほぼ揃える柱間3間の柱穴列である。各柱穴の規模と柱間は一定しないが、柱穴列10と同様、周囲に柱穴が少ないこともあり、柱穴列のまとまりと考へた。先述した掘立柱建物15の西側にあつて、掘立柱建物15の北側柱列の延長上に位置する。遺物は各柱穴から少量の土器片が出土した。柱穴列の時期は、検出状況から鎌倉時代と考へられる。(高田)

柱穴列12 (第171・183図)

柱穴列11の東2mに位置し、方向を揃える柱間3間の柱穴列である。各柱穴の規模と一定しないが、柱間は64～81cmとほぼ揃う。柱穴列12と同様に、先述した掘立柱建物15の西側にあつて、掘立柱建物15の北側柱列の延長上に位置することを指摘できる。遺物は各柱穴から少量の土器片が出土した。

柱穴列の時期は、検出状況から鎌倉時代と考へられる。(高田)

柱穴列13 (第171・183図)

柱穴列10～12のまとまりから南西に約10mの位置する柱間3間の柱穴列である。標高32.5mの等高線にほぼ平行する。柱間は148～245cmと一定しないが、周囲に柱穴が少ないこともあり、柱穴列のまとまりと考へた。P2とP4は柱痕跡を確認した。遺物は各柱穴から少量の土器片が出土した。

柱穴列の時期は、検出状況から鎌倉時代と考へられる。(高田)

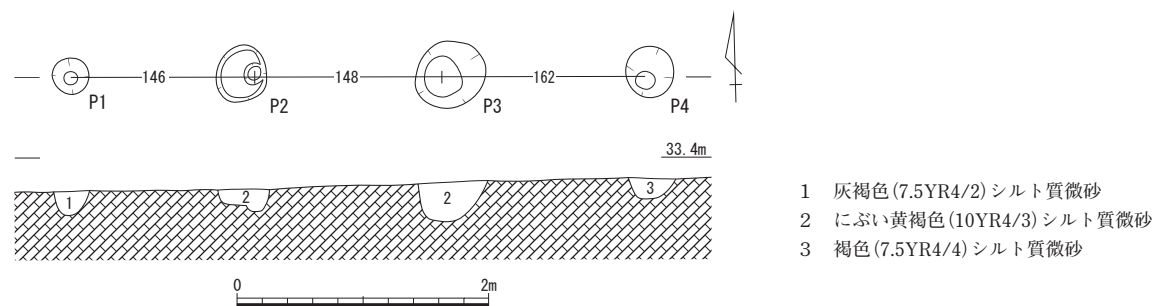
柱穴列14 (第171・183図)

6・7Eにまたがるが、大半は7Eの北西側に位置する。西側14m付近に離れて掘立柱建物15が存在する。北東から南西方向に延びる規模3間(柱間距離が約180～210cm)の列が、南東側に約150°折れて4間(柱間距離が約110～200cm)延びる構造である。本遺構の南西側にあたる谷部の遺構群と、北東側にあたる山部の遺構群を画する役割があつたと考へる。(小林)

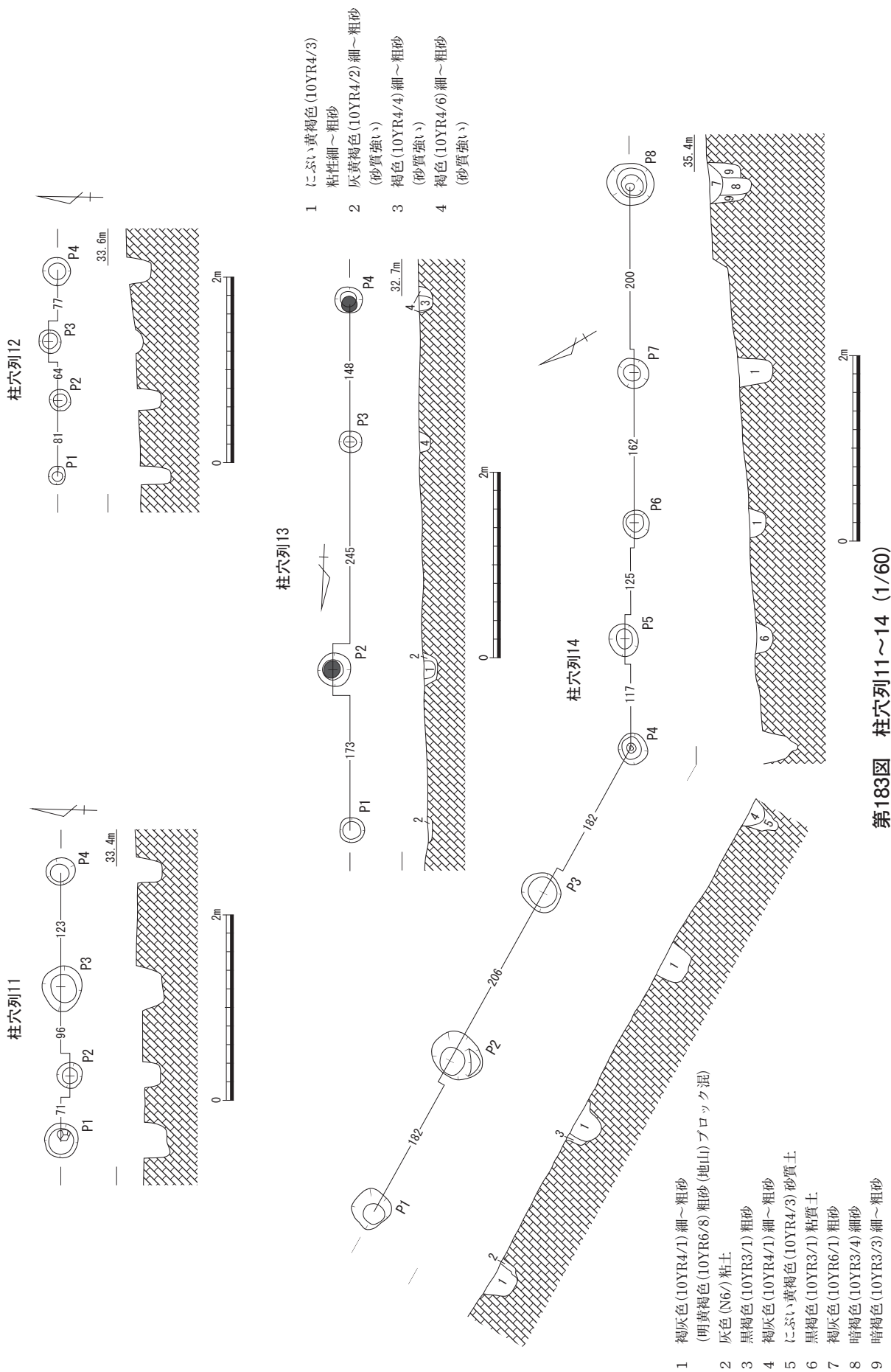
柱穴列15 (第171・184図)

7F北で検出し、柱穴列14の東約22mに位置する。対になり建物にまとまるような柱穴を探したが、南西側では確認できなかった。柱穴の平面形は全て不整円形で、P1には直径15cmの柱痕が認められる。出土遺物は、吉備系土師器碗510・511がある。511の高台は、1.1cmを測る。

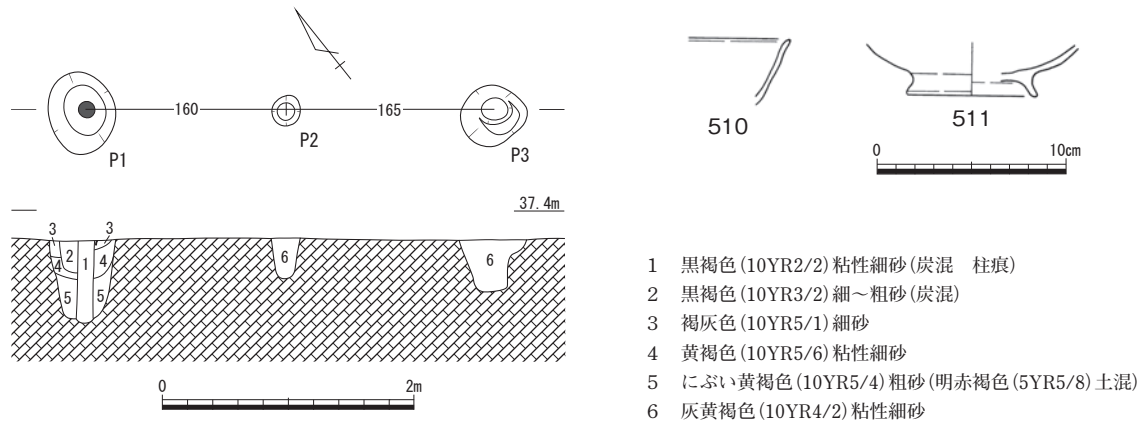
遺構の時期は、出土遺物から12世紀後半と考へられる。(森本)



第182図 柱穴列10 (1/60)



第183図 柱穴列11~14 (1/60)



- 1 黒褐色(10YR2/2)粘性細砂(炭混 柱痕)
- 2 黒褐色(10YR3/2)細～粗砂(炭混)
- 3 褐灰色(10YR5/1)細砂
- 4 黄褐色(10YR5/6)粘性細砂
- 5 にぶい黄褐色(10YR5/4)粗砂(明赤褐色(5YR5/8)土混)
- 6 灰黄褐色(10YR4/2)粘性細砂

第184図 柱穴列15 (1/60)・出土遺物 (1/4)

4 土坑

土坑27 (第171・185図)

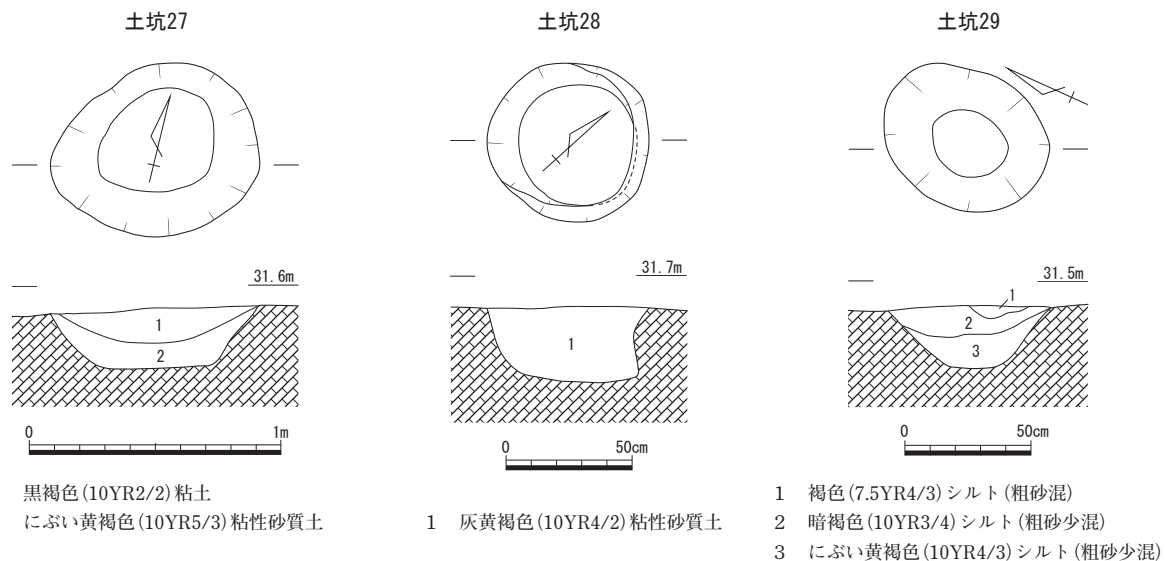
6 Bに位置する。長軸83cm、短軸68cmを測る不整形の土坑で、断面形は楕円形、検出面からの深さは24cmで、底面標高は31.27mとなる。詳細な時期を特定できる遺物は出土していないが、中世の土坑と考えられる。(藤井)

土坑28 (第171・185図)

土坑27の南東約3.5mの地点に位置する。直径63～64cmの円形の土坑で、断面形は鉢形、検出面からの深さは30cmで、底面標高は31.28mとなる。詳細な時期を特定できる遺物は出土していないが、中世の土坑と考えられる。(藤井)

土坑29 (第171・185図)

7 A東、土坑28の南西約24mの地点に位置する。長軸68cm、短軸55cmの楕円形の土坑で、断面形は楕円形、検出面からの深さは25cmで、底面標高は31.16mとなる。詳細な時期を特定できる遺物は出土していないが、中世の土坑と考えられる。(藤井)



- 1 黒褐色(10YR2/2)粘土
- 2 にぶい黄褐色(10YR5/3)粘性砂質土

- 1 灰黄褐色(10YR4/2)粘性砂質土

- 1 褐色(7.5YR4/3)シルト(粗砂混)
- 2 暗褐色(10YR3/4)シルト(粗砂少混)
- 3 にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト(粗砂少混)

第185図 土坑27～29 (1/30)

土坑30 (第171・186図)

土坑29の東約10.5mの地点に位置する。長軸180cm、短軸160cmを測る不整形円の土坑で、断面形は皿形、検出面からの深さは9cmで、底面標高は31.70mとなる。詳細な時期を特定できる遺物は出土していないが、中世の土坑と考えられる。(藤井)

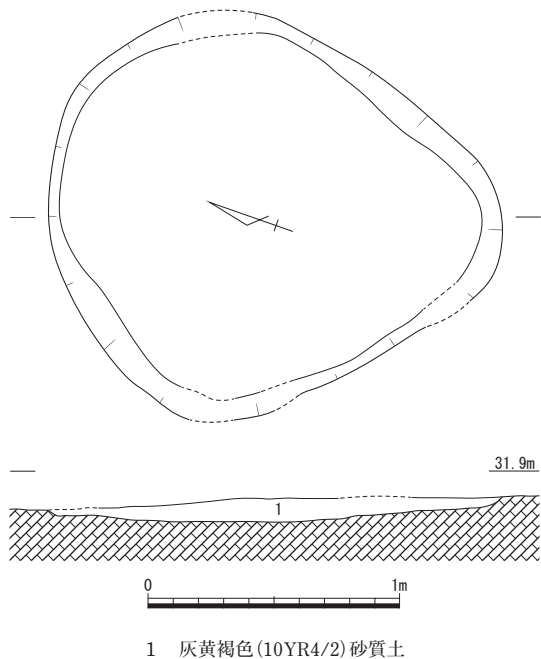
土坑31 (第171・187図)

土坑30の南に隣接して位置する。長軸184cm、短軸108cmを測る不整形の土坑で、断面形は皿形、検出面からの深さは7cmで、底面標高は31.72mとなる。詳細な時期を特定できる遺物は出土していないが、中世の土坑と考えられる。(藤井)

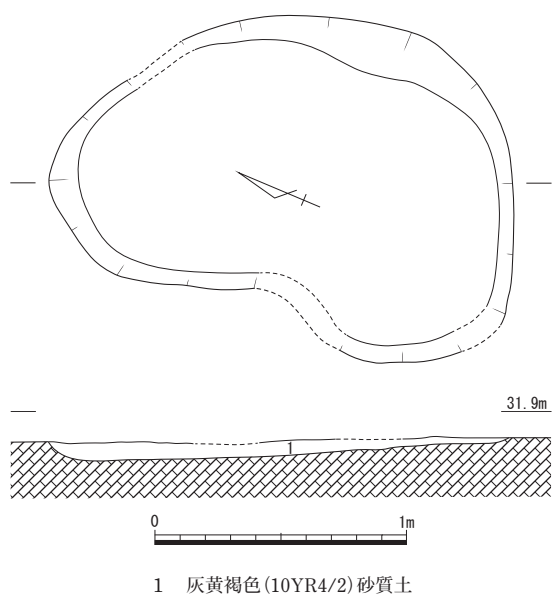
土坑32 (第171・188図)

7Dの西側端に位置する。南側4m付近に、柱穴列12を挟み土坑33が存在する。

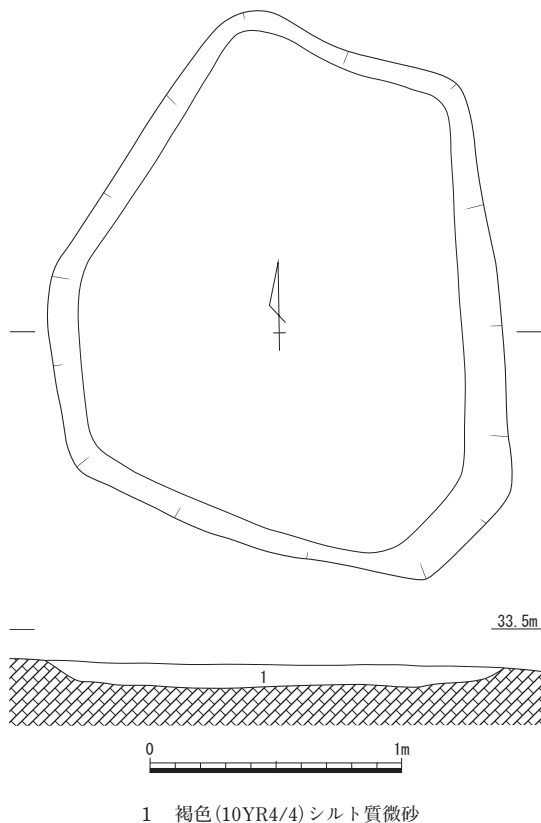
規模は、長軸長214cm、短軸長180cmを測る。検出面からの深さは9cmで、底面の標高は33.27mである。平面形状は不整形、断面形状は皿形を呈する。平面規模の割に深さが浅く、たわみのような存在である。この辺りは、掘立柱建物15などが存在した比較的安定した地形から、西側の柱穴列10・11がある斜面地



第186図 土坑30 (1/30)



第187図 土坑31 (1/30)



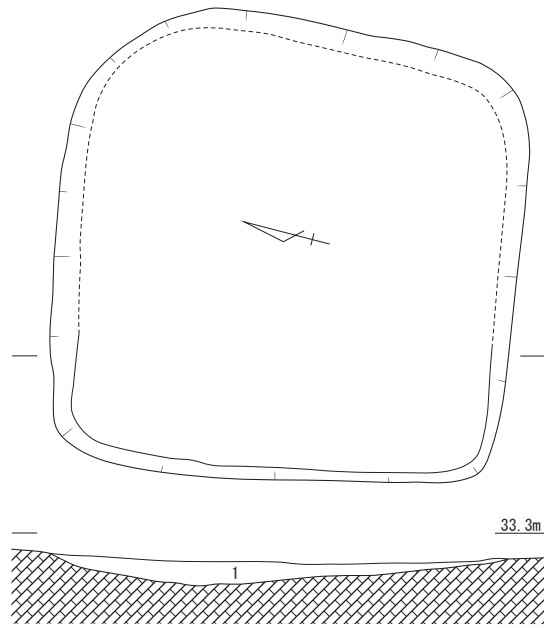
第188図 土坑32 (1/30)

に向かった中間地にあたる。また南側にある柱穴列12と土坑33とは並立して存在したと考えられる。

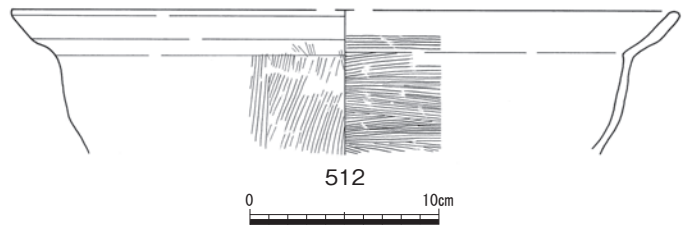
時期は土坑33と同様であったと考えられよう。(小林)

土坑33 (第171・189図)

7 Cの東端中央に位置する。北側4 m付近に、柱穴列12を挟み土坑32が存在する。規模は、長軸長186cm、短軸長181cmを測る。検出面からの深さ9 cmで、底面の標高は33.09mである。平面規模の割に深さが浅く、たわみのような存在である。本土坑は北側にある土坑32と同様に、地形の変換点に存在している。土坑32とは並存し、同様の役割があったのであろう。出土遺物には鍋512があり、13世紀代になるであろう。(小林)



1 暗褐色(10YR3/4)シルト質微砂



第189図 土坑33 (1/30)・出土遺物 (1/4)

土坑34 (第171・190図)

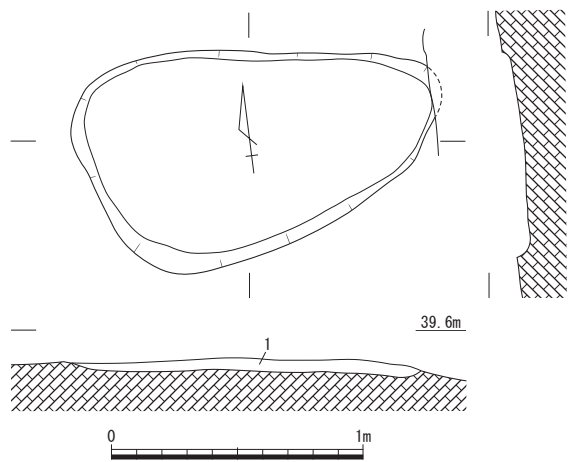
調査対象地の東端、6 Gに位置する浅い土坑である。土坑33から約78m東の斜面上方にある。平面形は東西方向に長い不整楕円形で、長さ139cm、幅89cmを測る。

遺構の流入土から土師器片513が出土しており、遺構の時期は13世紀前半と考えられる。(柴田)

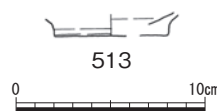
土坑35 (第171・191図、図版27)

調査対象地の東端、6 Hに位置する土坑である。土坑34の約8 m東の斜面上方にあり、検出面の比高は66cmを測る。平面形は不整円形で、径105~117cm、深さ26cmを測る。東半分の掘り方は段を有する。掘り方の東西壁面は被熱により赤色化しており、流入土内には焼土や炭を含む。

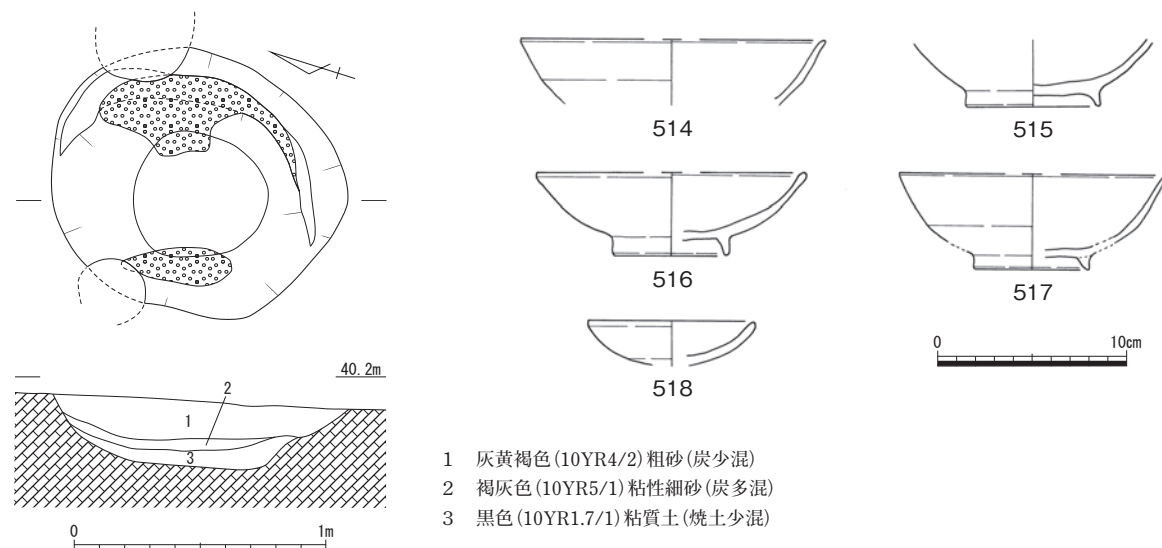
遺構の流入土から土師器の高台付碗514~517や小皿518が出土している。高台付碗の口径は14cm前後、器高は4 cm程度と推定する。遺物から遺構の時期は13世紀前半と考えられる。(柴田)



1 褐灰色(10YR4/1)細~粗砂



第190図 土坑34 (1/30)・出土遺物 (1/4)



- 1 灰黄褐色(10YR4/2)粗砂(炭少混)
- 2 褐灰色(10YR5/1)粘性細砂(炭多混)
- 3 黒色(10YR1.7/1)粘質土(焼土少混)

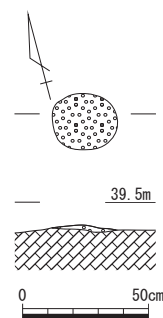
第191図 土坑35 (1/30)・出土遺物 (1/4)

5 被熱面

被熱面2 (第171・192図)

6 G南東に位置する。被熱範囲は長軸約25cm、短軸約20cmで、楕円形を呈す。厚さは約2cmである。遺構の時期は不明瞭だが、掘立柱建物18の南東端近くでみつまっていることから、この建物に関係する遺構の可能性がある。また、周囲では中世の柱穴が多数検出されていることから、中世と考えたい。

(森本)



第192図 被熱面2 (1/30)

6 溝

溝23 (第170・193図)

4 B中央に位置する。南端は後述する溝25付近で収まるが、北端は調査区外へと延びる。幅は15～35cm、断面形状は深さ約10cmの椀形を呈する。土器小破片から14世紀代であると思われる。

(松尾)

溝24 (第170・193図)

溝23に平行して掘削されており、南端は調査区外へと延びる。幅は150～165cmで、断面形状は深さ20cmの幅広い椀形を呈する。土器の破片等から溝23とほぼ同時期と思われる。

(松尾)

溝25 (第170・194図)

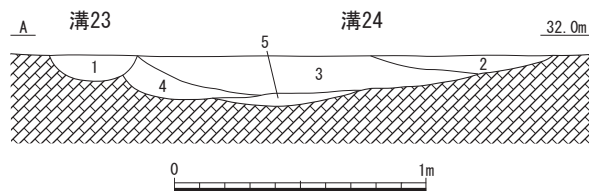
北は溝23南端から始まり、南端は調査区外へと延びる。溝23・24と同様に14世紀代に地形に沿って掘削された溝であろう。

(松尾)

溝26 (第170・194図)

3 C南西で検出した。図示できないが、埋土中から亀山焼及び土師器小片が出土しており、時期は室町時代と考えられる。

(石田)



- 1 にぶい黄橙色(10YR7/4)粘性細砂(溝23)
- 2 灰白色(10YR7/1)粘土(溝24)
- 3 褐灰色(10YR5/1)細～粗砂(溝24)
- 4 褐灰色(10YR4/1)細砂(溝24)
- 5 灰黄褐色(10YR4/2)細～粗砂(溝24)

第193図 溝23・24 (1/30)

溝27 (第170・194図)

溝26の北東上方約7mに位置する。上端幅は46cmで検出面からの深さは5cmを測る。図示できないが土師器小片が埋土中から出土しており、時期は室町時代の範疇と考えられる。(石田)

溝28 (第171・194図)

6C北端に位置する。上端幅63cm、下端幅28cm、検出面からの深さは13cmを測る。性格は不明である。遺構の時期は鎌倉時代と考えられる。(藤井)

溝29 (第171・194図)

先述した掘立柱建物13の南約8mに位置する東西方向の溝で、西側を後世の削平で失うことから長さ1m強を検出したのみである。時期は、検出状況から鎌倉時代と考えられる。(高田)

溝30 (第172・194図)

8Dから9Cを北東から南西へ流れる溝で、長さ約24m分を確認した。堆積状況は白っぽい埋土の単層、出土遺物は少量で須恵器の甕などと土師器があり、埋没時期は鎌倉時代以降であろう。(氏平)

溝31 (第172・195図)

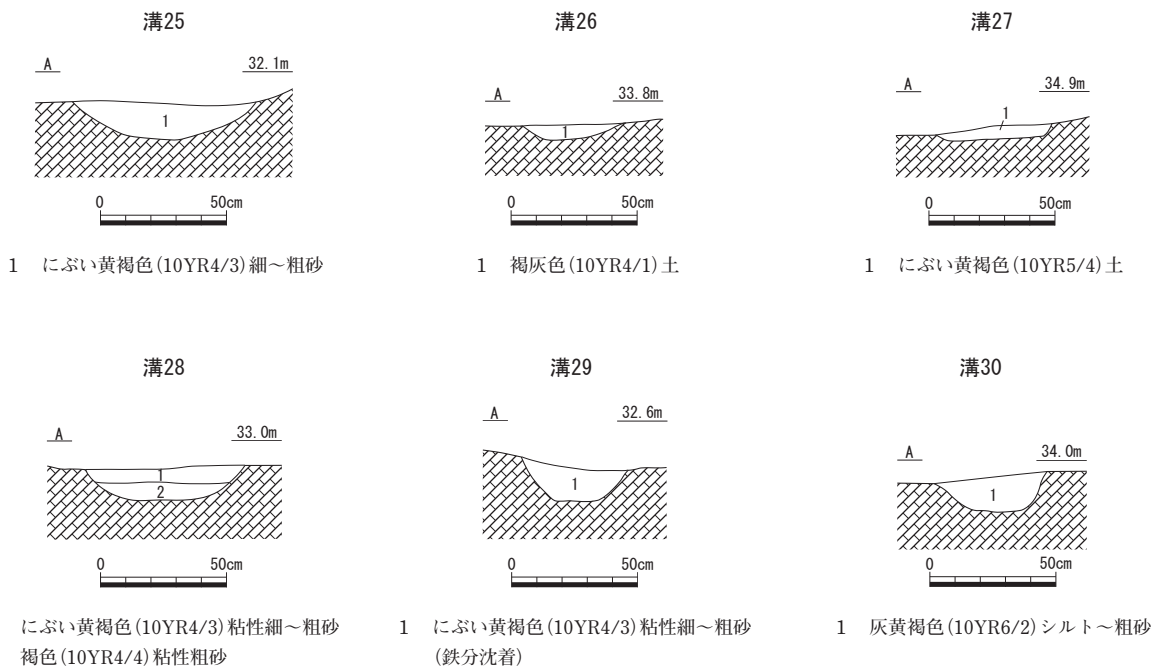
8E西端を北から南へ流れる溝で、長さは約3m分を確認した。堆積状況は白っぽい埋土の単層で、碗形を呈する。出土遺物は土師器が少量で、遺構の埋没時期は鎌倉時代以降と考えられる。(氏平)

溝32 (第172・196図)

8E南東端で最大幅は24cmを確認した。堆積状況は白っぽい埋土の単層、出土遺物は須恵器の甕、土師器が皿519と甕で、埋没時期はおおよそ鎌倉時代ごろかと考えられる。(氏平)

溝33 (第171・197図)

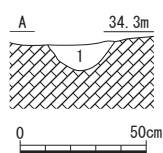
6G南西隅で検出した。上端幅94cm、底面幅60cmで、検出面からの深さは11cm、底面の標高は38.35mである。図示できる遺物はなかったが、土師器小片が埋土中から出土しており、時期は鎌倉時代の範疇と考えられる。(石田)



第194図 溝25～30 (1/30)

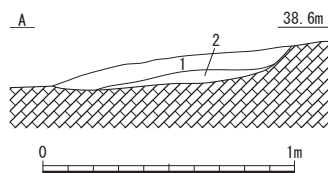
溝34 (第171・198図)

6 G中央付近で検出し、溝33の北東約10mに位置する。上面は後世に大きく削られ、検出面での上端幅は35cmで、深さは8cmである。断面形は碗形である。平安時代の溝15を切っており、埋土中からは土師器鍋520が出土していることから、時期は室町時代と考えられる。(森本)



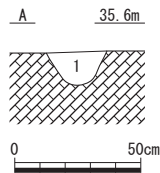
1 灰白色(10YR7/1)砂

第195図 溝31 (1/30)



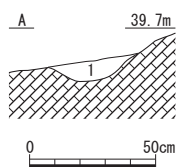
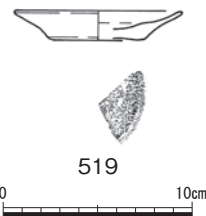
1 灰黄褐色(10YR5/2)粗砂
2 褐灰色(10YR4/1)細砂
(明赤褐色(2.5YR5/8)粘性細砂混)

第197図 溝33 (1/30)



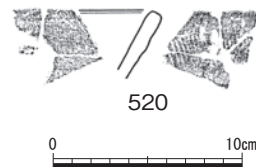
1 褐灰色(7.5YR5/1)細～粗砂

第196図 溝32 (1/30)・出土遺物 (1/4)



1 褐灰色(10YR5/1)細～粗砂

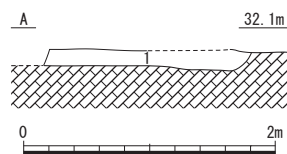
第198図 溝34 (1/30)・出土遺物 (1/4)



7 たわみ

たわみ5 (第170・199図)

4・5 B境に位置する。調査区境のため、全容は不明であるが、検出長で262×160cmを測る。図化できなかったが、土師器片が出土しており、時期は鎌倉時代以降と考えられる。(石田)

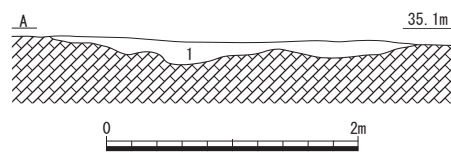


1 にぶい黄橙色(10YR6/3)細～粗砂

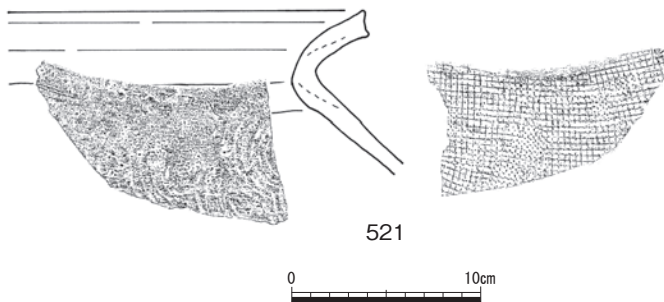
たわみ6 (第172・200図)

8 E中央で確認した。埋土は白っぽい砂質土の単層で、平面形は不整形を呈し、底面は凹凸がある。出土遺物は須恵器杯と亀山焼甕521、土師器鍋・甕・碗・皿と吉備系土師器碗で、埋没時期は鎌倉時代であろう。(氏平)

第199図 たわみ5 (1/60)



1 灰色(5Y6/1)粗砂(マンガン多沈着)



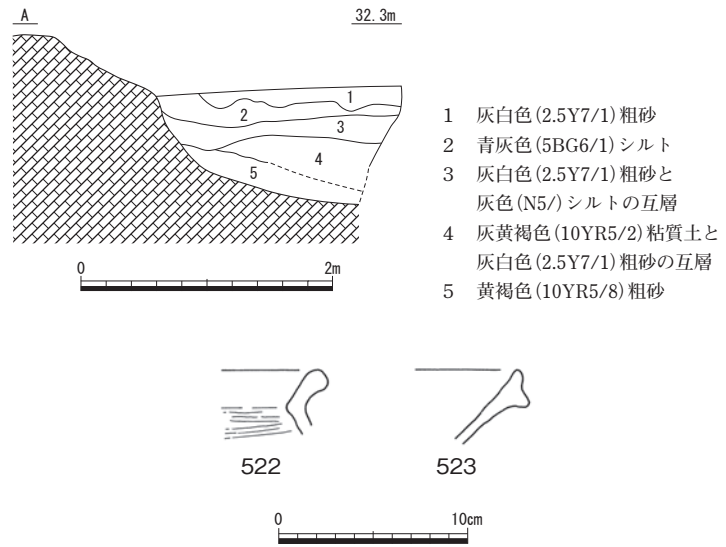
第200図 たわみ6 (1/60)・出土遺物 (1/4)

8 河道

河道1 (第172・201図)

河道1は8B・Cで検出された。周囲は地下げを伴う広範囲の地形改変を受けている。規模は現状において、幅約4.8m以上、深さ約1.3mを測る。水流は現在の谷地形とほぼ同様に東から西に向かって下がっている。このことから河道の掘削は、調査対象地周辺で行われた開田の時期に近いと推測される。

出土遺物として、瓦質土器の鍋522、鉢523などが認められる。時期は15世紀以降と思われる。(澤山)

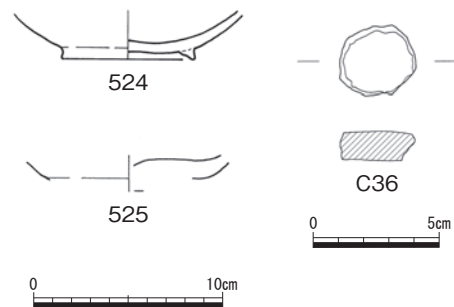


第201図 河道1 (1/60)・出土遺物 (1/4)

9 その他の遺構・遺物

谷部 (第84・172・202図、図版28)

谷部は先述した8～10B・Cで認められた自然地形である。図化し得ていないが、当初は深い谷部であったものが、この頃になると浅い窪み程度の地形になっていた。なお、この谷部の堆積土の上層にあたる第5層は中世水田層、第4層は近世以降の水田層と推定される。中世包含層の第6・7層から出土した遺物として、土師器の碗524、青磁の碗525や須恵器転用の土製円板C36などが認められ、時期は12世紀から14世紀頃と思われる。全体的に同層からの遺物の出土量は少なく、残存状況もあまりよくないものが多い。(澤山)



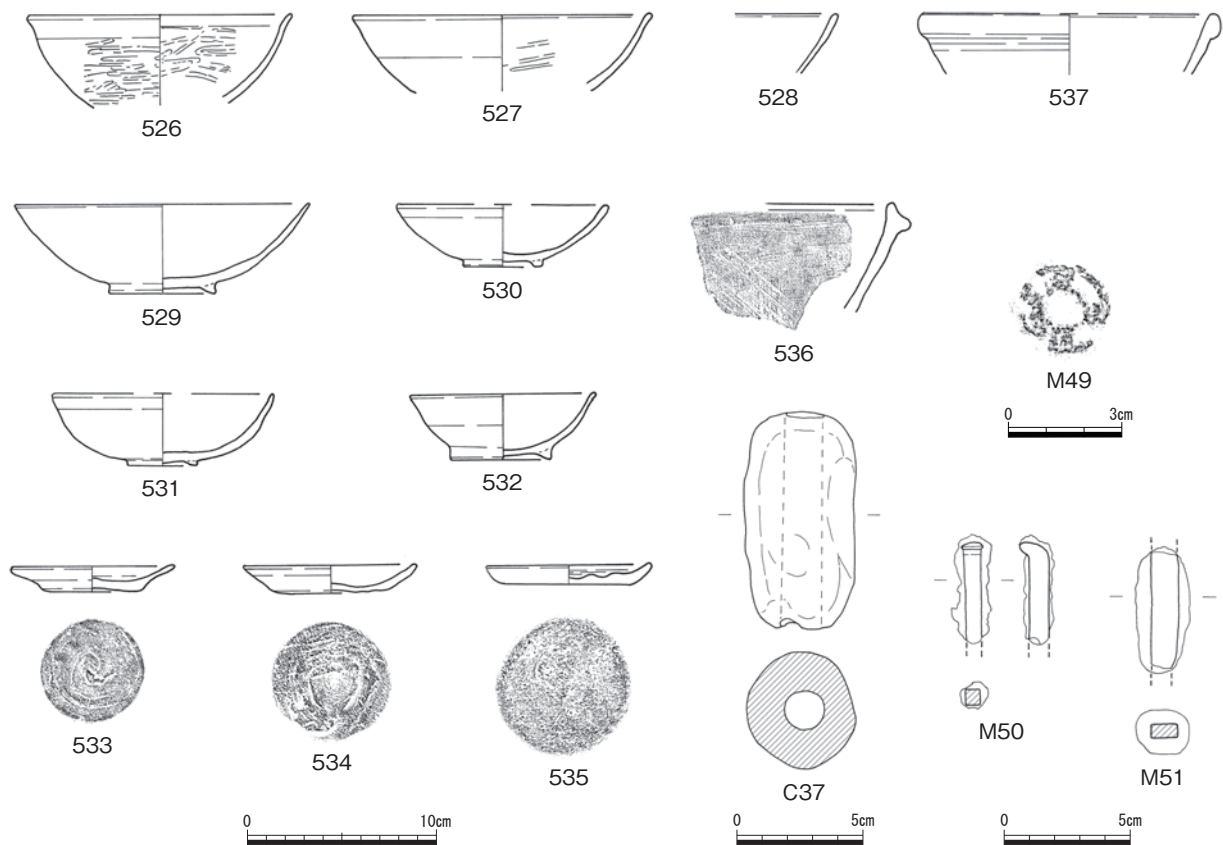
第202図 谷部出土遺物④ (1/4・1/3)

柱穴 (第170～172・203図、図版27・28・30)

鎌倉時代以降と考えられる柱穴は、掘立柱建物や柱穴列が確認された標高32～35m付近の比較的緩やかな斜面で確認されたが、奈良～平安時代の柱穴の分布と比べると密集した状況ではない。各柱穴からの出土遺物としては、土師器の碗526～532、皿533～535、瓦質土器の播鉢536、白磁の碗537、土製品では管状土錘C37、金属製品では銅銭M49、釘M50・51などがみつまっている。(澤山)

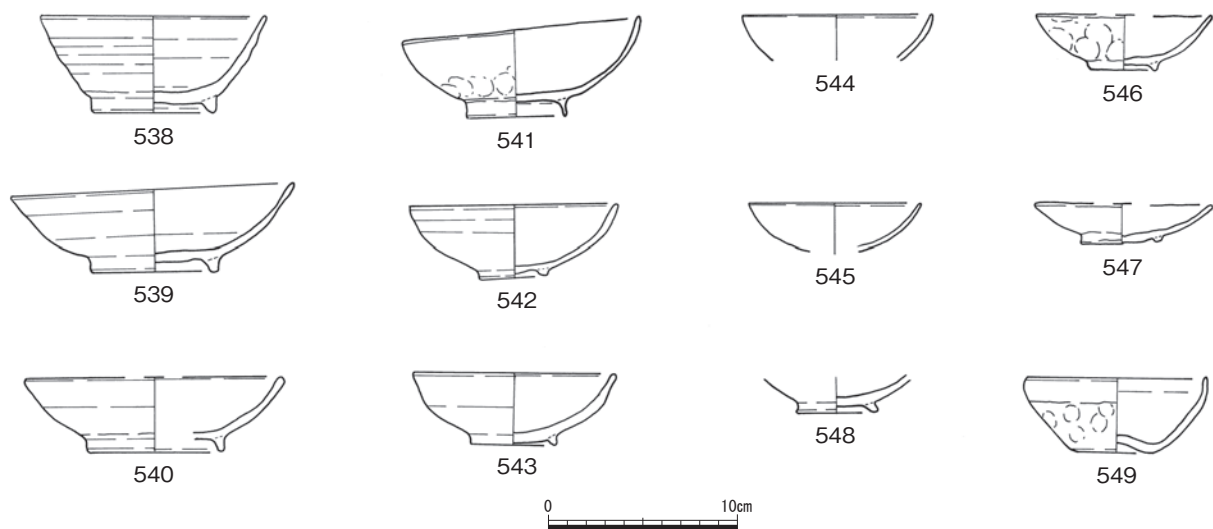
包含層・遺構に伴わない遺物 (第204～206図、図版27～30)

鎌倉時代以降の包含層・遺構に伴わない遺物の出土状況をみると、奈良～平安時代と異なって調査区南半で多く認められる。このことから、時代が下るにしたがい、集落の中心が北から南に移動した可能性がある。なお、調査地から約300m南には、東西幅約130m、南北幅約70m、周囲からの比高差1～2mを測る曲輪に、北東から北辺に土塁を残す中世城館の土居遺跡が所在することは示唆に富む。

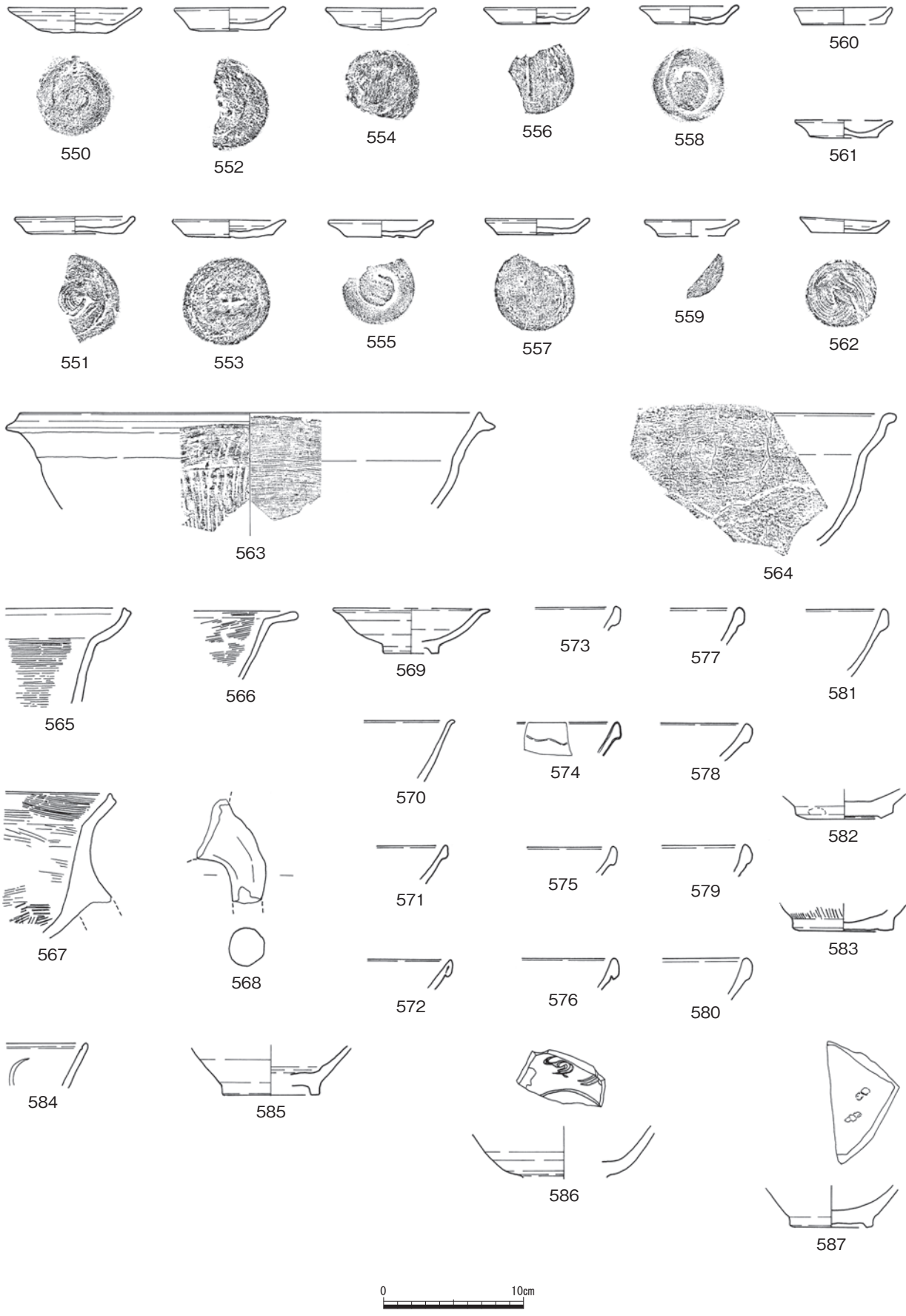


第203図 鎌倉時代以降の柱穴出土遺物 (1/4・1/3・1/2)

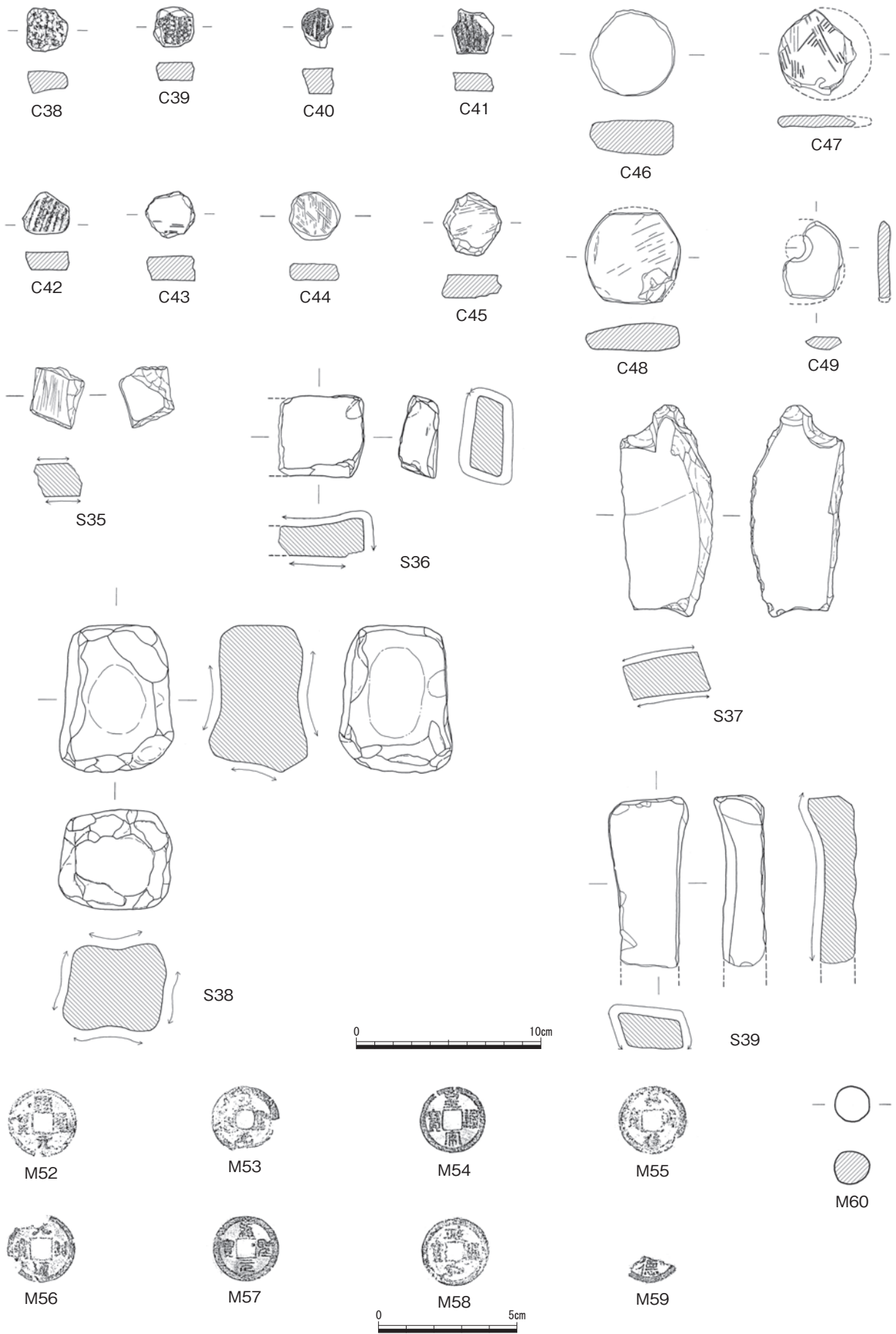
出土遺物としては、土師器の碗538～549、皿550～562、鍋564～568、瓦質土器の鍋563、白磁の碗569～583、青磁の碗584～587、土製品では土製円板C38～49、石製品では砥石S35～39、金属製品では銅銭M52～59、銃丸M60などが出土している。土師器の碗の高台をみると、538～541は「ハ」字形に立っているが、542～547は退化傾向を示し、549では高台自体が消失して、いわゆる「ヘソ碗」となっている。また、こうした高台の変化に伴い、口径・器高・高台径の縮小も窺える。時期は12世紀から14世紀頃と思われ、この時期以降から、調査区周辺の開田が行われたと思われる。(澤山)



第204図 鎌倉時代以降の包含層・遺構に伴わない遺物① (1/4)



第205図 鎌倉時代以降の包含層・遺構に伴わない遺物② (1/4)



第206図 鎌倉時代以降の包含層・遺構に伴わない遺物③ (1/3・1/2)

第5節 小結

和田谷遺跡の特徴的な遺構・遺物のうち、掘立柱建物、鍛冶遺構、施釉陶器、製塩土器については、第7章第3節で個別に総括することとし、本節では和田谷遺跡の変遷について述べる。

縄文時代の遺構は検出しておらず、草創期の有茎尖頭器が9D包含層から出土している。その由来は不明だが、縄文人の広域な活動の一端を示している可能性がある。

弥生時代の遺構は、5～9C～Fに位置する中期後葉の溝11条がある。南東から北西方向に流走する溝群であり、これらは、和田谷遺跡とその南側の土居遺跡との間に想定される谷の方向に揃うもので、当時の地形を反映しているものと考えられる。中でも複雑に離合する溝1～6は、ほぼ同一箇所を繰り返し踏襲しながら利用された溝と考えられる。当該期の居住地は、調査区外となる溝の上流部に想定される。

古墳時代の遺構は、3・4Cと6・7C～Fの急斜面から緩斜面へ地形変換する2地点に位置する段状遺構8基と土坑4基、6Cの緩斜面に位置する土坑1基があり、いずれも後期に属する。また自然地形であるが、8～10B・Cで検出した谷地形がある。3・4Cの段状遺構1は、鍛冶等の高温作業の痕跡と考えられる被熱硬化面を床面で検出しており、7世紀に属する。6・7D～Fの段状遺構2～8は、床面標高34～37m内で2～3基単位の3か所にまとまり、柱穴や被熱面、壁体溝、土坑のいくつかあるはいずれかを持つもので、鉄滓や製塩土器が出土する。時期は、段状遺構2～6が6世紀末から7世紀前半、段状遺構7・8が7世紀後半に属する。西側に位置する段状遺構2・3から約10m東に離れて位置する段状遺構4～6、さらに東側に位置する段状遺構7・8と変遷したものと考えられる。

8～10B・Cで検出した谷部は、8C付近の標高32.5m辺りを肩口とするが、その上流は南側の土居遺跡が位置する丘陵との間の谷につながるものと想定できる。調査区内の谷は古墳時代以降中世までの間で断続的に埋没したと考えられる。中でも古墳時代の遺物は、6世紀末から7世紀前半の須恵器、土師器が比較的まとまって出土し、製塩土器、木製品等も認められる。これらのことから、調査区外の谷上流部に同期の居住域を推定したい。なお、古墳時代の製塩土器は、薄手で口縁が内湾し底部平底のものと、やや厚手で口縁が内湾するものの2種があり、前者は段状遺構1・3・4と谷部から出土している。

奈良時代の遺構は、古墳時代後期の遺構検出地点に重なるか近接する範囲で確認した。3・4B・Cで検出した竪穴遺構3基と鍛冶炉4基、土坑4基は8世紀後半に属する。6・7F・Gで検出した段状遺構2基のうち、8世紀中頃と考えられる段状遺構11では、製塩土器溜まりと被熱面を検出している。出土した製塩土器片の総重量は約900gを測る。この時期の製塩土器の特徴は薄手・尖底であり、沿岸部の塩の生産地から運搬具として利用され、段状遺構11等で焼き塩用の土器として使用されたものと考えられる。

4Bの竪穴遺構1は、新古2つの竪穴が重複しており、それぞれの段階に鍛冶炉各2基を伴う。このような鍛冶遺構は、その規模や状況から豪族居宅等の一角に営まれた鍛錬鍛冶工房と考えられる。出土した製塩土器は、鍛冶工程の中での塩の利用を示唆する資料と言えよう。また、竪穴遺構1～3から南東約20mの位置する掘立柱建物1については、その建て始めが8世紀後葉ないし9世紀前葉と

考えられ、現在は市道となっている範囲を含めたこの付近の開発・利用が、奈良時代に行われた可能性が高い。

平安時代の遺構は、掘立柱建物、柱穴列、段状遺構、土坑、鍛冶炉、溝等である。古墳から奈良時代の遺構の占拠が限定的であったのに対し、平安時代は調査区の大半を占める南西向き緩斜面全域に広く分布する。このうち、9世紀代の遺構は4～9 C～Eの標高32～35 m付近に位置し、10世紀以降は6・7 E～Gの標高36～40 m付近に位置する。なお、この南西向き緩斜面で検出した包含層は、平安時代以降に形成されたものと推定され、6 Dや7 G付近では厚さ70 cmを超えることを確認した。同時代以降に行われた造成土を含むことが考えられる。9世紀代の掘立柱建物は総柱建物3棟と側柱建物9棟で、建物の棟通りが南西向き緩斜面の傾斜に直交あるいは平行するように配置される。このうち、掘立柱建物1については、建て替え後の建物及び近接する段状遺構や土坑とともに9世紀前半代のまとまりと考えられ、以南の大部分の9世紀中葉から後半代の建物に先行する。

西側の標高36 m以上に展開する10世紀以降の遺構では、鍛冶炉5に伴う椀形鍛冶滓の分析から砂鉄を始発原料とすることが注目される。奈良時代の鍛冶炉1～4が同原料に鉄鉱石を用いるのに対し、同一の遺跡内における同原料採用の変遷であろう。

平安時代の遺物には、須恵器、土師器、黒色土器、製塩土器、灰釉陶器、緑釉陶器、瓦、土製品（韃の羽口・土錘）、鉄製品（釘・刀子・鋤・紡錘車）、鉄滓と、多種多様なものがある。これらは、同時代における和田谷遺跡の旺盛な活動を裏付ける資料であるが、中でも9世紀の猿投・東濃産の灰釉陶器、9・10世紀の京都・近江産を中心とした緑釉陶器の出土は、当遺跡の性格及び盛期を考えるうえで注目される。

鎌倉時代以降の遺構は、掘立柱建物、柱穴列、土坑、被熱面、溝等である。掘立柱建物をはじめ主な遺構は鎌倉時代に属するもので、前代と比較して集落規模が縮小する。遺構分布は、南西向き緩斜面の6 C・Dと7～8 C～Eの範囲、東端斜面の6・7 F・G付近の3地点にまとまる。後の2地点の中間付近に築かれる柱穴列14の存在とあわせ、屋敷地の配置と考えられる。その中でも、4×2間の側柱建物で、面積33.82 m²を測る大型の掘立柱建物15等を有する屋敷地の優位性が指摘できる。また、8～10 B・Cの谷地形は、14世紀頃までに埋没し、以降は水田域となっている。

鎌倉時代以降の遺物には、土師器、瓦質土器、青白磁、土製品（土錘・土製円板）、金属製品（鉄釘・銅銭）、石製品（砥石等）があるが、卓越した内容の出土品はみられない。

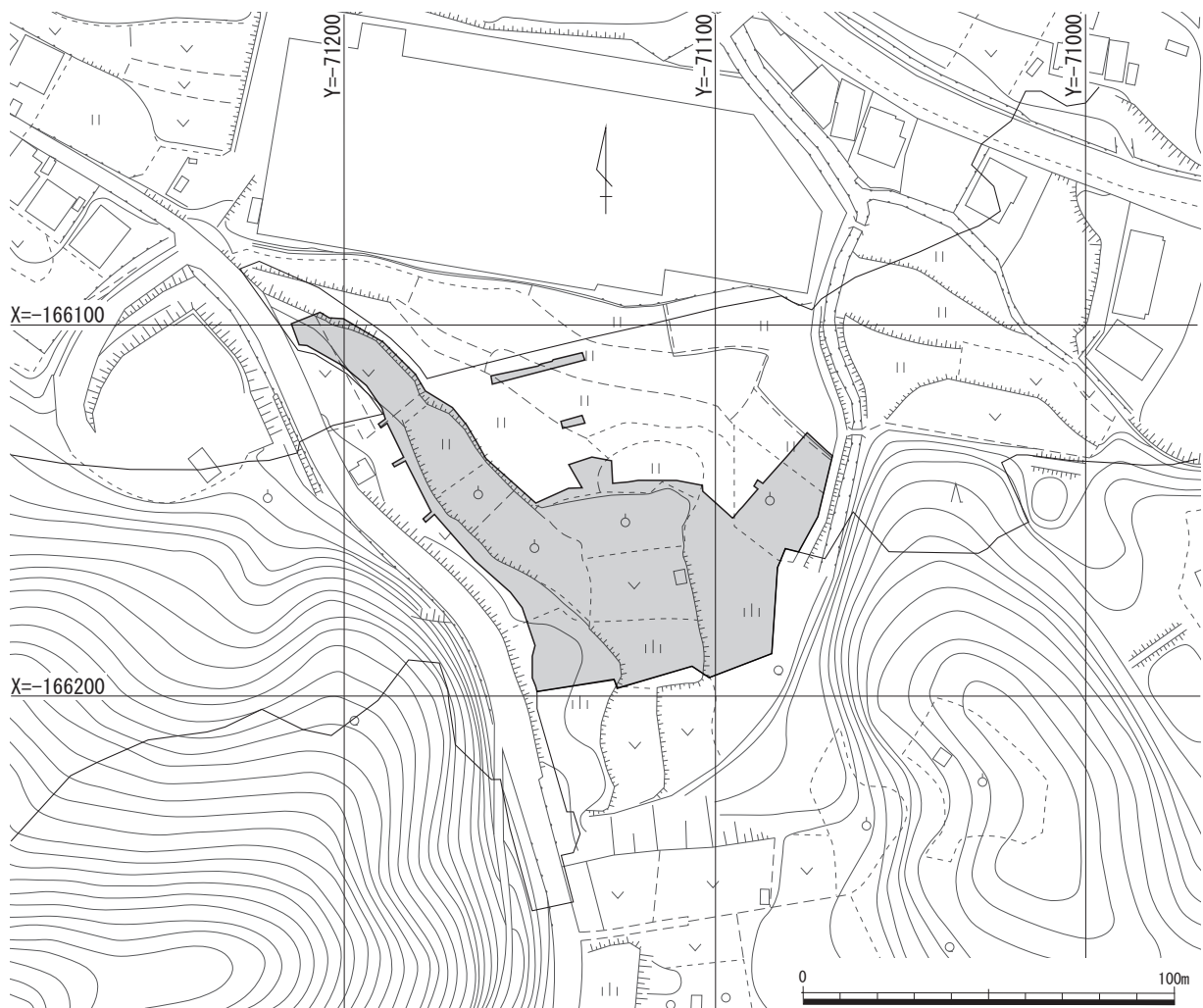
和田谷遺跡は平安時代に最盛期を迎える。それは、同時代における遺構の面的な広がりや数量の飛躍に加え、建物の規格や規模、施釉陶器の出土といった質的な高さからも指摘され、豪族居宅といった有力集落の存在を示唆するものである。こうした有力集落が形成される背景として、古墳時代後期や奈良時代以来の鍛冶や製塩に関わる工房を運営した集団の存在が考えられる。特に奈良時代の鍛冶工房は平安時代の集落の一角に重なり、すでに有力集落の一角を形成していた可能性もある。また、鎌倉時代以降は、集落規模は縮小するものの、建物の規模等の質的な高さは継続することが指摘でき、当遺跡とは谷を挟んだ南側に位置する土居遺跡との関連性が想起される。 (高田)

第5章 マキサヤ遺跡

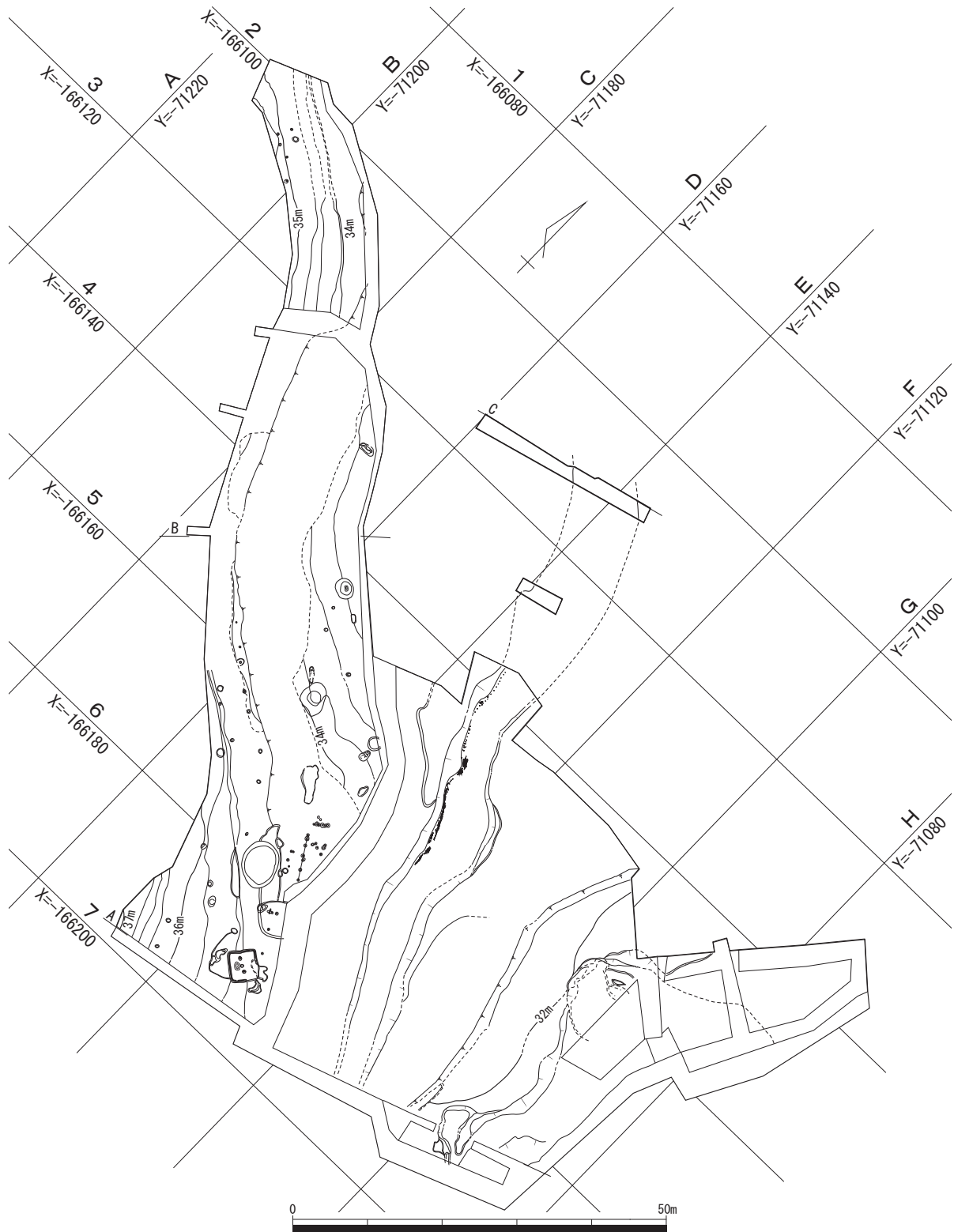
第1節 調査の概要

マキサヤ遺跡は毛野無羅山から派生して北東に延びる丘陵の東裾から、東の茶臼山から北東に延びる尾根に挟まれた谷にかけて位置する。かつては、ここから南へ山越えすると史跡津雲貝塚が所在する笠岡市西大島へ抜けることができたとのことである。

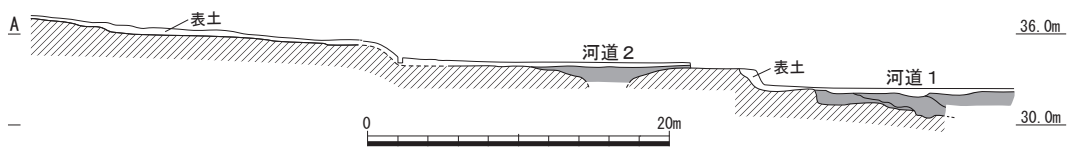
現在は開墾により造成され、おおむね地形に沿った数段の水田や畑となっているが、集落は標高34m前後の緩斜面に展開することが判明した。この高さまでは風化の進んだ花崗岩の基盤が山から延びているが、東の谷側はそうした風化土の粗砂を中心とした堆積層になっている。この谷では古代には河道が形成されたことや、さらに東では縄文時代に遡る河道の存在も明らかになった。特に出土した縄文土器については当地域の編年を考察するうえで重要な資料となった。(柴田)



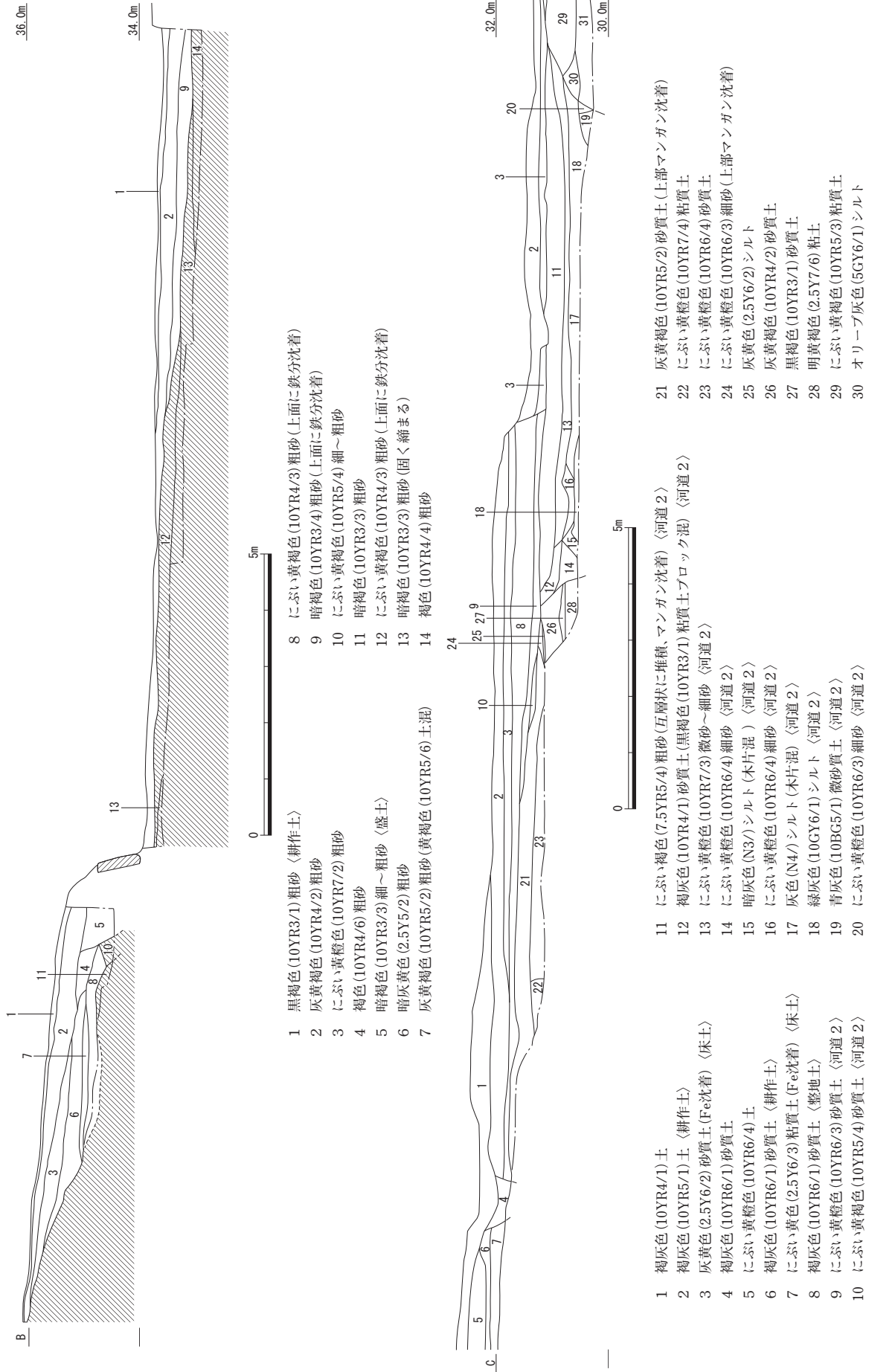
第207図 遺跡周辺地形図 (1/2,000)



第208図 マキサヤ遺跡全体図 (1/800)



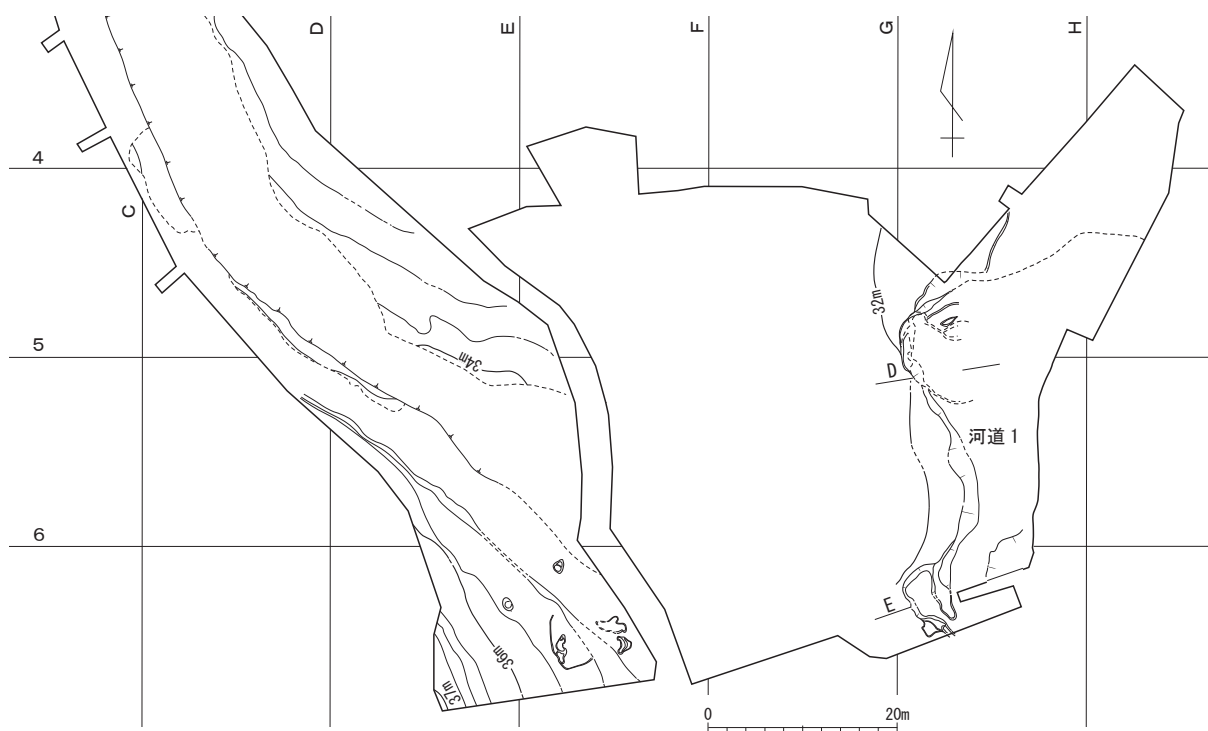
第209図 南壁断面模式図 (1/500)



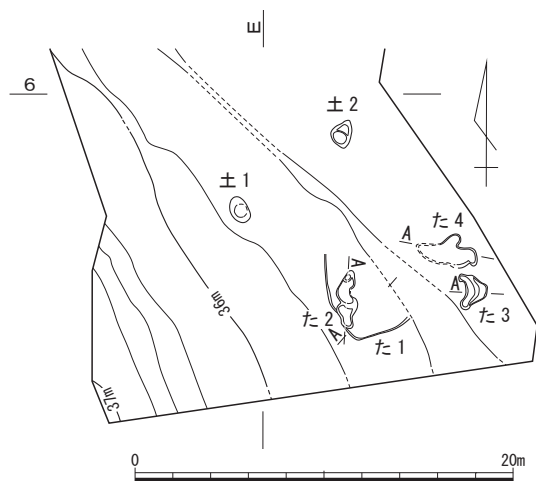
第2節 縄文時代の遺構・遺物

1 概要

縄文時代の遺構は、調査区南西にある毛野無羅山から延びる丘陵先端の斜面部と、その東側の谷部で確認した。斜面部では、調査区南西6 D・Eに集中しており、土坑2基、たわみ4か所を検出している。いずれも掘り方は明瞭ではなく、土器等を含む暗褐色土の範囲を精査し掘り下げた結果であるので、人為的な掘り込みとは言い難く、特にたわみについては包含層の範囲を示している可能性が高い



第211図 縄文時代の遺構全体図 (1/800)



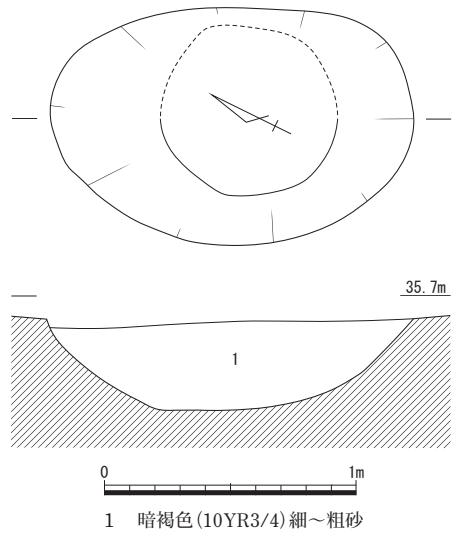
第212図 縄文時代の遺構全体部分図 (1/400)

い。谷部では河道1条を検出している。調査区東端4～6 G・Hで、西岸のみの確認ではあるが、東側には茶臼山から延びる丘陵が迫っていることから、丘陵端部をかすめるように、流れていたと推察される。現在でもほぼ同じ場所に小川が流れ、それは調査区北の干瓜川へと注ぐ。その後、干瓜川は北西方向へと流れ、JR里庄駅の西辺りで新庄川へと合流、河川名を今立川に変えて南流し、瀬戸内海へと繋がる。海へ出る間際の東岸には、津雲貝塚(笠岡市西大島)が位置する。(松尾)

2 土坑

土坑1 (第212・213図、図版31)

6 D北東の斜面地に位置する。平面形は長軸143cm×短軸94cmの楕円形を呈する。断面形は皿形で、検出面から底面までの深さは36cmを測る。詳細な時期は不明であるものの、周囲に分布する弥生時代の土坑8～10とは埋土の特徴が異なる点や、縄文土器片が埋土中に含まれることから、本節に含めて報告する。(松尾)

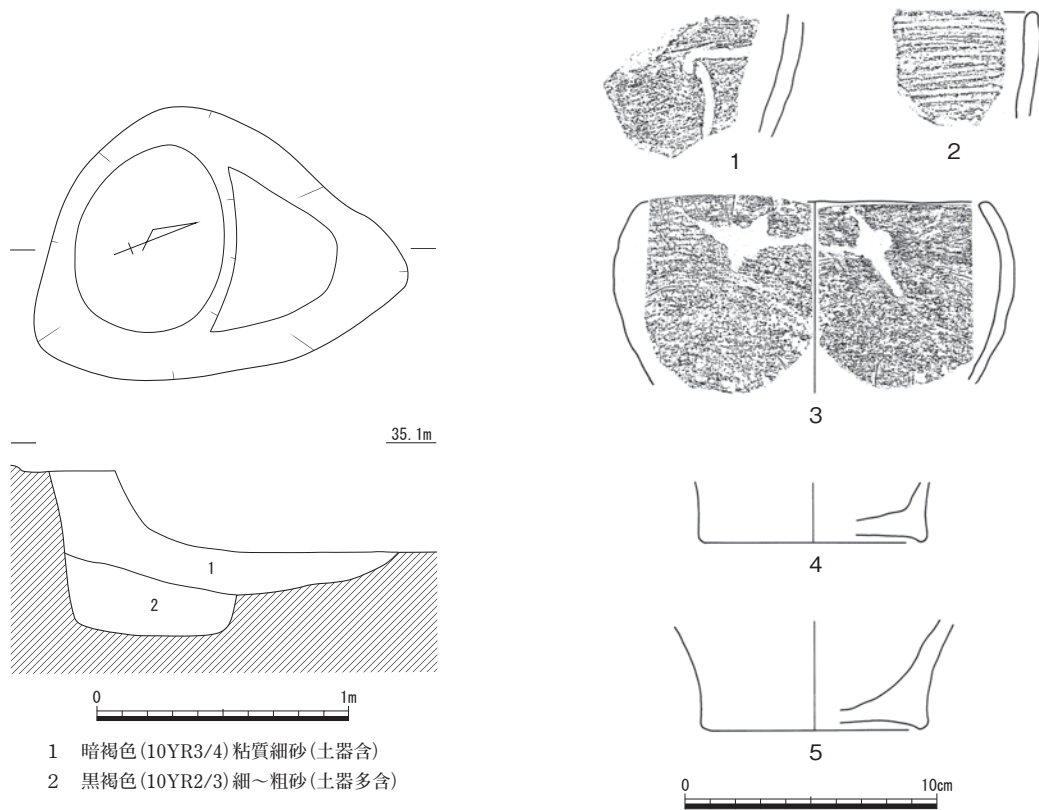


第213図 土坑1 (1/30)

土坑2 (第212・214図、図版31・41)

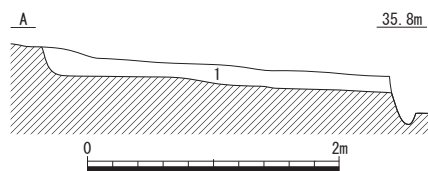
6 E北西で、土坑1の北東側、斜面がやや緩やかになり、河道1のある低位部との境に位置する。平面形は不整形で、長軸142cm×短軸108cmを測る。北東側の一部が弥生時代のたわみ6により削平を受けていた。断面は二段に掘り込みが認められ、南側の長軸112cm×短軸74cmの範囲では、暗褐色細～粗砂の埋土中から縄文土器が多く出土した。

1は有文の深鉢胴部片。沈線による入組文が認められ、縄文時代後期前葉・縁帯文成立期の様相を示す。2は粗製の深鉢口縁部片で、外面には巻貝条痕が認められる。3は口縁部が内湾する粗製の浅鉢。4・5は平底の底部。(松尾)



第214図 土坑2 (1/30)・出土遺物 (1/3)

3 たわみ



1 にぶい黄褐色(10YR5/4)細～粗砂

第215図 たわみ 1 (1/60)

たわみ 1 (第212・215図、図版32)

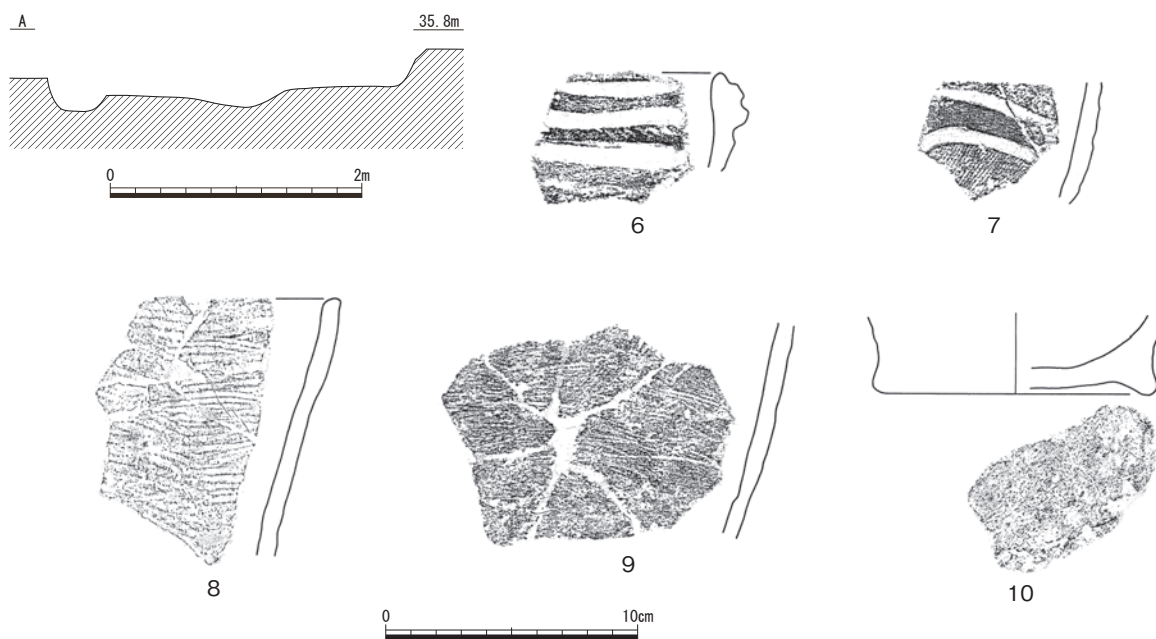
6 E 西端に位置する。東西2.7m・南北6.3mの範囲で、縄文土器細片を含む。後述する古墳時代の竪穴住居 2 により東側は削平を受けていることから、本来の規模は不明。周囲にたわみ 2～4 が位置し、竪穴住居 2 の埋土中からも比較的多くの縄文土器片が出土した。いずれの掘り方も不明瞭であり、人為的な遺構とは言い難い。したがって、たわみ 1～4 の範囲(東西8.5m×南北 6 m)に部分的に残る包含層の可能性が最も高いと思われる。(松尾)

たわみ 2 (第212・216図、図版32・41)

たわみ 1 の底面まで掘削を終了した後に、西端部分で縄文土器を含む黒褐色粗砂が認められたため、たわみ 2 として掘り下げを行った。規模は長軸307cm×短軸91cmを測り、平面形は不整形で底面は凹凸が激しい。埋土中から比較的大きな土器片が出土している。6・7は有文の深鉢。6は口唇部外面に3条の沈線をもつ。津雲 A 式か。7は胴部片で外面には沈線と磨消縄文が認められる。8・9は粗製の深鉢。10は深鉢底部。(松尾)

たわみ 3 (第212・217図、図版32・41)

たわみ 2 の東で、斜面の傾斜がやや緩くなる場所に位置する。たわみ 2 と同様に平面形は不整形で、長軸185cm×短軸113cmを測る。検出面から底面までの深さは10～26cmを測り、底面は凹凸が激しい。埋土中からは縄文時代中期から後期にかけての土器片が出土する。11は粗製の深鉢で、口縁部上端に刻みを外面に刺突文がある。船元式。12・13は有文の深鉢で、12は胴部外面に沈線文を有する。13は口縁部外面に沈線による区画文と磨消縄文が認められる。(松尾)

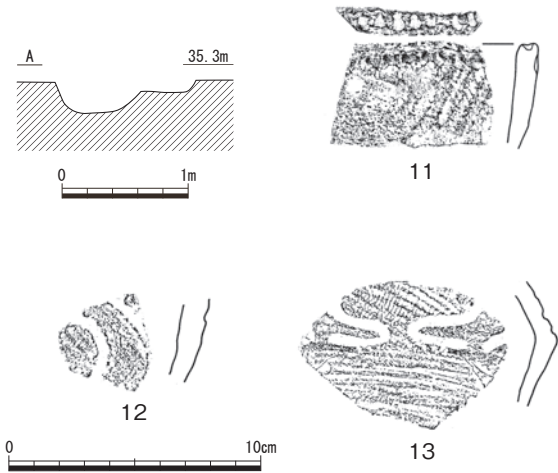


第216図 たわみ 2 (1/60)・出土遺物 (1/3)

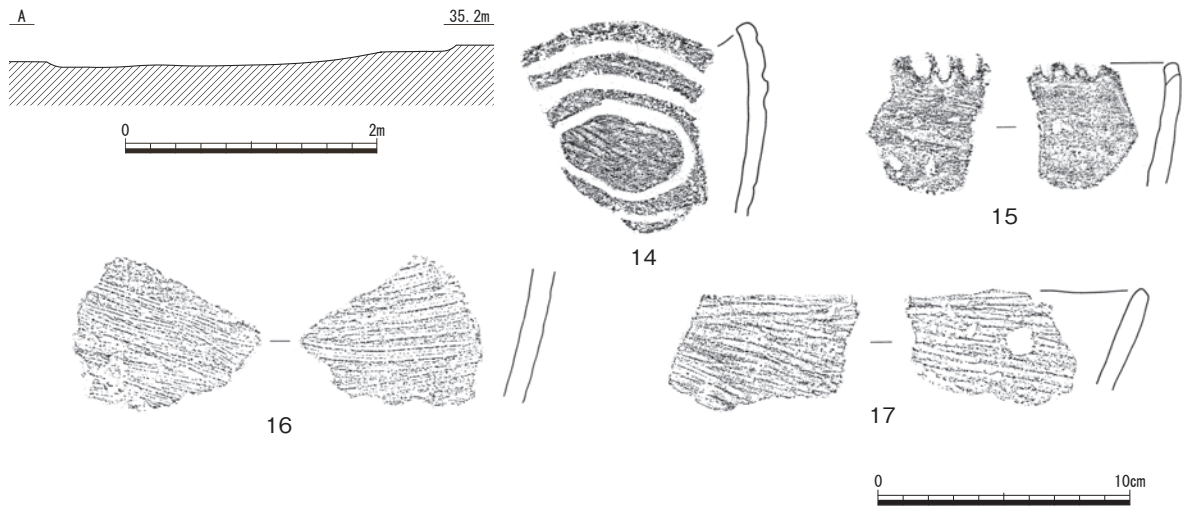
たわみ4 (第212・218図、図版32・41)

たわみ3の北に位置する。平面形は不整形で、長軸320cm×短軸160cmを測る。検出面から底面までの深さは18cm程度で、底面は比較的平坦であった。

比較的大きな土器片が出土している。14は有文の深鉢で、内湾する波状口縁の外面には沈線による同心円状の文様がみられる。中津式か。15～17は粗製の深鉢。15は口縁端部に刻目を有し、内外面は巻貝条痕が認められた。16は胴部片。17は口縁部片。土器の諸特徴から、縄文時代中期末～後期初頭までの幅が考えられる。(松尾)



第217図 たわみ3 (1/60)・出土遺物 (1/3)



第218図 たわみ4 (1/60)・出土遺物 (1/3)

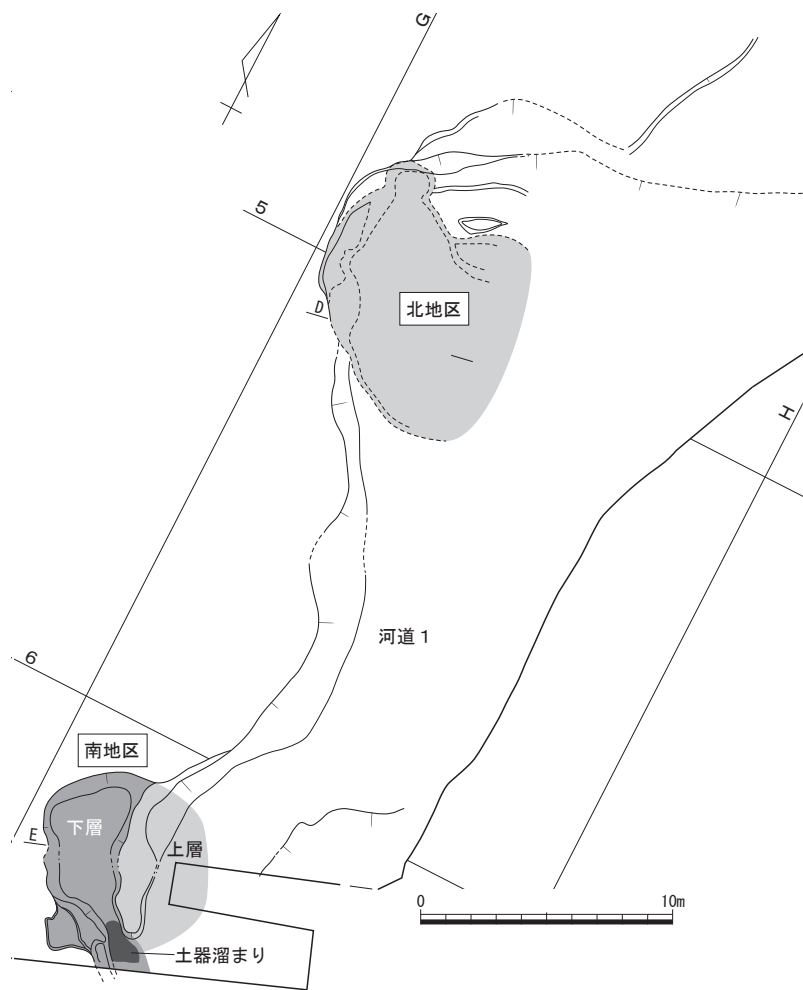
4 河道

河道1 (第211・219～235図、巻頭図版4、図版32～34・41～47・49・50)

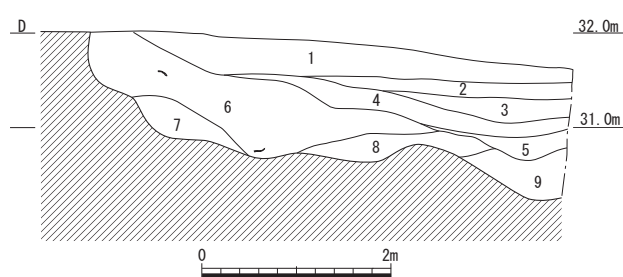
北東に延びる丘陵東側の谷部、4～6 G及び4 Hの範囲で検出した。南北方向に流走する旧河道で、南側にそびえる茶臼山の谷筋から北側の平地へ流れていたと考えられる。河道1の西岸を検出し、反対の東岸は調査区外である。検出幅は最大約17m、検出面は標高約32m前後である。深さは最深部で検出面から最大約1.8mである。

河道1の調査区外東側では幅約4mの小川が南から北へと流れている。この小川は、マキサヤ遺跡の北側で干瓜川へ合流する。干瓜川は県道六条院東里庄線に沿うように東西方向へ流れる河川である。河道1全体の規模は不明だが、時代が経つにつれて河道1は埋まり、調査区外東側に現存する小川へ変化していったものと想定される。

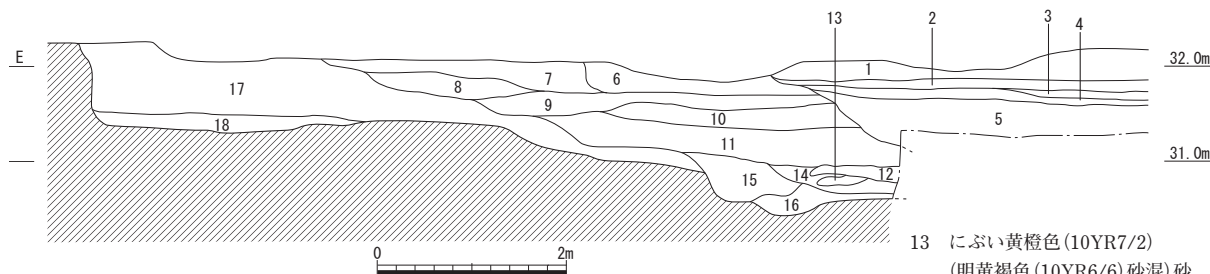
河道1では、縄文時代後期～古代の土器が出土し、特に縄文時代後期の土器が多量にみついている。調査にあたっては、まず一定の間隔でトレンチを設定し、調査区内における河道1の範囲を特定した。



トレンチ調査で護岸のような遺構は検出されなかったが、縄文土器が多く出土する4G南西端から6G北西端にかけては調査範囲を広げて、掘り下げを行った。4G南東から5G北東端にかけては、遺物の出土がごく僅かであったため、トレンチ調査で終了している。結果として、河道1の西岸は6G北半から4G南半まで南北に伸びた後、北東側へ湾曲することが判明した。また、河道の湾曲部もしくは洗掘を受けて抉れた箇所と想定される2か所で、縄文土器の集中地点(北地区・南地区)を検出している。河道1北地区(第219図)は、4G南西端から5G北西端にあたり、南から南北方向に延びてきた西



- 1 暗褐色(10YR3/3)細～粗砂(土器含)
- 2 灰黄褐色(10YR6/2)細～粗砂(土器含)
- 3 褐灰色(10YR5/1)細～粗砂(土器含)
- 4 黒褐色(10YR3/1)(明褐色(7.5YR5/6)斑状に混)細～粗砂
- 5 褐灰色(10YR4/1)(明褐色(7.5YR5/6)斑状に混)粘性細砂
- 6 褐灰色(10YR6/1)(明褐色(7.5YR5/6)斑状に混)粘性細砂(土器多含)
- 7 黄灰色(2.5Y6/1)(明褐色(7.5YR5/6)ブロック状に混)粘性細砂(土器少含)
- 8 灰色(N6/)粘質細砂(土器少含)
- 9 灰色(N5/)粘土(グライ層、土器少含)



- 1 にぶい黄橙色(10YR6/3)粗～シルト
- 2 灰黄褐色(10YR6/2)粗～シルト
- 3 灰黄褐色(10YR5/2)粗～シルト(鉄分沈着)
- 4 褐灰色(10YR6/1)粗～シルト
- 5 にぶい黄橙色(10YR7/4)砂(5～10cm大礫多含)
- 6 にぶい黄褐色(10YR5/4)細～粗砂
- 7 黒褐色(10YR2/2)粘質土(土器含)
- 8 褐灰色(10YR5/1)粘質土
- 9 青黒(5BG2/1)粘質土(グライ、5～10cm大礫含)
- 10 褐灰色(10YR4/1)細～シルト(5～10cm大礫含)
- 11 青黒(5BG1.7/1)粘質土(グライ、5～10cm大礫含)
- 12 褐灰色(10YR6/1)砂
- 13 にぶい黄橙色(10YR7/2)(明黄褐色(10YR6/6)砂混)砂
- 14 暗灰色(N3/)粘質土(土器含)
- 15 灰色(N5/)(黄褐色(10YR5/8)ブロック混)粘質土(土器含)
- 16 灰色(N4/)粗～シルト(土器含)
- 17 褐灰色(10YR6/1)粘質土(土器含)
- 18 灰色(N6/)粘質土(土器含)

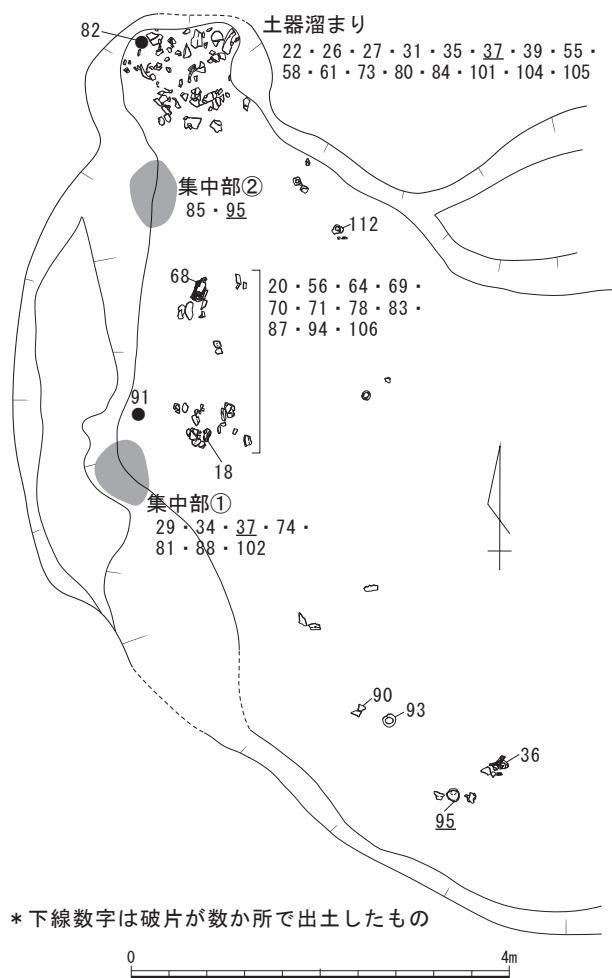
第219図 河道1 (1/300)・断面図 (1/80)

岸が東側へ湾曲する部分である。洗掘によって岸が段状になっており、一部袋状に陸地へ切り込んでいる。この地点の検出面は、標高約32mで、深さは最深部で検出面から約1.8mである。第219図断面Dラインで示すように、第1～3層にかけて細～粗砂が堆積し、弥生時代～古代の土器が出している。第4層（細～粗砂）・第5層（粘性細砂）は、遺物をほとんど含んでいなかった。第6～9層にかけては粘性土が堆積し、主に縄文時代後期前半（中津式～津雲A式）の土器が出土した。特に、岸側で厚く堆積していた第6層から多くみつがっている。平面的にみても岸側に縄文土器が集中しており、川の中央に向かうにつれて出土量は極端に少なくなる。土器が特に集中してみつがった箇所を、第220図に示したように土器溜まり・集中部①・集中部②と設定している。土器溜まりは西岸際で、洗掘によって袋状に陸地へ挟れている箇所である。集中部①・②は、洗掘によって段状になっている西岸の最下段で確認した。

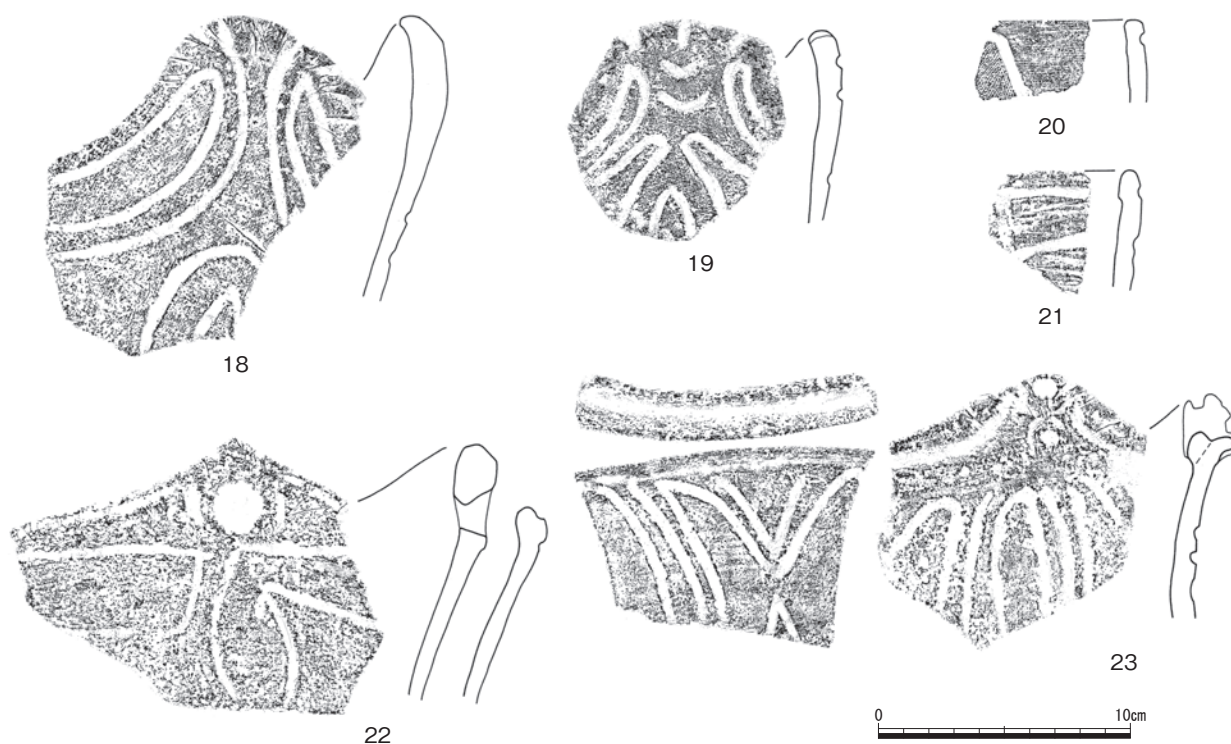
河道1南地区（第219図）は6G北西端にあたり、洗掘によって袋状に陸地へ挟れている箇所と想定される。この地点の検出面は、標高約32.2mで、深さは最深部で検出面から約1.7mである。第219図断面Eラインでも分かるように、幾度かの大きな流れがあったようで、第1～5層、第6～16層、第17層、第18層に大別できる。第1～5層中より出土した土器（第261図283・284）は、河道1の埋没時期を示すと思われる。第7層及び第14～16層中からは、弥生土器（第251図）や縄文時代晩期土器（第233図172～177）が出土した。なお、第8～11層は5～10cm大の礫を含む層で、その下に第12・13層の砂質土が部分的に入るものの、第8～13層は遺物をほとんど含んでいない。縄文時代後期を中心とした土器群は、第17層（褐灰色粘質土）及び第18層（灰色粘質土）中より出土している。第17層出土土器は南地区上層遺物、第18層出土土器は南地区下層遺物として掲載した。南地区下層では、洗掘によって袋状に陸地へ切り込んでいる入口あたりで、縄文土器の集中がみられた。約1.5m程度の範囲内に縄文土器が集積しており、この地点を土器溜まりとして設定し報告する。（森本）

縄文時代後期の時期を中心とする土器が多く出土したものの、河道出土という性格上、純粋な一括資料とは言い難い。しかし、摩滅が少なく比較的大きな土器片や、西岸から投棄されたと推定される出土状況からは大きく2地点に分けることが可能であることから、報告は北地区、南地区の2地点に大別して行い、南地区については更に上層と下層に分けた。ただし、各地区内でのまとまり（北地区土器溜まり・集中部①・集中部②、南地区下層土器溜まり）ごとに報告すると煩雑になるため、出土地点の詳細については土器観察表（表52）や出土状況図（第219・220・229図）で示すこととした。

河道1北地区出土土器については、第221～227図までが該当する。第221～223図は有文深鉢。第221図18は、口縁部が内湾する波頂部外面に沈線文がみられる。19も同じく波頂部で外面に沈線文がみられ、口縁端部には刻目が施される。20・21は口縁部で外面に沈線文。22・23は波状口縁を有し、口縁端部が肥厚する。外面には鉤状文などの沈線文が施される。第222図と第223図36～41はいわゆる縁帯文成立期にあたり、頸部の屈曲が強いもの（24～40）とバケツ形（41）が認められる。頸部の屈曲が強いものは、内面に肥厚する口縁部施文の様相から、沈線のみ（24～32）・沈線＋斜め刻目（33～37）の2つに大別することが可能。4方向に円形透かしをもつ橋状突起38・耳状突起39・40など様々な形状の突起が見られるのも特徴の一つ。頸部文様は1条沈線が残るか無文帯となる。胴部文様は縦位の沈線文（27）や蕨手文（37）、入組文（36）など多種多様な文様と共に、磨消縄文が施される。第223図42～47は津雲A式～彦崎K2式に相当する。42は外面施文で、沈線による区画文がみられる。44・45は口縁端部内面に1条沈線と縄文がある。46は内湾する口縁部外面に結節縄文が施される。



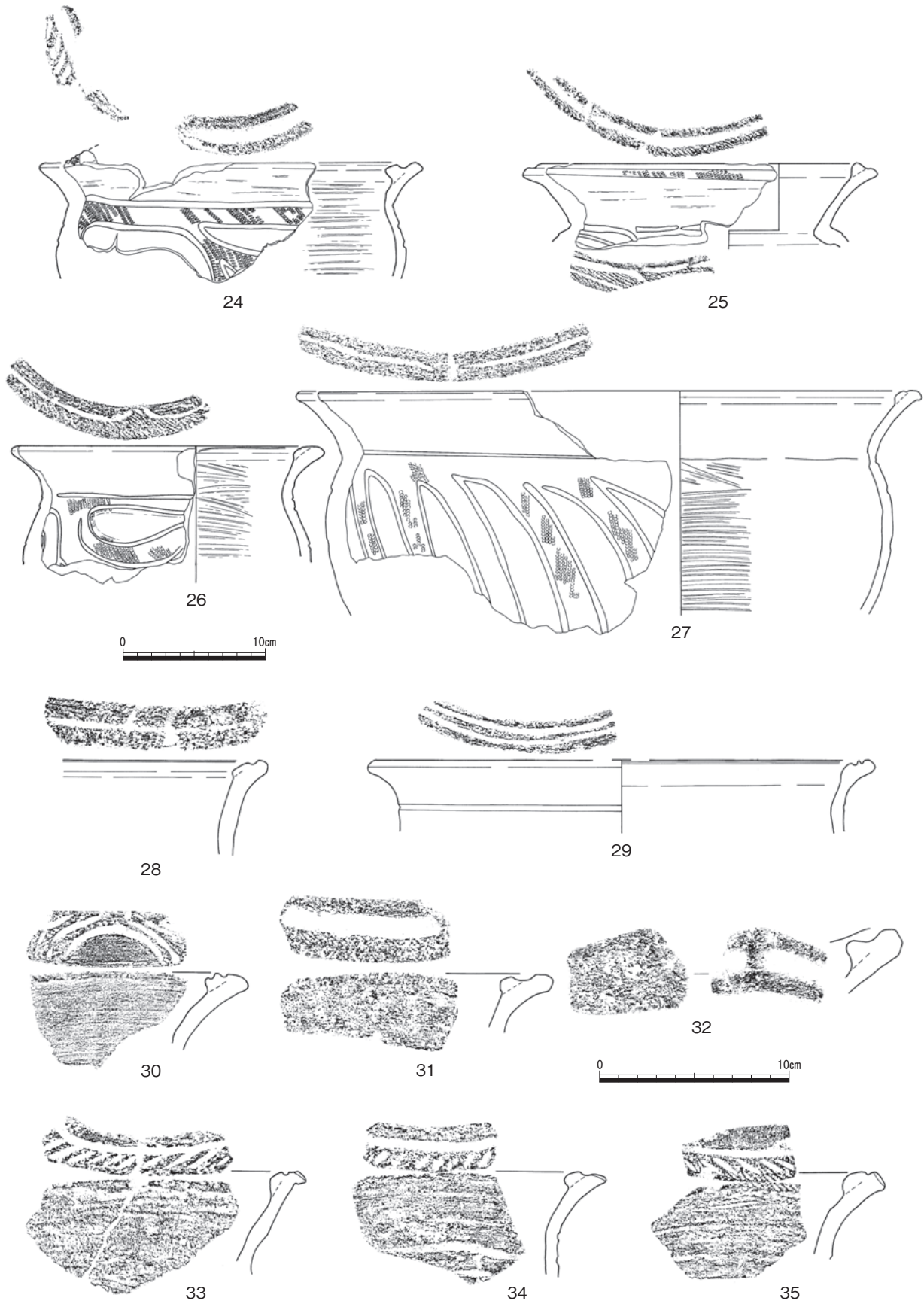
第220図 河道1北地区土器出土状況 (1/80)



第221図 河道1北地区出土遺物① (1/3)

第224図・第225図66~70は有文浅鉢。福田K2式(48~64)と縁帯文成立期(66~70)に大別できる。48~65は形状によって、口縁部が内湾するボウル形(48~58)、直線的に開くバケツ形(59~62)、浅く大きく開く皿状(63・64)、短く立ち上がる口縁部をもつもの(65)に分類できる。胴部の文様は2本沈線磨消縄文が主体で、55~57の扁平化した入組文は福田K2式でも新しい様相を示す。皿状の鉢は内面に稜がみられる。縁帯文成立期に属する66~70は、形状から口縁部が内湾するボウル形(66・67)、短く立ち上がる口縁部のもの(68)に分類できる。胴部外面の渦巻文や同心円文が特徴的で、その表現方法には二通りある。1つは66・67のような沈線文により表現され、さらに区画文と組み合わせる67は四国の松ノ木式に酷似する。68~70は粘土紐による浮文渦巻文が特異で、68・69は浮文の両端を沈線で縁取る。

第225図71~77は鉢あるいは壺。71~75は縁帯文成立期~縁帯文期に属する。74・75は胴部に縄文地を有する。76の壺は口縁端部に

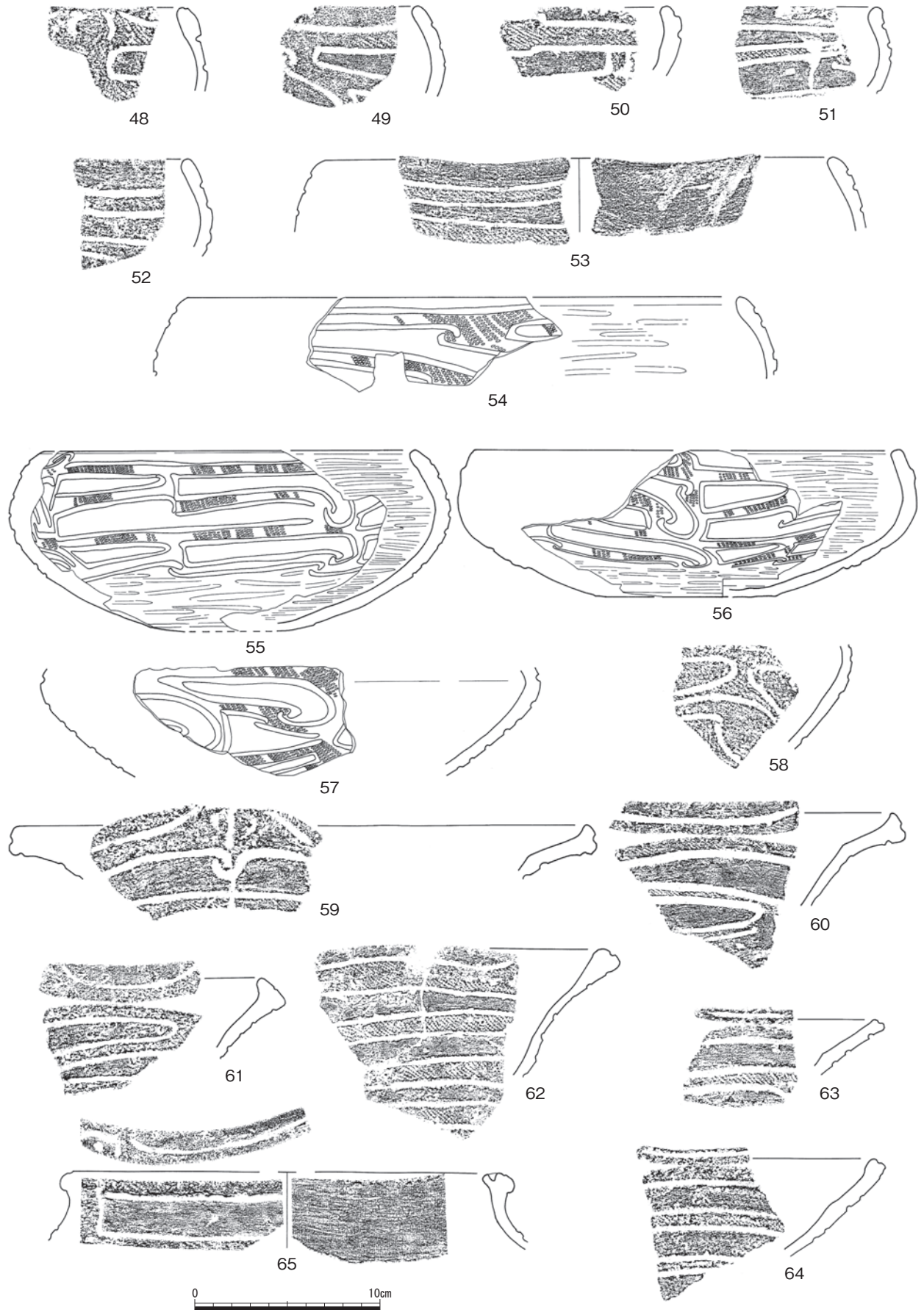


24~27 : 1/4、28~35 : 1/3

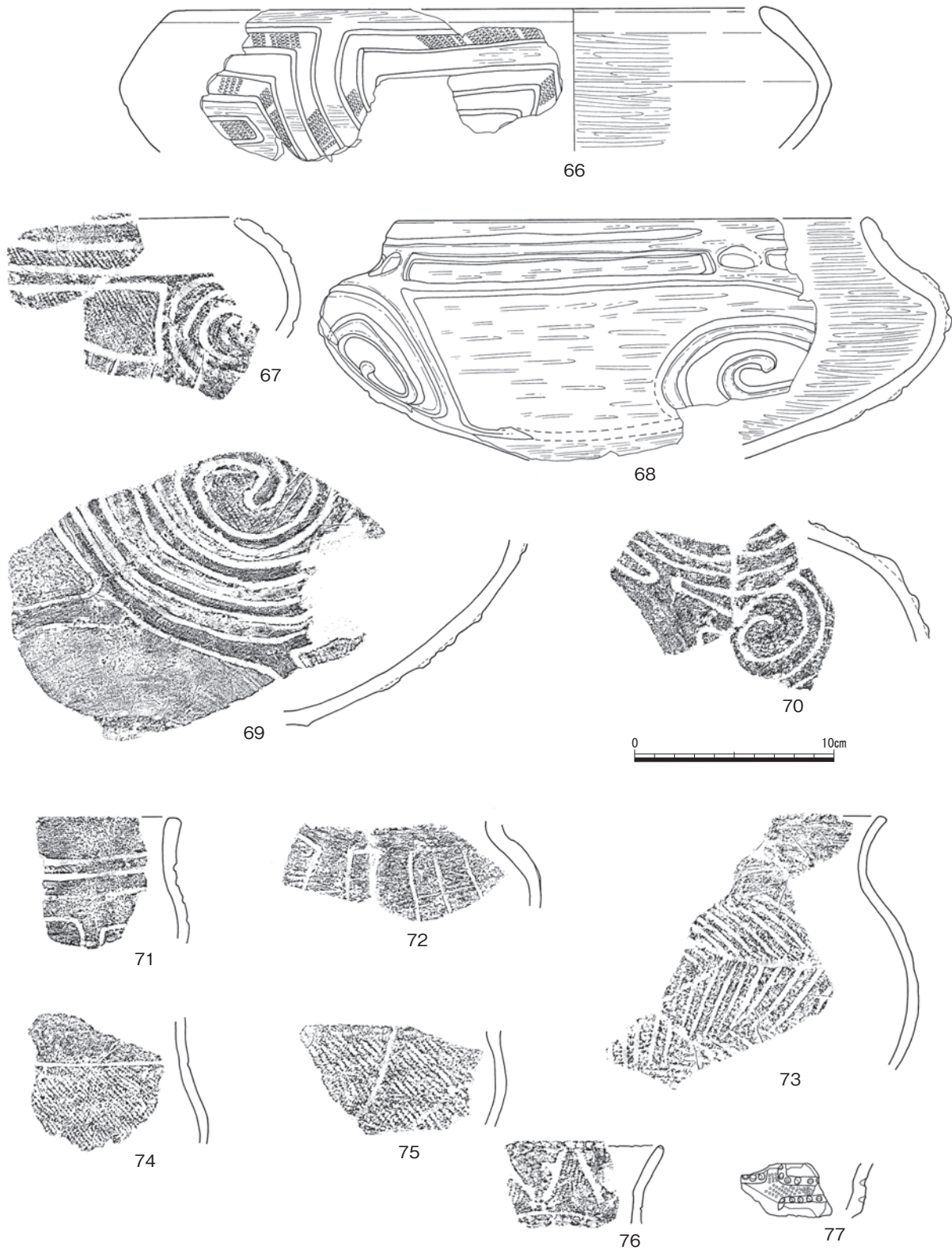
第222図 河道1北地区出土遺物② (1/4・1/3)



第223図 河道1北地区出土遺物③ (1/4・1/3)



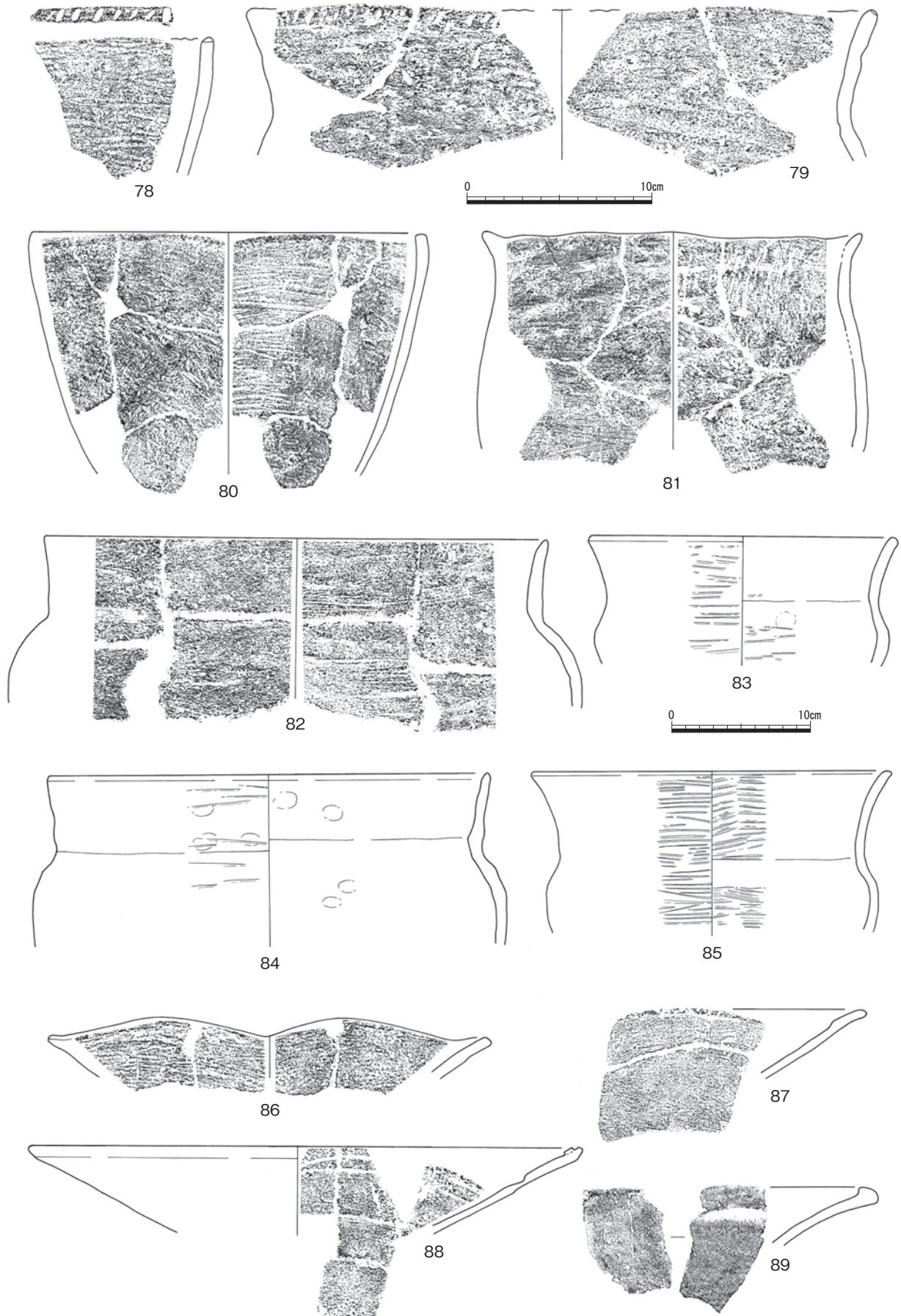
第224図 河道1北地区出土遺物④ (1/3)



第225図 河道1北地区出土遺物⑤ (1/3)

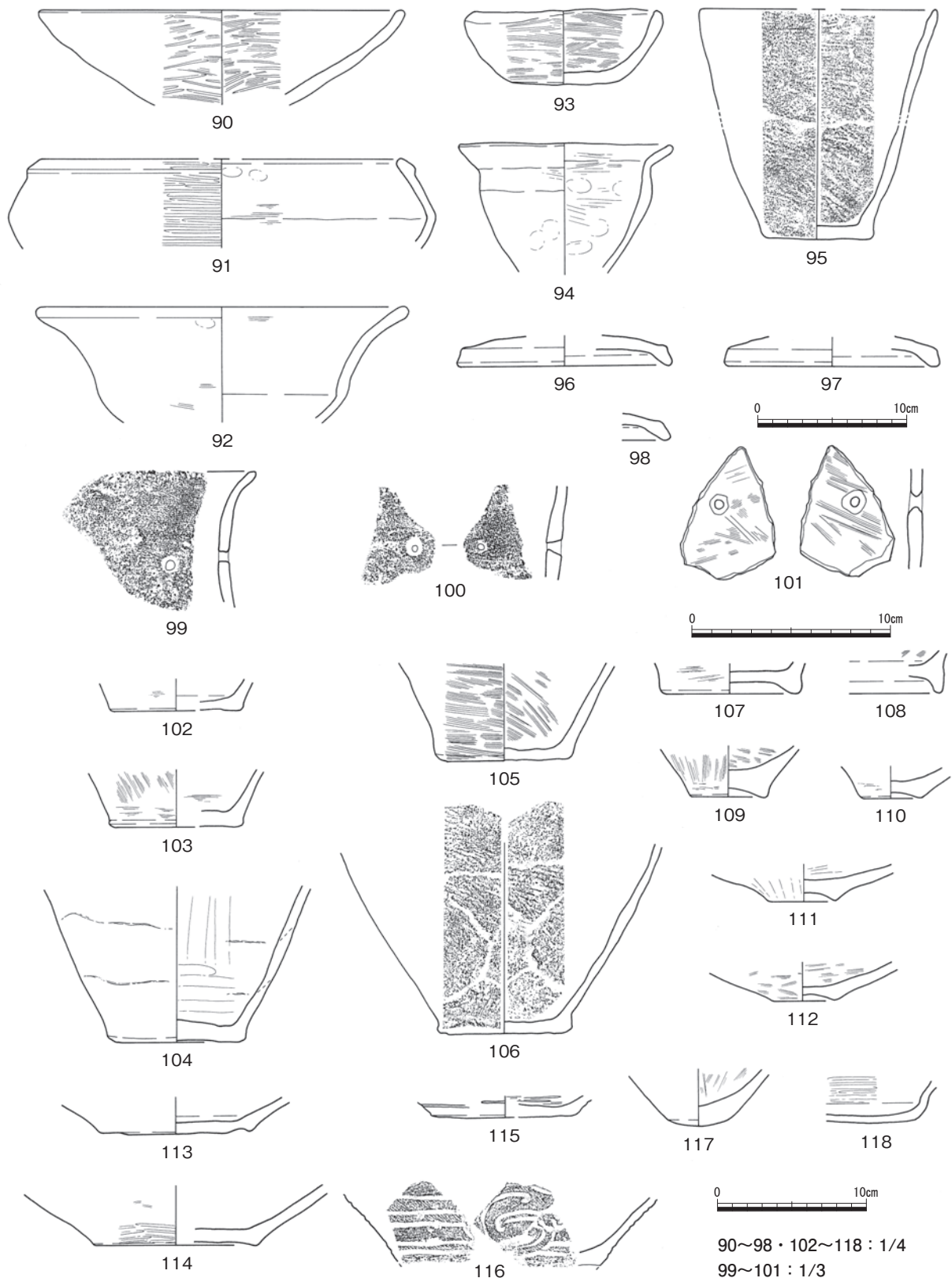
刻目、口縁部外面に沈線による山形文と磨消縄文をもつ。中津式段階まで遡る可能性がある。77鉢は外面に沈線内刺突文が施文される。福田K 2式段階。

第226図78～85は無文深鉢。口縁端部には刻目の有無がある。また、形状には頸部にくびれがあるもの(79・81～85)と、無いもの(78・80)があり、その屈曲にも強弱が認められる。第226図86～89、第227図90～93は無文浅鉢。94・95は鉢。96～98は器種不明であり、天地も不確定。内外面共に丁寧なナ



78・79 : 1/3、80~89 : 1/4

第226図 河道1北地区出土遺物⑥ (1/4・1/3)

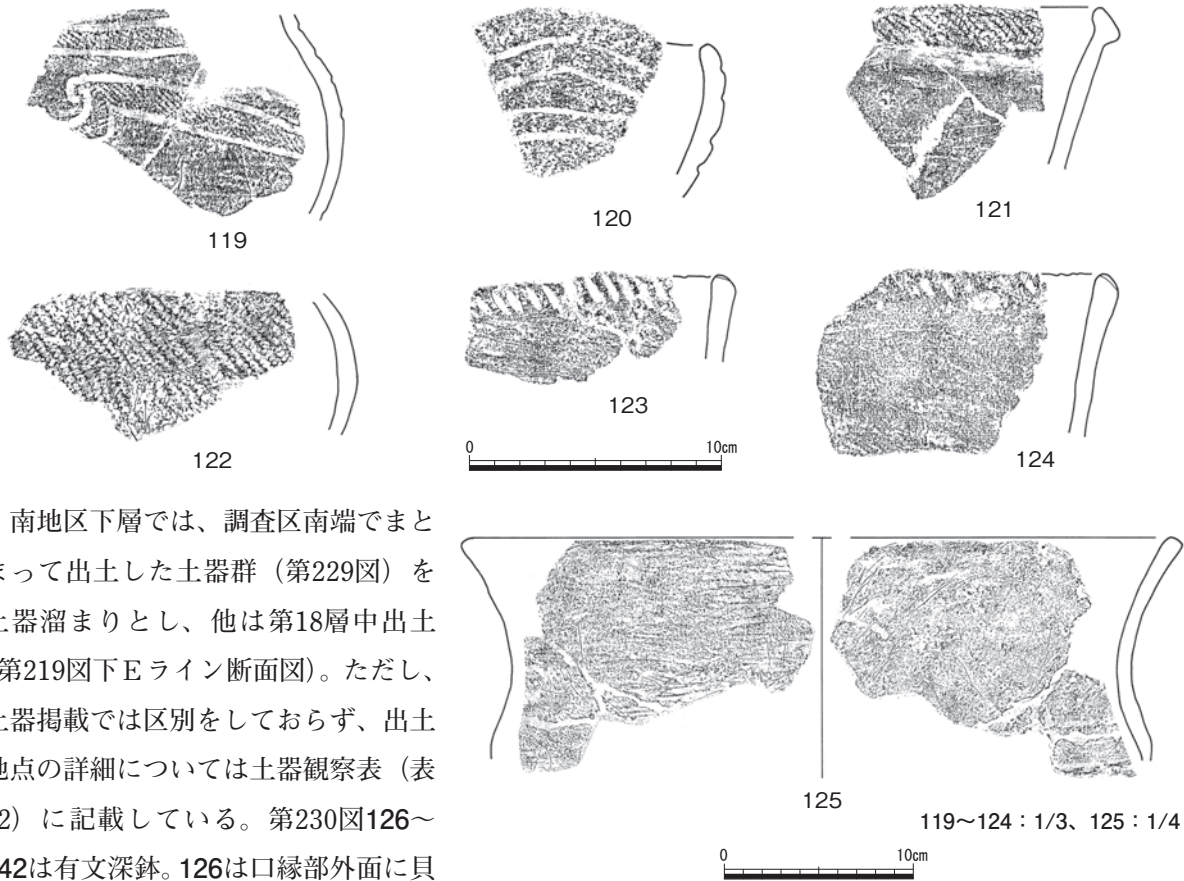


第227図 河道1北地区出土遺物⑦ (1/4・1/3)

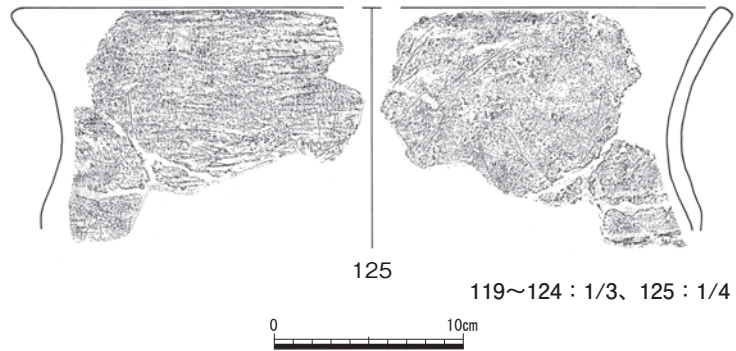
デ調整。99～101は補修痕を有する深鉢片。102～116は底部で、平底（102～106）・高台底（107・108）・凹底（109～112）に分類が可能。まれに丸底（117）や、底部まで施文を有するもの（116）がある。

第228図は南地区上層出土土器。第219図下Eライン断面図の第17層に相当し、下層（第18層）に比べると比較的広い範囲から土器の出土があるものの、その量は下層に比べると少ない。また、出土土

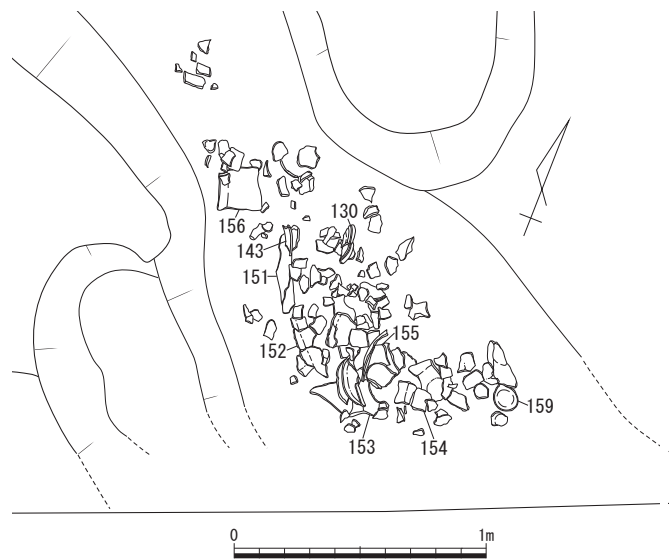
器中における無文土器の割合が高く、小破片資料が多い。119・120は有文深鉢。119胴部外面には沈線による入組文と磨消縄文。120は波状口縁部の破片で、外面に沈線文がみられる。121は頸部が無文で、肥厚した口縁部外面に縄文を施す深鉢。122は胴部が縄文地の鉢。123～125は無文の深鉢で、口縁端部に刻目を有する123・124と、刻目が無い125がある。



南地区下層では、調査区南端でまとまって出土した土器群（第229図）を土器溜まりとし、他は第18層中出土（第219図下Eライン断面図）。ただし、土器掲載では区別をしておらず、出土地点の詳細については土器観察表（表52）に記載している。第230図126～142は有文深鉢。126は口縁部外面に貝殻圧痕文を有す。船元式。127・128は福田K 2式。129～135は縁帯文成立期。129・130は頸部の屈曲が強く、内面に肥厚する口縁部の施文は沈線のみ。131～133はバケツ形。134は突起部。136～142は縁帯文期。口縁部外面に同心円文や区画文を有し、縄文を充填する136～140は津雲A式。肥厚した口縁部外面に縄文を施す141・142もこの時期に属する。143～145は有文浅鉢。浅く大きく開く皿状を呈し波状口縁をもつ143は、外面に入組文や磨消縄文を施し、内面には稜がみられる。福田K 2式。144胴部外面は北地区68・69と同様、沈線により縁取られた



第228図 河道1南地区上層出土遺物（1/4・1/3）



第229図 河道1南地区下層土器溜まり出土状況（1/30）

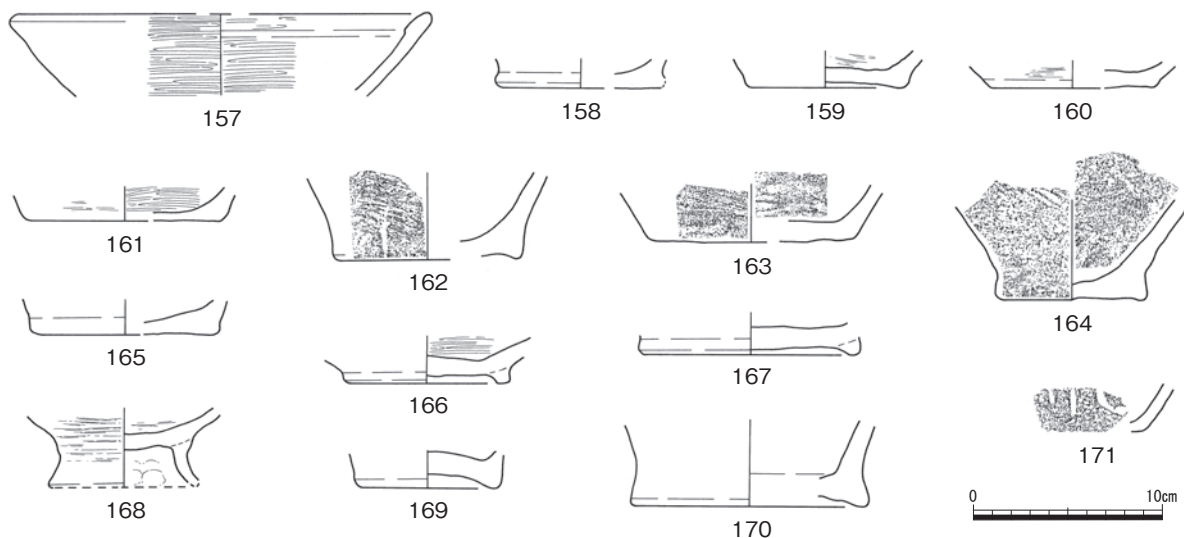


浮文渦卷文が施される。145は頸部が屈曲する鉢。第231図146～156は無文深鉢。刻目の有（146～150）無（151～156）や、頸部にくびれがあるものと、無いものに分類することが可能。157は無文浅鉢。158～171は底部。172～177は晩期の深鉢片で、第219図下Eライン断面図の第14～16層から出土している。（松尾）

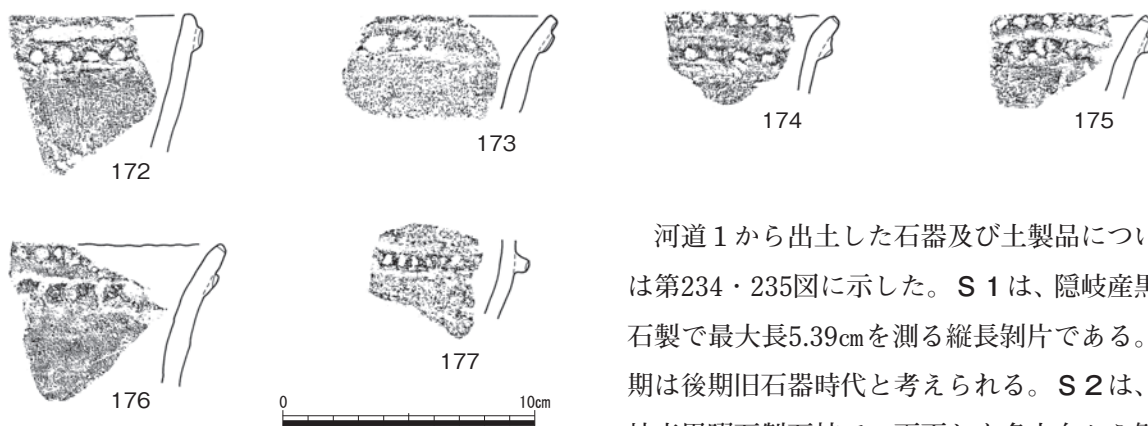
第230図 河道1南地区下層出土遺物① (1/3)



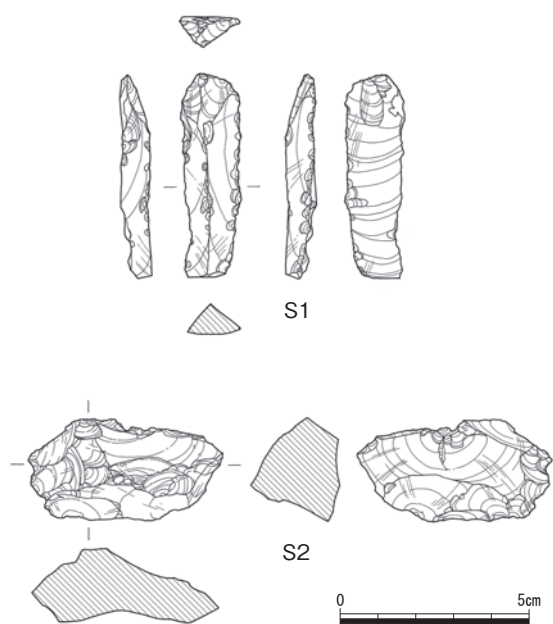
第231図 河道1南地区下層出土遺物② (1/4・1/3)



第232図 河道1南地区下層出土遺物③ (1/4)



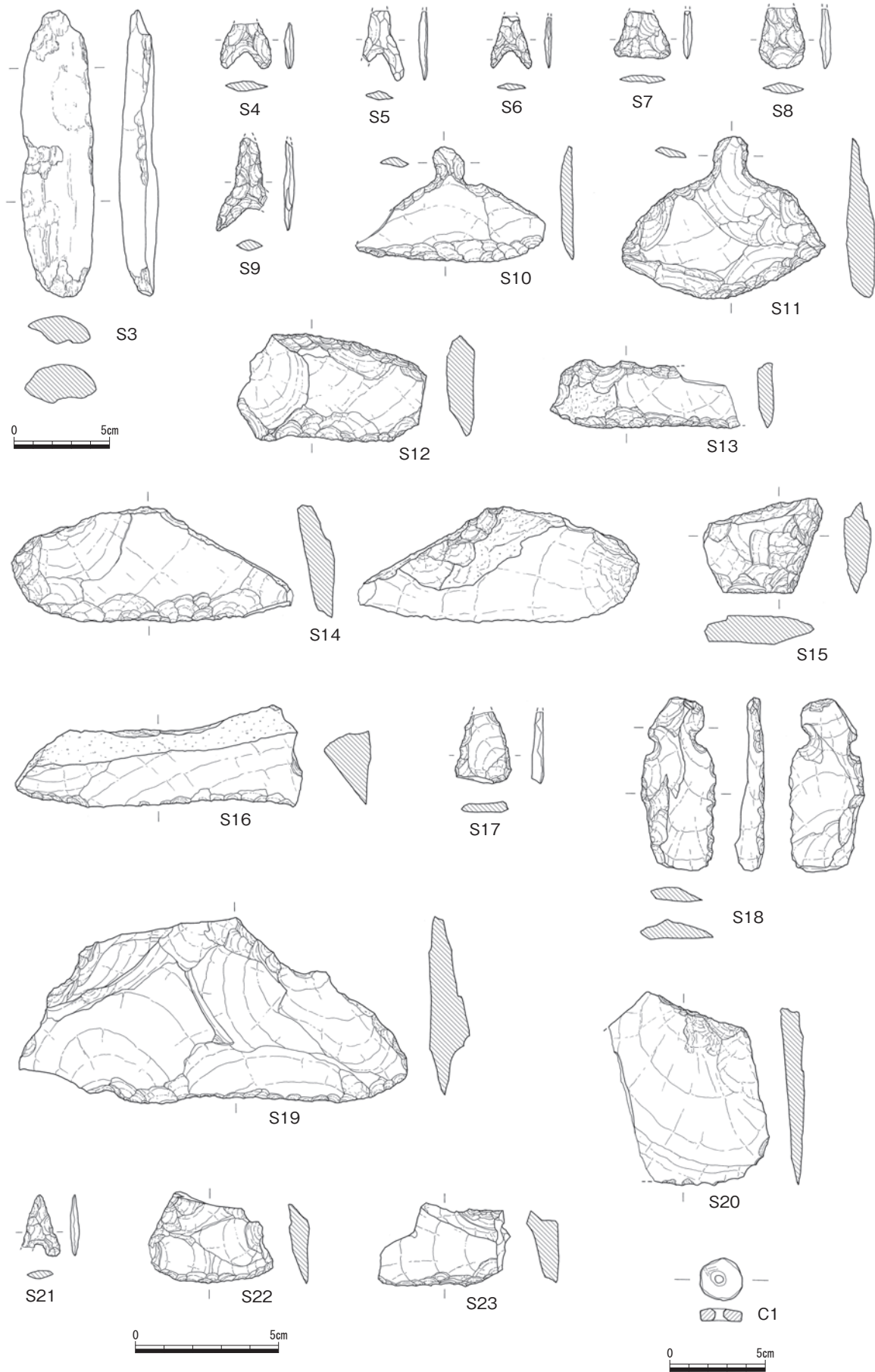
第233図 河道1出土遺物① (1/3)



第234図 河道1出土遺物② (1/2)

河道1から出土した石器及び土製品については第234・235図に示した。S1は、隠岐産黒曜石製で最大長5.39cmを測る縦長剥片である。時期は後期旧石器時代と考えられる。S2は、隠岐産黒曜石製石核で、両面とも多方向から剥片剥離作業が行われている。S3は結晶片岩製の石棒である。厚さ2.0cmと扁平で、表面を磨いているが、側面の一部に剥離痕が残る。S4～23はサヌカイト製石器である。S4～6・9・21は基部を挟む凹基式石鏃で、S7・8・17が平基式もしくは凸基式石鏃である。先端部は欠損しているものが多い。S10・11は、横型の石匙で、どちらも1.5cm程度の基部を作り出している。S18は縦型の石匙である。S15は両端から衝撃が加わったような剥離がみられるため、楔形石器とした。S12～14・16・19・20・22・23は片側もしくは両側に微細な剥離痕が認められるため、スクレイパーとしている。最大長4.3cmから13.6cmまで認められる。

土製品は、円板状土製品C1がある。径2.2cmで、中央に穿孔が認められる。(森本)



第235図 河道1出土遺物③ (1/3・1/2)

5 その他の遺物 (第236図、図版47・49)

縄文土器については、西側の斜面部6 D・Eから出土したものを時期幅が分かるように掲載した。189多孔底土器以外は全て有文深鉢片である。178は磯の森式で、唯一前期まで遡る資料。179～185は中期に該当し、179は船元Ⅰ式、180・181は船元Ⅱ式、182は里木Ⅲ式。183～185は矢部奥田式。186以降は後期で、186は中津Ⅰ式、187は中津式、188は福田K 2 (古)式、189は福田K 2式、190は福田K 2 (新)式、191・192は縁帯文成立期、193・194は縁帯文成立期～縁帯文期の可能性が高い。河道1の土器様相に比べると、時期幅があり、古い様相を示していると思われる。石器は斜面部、及び斜面部と河道1の間に位置する低位部から出土した資料を掲載した。(松尾)



第236図 遺構に伴わない遺物 (1/3・1/2)

第3節 弥生～古墳時代の遺構・遺物

1 概要

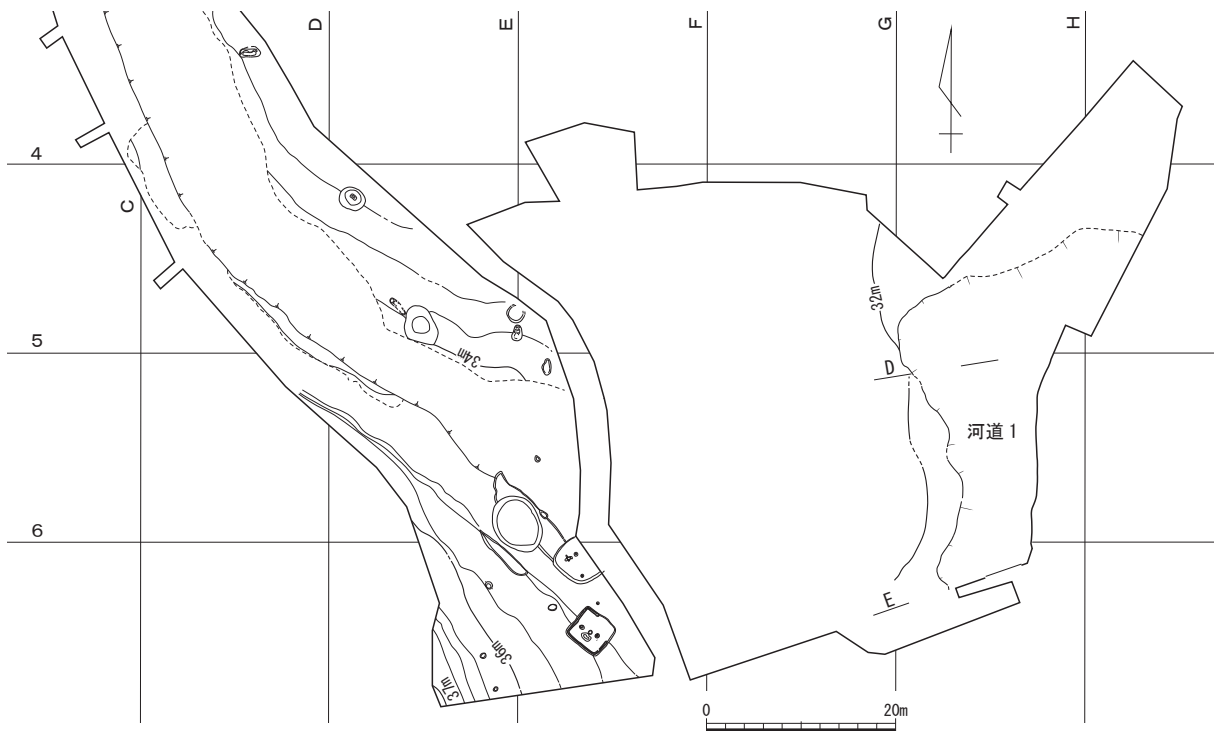
弥生時代から古墳時代にかけての遺構は、北東に延びる丘陵の東裾、3ラインより南、Fラインより西の北東向きの緩斜面を中心に分布している。

弥生時代の遺構は竪穴住居1軒、土坑8基、集石2基、たわみ3か所を確認している。時期は弥生時代中期中葉に限られている。標高34～36m付近、5ラインより北側は土坑や集石が点在し、6ラインとEラインの交点付近で竪穴住居、土坑、たわみを比較的まとまった状態で検出した。また、調査地東端部の谷部、Gラインより東で確認した河道1の埋土中には弥生時代前期後半から中期後半にかけての土器が含まれており、近辺には当該期の集落の存在も想定される。



写真10 竪穴住居2の調査状況（北西から）

古墳時代の遺構としては、調査地南西端で前期初頭の竪穴住居1軒を確認したのみである。古墳時代の遺物は包含層中からもほとんど出土しておらず、継続的に集落が営まれていたような状況は調査地内では認められなかった。（石田）



第237図 弥生～古墳時代の遺構全体図（1/800）

2 竪穴住居

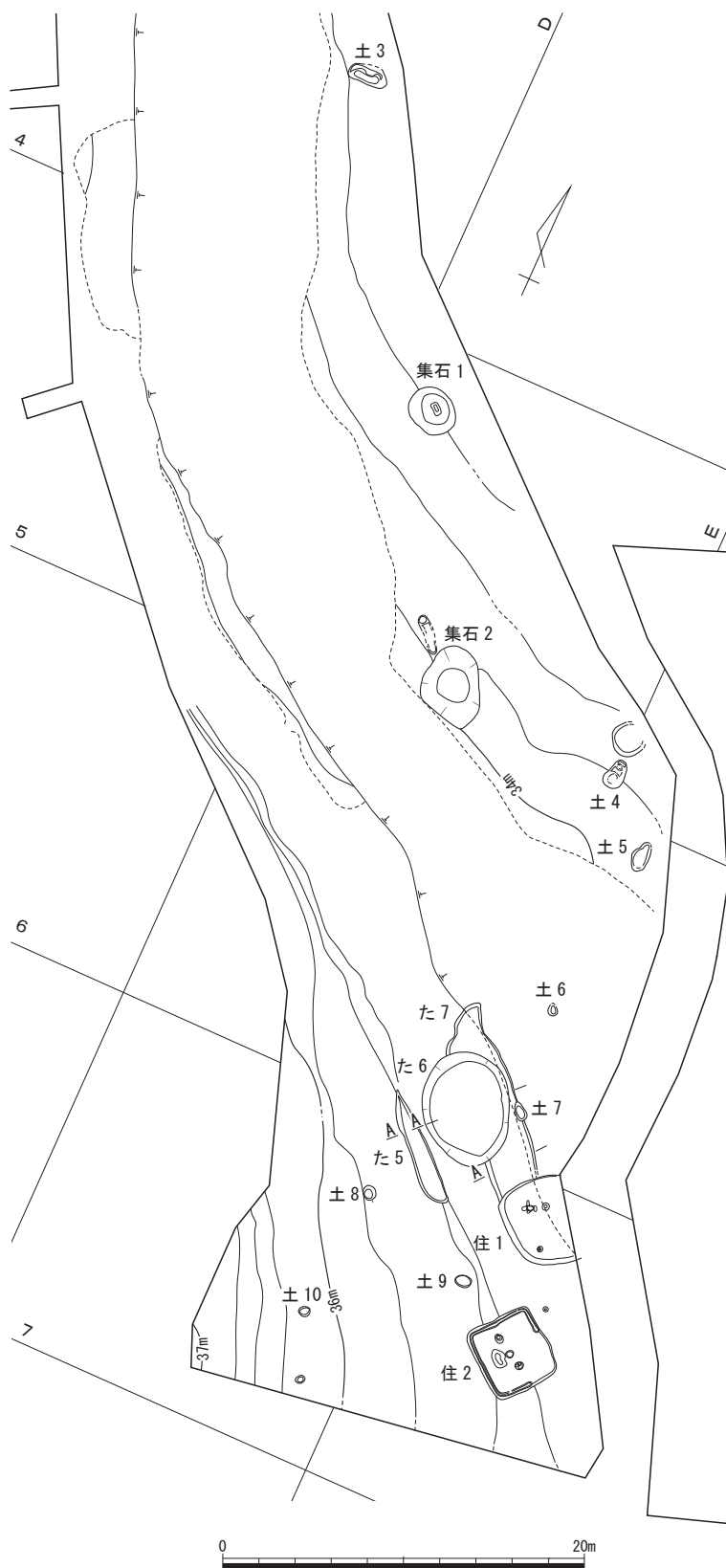
竪穴住居 1 (第238・239図、図版35・48)

6 Eの北端、北東に延びる丘陵東裾の緩斜面でも下方に位置する。東半部については大きく削平を受けており全容は不明である。

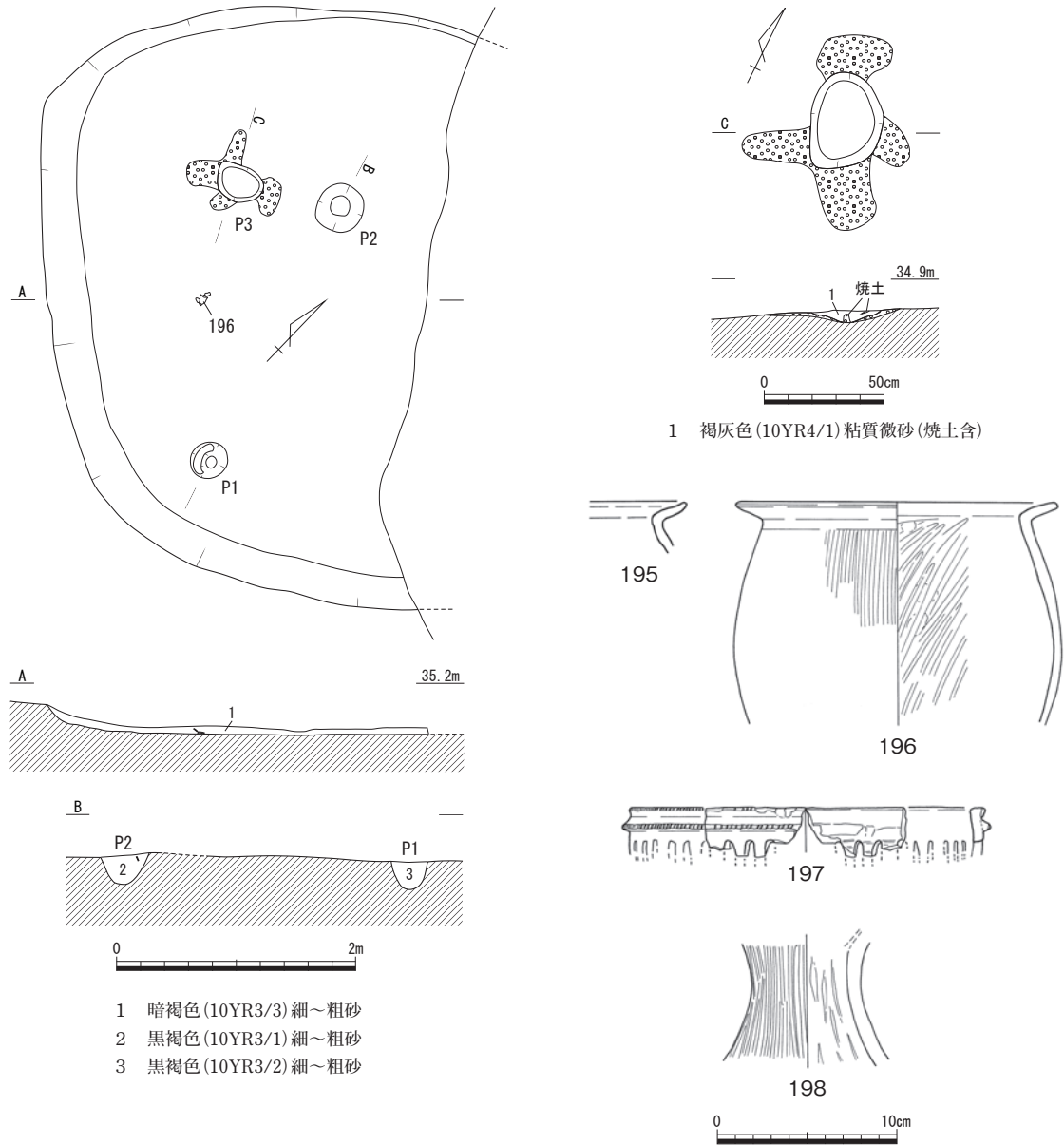
平面形は不整な方形を呈している。規模は長軸が487cm、短軸が残存長で317cmである。検出面から床面までの深さは6cmと浅く、上部についても大きく削平を受けていた。精査したが壁体溝は確認していない。支柱穴の可能性のあるものはP1とP2の2個が残存していた。また、P2の西側約50cmでP3を確認している。P3は不整な楕円形を呈し、長径40cm、深さは約5cmと浅い。P3の周辺は不規則に赤褐色に被熱しており、埋土中には焼土片が含まれていた。

出土した遺物は弥生土器195～198がある。195・196は甕で口縁端部は僅かにつまみ上げるか、肥厚している。196は床面付近から出土している。197は縦方向に格子状の透かしを密に施すなど精緻な作りの土器である。復元径は19cmで、器形としては鉢に近いが、類例がなく木器写しの可能性がある。198は高杯の脚部である。

出土した土器から、住居の時期は弥生時代中期中葉と考えられる。(石田)



第238図 弥生～古墳時代の遺構全体部分図 (1/400)



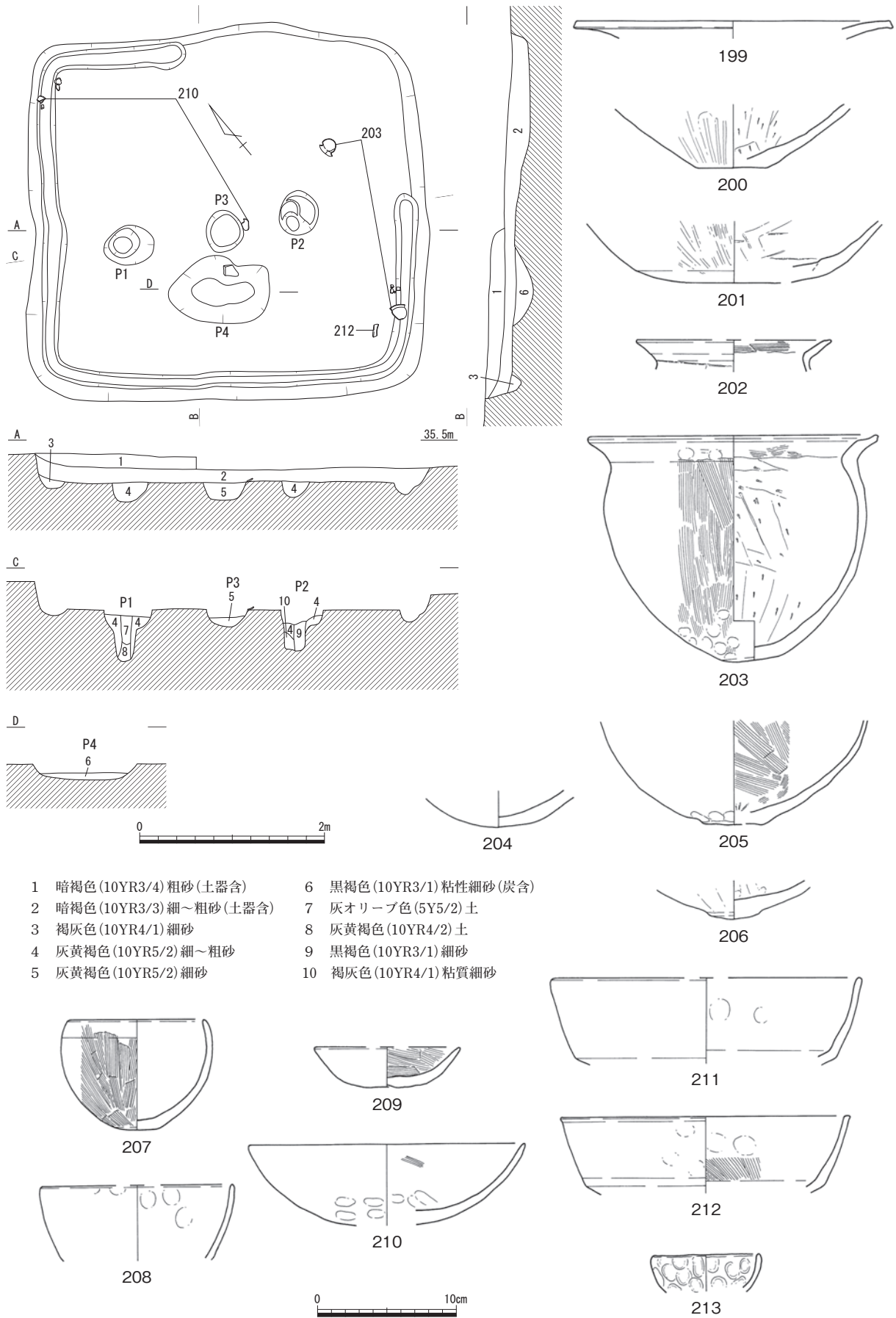
第239図 竪穴住居 1 (1/60・1/30)・出土遺物 (1/4)

竪穴住居 2 (第238・240図、図版35・48、写真10)

6 E、北東に延びる丘陵の東裾にあたる緩斜面、竪穴住居 1 の南約2.4mに位置する。平面形は隅丸方形を呈しており、規模は長軸426cm、短軸396cm、検出面から床面までの深さは25cmを測る。壁体溝は全周せずに東側の一部を欠く。支柱穴はP 1・2の2本で、P 1とP 2の間に中央穴のP 3を確認している。また、P 3のすぐ南西側に隣接して、P 4を検出した。P 4は不整な楕円形を呈し、規模は長軸110cm、短軸72cm、深さ16cmを測る。埋土中には炭を多く含んでいた。

出土遺物は土師器のみであるが、住居の床面付近を中心に比較的多く出土している。壺199～201、甕202～206、鉢207～210・213、高杯211・212がある。199はラッパ状に大きく開く壺の口縁部で、200・201は壺の底部と考えられるが平底が残る。203～205の甕底部についても痕跡的な平底を呈しており、206の底部は突出する。211・212は高杯の杯部片と考えられ赤色顔料の塗布が認められる。

出土した土器の特徴からみて、住居の時期は古墳時代前期初頭であろう。 (石田)



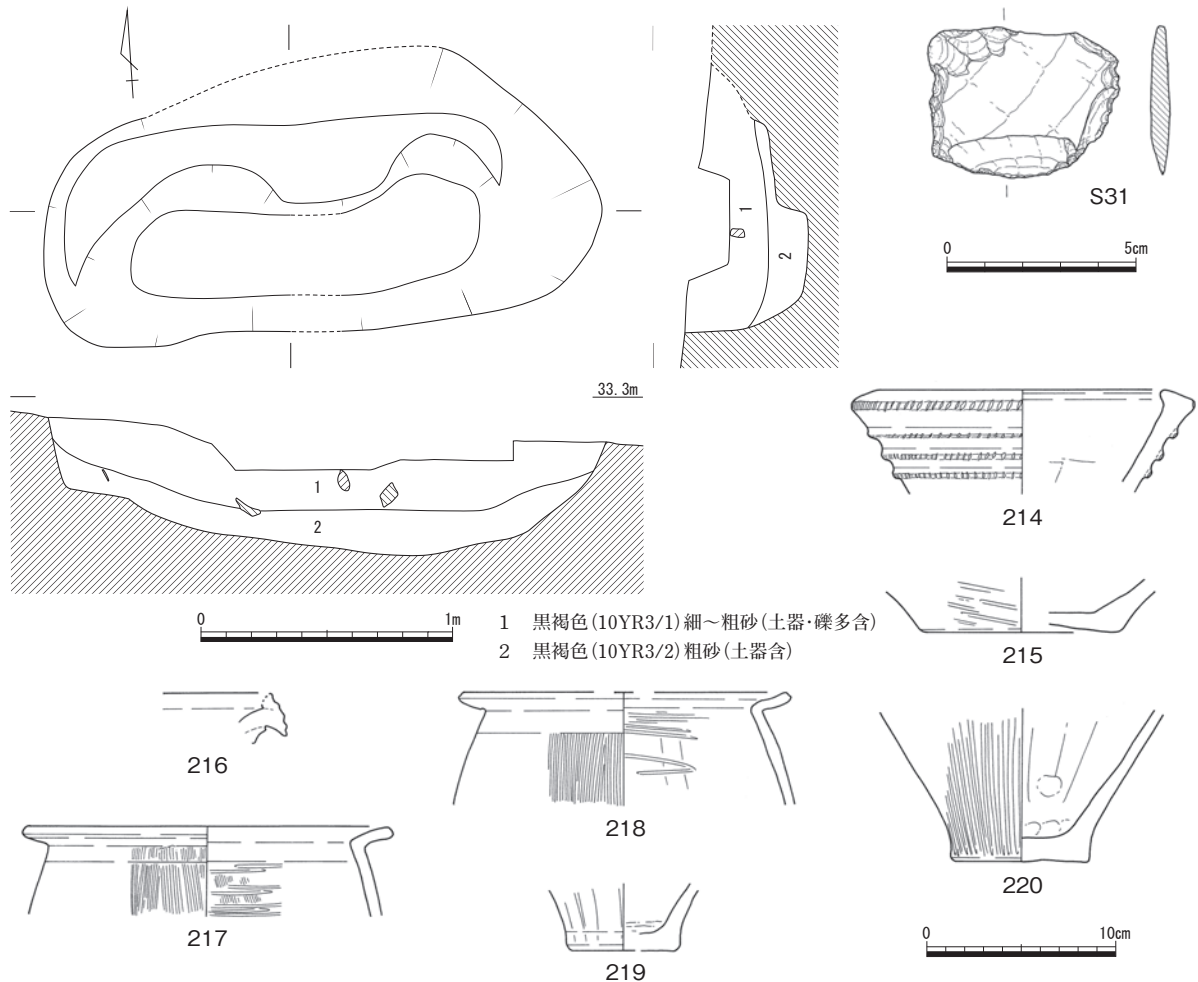
- | | |
|-------------------------|------------------------|
| 1 暗褐色(10YR3/4)粗砂(土器含) | 6 黒褐色(10YR3/1)粘性細砂(炭含) |
| 2 暗褐色(10YR3/3)細~粗砂(土器含) | 7 灰オリーブ色(5Y5/2)土 |
| 3 褐灰色(10YR4/1)細砂 | 8 灰黄褐色(10YR4/2)土 |
| 4 灰黄褐色(10YR5/2)細~粗砂 | 9 黒褐色(10YR3/1)細砂 |
| 5 灰黄褐色(10YR5/2)細砂 | 10 褐灰色(10YR4/1)粘質細砂 |

第240図 竪穴住居2 (1/60)・出土遺物 (1/4)

3 土坑

土坑3 (第238・241図、図版36・48)

3 Cの東寄り、丘陵斜面地の最下端に位置する。平面形は楕円形で、長軸222cm×短軸107cm、検出面から底面までの深さは46cmを測る。底面北側にテラス状の平坦面をもち、南側が一段低くなる。埋土は上下2層に分けることができ、第1層は黒褐色細～粗砂で、土器の小破片や多くの礫を含んでいた。第2層は黒褐色粗砂で、比較的多くの土器等が認められる。第1層中から甕底部220、第2層中から214～219・S31が出土した。214は広口壺、215は壺底部、216は大形の甕、217・218は甕、219・220は甕底部。S31はスクレイパー。時期は弥生時代中期中葉である。(松尾)

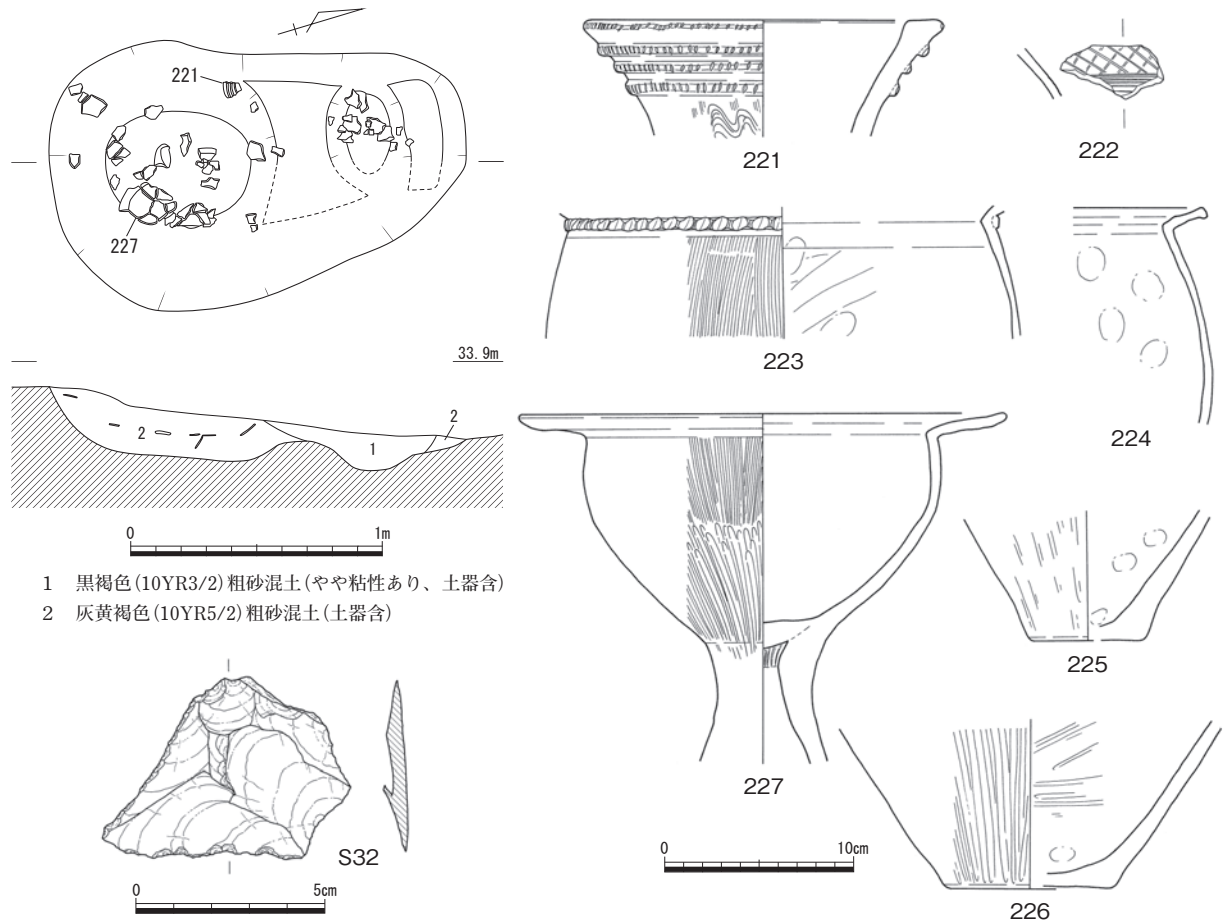


第241図 土坑3 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/2)

土坑4 (第238・242図、図版36・48)

北東に延びる丘陵の東裾、4 Dの南東隅に位置する土坑である。土坑3の約40m南東の斜面上方にあり、検出面での比高は60cmを測る。等高線に直交して掘り込まれ、平面形は南北方向に長い楕円形を呈する。長さは165cm、幅98cm、深さ33cmを測る。底面には凹凸があり、北側は異なる遺構が重複している可能性も考えられる。

遺構の流入土からの出土遺物として弥生土器の壺221・222・226、甕223～225、高杯227とスクレ



- 1 黒褐色 (10YR3/2) 粗砂混土 (やや粘性あり、土器含)
- 2 灰黄褐色 (10YR5/2) 粗砂混土 (土器含)

第242図 土坑4 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/2)

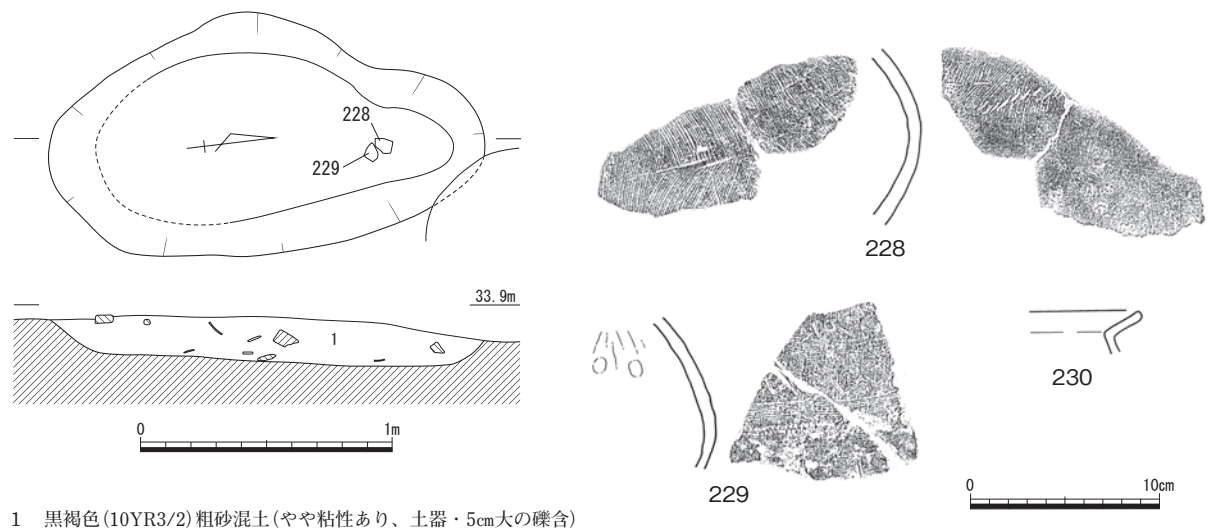
イパー S32を图示した。

遺構の出土遺物から、遺構の時期は弥生時代中期中葉と考えられる。

(柴田)

土坑5 (第238・243図、図版36・48)

北東に延びる丘陵の東裾、5Eの北西隅に位置する土坑である。土坑4の約4m南東の斜面上方にある。等高線に直交して掘り込まれ、平面形は南北方向に長い楕円形を呈する。長さは173cm、幅96



- 1 黒褐色 (10YR3/2) 粗砂混土 (やや粘性あり、土器・5cm大の礫含)

第243図 土坑5 (1/30)・出土遺物 (1/4)

cm、深さ20cmを測る。底面は平坦であるが、北側が低くなっており、底面で壺228・229が出土した。遺構の流入土からの出土遺物として弥生土器の壺228・229、甕230を図示した。

遺構の出土遺物から、遺構の時期は弥生時代中期中葉と考えられる。(柴田)

土坑6 (第238・244図、図版48・49)

北東に延びる丘陵の東裾、5 Eの西端に位置する土坑である。土坑5の約10m南の斜面上方にある。等高線に平行して掘り込まれ、平面形は南北方向に長い楕円形を呈する。

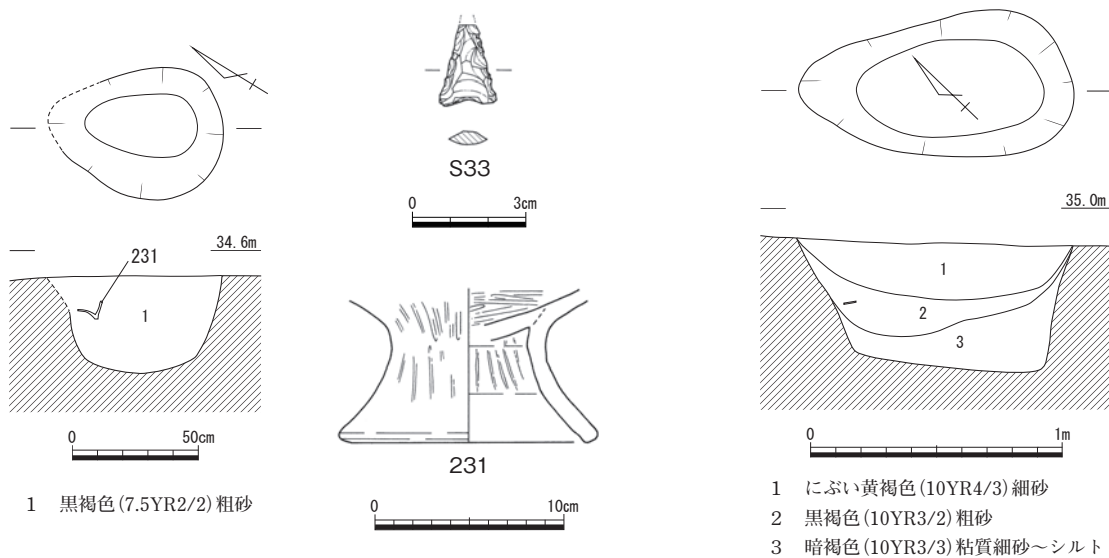
遺構の流入土からの出土遺物として弥生土器231と石鏃S33を図示した。

遺構の出土遺物から、遺構の時期は弥生時代中期中葉と考えられる。(柴田)

土坑7 (第238・245図)

北東に延びる丘陵の東裾、5 Eの南西隅に位置する土坑である。土坑6の約6m南東の斜面上方にあり、平面形は東西方向に長い楕円形を呈する。底面は平坦であるが南東方向が低い。

良好な出土遺物はないが、遺構の時期は弥生時代中期の可能性はある。(柴田)



第244図 土坑6 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/2)

第245図 土坑7 (1/30)

土坑8 (第238・246図)

北東に延びる丘陵の東裾、6 Dの北東隅に位置する土坑である。土坑7の約9m南西の斜面上方にあり、平面形は円形を呈する。底面は平坦であるが南東方向が低い。

良好な出土遺物はないが、遺構の時期は弥生時代中期の可能性はある。(柴田)

土坑9 (第238・246図)

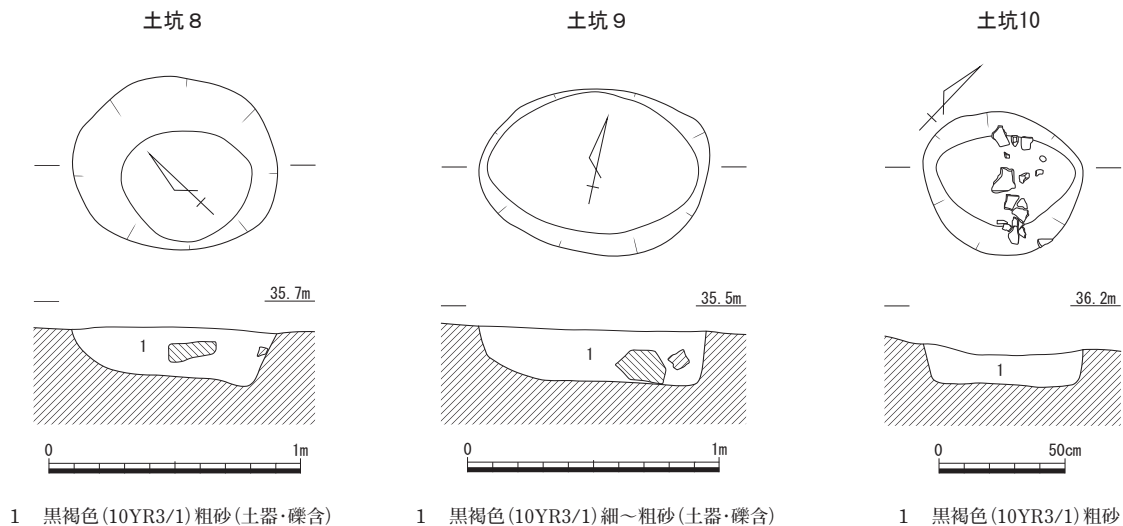
北東に延びる丘陵の東裾、6 Eの北西隅に位置する土坑である。土坑8の約7m東の斜面下方にあり、平面形は東西方向に長い楕円形を呈する。底面は平坦でほぼ水平である。

良好な出土遺物はないが、遺構の時期は弥生時代中期の可能性はある。(柴田)

土坑10 (第238・246図)

北東に延びる丘陵の東裾、6 Dの東側に位置する土坑である。土坑9の約9m南西の斜面上方にあり、平面形は円形を呈する。底面はほぼ平坦で水平である。

良好な出土遺物はないが、遺構の時期は弥生時代中期の可能性はある。(柴田)

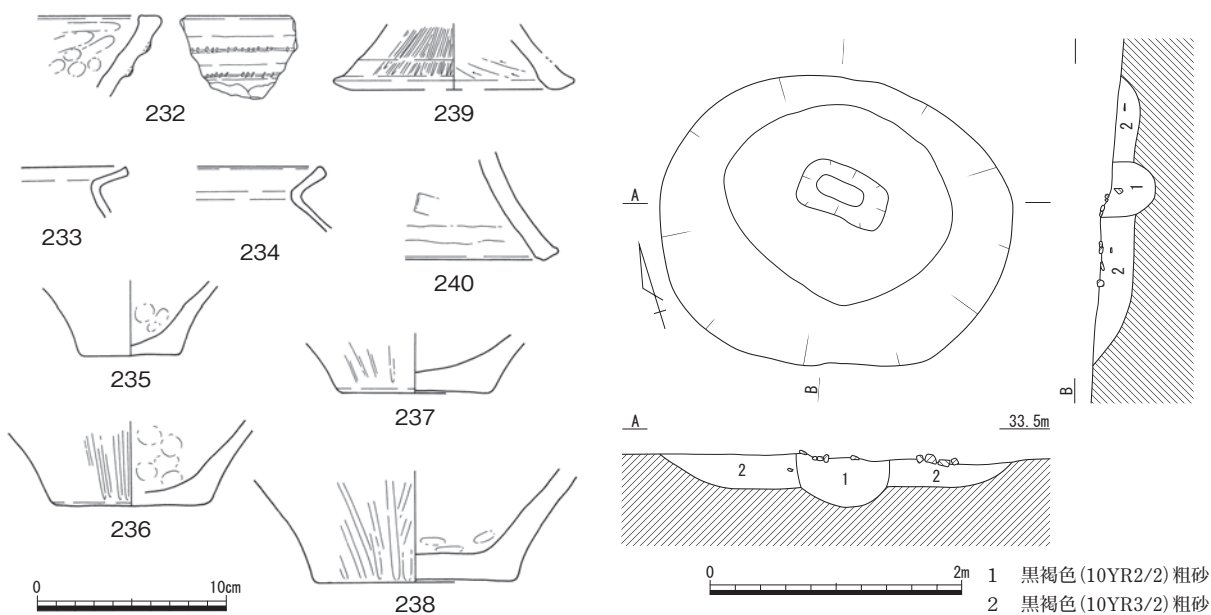


第246図 土坑8~10 (1/30)

4 集石

集石1 (第238・247図、図版37)

北東に延びる丘陵の東裾、4Dの北西隅に位置する集石である。石は角礫で5~10cm程度のものが多い。下に楕円形の土坑があるので集石はその流入土の状態と考えられる。土坑の規模は長軸で279cm、短軸227cm、深さ49cmを測り、底面は平坦である。中央の長方形の小穴が何かの抜き取り痕跡か別の遺構かは判断できなかった。



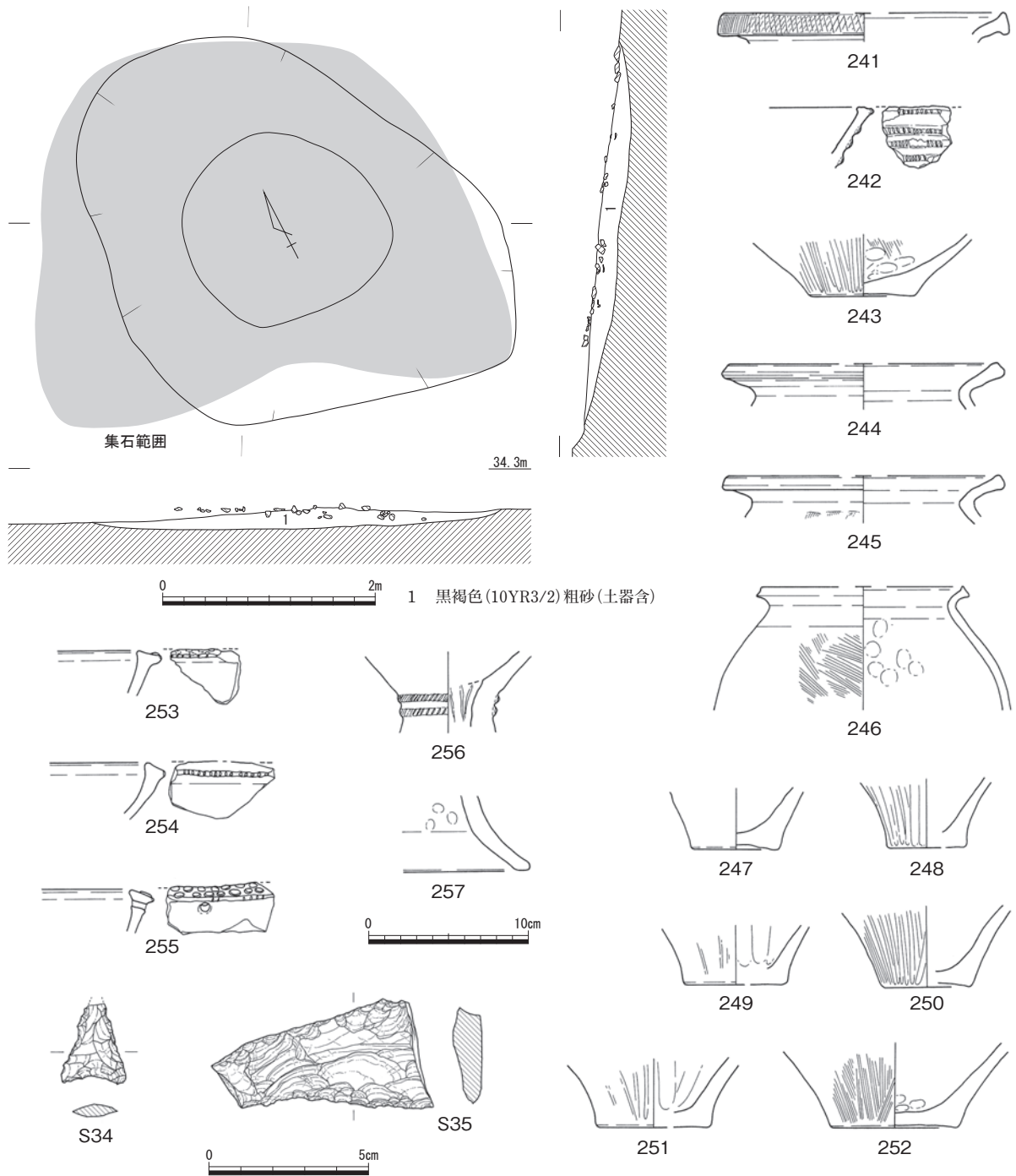
第247図 集石1 (1/60)・出土遺物 (1/4)

遺構の流入土からの出土遺物として弥生土器の壺232・236～238、甕233～235、高杯239・240を
 図示した。これら出土遺物から、遺構の時期は弥生時代中期中葉と考えられる。(柴田)

集石2 (第238・248図、図版37・38・49)

北東に延びる丘陵の東裾、4Dの南端に位置する集石で、集石1から12m南東の斜面上方に位置す
 る。石は角礫で10cm前後のものが多い。下の浅いたわみの流入土の状態の可能性もある。

遺構の流入土からの出土遺物として、弥生土器の壺241～243、甕244～252、鉢253～255、高杯
 256・257、石鏃S34、スクレイパーS35を図示した。これら出土遺物から、遺構の時期は弥生時代
 中期中葉と考えられる。(柴田)



第248図 集石2 (1/60)・出土遺物 (1/4・1/2)

5 たわみ

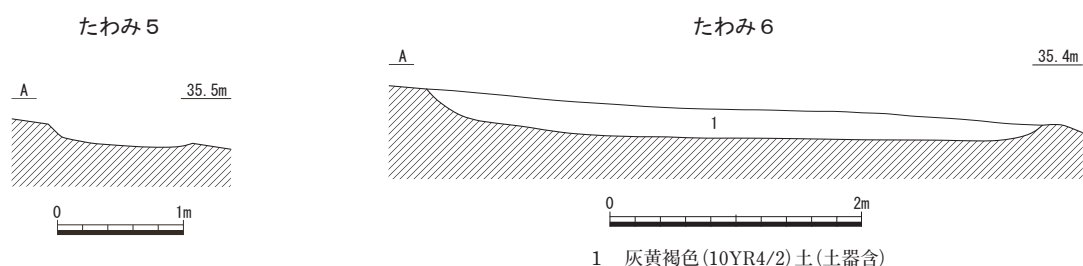
たわみ5 (第238・249図)

北東に延びる丘陵の東裾、6 Dの北東隅に位置する。標高35.3mで検出し、等高線に平行して細長い溝状のたわみである。長さ680cm、幅94cm、深さ18cmを測る。

良好な出土遺物はないが、遺構の時期は弥生時代中期の可能性はある。(柴田)

たわみ6 (第238・249図、図版38)

たわみ5の北東に位置し、後述するたわみ7の一部を削平している。当初、竪穴住居と想定して調査を進めたが、掘り方の立ち上がりは明瞭でなく、柱穴等も確認できなかったため、たわみとして報告する。土器の小破片が出土している。弥生時代の範疇であろう。(松尾)



第249図 たわみ5・6 (1/60)

たわみ7 (第238・250図、図版49)

北東に延びる丘陵の東裾、5 Dの南東隅に位置する、等高線に平行して細長いたわみである。たわみ6との重複関係からそれより古い。

出土遺物は弥生土器の甕258~260、高杯261、石鏃S36、砥石S37があり、遺構の時期は弥生時代中期と考えられる。(柴田)

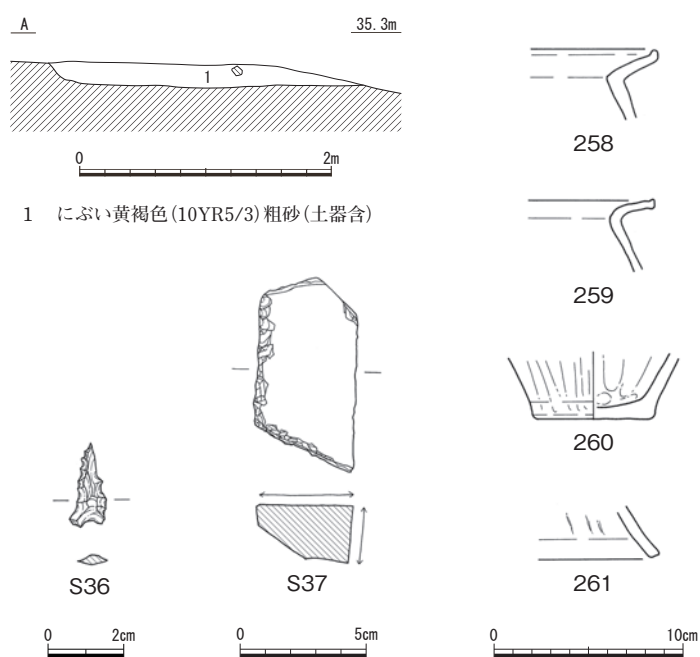
6 河道

河道1 (第237・251図、図版32・48・49)

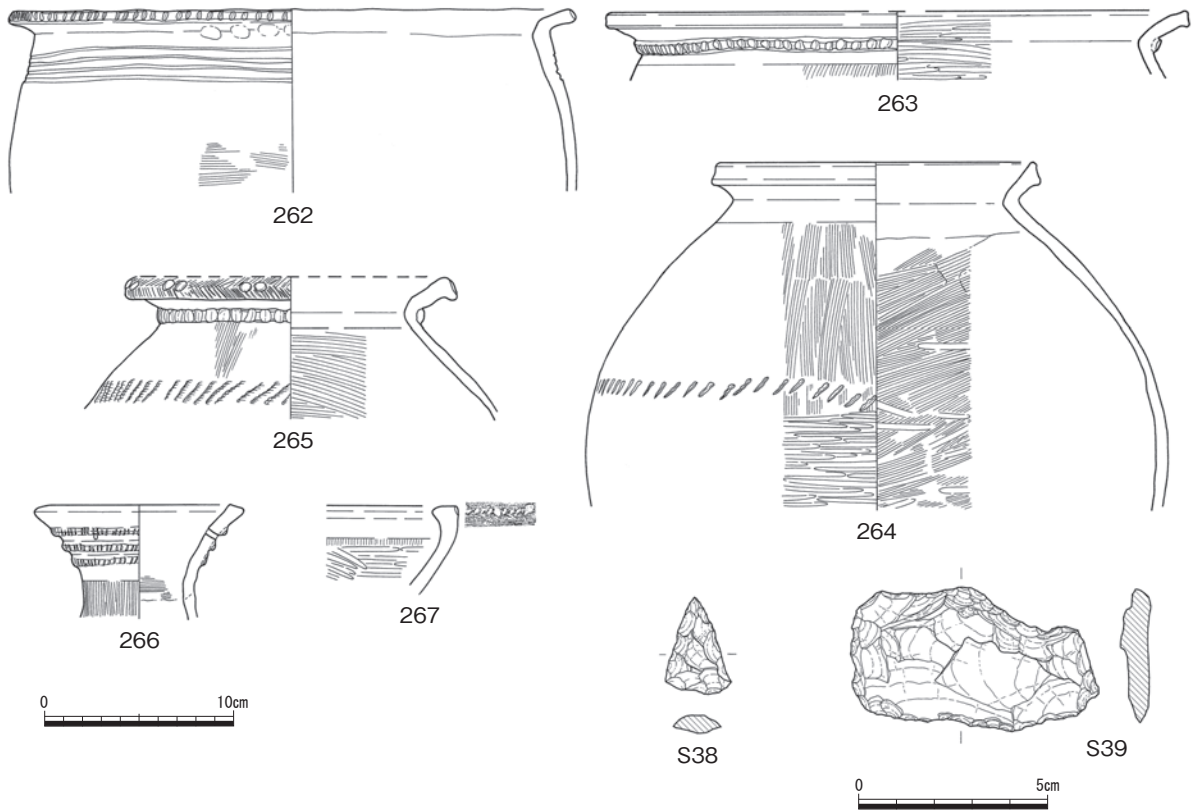
縄文時代後期以降の土器を包含する河道で、幾度か流れを変化させながら古代には埋没したと思われる。

第2節に示した第219図下Eライン

断面図の第6~16層には縄文時代晩期から古代にかけての土器や石器が含まれており、中でも弥生時代前期から中期の比較的良好な資料を図示した。弥生時代前期後半の甕262は口縁端部に刻目、胴部上半に4条のヘラ描沈線を施す。弥生時代中期中葉の甕263~265や短頸広口壺266、高杯267もある。その他、石器ではサヌカイト製の石鏃S38、スクレイパーS39が出土している。(松尾)



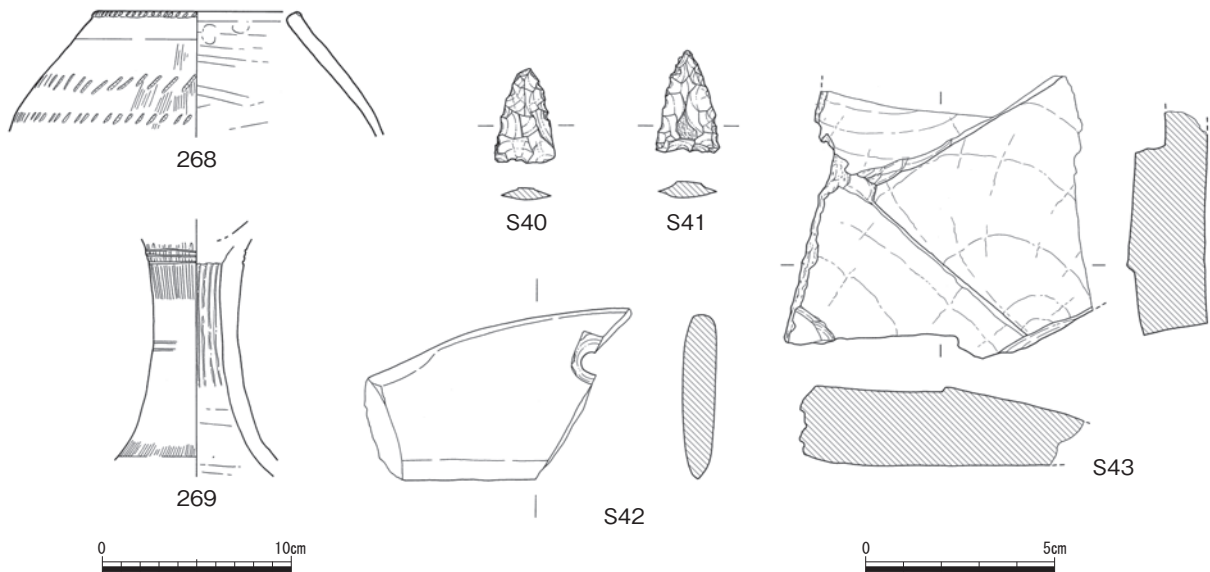
第250図 たわみ7 (1/60)・出土遺物 (1/4・1/3・1/2)



第251図 河道1出土遺物 (1/4・1/2)

7 その他の遺物 (第252図、図版49)

調査地西側の斜面堆積土に含まれていた遺物が中心になり、いずれも弥生時代に属するものと考えられる。268は無頸壺、269は高杯の筒部で土器の時期は弥生時代中期後半の範疇であろう。S40・41はサヌカイト製の石鏃、S42は結晶片岩製の磨製石庖丁である。S43はサヌカイトの石核で、調査地南東部の表土中から出土した。(石田)



第252図 遺構に伴わない遺物 (1/4・1/2)

第4節 平安時代以降の遺構・遺物

1 概要

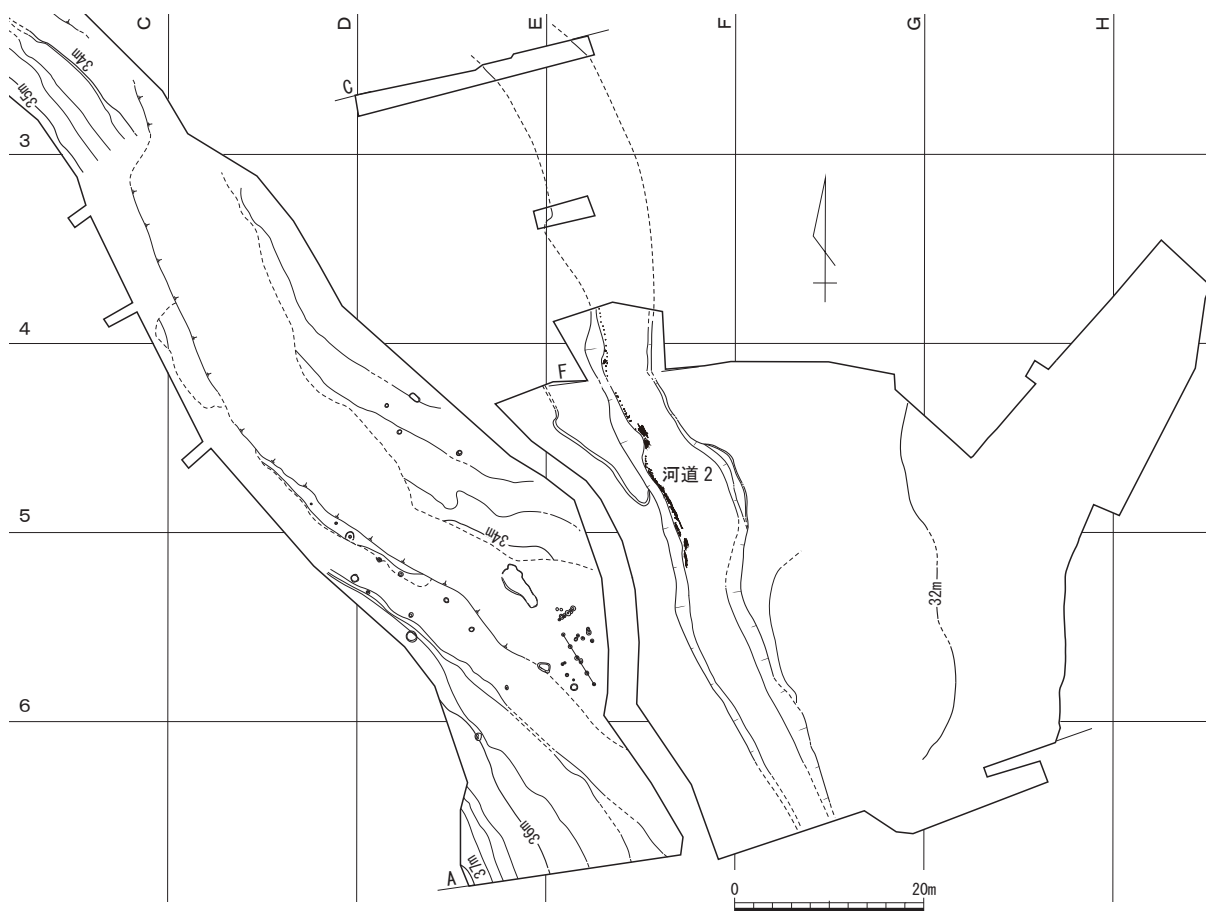
平安時代から室町時代にかけての遺構を、調査地南西部の4 D・Eから5 D・Eにかけての標高34 m付近の丘陵裾部とその東側の谷部で確認している。

平安時代に属する遺構は、谷部にあたる調査地中央を6 Fから2 D・Eにかけて南から北に流走する河道2がある。河道2内の左岸（西岸）では、木杭と横木によって構築された護岸1を約29 mにわたって確認している。

鎌倉時代及び室町時代の遺構は、5 D北東でたわみ1か所、5 E南西で柱穴列1列を確認しているのみである。そのほか、詳細な時期は不明であるが土坑2基やピットを数個検出している。

出土遺物としては、河道2の埋土や包含層から鎌倉時代を中心とした土師器が多く出土したほか、柱穴列1から宋銭が出土している。

調査地中央部で検出した河道2は中世後半には埋没しており、谷部については以降に耕地化が進んだと考えられる。流路自体は、現在も小川が流れる東側の調査地外に移動したようである。（石田）



第253図 平安時代以降の遺構全体図 (1/800)



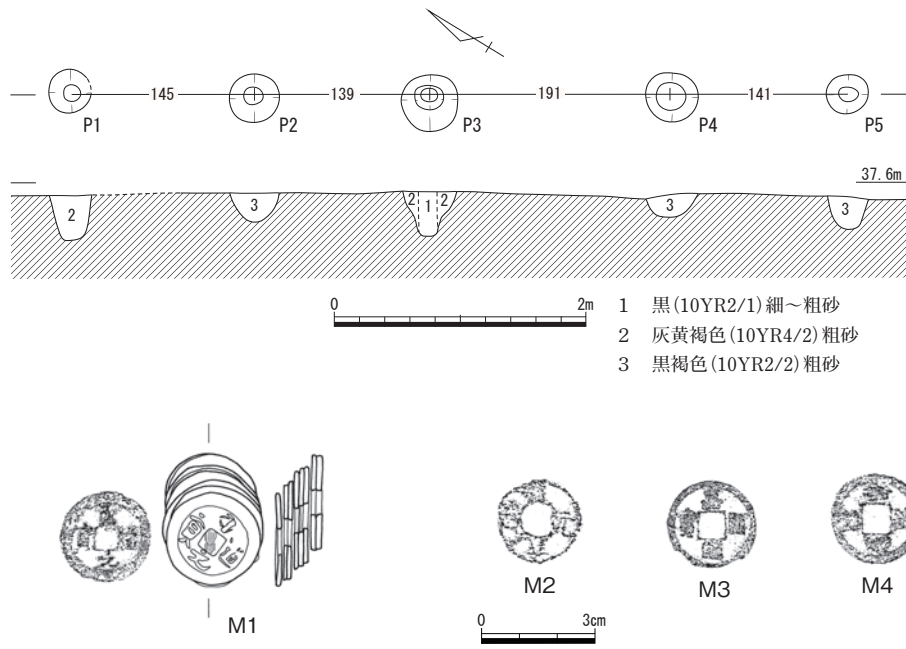
第254図 平安時代以降の遺構全体部分図 (1/400)

2 柱穴列

柱穴列1 (第254・255図、図版38・50)

5 E南西、北東に延びる丘陵の東裾に位置する。周囲では多数の柱穴が検出されたが、対になり建物にまとまるような柱穴は確認できなかった。4間の柱穴列で、全長616cmを測る。柱間距離はP 3とP 4の間で191cmを測るが、その他は140cm前後である。

出土遺物はP 3から出土した銅銭11枚 (M 1～4) がある。そのうちM 1の8枚は、重なって錆着しており、中央の孔には銭縹の紐と考えられる繊維が残存している。確認できた銭種は「至道元寶」(行書・北宋・995年)、「咸淳元寶」(南宋・1265年)、「元豊通寶」(篆書、北宋・1078年)である。遺構の時期は、これらの出土銭から室町時代と考えられる。(森本)



第255図 柱穴列1 (1/60)・出土遺物 (1/2)

3 土坑

土坑11 (第254・256図、図版39)

6 D北東、北東に延びる丘陵東裾にあたり北東に向けて下の緩斜面で検出している。平面形は不整形円形で、断面形は逆台形を呈す。規模は長軸は77cm、短軸65cm、深さ28cmを測る。

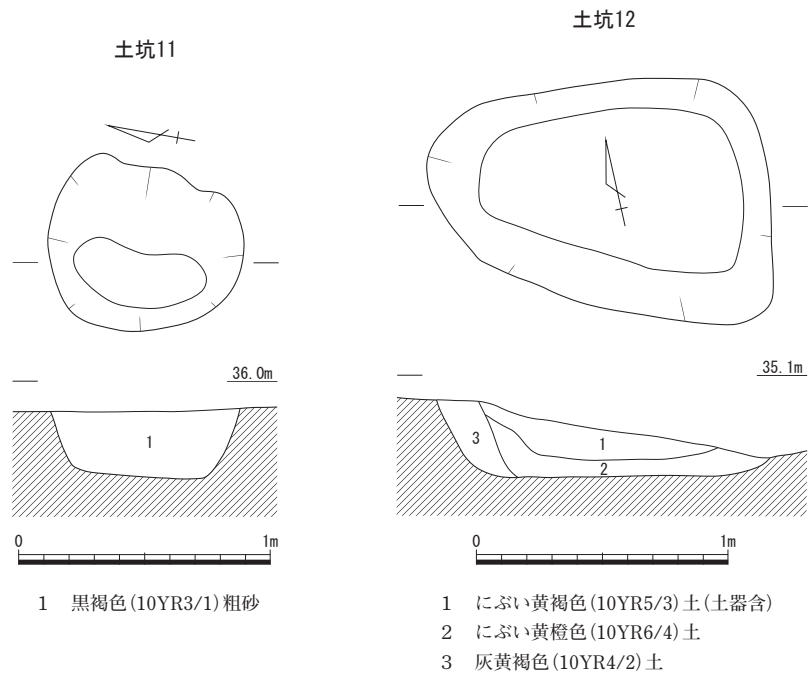
遺物は出土していないが、周辺から平安時代以降の土器片が出土しているため、土坑の時期も平安時代以降と考えたい。(森本)

土坑12 (第254・256図、図版39)

5 D南東、北東に延びる丘陵東裾にあたり北東に向けて下の緩斜面を削平して形成された平坦面上で検出した。土坑11の北東約10mに位置する。平面形は不整形方形で、断面形は逆台形を呈す。規模は長軸137cm、短軸92cm、深さ31cmを測る。

遺物は出土していないが、周囲で中世の遺構を複数検出しているため、土坑の時期も中世と想定したい。

(森本)



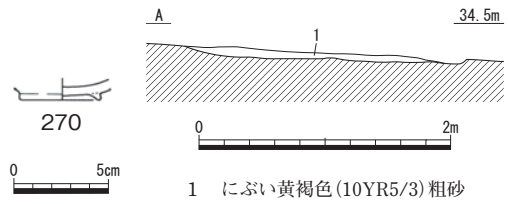
第256図 土坑11・12 (1/30)

4 たわみ

たわみ8 (第254・257図)

5 D北東、北東に延びる丘陵の東裾で検出した。平面形は不整形で、断面形は皿形を呈す。規模は長軸524cm、短軸178cm、深さ14cmを測る。非常に浅く、上面は大きく削平を受けているのだろう。

出土遺物は、吉備系土師器碗270がある。遺構の時期は鎌倉時代と考えられる。(森本)

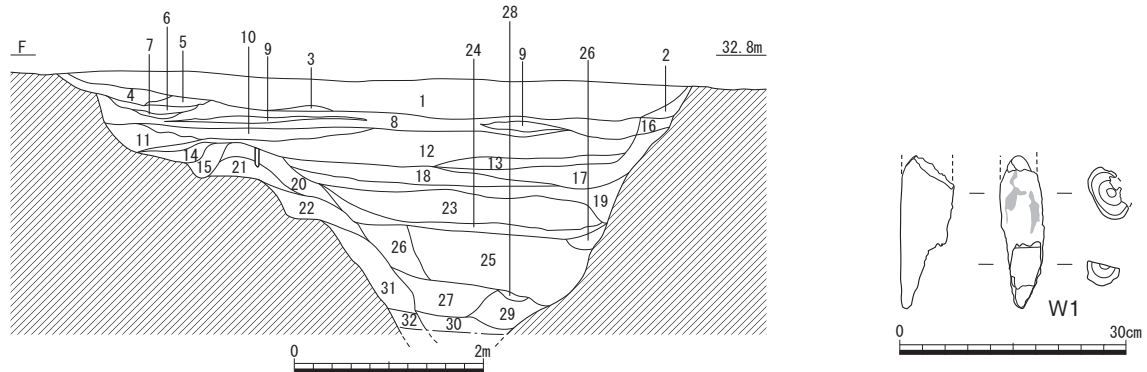


第257図 たわみ8 (1/60)・出土遺物 (1/4)

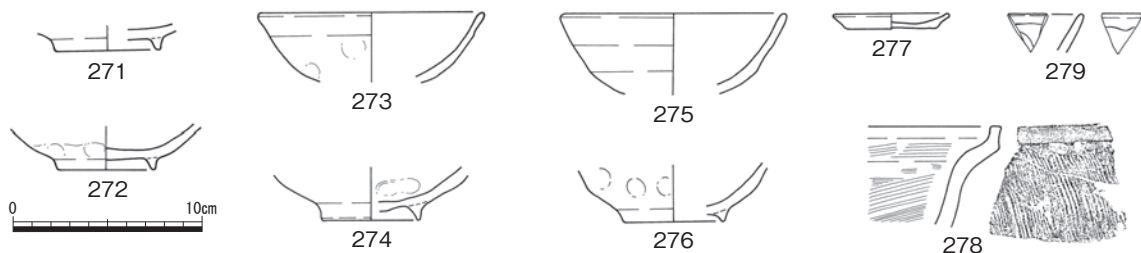
5 河道

河道2 (第253・254・258図、図版39・40・50)

調査地中央部を貫いて南東の6 Fから北西の2 D・Eにかけて流走する河道である。調査地北端部についてはトレンチ調査で河道の上端を確認している。調査範囲内で検出した長さは88m、幅は最大で9mを測る。地形自体は南から北に向かって下がっており、河道上端の標高は調査地南端の6 Fで33.2m、調査地中央の4 Eで32.6m、調査地北端部の2 E付近で31.0mであった。河道の底面については、4 E付近で第258図の断面図に示したように標高29.8m付近まで確認したが、最下層付近の埋土は粗砂が続き湧水も激しくなったため、掘り下げを断念した。



- | | | |
|-----------------------|------------------------------|-----------------------------------|
| 1 褐色(10YR6/1)砂質土(土器含) | 12 にぶい黄橙色(10YR7/3)粗砂 | 22 緑灰色(10GY5/1)微砂質土 |
| 2 にぶい黄橙色(10YR6/4)粘質土 | 13 にぶい黄橙色(10YR7/4)微砂 | 23 暗灰色(N3/)粗砂(土器含、粗砂互層状堆積) |
| 3 灰黄褐色(10YR6/2)細砂 | 14 にぶい黄橙色(10YR7/3)細砂 | 24 暗灰色(N3/)シルト(木片含) |
| 4 にぶい黄褐色(10YR5/3)粗砂質土 | 15 橙色(7.5YR6/8)粗砂 | 25 にぶい黄橙色(10YR6/4)粗砂(土器含、粗砂互層状堆積) |
| 5 褐色(10YR4/4)細砂 | 16 褐色(10YR5/1)シルト | 26 灰色(N4/)細砂質土 |
| 6 褐色(10YR4/1)砂質土 | 17 暗灰色(N3/)シルト(土器・木片含) | 27 灰色(7.5Y4/1)シルト質粘土 |
| 7 灰黄褐色(10YR6/2)シルト | 18 緑灰色(10GY5/1)微~細砂 | 28 オリーブ黒色(7.5Y3/1)細砂(木杭W1採取) |
| 8 褐色(10YR5/1)粘土 | 19 オリーブ黒色(5GY2/1)シルト(土器・木片含) | 29 緑灰色(7.5GY5/1)シルト |
| 9 灰黄褐色(10YR6/2)細砂 | 20 灰黄色(2.5Y6/2)細砂(土器・木片含) | 30 暗緑灰色(7.5GY4/1)粗砂 |
| 10 にぶい黄橙色(10YR7/2)シルト | 21 緑灰色(10GY5/1)シルト(土器・木片含) | 31 灰色(10Y5/1)細砂質土 |
| 11 にぶい黄褐色(10YR4/3)粗砂 | | 32 灰色(N4/)細砂 |



第258図 河道2断面図 (1/80)・杭 (1/10)・出土遺物 (1/4)

また、南側5 Eから北側3 E南端にかけて河道左岸（西岸）では、木杭を打ち込み、杭間を横木で繋いで構築した護岸1を確認している。

河道からの出土遺物としては、埋土下層にあたる第258図の断面図第28層から出土した木杭W1がある。径7 cm程度のクヌギ節の木を樹皮が付いたままの状態を利用し、先端部を片刃状に斜めに切削している。この杭について放射性炭素年代測定を実施したところ7世紀後半から8世紀の年代を得た（第6章第7節参照）。この結果から河道の上限時期は奈良時代もしくはそれ以前に遡る可能性も十分考えられる。河道埋土中からの出土土器としては、中層から平安時代の内面黒色土器椀271、第258図の断面図第1層を中心とする最上層で出土した吉備系土師器椀272～276、土師器皿277、土師器鍋278、青磁碗279がある。また、図示できるものはなかったが縄文土器の細片も少量含まれていた。

河道左岸（西岸）に設けられた護岸1に使用されていた木杭の放射性炭素年代測定結果は平安時代後半を示しており、黒色土器椀271の存在からも河道の中心時期は平安時代と想定される。埋土最上層の出土土器は13世紀～14世紀前半にかけてのもので、室町時代に入る頃には河道は完全に埋没したと考えられる。 (石田)

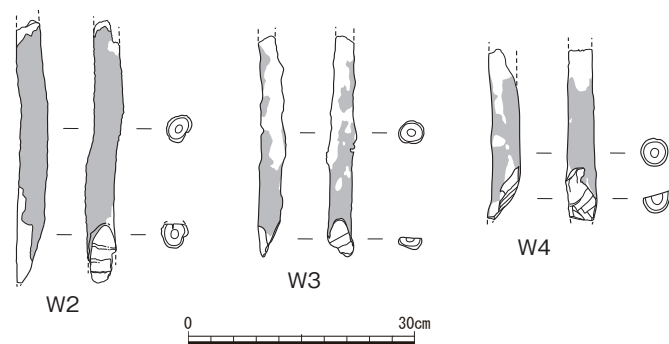
6 護岸

護岸1（第254・259・260図、図版39・40・50、写真11）

河道2の左岸（西岸）沿いの3 E南端から5 Eにかけて、木杭と横木によって構築された護岸を長さ約29mにわたって検出した。河道の埋土中で水に浸かり保存状態が良好だった杭の下部と横木が残存しており、検出できた護岸の高さは20cm程度である。

杭は基本的には1列だが、4 E付近では長さ約12mにわたって部分的に東西に2列で打ち込んでおり、列の間隔は30cm程度である。南北の杭の間隔は20～70cm程度とバラツキがあるが、50cm程度の間隔をあけるものが最も多い。隣接する杭との間には径の細い樹木を利用した横木を複数本束ねて置くことにより護岸を構築している。

護岸に使用されていた横木及び杭の一部を第259・260図に示した。W2～4は横木として利用されていたもので、加工痕のあるものを図示した。いずれも径3 cm程度で、先端部の片側をいずれも斜めに切削している。W5～13は杭で、径3～10cm程度のものがある。先端部は鋭利な工具で片側を斜めに切削しているものがほとんどで、一部W7・13のように両側を切削し、先端部を尖らしているものもある。杭や横木はいずれも樹皮が付いたままの状態加工されており、周辺に繁茂している樹木やその枝を切り払ってそのまま利用したものと考えられる。

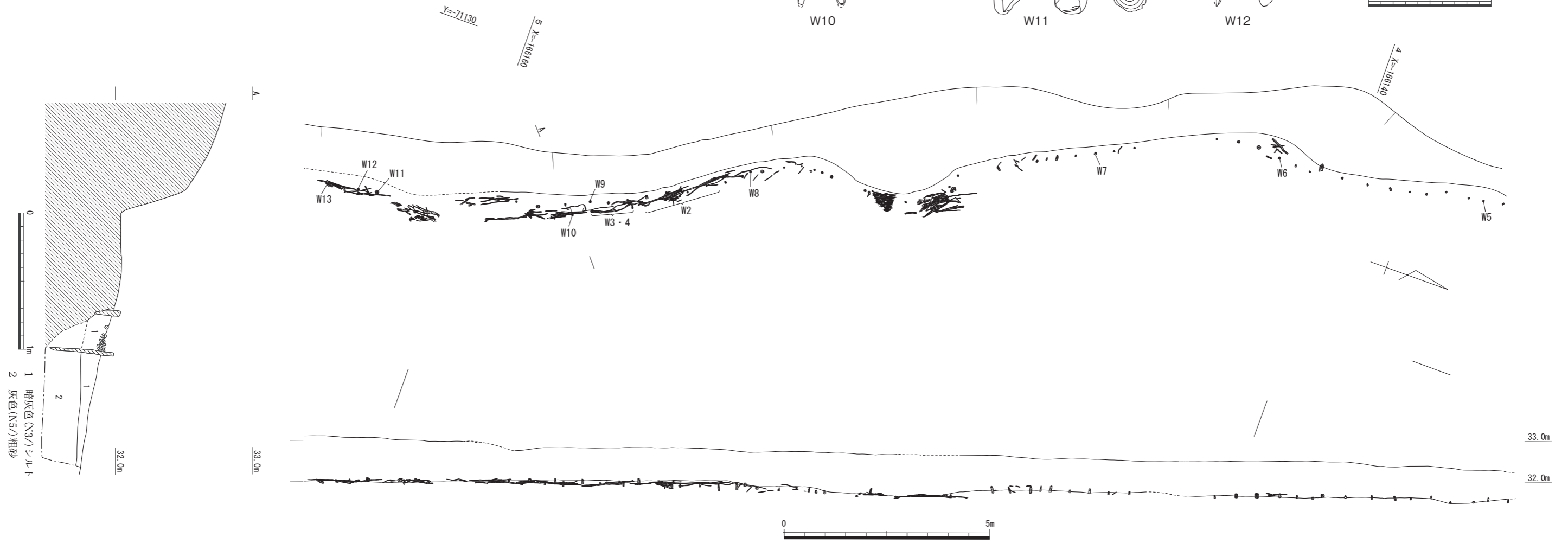
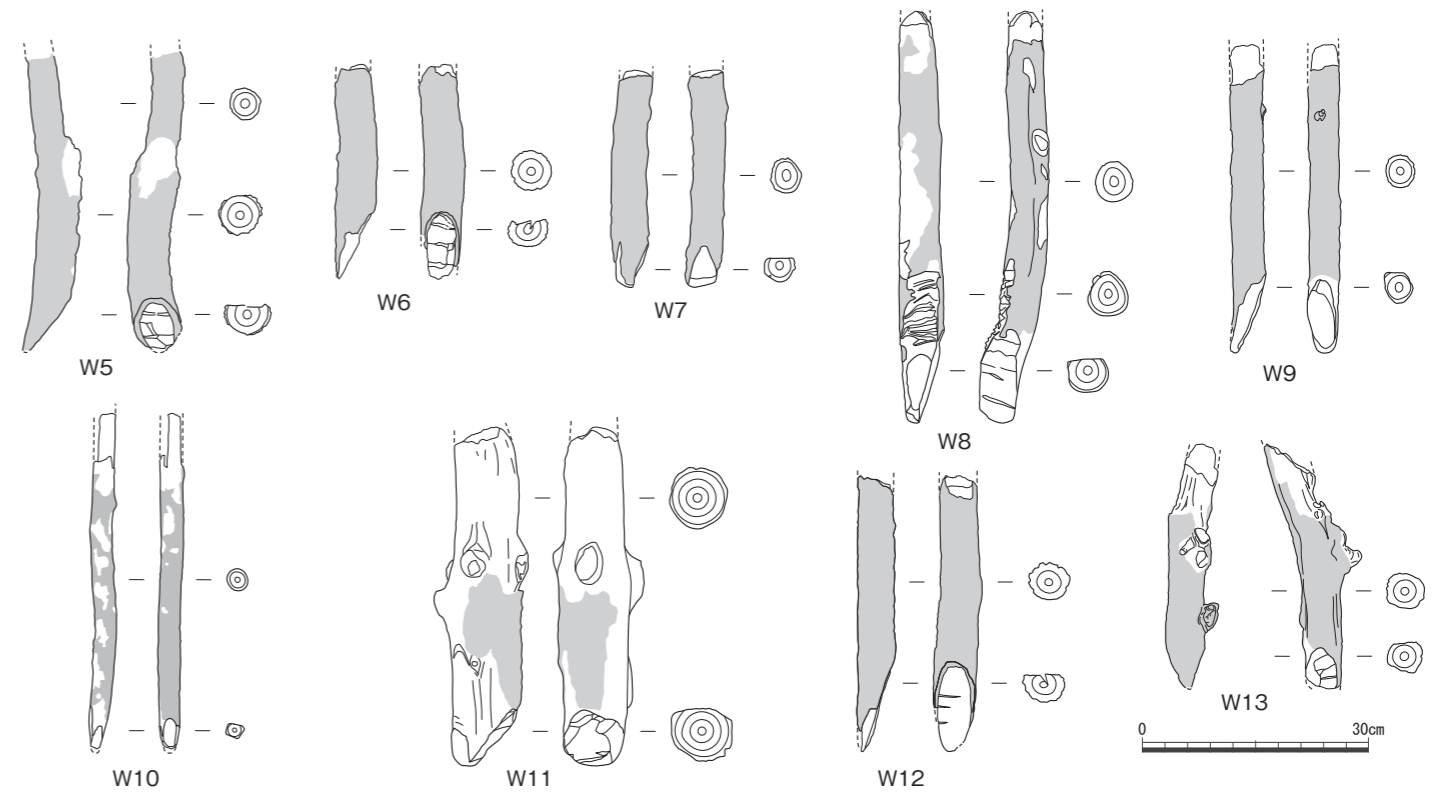


第259図 護岸1横木 (1/10)

横木や杭などの一部については樹種同定と放射性炭素年代測定を行っている（第6章第7節参照）。横木に利用されていたW2はクリ、W3・4はアワブキ属、杭に利用されていたW5～7・9・11～13はコナラ亜属クヌギ節、W8・10はアワブキ属である。図示していないものも含めて、杭にはコナラ亜属クヌギ節のものが多く使用されていた。



写真11 護岸1の調査状況(南から)



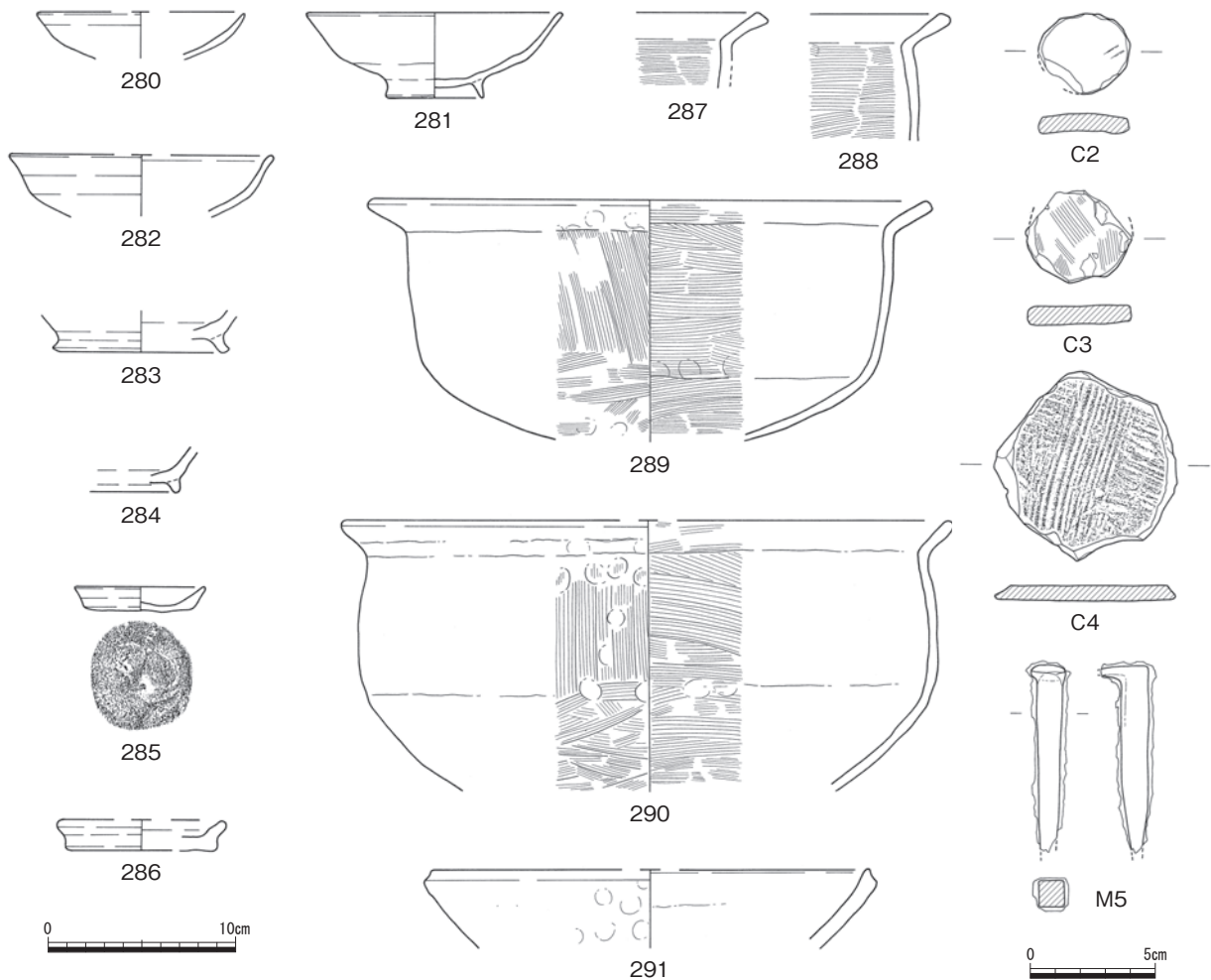
第260図 護岸1平・立面図(1/100)・断面図(1/30)・杭(1/10)

また、横木W2及び杭W5・7・8・11と護岸機能時に河道内に繁茂していたと考えられるハンノキ属の自然木について放射性炭素年代測定を実施したところ、いずれも11世紀～12世紀前半の年代を得ている。河道2の出土遺物としては第258図に示した平安時代の黒色土器碗や鎌倉時代に属する土師器が多く含まれていた。これらの土器は河道堆積土中の出土であり、河道の機能していた時期の一部を示してはいたが、護岸の時期を特定するには至らなかった。杭や横木の年代測定を実施した結果、護岸は平安時代後半に構築されたことが明らかになった。

なお、護岸の存在する河道2の左岸側は、北東に延びる丘陵の裾部にあたる。主に弥生時代中期、古墳時代の竪穴住居、室町時代の柱穴列などを検出しているが、護岸の機能していた平安時代の遺構は確認していない。当該期の遺構等が調査地外に存在するか、中世に削平されている可能性もあるが、河道2左岸を護岸で補強した意図やその背景については、現状では不明と言わざるを得ない。(石田)

7 その他の遺物 (第254・261図、図版48・50)

調査地内のピットや包含層を中心に平安時代から鎌倉時代にかけての遺物が出土している。土器は土師器280～290、須恵器291がある。280～284は碗で280～282は吉備系土師器碗である。280はピット1から出土している。285・286は皿、287～290は鍋、291は鉢である。その他、土師質の土製円板C2、瓦質の土製円板C3・4、鉄釘M5が出土している。(石田)



第261図 遺構に伴わない遺物 (1/4・1/3)

第5節 小結

マキサヤ遺跡は、北東に延びる丘陵の東裾部から谷部にかけて位置している。丘陵裾部の緩斜面を中心に縄文時代から室町時代にかけての遺構を検出しており、谷部で確認した河道の堆積土中からは土器や石器などの遺物が多く出土している。

今回の調査で確認した最も古い時期の遺物は、河道1から出土した隠岐産黒曜石製の縦長剥片S1で、後期旧石器時代に遡る。

縄文時代の遺構としては、丘陵裾部で土坑2基、たわみ4か所、谷部で河道1条を検出している。丘陵裾部のたわみや包含層からは縄文土器が比較的多く出土しており、前期の磯の森式、中期の船元I式・船元II式・里木III式・矢部奥田式、後期の中津式・福田K2式・縁帯文成立期・津雲A式を確認している。谷部の河道1では、中期の船元式、後期の中津式・福田K2式・縁帯文成立期・津雲A式・彦崎K1式・四元式・彦崎K2式、晩期の突帯文土器が出土している。特に河道1の北地区、南地区で検出した土器溜まりや土器集中部では、縄文時代後期前葉の縁帯文成立期の良好な資料がまとまって出土している。詳細については第7章第4節で検討しているが、これまで岡山県内では不明な点が多かった縁帯文成立期の土器群であり、深鉢の大半は高知県本山町松ノ木遺跡で確認された松ノ木式と同様のものである。

石器はサヌカイト製の石鏃や石匙、スクレイパーなどが河道1を中心に出土している。そのほか注目されるものとして、結晶片岩製の石棒S3・30がある。縄文時代晩期後葉から末にかけて東部瀬戸内から近畿に分布が知られているもので、岡山県内では百間川沢田遺跡や津島岡大遺跡等で確認されている(中村 豊「中四国地域における縄文時代精神文化について—大型石棒・刀剣形石製品を中心に—」『山陰地方の縄文社会』古代文化センター研究論集第13集 島根県古代文化センター 2014)。

弥生時代の遺構は、丘陵裾部で竪穴住居1軒、土坑8基、集石2基、たわみ3か所を確認している。時期は弥生時代中期中葉に限られる。谷部に位置する河道1の堆積土中からは弥生時代前期後半や中期後半の土器片も出土しており、調査地より南側の上流部や周辺の丘陵部には、当該期の遺構が存在している可能性が高い。

古墳時代の遺構は、前期初頭の竪穴住居1軒を確認したのみで、再び遺構が確認できるのは平安時代以降になる。

平安時代の遺構は、河道1条と護岸を確認している。調査地中央の谷部を南北に流走する河道2があるが、河道左岸(西岸)には、木杭と横木によって構築された護岸1を長さ約29mにわたって検出した。護岸が設けられた時期は、木杭や横木の放射性炭素年代測定結果から11世紀~12世紀前半と考えられる。なお、河道2の堆積土下層から出土した木杭の年代測定結果から、8世紀代から河道が機能していた可能性がある。

鎌倉時代及び室町時代の遺構は、丘陵裾部でたわみ1か所と柱穴列1列を確認しているのみである。そのほか、詳細な時期は不明であるが土坑2基やピットがいくつか存在する。丘陵裾部の包含層や河道2の堆積土上層から鎌倉時代の土師器が多く出土したほか、柱穴列1から宋銭が11枚出土している。

調査地中央部で検出した河道2は中世後半には埋没しており、谷部については以降に耕地化が進んだと考えられる。流路自体は、現在も小川が流れる東側の調査地外に移動したようである。(石田)

第6章 自然科学的分析

第1節 岡山県浅口市城殿山遺跡出土ガラス玉の自然科学的調査

独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所
田村 朋美

岡山県浅口市城殿山遺跡から出土したガラス小玉（表5）について、製作技法を推定し、化学組成から基礎ガラスの種類及び着色材の特徴を把握することを目的として自然科学的調査を実施した。

以下、その結果について報告する。

表5 調査対象

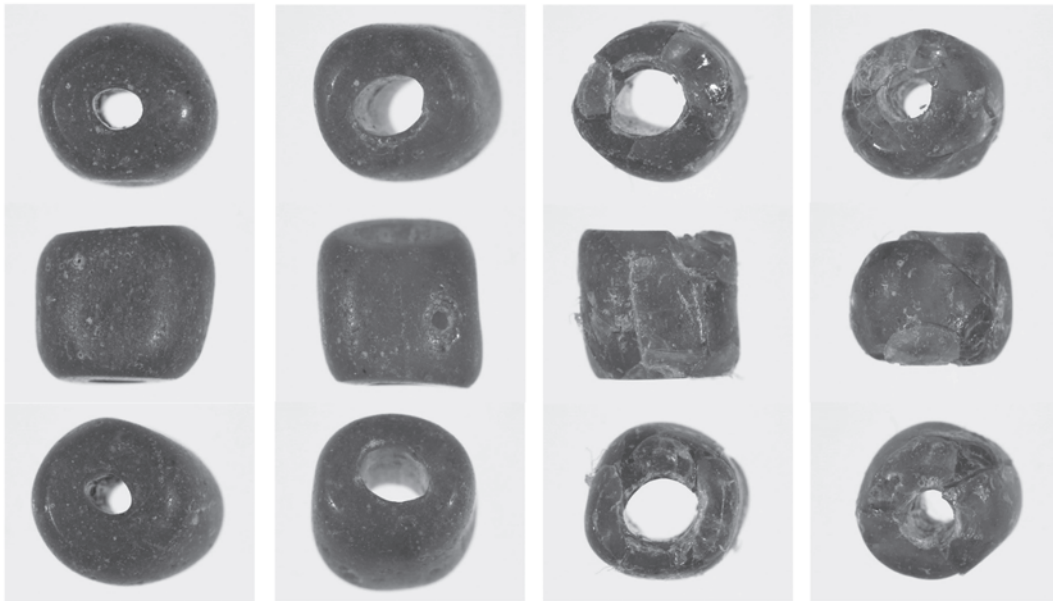
分析No.	掲載番号	出土地点	種別	色調	製作技法	備考
1	J 3	城殿山遺跡2区 埋葬施設4 玉7	小玉	淡青色半透明	引き伸ばし	
2	J 4	城殿山遺跡2区 埋葬施設4 玉10	小玉	淡青色半透明	引き伸ばし	
3	J 5	城殿山遺跡2区 埋葬施設4 玉6	小玉	淡青色透明	引き伸ばし	
4	J 6	城殿山遺跡2区 埋葬施設4 玉8	小玉	淡青色透明	引き伸ばし	
5	J 7	城殿山遺跡2区 埋葬施設4 玉5	小玉	淡青色透明	引き伸ばし	
6	J 8	城殿山遺跡2区 埋葬施設4 玉3	小玉	淡青色透明	引き伸ばし	
7	J 9	城殿山遺跡2区 埋葬施設4 玉11	小玉	淡青色透明	引き伸ばし	
8	J 10	城殿山遺跡2区 埋葬施設4 玉9	小玉	淡青色透明	引き伸ばし	
9	—	城殿山遺跡2区 埋葬施設4 玉4	小玉	淡青色透明	引き伸ばし	破片3点

1 顕微鏡観察

ガラス小玉の製作技法の解明を目的として、実体顕微鏡観察をおこなった。顕微鏡写真を写真12に示す。顕微鏡下では、ガラス玉の保存状態や色調及び着色剤として添加された顔料粒子の有無などに着目して観察を実施した。さらに、透明感や色むらの有無、及び内部の気泡の形状や配列を観察した。観察の結果、小玉の製作技法については、気泡が孔と並行に並ぶことや孔内が平滑であることなどの特徴から、すべて引き伸ばし法であると判断される。端面は研磨されている。

2 コンピューテッドラジオグラフィ (CR)

鉛ケイ酸塩ガラスの識別を目的として、X線透過撮影法の一つであるコンピューテッドラジオグラフィ (Computed Radiography : CR法) を実施した。アルカリケイ酸塩ガラスと鉛ケイ酸塩ガラスの密度を比較すると、後者の密度がはるかに高く、X線の吸収が大きいため、X線透過画像から両者を容易に識別できる。CR法は、従来のフィルムのかわりにイメージングプレート (Imaging Plate : IP) を検出系に用いる方法である。撮影に用いた装置は、マイクロフォーカスX線拡大撮像システム (富

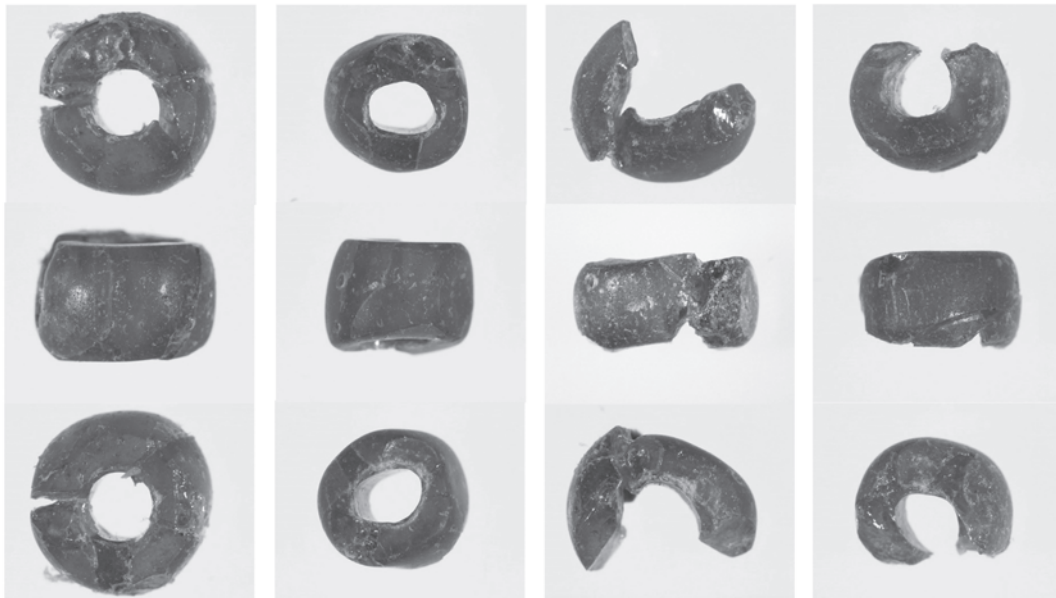


分析No. 1 (J3)

分析No. 2 (J4)

分析No. 3 (J5)

分析No. 4 (J6)

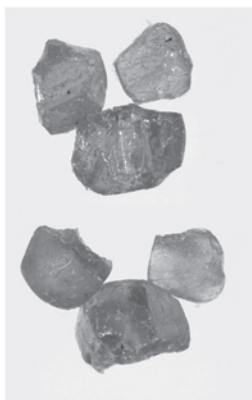


分析No. 5 (J7)

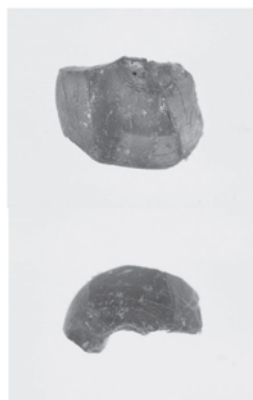
分析No. 6 (J8)

分析No. 7 (J9)

分析No. 8 (J10)



分析No. 9 (全破片)



分析No. 9 (最大破片)

写真12 城殿山遺跡出土玉類の顕微鏡写真

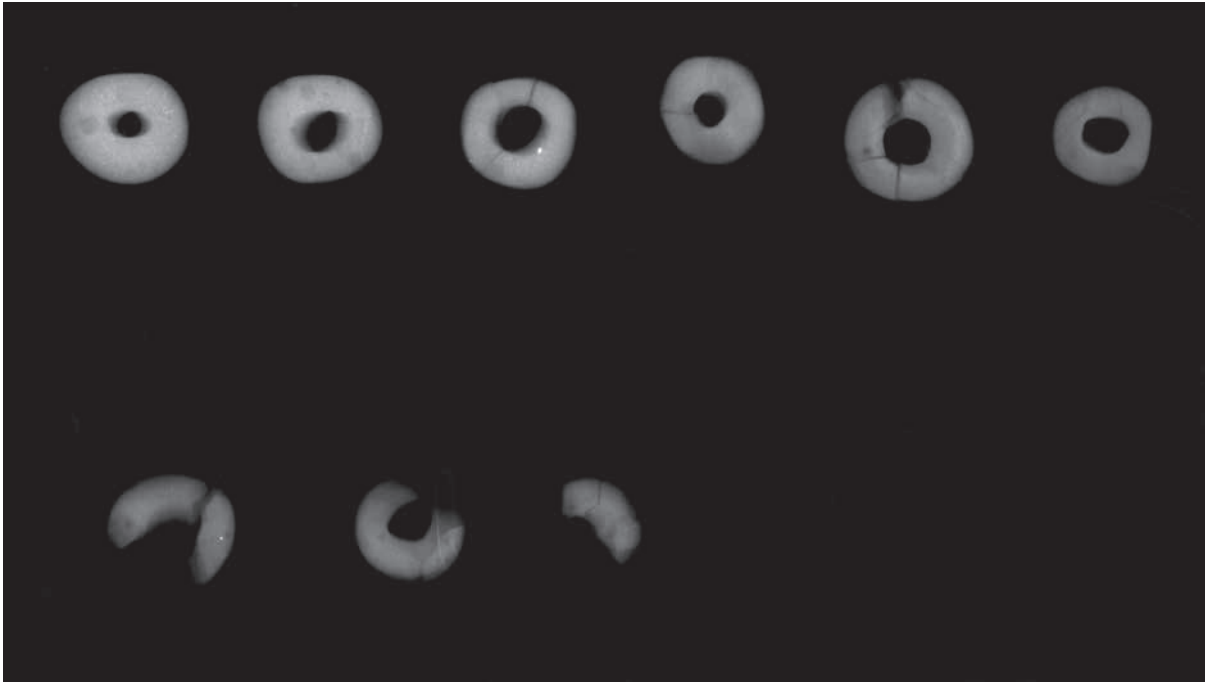


写真13 コンピューテッドラジオグラフィ画像

士フィルム社製 μ FX-1000) とイメージングアナライザー (富士フィルム社製 BAS-5000) である。IPにはBAS-2025を使用した。撮影条件は、管電圧40kV、管電流40 μ A、露光時間50秒であった。

結果を写真13に示す。X線の吸収の大きい個体は認められず、すべてアルカリケイ酸塩ガラスであると推定される。

3 オートラジオグラフィ (AR)

酸化カリウム (K_2O) を多く含むガラスの判別を目的としてオートラジオグラフィ法 (Auto Radiography method: AR法) を実施した。AR法は、物質から放射される放射線をフィルムやIPに記録して画像を得る方法であり、放射線の蓄積線量により画像の濃淡が異なる。 K_2O を多く含むガラスは、 ^{40}K に由来する放射線を放射している。したがって、ガラスをIP上に同じ時間だけ暴露した場合、 K_2O の含有量が多いほど濃い画像が得られることになる。

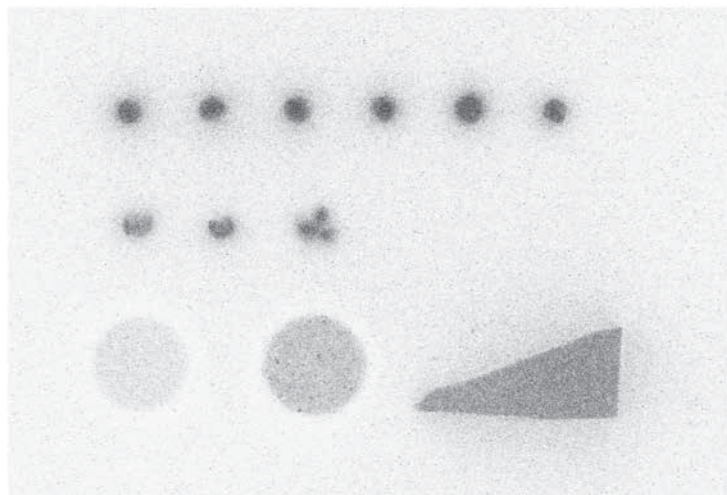
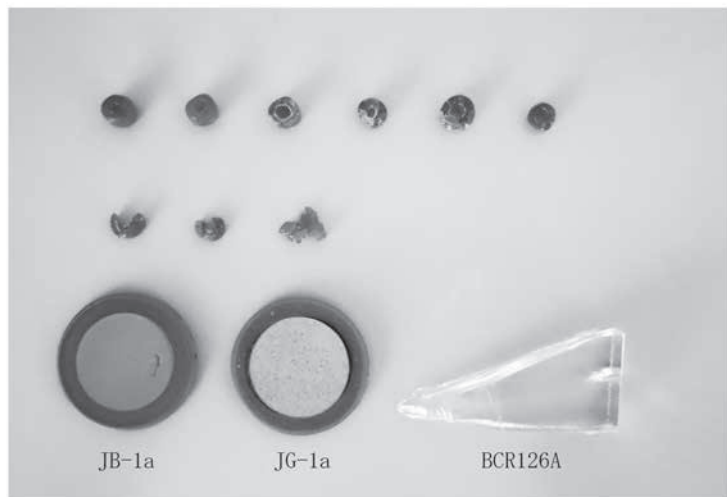


写真14 オートラジオグラフィ画像

AR法の手順は以下のとおりである。まず、資料を直接IPの上に置き、外部からの放射線を遮断するため、鉛製の遮蔽箱内に設置する。さらに、遮蔽箱の鉛に由来する放射線を遮蔽するため、IPの周辺を銅板で囲った。使用したIPはBAS-SR2025であり、暴露時間は168時間とした。また、比較のための標準試料として、日本岩石標準試料JB-1aとJG-1aの粉体圧縮ピース、及びBCR126A (IRMM (Institute for Reference Material and Measurement) 標準物質) を同時に暴露した。これらのK₂Oの含有量は、それぞれ1.4%、4.0%及び10.0%である。

結果を写真14に示す。いずれの資料も同時暴露したBCR126A (K₂O: 10.0%) よりも濃い画像が得られたことから、K₂O濃度が10%よりも高いことが示唆された。カリガラスの可能性が高い。

4 蛍光X線分析 (EDX)

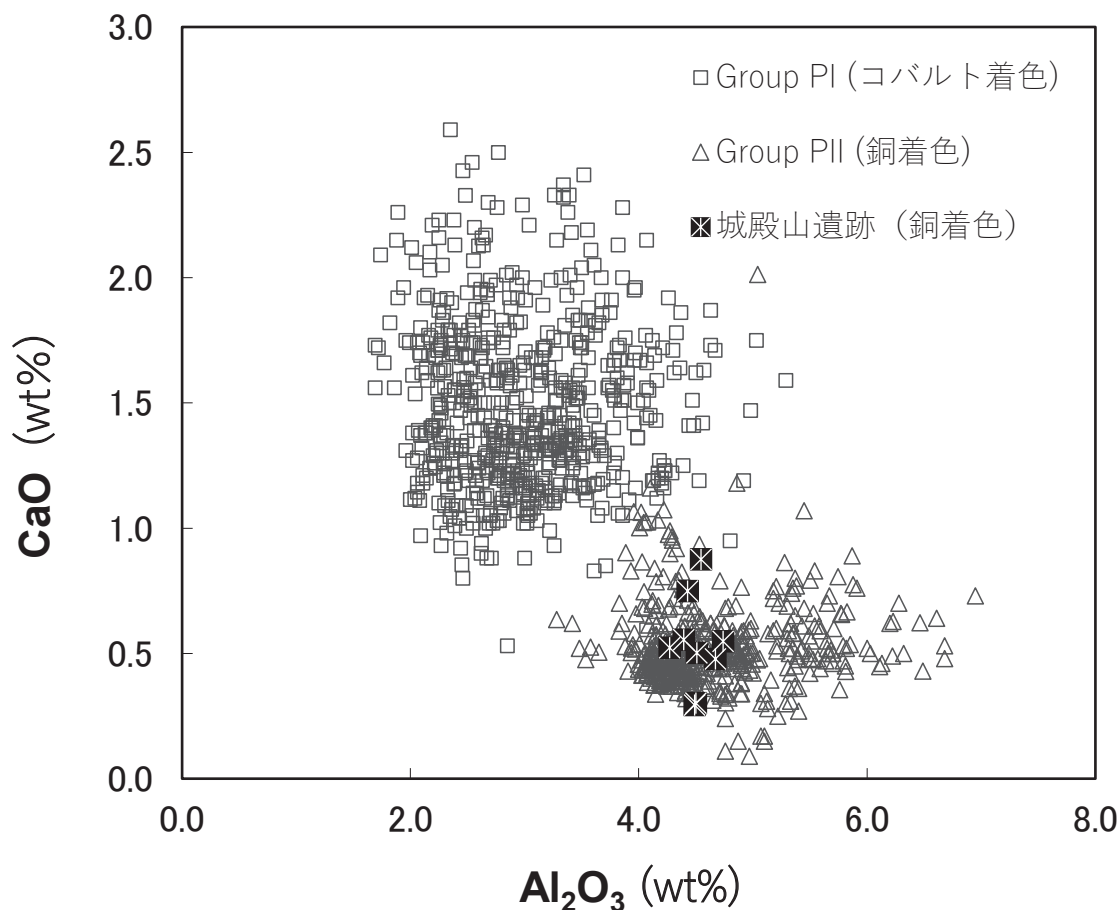
ガラスの主要な構成成分とその含有量を知るために蛍光X線分析を実施した。測定にあたっては、顕微鏡下で新鮮な破断面など風化の影響が少ない場所を選択し、測定範囲の表層を超音波及びエチルアルコールで洗浄したうえで測定した。測定結果は、測定資料と近似する濃度既知のガラス標準試料を用いて補正した理論補正法 (Fundamental Parameter method:FP法) により、検出した元素の酸化物の合計が100%になるように規格化した。測定に用いた装置は、エネルギー分散型蛍光X線分析装置 (エダックス社製EAGLEⅢ) である。励起用X線源はロジウム (Rh) 管球、管電圧は、FP法を用いた定量分析では20kVに設定し、必要に応じて20 keV以上のスペクトルを検出するため、45kVに設定した。なお、20keV以上の検出された元素に関してはスタンダードレスのFP法により濃度の参考値を算出した。本測定では錫 (Sn) が該当する。管電流は200 μA、X線照射径は50 μm、計数時間は300秒とし、真空中で測定した。

結果を表6に示す。蛍光X線分析の結果、No.1、No.2、No.6はK₂Oを10%以上含有することからカリガラスと考えられる。上記3点以外は風化の影響が顕著で、アルカリ成分がいずれも5%未満であった。ただし、上述のAR調査の結果、いずれもK₂Oを10%以上含有することが示唆されていることや、風化の影響を受けにくいとされるRb₂OやSrOなどの重元素成分の含有量が共通することから、いずれもカリガラスであると判断された。着色成分については、いずれもCuOの含有量が多く (0.99-1.47%)、銅イオンが主要な着色要因である。いずれも微量のPbOとSnO₂を含有しており、着色剤として青銅が利用された可能性が示唆される。

表6 蛍光X線分析結果

分析No.	重量濃度 (%)																		※
	Na ₂ O	MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	P ₂ O ₅	K ₂ O	CaO	TiO ₂	Cr ₂ O ₃	MnO	Fe ₂ O ₃	CoO	CuO	ZnO	PbO	Rb ₂ O	SrO	ZrO ₂	
1	1.4	0.8	4.5	78.7	0.1	12.2	0.3	0.12	0.02	0.01	0.37	0.01	1.16	0.02	0.18	0.03	0.02	0.08	0.40
2	1.6	0.7	4.5	78.8	0.1	12.0	0.3	0.13	0.02	0.01	0.41	0.01	1.11	0.02	0.21	0.03	0.02	0.11	0.39
3	2.0	0.9	4.4	85.2	0.1	4.9	0.6	0.12	0.02	0.02	0.40	0.01	1.01	0.02	0.24	0.04	0.02	0.11	0.28
4	1.3	0.7	4.4	86.5	0.1	4.2	0.7	0.13	0.02	0.03	0.43	0.01	1.07	0.02	0.24	0.04	0.02	0.09	0.32
5	1.4	1.0	4.5	85.3	0.1	4.8	0.9	0.13	0.02	0.03	0.42	0.01	0.99	0.02	0.22	0.04	0.02	0.07	0.26
6	1.5	0.7	4.3	80.2	0.0	10.7	0.5	0.12	0.02	0.01	0.33	0.01	1.32	0.02	0.24	0.04	0.02	0.09	0.29
7	1.5	0.8	4.7	87.7	0.1	2.3	0.5	0.14	0.02	0.01	0.37	0.01	1.42	0.03	0.23	0.04	0.02	0.11	0.31
8	1.1	0.8	4.5	88.6	0.1	1.9	0.5	0.13	0.02	0.01	0.38	0.01	1.47	0.03	0.25	0.04	0.02	0.09	0.34
9	1.1	0.8	4.7	88.5	0.1	1.8	0.5	0.14	0.02	0.01	0.45	0.01	1.23	0.02	0.24	0.03	0.02	0.09	0.22

※スタンダードレスのFP法により算出



第262図 化学組成によるカリガラスの細分

既往研究において、日本列島で出土するカリガラスは、CaOと Al_2O_3 の含有量から二種類（Group PI、Group PII）に大別され、さらにGroup PIはコバルト着色の紺色カリガラスに、Group PIIは銅着色の淡青色カリガラスに対応することが明らかとなっている⁽¹⁾。本調査の結果、城殿山遺跡出土のガラス小玉については、基礎ガラスの種類と着色剤の関係から、 Al_2O_3 含有量が多く、CaO含有量が少ないタイプ（Group PII）に相当することが分かった（第262図）。

註

- (1) Oga, K., Tamura, T. 2013. Ancient Japan and the Indian Ocean Interaction Sphere: Chemical Compositions, Chronologies, Provenances and Trade Routes of Imported Glass Beads in Yayoi-Kofun Period (3rd Century BCE-7th Century CE). *Journal of Indian Ocean Archaeology*, 9, pp.34-60.

第2節 城殿山遺跡出土炭化材の放射性炭素年代測定

株式会社パレオ・ラボ

1 はじめに

発掘調査により出土した試料について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。

2 試料と方法

測定試料の情報、調製データは表7のとおりである。測定試料を写真15、16に示す。

試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS：NEC製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、¹⁴C年代、暦年代を算出した。

表7 測定試料及び処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-43883	遺構：埋葬施設1 調査区：2区 試料No.1	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年輪以外 部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸：1.2mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0mol/L, 塩酸：1.2mol/L)
PLD-43884	遺構：土坑3 調査区：2区 試料No.2	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年輪以外 部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸：1.2mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0mol/L, 塩酸：1.2mol/L)

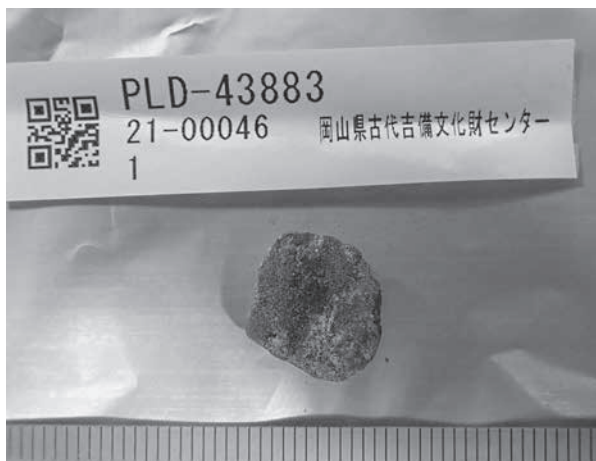


写真15 試料No.1 (PLD-43883：埋葬施設1)



写真16 試料No.2 (PLD-43884：土坑3)

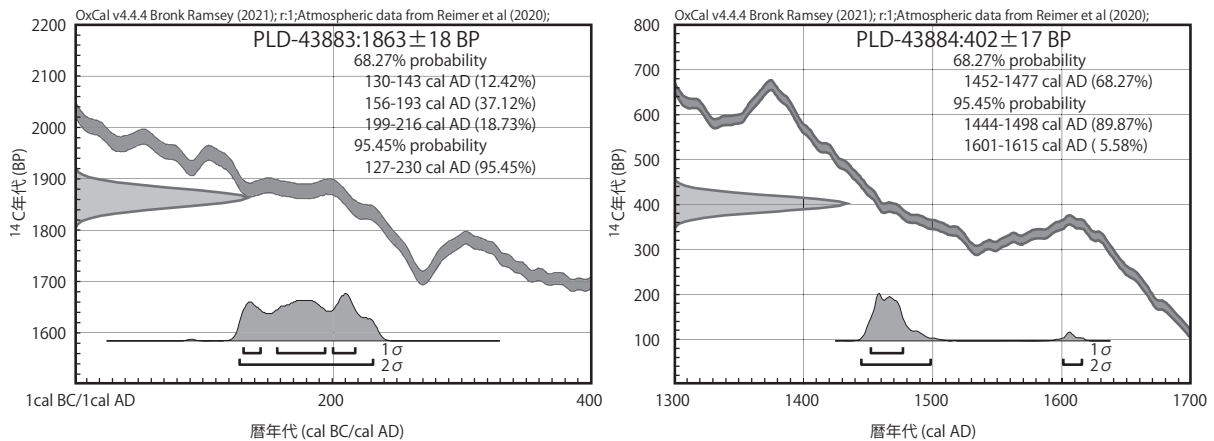
3 結果

表8に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比 ($\delta^{13}\text{C}$)、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した¹⁴C年代、第263図に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

¹⁴C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。¹⁴C年代 (yrBP) の算出には、¹⁴Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した¹⁴C年代誤差 ($\pm 1\sigma$) は、測定の

表8 放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (%)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-43883 試料No. 1	-22.95 \pm 0.17	1863 \pm 18	1865 \pm 20	130-143 cal AD (12.42%) 156-193 cal AD (37.12%) 199-216 cal AD (18.73%)	127-230 cal AD (95.45%)
PLD-43884 試料No. 2	-26.80 \pm 0.12	402 \pm 17	400 \pm 15	1452-1477 cal AD (68.27%)	1444-1498 cal AD (89.87%) 1601-1615 cal AD (5.58%)



第263図 暦年較正結果

統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が68.27%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が5568年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、及び半減期の違い (^{14}C の半減期5730 \pm 40年) を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年較正にはOxCal4.4 (較正曲線データ: IntCal20) を使用した。なお、1 σ 暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する68.27%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に2 σ 暦年代範囲は95.45%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

4 考察

測定結果 (以下の較正年代は2 σ の値) は、試料No. 1 (PLD-43883: 埋葬施設1) の ^{14}C 年代が1865 \pm 20 BP、較正年代が127-230 cal AD (95.45%) である。森岡ほか (2016) による弥生時代後期～古墳時代前期の土器型式及び時期区分と暦年代の関係、及び佐藤編 (2015) と市村 (2020) による畿内と瀬戸内の土器型式の併行関係にもとづくと、試料No. 1の較正年代は、弥生時代後期後半～弥生時代終末期に対比される。

なお、この時期の測定例として、奈良県桜井市を中心とした遺跡の弥生時代後期から古墳時代前期の試料に対して集中的に実施された放射性炭素年代測定がある (春成ほか, 2011)。この測定結果によれば、 ^{14}C 年代と土器型式の関係は、大和V-1様式が2000 ^{14}C BP台、大和VI-2様式が1970 ^{14}C BP台、VI-3様式が1960 ^{14}C BP台、庄内0式期と1式期が1920 ^{14}C BP台、庄内3式期が1880 ^{14}C BP台、布留0式期が1800～1840 ^{14}C BP台、布留1式期が1790～1715 ^{14}C BP台となる。

また、弥生時代後期～古墳時代前期を中心とした岡山県下の土器付着炭化物の放射性炭素年代測定結果では、後期Ⅲが1800¹⁴C BP台後半～1900¹⁴C BP台で2世紀後半、後期Ⅳが1800¹⁴C BP台中ごろを中心としており2世紀末を下限とする2世紀後葉と考えられている（藤尾・坂本，2020）。

上記の先行した年代測定事例にもとづくと、試料No. 1の¹⁴C年代は、弥生時代終末期頃に該当する可能性がある。

試料No. 2 (PLD-43884：土坑3)は、¹⁴C年代が400±15 BP、校正年代が1444-1498 cal AD (89.87%)及び1601-1615 cal AD (5.58%)である。児玉編（2018）の古墳時代以降の時期区分をふまえると、試料No. 2の校正年代は、室町時代前期～江戸時代前期に対比される。

引用・参考文献

- Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 51 (1), 337-360.
- 春成秀爾・小林謙一・坂本 稔・今村峯雄・尾寄大真・藤尾慎一郎・西本豊弘（2011）古墳出現期の炭素14年代測定. 国立歴史民俗博物館研究報告, 163, 133-176.
- 藤尾慎一郎・坂本 稔（2020）岡山県内出土土器の年代学的調査－弥生時代後期～古墳時代前期を中心に－. 紀要, 1, 岡山県古代吉備文化財センター, 59-69.
- 市村慎太郎（2020）中河内からみた庄内・布留式における列島各地との併行関係の整理(2). 古墳出現期土器研究, 7, 71-82.
- 児玉幸多編（2018）標準日本史年表. 66p, 吉川弘文館.
- 森岡秀人・三好 玄・田中元浩（2016）総括. 古代学研究会編「集落動態からみた弥生時代から古墳時代への社会変化」: 335-398, 六一書房.
- 中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の¹⁴C年代編集委員会編「日本先史時代の¹⁴C年代」: 3-20, 日本第四紀学会.
- Reimer, P.J., Austin, W.E.N., Bard, E., Bayliss, A., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Butzin, M., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kromer, B., Manning, S.W., Muscheler, R., Palmer, J.G., Pearson, C., van der Plicht, J., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Turney, C.S.M., Wacker, L., Adolphi, F., Büntgen, U., Capano, M., Fahrni, S.M., Fogtmann-Schulz, A., Friedrich, R., Köhler, P., Kudsk, S., Miyake, F., Olsen, J., Reinig, F., Sakamoto, M., Sookdeo, A. and Talamo, S. (2020) The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal kBP). *Radiocarbon*, 62 (4), 725-757, doi:10.1017/RDC.2020.41. <https://doi.org/10.1017/RDC.2020.41> (cited 12 August 2020)
- 佐藤由紀男編（2015）考古調査ハンドブック12 弥生土器. 477p, ニューサイエンス社.

第3節 和田谷遺跡・城殿山遺跡出土遺物の胎土分析及び赤色顔料分析

岡山理科大学 白石 純

1 はじめに

和田谷遺跡から出土した製塩土器、須恵器、土師器の自然科学的な胎土分析を行い産地推定及び胎土的特徴について検討した。また、城殿山遺跡の弥生時代後期末の埋葬主体部より出土した赤色顔料が朱かベンガラか調べた。

2 分析方法・試料

分析は蛍光X線分析法で分析試料の元素濃度を測定した。

蛍光X線分析法は、胎土の元素濃度を測定し、その元素濃度から分析した製塩土器、須恵器、土師器の差異について検討する方法である。測定した元素は、 SiO_2 、 TiO_2 、 Al_2O_3 、 Fe_2O_3 、 MnO 、 MgO 、 CaO 、 Na_2O 、 K_2O 、 P_2O_5 、 Rb_2O 、 SrO 、 ZrO_2 の13元素である。

なお測定装置・条件・試料は以下の通りである。

測定装置：エレメントアナライザー JSX-3203EV(日本電子)を使用した。

測定条件：X線照射径3mm、電流1.00mA、電圧30kV、測定時間300秒、測定室は真空の条件で測定した。

定量値は、ファンダメンタル・パラメーター法により算出した。毎回の定量値の再現性があることを確認するため、地質調査所の標準試料JA-1(安山岩)、JG-1a(花崗岩)、JB-1a(玄武岩)の3試料の定量値を求めて、装置の安定性を確認している。

測定試料：分析試料は、試料表面の汚れを除去後、乾燥した試料を乳鉢(タンゲステンカーバイト製)で粉末(100~200メッシュ)にしたものを加圧成形機で約 10^4 の圧力をかけ、コイン状に成形したものを測定試料とした。したがって、一部破壊分析である。

分析結果の比較(差異)は、有意な差がみられる元素を横軸と縦軸にとり、散布図を作成し、胎土の違いについて検討した。

分析試料は、表9に示している和田谷遺跡から出土した製塩土器・土師器碗4点、須恵器2点、土師器2点の合計8点である。また城殿山遺跡出土赤色顔料は表10に示すように5か所から出土した土壌試料である。

3 分析結果

・和田谷遺跡製塩土器の分析

第264図 K_2O - CaO 散布図で検討した。

この散布図より和田谷遺跡から出土した4点の製塩土器・土師器碗は、まとめると胎土的にほぼ同じであった。また、前田遺跡及び児島半島部出土の製塩土器とも胎土が同じであった。

・和田谷遺跡須恵器、土師器の分析

第265図 K_2O - CaO 散布図、第266図 Rb_2O - SrO 散布図で検討した。

その結果、須恵器、土師器とも胎土的に一つにまとまる。また、生産地である浅口市上竹西の坊遺跡との比較では、一致しなかった。

・城殿山遺跡の赤色顔料について

表10に示しているように赤色顔料の分析ではすべての土壌サンプルから酸化水銀 (HgO) が検出された。特に試料番号1 (埋葬施設1 上部の朱) には、5.63%含まれていた。その他の試料にも平均1%ほど含まれていた。また、赤色顔料の使用例としては、朱とベンガラの両方を使い分けている事例がみられるが、城殿山遺跡の場合、酸化鉄 (Fe₂O₃) は3%未満と少なく、この程度の濃度であれば岩石由来の含有量であることから、今回の赤色顔料はすべて水銀朱と推定される。

4 まとめ

以上の分析結果をまとめると、以下のことが推定される。

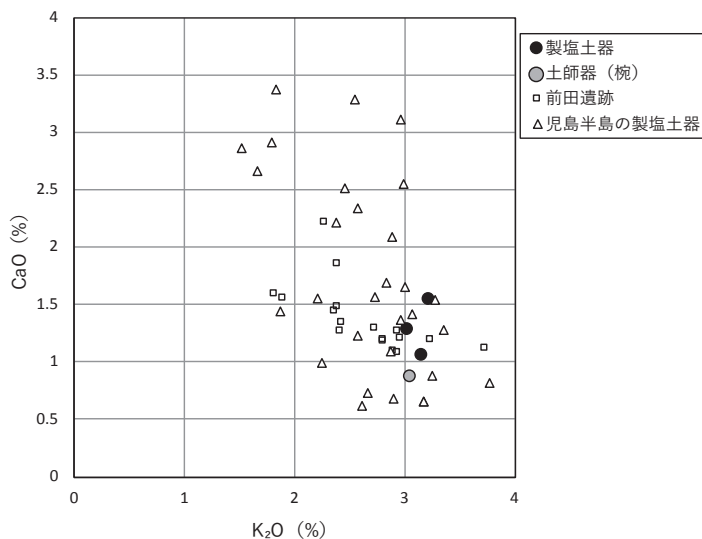
(1) 和田谷遺跡出土の製塩土器等の分析では、4点の分析点数であったが一つにまとまり、兎島半島部の製塩土器と類似していた。同じく須恵器、土師器の分析では、須恵器か土師器の種類の違いで胎土に明確な違いはみられなかった(分析点数を増やせばこの傾向は変わるかもしれないが)。また須恵器の生産地推定では、浅口市上竹西の坊遺跡と比較したが、上竹西の坊とは胎土が異なっていた。

表9 和田谷遺跡出土土器の胎土分析結果 (%)

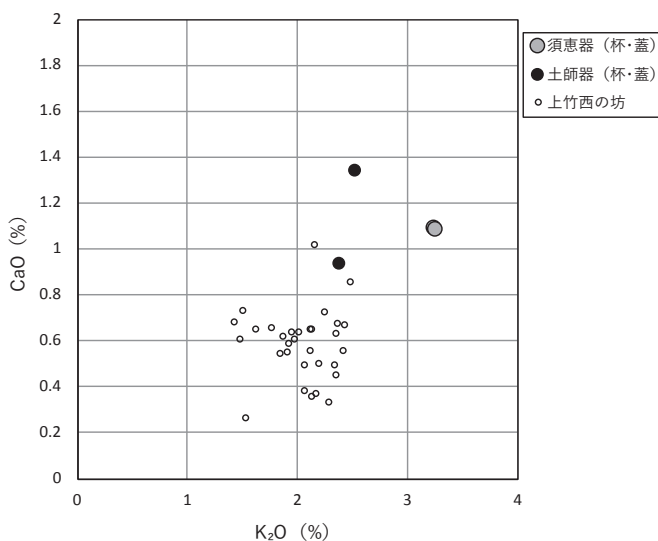
試料番号	出土遺構	掲載番号	器種	SiO ₂	TiO ₂	Al ₂ O ₃	Fe ₂ O ₃	MnO	MgO	CaO	Na ₂ O	K ₂ O	P ₂ O ₅	Rb ₂ O	SrO	ZrO ₂
1	段状遺構3	—	製塩土器	61.82	0.94	22.22	7.24	0.03	0.00	1.53	0.68	3.22	2.19	0.0337	0.0464	0.0466
2	竪穴遺構1	—	製塩土器	61.24	1.15	20.04	10.55	0.12	0.00	1.05	0.56	3.16	2.00	0.0340	0.0317	0.0634
3	竪穴遺構1	—	土師器 (粗製碗)	61.61	1.15	22.05	9.72	0.11	0.00	0.87	0.33	3.05	0.98	0.0405	0.0280	0.0480
4	段状遺構3 土器溜まり	—	製塩土器	61.16	1.18	23.28	7.47	0.03	0.00	1.28	0.81	3.04	1.62	0.0342	0.0374	0.0489
5	包含層	—	須恵器 (杯蓋)	62.40	0.77	24.06	7.48	0.02	0.04	1.10	0.52	3.23	0.25	0.0396	0.0398	0.0488
6	包含層	407	須恵器 (杯身)	62.28	0.77	23.99	7.55	0.02	0.00	1.09	0.53	3.25	0.40	0.0433	0.0380	0.0515
7	竪穴遺構1	312	土師器 (杯蓋)	64.06	0.99	21.94	7.48	0.09	0.00	0.93	0.75	2.38	1.26	0.0287	0.0333	0.0523
8	包含層	429	土師器 (杯身)	58.49	1.41	17.72	15.80	0.03	0.50	1.34	0.84	2.53	1.19	0.0314	0.0423	0.0787

表10 城殿山遺跡出土赤色顔料が含まれる土壌の分析 (%)

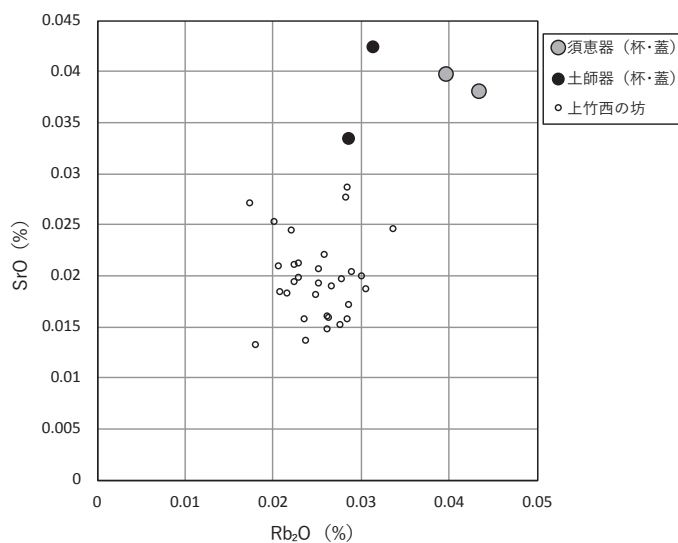
試料番号	遺構名	SiO ₂	TiO ₂	Al ₂ O ₃	Fe ₂ O ₃	MnO	CaO	Na ₂ O	K ₂ O	P ₂ O ₅	HgO	Rb ₂ O	SrO	ZrO ₂
1	埋葬施設1	65.99	0.04	14.98	1.16	0.01	0.65	1.63	8.66	0.00	5.63	0.0907	0.0193	0.0050
2	埋葬施設1	71.47	0.10	16.38	2.02	0.02	0.60	1.30	6.70	0.10	0.93	0.0582	0.0070	0.0096
3	埋葬施設4	69.12	0.13	18.91	2.65	0.02	0.81	1.77	5.99	0.00	0.32	0.0562	0.0076	0.0156
4	埋葬施設5	70.68	0.08	16.73	2.23	0.01	0.74	1.96	6.37	0.07	0.77	0.0578	0.0047	0.0176
5	埋葬施設3	69.78	0.16	18.01	2.31	0.01	0.46	1.55	6.57	0.18	0.63	0.0612	0.0054	0.0137



第264図 和田谷遺跡と児島周辺の製塩土器の比較



第265図 和田谷遺跡（須恵器、土師器）と上竹西の坊遺跡との比較



第266図 和田谷遺跡（須恵器、土師器）と上竹西の坊遺跡との比較

第4節 和田谷遺跡出土炭化材の放射性炭素年代測定

株式会社パレオ・ラボ

1 はじめに

岡山県浅口市の和田谷遺跡から出土した試料について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。

2 試料と方法

試料は、土坑2から出土した炭化材サンプル3（PLD-33262）である。樹種はコナラ属アカガシ亜属で、最終形成年輪が残存していた。調査所見による遺構の推定時期は古墳時代後期後半である。

測定試料の情報、調製データは表11のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS：NEC製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、¹⁴C年代、暦年代を算出した。

表11 測定試料及び処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-33262	遺構：土坑2 調査区：3区 試料No.サンプル3	種類：炭化材（コナラ属アカガシ亜属） 試料の性状：最終形成年輪 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）

3 結果

表12に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（ $\delta^{13}\text{C}$ ）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した¹⁴C年代、暦年較正結果を、第267図に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

¹⁴C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。¹⁴C年代（yrBP）の算出には、¹⁴Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した¹⁴C年代誤差（ $\pm 1\sigma$ ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の¹⁴C年代がその¹⁴C年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示す。

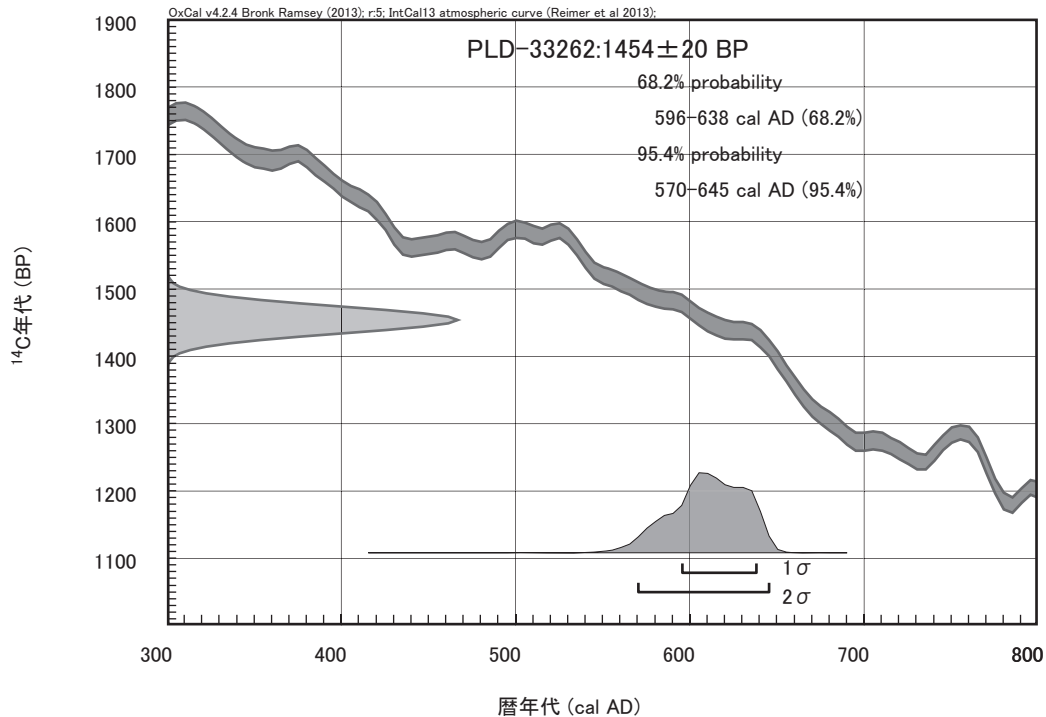
なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5568年として算出された¹⁴C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、及び半減期の違い（¹⁴Cの半減期5730 \pm 40年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

¹⁴C年代の暦年較正にはOxCal4.2（較正曲線データ：IntCal13）を使用した。なお、 1σ 暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された¹⁴C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2σ 暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は¹⁴C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

表12 放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-33262 試料No.サンプル3	-27.47 \pm 0.18	1454 \pm 20	1455 \pm 20	596-638 cal AD (68.2%)	570-645 cal AD (95.4%)



第267図 暦年較正結果

4 考察

土坑2から出土した炭化材サンプル3 (PLD-33262) は、2 σ 暦年代範囲で570-645 cal AD (95.4%)であった。これは6世紀後半～7世紀中頃で、古墳時代後期～飛鳥時代に相当する。したがって、遺構の推定時期である古墳時代後期後半に対して整合的である。

木材は、最終形成年輪部分を測定すると枯死もしくは伐採年代が得られるが、内側の年輪を測定すると内側であるほど古い年代が得られる (古木効果)。今回の分析試料は最終形成年輪が残存しており、得られた最終形成年輪の年代は、木材が伐採もしくは枯死した年代を示していると考えられる。

参考文献

- Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 51 (1), 337-360.
- 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の ^{14}C 年代編集委員会編「日本先史時代の ^{14}C 年代」: 3-20, 日本第四紀学会.
- Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hafidason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J. (2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0-50,000 Years cal BP. *Radiocarbon*, 55 (4), 1869-1887.

第5節 和田谷遺跡出土炭化材の樹種同定

株式会社パレオ・ラボ

1 はじめに

岡山県浅口市鴨方町六条院西に位置する和田谷遺跡から出土した炭化材5点について樹種同定を行った。なお、試料のうち1点については放射性炭素年代測定も行われている（第6章第4節参照）。

2 試料と方法

試料は3区の北西隅で検出された土坑2から出土した炭化材5点である。炭化材の上から完形の須恵器が出土しており、炭化材と密接な関係があったと考えられている。遺構の時期は古墳時代後期後半と推測されており、年代測定でも整合的な結果が得られた。

樹種同定に先立ち、肉眼観察と実体顕微鏡観察による形状の確認と、残存年輪数及び残存径の計測を行った。その後、カミソリまたは手で3断面（横断面・接線断面・放射断面）を割り出し、直径1cmの真鍮製試料台に試料を両面テープで固定した。その後、イオンスパッタで金コーティングを施し、走査型電子顕微鏡（KEYENCE社製 VE-9800）を用いて樹種の同定と写真撮影を行った。

3 結果

樹種同定の結果、5点ともコナラ属アカガシ亜属（以下、アカガシ亜属）であった。結果の一覧を表13に示す。以下に、同定根拠となった木材組織の特徴を記載し、走査型電子顕微鏡写真を写真17に示す。

コナラ属アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* ブナ科 写真17 1a-1c（試料番号1）、2a-2c（試料番号2）、3a-3c（試料番号3）、4a-4c（試料番号4）、5a-5c（試料番号5）

円形でやや大型の道管が、単独で放射方向に配列する放射孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は同性で、単列と広放射組織がある。

アカガシ亜属は主に暖帯に分布する常緑高木で、アカガシやシラカシ、ツクバネガシ、アラカシなど8種がある。イチイガシ以外は木材組織による識別が困難なため、イチイガシを除いたアカガシ亜属とする。材は、きわめて堅硬及び強靱で、水湿に強い。

表13 樹種同定結果一覧

試料番号	出土地区	出土遺構	名称	樹種	形状	年代測定番号
1	3区	土坑2	サンプル1	コナラ属アカガシ亜属	不明	-
2			サンプル2	コナラ属アカガシ亜属	不明	-
3			サンプル3	コナラ属アカガシ亜属	丸木（直径4cm）	PLD-33262
4			サンプル4	コナラ属アカガシ亜属	不明	-
5			サンプル5	コナラ属アカガシ亜属	不明	-

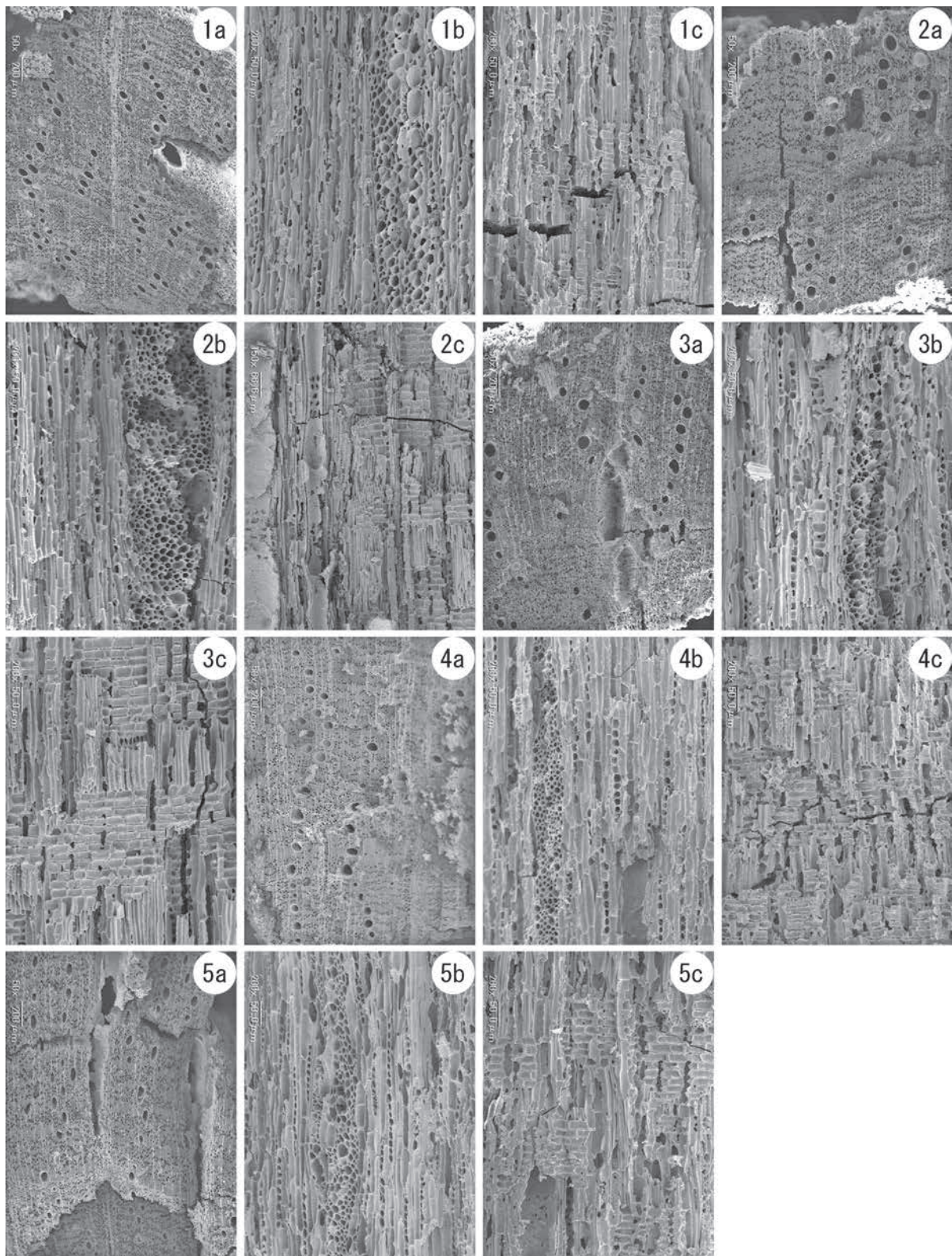
4 考察

土坑2から出土した炭化材は、5点ともアカガシ亜属であった。試料番号1、2、4、5は形状不明だが、試料番号3は直径4cmの丸木であった。試料の用途は不明であるが、アカガシ亜属の材は非常に重硬であり、山陽地方では古墳時代以降、農耕土木具や器具、建築材、土木材、燃料材など多くの用途に利用されている（伊東・山田編，2012）。

引用文献

平井信二 (1996) 木の大本科. 394p, 朝倉書店.

伊東隆夫・山田昌久編 (2012) 木の考古学—出土木製品用材データベース—. 449p, 海青社.



1a-1c. コナラ属アカガシ亜属 (試料番号1)、2a-2c. コナラ属アカガシ亜属 (試料番号2)、3a-3c. コナラ属アカガシ亜属 (試料番号3)、4a-4c. コナラ属アカガシ亜属 (試料番号4)、5a-5c. コナラ属アカガシ亜属 (試料番号5)

a: 横断面、b: 接線断面、c: 放射断面

写真17 和田谷遺跡出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真

第6節 和田谷遺跡出土鍛冶関連遺物の分析調査

日鉄テクノロジー株式会社 八幡事業所
鈴木 瑞穂

1 いきさつ

和田谷遺跡は岡山県浅口市鴨方町六条院西に所在する。古墳時代後期の段状遺構3からは鉄滓が出土している。また奈良時代の鍛冶炉4基（鍛冶炉1～4）、奈良時代から平安時代の鍛冶炉1基（鍛冶炉5）が検出されている。そこで遺跡内での各時期の鉄～鉄器生産の実態を検討するため、出土した鍛冶関連遺物を調査した。

2 調査方法

2-1. 供試材

表14の出土鍛冶関連遺物7点を調査した。

2-2. 調査項目

(1) 外観観察

遺物の外観の特徴など、調査前の所見を記載した。

(2) 顕微鏡組織

外観の特徴から断面を観察する位置を決めて試料を切り出し、樹脂に封入後エメリー研磨紙の#150、#320、#600、#1000、及びダイヤモンド粒子の3 μ mと1 μ mで順を追って研磨した。金属反射顕微鏡を用い、特徴的・代表的な視野を選択して写真を撮影した。

(3) ビッカース断面硬度

ビッカース断面硬度計（Vickers Hardness Tester）を用いて硬度を測定した。試料は顕微鏡用を併用し、荷重は50gfで測定した。ビッカース硬さは測定箇所を圧子（136°の頂角をもったダイヤモンド）を押し込んだ時の荷重と、それにより残された窪み（圧痕）の対角線長さから求めた表面積から算出される。

(4) EPMA調査

EPMA（日本電子製（株）JXA-8230）を用いて、鉄滓の鉍物組成を調査した。測定条件は以下の通りである。加速電圧：15kV、照射電流（分析電流）：2.00E-8A。

(5) 化学組成分析

出土鉄滓の定量分析を実施した。

全鉄分（Total Fe）、金属鉄（Metallic Fe）、酸化第一鉄（FeO）：容量法。

炭素（C）：燃焼容量法、硫黄（S）：燃焼赤外吸収法。

二酸化硅素（SiO₂）、酸化アルミニウム（Al₂O₃）、酸化カルシウム（CaO）、酸化マグネシウム（MgO）、酸化カリウム（K₂O）、酸化ナトリウム（Na₂O）、酸化マンガン（MnO）、二酸化チタン（TiO₂）、酸化クロム（Cr₂O₃）、五酸化磷（P₂O₅）、バナジウム（V）、銅（Cu）、二酸化ジルコニウム（ZrO₂）、砒素（As）：ICP（Inductively Coupled Plasma Emission Spectrometer）：誘導結合プラズマ発光分光分析法。

3 調査結果

WDT-1：製錬滓（炉内滓）

(1) 外観観察：やや厚手の鉄滓破片（138.1g）である。上下面は本来の表面で、側面は全面破面と推

測される。滓の色調は暗灰色で、弱い着磁性がある。内部には中小の気孔が散在するが緻密である。また側面片側から下面にかけて、内部に多く石英を含む黒色ガラス質滓や粘土が付着する。炉床粘土とその溶融物と推測される。

(2) 顕微鏡組織：写真18①～③に示す。①上側の明灰色部は滓部で、②及び③の右側はその拡大である。滓中の微細な白色樹枝状・不定形結晶はウスタイト (Wustite: FeO)、マグネタイト (Magnetite: FeO·Fe₂O₃) の混晶と推測される。さらに淡灰色柱状結晶ファヤライト (Fayalite: 2FeO·SiO₂) が晶出する。①の下側の暗灰色部は被熱した炉床粘土またはガラス質滓で、③の左側は被熱した石英 (Quartz: SiO₂) 粒である。これらは炉床粘土の収縮に伴う変形の防止や耐火性を高めるために混和された、真砂 (花崗岩の風化砂) と推定される。

(3) ビッカース断面硬度：写真18②の白色樹枝状・不定形結晶の硬度を測定した。硬度値は501～529Hvであった。マグネタイトの文献硬度値 (約500～600Hv) の範囲内であり、マグネタイトの可能性が高いと考えられる。また淡灰色柱状結晶の硬度値は672Hvであった。ファヤライトの文献硬度値の範囲内で、ファヤライトと推定される⁽¹⁾。

(4) 化学組成分析：表15に示す。全鉄分 (Total Fe) 39.35%に対して、金属鉄 (Metallic Fe) は0.05%、酸化第1鉄 (FeO) が46.25%、酸化第2鉄 (Fe₂O₃) 4.79%の割合であった。造滓成分 (SiO₂+Al₂O₃+CaO+MgO+K₂O+Na₂O) は44.53%で、このうち塩基性成分 (CaO+MgO) が8.49%と高値であった。酸化マンガン (MnO) も0.57%とやや高めであった。銅 (Cu) は0.01%であった。一方、製鉄原料の砂鉄 (含チタン鉄鉱) 起源の二酸化チタン (TiO₂) は0.37%、バナジウム (V) <0.01%と低値であった。

当鉄滓は塩基性成分 (CaO+MgO)、特にライム (CaO) の割合が高めであった。この特徴から、当鉄滓は鉄石系の製錬滓の可能性が考えられる。また側面から下面にかけて炉床粘土 (またはその溶融物：ガラス質滓) が付着することから、炉床に接する位置で生じた (炉内滓) と推測される。

WDT-2：椀形鍛冶滓

(1) 外観観察：やや扁平な椀形鍛冶滓の破片 (50.3g) である。上下面と側面の一部が本来の表面と推定される。滓の色調は灰色で、表面はやや風化気味である。また着磁性はごく弱く、やや軽い質感である。下面には淡灰褐色で粘土質の鍛冶炉床土が付着する。鍛冶炉床土中には真砂がかなり含まれている。

(2) 顕微鏡組織：写真18④～⑥に示す。滓中には白色粒状結晶ウスタイト、淡灰色柱状結晶ファヤライトが晶出する。

(3) ビッカース断面硬度：写真18⑤の白色粒状結晶の硬度を測定した。硬度値は486Hvであった。ウスタイトの文献硬度値 (約450～500Hv) の範囲内で、ウスタイトと推定される。また淡灰色柱状結晶の硬度値は639Hvで、ファヤライトと推定される。

(4) 化学組成分析：表15に示す。全鉄分 (Total Fe) 34.11%に対して、金属鉄 (Metallic Fe) は0.04%、酸化第1鉄 (FeO) が34.42%、酸化第2鉄 (Fe₂O₃) 10.46%の割合であった。造滓成分 (SiO₂+Al₂O₃+CaO+MgO+K₂O+Na₂O) の割合は47.80%と高めで、このうち塩基性成分 (CaO+MgO) は3.27%とやや高めであった。また酸化マンガン (MnO) は0.09%と低値で、銅 (Cu) は0.03%と高めであった。製鉄原料の砂鉄 (含チタン鉄鉱) 起源の二酸化チタン (TiO₂) は0.25%、バナジウム (V) が<0.01%と低値であった。

当鉄滓は製錬滓 (WDT-1) より塩基性成分 (CaO+MgO) の割合が低いが、その影響が確認された。この特徴から、鉄鉱石 (塊鉄) が始発原料の鍛冶滓の可能性が高いと考えられる。

WDT-3：椀形鍛冶滓

(1) 外観観察：やや大形で偏平な椀形鍛冶滓 (249.9g) と推定される。上下面と側面1面は本来の表面である。上面表層には石英を含む黒色ガラス質滓が部分的に確認される。羽口先端の溶融物と考えられる。滓の色調は灰色で、弱影响着磁性がある。下面には淡灰褐色で粘土質の鍛冶炉床土が付着する。また鍛冶炉床土中には、真砂や植物質の混和物が含まれる。

(2) 顕微鏡組織：写真19①～③に示す。滓中の白色多角形結晶はマグネタイトと推測される。さらに淡灰色柱状結晶ファヤライトが晶出する。また①の右下の暗灰色部はガラス質滓で、③の下側はその拡大である。ガラス滓中には、熱影響を受けた石英粒が点在する。これは炉材粘土に混和された砂粒と推測される。

(3) ビッカース断面硬度：写真19②の白色多角形結晶の硬度を測定した。硬度値は574～628Hvであった。マグネタイトの文献硬度値と比べるとやや高めであった。アルミナ (Al_2O_3) など、硬度を上げる元素を少量固溶している可能性が考えられる。また淡灰色柱状結晶の硬度値は650Hvで、ファヤライトと推定される。

(4) 化学組成分析：表15に示す。全鉄分 (Total Fe) の割合は25.27%と低めであった。このうち金属鉄 (Metallic Fe) は0.06%、酸化第1鉄 (FeO) が19.88%、酸化第2鉄 (Fe_2O_3) 13.95%であった。造滓成分 ($\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO} + \text{K}_2\text{O} + \text{Na}_2\text{O}$) の割合は61.00%と高いが、粘土溶融物 (SiO_2) 主体であった。塩基性成分 ($\text{CaO} + \text{MgO}$) の割合は2.74%であった。また酸化マンガン (MnO) は0.18%、銅 (Cu) は<0.01%であった。製鉄原料の砂鉄 (含チタン鉄鉱) 起源の二酸化チタン (TiO_2) は0.32%、バナジウム (V) が<0.01%と低値であった。

以上のように当鉄滓も塩基性成分 ($\text{CaO} + \text{MgO}$) を3%弱含むことから、椀形鍛冶滓 (WDT-2) と同じく、鉄鉱石 (塊鉄) が始発原料の鍛冶滓であった可能性が考えられる。

WDT-4：鍛冶滓

(1) 外観観察：やや厚手の鍛冶滓 (180.8g) である。表面には黄褐色の土砂が厚く付着するが、まとまった鉄部はなく金属探知機反応もみられない。滓の地の色調は黒灰色で着磁性がある。また表面の気孔は少なく重量感がある。

(2) 顕微鏡組織：写真19④～⑥に示す。滓中には発達した白色樹枝状結晶ウスタイト、淡灰色柱状結晶ファヤライトが晶出する。また滓中の微細な明白色粒は金属鉄、不定形の明灰～青灰色部は銹化鉄である。

(3) ビッカース断面硬度：写真19⑤の白色樹枝状の硬度を測定した。硬度値は480、488Hvであった。ウスタイトと推定される。また淡灰色柱状結晶の硬度値は672Hvであった。ファヤライトと推定される。

(4) 化学組成分析：表15に示す。全鉄分 (Total Fe) の割合は50.53%と高めであった。このうち金属鉄 (Metallic Fe) は0.13%、酸化第1鉄 (FeO) が50.12%、酸化第2鉄 (Fe_2O_3) 16.36%であった。造滓成分 ($\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO} + \text{K}_2\text{O} + \text{Na}_2\text{O}$) 27.87%と比較的低めで、このうち塩基性成分 ($\text{CaO} + \text{MgO}$) は1.51%であった。酸化マンガン (MnO) は0.07%、銅 (Cu) も0.01%と低値であった。また製鉄原料の砂鉄 (含チタン鉄鉱) 起源の二酸化チタン (TiO_2) は0.17%、バナジウム (V) が<0.01%と低値であった。

当鉄滓は鉄酸化物 (FeO) の割合が高く、製鉄原料起源の脈石成分〔鉄鉱石 (塊鉄) : CaO 、 MgO 、 MnO 、砂鉄 : TiO_2 、V〕はいずれも低値であった。鉄材を熱間で鍛打加工した時の吹き減り (酸化に伴う損失) による鍛錬鍛冶滓と推定される。

WDT-5：椀形鍛冶滓

(1) 外観観察：やや扁平な椀形鍛冶滓 (84.8g) である。上下面は本来の表面で、側面はほぼ破面と推測される。また軽い質感で着磁性がなく、炉材粘土の溶融物主体の滓と推定される。下面には淡灰褐色で粘土質の鍛冶炉床土が付着する。鍛冶炉床土中には真砂がかなり含まれている。

(2) 顕微鏡組織：写真20①～③に示す。①上側の明灰色部は滓部で、②③はその拡大である。微細な淡茶褐色結晶はウルボスピネル (Ulvöspinel: $2\text{FeO}\cdot\text{TiO}_2$) と推定される。さらに発達した白色樹枝状結晶ウスタイト、淡灰色柱状結晶ファヤライトが晶出する。砂鉄 (含チタン鉄鉱) を始発原料とする精錬鍛冶滓に最もよく見られる晶癖である。一方、①下側の暗灰色は鍛冶炉床土部分である。内面は強い熱影響を受けてガラス質滓化している。

(3) ビッカース断面硬度：写真20③の白色樹枝状結晶 (内部に微細な淡茶褐色結晶を含む) 硬度を測定した。硬度値は546、565Hvであった。内部に微細なウルボスピネル結晶が点在するため、その影響を受けウスタイトの文献硬度値よりも高い値となっている。

(4) 化学組成分析：表15に示す。全鉄分 (Total Fe) の割合は13.53%と低値であった。このうち金属鉄 (Metallic Fe) は0.08%、酸化第1鉄 (FeO) が10.48%、酸化第2鉄 (Fe_2O_3) 7.58%であった。造滓成分 ($\text{SiO}_2+\text{Al}_2\text{O}_3+\text{CaO}+\text{MgO}+\text{K}_2\text{O}+\text{Na}_2\text{O}$) の割合は75.62%と非常に高いが、塩基性成分 ($\text{CaO}+\text{MgO}$) は0.92%と低値で、粘土溶融物 (SiO_2) 主体であった。また酸化マンガン (MnO) は0.08%、銅 (Cu) が<0.01%と低値であった。製鉄原料の砂鉄 (含チタン鉄鉱) 起源の二酸化チタン (TiO_2) は0.55%、バナジウム (V) が0.02%であった。当遺跡出土鉄滓のなかでは高めであった。

当鉄滓は砂鉄が始発原料の鍛冶滓と判断される。滓中には微細なウルボスピネル (Ulvöspinel: $2\text{FeO}\cdot\text{TiO}_2$) が確認された。これは製鉄原料の砂鉄 (含チタン鉄鉱) の影響が残る鉄材 (未分離の砂鉄製錬滓を含む鉄塊) を処理したことを示すものといえる。

WDT-6：椀形鍛冶滓

(1) 外観観察：側面の一部が欠けた椀形鍛冶滓 (152.8g) と推定される。表面には黄褐色の土砂が厚く付着するが、まとまった鉄部はなく金属探知機反応もみられない。滓の地の色調は黒灰色で着磁性がある。微細な気孔が点在するが、比較的重量感がある滓である。

(2) 顕微鏡組織：写真20④～⑥に示す。滓中には発達した白色樹枝状結晶ウスタイト、淡灰色柱状結晶ファヤライトが晶出する。また滓中の微細な明白色粒は金属鉄、不定形の明灰～青灰色部は錆化鉄である。

(3) ビッカース断面硬度：写真20⑥の白色樹枝状結晶の硬度を測定した。硬度値は461、469Hvであった。ウスタイトと推定される。また淡灰色柱状結晶の硬度値は618Hvであった。ファヤライトと推定される。

(4) 化学組成分析：表15に示す。全鉄分 (Total Fe) 41.07%に対して、金属鉄 (Metallic Fe) は0.09%、酸化第1鉄 (FeO) が30.76%、酸化第2鉄 (Fe_2O_3) 24.41%の割合であった。造滓成分 ($\text{SiO}_2+\text{Al}_2\text{O}_3+\text{CaO}+\text{MgO}+\text{K}_2\text{O}+\text{Na}_2\text{O}$) は36.57%で、このうち塩基性成分 ($\text{CaO}+\text{MgO}$) は2.32%であった。酸化マンガン (MnO) は0.12%、銅 (Cu) は<0.01%であった。また製鉄原料の砂鉄 (含チタン鉄鉱) 起源の二酸化チタン (TiO_2) は0.19%、バナジウム (V) が<0.01%と低値であった。

当鉄滓は鉄酸化物の割合がやや高めであるが、塩基性成分 ($\text{CaO}+\text{MgO}$) を2%強含むことから、椀形鍛冶滓 (WDT-2、3) と同じく、鉄鉱石 (塊鉄) が始発原料の鍛冶滓であった可能性が考えられる。

WDT-7: 微細遺物

(1) 外観観察: 椀形鍛冶滓 (WDT-3) と同じく、鍛冶炉3に近接したピット1から回収された微細遺物である。土砂に混じって鍛造剥片や微細な鉄滓破片、砂鉄粒子が確認される。

(2) 顕微鏡組織: 写真21①~③に示す。①の微細な灰褐色粒は砂鉄で、②はその拡大である。砂鉄粒子は複数確認されたが、熱影響を受けたものはみられない。粒径も比較的小さいものが多く遺跡内の土壤中に少量存在する含チタン鉄鉱の可能性が考えられる。また③は微細な鉄滓破片の拡大である。左側の鉄滓中には白色多角形結晶マグネタイト、右側の鉄滓中には、白色粒状結晶ウスタイトが晶出する。ともに鉄酸化物主体の滓であり、熱間での鍛打加工に伴う鍛錬鍛冶滓と推定される。さらに、①の微細な薄膜状の明白色部は鍛造剥片⁽²⁾である。

(3) EPMA調査: 写真21④に砂鉄粒子の反射電子像 (COMP:写真21②の拡大) を示す。特性X線像をみると、素地部分は鉄 (Fe)、チタン (Ti) に強い反応がある。定量分析値は55.4%FeO-36.4%TiO₂-1.7%MgO (分析点1) であった。チタン鉄鉱 (Ilmenite: FeO·TiO₂) である。また砂鉄粒内の微細な暗灰色結晶の定量分析値は51.0%CaO-46.6%P₂O₅-1.3%F (分析点2) であった。燐灰石 [Apatite: Ca₅(PO₄)₃F] である。

さらに微細な鉄滓破片の組成を調査した。写真21⑤に砂鉄粒子の反射電子像 (COMP:写真21③の拡大) を示す。左側の鉄滓破片中の多角形結晶の定量分析値は87.7%FeO (分析点3) であった。マグネタイト (Magnetite: FeO·Fe₂O₃) と推定される。素地部分の定量分析値は58.0%SiO₂-5.0%Al₂O₃-3.5%CaO-9.8%K₂O-4.0%Na₂O-18.4%FeO (分析点5) であった。非晶質珪酸塩である。また右側の滓中の白色粒状結晶の定量分析値は94.3%FeO (分析点4) であった。ウスタイト (Wustite: FeO) と推定される。

当試料中には、熱間での鍛打加工に伴う鍛造剥片と、微細な鉄滓破片が多数含まれていた。鉄滓も鉄酸化物主体で、鉄材の吹き減り (酸化に伴う損失) によるものと判断される。

4 まとめ

和田谷遺跡から出土した鍛冶関連遺物7点を調査した結果、当遺跡では、鉄鉱石 (塊鉄) を製錬した鍛冶原料 (鉄塊) と砂鉄を製錬した鍛冶原料 (鉄塊) が利用されていたことが明らかになった。詳細は以下のとおりである。

(1) 古墳時代後期の段状遺構3から出土した、鉄滓1点 (WDT-1) は、塩基性成分、特にライム (CaO) の含有割合が高い。これはスカルン⁽³⁾ 鉱床で採取された鉄鉱石 (塊鉄) を製錬した反応副生物 (鉄系系製錬滓) の特徴で、岡山県下の古墳時代後期~古代の製鉄遺跡から出土した鉄滓にも同じ特徴が確認されている^(4・5)。こうした鉄鉱石 (塊鉄) を製錬した反応副生物 (炉内滓) と考えられる。

(2) 奈良時代の鍛冶炉1から出土した鉄滓 (WDT-2) は、製錬滓 (WDT-1) より塩基性成分 (CaO+MgO) の割合が低いが、その影響が確認された。この特徴から、鉄鉱石 (塊鉄) が始発原料の鍛冶滓の可能性が高いと考えられる。さらに同じ6区から出土した鉄滓2点 (WDT-3、4)、8区包含層から出土した鉄滓 (WDT-6) も、後述する砂鉄系の鍛冶滓と比較すると、塩基成分 (CaO+MgO) の割合が高く、鉄鉱石 (塊鉄) が始発原料の鍛冶滓の可能性が考えられる。また、鍛冶炉3に近接するピット1から回収された、微細遺物中には多量の鍛造剥片や熱間での吹き減り (酸化に伴う損失) による鍛錬鍛冶滓が確認された。炉跡周辺で鉄材を鍛打加工して鉄器を製作したことを示すものといえる。なお、微細遺物中には砂鉄 (含チタン鉄鉱) も含まれるが、熱影響等の確認されるものはなく、土壤中に少量含まれる自然物と推測される。

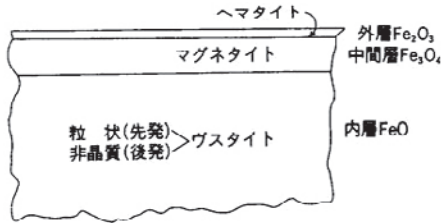
(3) 奈良時代～平安時代の鍛冶炉5から出土した鉄滓(WDT-5)は、滓中に微細なウルボスピネル(Ulvöspinel: $2\text{FeO}\cdot\text{TiO}_2$)が確認された。これは製鉄原料の砂鉄の影響が残る鉄材(未分離の砂鉄製鍊滓を含む鉄塊)を処理したことを示すもので、砂鉄(含チタン鉄鉱)は始発原料であったことが明らかとなった。

註

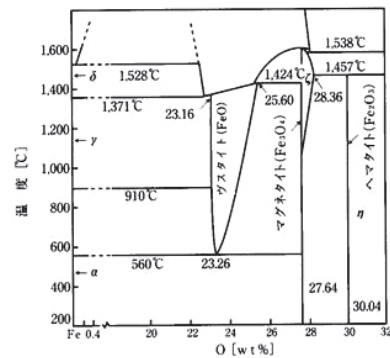
(1) 日刊工業新聞社1968『焼結鉱組織写真および識別法』

ウスタイトは約450～500Hv、マグネタイトは約500～600Hv、ファイヤライトは約600～700Hvの範囲が提示されている。

(2) 鍛造剥片は、熱間で鍛打したときに剥離・飛散した、鉄素材の表面の鉄酸化膜を指す。俗に鉄肌(金肌)やスケールとも呼ばれる。鍛造剥片の酸化膜相は、外層は微厚のヘマタイト(Hematite: Fe_2O_3)、中間層マグネタイト(Magnetite: Fe_3O_4)、内層ウスタイト(Wustite: FeO)の3層から構成される。



第268図 鍛造剥片3層分離型模式図



第269図 Fe-O系平衡状態図

(3) スカルン(skarn)とは、石灰岩や苦灰岩などの炭酸塩岩中に、花崗岩などのマグマが貫入した際、その接触部付近にできる鉱物の集合体(接触変成岩の一種)である。マグマから珪酸や鉄などが、石灰岩や苦灰岩の方に移動しカルシウムやマグネシウムと反応して、カルシウム、鉄、マグネシウムなどに富む珪酸塩鉱物(スカルン鉱物)ができる。

(4) 鈴木瑞穂2004「日本の前近代製鉄炉の変遷と出土製鍊滓の組成変化」『日本鉄鋼協会 社会鉄鋼部会「鉄の歴史—その技術と文化—」フォーラム第6回公開研究発表会講演論文集』(社)日本鉄鋼協会 社会鉄鋼部会「鉄の歴史—その技術と文化—」フォーラム

(5) 鈴木瑞穂2016「韓・日の製鉄技術分析結果の比較研究」『古代製鉄技術研究における融・複合研究の現状と課題』国立中原文化財研究所〔韓国〕

表14 供試材の履歴と調査項目

符号	遺跡名	調査区	出土遺構	遺物名称	推定年代	計測値		金属探知器反応	調査項目				備考
						大きさ (mm)	重量 (g)		顕微鏡組織	ビッカース断面硬度	EPMA	化学分析	
WDT-1	和田谷	4区	段状遺構3	製鍊滓(炉内滓)	古墳時代後期	57×43×47	138.1	なし	○	○		○	
WDT-2		6区	鍛冶炉1	椀形鍛冶滓	奈良時代	40×31×18 37×43×15	50.3	なし	○	○		○	*非接合の2片のうち、上段の破片を供試材とした
WDT-3			ピット1	椀形鍛冶滓		103×77×25	249.9	なし	○	○		○	
WDT-4			ピット2	鍛冶滓	古墳時代後期または奈良時代	64×69×39	180.8	なし	○	○		○	
WDT-5		8区	鍛冶炉5	椀形鍛冶滓	奈良～平安時代	84×76×23	84.8	なし	○	○		○	
WDT-6			包含層	椀形鍛冶滓	古代～中世	74×53×35	152.8	なし	○	○		○	
WDT-7		6区	ピット1	微細遺物	奈良時代	—	3.0	なし	○		○		

表15 供試材の化学組成

符号	遺跡名	調査区	出土遺構	遺物名称	推定年代	全鉄分 (Total Fe)	金属鉄 (Metallic Fe)	酸化第1鉄 (FeO)	酸化第2鉄 (Fe ₂ O ₃)	二酸化珪素 (SiO ₂)	酸化アルミニウム (Al ₂ O ₃)	酸化カルシウム (CaO)	酸化マグネシウム (MgO)	酸化カリウム (K ₂ O)	酸化ナトリウム (Na ₂ O)	酸化マンガ (MnO)	二酸化チタン (TiO ₂)	酸化クロム (Cr ₂ O ₃)	硫黄 (S)	五酸化燐 (P ₂ O ₅)	炭素 (C)	バナジウム (V)	銅 (Cu)	二酸化ジルコニウム (ZrO ₂)	砒素 (As)	造滓成分	Σ*
WDT-1	和田谷	4区	段状遺構3	製錬滓 (炉内滓)	古墳時代後期	39.35	0.05	46.25	4.79	26.84	7.74	6.50	1.99	1.16	0.30	0.57	0.37	0.03	0.021	0.32	0.16	<0.01	0.01	0.01	<0.01	44.53	
WDT-2						34.11	0.04	34.42	10.46	36.89	5.77	2.49	0.78	1.23	0.64	0.09	0.25	0.02	0.014	0.38	0.29	<0.01	0.03	0.01	47.80		
WDT-3		6区	ピット1	梶形鍛冶滓	奈良時代	25.27	0.06	19.88	13.95	48.06	7.17	2.21	0.53	2.56	0.47	0.18	0.32	0.04	0.008	0.31	0.10	<0.01	<0.01	0.02	<0.01	61.00	
WDT-4						50.53	0.13	50.12	16.36	22.04	3.25	1.12	0.39	0.88	0.19	0.07	0.17	0.03	0.032	0.18	0.19	<0.01	0.01	<0.01	27.87		
WDT-5		8区	鍛冶炉5	梶形鍛冶滓	奈良～平安時代	13.53	0.08	10.48	7.58	59.54	11.31	0.64	0.28	3.42	0.43	0.08	0.55	0.05	0.009	0.23	0.26	0.02	0.02	<0.01	<0.01	75.62	
WDT-6						41.07	0.09	30.76	24.41	27.92	4.58	1.64	0.68	1.42	0.33	0.12	0.19	0.04	0.040	0.36	0.23	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	36.57	

表16 出土遺物の調査結果のまとめ

符号	遺跡名	調査区	出土遺構	遺物名称	推定年代	化学組成 (%)							所見	
						Total Fe	Fe ₂ O ₃	塩基性成分	TiO ₂	V	MnO	造滓成分		Cu
WDT-1	和田谷	4区	段状遺構3	製錬滓 (炉内滓)	古墳時代後期	39.35	4.79	8.49	0.37	<0.01	0.57	44.53	0.01	製錬滓 [製鉄原料:鉄鉱石 (塊鉄) の可能性が高い]
WDT-2						34.11	10.46	3.27	0.25	<0.01	0.09	47.80	0.03	鍛冶滓 [始発原料:鉄鉱石 (塊鉄) の可能性が高い]
WDT-3		6区	ピット1	梶形鍛冶滓	奈良時代	25.27	13.95	2.74	0.32	<0.01	0.18	61.00	<0.01	鍛冶滓 [始発原料:鉄鉱石 (塊鉄) の可能性が高い]
WDT-4						50.53	16.36	1.51	0.17	<0.01	0.07	27.87	0.01	主に鉄材の吹き減り (酸化に伴う損失) による鍛錬鍛冶滓 [始発原料:鉄鉱石 (塊鉄) の可能性が高い]
WDT-5		8区	鍛冶炉5	梶形鍛冶滓	奈良～平安時代	13.53	7.58	0.92	0.55	0.02	0.08	75.62	<0.01	鍛冶滓 [始発原料:鉄鉱石 (塊鉄) の可能性が高い]
WDT-6						41.07	24.41	2.32	0.19	<0.01	0.12	36.57	<0.01	鍛冶滓 [始発原料:鉄鉱石 (塊鉄) の可能性が高い]
WDT-7	6区	ピット1	微細遺物	奈良時代	-	-	-	-	-	-	-	-	主に熱間での鍛打加工に伴う微細遺物 (砂鉄は熱影響がなく、土壌中に自然に含まれていたもの可能性が高い)	

W:Wustite(FeO)、M:Magnetite(FeO·Fe₂O₃)、U:Ulvöspinel(2FeO·TiO₂)、F:Fayalite(2FeO·SiO₂)

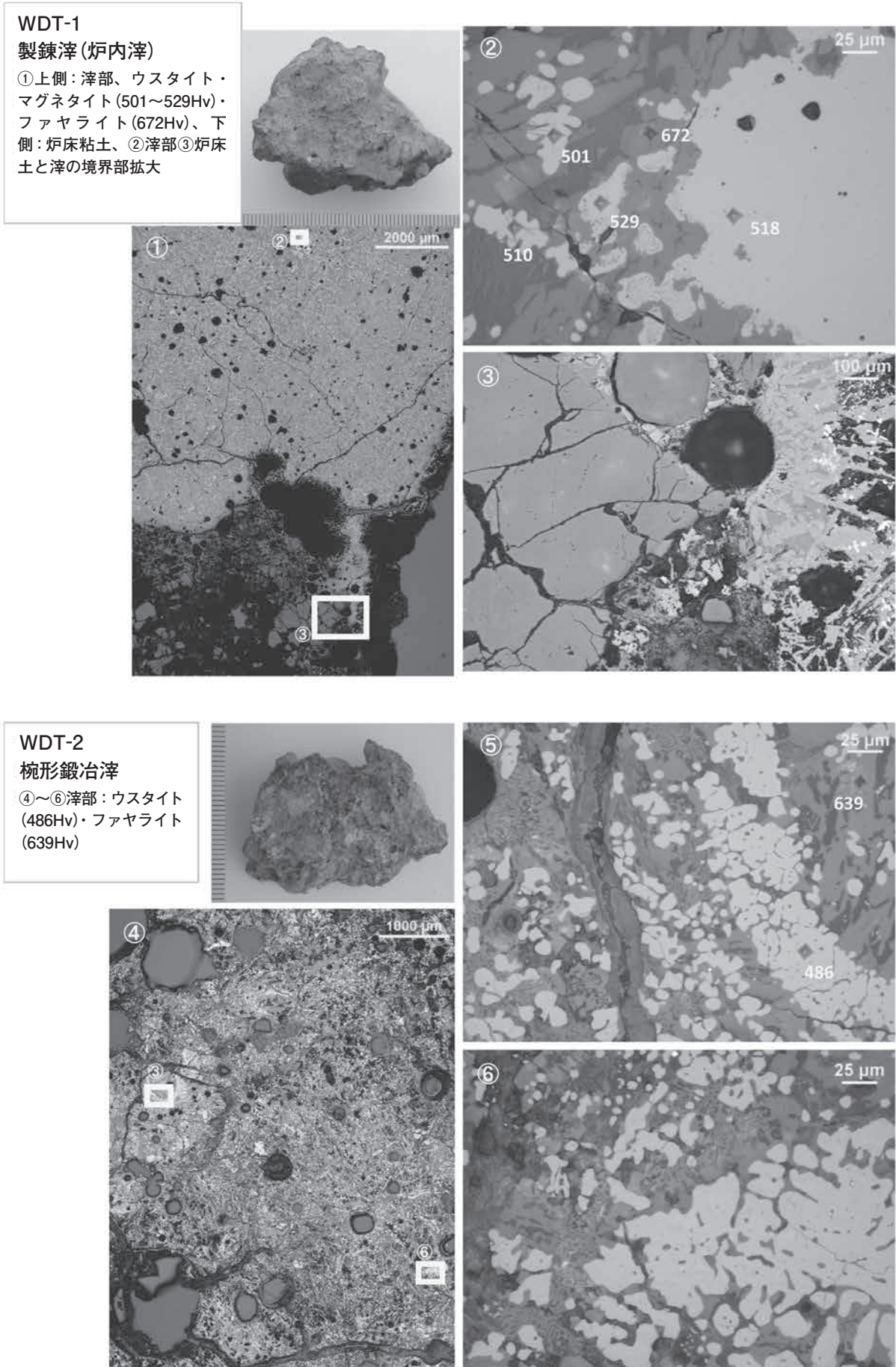
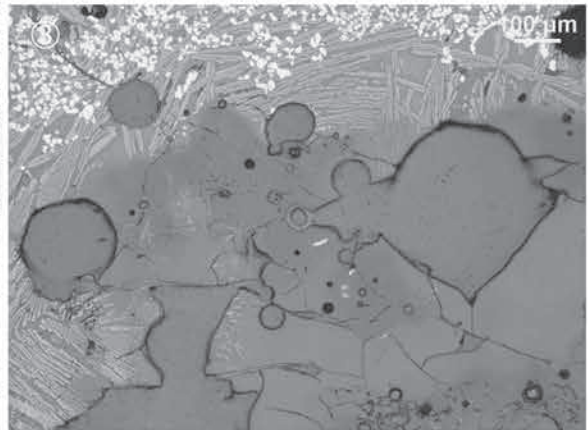
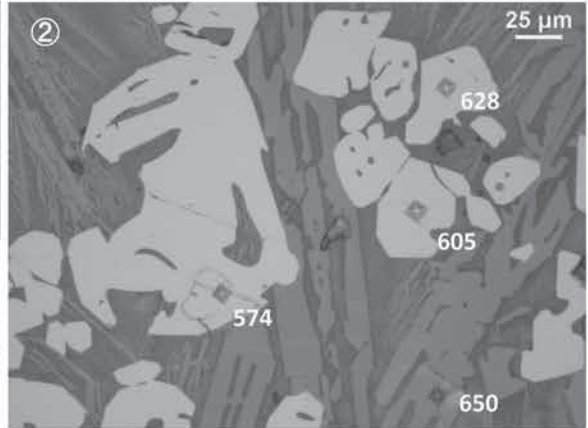
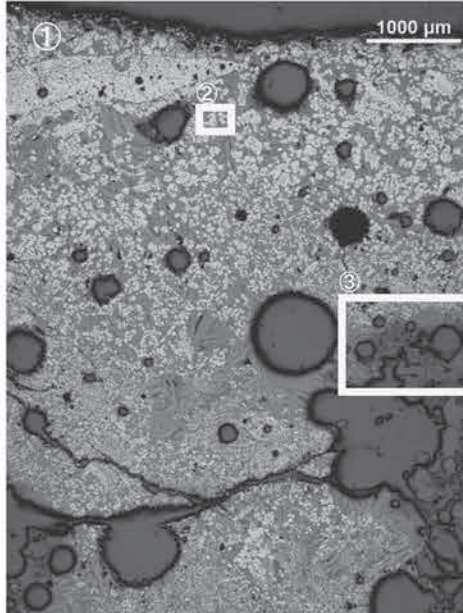


写真18 製錬滓 (炉内滓)・椀形鍛冶滓の顕微鏡写真

WDT-3

椀形鍛冶滓

①～③滓部：マグネタイト (574、605、628Hv)・
 ファヤライト (650Hv)、
 暗灰色部：ガラス質滓
 (被熱石英混在)



WDT-4

鍛冶滓

④～⑥滓部：ウスタイト (480・488Hv)・ファヤライト (672Hv)、微小明白色粒：金属鉄、不定形明
 灰～青灰色部：錆化鉄

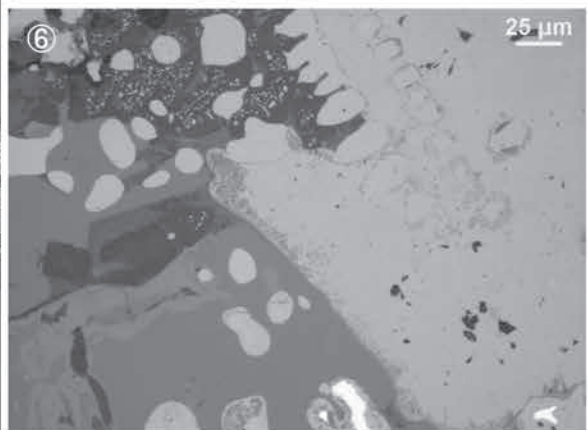
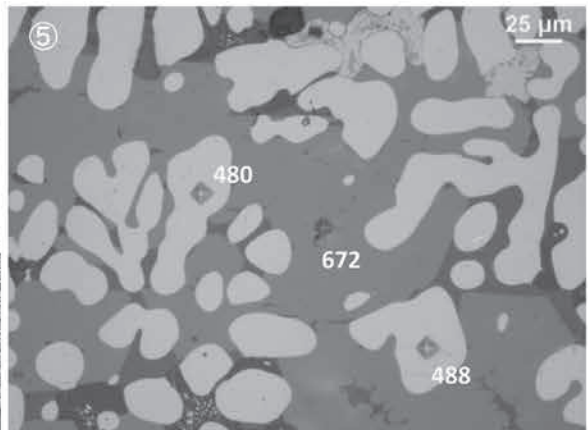
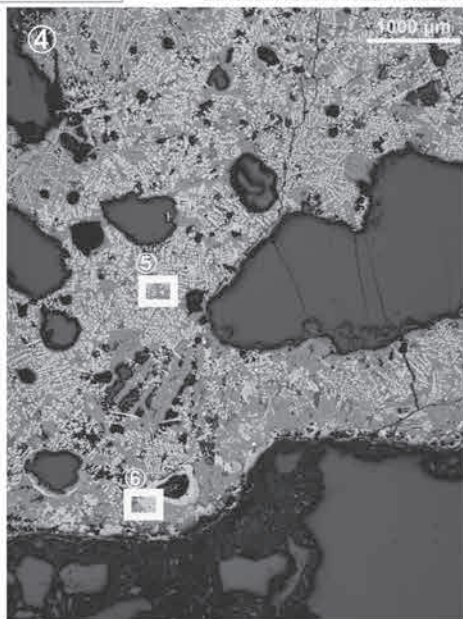
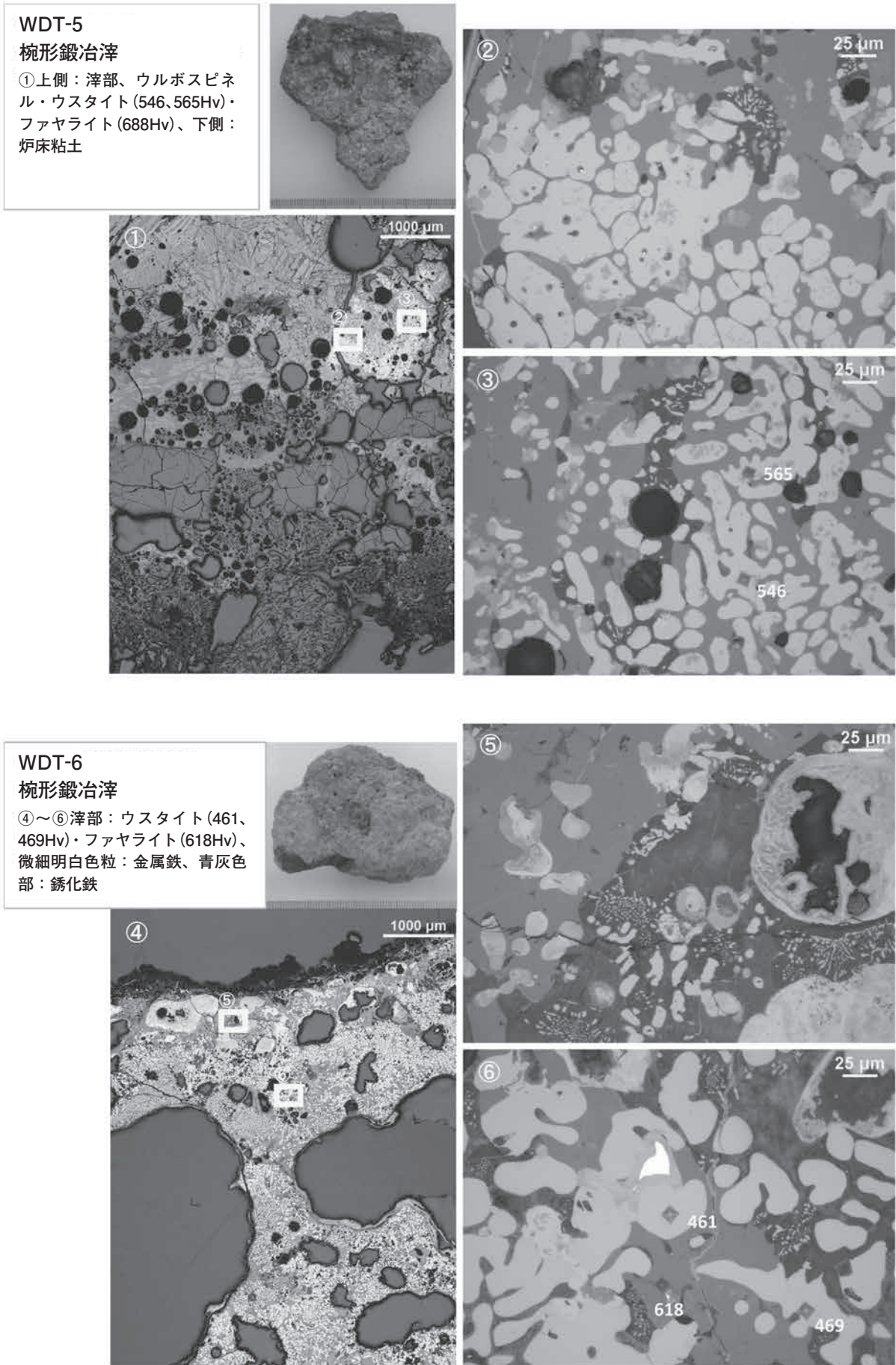
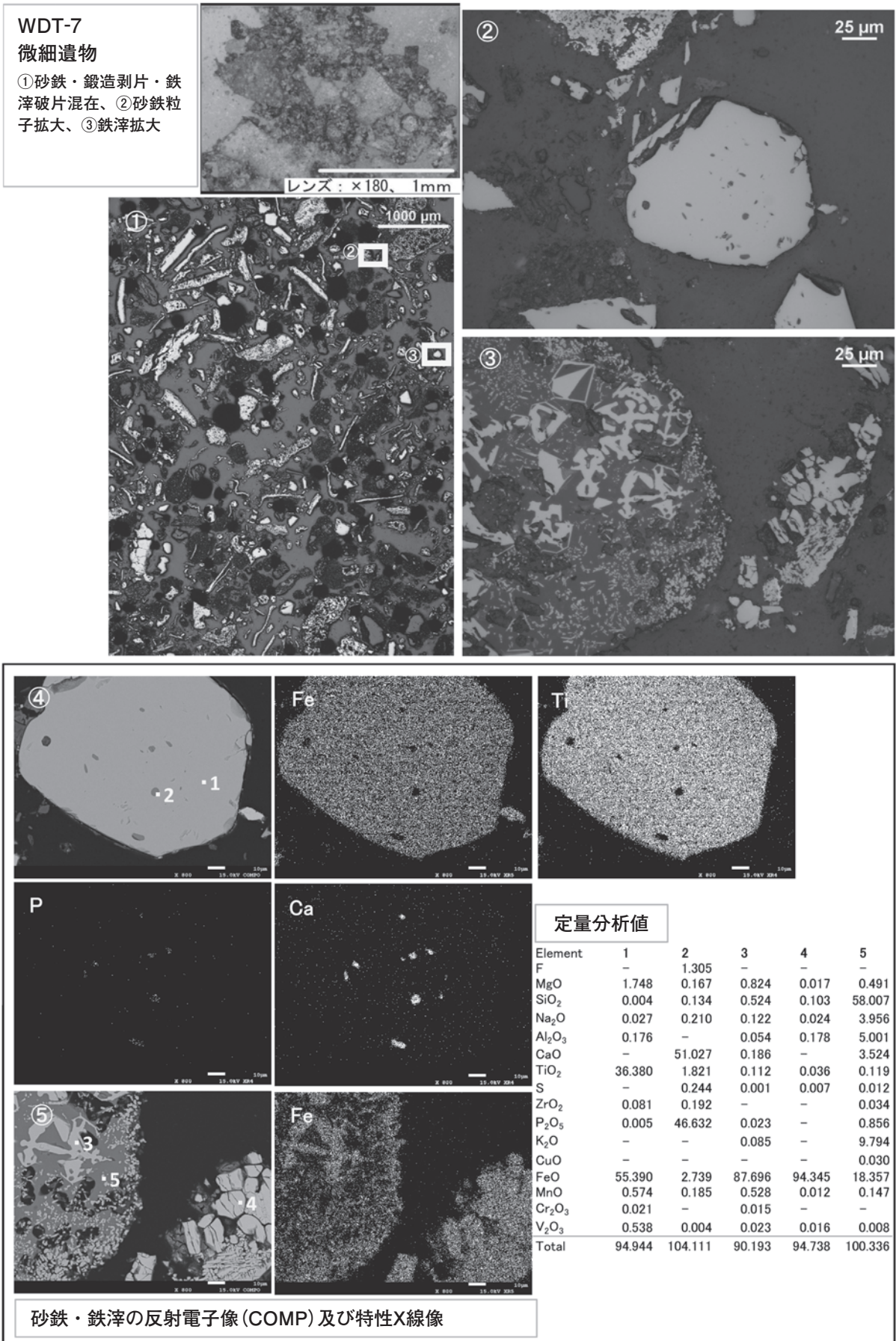


写真19 椀形鍛冶滓・鍛冶滓の顕微鏡写真





第7節 マキサヤ遺跡及び和田谷遺跡の樹種同定・放射性炭素年代測定・花粉分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

1 マキサヤ遺跡の自然科学分析

1 はじめに

岡山県浅口郡里庄町新庄に所在するマキサヤ遺跡は、毛野無羅山と南西の茶臼山に挟まれた谷の出口付近の低地部に位置する。発掘調査では、縄文時代中期末～室町時代の遺構や遺物が検出されている。

本分析調査では、出土木製品・自然木の樹種同定と放射性炭素年代測定、河道等の埋積物の花粉分析を実施し、年代観や木材利用及び古植生に関する資料を作成する。

2 木製品の樹種同定・年代測定

(1) 試料

試料は、河道2の護岸1に使用された杭19点 (No. 1～19)、河道2の下層付近で検出された杭1点 (No.20) 及び河道内から検出された自然木3点 (No.21～23) の合計23点である。調査所見によれば、護岸1の時期は、河道埋土の出土遺物から平安時代～室町時代と推定されている。また、No.20は護岸1よりも古く、古代以前と推定されている。

樹種同定は、全23点を対象に実施する。杭は加工部位を避け、割れ口などを利用して試料を採取する。放射性炭素年代測定はNo.2、No.6、No.9、No.14、No.17、No.20、No.21の合計7点を対象に実施する。できるだけ外側の保存状態の良い部分から試料を採取する。各試料の詳細は、結果とともに表17、表18に示す。

(2) 分析方法

1) 樹種同定

剃刀を用いて、木口 (横断面)・柾目 (放射断面)・板目 (接線断面) の各切片を作成し、ガムクロラールで封入し、プレパラートを作成する。光学顕微鏡で観察し、木材組織の種類や配列の特徴を、現生標本や独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類 (分類群) を同定する。なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東 (1982)、Wheeler他 (1998)、Richter他 (2006) を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、林 (1991) や伊東 (1995, 1996, 1997, 1998, 1999) を参考にする。

2) 放射性炭素年代測定

試料周囲をトリミングして0.1g程度に調整する。塩酸 (HCl) により炭酸塩等酸可溶成分を除去、水酸化ナトリウム (NaOH) により腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、塩酸によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する (酸・アルカリ・酸処理 AAA:Acid Alkali Acid)。濃度は塩酸、水酸化ナトリウム共に1mol/Lである。

試料の燃焼、二酸化炭素の精製、グラファイト化 (鉄を触媒とし水素で還元する) はElementar社のvario ISOTOPE cube とIonplus社のAge3を連結した自動化装置を用いる。処理後のグラファイト・鉄

表17 マキサヤ遺跡の樹種同定結果

試料No.	対象物	出土遺構等	掲載No.	時期	同定結果
1	木杭	河道2 護岸1 杭1	—	古代～中世	コナラ亜属クヌギ節
2	木杭	河道2 護岸1 杭2	W 5	古代～中世	コナラ亜属クヌギ節
3	木杭	河道2 護岸1 杭3	—	古代～中世	コナラ亜属クヌギ節
4	木杭	河道2 護岸1 杭5	—	古代～中世	コナラ亜属クヌギ節
5	木杭	河道2 護岸1 杭13	W 6	古代～中世	コナラ亜属クヌギ節
6	木杭	河道2 護岸1 杭19	W 7	古代～中世	コナラ亜属クヌギ節
7	木杭	河道2 護岸1 杭21	—	古代～中世	コナラ亜属クヌギ節
8	木杭	河道2 護岸1 杭33	—	古代～中世	コナラ亜属クヌギ節
9	木杭	河道2 護岸1 杭39	W 8	古代～中世	アワブキ属
10	木杭	河道2 護岸1 杭40	—	古代～中世	コナラ亜属クヌギ節
11	木杭	河道2 護岸1 杭50	W 9	古代～中世	コナラ亜属クヌギ節
12	木杭	河道2 護岸1 杭52	W10	古代～中世	アワブキ属
13	木杭	河道2 護岸1 杭56	—	古代～中世	コナラ亜属クヌギ節
14	木杭	河道2 護岸1 杭57	W11	古代～中世	コナラ亜属クヌギ節
15	木杭	河道2 護岸1 杭58	W12	古代～中世	コナラ亜属クヌギ節
16	木杭	河道2 護岸1 杭60	W13	古代～中世	コナラ亜属クヌギ節
17	木杭	河道2 護岸1 横木4	W 2	古代～中世	クリ(根?)
18	木杭	河道2 護岸1 横木5	W 3	古代～中世	アワブキ属
19	木杭	河道2 護岸1 横木5	W 4	古代～中世	アワブキ属
20	木杭	河道2 28層	W 1	～古代	コナラ亜属クヌギ節
21	自然木	河道2 株1	—	古代～中世	ハンノキ亜属
22	自然木	河道2 株3	—	古代～中世	ハンノキ亜属
23	自然木	河道2 倒木1	—	古代～中世	トチノキ

粉混合試料をNEC社製のハンドプレス機を用いて内径1mmの孔にプレスし、測定試料とする。

測定はタンデム加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置（NEC社製）を用いて、¹⁴Cの計数、¹³C濃度 (¹³C/¹²C)、¹⁴C濃度 (¹⁴C/¹²C) を測定する。AMS測定時に、米国国立標準局（NIST）から提供される標準試料（HOX-II）、国際原子力機関から提供される標準試料（IAEA-C6等）、バックグラウンド試料（IAEA-C1）の測定も行う。 $\delta^{13}\text{C}$ は試料炭素の¹³C濃度 (¹³C/¹²C) を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表したものである。放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma:68%）に相当する年代である。測定年代の表示方法は、国際学会での勧告に従う（Stuiver & Polach 1977）。また、暦年校正用に一桁目まで表した値も記す。暦年校正に用いる校正曲線はIntcal13（Reimer et al.,2013）である。

(3) 結果

1) 樹種同定

結果を表17に示す。広葉樹5分類群（ハンノキ亜属、コナラ亜属クヌギ節、クリ、トチノキ、アワブキ属）に同定された。杭20点は、クヌギ節15点（No.1～11, 13～16, 20）、アワブキ属4点（No.9, 12, 18, 19）、クリ1点（No.17）に同定され、クヌギ節が最も多い。自然木3点は、ハンノキ亜属2点（No.21, 22）、トチノキ1点（No.23）に同定された。以下、各分類群の解剖学的特徴を記す。

・ハンノキ属ハンノキ亜属（*Alnus* subgen. *Alnus*） カバノキ科

散孔材で、道管は単独または2～4個が放射方向に複合して散在する。道管は階段穿孔を有し、壁孔は対列状に配列する。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のものと集合放射組織とがある。

・コナラ亜属クヌギ節（*Quercus* subgen. *Quercus* sect. *Cerris*） ブナ科コナラ属

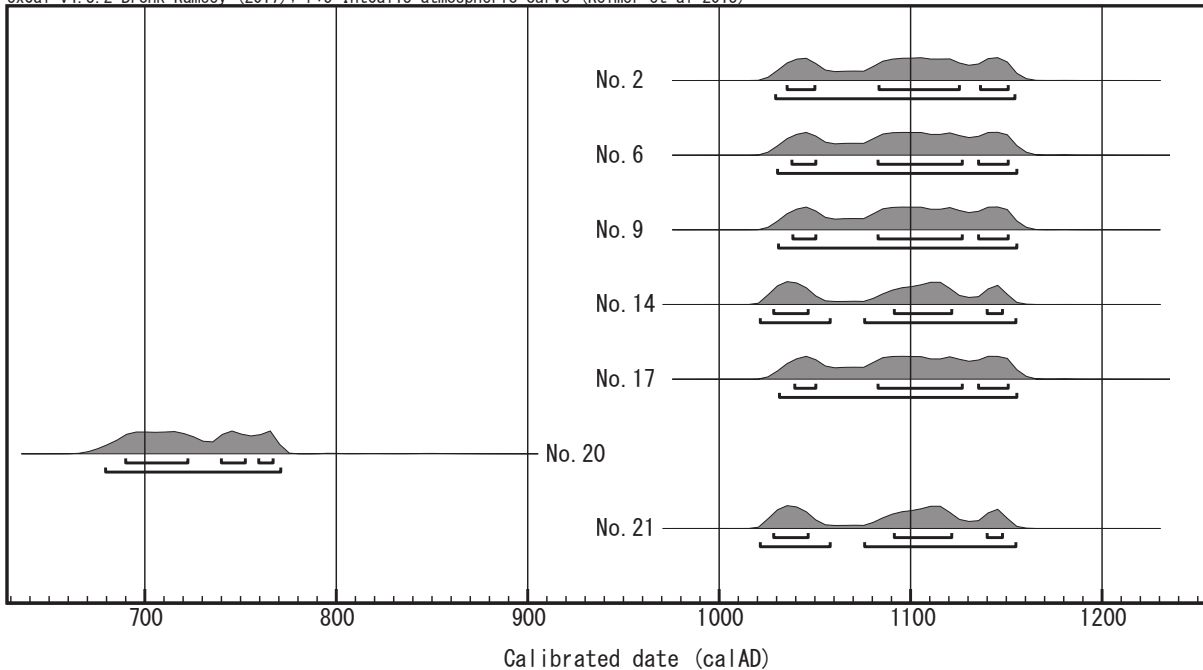
環孔材で、孔圏部は1～3列、孔圏外では年輪界に向かって径を漸減しながら、小径の道管が単独で放射方向に配列する。道管は単穿孔、壁孔は交互状。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のものと複合放射組織とがある。

表18 マキサヤ遺跡の放射性炭素年代測定結果

No.	性状	方法	補正年代 (暦年較正用) BP	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正年代							Code No.									
					年代値									確率%							
					σ	cal AD 1035	-	cal AD 1050	915	-	901 calBP	13.5									
2	木材 クヌギ節	AAA (1M)	940±20 (942±20)	-29.96 ±0.40	σ	cal AD 1083	-	cal AD 1125	867	-	825 calBP	40.9	YU- 10618	pal- 12380							
						cal AD 1136	-	cal AD 1151	814	-	800 calBP	13.8									
						2σ									cal AD 1029	-	cal AD 1154	921	-	796 calBP	95.4
						cal AD 1038	-	cal AD 1050	913	-	900 calBP	11.6									
6	木材 クヌギ節	AAA (1M)	940±20 (939±21)	-18.79 ±0.57	σ	cal AD 1083	-	cal AD 1127	868	-	824 calBP	41.9	YU- 10619	pal- 12381							
						cal AD 1135	-	cal AD 1151	815	-	800 calBP	14.8									
						2σ									cal AD 1030	-	cal AD 1155	920	-	795 calBP	95.4
						cal AD 1038	-	cal AD 1050	912	-	900 calBP	11.2									
9	木材 アワビキ属	AAA (1M)	940±20 (939±20)	-26.23 ±0.41	σ	cal AD 1083	-	cal AD 1127	868	-	824 calBP	42.1	YU- 10620	pal- 12382							
						cal AD 1135	-	cal AD 1151	815	-	800 calBP	14.9									
						2σ									cal AD 1031	-	cal AD 1155	920	-	795 calBP	95.4
						cal AD 1038	-	cal AD 1050	912	-	900 calBP	11.2									
14	木材 クヌギ節	AAA (1M)	955±20 (957±20)	-29.22 ±0.35	σ	cal AD 1028	-	cal AD 1046	922	-	904 calBP	23.0	YU- 10621	pal- 12383							
						cal AD 1091	-	cal AD 1121	859	-	829 calBP	36.5									
						cal AD 1140	-	cal AD 1148	811	-	803 calBP	8.7									
						2σ									cal AD 1021	-	cal AD 1058	929	-	893 calBP	30.5
17	木材 クリ	AAA (1M)	940±20 (938±20)	-26.55 ±0.35	σ	cal AD 1039	-	cal AD 1050	911	-	900 calBP	10.5	YU- 10622	pal- 12384							
						cal AD 1083	-	cal AD 1127	868	-	824 calBP	42.6									
						cal AD 1135	-	cal AD 1151	815	-	800 calBP	15.1									
						2σ									cal AD 1031	-	cal AD 1155	919	-	795 calBP	95.4
20	木材 クヌギ節	AAA (1M)	1270±20 (1270±21)	-28.99 ±0.53	σ	cal AD 690	-	cal AD 722	1261	-	1228 calBP	42.7	YU- 10623	pal- 12385							
						cal AD 740	-	cal AD 752	1211	-	1198 calBP	16.0									
						cal AD 759	-	cal AD 767	1191	-	1184 calBP	9.6									
						2σ									cal AD 679	-	cal AD 771	1271	-	1180 calBP	95.4
21	木材 ハンノキ亜属	AAA (1M)	955±20 (957±20)	-27.34 ±0.42	σ	cal AD 1028	-	cal AD 1046	922	-	904 calBP	23.0	YU- 10624	pal- 12386							
						cal AD 1091	-	cal AD 1121	859	-	829 calBP	36.5									
						cal AD 1140	-	cal AD 1148	811	-	803 calBP	8.7									
						2σ									cal AD 1021	-	cal AD 1058	929	-	893 calBP	30.5
							cal AD 1076	-	cal AD 1155	875	-	796 calBP	64.9								

- 1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。
- 2) BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。
- 3) 付記した誤差は、測定誤差 σ （測定値の68.2%が入る範囲）を年代値に換算した値。
- 4) AAAは、酸・アルカリ・酸処理を示す。AaAは試料が脆弱なため、アルカリの濃度を薄くして処理したことを示す。
- 5) 暦年の計算には、Oxcal v4.3.2を使用
- 6) 暦年の計算には1桁目まで示した年代値を使用。
- 7) 較正データセットは、Intcal13を使用。
- 8) 較正曲線や較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。
- 9) 統計的に真の値が入る確率は、 σ が68.2%、 2σ が95.4%である

OxCal v4.3.2 Bronk Ramsey (2017); r:5 IntCal13 atmospheric curve (Reimer et al 2013)



第270図 マキサヤ遺跡の暦年較正結果

・クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属

環孔材で、孔圏部は3～4列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15細胞高。道管配列がやや放射状にみえるのと、放射組織が2列になる部分があるため、根に近い部分ではないかと思われる。

・トチノキ (*Aesculus turbinata* Blume) トチノキ科トチノキ属

散孔材で、管壁は厚く、横断面では角張った楕円形、単独または2～3個が複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、単列、1～15細胞高で階層状に配列する。

・アワブキ属 (*Meliosma*) アワブキ科

散孔材で、管孔は単独または2～4個が放射方向に複合して散在する。道管は単穿孔及び階段穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、1～3細胞幅、細胞高は高く40～50細胞高が中心。

アワブキ属は、本地域に常緑小高木のヤマビワ、落葉高木のアワブキ、落葉小高木のミヤマハハソの3種が分布するが、解剖学的特徴から種までの同定には至っていない。

2) 放射性炭素年代測定

結果を表18、第270図に示す。試料の状態は良好で、いずれも定法の処理を行い、年代測定に十分な炭素量が回収できている。同位体補正を行った測定値は、No.2 (クヌギ節) が 940 ± 20 BP、No.6 (クヌギ節) が 940 ± 20 BP、No.9 (アワブキ属) が 940 ± 20 BP、No.14 (クヌギ節) が 955 ± 20 BP、No.17 (クリ) が 940 ± 20 BP、No.20 (クヌギ節) が 1270 ± 20 BP、No.21 (ハンノキ垂属) が 955 ± 20 BPである。

暦年較正は、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が5568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、その後訂正された半減期 (^{14}C の半減期 5730 ± 40 年) を較正することによって、暦年代に近づける手法である。ソフトウエアは、Oxcal4.3 (Bronk, 2009) を用いる。2 σ の値は、No.2がcalAD1029～1154、No.6がcalAD1030～1155、No.9がcalAD1031～1155、No.14がcalAD1021～1155、No.17がcalAD1031～1155、No.20がcalAD679～771、No.21がcalAD1021～1155である。

(4) 考察

樹種同定の結果、杭はクヌギ節を主体とし、アワブキ属とクリが混じる組成を示した。自然木はトチノキとハンノキ垂属が確認された。また、年代測定の結果、No.2 (クヌギ節)、No.6 (クヌギ節)、No.9 (アワブキ属)、No.14 (クヌギ節)、No.17 (クリ) の杭と、No.21 (ハンノキ垂属) の自然木は、いずれも11世紀～12世紀前半の年代観を示す一方、No.20 (クヌギ節) の杭のみ7世紀後半～8世紀の年代観を示した。前述したNo.20の杭が、平安時代～室町時代の護岸1よりも古いとする発掘調査所見と調和的と言える。

出土木製品用材データベース (伊東・山田編, 2012) によれば、杭は周辺に生育している多種多様な雑木を用いる傾向があり、周辺の植生を反映する。今回確認された樹種は、人里近くの里山林を構成する広葉樹である。成長が早く萌芽による更新が容易であるなど障害に強いため、伐採や粗朶の収奪など人為的干渉を受けても森林の再生が速い。その結果、人里近くには、クヌギやクリなどの二次林からなる里山林が構成される。また、河川や谷筋沿い、氾濫や土壌流出によって障害を受けやすい

場所にも生育する。遺跡の立地条件からみて、クヌギ節をはじめこれらの樹種は、当時の遺跡周辺に生育しており、入手しやすかったため、杭材として使用したと考えられる。なお、最も多く確認されたクヌギ節は重硬で加工しやすく、水湿にも比較的強いため土木材に向くことから、県内でクヌギ節が使われた事例は多い（伊東・山田編, 2012）。クリも重硬で水湿に強く、加工しやすいことから、土木材に使われることが多い。アワブキ属にも重硬な種を含む。

自然木で確認されたハンノキ亜属とトチノキは、ともに水湿を好み、谷筋や河畔、湿地や低地に生育する種を含む。遺跡の立地や後述の花粉分析結果から考えても、当時の調査地周辺で普通にみられる樹種であったと思われる。

3 花粉分析

(1) 試料

試料は、土坑2より採取された埋土下層（No.24）、竪穴住居2より採取されたP4埋土（No.25）、河道2（第5章第258図）より採取された19層、27層、28層（No.26～28）、河道1南地区（第5章第219図Eライン）より採取された18層（No.29）の、計6点である。

調査所見によれば、土坑2埋土下層は縄文時代後期の遺物包含層、竪穴住居2のP4埋土は古墳時代初頭、河道2の19層は古代～中世、27層、28層は古代以前、河道1南地区18層は縄文時代後期の遺物包含層とされている。

(2) 分析方法

試料約10gについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛、比重2.2）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス（無水酢酸9：濃硫酸1の混合液）処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製し、400倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。同定は、当社保有の現生標本や島倉（1973）、中村（1980）、藤木・小澤（2007）、三好ほか（2011）等を参考にする。

結果は同定・計数結果の一覧表、及び花粉化石群集の分布図として表示する。図表中で複数の種類をハイフンで結んだものは、種類間の区別が困難なものを示す。図中の木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として、百分率で出現率を算出し図示する。なお、木本花粉総数が100個未満のものは、出現した種類を+（プラス）で表示するにとどめる。

(3) 結果

結果を表19、第271図に示す。土坑2（No.24）及び竪穴住居2のP4（No.25）の2点は、いずれも無化石であった。

河道2のNo.26～28は、いずれも花粉化石が豊富に産出したが、保存状態は花粉外膜が破損あるいは溶解の影響を受けているなど、全体的に不良である。花粉化石群集についてみると、いずれも木本花粉が優占し、No.26、27ではマツ属が多産する。その他では、モミ属、ツガ属、ハンノキ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ツツジ科などを伴う。草本花粉ではイネ科、カヤツリグサ科、サナエタデ節—ウナギツカミ節、ヨモギ属、キク亜科などが認められ、No.26からは、栽培種のソバ属も確認された。No.28もマツ属が多産するが、コナラ亜属の割合が前述の2試料と比較すると高い。その他ではモミ属、ツガ属、スギ属、ハンノキ属、アカガシ亜属、ツツジ科などを伴う。草本

表19 マキサヤ遺跡の花粉分析結果

種 類	土坑2	竪穴住居2	河道2			河道1南地区
	埋土下層 24	P4埋土 25	19層 26	27層 27	28層 28	18層 29
木本花粉						
モミ属	-	-	8	12	4	-
ツガ属	-	-	17	34	8	-
マツ属単維管束亜属	-	-	1	-	-	-
マツ属複維管束亜属	-	-	138	78	68	-
マツ属(不明)	-	-	43	50	31	-
コウヤマキ属	-	-	1	1	-	-
スギ属	-	-	2	1	5	-
イチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科	-	-	2	-	1	-
クルミ属	-	-	-	-	1	-
クマシデ属—アサダ属	-	-	-	2	2	1
カバノキ属	-	-	-	-	1	-
ハンノキ属	-	-	10	2	3	-
ブナ属	-	-	1	-	1	-
コナラ属コナラ亜属	-	-	16	7	74	-
コナラ属アカガシ亜属	-	-	7	5	15	-
シイ属	-	-	-	-	1	-
ニレ属—ケヤキ属	-	-	3	-	1	-
ウルシ属	-	-	-	1	-	-
カエデ属	-	-	-	-	1	-
ブドウ属	-	-	-	1	2	-
ノブドウ属	-	-	2	1	-	-
グミ属	-	-	-	1	-	-
ツツジ科	-	-	3	11	11	1
エゴノキ属	-	-	-	1	3	-
草本花粉						
イネ科	-	-	22	14	9	-
カヤツリグサ科	-	-	1	9	5	-
ギシギシ属	-	-	-	-	1	-
サナエタデ節—ウナギツカミ節	-	-	2	4	-	-
タデ属	-	-	1	1	-	-
ソバ属	-	-	1	-	-	-
アカザ科	-	-	1	-	-	-
キンボウゲ属	-	-	1	-	-	-
バラ科	-	-	1	-	-	-
マメ科	-	-	1	-	1	-
オミナエシ属	-	-	1	1	-	-
ヨモギ属	-	-	3	4	4	-
キク亜科	-	-	3	-	1	-
タンポポ亜科	-	-	1	-	-	-
不明花粉						
不明花粉	-	-	5	3	7	-
シダ類胞子						
ゼンマイ属	-	-	3	-	-	-
他のシダ類胞子	-	-	55	63	40	-
合 計						
木本花粉	0	0	254	208	233	2
草本花粉	0	0	39	33	21	0
不明花粉	0	0	5	3	7	0
シダ類胞子	0	0	58	63	40	0
合計(不明を除く)	0	0	351	304	294	2

花粉は、イネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属などが僅かに認められる程度である。

河道1のNo.29は、花粉化石の産状、保存状態ともに不良である。木本花粉のクマシデ属—アサダ属、ツツジ科が、それぞれ1個体検出されるにとどまる。

(4) 考察

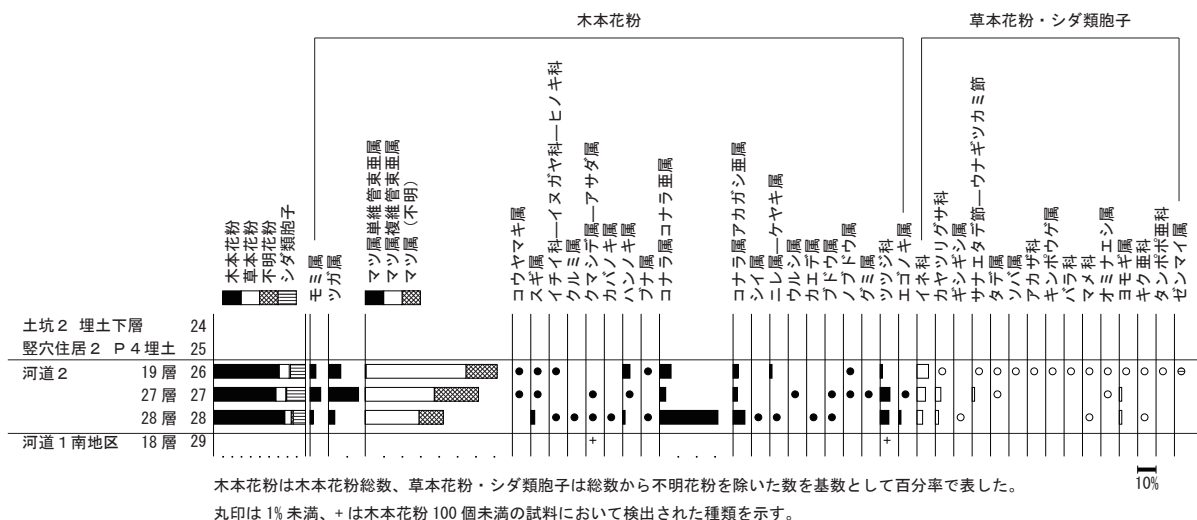
縄文時代後期とされる土坑2埋土下層 (No.24) からは、花粉化石やシダ類胞子が検出されず、同じく縄文時代後期とされる河道1南地区18層 (No.29) からも花粉化石はほとんど検出されなかった。一般的に、花粉やシダ類胞子の堆積した場所が、常に酸化状態にあるような場合、花粉は酸化や土壌

微生物によって分解・消失するとされている（中村, 1967;徳永・山内, 1971;三宅・中越, 1998など）。発掘調査所見によれば、土坑2埋土下層は縄文時代後期の遺物包含層とされ、河道1南地区18層は河道の最下層とされている。花粉分析結果をみる限りでは、いずれも好気的環境下に曝されていた可能性が考えられる。

古墳時代初頭とされる竪穴住居2のP4埋土（No.25）も、花粉化石やシダ類胞子は検出されなかった。本試料は、竪穴住居内に検出された土坑の埋土であることから、埋積時に花粉などが取り込まれにくかったこと、僅かに取り込まれた花粉も好気的環境下で分解消失したことの両方が考えられる。

一方、河道2の試料からは、保存状態が全体的に不良であるものの、花粉化石が豊富に産出した。古代以前とされる28層（No.28）では、針葉樹のマツ属（主として複維管束亜属）、落葉広葉樹のコナラ属コナラ亜属が多く認められ、モミ属、ツガ属、スギ属などの針葉樹、ハンノキ属、コナラ属アカガシ亜属、ツツジ科などの広葉樹が確認された。このうち、マツ属複維管束亜属（いわゆるニヨウマツ類）は生育の適応範囲が広く、尾根筋や湿地周辺、海岸砂丘上など他の広葉樹の生育に不適な立地にも生育が可能である。また、極端な陽樹であり、やせた裸地などでもよく発芽し生育することから、伐採された土地などに最初に進入する二次林の代表的な種類でもある。一方、コナラ亜属は沢沿いなどに生育する種を含み、スギ属、クルミ属、クマシデ属—アサダ属、ハンノキ属、ニレ属—ケヤキ属なども同様の適湿地に生育する種を含む。マキサヤ遺跡は、毛野無羅山と茶臼山に挟まれた谷の出口付近に位置することから、この谷沿いにこれらの木本類が生育していたと推測される。また、山地から低地にかけては、モミ属、ツガ属などの針葉樹、アカガシ亜属、ツツジ科などの広葉樹が生育していたと考えられる。草本類では、イネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属などが僅かに認められる。これらは開けた明るい場所を好む「人里植物」を含む分類群であることから、河道沿いの草地などに由来すると思われる。

同じく古代以前とされる27層（No.27）では、コナラ亜属の割合が減少し、マツ属の割合が増加する。検出される種類に大きな変化はないことから、基本的には同様の植生が続いていたが、谷沿いのコナラ亜属などが減少した可能性がある。その理由としては、人為的な伐採や谷斜面の崩落などの可能性が考えられるが、今回の結果では判断できない。草本類もイネ科、カヤツリグサ科、サナエタデ



第271図 マキサヤ遺跡の花化石群集

節—ウナギツカミ節、ヨモギ属など、同様の人里植物を含む分類群が確認されている。

古代～中世とされる19層 (No.26) になると、マツ属の多産が顕著になる。前述のように、マツ属複維管束亜属は二次林の代表的な種類であることから、この時期の周辺で二次林としてのマツ属が増加した可能性がある。しかしながら、マツ属は風媒花で花粉生産量も多いことから、花粉分析においては周辺植生に比べて、マツ属花粉の比率が高くなる (Faegri & Iversen, 1989)。このため、実際の周辺植生においては、花粉化石の割合ほどマツ林が増加していない可能性があり、樹種同定結果をみても、同時代の杭や自然木からマツ属は検出されていないことから、マツ林の拡大はそれほど顕著でなかったと考えられる。種実などの他の部位を対象とした分析を併用することにより、総合的に判断する必要がある。

その他の分類群は、山地～低地にかけてはモミ属、ツガ属、アカガシ亜属、ツツジ科などが、谷沿いにはハンノキ属、コナラ属コナラ亜属、ニレ属—ケヤキ属などが、依然として生育していたことも窺える。草本類では、イネ科、サナエタデ節—ウナギツカミ節、ヨモギ属、キク亜科などが検出され、これらが河道沿いや集水域の草地などに生育していたと考えられる。なお、19層では栽培種のソバ属が検出されたことから、周辺でソバ属が利用されていた可能性がある。

2 和田谷遺跡出土木製品の樹種同定

1 はじめに

岡山県浅口市鴨方町六条院西に所在する和田谷遺跡は、寄島山地の東端から西側に派生する丘陵上及びその西に広がる緩斜面に位置する。発掘調査の結果、弥生時代中期～室町時代の遺構、遺物が確認されている。

本分析調査では、出土木製品の樹種同定を実施し、木材利用に関する資料を作成する。

2 試料

試料は、「谷部出土木製品 (第4章第86図W1)」の、1点 (No.30) である。加工部位を避け、割れ口などから分析用試料を採取する。発掘調査所見によれば、木製品は遺跡南側で検出された谷部より、古墳時代後期の土器とともに出土したとされ、時期は7～8世紀と考えられている。

3 分析方法

剃刀を用いて、木口 (横断面)・柾目 (放射断面)・板目 (接線断面) の各切片を作成し、ガムクロールで封入し、プレパラートを作成する。光学顕微鏡で観察し、木材組織の種類や配列の特徴を、現生標本や独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類 (分類群) を同定する。なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東 (1982)、Wheeler他 (1998)、Richter他 (2006) を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、林 (1991) や伊東 (1995, 1996, 1997, 1998, 1999) を参考にする。

4 結果

谷部出土の木製品W1は、常緑針葉樹のヒノキ属に同定された。以下、解剖学的特徴を記す。

・ヒノキ属 (*Chamaecyparis*) ヒノキ科

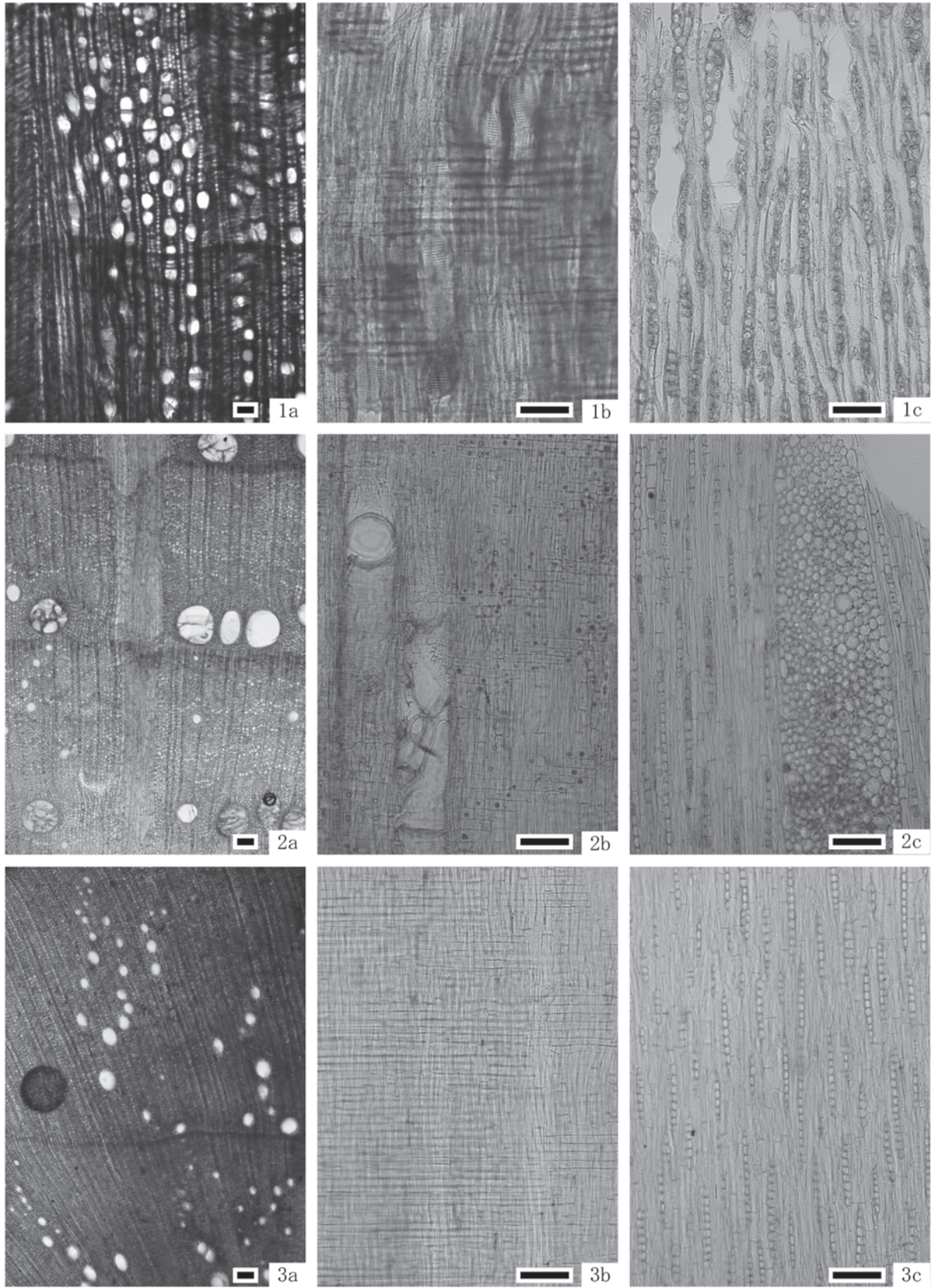
軸方向組織が仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急である。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はヒノキ型で、1分野に2個が多い。放射組織は単列、1～15細胞高である。

5 考察

谷部より出土した木製品は、針葉樹のヒノキ属に同定された。ヒノキ属は、耐朽性が高く、水湿にも強い傾向がある。また、中程度の硬さで加工しやすく、割裂にも向く。このため、建築材をはじめ、器具や建具などにも頻繁に用いられる有用材である。

引用文献

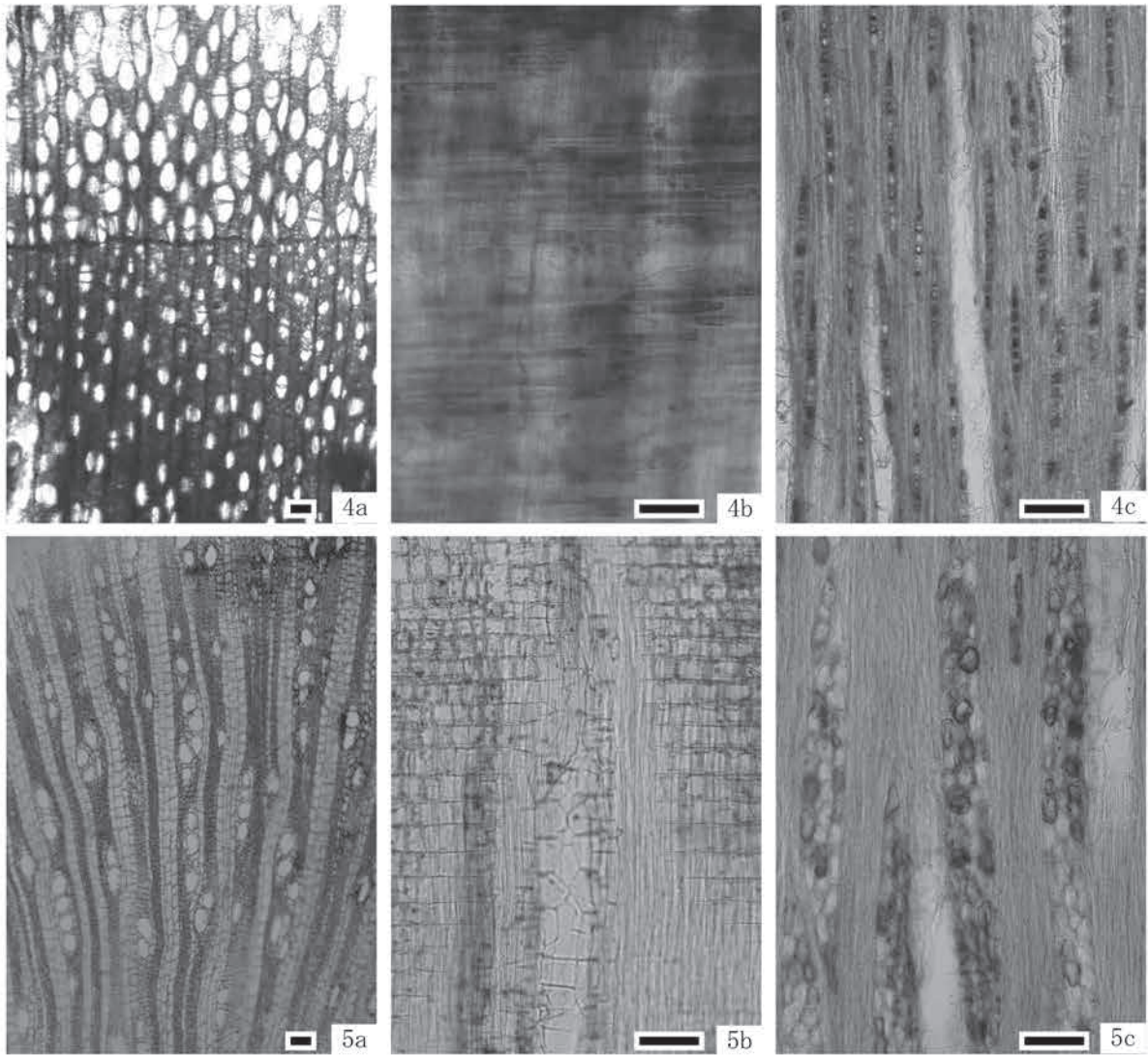
- Bronk RC., 2009, Bayesian analysis of radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 51, 337-360.
- Faegri K.&Iversen J., 1989, *Textbook of Pollen Analysis*. The Blackburn Press, 328p.
- 藤木利之・小澤智生, 2007, 琉球列島産植物花粉図鑑. アクアコーラル企画, 155p.
- 林 昭三, 1991, 日本産木材顕微鏡写真集. 京都大学木質科学研究所.
- 伊東隆夫, 1995, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ. 木材研究・資料, 31, 京都大学木質科学研究所, 81-181.
- 伊東隆夫, 1996, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ. 木材研究・資料, 32, 京都大学木質科学研究所, 66-176.
- 伊東隆夫, 1997, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ. 木材研究・資料, 33, 京都大学木質科学研究所, 83-201.
- 伊東隆夫, 1998, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ. 木材研究・資料, 34, 京都大学木質科学研究所, 30-166.
- 伊東隆夫, 1999, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ. 木材研究・資料, 35, 京都大学木質科学研究所, 47-216.
- 伊東隆夫・山田昌久 (編), 2012, 木の考古学 出土木製品用材データベース. 海青社, 449p.
- 三宅 尚・中越信和, 1998, 森林土壌に堆積した花粉・胞子の保存状態. *植生史研究*, 6, 15-30.
- 三好教夫・藤木利之・木村裕子, 2011, 日本産花粉図鑑. 北海道大学出版会, 824p.
- 中村 純, 1967, 花粉分析. 古今書院, 232p.
- 中村 純, 1980, 日本産花粉の標徴ⅠⅡ (図版). 大阪市立自然史博物館収蔵資料目録 第12, 13集, 91p.
- Reimer PJ., Bard E., Bayliss A., Beck JW., Blackwell PG., Bronk RC., Buck CE., Cheng H., Edwards RL., Friedrich M., Grootes PM., Guilderson TP., Haffidason H., Hajdas I., Hatte C., Heaton TJ., Hoffmann DL., Hogg AG., Hughen KA., Kaiser KF., Kromer B., Manning SW., Niu M., Reimer RW., Richards DA., Scott EM., Southon JR., Staff RA., Turney CSM., van der Plicht J., 2013, IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves 0?50,000 years cal BP. *Radiocarbon*, 55, 1869-1887.
- Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E. (編), 2006, 針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部 久・内海泰弘 (日本語版監修), 海青社, 70p. [Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E. (2004) IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification].
- 島地 謙・伊東隆夫, 1982, 図説木材組織. 地球社, 176p.
- 島倉巳三郎, 1973, 日本植物の花粉形態. 大阪市立自然科学博物館収蔵目録 第5集, 60p.
- Stuiver M., & Polach AH., 1977, Radiocarbon 1977 Discussion Reporting of 14C Data. *Radiocarbon*, 19, 355-363.
- 徳永重元・山内輝子, 1971, 花粉・胞子. 化石の研究法, 共立出版株式会社, 50-73.
- Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (編), 1998, 広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩 (日本語版監修), 海青社, 122p. [Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].



1. ハンノキ亜属(No.21)
2. コナラ亜属クスギ節(No.4)
3. クリ(No.17)

a: 木口 b: 柀目 c: 板目
スケールは100 μ m

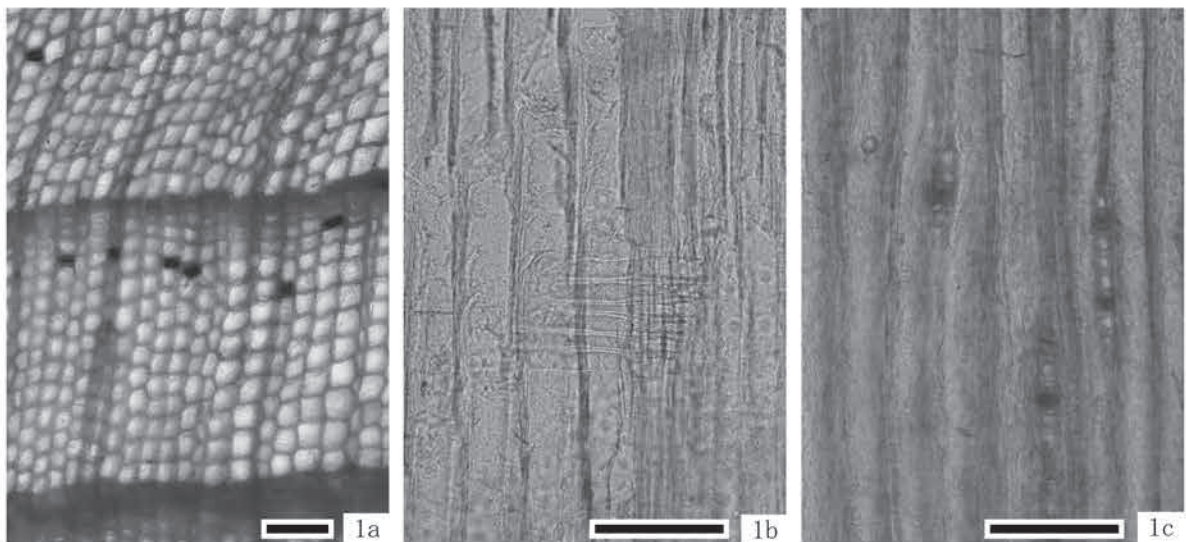
写真22 マキサヤ遺跡の木材 (1)



4. トチノキ(No.23)
5. アワブキ属(No.12)

a: 木口 b: 柁目 c: 板目
スケールは100 μ m

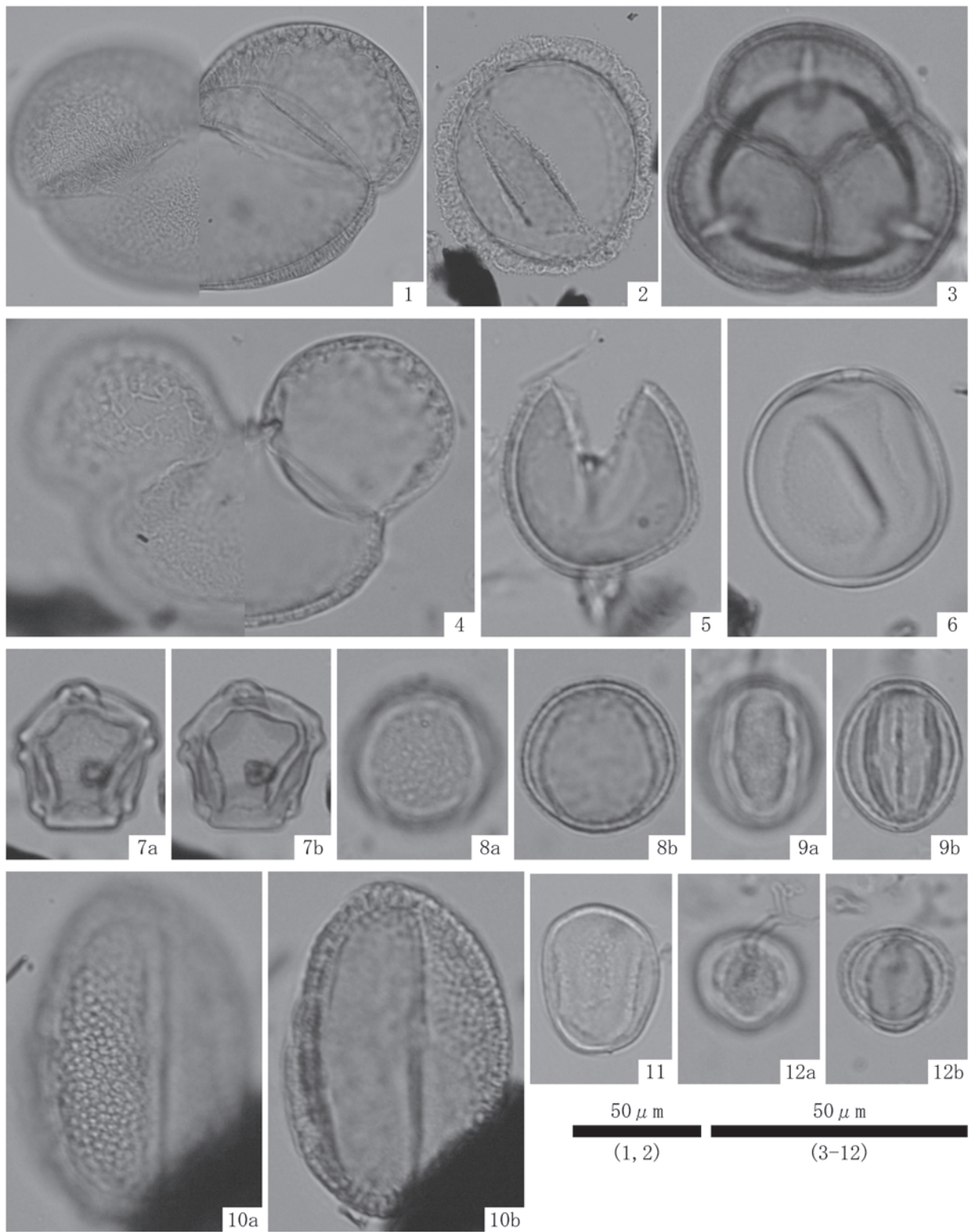
写真23 マキサヤ遺跡の木材 (2)



1. ヒノキ属(No.30)

a: 木口 b: 柁目 c: 板目
スケールは100 μ m

写真24 和田谷遺跡の木材



- | | |
|-----------------------|----------------------|
| 1. モミ属(試料番号27) | 2. ツガ属(試料番号26) |
| 3. ツツジ科(試料番号27) | 4. マツ属(試料番号26) |
| 5. スギ属(試料番号28) | 6. イネ科(試料番号27) |
| 7. ハンノキ属(試料番号26) | 8. コナラ属コナラ亜属(試料番号28) |
| 9. コナラ属アカガシ亜属(試料番号28) | 10. ソバ属(試料番号26) |
| 11. カヤツリグサ科(試料番号27) | 12. ヨモギ属(試料番号28) |

写真25 マキサヤ遺跡の花粉化石

第7章 総括

第1節 路線内遺跡の調査成果

1 はじめに

一般国道2号（玉島・笠岡道路）改築工事の路線予定地は、岡山県南西部の瀬戸内海から約3kmほど内陸に入った地点で、寄島山地を東西に貫いている。路線内の東西約2kmの範囲には、東から浅口市鴨方町に所在する城殿山遺跡、和田谷遺跡、浅口郡里庄町に所在するマキサヤ遺跡があり、それぞれ発掘調査を実施した。

各遺跡で確認した遺構や遺物の消長を第272図に示したが、旧石器時代から室町時代にかけての多様な遺構を検出し、貴重な遺物が多く出土するなど、大きな成果をあげている。これら路線内に所在する遺跡の調査成果を、周辺遺跡の状況も踏まえながら整理し、地域の歴史における位置付けや評価について時代別にまとめた。

2 旧石器時代

マキサヤ遺跡では、縄文時代を中心とする河道1から隠岐産黒曜石製の縦長剥片が出土しており、時期は後期旧石器時代に遡る可能性がある。近辺では、瀬戸内海沿岸部の浅口市寄島町の三郎島遺跡でサヌカイト製のナイフ形石器や尖頭器が出土しており⁽¹⁾、当地域での旧石器人の活動が垣間みえる。

3 縄文時代

今回の調査では縄文時代の遺物が比較的多く出土している。和田谷遺跡では、縄文時代草創期の有茎尖頭器が1点包含層から出土している。

遺跡名	種別	旧石器時代	縄文時代						弥生時代			古墳時代			奈良時代	平安時代	鎌倉時代	室町時代	
			草創期	早期	前期	中期	後期	晩期	前期	中期	後期	前期	中期	後期					
城殿山遺跡	遺構																		
	遺物																		
和田谷遺跡	遺構																		
	遺物		■																
マキサヤ遺跡	遺構																		
	遺物	■			■	■	■	■	■	■	■	■	■						

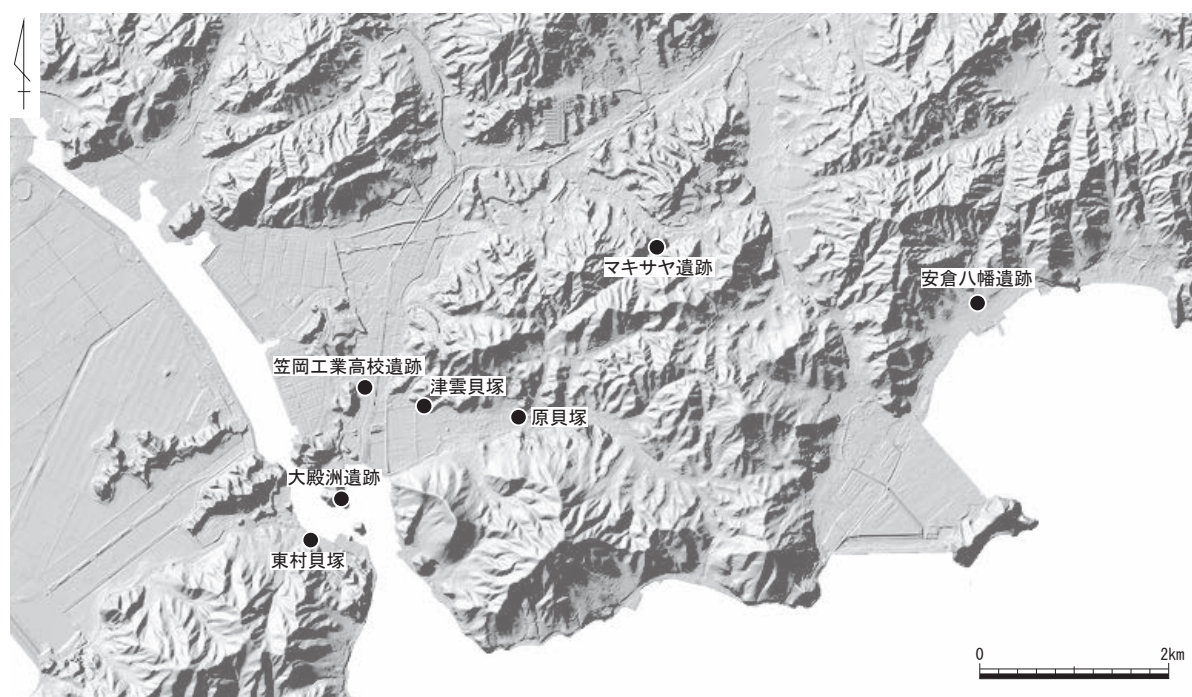
第272図 路線内遺跡の消長

マキサヤ遺跡では、丘陵裾部の包含層や低位部を流れる河道から、縄文時代の遺物が多く出土した。特に河道1では、縄文時代後期前葉、福田K2式直後から縁帯文成立期にかけての土器をまとまった状態で検出した。本章第4節で詳細な検討を行っているが、これまで瀬戸内東部では資料が限られていた縁帯文成立期の様相を示す良好な資料で、その特徴としては、高知県本山町松ノ木遺跡出土土器を標式とする「松ノ木式」⁽²⁾の影響がかなり強く表れた土器群と評価できる。これらの土器は破片も大きく、河道1西岸側から投棄された状況で、集落本体は河道西側の隣接地か南西側の調査地外に存在していた可能性が高い⁽³⁾。マキサヤ遺跡では、量は少ないものの、前期磯の森式から晩期後半の突帯文土器が出土しており、周辺では縄文時代前期以降、断続的に集落が営まれていたと考えられる。

また、晩期に属する遺物として、四国三波川帯産と推定される結晶片岩製の石棒が2点出土している。県内では、南部の岡山市百間川沢田遺跡、同津島岡大遺跡、瀬戸内市門田貝塚などでの出土が指摘されている⁽⁴⁾。結晶片岩製の石棒は、晩期後葉には関西から中四国東部に広がっており、縄文から弥生移行期の地域社会を維持する目的で石棒祭祀が行われていたようで⁽⁵⁾、マキサヤ遺跡においても祭祀が共有されていたと考えられる。

マキサヤ遺跡周辺の縄文時代の遺跡位置を第273図に示した。マキサヤ遺跡の南西部には、山を挟んで約3kmの地点に笠岡市津雲貝塚（国史跡）が存在する。近年、市教育委員会が範囲確認調査を行い、遺跡範囲や存続時期などの詳細が明らかになった⁽⁶⁾。また、大正時代発掘資料の再検討により170体あまりの出土人骨は、縄文時代後期から晩期の約300年間にわたって、同じ出自集団である周辺集落の構成員も含めて埋葬されたと推定されている⁽⁷⁾。

県内の縄文集落について検討を行った平井勝氏は⁽⁸⁾、マキサヤ遺跡が所在する笠岡湾東岸地域では、中核的な集落（津雲貝塚）に小規模・短期間の居住を示す集落が併存しており、後期以降の河川の沖積化に伴う集団分岐の結果、小規模・短期間の集落が増加したと推定した。当地域の縄文遺跡のほとんどが臨海の遺跡であるが、マキサヤ遺跡は後期前葉が中心となる時期で、海からは約3kmほど



第273図 マキサヤ遺跡周辺の縄文遺跡 (1/80,000)

内陸に入った地点の丘陵裾部に位置するのが特徴である。季節的なものか、ある程度長期にわたるのかは不明であるが、津雲貝塚のような中核的集落の補完的な存在として、内陸部にマキサヤ遺跡が存在していたと考えられる。

4 弥生時代・古墳時代

弥生時代の遺構・遺物については、路線内の3遺跡全てで確認している。最も古い時期のものは、マキサヤ遺跡の河道1から出土した弥生時代前期後半の甕片である。マキサヤ遺跡では丘陵裾部で弥生時代中期中葉の竪穴住居や土坑、集石などを検出しており、小規模な集落が営まれている。

和田谷遺跡においては、複数条の溝のみを検出しているが、溝の埋土や調査地南端の谷部からは弥生時代中期後葉の土器が出土しており、集落本体は溝や谷の上方、調査区外の山裾に存在している可能性が高い。

城殿山遺跡では、弥生時代後期末を中心とする墳墓を検出した。本章第2節で詳細な検討を行っているが、弥生時代後期後半から古墳時代初頭にかけて丘陵頂部から斜面部上方にかけて、その墓域を拡張しながら墳墓が造営されていく様相が明らかになった。特に埋葬施設1から出土した薄手で茎の長い鉄剣や楽浪系土器、埋葬施設4から出土した翡翠製及び水晶製の勾玉、ガラス小玉など特徴的な遺物が多い。

県内で鉄製刀剣類が出土した弥生時代の墳墓を表20⁽⁹⁾に示した。これまでのところ11遺跡、12遺構が確認されている。吉備における墳墓への刀剣類副葬は、弥生時代後期後葉の倉敷市楯築墳丘墓に始まり、後期末葉になると剣の副葬が広がる。副葬された鉄剣には階層性が認められ、長剣を含む厚手の剣は上位、薄手の短剣は下位の墳墓に副葬されるようである⁽¹⁰⁾。また、倉敷市楯築墳丘墓や同女男岩墳丘墓など上位の墳墓に副葬された鉄剣は、北部九州製との指摘がある⁽¹¹⁾。一方で、城殿山遺

表20 県内刀剣類出土の弥生時代墳墓

No.	遺跡名	出土遺構	所在地	時期	墳丘形態	墳長(m)	刀	剣	鏃	鏡	玉類	農工具	特殊器台	特殊壺
1	楯築墳丘墓	中心主体(木棺木槨)	倉敷市矢部	後期後葉	双方中円形	80		1			○		○	○
2	鋳物師谷2号墓	N石室(竪穴式石室)	総社市清音三因	後期後葉	方形	30	1				○		○	○
3	観音堂弥生墳丘墓	第1主体(竪穴式石室)	岡山市北区大窪	後期末葉	方形			1			○			
4	みそのお42号墓	第3主体部(木棺)	岡山市北区御津高津	後期末葉	長方形	21.5		1			○	○		
5	みそのお42号墓	第5主体部(木棺)	岡山市北区御津高津	後期末葉～	長方形	21.5		1	○			○		
6	みそのお38号墓	第6主体部(木棺)	岡山市北区御津高津	後期末葉～	長方形	8		1						
7	女男岩墳丘墓	中央土壙墓(木棺)	倉敷市矢部	後期末葉	方形?	10～		2						○
8	すりばち池南1号墓	第4主体(木棺か)	総社市小寺	後期末葉	長方形	14.4		1			○			
9	宮山墳墓群	竪穴式石室	総社市三輪	後期末葉～	前方後円形	38	1	1	○	○	○		○	○
10	横見4号墓	第1主体(箱式石棺)	新見市上市	後期末葉	方形	10		1				○		
11	便木山遺跡	第26号土坑墓	赤磐市山陽	後期末葉	—			1						
12	城殿山遺跡	埋葬施設1(木棺)	浅口市鴨方町六条院西	後期末葉～	—			1						

跡など下位の墳墓に副葬された鉄剣については、在地もしくは周辺地域での製作が想定される⁽¹²⁾。

吉備の墳墓では、特殊器台・特殊壺の有無や組み合わせによっても階層性が存在することが指摘されている⁽¹³⁾。城殿山遺跡と同一地域内の墳墓としては、北東約5kmに浅口市鴨方町和田遺跡が知られている⁽¹⁴⁾。和田遺跡では、弥生時代後期末葉の木棺墓・土坑墓群がみつかり、剣副葬は認められないが、特殊器台と共に多様な玉類が出土している。城殿山遺跡では、特殊器台や特殊壺は確認しておらず、吉備の墳墓の中では下位に位置するが、地域内では特殊器台をもつ和田遺跡に次ぐ首長層の墳墓と考えられる。

城殿山遺跡は瀬戸内海から北へ約3kmと海に近く、瀬戸内海を東進する際には、岡山市・倉敷市境の足守川下流域に想定される吉備中核地への入口付近に立地する。楽浪系土器や鉄剣、玉類など多様な副葬品の存在からも、城殿山遺跡の墳墓群の造営者は、瀬戸内海を介した交流への関与が想定される。なお、城殿山遺跡の造墓主体となるような、同時期の集落は周辺では分かっていない。「城殿山」を臨むことのできる範囲の丘陵上等に存在している可能性が高く、遺跡のすぐ北西に所在する散布地などがその候補となる。

古墳時代の集落については、マキサヤ遺跡と和田谷遺跡で確認している。マキサヤ遺跡では古墳時代前期初頭の竪穴住居1軒を検出しているが、短期間で継続しない。

和田谷遺跡では、6世紀末から7世紀にかけての段状遺構と土坑を複数検出している。段状遺構の中には、鍛冶等の高温作業の痕跡をもつもの、鉄滓や製塩土器が出土するものがあり、生産に関連する作業場として機能が想定される。遺跡南端の谷部からは、6世紀末から7世紀前半の須恵器、土師器が比較的まとまって出土している。谷上方の調査地外に遺構の広がりも推定され、居住の中心域が存在していた可能性がある。また、和田谷遺跡の包含層からは、副葬品と考えられる耳環や鉄鏃が出土しており、近辺に後期古墳が存在していたと考えられる。大型の横穴式石室をもつ古墳は、調査地より東に約2.5km離れた浅口市鴨方町天神山塚古墳などが所在する六条院中地区に集中している。南約1.5kmには浅口市寄島町福井古墳が存在するが、和田谷遺跡の位置する六条院西地区では、古墳時代後期の横穴式石室墳等は知られていなかった。

5 奈良時代・平安時代

奈良～平安時代の遺構・遺物については、和田谷遺跡とマキサヤ遺跡で確認している。和田谷遺跡では、奈良時代の段状遺構や土坑、鍛冶工房を検出したが、掘立柱建物などは調査区内では確認しておらず、集落本体の状況は不明である。遺物は、須恵器、土師器、製塩土器などがまとまって出土しており量も多い。平安時代になると掘立柱建物、柱穴列、段状遺構、土坑、溝など多くの遺構を検出している。遺物も多様なものが出土しており、須恵器、土師器、黒色土器、灰釉陶器、緑釉陶器、製塩土器や土錘などがある。和田谷遺跡は平安時代に最盛期を迎え、地域内でも有力な集落を形成していたと考えられる。

本章第3節で詳しく検討を行っているが、和田谷遺跡の平安時代の掘立柱建物は、ほぼ全てが大型ないし中型でも上位の規模をもっており、遺跡が所在する浅口郡大島郷の中で一二を争う有力者の存在が推定されている。集落の性格を検討するうえで、地方の政治的・経済的有力者である地方豪族の居宅を抽出する際の指標を参考にすると、古代の豪族居宅は居住・家政空間と収納空間で構成されるのが一般的で、総柱高床倉庫群などを伴うこと、遺物としては文字関係資料、施釉陶器、製塩土器、

工房関係遺物などがあげられている⁽¹⁵⁾。和田谷遺跡においては、居住空間としての側柱建物、収納空間としての総柱建物が存在し、出土遺物には転用硯や施釉陶器、製塩土器が認められる。このような遺構・遺物の状況から、和田谷遺跡で検出した平安時代の集落は、浅口郡大島郷における有力者（豪族）の居宅であったと考えられ、鍛冶工房や製塩土器の存在から、その初源は奈良時代に遡る可能性が高い。また、和田谷遺跡では包含層中から平安時代の軒丸瓦が出土しており、遺跡付近には平安期の寺院も存在していた可能性がある。

マキサヤ遺跡においては、河道2左岸に木杭と横木で構築された護岸を検出した。時期は、木杭の放射性炭素年代測定の結果から平安時代と考えられるが、調査地内では河道護岸以外の遺構を確認しておらず、集落等の存在は不明である。

6 鎌倉時代・室町時代

中世の遺構や遺物については、路線内の3遺跡全てで確認した。マキサヤ遺跡では、室町時代の柱穴列や土坑を中心に確認しているが、密度も薄く小規模な集落の一部と考えられる。平安時代の護岸を検出した河道2は、室町時代には埋没しており、低位部は中世以降に耕地化が進んだようである。

和田谷遺跡では、鎌倉時代を中心とする掘立柱建物、柱穴列、土坑、溝等を確認しており、遺構配置から屋敷地と推定される。平安時代と比較して集落の規模は縮小し、中心は調査地の南に移動するが、個々の掘立柱建物の規模は大きい。遺物は、土師器、瓦質土器、青白磁、土錘、砥石、鉄釘、銅銭等が出土しているが、平安期と比べると卓越した内容ではない。

和田谷遺跡のすぐ東の丘陵頂部には、城殿山遺跡が位置しており、室町時代の土坑や溝等を検出している。遺跡内では、調査前から石灰岩製の大小2基分の宝篋印塔が花崗岩製の台座の上に置かれており、南北朝の動乱を描いた『太平記』に登場する頼宮又次郎の墓と伝承されている⁽¹⁶⁾。宝篋印塔は笠部隅飾の特徴から、時期は15世紀、室町時代中頃の作と考えられる⁽¹⁷⁾。ただ、宝篋印塔自体は移動している可能性が高く、造立時の位置については不明である。

和田谷遺跡の南50mには、谷を挟んで土居遺跡が存在する。現在も東西130m、南北70m程の区画が確認でき、土塁の跡が一部残ることから中世の居館跡と推定される⁽¹⁸⁾。また、和田谷遺跡南東の山頂には、全長300mを超える規模の山城である竜王山城跡が所在する⁽¹⁹⁾。江戸時代に記された『長川寺由緒記』によると、浅口郡の国人から「大将」として伊予から迎えられた細川通薫が一時在城し、天正3（1575）年に浅口市鴨方町の鴨山城に移ったとされている⁽²⁰⁾。細川通薫在城の真偽は別として、和田谷遺跡・城殿山遺跡の周辺では、時期の近い有力者の居館や山城、集落、供養塔などがまとまって存在していることが注目される。地域内において、平安時代に確認された有力者層の集落が鎌倉時代以降も継続し、政治・経済的な拠点や居住地を移動させながら展開していく様相が看取できる。

7 おわりに

中世の動乱期が終わり、江戸時代を迎えるとマキサヤ遺跡の所在する里庄町新庄は、元和元（1615）年に摂津麻田藩領となる。また、和田谷遺跡・城殿山遺跡の所在する浅口市鴨方町六条院西は、寛文12（1672）年に備前岡山藩の支藩である鴨方藩領となり、それぞれ幕藩体制による支配を経て明治時代に至る。

ここまで、路線内に所在する遺跡の調査成果を整理し、その歴史的な位置付けを試みた。当地域の

歴史は旧石器時代に遡り、縄文時代から中世にかけて消長を繰り返しながら、集落や墳墓などが発展していく様相の一端が明らかになった。

最後になるが、発掘調査事業を進めるにあたり、御理解・御協力をいただいた地元及び関係機関の皆様には深甚なる謝意を表す。

(石田)

註

- (1) 町誌編纂委員会『寄島町誌』 1966
- (2) 本山町教育委員会『松ノ木遺跡Ⅰ』本山町埋蔵文化財調査報告書第3集 1992
- (3) 河道1の西側は地形的にも一段高いが削平を受けており、遺構や遺物は検出できなかった。
- (4) 中村 豊「中四国地域における縄文時代精神文化について—大型石棒・刀剣形石製品を中心に—」『山陰地方の縄文社会』古代文化センター研究論集第13集 島根県古代文化センター 2014
- (5) 前掲註(4)
- (6) 笠岡市教育委員会『津雲貝塚総合調査報告書』笠岡市埋蔵文化財発掘調査報告6 2020
- (7) 山田康弘・日下宗一郎・米田 稔「出土人骨の年代測定値に基づく津雲貝塚人の社会の再検討」『津雲貝塚総合調査報告書』笠岡市埋蔵文化財発掘調査報告6 2020
- (8) 平井 勝「縄文時代」『岡山県の考古学』吉川弘文館 1987
- (9) 表中の遺跡については、次の文献を参考にした。1:『楯築弥生墳丘墓の研究』1992、2:『岡山県清音村鍔物師谷2号墳出土の土器』『倉敷考古館研究集報』第13号 1977、3:『弥生墳丘墓の成立と展開』『岡山県史』第2巻 原始・古代Ⅰ 1991、4~6:『みそのお遺跡』『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』87 1993、7:『女男岩遺跡』『倉敷考古館研究集報』第10号 1974、8:『すりばち池南墳墓群』『総社市埋蔵文化財調査年報7(平成8年度)』1997、9:『宮山墳墓群』『岡山県史』第18巻 考古資料 1986、10:『横見墳墓群』『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』15 1977、11:『便木山遺跡発掘調査報告』岡山県営山陽新住宅市街地開発事業用地内埋蔵文化財発掘調査概報(2) 1971、12:本書
- (10) ライアン・ジョセフ「古墳出現期における刀剣類の生産と流通の二相—吉備地域を中心に—」『日本考古学』第49号 日本考古学協会 2019
- (11) 村上恭通「鉄製武器形副葬品の成立とその背景—三韓・三国時代と前方後円墳成立期を対象として—」『先史学・考古学論究Ⅲ—白木原和美先生古稀記念献呈論文集』龍田考古会 1999、村上恭通「鉄器生産・流通と社会変革—古墳時代の開始をめぐる諸前提—」『古墳時代像を見なおす—成立過程と社会変革—』青木書店 2000
- (12) ライアン・ジョセフ「中四国・畿内における鉄製刀剣の普及」『古代武器研究』16 古代武器研究会・山口大学人文学部考古学研究室 2020、前掲註(10)
- (13) 宇垣匡雅「大和王権と吉備地域」『瀬戸内海地域における交流の展開』古代王権と交流6 名著出版 1995、宇垣匡雅「墓と階層 中・四国」『弥生社会のハードウェア』弥生時代の考古学6 同成社 2009
- (14) 岡山県教育委員会「和田遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』42 1981
- (15) 山中敏史・石毛彩子「地方豪族居宅」『古代の官衙遺跡 II 遺物・遺跡編』独立行政法人文化財研究所 奈良文化財研究所 2004
- (16) 鴨方町教育委員会『鴨方町文化財のしおり—地質時代から現代まで—』 1965
- (17) 浅口市教育委員会水田貴士氏の御教示による。
- (18) 岡山県教育委員会『岡山県中世城館跡総合調査報告書』第2冊—備中編— 2020
- (19) 前掲註(18)
- (20) 田中修實「中世の鴨方」『鴨方町史』本編 鴨方町史編纂委員会 1990 を参考にした。

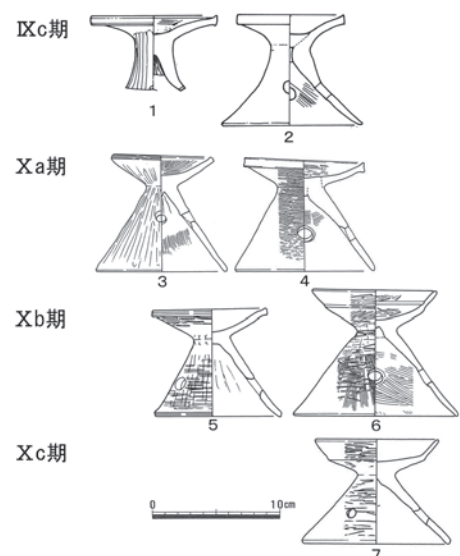
第2節 城殿山遺跡の位置付け

城殿山遺跡の区画墓は、宝篋印塔の高まりを中心とした一辺約10mの方形あるいは頂部全域の東西10m×南北18mの長方形の区画と、西緩斜面部を階段状に造成した一辺7m弱の2つの小区画で構成されている。検出した埋葬施設は頂部3基、中段2基、下段1基で、未調査部分にもまだ埋葬施設が存在すると予想されるが、地形の広がりからみてせいぜい各区画に数基程度と思われる。このように小規模な方形区画に少数の埋葬施設を配した墓は個別区画墓と呼ばれるもので、弥生時代終わり頃に出現した新しい墓制と考えられている⁽¹⁾。これまでに主に高梁川から吉井川の間の吉備中枢部⁽²⁾で確認されているが、鴨方地域では城殿山遺跡が初例となる。本遺跡の北5kmにある後期後葉～末葉に営まれた浅口市和田遺跡は8基の土坑墓が不規則に配された多数埋葬墓で、構成が大きく異なっており、当地域ではこの2遺跡の形成期間の間に墓制の変化が起こったと考えられる。

埋葬施設は形態から小口溝を有する①類(埋2・3)、やや大型で深い②類(埋1・4・5)、石材を用いる③類(埋6)に分けられ、さらに②類は枕石の無い②a類(埋5)と枕石の有る②b類(埋1・4)に細分できる。また、棺内の朱の位置は②a類が中央部、②b類が枕石周辺であり、両者の違いが埋葬に関わる祭式の違いを反映している可能性がある。岡山市みそのお遺跡や津山市有本遺跡では時期が降るにつれ小口溝を持つ土坑墓から小口溝を持たないもの、さらには枕石を有するものへと推移しており、当遺跡でも同様の状況を想定し得る。そこで、ここであらためて出土土器の位置付けを行い、埋葬順序を考えていきたい。土器編年は岡山南部で広く支持されている高橋編年に準じ、時期区分は後期後葉(VIII b～d期)、後期末葉(IX期)、終末期(Xa～b期)⁽³⁾とする。

埋葬施設4から小型器台が出土している。5の受け部は浅く、口縁端部に面を持ち、外面は横方向のヘラミガキを施す。受け部が貫通しない小型器台の初現はIXc期の谷尻遺跡で、形態はよく似るが、外面の調整方向が異なる。また、小型器台は次第に口縁が立ち上がるタイプに変化するが(第274図)、体部外面に横方向のミガキを施す小型器台B⁽⁴⁾の初現は今のところX期に下ることから、5をX期初頭に位置付けておきたい。埋葬施設1から時期を推定しうる土器は出土しなかったが、墓坑形態や枕石・朱の共通性から、埋葬施設4と同じ頃に埋葬が行われたと考えられる。

埋葬施設5の墓坑上から出土した高杯9は通常と比べて杯部が極端に小さく既存の編年に当てはめがたいが、黒宮大塚から出土した小形で椀状の高杯II⁽⁵⁾と比較して口縁端部の屈曲が緩く、端部外面の沈線が形骸化している点や外面のミガキが横方向である点から、本例が後出すると考えられる。ほかの個体のミガキも横方向で高杯11も極めて短脚である点から、IXa期とみるのが妥当と思われる。埋葬施設6の高杯12は水漉粘土の使用からIX期以降とは言えるが、細片のため位置付けは難しい。本調査中に埋葬施設2・3から出土した土器は無いが、石塔移転に伴う立会



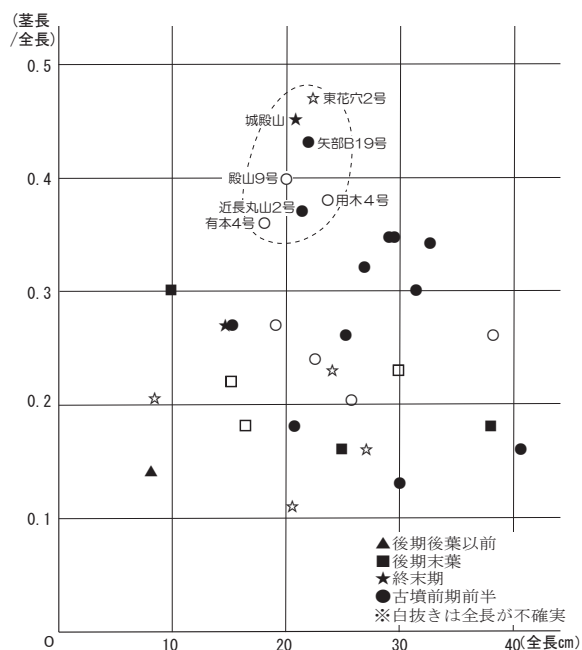
1・2: 谷尻遺跡No176土坑 3: 伊福定国前遺跡土坑94
4: 鹿田遺跡6土器溜まり1 5: 津寺遺跡2住居40
6: 百間川原尾島遺跡3井戸7 7: 矢部南向遺跡住62上層

第274図 小型器台の変遷 (1/6)

調査時に丘陵頂部でⅧb～c期と思われる18が採集されており、埋葬施設2・3は墓の形態から②類の埋葬施設1に先行すると考えられ、埋葬施設2・3の時期を示す可能性が高い。そう考えれば、埋葬施設1が区画の端に偏在している理由も埋葬施設2・3を避けたためと理解できる。以上のことから、2・3（後期後葉）→5（後期末葉）→1・4（終末期）の順に埋葬が行われたと判断した。このような理解が許されるならば、城殿山遺跡は単一の造営主体が3世代以上にわたって構築したとみなすことも可能である。この場合、埋葬施設6の時期とは関係なく埋葬施設1・4は既存の区画に追葬された形になるが、切り合いを持たず軸を揃えた整然とした配置からは先行埋葬を認識していたとみられ、敢えてその場所を選択したと思われる。急峻な地形の制約により新たな区画の造成が困難であったためかもしれないが、「始祖の墓を一番高いところに築」くような観念・思想⁽⁶⁾の影響も考えうる。なお、埋葬施設1の棺内出土炭化物についてAMS年代測定を実施し、結果を第6章第2節に掲載している。2世紀後半～3世紀初頭の範疇と理解できようか。

次に、各埋葬施設から出土した遺物から被葬者像を考えていきたい。

埋葬施設1からは棺上と思われる位置で、円筒形の3が出土した。形態的特徴から楽浪土器の筒杯を模倣した土器と考えられる。楽浪土器は弥生時代後期後半から古墳時代初頭にかけて頻出しており、墓の形態から推定される時期と整合する。3は円盤状の底部に均一な厚みの板状の側壁を貼り付け、外面側壁下端にケズリを施すなど弥生土器に無い技法がみられる一方、楽浪土器特有の底部の糸切りや回転台の使用は認められない⁽⁷⁾。色調は淡黄色で胎土には砂粒をやや多く含み、金雲母や角閃石があまりみられない点で当地域の弥生土器と異なるが、中世土器の胎土とはよく似ており、在地製作とみて違和感はない。筒杯の出土は壱岐・対馬を含めた北部九州しかなく、模倣とはいえ吉備では赤磐市門前池東方遺跡⁽⁸⁾、倉敷市上東遺跡に次ぐ3例目となり注目される。楽浪土器は「楽浪郡との間に直接的か間接的なつながりがあった」⁽⁹⁾ことを示しており、その模倣土器が供献された被葬者は、楽浪と何らかの関わりがあったと想定できる。武末純一氏は楽浪土器が1遺跡から1～2点出土する例を「対馬型」と分類し、小規模な交易や間接的な流入を推定しており⁽¹⁰⁾、吉備の出土例もこれに該当する可能性がある。



第275図 茎指数の分布

また、筒杯を含む食膳具は「交渉する人々によって持ち込まれ、交渉の場である会食において使用された道具」との推測もあり⁽¹¹⁾、被葬者の性格を考えるうえで興味深い。ただし、上東遺跡は還元炎焼成で、門前池東方遺跡は時期が異なる。岡山市百間川兼基遺跡からも楽浪系土器が出土しており、複数の契機や流入経路を想定しておく必要がある。また、これらの遺跡が古代の津と推定される河口近くや水路と内陸路の交差する拠点集落にあり、交易の要所と推定される場所であることは重要である。寺井誠氏は日本列島への流入には朝鮮半島情勢の変化による影響を想定している⁽¹²⁾。

埋葬施設1の棺内からは鉄製短剣M1が出土した。一般的には茎長7cm以上を目安に長茎に分類され、M1は茎長9.25cmを測り、長茎の部類に属

す。全長は20.7cmと小型で、ライアン・ジョセフ氏のⅡb式⁽¹³⁾、杉山和徳氏のⅢ-2型⁽¹⁴⁾に相当し、これらは弥生時代終末期に成立した小型規格品と考えられている。県下での特徴を明らかにするため、古墳時代前期前半（X d期）までの鉄剣の全長に対する茎の比（茎長÷全長＝茎指数）を求め、グラフに表した（第275図）。これに明らかなように、全長20cm前後で茎指数0.35以上にまとまりが認められ、M1もここに含まれる。吉備では短剣を下位とする階層性が指摘されているが⁽¹⁵⁾、この群に該当する墳墓は小型の個別区画墓かそれに続く小墳であり、墳墓規模との対応関係が認められる。このうち最古段階の資料が本遺跡と鏡野町東花穴2号墳という吉備周辺部の離れた2地点にみられることは、終末期段階に墓制の要素の一つに長茎短剣が組み込まれ、吉備中枢部から一元的に配布された可能性を示す。また、M1は人為的に折り曲げられた、いわゆる「折り曲げ鉄器」⁽¹⁶⁾である。折り曲げ鉄器は終末期に北部九州から東へ拡散したとの見解が示されている⁽¹⁷⁾が、県下で終末期以前に遡る例はみそのお42号墳墓と総社市殿山12号墳しかなく、M1はここでも初期の事例となる。長茎短剣と折り曲げ鉄器、個別区画墓の分布が重なっている点、留意しておきたい。

埋葬施設4では棺内から翡翠製勾玉、水晶製勾玉、ガラス玉が出土した。出土位置から、翡翠製勾玉J1は単体で首飾り、水晶製勾玉J2はガラス玉と一連の腕飾りとして着装した状態で埋葬されたと考えられ、被葬者自身の翡翠製勾玉と水晶製勾玉に対する意識の差が看取できる。翡翠製勾玉は後期後半から終末期に造営された足守川下流域及び高梁川水系小田川下流域の大形墳丘墓に限定的に副葬されており、吉備における勾玉祭祀の中で重要な位置付けがなされている⁽¹⁸⁾。とりわけ丁字頭の翡翠製勾玉は吉備の代表的な墳丘墓である倉敷市楯築遺跡と岡山市雲山鳥打1号墓⁽¹⁹⁾、総社市鑄物師谷1号墳⁽²⁰⁾からしか出土しておらず、J1は被葬者と吉備中枢部との強い繋がりを示す。また、勾玉の大きさは階層差を反映するとみられているが⁽²¹⁾、J1は鑄物師谷1号墳の丁字頭でない小形の勾玉3とほぼ同大・同形で、集落遺跡出土品よりは大きく、中～下位クラス程度と思われる。列島内での水晶製勾玉の弥生時代の確実な例は京都府奈良岡遺跡のほかない⁽²²⁾が、時期差が大きく、直接的な関連は想起しがたい。現時点では終末期段階の水晶製勾玉は朝鮮半島南部でしか出土しておらず⁽²³⁾その出自が問題となるが、J2はやや半透明の水晶製で、材質や形状、穿孔方法が朝鮮半島とは異なることから、列島内で生産された可能性が高い⁽²⁴⁾。県下での水晶製玉類の副葬例として後期末葉の和田遺跡第一号墓及び倉敷市辻山田遺跡10号墓の算盤玉が知られているが、これらは山陰に多い横長の形状ではなく北部九州から瀬戸内海にかけて多く分布する縦長の形状⁽²⁵⁾である。後期末葉～古墳時代初頭の鉄針穿孔を用いた水晶製算盤玉の生産地には山陰と北部九州が知られているが⁽²⁶⁾、水晶製玉類の副葬は壱岐・対馬を含む北部九州に集中しており⁽²⁷⁾、本墳の水晶製勾玉を列島内で入手したならば、北部九州が有力な候補にあげられよう。ガラス玉は分析の結果、銅着色によるカリガラス製であることが明らかとなった（第6章第1節）。大賀克彦氏は着色剤による流通状況の地域差や変化を明らかにしており、それによると、銅着色のカリガラス製品は後期前半では近畿北部に分布の核があり、後期後葉に流入がいったん中断するが、古墳時代前期初頭頃に畿内を中心として再流入する⁽²⁸⁾。J3～10は端面研磨がなされた「古墳時代的」な特徴を有しており⁽²⁹⁾、これに該当すると思われる。谷澤重里氏の分析では、楯築遺跡・辻山田遺跡10号墓・和田遺跡第一号墓出土品はコバルト着色、鑄物師谷1号墳・岡山市矢籾山墳丘墓出土品は銅着色であり⁽³⁰⁾、吉備では末葉と終末期の間に流通の変化が起きたと想定され、本遺跡の状況とも整合している。埋葬施設4の玉類は非常に特殊な様相を示し、被葬者が特別な性格を有していたことを物語る。また、埋葬施設4では青銅片M2が頭部近くで

出土している。細片で薄い平滑で銅質も良く、鏡片の可能性が指摘されている⁽³¹⁾。終末期までの墳墓からの鏡片出土例（破碎鏡除く）は赤磐市さくら山2号墓⁽³²⁾しかなく、もし鏡片であれば、これもまた数少ない貴重な事例となる。完形鏡を副葬する墳墓とは墓の規模や内容に格差があるが、鏡片の所有者は「首長の周辺に位置する人物」⁽³³⁾と推定されており、被葬者像を考えるうえで重要な視点を与えてくれる。なお、辻山田遺跡10号墓からも厚さ1.5mmの青銅小片が出土している。辻山田土坑墓では水晶製玉類と青銅片の組合わせが一致し、注目される。

埋葬施設5で出土した鉄鏃M3は比較的大形で、全長5cmを越える大形の鉄鏃はみそのお遺跡41号墳墓第6主体部及び42号墳墓第5主体部、赤磐市便木山方形台状墓北側第2土坑、真庭市中山遺跡No.188土坑墓など、後期後葉～終末期の土坑墓から出土している。また、身部に単孔のある無茎三角形は真庭市ヒロダン・小坂向遺跡の後期末葉の竈穴住居など県北部で出土しており、会下和宏氏はこのような鉄鏃が山陰側からもたらされた可能性を指摘している⁽³⁴⁾。

埋葬施設6から出土した鉞は本来一個体であり、意図的に折られた「破断鉄器」⁽³⁵⁾と考えられる。みそのお遺跡42号墳墓第3主体部では2つに切断された短剣が一部重なった状態で出土しており、折り曲げ鉄器の種類も剣に次いで鉞が多いことから、埋葬施設1と同様の埋葬儀礼により副葬されたと考えられる。またこのことは両者の埋葬時期にあまり隔たりが無いことの傍証となる。

以上みてきたように、城殿山遺跡は後期後葉～終末期に営まれ、新しい造墓原理⁽³⁶⁾と共に折り曲げ鉄器や鏡片の副葬などの新しい葬祭儀礼を受容していることが明らかとなった。そこには弥生時代的な要素と古墳時代的な要素、北部九州的な要素と畿内的な要素が混在しており、吉備の墓制の複雑な一端を垣間見ることができる。また、本遺跡の形成時期は吉備中枢部において楯築遺跡以後大形の墳丘墓が造営される時期であり、当時の小規模墳の内容が窺える遺跡として重要である。

最後に、埋葬施設4の被葬者像について、これまでに翡翠製勾玉を副葬した墳墓との格差は歴然で、このことは逆に被葬者の特別な性格を反映していると思われる。翡翠製勾玉の流通の核は北部九州にもあり、被葬者本人が個人的に入手した可能性もなくはないが、吉備の上位階層にとって翡翠製勾玉は特別な威信財であり、被葬者の生前の働きに対して上位階層から贈与されたのではないだろうか。本遺跡は海岸線に近く、眼下の平野部を起点に東西南三方の港湾へ小河川で繋がっており、北へ進んで地蔵峠を越えれば小田川流域へ抜け、高梁川を渡って足守川を下れば吉備中枢部に至る。言い換えれば、本遺跡は瀬戸内海と吉備中枢部を繋ぐ動線上にあり、瀬戸内海への出入りに位置すると言えるだろう。このことから推定すると、被葬者は海上交通の窓口の一つを管理し、吉備の外交に何らかの役割を果たした人物ではないだろうか。翡翠製勾玉はその功に対し贈与されたと考えられる。一方、水晶製玉類の上位階層への副葬は認められず、贈与・分配の対象ではなかったと思われる。楽浪との交易は多くの場合「伊都国・奴国の拠点において間接的に行われ」⁽³⁷⁾ることから、水晶製勾玉はその中で独自に獲得した可能性がある。当時は社会情勢に応じて外交の重要性が高まっており、その中で被葬者が果たした役割は大きかったものと考えられる。 (渡邊)

註

- (1) 松木武彦「吉備地域における首長墓形成過程の再検討―新たな古墳論の構築にむけて―」『環瀬戸内海の考古学―平井勝氏追悼論文集―』下巻 古代吉備研究会 2002、「墓と集落および人口からみた弥生―古墳移行期の社会変化―吉備南部を分析対象として―」『古代吉備』第25集 2013 ほか
- (2) 高橋 護「6 弥生後期の地域性」『吉備の考古学的研究』(上) 1992

- (3) 岡山県教育委員会刊行報告書ではX期を古墳時代としているが、城殿山遺跡から読み取れる動きは吉備内部独自の動きであり、弥生時代からの継続性を重視してX期初頭を終末期とした。
- (4) 田中元浩「畿内地域における古墳時代初頭土器群の成立と展開」『日本考古学』第20号 2005
- (5) 間壁忠彦・間壁葎子・藤田憲司「岡山県真備町黒宮大塚古墳」『倉敷考古館研究集報』第13号 1977
- (6) 宇垣匡雅「吉備弥生社会の諸問題」『論争吉備』考古学研究会 1999
- (7) 鄭 仁盛「楽浪田筒形土器の性格」『東京大学考古学研究室紀要』第18号 2003
- (8) 則武忠直・岡 秀昭・塩見真康「岡山県山陽町門前池東方遺跡の朝鮮半島系資料」『古文化談叢』第32集 1994
- (9) 川上洋一「楽浪郡と弥生時代の「倭」—主に楽浪系土器の様相から—」『考古学ジャーナル』392 1995
- (10) 武末純一「弥生時代の楽浪系土器と三韓系土器—瓦質土器を中心に—」『地方史研究』第41巻5号 1991
- (11) 長友朋子「楽浪土器からみた交流関係」『待兼山考古学論集Ⅱ—大阪大学考古学研究室20周年記念論集—』2010
- (12) 寺井 誠「日本列島楽浪系土器についての基礎的研究」『古文化談叢』第56集 2007
- (13) ライアン・ジョセフ「長茎短剣の成立過程」『古代学研究』212 古代学研究会 2017
- (14) 杉山和徳「弥生鉄剣論」『日本考古学』第43号 日本考古学協会 2017
- (15) ライアン氏は厚さを基準に分類し、「薄手刀剣」が「小地域における有力集団墓や在地有力墓」に副葬されると考えている。ライアン・ジョセフ「古墳出現期における刀剣類の生産と流通の二相—吉備地域を中心に—」『日本考古学』第49号 日本考古学協会 2019
- (16) 清家 章「折り曲げ鉄器の副葬とその意義」『待兼山論叢』36 2002
- (17) 阿部大成「折り曲げ鉄器の副葬と鉄器生産の関係」『古代学研究』226 古代学研究会 2020
- (18) 米田克彦「玉類の副葬と祭祀からみた榑築墳丘墓の性格」『榑築墓成立の意義』考古学研究会例会シンポジウム記録11 考古学研究会 2017
- (19) 近藤義郎「雲山鳥打弥生墳丘墓」『岡山県史 考古資料』1986
- (20) 春成秀爾・葛原克人・小野一臣・中田啓司「備中清音村鍔物師谷1号墳墓調査報告」『古代吉備』第6集 1969
- (21) 米田克彦「環瀬戸内海の勾玉祭祀」『吉備弥生時代のマツリー—その実像と変容—』考古学研究会例会シンポジウム記録9 考古学研究会 2013
- (22) 熊本県梅ノ木遺跡、福井県小稲津遺跡例は位置付けに再考の余地がある。瀧音大氏の御教示による。
- (23) 中村大介「環日本海における石製装身具の変遷」『古代学研究所紀要』第24号 2016
- (24) 米田克彦氏の御教示による。
- (25) 米田克彦「弥生時代における玉作の展開」『日本海を行き交う弥生の宝石』鳥取県埋蔵文化財センター 2013
- (26) 北部九州の生産地として北九州市城野遺跡、糸島市潤地頭給遺跡がある。
佐藤浩司「北九州市城野遺跡玉作り工房の発見と今後の課題」『研究紀要』第26号 北九州市芸術文化振興財団埋蔵文化財調査室 2012、『潤地頭給遺跡Ⅰ』前原市文化財調査報告書第93集 2006
- (27) 平郡達哉・建神結香子「弥生時代西日本における副葬水晶製玉類について」『山陰研究』第13号 2020
- (28) 大賀克彦「日本列島におけるガラスおよびガラス玉生産の成立と展開」『月刊文化財』第566号 2010
- (29) 大賀克彦氏の御教示による。
- (30) 谷澤重里『玉からみた古墳時代の開始と社会変革』同成社 2020
- (31) 南健太郎氏の御教示による。
- (32) さくら山2号墓は正式報告書が未刊行のため詳細は不明。時期は「庄内式併行期」とされている。
正岡睦夫「鏡片副葬について」『古代学研究』第90号 古代学研究会 1979
- (33) 前掲註(32)
- (34) 会下和宏「弥生時代の中国地域における鉄器普及の様相」『山陰研究』第13号 2020
- (35) 清家 章「破砕副葬と葬送祭祀」『墳墓構造と葬送祭祀』古墳時代の考古学3 同成社 2011
- (36) 松木武彦氏は個別区画墓の出現を共同墓地の分節化と捉え（前掲註1）、溝口孝司氏は階層的選択が働いていると考えている。筆者は溝口氏に近い考えを有しているが、これについては今後の検討課題としたい。
溝口孝司「墓地と埋葬行為の変遷」『古墳時代像を見なおす—成立過程と社会変革—』青木書店 2000
- (37) 久住猛雄「古墳時代初頭前後の博多湾岸遺跡群の歴史的意義」『大和王権と渡来人 三・四世紀の倭人社会』大阪府立弥生博物館 2004

(38) 大橋雅也「備前・備中における古代山陽道と駅家」『古代山陽道をめぐる諸問題』考古学研究会例会シンポジウム記録5 考古学研究会 2006

<関連報告書等>

「みそのお遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』87 1993、『有本古墳群』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第59集 1997、「和田遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』42 1981、「上東遺跡 下庄遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』157 2001、「百間川兼基遺跡Ⅰ」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』51 1982、「殿山遺跡 殿山古墳群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』47 1982、『楯築弥生墳丘墓の研究』楯築刊行会 1992、『奈具岡遺跡（第7・8次）』京都府遺跡調査概報第76冊 1997、「辻山田遺跡」『倉敷考古館研究集報』第10号 1974、『矢藤治山弥生墳丘墓』矢藤治山弥生墳丘墓発掘調査団 1995、『便木山方形台状墓』岡山県宮山陽新住宅市街地開発事業用地内埋蔵文化財発掘調査概報(3) 1973、『中山遺跡』岡山県落合町教育委員会 1978、「ヒロダン・小坂向遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』176 2003

<第274図出典>

1・2：「谷尻遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』11 1976、3：「伊福定国前遺跡2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』188 2005、4：「鹿田遺跡6－第13・15次調査－」岡山大学構内遺跡発掘調査報告第26冊 2010、5：「津寺遺跡2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』98 1995、6：「百間川原尾島遺跡3」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』88 1994、7：「足守川矢部南向遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』94 1995



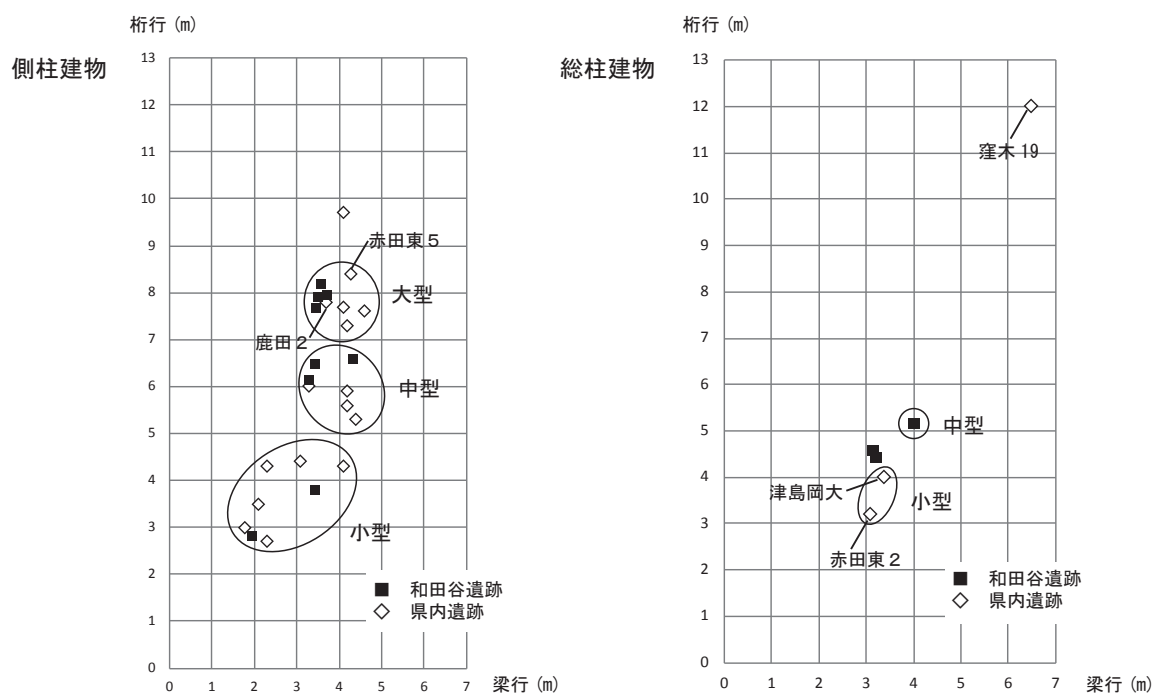
第276図 主要遺跡分布図

第3節 和田谷遺跡の遺構及び遺物について

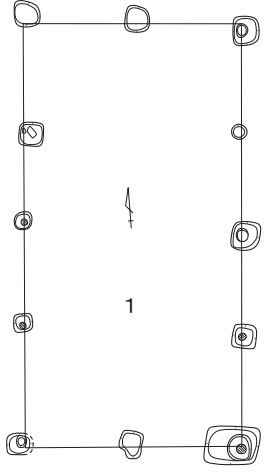
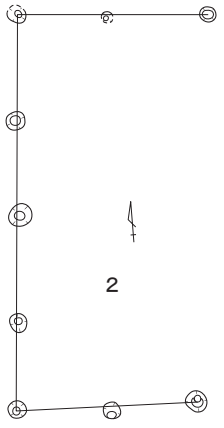
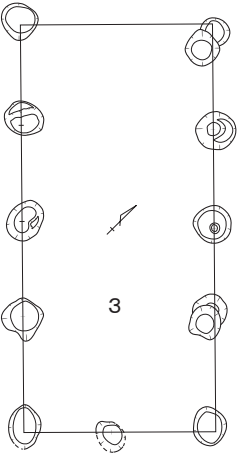
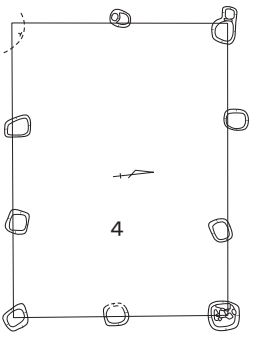
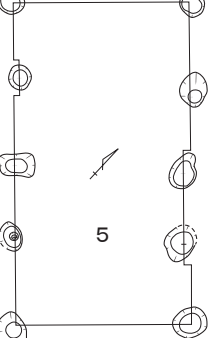
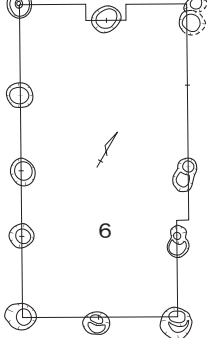
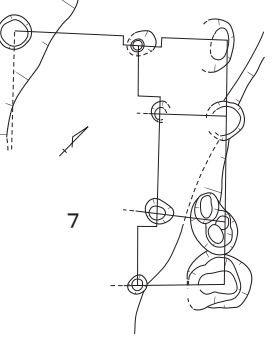
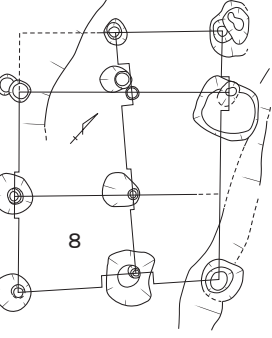

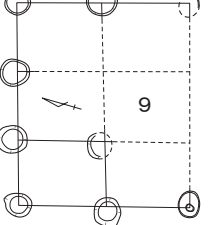
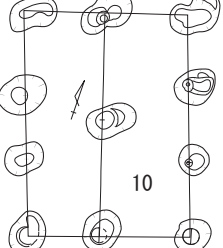
1 掘立柱建物

今回の調査の結果、和田谷遺跡からは平安時代（主に9世紀）の掘立柱建物が12棟（側柱建物9棟・総柱建物3棟）、中世期の掘立柱建物が7棟（側柱建物6棟・総柱建物1棟）みつまっている。これらの建物は、どのような特徴をもっているか、岡山県内検出の建物と比較して検討しようと思う。

まず岡山県内で時期が分かる平安時代前期（9世紀代）の掘立柱建物は、以下の遺跡で類例がある。岡山市妹尾住田遺跡⁽¹⁾、東山遺跡⁽²⁾、赤田東遺跡⁽³⁾、中撫川遺跡⁽⁴⁾、津寺遺跡⁽⁵⁾、百間川米田遺跡⁽⁶⁾、鹿田遺跡⁽⁷⁾、原尾島遺跡⁽⁸⁾、津島岡大遺跡⁽⁹⁾、矢掛町毎戸遺跡⁽¹⁰⁾、総社市横寺遺跡⁽¹¹⁾、窪木遺跡⁽¹²⁾、新見市二野遺跡⁽¹³⁾などである。これらのうち側柱建物は、規模によって大きくは3つのグループに分けることができる。すなわち桁行が7～8m前後で梁行が4m前後（大型）、桁行が5～6m前後で梁行が4m前後（中型）、桁行が3～4m前後（小型）である。また大型の建物は、ほぼ全てが4×2間の規模になる。このような傾向は、8世紀後半の側柱建物の数値に近い⁽¹⁴⁾。10世紀代になると、建物の規模はまちまちなり、一定の数値を示さない傾向があるため、9世紀代の建物はより8世紀代に近い数値であったと分かる。超大型となる桁行9m以上の側柱建物は、横寺遺跡と毎戸遺跡にあり、ともに廂が付く。報告では両遺跡の性格は、ともに官衙的な様相であったという。総柱建物は類例が窪木遺跡19・津島岡大遺跡・赤田東遺跡2の3例しかない。窪木遺跡19は飛び抜けて大きい建物であるが、柱間寸法の割に柱穴規模が小さく、いわゆる正倉にはならない可能性が高い。津島岡大遺跡、赤田東遺跡2は、8世紀代までに正倉と想定した建物の規模に近い。しかし両遺跡ともに前代のものよりやや規模が小さくなっている。



第277図 9世紀代岡山県内掘立柱建物の総長

		9世紀前葉	9世紀中葉～	
側柱建物	大型			
	中型			
総柱建物	中型			<p>1 赤田東5 2 鹿田2 3 和田谷9 4 赤田東1 5 和田谷11 6 和田谷12</p>
	小型	<p>7 和田谷1-1 8 和田谷1-2 9 津島岡大 10 和田谷4</p> <p>0 5m</p> 		

第278図 9世紀代岡山県内の掘立柱建物 (1/150)

一方今回検出した和田谷遺跡の掘立柱建物の特徴は、次のとおりである。側柱建物では、規模が4×2間、4×1間になるものは6棟ある。このうち桁行総長が8 m前後（大型）になるものが建物3・8・9・10の4棟で、それよりやや小さい桁行総長6 m以上（中型）は建物11・12の2棟である。大型4棟の内建物3を除く3棟は、9世紀前葉が想定される赤田東遺跡5より梁行総長がやや小さく、柱穴形状も円形である。どちらかというとも9世紀中葉以降の時期が想定される鹿田遺跡2と同規模である。しかし柱筋の通りや柱穴規模は本遺跡が勝っている。中型の2棟は、梁行がやや小さくなるが桁行が他の遺跡よりやや長くなり床面積も大きい。建物2は規模が3×2間で、他の大型3棟とは異なる規模である。この数値は、8世紀代の中型に多い。この建物の近くには、建物1（総柱）があり、何回かの建て替えが行われ、その古相は8世紀代の可能性も想定される。また現有道路を挟んだ北側で検出された鍛冶炉の時期も8世紀代である。この付近は、和田谷遺跡の中でも1段階古い時期から建物が形成されていた可能性が考えられる。

総柱建物であるが、建物1の規模は同時期に同規格がなく、むしろ8世紀代の中型と近い。建物4・5は、中型と小型の間になり、9世紀代の他の遺跡の規模とも少しずれ、新しい様相を示す。

以上をまとめると和田谷遺跡の掘立柱建物は、建物1・2が8世紀後葉ないし9世紀前葉に建てられはじめ、その他の建物（建物1の建て替えを含む）は9世紀中葉以降に築かれたと思われ、遺構はこの時期に調査区内全体へ広がりピークを迎える。側柱建物は超大型の規模こそないが、ほぼ全てが大型ないし中型の上位の規模をもつことが明らかとなった。この様相から和田谷遺跡は、全体を調査したわけでもなく、また近隣にある同種類の遺跡の一つも調査していない現状ではあるのだが、遺跡が所在する浅口郡大島郷の中で一二を争う有力者がいた可能性も考えられるのではないかと考えられる。

中世期になると、側柱建物として建物13・15・16・17・18・19が検出され、特に建物15は平安時代の大型に属する建物9・10とほぼ同規模であり、建物16も同様になる可能性がある。総柱建物14も平安時代のものとほぼ同規模になる。中世になると遺跡全体が縮小傾向にあるが、平安時代と変わらぬ規格の掘立柱建物を構築していた点は注目される。（小林）

2 鍛冶遺構

鍛冶炉は調査地北端部で4基（鍛冶炉1～4）、調査地東端部で1基（鍛冶炉5）の計5基を確認した。いずれも長径30cm前後の規模で特別な下部構造は持たず、地面を掘り込んだ面に粘土を貼って炉壁を構築している。古代の鍛冶炉を分類した安間氏のIb型に相当し⁽¹⁵⁾、ある程度継続的に操業していたと考えられる。

鍛冶炉の配置については、官営工房のような列状等の規則性は認められない。また、鍛冶炉1～4は竪穴遺構1を伴っており、竪穴遺構自体は作業空間としての利用が想定される。広島県庄原市宮脇遺跡で確認された7世紀後半の鍛冶遺構⁽¹⁶⁾に類似し、古墳時代終末から古代にかけての鍛冶工房の一形態と考えられるが、今のところ類例は少ない。

鍛冶炉1～4の時期については、竪穴遺構1や鍛冶炉周辺で出土した土器から8世紀後半と考えられる。鍛冶炉5については、周辺遺構の状況から奈良時代～平安時代の範疇と推定されるが、詳細な時期については判断できない。和田谷遺跡で検出した鍛冶遺構は、その規模や状況から豪族居宅等の有力集落の一角に営まれた鍛冶工房と考えられる。

鍛冶炉1～4周辺や竪穴遺構1から出土した遺物には、鉄滓、釘や工具などの鉄器、須恵器、土師

器、製塩土器などがある。製塩土器については、鍛冶工程の中で塩の利用も想定され、関連が注目される。

鉄滓については分析を実施したところ、鍛錬鍛冶滓や鍛造剥片が含まれていることが判明しており、鍛錬鍛冶を行っていたことは確実である。また、鍛冶炉1に伴う椀形鍛冶滓M11及び鍛冶炉1～4の周辺から出土した鍛冶滓M9の始発原料は、いずれも鉄鉱石の可能性が高いことが分かった。一方、鍛冶炉5に伴う椀形鍛冶滓M12の始発原料は砂鉄との結果を得ている。

和田谷遺跡の所在する備中での鉄生産は、鉄鉱石を原料として7～8世紀代に隆盛するが、9世紀代には鉄鉱石資源の枯渇から衰退する⁽¹⁷⁾。また、平安時代後半以降には製鉄原料に鉄鉱石を用いるものではなく、砂鉄のみが利用されるようで、製鉄遺跡も備中北部や美作でしか確認されていない⁽¹⁸⁾。このような状況から、和田谷遺跡では砂鉄を原料とする製鉄炉からも鍛冶素材が供給されていたか、鍛冶炉5については時期が平安時代後半まで下る可能性もある。

なお、鍛冶炉1～4と同時期の掘立柱建物等は今回の調査では確認しておらず、集落内の居住域の状況は不明である。調査地北端部に位置する鍛冶工房の南側では、現市道を挟んで9世紀代の掘立柱建物1などを検出しており、周辺では8世紀代の土器も出土している。これらの状況から推測すると鍛冶工房作業時の居住域については、現市道の辺りに存在していた可能性が高い。(石田)

3 施釉陶器

今回の調査では、緑釉陶器25点と灰釉陶器4点が出土している。多くが包含層から出土した細片の資料になるが、平安時代における和田谷遺跡の性格や状況を検討するうえで重要な資料と考えられる。

緑釉陶器の出土地点と産地及び時期をまとめたものを表21に示した。産地と時期を概観すると9世紀前半の京都産、10世紀前半の京都産、10世紀後半の近江産を中心に東海産や周防産の可能性のあるものが出土している。

出土地点での傾向をみると、調査地の中央部では9世紀前半の京都産の出土が目立つ。中央部では

9世紀代の掘立柱建物をまとめて検出しており、緑釉陶器の出土状況とも合致することから集落の中心域と考えられる。一方、東端部では10世紀後半の緑釉陶器が多く出土しているが、当該期の遺構としては柱穴列や土坑、溝などがあるだけで密度も薄く、掘立柱建物などは確認していない。東端部については、中・近世に大きく改変を受けており、緑釉陶器も表土や斜面包含層中からの出土が大半である。緑釉陶器の出土状況から推定すると10世紀後半段階の集落中心域は東端部に存在していた可能性が高いと思われる。

灰釉陶器は光ヶ丘1式が1点、黒笹90号窯式のもので3点出土しており、時期はいずれも9世紀後半になる。緑釉陶器では9世紀後半のも

表21 緑釉陶器産地・時期一覧

出土地点	産地	9C前	9C後	10C前	10C後
中央	京都	4		1	
	東海				
	近江				2
	周防				
東端	京都			2	
	東海				1
	近江				12
	周防				1
南端	京都				
	東海				
	近江				2
	周防				

のが本遺跡から欠落しており、それを埋めるように灰釉陶器が出土しているが、その理由については不明である。なお、灰釉陶器2点については転用硯として利用されており、識字層の存在を示している。和田谷遺跡では施釉陶器が9世紀前半から10世紀後半にかけて保有されており、継続的な有力者層の存在が推定される。(石田)

4 製塩土器

和田谷遺跡では焼成が堅緻で、薄手・尖底の特徴をもつ「倉浦式土器」と称する製塩土器が一定量出土しており、時期は7世紀後半～9世紀前半頃である⁽¹⁹⁾。ところで、本遺跡は内陸部に所在しており、海浜部との位置関係から、当地で土器製塩の採鹹・煎熬を行っていたとは考え難く、発掘調査でも製塩炉を検出していない。よって、出土した製塩土器は、本遺跡から離れた塩の生産場所から移動・運搬されたものと推測できる。一方、出土品には手捏ねにより成形された粗製碗や鉢が認められ、その特徴からいわゆる「師楽的土師器」に比定できる⁽²⁰⁾。その場合、この土器の性格を踏まえると、当地の人々が海浜部に出向いて土器製塩を行っていた可能性も否定できない。加えて、出土した土錘類が海での漁労活動の証拠となるならば、沿岸部を含む多様な生業活動が推察される。

製塩土器が出土した遺構として、8世紀中頃の段状遺構11、8世紀後半の竪穴遺構1がある。段状遺構11が焼塩処理後の状況を示しているならば、製塩土器は塩の生産場所から当地まで運搬具として利用され、焼塩用の土器としても使用されたと推察する。本遺跡周辺では、焼塩専用土器のような別容器があまり発達しなかった可能性がある。岡山県津山市の美作国府跡S K 706土坑出土の製塩土器は、その傍証といえる⁽²¹⁾。また、竪穴遺構1は当時の鍛冶工程での塩の利用を考えるうえで示唆に富む。今後、鍛冶炉と製塩土器が共伴する遺跡の増加に期待したい。なお、9世紀代の建物8～12からも製塩土器が出土しているが、先述のように、建物8～10は9世紀中葉以降の可能性が示されている。実態としては、建物の柱穴埋没時に破碎・四散していた土器片が混入したと推測する。よって、製塩土器と建物8～12の年代的な併行関係はなく、従来の倉浦式土器の下限とも齟齬は生じないとみる。

本遺跡は備中国浅口郡大嶋郷に所在している。同国は調塩の貢納国であり、奈良市二条大路南に所在する平城京左京三条二坊八坪二条大路濠状遺構(南)では、天平8(736)年前後を中心とする木簡群に、「備□□□□〔中国浅口〕郡大嶋郷□〔塩〕二斗□□□□□〔海部大万呂ヵ〕」と記す荷札木簡も出土している⁽²²⁾。しかし、律令制度が変質し始める8世紀末～9世紀初頃には、『日本後紀』卷八延暦十八(799)年十一月甲寅条が示すように、備前国児島郡で、勢家豪民が山・野・浜・島を独占して百姓の塩づくり等の用益を妨害しているとある。同様に、同卷十四大同元(806)年閏六月己巳条でも、勢家が山海から得られる利益を占有して百姓を締め出し、役人もそれを見逃しているとある。さらに、9世紀中葉には、『天台南山無動寺建立和尚伝』貞観7(865)年によれば、右大臣藤原良相が相応和尚に備前国の塩荘を寄進したが、自らの無動寺には入れずに延暦寺に献上したとある。

このように中央貴族・地方豪族や有力社寺が、旧来の塩づくりに影響を与えたことは想像に難くないが、こうした動きと倉浦式土器の消滅や大形煎熬容器、鉄釜、塩田の導入が軌を一にしているかは判然としない。ただし、この時代が製塩業の大きな画期であったことは指摘できよう。(澤山)

註

(1) 岡山市教育委員会『妹尾住田遺跡』2003

第7章 総括

- (2) 岡山市教育委員会『東山(市道)遺跡』2013
- (3) 岡山市教育委員会『赤田東遺跡』2005
- (4) 岡山県教育委員会「新邸遺跡・郷ノ溝遺跡・仏生田遺跡・掛無堂遺跡・川入遺跡・中撫川遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』182 2004
- (5) 岡山県教育委員会「三手遺跡・津寺遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』90 1994
- (6) 岡山県教育委員会「百間川米田遺跡3」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』74 1989
- (7) 岡山県教育委員会「鹿田遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』207 2007
- (8) 岡山県教育委員会「原尾島遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』139 1999
- (9) 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター「津島岡大遺跡21」岡山大学構内遺跡発掘調査報告第30冊 2015
- (10) 岡山県教育委員会「毎戸遺跡の調査」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』5 1974
- (11) 総社市教育委員会「新本新庄地区ほ場整備事業に伴う発掘調査1」『総社市埋蔵文化財調査年報』4 1994
- (12) 岡山県教育委員会「南溝手遺跡・窪木遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』214 2008
- (13) 岡山県教育委員会「二野遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』15 1977
- (14) 小林利晴「7～8世紀代掘立柱建物の考古学的研究」『古文化談叢』第82集 2019
- (15) 安間拓巳『日本古代鉄器生産の考古学的研究』溪水社 2007
- (16) 財団法人広島県教育事業団『宮脇遺跡発掘調査報告書』財団法人広島県教育事業団発掘調査報告書第4集 2004
- (17) 上梶 武「古代吉備における鉄生産の衰退」『考古学研究』第56巻第4号 考古学研究会 2010
- (18) 角田徳幸『たたら吹製鉄の成立と展開』清文堂 2014
- (19) 岩本正二「第四章 古代(飛鳥・奈良・平安時代)の土器製塩」『備讃瀬戸の土器製塩 吉備考古ライブラリィ⑮』吉備人出版 2007
- (20) 間壁葎子「第二章 師楽式土器から製塩土器へ」『吉備古代史の基礎的研究』学生社 1992
- (21) 津山市教育委員会『美作国府跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告50 1994
- (22) 奈良国立文化財研究所『発掘調査出土木簡概報：平城宮発掘調査出土木簡概報22』1990

第4節 マキサヤ遺跡河道1出土縄文土器について

1 はじめに

マキサヤ遺跡における縄文時代の遺構・遺物は、調査区南西にある斜面部と、その東側の谷部を流れる河道1において確認した。斜面部では土坑2基、たわみ4か所を検出しているものの、いずれもその掘り方は明瞭でなく、特にたわみについては包含層の範囲を示している可能性が高い。また、整理箱2箱程度出土土器が示す型式幅は、前期・磯の森式、中期・船元Ⅰ式、船元Ⅱ式、里木Ⅲ式、矢部奥田式から後期・縁帯文期までと広く、総じて河道1出土土器に比べると古い様相を示す。一方、谷部に位置する河道1は、南から北へと丘陵裾を沿うように流れ、幾度かの洗掘を経ながら縄文時代から古代までの長期間存在する。縄文土器は中期に遡るものや晩期まで下る破片が少量出土するが、最も多く出土する土器は後期で⁽¹⁾、その総点数は4,725点、総重量76,873gを測る。これら後期の土器は、出土状況から北地区・南地区の2地点に分けることが可能で、加えて南地区のみ上層下層に区別して報告を行った。ここでは、出土地点（北地区・南地区上層・南地区下層）ごとの様相を明らかにしたうえで、マキサヤ遺跡河道1出土縄文後期土器の位置付けを行いたい。

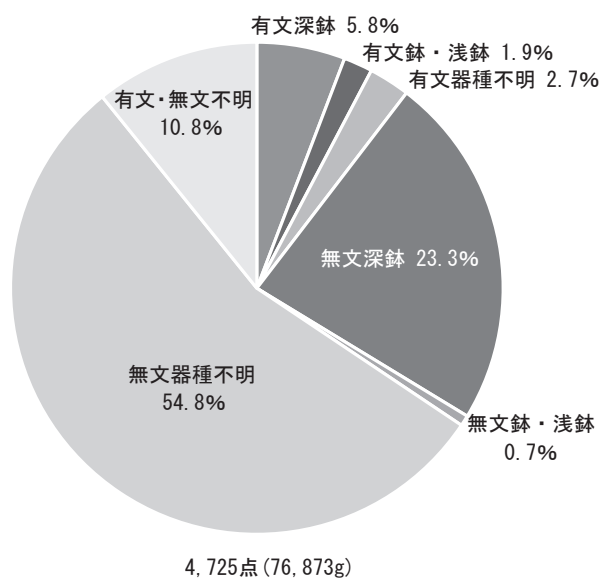
2 縄文後期の土器について

第279図は、河道1から出土した縄文後期を中心とする土器群の内訳を示したグラフである。総点数4,725点、総重量76,873gの内、有文土器が10.4%、無文土器は78.8%を占める。器種が明らかなのは、無文深鉢が23.3%と最多で、次いで有文深鉢5.8%、有文浅鉢1.9%、無文浅鉢0.7%と続く。ただし、有文・無文の区別が不明なもの（10.8%）や、無文土器で器種不明なもの（54.8%）が半数以上を占めているということは、破片資料が非常に多いことを表している。

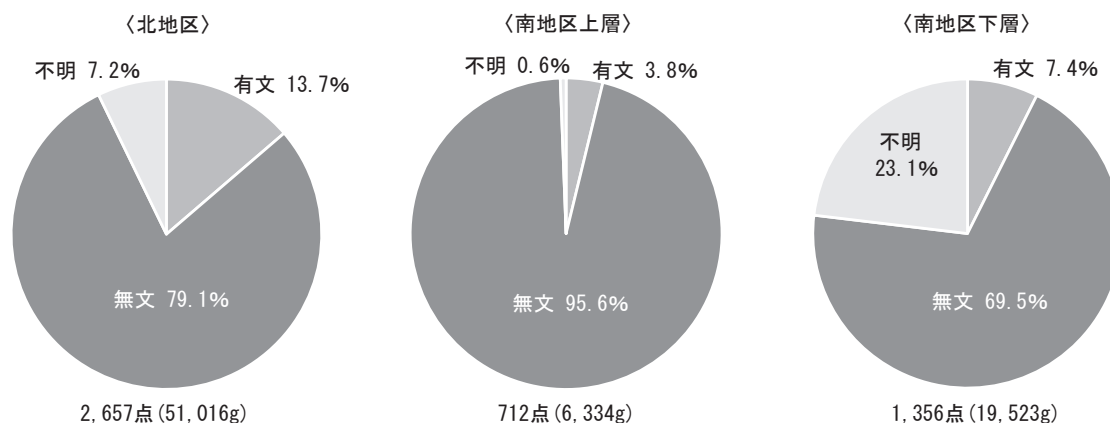
次に、地区ごとの様相を第280図に示した。

土器の出土量は北地区2,657点（51,016g）、南地区上層712点（6,334g）、南地区下層1,356点（19,523g）となる。また、有文土器と無文土器の割合については、北地区では有文土器13.7%・無文土器79.1%、南地区上層では有文土器3.8%・無文土器95.6%、南地区下層では有文土器7.4%・無文土器69.5%となり、南地区上層における無文土器割合の高さが目立つ。

表22は、実測を行った資料についての型式別集計である。実測作業は、口縁部や胴部の比較的大きな破片資料について254点実施し、その内154点を掲載した。明らかになった点としては、①南地区下層で中期に遡る深



第279図 河道1出土縄文土器



第280図 地区別 有文・無文土器組成

表22 型式別集計

地区	器種	船元式	中津式	福田K2式	縁帯文成立期	津雲A式	彦崎K1式	四元式	彦崎K2式	不明	地区別点数
北地区	深鉢		4	4	32	3	1	1	1	61	107
	浅鉢			20	6				2	13	41
	鉢			2	4		3			34	43
	壺		1							2	3
	不明									3	3
南地区上層	深鉢				1	1				7	9
	浅鉢						1				1
	鉢									1	1
	壺										
	不明										
南地区下層	深鉢	1		1	6	5	2			19	34
	浅鉢			1	1					1	3
	鉢				2					6	8
	壺										
	不明				1						1
型式別点数		1	5	28	53	9	7	1	3	147	254

鉢126（船元式）が1点存在するが、その後は後期で、中葉までに収まる。②北地区は中津式～彦崎K2式、南地区上層は縁帯文成立期～彦崎K1式、南地区下層は福田K2式～彦崎K1式までの幅があり、南地区に比べて北地区ではより新しい型式（四元式・彦崎K2式）が存在する。③南地区上層・下層の時期差については、明らかな差異は認めがたい。④福田K2式～縁帯文成立期にあたる資料が最も多い。以上4点をあげることができる。

底部について

表23は底部形態及び底径ごとの点数を集計したものである。底部形態（平底・高台底・凹底）の分類基準については、幸泉論文⁽²⁾を参考にした。この表では、5cm以下の凹底いわゆる小型凹底が北地区で多く出土していることが分かる。これは、表22で明らかとなった「②北地区ではより新しい型式（四元式・彦崎K2式）が存在する。」とした事と連動していると思われ、それは事実報告として掲載した110～112の底部に該当する。

表23 底部形態別集計

〈北地区〉

	5cm以下	～6cm	～7cm	～8cm	～9cm	～10cm	～11cm	～12cm	～13cm	～14cm	14.1cm以上
平底	2	2	8	6	5	5	4	1	3	1	3
高台底	1	1	1	1	4	1	0	0	0	0	0
凹底	8	1	0	1	0	1	0	0	1	0	1

〈南地区上層〉

	5cm以下	～6cm	～7cm	～8cm	～9cm
平底	1	0	1	0	0
高台底	0	0	0	0	0
凹底	1	0	0	0	1

〈南地区下層〉

	5cm以下	～6cm	～7cm	～8cm	～9cm	～10cm	～11cm	～12cm	～13cm	～14cm	14.1cm以上
平底	1	1	0	4	3	2	2	1	0	1	0
高台底	0	0	0	1	3	1	2	0	1	0	0
凹底	0	0	1	1	0	0	2	1	0	0	0

福田K2式から縁帯文成立期の土器群

表22において、福田K2式～縁帯文成立期にあたる資料が最も多く出土していることが明らかとなった。有文深鉢では、22・23のようにゆるやかな波状口縁をもち、頸部から胴部にかけて描かれる2本沈線あるいは3本沈線による磨消縄文が特徴的な福田K2式が数点みられる。一方、多数を占める縁帯文成立期の資料（24～40・130）については、頸部のくびれが強まり、文様帯が口縁部と胴部に区分されることで、頸部の文様が無くなっている。また、内側に肥厚する口縁部には沈線や斜め刻目を施し、多様な突起部（38～40）を有する。胴部文様はRL縄文と沈線により多様で、27・37など縦位構成で描かれる特徴的な資料が存在する。これらは高知県の松ノ木式⁽³⁾に相当し、県内では津島岡大遺跡第3次調査資料（岡山市北区津島中）⁽⁴⁾、田益田中遺跡河道出土資料（岡山市北区田益）⁽⁵⁾が該当する。ただし当地域においては、その資料数の少なさから「型式の空白時期」とされており、未だ明確な型式設定がなされていない。したがって、今回のマキサヤ遺跡河道1出土資料は、この空白時期を充足させ得る土器群として評価される。

有文浅鉢については形態が多様で、ボウル形（48～58・66・67）、バケツ形（59～62）、皿形（63・64・143）、口縁が短く立ち上がるもの（65・68）がある。バケツ形や皿形は福田K2式から新たに加わる形態とされ、ボウル形浅鉢の扁平化した入組文からは、福田K2式でも新しい段階に属することを示す。文様は2本沈線磨消縄文が主体をなし、皿形の口縁部内面には稜が巡る。沈線による渦巻文で構成されたボウル形66は縁帯文成立期である松ノ木式に相当する。

以上のことから、表22において福田K2式に当てはまる資料の多くは福田K2式末期に属し、いくつかの資料は縁帯文成立期である松ノ木式に相当することが分かる。すなわち、その特徴からは四国の型式である宿毛式や松ノ木式の影響を多分に受けた資料群であるということになる。

福田K2式から縁帯文成立期に属する有文深鉢と浅鉢についてまとめた結果、次の2点の事柄に気付く。1点目は、有文深鉢の多くが縁帯文成立期である一方、有文浅鉢は福田K2式末期に属すること。2点目は、四国地域の型式である宿毛式や松ノ木式の影響が多分にみられることである。1点目

については、東西の広域編年を論じた千葉論文⁽⁶⁾において「特定器種が縁帯文期のある段階まで継続している可能性は型式論的には(中略)否定できない。」との指摘が重要であると思われる。2点目については、津雲貝塚(当遺跡から南西へ約3km)や福田貝塚(当遺跡から東へ約20km)などとの地理的親近性とは一見矛盾するように思われる。しかしながら、福田K2式の分布域と宿毛式のそれとがほぼ重複することから、「宿毛式は単純に地域色として処理できない面がある。」とした石田氏の指摘⁽⁷⁾、あるいは底部形態から導き出される土器製作技法において、マキサヤ遺跡の立地する地域が備讃瀬戸圏内であると共に、高知県松ノ木遺跡と同じ燧灘沿岸圏内に含まれるとする幸泉論文における小地域圏の認識⁽⁸⁾からは、同一の土器文化圏内における重層的な様相を読み取ることが可能であり、その現れの一面がマキサヤ遺跡河道1出土土器と推察される。

3 おわりに

マキサヤ遺跡から出土した縄文土器は、調査区南西の斜面部と旧河道からの出土ということもあり、数型式にわたることが明らかで、いわゆる一括資料とは言い難い。しかし、河道1での出土状況(摩滅が少なく比較的大きな土器片や、西岸から投棄されたと推定される土器群の存在)からは、近隣の居住が想定され、ある一定のまとまりをもった資料群であることは間違いない。また出土した土器の多くは縄文時代後期前葉に属し、それは福田K2式末期から縁帯文成立期という当地域においては「型式の空白時期」に相当する。したがって、縄文時代後期前半である「磨消縄文土器群」から「縁帯文土器群」へと変遷していく過程を明らかにするためには、今後重要な土器群になり得るだろう。

縄文土器を整理・報告するにあたり千葉豊・富井眞両氏から御教示を得た。厚く御礼申し上げます。
(松尾)

註

- (1) 縄文時代後期の土器については、千葉 豊編『西日本の縄文土器 後期』真陽社 2010 を参考にした。
- (2) 幸泉満夫「土器底部形態にみる縄文土器後期社会の小地域性—四国西北部地域とその周縁—」『四国とその周辺の考古学』犬飼徹夫先生古稀記念論文集刊行会 2002
- (3) 松ノ木式の内容については、本山町教育委員会『松ノ木遺跡Ⅰ』本山町埋蔵文化財調査報告書第3集 1992、本山町教育委員会『松ノ木遺跡Ⅴ』本山町埋蔵文化財発掘調査報告書第11集 2000 を参考にした。
- (4) 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター『津島岡大遺跡3』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第5冊 1992
- (5) 岡山県教育委員会「田益田中(国立岡山病院)遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』141 1999
- (6) 千葉 豊「広域編年構築のために—「一括遺物」に基づく東西比較—」『日本先史学考古学論集—市原壽文先生傘壽記念—』株式会社六一書房 2013
- (7) 石田由紀子「中津式・福田KⅡ式土器」『総覧 縄文土器』株式会社アム・プロモーション 2008
- (8) 前掲註(2)論文

遺 構 一 覧 表

遺 物 観 察 表

新旧遺構名称対照表

遺構一覧表 凡例

- ・「()」は残存値を表す。
- ・各項目の表記のうち、確認が不可能なものを「－」と示した。

遺物観察表 凡例

土器

- ・「計測値」のうち、「口径」と「底径」の「()」は残存率が1/6以下で、復元値であることを表す。また、「器高」の「()」は残存値を表す。
- ・各項目の表記のうち、確認が不可能なものを「－」と示した。
- ・瓦の「計測値」については「最大長」、「最大幅」、「最大厚」を示した。
- ・「色調」は『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修）及び『新版色の手帖』（永田泰弘監修 小学館 2002）による。

土製品・石製品・玉類・木製品・金属製品

- ・「計測値」のうち、「()」は残存値を表す。
- ・各項目の表記のうち、確認が不可能なものを「－」と示した。
- ・土製品及び玉類の「色調」は、『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修）及び『新版色の手帖』（永田泰弘監修 小学館 2002）による。
- ・金属製品のうち、「銭」の「計測値」については「最大径」、「最大厚」を示した。
- ・金属製品の「重量」は、クリーニング後、含浸処理前の数値である。

表24 城殿山遺跡 掘立柱建物一覧

遺構名	地区	規模(間)	柱間距離(cm)		桁行(cm)	梁行(cm)	面積(m ²)	棟方向	柱掘り方	時期	備考
			桁	梁							
掘立柱建物1	1区	1×1	268~310	170~172	268~310	170~172	4.97	N-44° -W	円/不整円	室町時代後半~	

表25 城殿山遺跡 柱穴列一覧

遺構名	地区	規模	全長(cm)	柱間距離(cm)	方向	柱掘り方	時期	備考
柱穴列1	1区	2間	414	194~220	N-38° -W	円/楕円	室町時代後半~	
柱穴列2	1区	2間	352	170~182	N-43° -W	円	室町時代後半~	

表26 城殿山遺跡 埋葬施設一覧

遺構名	地区	平面形	断面形	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	底面標高(m)	棺内副葬	朱	時期	備考
埋葬施設1	2区	長方形	逆台形	324	182	62	72.60	有	有	弥生時代後期末~	
埋葬施設2	2区	長方形	逆台形	(240)	110	22	73.30	無	無	弥生時代後期後葉	
埋葬施設3	2区	長方形	逆台形	(236)	80	24	73.25	無	有	弥生時代後期後葉	
埋葬施設4	2区	不整長方形	逆台形	341	155	74	71.37	有	有	弥生時代後期末~	
埋葬施設5	2区	不整長方形	逆台形	408	207	66	71.35	無	有	弥生時代後期末~	
埋葬施設6	2区	不整長方形	逆台形	(292)	150	54	68.87	有	無	弥生時代後期末~	

表27 城殿山遺跡 土坑一覧

遺構名	地区	平面形	断面形	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	底面標高(m)	時期	備考
土坑1	1区	不整円形	箱形	71	67	25	70.20	室町時代後半~	
土坑2	2区	不定形	碗形	78	65	18	66.57	15世紀	
土坑3	2区	長楕円形	逆台形	163	49	12	68.49	室町時代~	
土坑4	2区	不定形	皿形	72	28	8	70.07	室町時代	
土坑5	2区	不整円形	皿形	99	92	18	72.02	室町時代~	
土坑6	2区	長楕円形	U字形	63	20	17	72.33	14世紀後半~	
土坑7	2区	不整形	凹凸	115	92	16	72.82	室町時代~	
土坑8	2区	不整形	逆台形	260	138	28	73.14	14世紀後半	
土坑9	2区	不整形	皿形	(130)	88	6	73.27	14世紀後半	

表28 城殿山遺跡 溝一覧

遺構名	地区	断面形	上端幅(cm)	底面幅(cm)	深さ(cm)	底面標高(m)	時期	備考
溝1	1区	皿形	90	76	8	69.04	室町時代後半~	
溝2	1区	皿形	(177)	(147)	12	69.28	室町時代後半~	
溝3	1区	皿形	(210)	(134)	4	70.18	室町時代後半~	
溝4	1区	皿形	111	(55)	7	70.55	室町時代後半~	
溝5	1区	V字形	89	-	66	70.20	室町時代後半~	
溝6	2区	皿形	200	98	12	72.53	14世紀後半	
溝7	2区	皿形	293	153	31	72.75	14世紀後半	
溝8	2区	皿形	303	173	21	72.77	14世紀後半	
溝9	2区	逆台形	205	90	49	71.88	室町時代か	

表29 城殿山遺跡 土器観察表

掲載番号	遺構名	地区	種別	器種	計測値(cm)			色調(外面)	備考
					口径	底径	器高		
1	埋葬施設1	2区	弥生土器	高杯	-	-	(1.9)	にぶい橙(7.5YR6/4)	
2	埋葬施設1	2区	弥生土器	甕	-	-	(4.0)	橙(5YR6/6)	
3	埋葬施設1	2区	弥生土器	平底鉢	-	10.4	(7.3)	にぶい黄橙(10YR7/4)	栗浪系土器か
4	埋葬施設4	2区	弥生土器	直口壺	(11.4)	-	(4.2)	明赤褐(5YR5/6)	
5	埋葬施設4	2区	弥生土器	器台	8.2	-	(1.9)	明赤褐(2.5YR5/6)	
6	埋葬施設4	2区	弥生土器	器台	-	(9.4)	(4.3)	明赤褐(2.5YR5/8)	
7	埋葬施設5	2区	弥生土器	壺	-	-	(5.3)	橙(5YR6/8)	
8	埋葬施設5	2区	弥生土器	高杯	-	-	(5.6)	明赤褐(2.5YR5/6)	
9	埋葬施設5	2区	弥生土器	高杯	7.3	9.8	7.7	明赤褐(5YR5/6)	
10	埋葬施設5	2区	弥生土器	高杯	7.3	-	(3.0)	明赤褐(5YR5/6)	
11	埋葬施設5	2区	弥生土器	高杯	-	-	(2.7)	橙(5YR6/8)	

掲載番号	遺構名	地区	種別	器種	計測値(cm)			色調(外面)	備考
					口径	底径	器高		
12	埋葬施設6	2区	弥生土器	高杯	—	—	(1.8)	橙(2.5YR6/8)	
13	石列・周辺	2区	弥生土器	壺	—	—	(2.6)	明赤褐(5YR5/6)	
14	石列・周辺	2区	弥生土器	壺	—	—	(4.1)	にぶい赤褐(5YR5/4)	
15	石列・周辺	2区	弥生土器	甕	—	—	(2.3)	にぶい褐(7.5YR5/4)	
16	石列・周辺	2区	弥生土器	高杯	(19.1)	—	(4.5)	にぶい褐(7.5YR6/3)	
17	石列・周辺	2区	弥生土器	高杯	—	—	(2.9)	明赤褐(5YR5/6)	
18	石列・周辺	2区	弥生土器	甕	—	—	(1.8)	にぶい黄橙(10YR7/4)	
19	石列・周辺	2区	弥生土器	高杯	—	—	(4.9)	橙(5YR6/6)	
20	土坑2	2区	瓦質土器	鉢	—	—	(4.6)	灰白(2.5Y8/2)	
21	土坑4	2区	瓦質土器	鉢	—	—	(1.6)	明黄褐(10YR7/6)	
22	土坑6	2区	備前焼	甕	—	—	(10.7)	灰黄褐(10YR4/2)	
23	土坑8	2区	土師器	椀	—	—	(3.7)	にぶい黄橙(10YR7/4)	
24	土坑8	2区	土師器	椀	—	(4.5)	(0.7)	灰黄褐(10YR4/2)	
25	土坑8	2区	備前焼	甕	—	—	(5.9)	黒褐(10YR3/1)	
26	土坑9	2区	土師器	椀	—	—	(2.9)	にぶい黄橙(10YR7/4)	
27	溝7	2区	土師器	椀	(9.9)	3.5	(4.8)	にぶい黄橙(10YR7/4)	
28	溝7	2区	須恵器	甕	—	—	(7.5)	灰白(7.5Y8/1)	亀山焼
29	溝8	2区	須恵器	甕	—	—	(2.7)	灰(N6/)	亀山焼
30	遺構に伴わない遺物	2区	土師器	椀	9.4	4.1	4.0	にぶい黄橙(10YR7/4)	
31	遺構に伴わない遺物	2区	土師器	椀	—	6.0	(2.6)	にぶい黄橙(10YR7/4)	
32	遺構に伴わない遺物	2区	土師器	椀	—	4.7	(1.1)	にぶい黄橙(10YR7/4)	
33	遺構に伴わない遺物	2区	土師器	椀	10.7	—	(3.2)	にぶい黄橙(10YR6/3)	
34	遺構に伴わない遺物	2区	土師器	椀	10.7	3.9	3.9	にぶい橙(7.5YR6/4)	
35	遺構に伴わない遺物	2区	土師器	椀	—	4.0	(1.2)	にぶい黄橙(10YR7/4)	
36	遺構に伴わない遺物	2区	土師器	皿	9.8	(4.2)	(1.9)	にぶい黄橙(10YR7/4)	
37	遺構に伴わない遺物	2区	土師器	皿	9.2	7.1	1.9	にぶい黄橙(10YR6/4)	ほぼ完形
38	遺構に伴わない遺物	2区	備前焼	皿	8.1	—	1.3	灰褐(7.5YR5/2)	
39	遺構に伴わない遺物	2区	備前焼	皿	9.0	—	(1.1)	にぶい褐(7.5YR5/3)	
40	遺構に伴わない遺物	2区	青磁	碗	—	—	(2.7)	釉薬:オリブ灰(2.5GY6/1)	
41	遺構に伴わない遺物	2区	須恵器	壺	—	—	(2.3)	灰黄(2.5Y6/2)	
42	遺構に伴わない遺物	2区	須恵器	高杯	—	—	(5.4)	灰(N6/)	
43	遺構に伴わない遺物	2区	土師器	鍋	(38.5)	—	(5.9)	にぶい黄橙(10YR7/4)	
44	遺構に伴わない遺物	2区	土師器	鍋	27.1	—	(18.6)	にぶい黄橙(10YR7/4)	
45	遺構に伴わない遺物	2区	土師器	鉢	(26.3)	—	(4.9)	にぶい黄橙(10YR7/4)	
46	遺構に伴わない遺物	2区	瓦質土器	鉢	(28.2)	—	(5.5)	灰(N4/)	
47	遺構に伴わない遺物	2区	土師器	鉢	—	—	(2.7)	にぶい黄橙(10YR7/4)	
48	遺構に伴わない遺物	2区	瓦質土器	鉢	—	—	(3.4)	浅黄橙(10YR8/3)	
49	遺構に伴わない遺物	2区	瓦質土器	甕	—	—	(7.8)	にぶい黄橙(10YR7/3)	
50	遺構に伴わない遺物	2区	瓦質土器	甕	—	—	(7.8)	灰(N4/)	
51	遺構に伴わない遺物	2区	瓦	丸瓦	長(8.0)	幅(6.0)	厚2.2	灰黄褐(10YR5/2)	

表30 城殿山遺跡 玉類観察表

掲載番号	遺構名	地区	器種	計測値(mm)				重量(g)	材質	色調	時期	残存状況	備考
				最大長	最大幅	最大厚	孔径						
J 1	埋葬施設4	2区	勾玉	15.9	6.7	6.2	1.8	1.8	翡翠	ジェードグリーン(10G5.5/5)	弥生時代後期末～	完形	
J 2	埋葬施設4	2区	勾玉	15.2	6.7	6.6	1.4	1.3	水晶	透明	弥生時代後期末～	完形	
J 3	埋葬施設4	2区	小玉	6.3	7.1	6.8	1.6～1.9	0.4	ガラス	花浅葱(6B4.5/6)	弥生時代後期末～	完形	分析No.1
J 4	埋葬施設4	2区	小玉	6.5	6.8	7.1	2.6～2.7	0.4	ガラス	花浅葱(6B4.5/6)	弥生時代後期末～	完形	分析No.2
J 5	埋葬施設4	2区	小玉	6.4	6.5	6.1	2.8	0.3	ガラス	マリンプルー(5B3/7)	弥生時代後期末～	ほぼ完形	分析No.3
J 6	埋葬施設4	2区	小玉	7.1	6.1	5.0	1.9～2.0	0.2	ガラス	マリンプルー(5B3/7)	弥生時代後期末～	ほぼ完形	分析No.4
J 7	埋葬施設4	2区	小玉	7.5	7.1	4.9	2.8	0.3	ガラス	マリンプルー(5B3/7)	弥生時代後期末～	ほぼ完形	分析No.5
J 8	埋葬施設4	2区	小玉	6.0	5.7	4.4	2.1～2.6	0.2	ガラス	青緑(7.5BG5/12)	弥生時代後期末～	完形	分析No.6
J 9	埋葬施設4	2区	小玉	(6.2)	7.0	3.8	(2.7)	0.1	ガラス	マリンプルー(5B3/7)	弥生時代後期末～	欠	分析No.7
J 10	埋葬施設4	2区	小玉	(5.3)	6.2	4.3	2.0	0.1	ガラス	マリンプルー(5B3/7)	弥生時代後期末～	欠	分析No.8

表31 城殿山遺跡 金属製品観察表

掲載番号	遺構名	地区	器種	材質	計測値(mm)			重量(g)	残存状況	備考
					最大長	最大幅	最大厚			
M 1	埋葬施設1	2区	剣	鉄	207.0、 刃部114.5、 茎部92.5	26.0	茎部3.9、 刃部(5.0)	68.6	完形	身部に布痕跡、把部に木質残存、 目釘孔(径4.1mm)有り、身部折り曲げか
M 2	埋葬施設4	2区	青銅片	銅	—	—	—	—	細片	2片、1片に穿孔?
M 3	埋葬施設5	2区	鎌	鉄	65.0	42.8	3.5	23.0	ほぼ完形	身部に単孔
M 4	埋葬施設5	2区	不明鉄器	鉄	(26.8)	5.0	(4.0)	0.8	欠	
M 5	埋葬施設6	2区	鉈?	鉄	(16.3)	6.5	2.0	0.5	欠	

掲載番号	遺構名	地区	器種	材質	計測値(mm)			重量(g)	残存状況	備考
					最大長	最大幅	最大厚			
M6	埋葬施設6	2区	鉢?	鉄	(25.5)	7.8	2.9	2.0	欠	
M7	埋葬施設6	2区	鉢?	鉄	(84.0)	7.8	2.5	8.7	欠	木質遺存
M8	土坑6	2区	釘	鉄	(66.7)	4.5	5.5	10.3	欠	
M9	溝6	2区	不明鉄器	鉄	(23.9)	6.0	(2.7)	0.9	欠	
M10	遺構に伴わない遺物	2区	刀子	鉄	(92.4)	刃部14.9	3.4	12.4	ほぼ完形	木質残存、目釘孔有り
M11	遺構に伴わない遺物	2区	釘	鉄	(28.4)	4.2	4.7	2.7	欠	
M12	遺構に伴わない遺物	2区	釘	鉄	(49.5)	5.4	4.8	5.1	欠	
M13	遺構に伴わない遺物	2区	釘	鉄	(38.4)	4.9	3.6	2.1	欠	
M14	遺構に伴わない遺物	2区	釘	鉄	(28.1)	3.8	3.7	1.4	欠	
M15	遺構に伴わない遺物	2区	銭	銅	径24.6	—	1.5	3.4	完形	「天禮通宝」

表32 城殿山遺跡 新旧遺構名称対照表

掲載遺構名	調査区	旧遺構名	掲載遺構名	調査区	旧遺構名	掲載遺構名	調査区	旧遺構名
掘立柱建物1	1	No.6	土坑2	2	No.3	溝2	1	No.4
柱穴列1	1	No.7	土坑3	2	No.2	溝3	1	No.3
柱穴列2	1	No.8	土坑4	2	No.1	溝4	1	No.2
埋葬施設1	2	No.6	土坑5	2	No.9	溝5	1	No.1
埋葬施設2	2	No.12	土坑6	2	Pit.1	溝6	2	No.8
埋葬施設3	2	No.16	土坑7	2	No.5	溝7	2	No.11
埋葬施設4	2	No.10	土坑8	2	No.7・17	溝8	2	No.22
埋葬施設5	2	No.15	土坑9	2	No.13	溝9	2	No.14
埋葬施設6	2	No.21	石列1	2	No.20			
土坑1	1	No.9	溝1	1	No.5			

表33 和田谷遺跡 掘立柱建物一覧

遺構名	規模(間)	柱間距離(cm)		桁行(cm)	梁行(cm)	面積(m ²)	棟方向	柱掘り方	時期	備考
		桁	梁							
掘立柱建物1古	3×2	126~206	132~245	482	420	20.24	N-44° -W	円/不整円	~9世紀	
掘立柱建物1新	3×2	114~205	163~233	507	414	20.99	N-41° -W	円/不整円	9世紀	
掘立柱建物2	3×2	206~233	216~228	659	432	28.47	N-77° -E	円	9世紀中葉~後葉	
掘立柱建物3	4×2	134~260	152~190	766	348	26.66	N-20° -W	円/楕円	9~10世紀	
掘立柱建物4	3×2	124~228	140~178	442	322	14.23	N-20° -W	楕円	平安時代	
掘立柱建物5	3×2	128~177	137~160	457	316	14.44	N-63° -E	円/楕円	11世紀前半	
掘立柱建物6	2×1	112~162	195	280	195	5.46	N-55° -E	円	~平安時代	
掘立柱建物7	2×1	170~205	318~346	381	346	13.18	N-35° -W	円	9世紀	
掘立柱建物8	4×2	173~229	166~184	790	351	27.73	N-45° -W	円/楕円	9世紀	
掘立柱建物9	4×2	156~240	171~375	795	375	29.81	N-47° -W	円/楕円	9世紀	
掘立柱建物10	4×2	165~252	180	819	360	29.48	N-40° -E	円/楕円	9世紀	
掘立柱建物11	4×(1)	138~183	345	630	345	21.74	N-43° -W	円/不整円	9世紀	
掘立柱建物12	4×2	129~180	150~171	615	330	20.30	N-30° -W	円/楕円	9世紀	
掘立柱建物13	2×1	169~190	204~217	361	217	7.83	N-83° -E	円	鎌倉時代	
掘立柱建物14	2×2	166~201	123~150	368	276	10.16	N-40° -W	円	鎌倉時代	
掘立柱建物15	4×2	155~238	174~213	813	416	33.82	N-75° -E	円	13世紀後半~14世紀	
掘立柱建物16	2+α×2	146~245	196~221	403+α	417	—	N-32° -W	円	鎌倉時代	
掘立柱建物17	2+α×2	190~209	130~178	399+α	308	—	N-82° -W	円/不整円	鎌倉時代	
掘立柱建物18	2×1	167~185	232~238	352	238	8.38	N-77° -W	円	13世紀後半~14世紀初頭	
掘立柱建物19	3+α×1	153~216	180	558+α	180	—	N-54° -E	円/楕円	鎌倉時代	

表34 和田谷遺跡 段状遺構一覧

遺構名	長軸(cm)	短軸(cm)	床面標高(m)	柱穴	被熱面	溝	土坑	時期	備考
段状遺構1	(327)	(320)	36.03		1か所	○		7世紀	床面は高温で被熱
段状遺構2古	490	(184)	34.25	○		○		7世紀前半	
段状遺構2新	495	(223)	33.96	○			2基	7世紀前半	
段状遺構3	595	290	34.12	○		○		6世紀末~7世紀初頭	
段状遺構4古	(834)	601	35.58	○	2か所			6世紀末~7世紀前半	
段状遺構4新	(420)	282	35.42	○				6世紀末~7世紀前半	
段状遺構5	304	(124)	35.94				1基	6世紀末~7世紀前半	
段状遺構6	(715)	(165)	35.63	○				6世紀末~7世紀前半	

遺構名	長軸 (cm)	短軸 (cm)	床面標高 (m)	柱穴	被熱面	溝	土坑	時期	備考
段状遺構 7	430	(381)	36.80	○				7世紀後半	
段状遺構 8	(430)	412	36.96	○	1か所	○		7世紀後半	
段状遺構 9	361	329	34.00	○			4基	9世紀前半	
段状遺構10	(297)	(79)	33.62			○		平安時代	
段状遺構11	(640)	620	36.06	○	1か所		1基	8世紀中頃	製塩土器溜まり
段状遺構12	(800)	(199)	38.30	○				8世紀	

表35 和田谷遺跡 柱穴列一覧

遺構名	規模	全長 (cm)	柱間距離 (cm)	方向	柱掘り方	時期	備考
柱穴列 1	2間	469	216~253	N-15° -W	円	11~12世紀	
柱穴列 2	2間	459	172~287	N-30° -W	円	平安時代	
柱穴列 3	3間	448	130~162	N-50° -E	円	9世紀	
柱穴列 4	3間	353	97~138	N-70° -E	円	9世紀	
柱穴列 5	3間	632	192~226	N-11° -W	円	9世紀	
柱穴列 6	4間	403	92~107	N-77° -W	円/楕円	10世紀後半	
柱穴列 7	3間	428	117~165	N-85° -W	円	平安時代	
柱穴列 8	2間	268	124~144	N-72° -W	円	平安時代	
柱穴列 9	3間	592	180~222	N-20° -W	円	13世紀	
柱穴列10	3間	456	146~162	N-89° -W	円	鎌倉時代	
柱穴列11	3間	290	71~123	N-88° -E	円	鎌倉時代	
柱穴列12	3間	222	64~81	N-89° -E	円	鎌倉時代	
柱穴列13	3間	566	148~245	N- 2° -W	円	鎌倉時代	
柱穴列14	7間	1174	117~206	N-30° -W・N-62° -W	円	鎌倉時代	
柱穴列15	2間	325	160~165	N-51° -W	不整円	12世紀後半	

表36 和田谷遺跡 土坑一覧

遺構名	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	底面標高 (m)	時期	備考
土坑 1	不整楕円形	皿形	105	75	18	31.82	弥生時代	
土坑 2	隅丸長方形	皿形	266	148	16	32.73	6世紀末	
土坑 3	不整形	碗形	181	131	62	32.96	6世紀末~7世紀前半	
土坑 4	不整円形	碗形	235	206	63	34.12	6世紀末	
土坑 5	不整楕円形	皿形	215	135	10	36.19	6世紀末~7世紀初頭	
土坑 6	不整円形	碗形	91	73	21	31.46	奈良時代	
土坑 7	楕円形	皿形	123	85	8	32.62	奈良時代	
土坑 8	楕円形	皿形	290	136	18	32.67	奈良時代	
土坑 9	不整円形	皿形	91	82	5	32.59	奈良時代	
土坑10	不整形	碗形	74	71	14	31.65	古代	
土坑11	不整方形	碗形	191	185	38	31.42	平安時代	
土坑12	楕円形	鉢形	63	54	43	32.49	9世紀	
土坑13	円形	碗形	30	26	11	33.18	9世紀後半	
土坑14	不整円形	碗形	46	44	23	32.99	9世紀後半~10世紀前葉	
土坑15	不整形	皿形	143	125	14	33.92	9世紀前半	
土坑16	円形	皿形	71	60	8	34.14	9世紀前半	
土坑17	円形	碗形	95	78	12	34.30	9世紀前半	
土坑18	不整形	碗形	116	47	44	33.44	平安時代	
土坑19	円形	鉢形	46	43	38	35.40	11世紀後半	
土坑20	不整楕円形	皿形	90	46	9	35.92	10世紀後半~11世紀前半	
土坑21	不整楕円形	碗形	215	91	39	35.50	8世紀	
土坑22	不整円形	碗形	69	56	13	38.13	12世紀前半	
土坑23	不整形	皿形	336	174	17	37.84	平安時代	
土坑24	不整形	碗形	(175)	(46)	18	38.90	平安時代	
土坑25	不整円形	皿形	45	39	5	34.57	古代	
土坑26	不整形	皿形	(141)	50	9	33.93	平安時代	
土坑27	不整円形	碗形	83	68	24	31.27	中世	
土坑28	円形	鉢形	64	63	30	31.28	中世	
土坑29	楕円形	碗形	68	55	25	31.16	中世	
土坑30	不整円形	皿形	180	160	9	31.70	中世	
土坑31	不整形	皿形	184	108	7	31.72	中世	
土坑32	不整形	皿形	214	180	9	33.27	13世紀	
土坑33	隅丸方形	皿形	186	181	9	33.09	13世紀	
土坑34	不整楕円形	皿形	139	89	5	39.44	13世紀前半	
土坑35	不整円形	碗形	117	105	26	39.83	13世紀前半	

表37 和田谷遺跡 竪穴遺構一覽

遺構名	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	底面標高 (m)	時期	備考
竪穴遺構 1 古	不整形	皿形	688	640	33	31.60	8世紀後半	
竪穴遺構 1 新	不整形	皿形	(428)	624	20	31.73	8世紀後半	
竪穴遺構 2	不整形	皿形	(457)	380	15	33.02	8世紀	
竪穴遺構 3	不整形	皿形	(316)	(303)	36	32.75	8世紀	

表38 和田谷遺跡 鍛冶炉一覽

遺構名	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	底面標高 (m)	時期	備考
鍛冶炉 1	円形	碗形	22	21	4	31.84	8世紀後半	
鍛冶炉 2	楕円形	碗形	35	29	8	31.80	8世紀後半	
鍛冶炉 3	楕円形	碗形	29	25	3	31.90	8世紀後半	
鍛冶炉 4	楕円形	碗形	27	18	4	31.88	8世紀後半	
鍛冶炉 5	不整形円形	碗形	29	27	8	36.00	古代	

表39 和田谷遺跡 溝一覽

遺構名	断面形	上端幅 (cm)	底面幅 (cm)	深さ (cm)	底面標高 (m)	時期	備考
溝 1	葉研状	73~106	18~28	21~40	32.00~34.98	弥生時代中期後葉~末	
溝 2	葉研状	82	26	43	33.44	弥生時代中期後葉	
溝 3	皿形	28~97	11~35	12~45	32.84~35.29	弥生時代中期後葉	
溝 4	碗形	62	14	31	33.87	弥生時代中期後葉	
溝 5	逆台形	31	24	15	34.01	弥生時代中期	
溝 6	碗形	37	15	12	32.40	弥生時代中期後葉	
溝 7	皿形	(139)	58	19	34.18	弥生時代中期後葉	
溝 8	葉研状	70~106	12~20	24~29	34.08~34.31	弥生時代中期後葉	
溝 9	碗形	69	25	32	32.57	弥生時代中期	
溝10	碗形	(65)	20	21	34.33	弥生時代中期	
溝11	皿形	85	35	11	33.48	弥生時代中期	
溝12	碗形	70	30	13	36.89	7世紀中頃	
溝13	碗形	64	35	15	32.97	9世紀	
溝14	碗形	77	24	18	34.09	9世紀前半	
溝15	皿形	(72)	30	8	39.43	10世紀	
溝16	皿形	(112)	75	6	39.37	9~10世紀	
溝17	碗形	24	11	7	39.35	9~10世紀	
溝18	皿形	27	16	5	39.80	9~10世紀	
溝19	碗形	50	25	15	39.84	10世紀中頃	
溝20	皿形	52	25	10	33.95	平安時代	
溝21	碗形	32	12	8	33.60	平安時代	
溝22	碗形	52	24	14	35.32	平安時代	
溝23	碗形	35	20	10	31.82	14世紀	
溝24	碗形	(165)	82	20	31.72	14世紀	
溝25	碗形	72	22	14	31.83	14世紀	
溝26	皿形	40	23	6	33.65	室町時代	
溝27	皿形	46	38	5	34.71	室町時代	
溝28	碗形	63	28	13	32.77	鎌倉時代	
溝29	碗形	43	17	14	32.28	鎌倉時代	
溝30	碗形	45	19	14	33.80	鎌倉時代以降	
溝31	碗形	26	9	10	34.05	鎌倉時代以降	
溝32	碗形	24	9	13	35.35	鎌倉時代	
溝33	皿形	94	60	11	38.35	鎌倉時代	
溝34	碗形	35	16	8	39.49	室町時代	

表40 和田谷遺跡 たわみ一覽

遺構名	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	底面標高 (m)	時期	備考
たわみ 1	不整形	皿形	268	192	12	32.64	奈良時代	
たわみ 2	不整形	皿形	(402)	258	18	32.52	9世紀前葉	
たわみ 3	不整形	皿形	(510)	268	18	37.93	平安時代	
たわみ 4	楕円形	皿形	453	(215)	30	37.88	平安時代	
たわみ 5	不整形円形	皿形	(262)	(160)	16	29.80	鎌倉時代~	
たわみ 6	不整形	皿形	(225)	290	15	34.81	鎌倉時代	

表41 和田谷遺跡 土器観察表

掲載 番号	遺構名	種別	器種	計測値(cm)			色調(外面)	備考
				口径	底径	器高		
1	段状遺構1	土師器	甕	—	—	(5.3)	にぶい橙(7.5YR6/4)	
2	段状遺構1	製塩土器	—	—	—	(4.6)	にぶい褐(7.5YR5/4)	
3	段状遺構1	製塩土器	—	—	—	(2.9)	褐灰(10YR4/1)	
4	段状遺構3	須恵器	杯蓋	(13.9)	—	(3.0)	灰(5Y5/1)	
5	段状遺構3	須恵器	杯蓋	14.2	—	(3.6)	灰(7.5Y6/1)	
6	段状遺構3	須恵器	杯蓋	13.7	—	4.0	灰白(N7/)	ほぼ完形
7	段状遺構3	須恵器	杯身	12.6	—	(3.5)	灰(N5/)	
8	段状遺構3	須恵器	高杯	—	(10.0)	(0.8)	灰(N6/)	
9	段状遺構3	須恵器	高杯	—	15.0	(14.7)	灰(N4/)	透かし2段3方向
10	段状遺構3	土師器	甌	(29.2)	—	(5.2)	橙(5YR6/6)	
11	段状遺構3	土師器	甌	(22.0)	—	(8.1)	橙(7.5YR6/6)	
12	段状遺構3	土師器	甌	—	—	(1.7)	橙(7.5YR6/6)	把手のみ
13	段状遺構3	土師器	甌	(25.8)	—	(4.5)	にぶい橙(7.5YR6/4)	
14	段状遺構3	製塩土器	—	10.6	—	(8.9)	にぶい黄橙(10YR6/3)	
15	段状遺構3	製塩土器	—	—	—	(8.8)	橙(5YR6/6)	外面にヘラ記号
16	段状遺構3	製塩土器	—	—	—	(1.9)	淡黄(2.5Y8/3)	
17	段状遺構3	製塩土器	—	—	—	(4.6)	灰黄(2.5Y6/2)	
18	段状遺構3	製塩土器	—	—	—	(3.4)	にぶい黄橙(10YR7/3)	
19	段状遺構3	製塩土器	—	—	—	(4.3)	褐灰(10YR5/1)	
20	段状遺構3	製塩土器	—	—	7.4	(1.4)	にぶい黄橙(10YR6/3)	
21	段状遺構3	製塩土器	—	—	7.6	(2.0)	にぶい黄橙(10YR7/3)	
22	段状遺構4	須恵器	杯蓋	11.7	—	(3.5)	灰白(N7/)	
23	段状遺構4	須恵器	杯身	(12.2)	—	(3.0)	灰白(5Y8/1)	
24	段状遺構4	須恵器	杯身	(13.6)	—	(2.9)	灰(N6/)	
25	段状遺構4	須恵器	高杯	—	(7.0)	(0.7)	灰(N6/)	
26	段状遺構4	須恵器	甌	—	—	(4.1)	灰白(N7/)	
27	段状遺構4	須恵器	甕	14.0	—	(5.9)	灰白(7.5Y7/1)	
28	段状遺構4	須恵器	壺	—	—	(10.8)	灰(5Y6/1)	
29	段状遺構4	須恵器	椀	(11.2)	—	(5.4)	灰(N5/)	
30	段状遺構4	須恵器	甕	—	—	(10.4)	灰(N6/)	
31	段状遺構4	土師器	甕	(10.0)	—	(4.9)	赤褐(5YR4/6)	
32	段状遺構4	土師器	鉢	10.7	—	3.1	橙(5YR6/6)	完形
33	段状遺構4	製塩土器	—	—	—	(5.7)	にぶい黄橙(10YR6/3)	
34	段状遺構5	須恵器	杯蓋	(9.8)	—	(1.9)	灰(N6/)	
35	段状遺構5	須恵器	高杯	—	—	(7.2)	灰(N6/)	
36	段状遺構5	土師器	甌	—	—	(7.0)	褐(7.5YR4/3)	
37	段状遺構6	須恵器	高杯	—	—	(3.2)	黄灰(2.5Y6/1)	
38	段状遺構6	土師器	甕	—	—	(4.0)	にぶい褐(7.5YR6/3)	
39	段状遺構6	土師器	高杯	—	—	(2.7)	橙(5YR6/6)	
40	段状遺構6	土師器	甌	26.0	—	(6.6)	橙(5YR6/6)	
41	段状遺構6	土師器	甌	—	—	(2.8)	灰黄(2.5Y6/2)	把手のみ
42	段状遺構7	須恵器	杯身	—	—	(2.5)	灰白(5Y7/1)	
43	段状遺構7	須恵器	高杯	(12.7)	—	(3.3)	灰白(2.5Y7/1)	
44	段状遺構7	須恵器	高杯	—	9.2	(7.2)	灰白(2.5Y7/1)	
45	段状遺構7	土師器	甕	(18.2)	—	(4.2)	にぶい橙(7.5YR6/4)	
46	段状遺構8	須恵器	杯蓋	—	—	(2.1)	灰白(2.5Y7/1)	
47	段状遺構8	土師器	甕	—	—	(6.3)	にぶい橙(7.5YR6/4)	
48	段状遺構8	土師器	高杯	17.9	—	(4.0)	橙(5YR6/6)	
49	段状遺構8	土師器	粗製椀	—	—	(4.5)	にぶい黄橙(10YR7/3)	
50	段状遺構8	製塩土器	—	—	—	(1.5)	にぶい橙(7.5YR6/4)	
51	土坑2	須恵器	杯蓋	(11.2)	—	(1.9)	灰(7.5Y6/1)	
52	土坑2	須恵器	椀	7.8	—	5.0	灰白(7.5Y8/1)	ほぼ完形
53	土坑2	須恵器	脚付椀	11.9	8.5	11.7	黄灰(2.5Y6/1)	完形
54	土坑4	須恵器	杯蓋	12.2	—	3.9	灰(N5/)	
55	土坑4	土師器	高杯	(15.9)	—	(3.8)	橙(7.5YR7/6)	
56	土坑4	製塩土器	—	—	—	(3.7)	灰(5Y5/1)	外面に平行タタキ
57	土坑4	製塩土器	—	—	—	(4.6)	橙(2.5YR6/6)	
58	土坑5	須恵器	杯身	—	—	(2.2)	灰白(5Y7/1)	
59	土坑5	土師器	高杯	(12.4)	—	(1.9)	橙(7.5YR7/6)	
60	溝1	弥生土器	壺	13.8	—	(7.1)	にぶい黄橙(10YR7/4)	
61	溝1	弥生土器	壺	—	7.7	(5.0)	にぶい黄橙(10YR6/3)	
62	溝1	弥生土器	甕	(23.9)	—	(9.2)	にぶい黄橙(10YR6/4)	
63	溝1	弥生土器	甕	14.0	—	(7.3)	にぶい橙(7.5YR6/4)	
64	溝1	弥生土器	甕	(15.0)	—	(5.8)	明褐(7.5YR5/6)	
65	溝1	弥生土器	甕	16.1	—	(5.0)	明赤褐(5YR5/6)	
66	溝1	弥生土器	甕	—	—	(5.8)	明赤褐(2.5YR5/8)	
67	溝1	弥生土器	甕	—	8.0	(2.7)	明赤褐(2.5YR5/6)	
68	溝1	弥生土器	甕	—	7.0	(3.0)	にぶい黄橙(10YR6/3)	
69	溝1	弥生土器	高杯	—	11.6	(7.3)	褐灰(7.5YR5/1)	

掲載 番号	遺構名	種別	器種	計測値(cm)			色調(外面)	備考
				口径	底径	器高		
70	溝2	弥生土器	甕	10.8	—	(2.4)	橙(7.5YR6/6)	
71	溝2	弥生土器	高杯	—	—	(3.1)	にぶい黄橙(10YR7/4)	
72	溝3	弥生土器	壺	14.0	—	(7.5)	橙(5YR6/6)	
73	溝3	弥生土器	壺	—	7.0	(2.8)	橙(5YR6/6)	
74	溝3	弥生土器	把手付壺	8.5	(7.3)	15.1	にぶい黄橙(10YR7/3)	
75	溝3	弥生土器	甕	—	—	(3.5)	にぶい黄橙(10YR6/4)	
76	溝3	弥生土器	甕	13.0	—	(3.6)	にぶい黄褐(10YR5/4)	
77	溝3	弥生土器	甕	—	—	(6.1)	にぶい黄橙(10YR6/3)	
78	溝3	弥生土器	甕	—	5.9	(5.2)	明赤褐(5YR5/6)	
79	溝3	弥生土器	高杯	—	—	(6.1)	にぶい黄橙(10YR7/4)	円盤充填部のみ
80	溝4	弥生土器	壺	8.2	—	(4.6)	にぶい黄橙(10YR6/3)	
81	溝4	弥生土器	甕	(20.4)	—	(4.3)	にぶい橙(7.5YR6/4)	
82	溝4	弥生土器	甕	(16.0)	—	(3.5)	橙(7.5YR6/6)	
83	溝4	弥生土器	壺	—	6.2	(7.3)	にぶい黄橙(10YR7/4)	
84	溝4	弥生土器	甕	—	6.4	(2.0)	にぶい黄橙(10YR6/3)	
85	溝4	弥生土器	甕	—	8.2	(2.4)	褐灰(10YR4/1)	
86	溝4	弥生土器	甕	—	7.0	(3.0)	にぶい黄橙(10YR6/3)	
87	溝4	弥生土器	高杯	—	11.0	(1.8)	橙(5YR6/6)	
88	溝7	弥生土器	壺	—	—	(14.9)	橙(5YR6/6)	
89	溝12	須恵器	杯蓋	—	—	(2.9)	灰白(5Y7/1)	
90	溝12	須恵器	杯蓋	—	—	(3.7)	灰(N5/)	
91	溝12	須恵器	杯蓋	13.0	—	(2.7)	灰白(2.5Y7/1)	
92	溝12	須恵器	甕	—	—	(6.7)	灰(N6/)	
93	溝12	須恵器	壺	—	—	(3.4)	灰(5Y6/1)	
94	溝12	須恵器	高杯	—	—	(2.8)	灰(N6/)	
95	溝12	須恵器	壺	—	6.6	(2.0)	灰(N6/)	
96	溝12	須恵器	高杯	—	—	(5.3)	灰(N5/)	
97	溝12	土師器	甕	19.4	—	(5.9)	橙(5YR6/6)	
98	溝12	土師器	甕	(19.6)	—	(6.1)	にぶい橙(7.5YR6/4)	
99	溝12	土師器	甕	(27.1)	—	(8.8)	にぶい橙(7.5YR6/4)	
100	溝12	土師器	甕	—	—	(4.2)	にぶい黄褐(10YR5/3)	
101	溝12	土師器	甕	—	—	(5.3)	にぶい橙(7.5YR6/4)	
102	溝12	土師器	甕	—	—	(6.8)	橙(7.5YR6/6)	
103	溝12	土師器	高杯	—	—	(3.7)	橙(5YR7/6)	
104	溝12	土師器	高杯	(14.5)	—	(5.1)	橙(5YR7/6)	
105	溝12	土師器	甗	(19.9)	(12.9)	(7.0)	にぶい黄橙(10YR6/4)	
106	溝12	土師器	甕・甗	—	—	(2.2)	にぶい橙(7.5YR6/4)	把手のみ
107	溝12	製塩土器	—	(15.0)	—	(5.2)	橙(2.5YR6/6)	
108	溝12	製塩土器	—	—	—	(2.6)	にぶい橙(7.5YR6/4)	
109	溝12	製塩土器	—	—	—	(3.1)	にぶい橙(5YR6/4)	
110	谷部	須恵器	杯蓋	10.2	—	4.1	灰(N6/)	ほぼ完形
111	谷部	須恵器	杯蓋	11.8	—	4.6	灰(N6/)	
112	谷部	須恵器	杯蓋	12.0	—	4.1	灰白(5Y8/1)	
113	谷部	須恵器	杯蓋	11.3	—	5.5	灰白(2.5Y8/1)	
114	谷部	須恵器	杯蓋	10.8	—	(3.3)	灰白(5Y7/1)	
115	谷部	須恵器	杯身	10.0	4.2	3.4	灰(N5/)	
116	谷部	須恵器	椀	9.8	4.8	3.5	灰白(10YR7/1)	
117	谷部	須恵器	高杯	—	9.8	(6.9)	黄灰(2.5Y6/1)	
118	谷部	須恵器	高杯	—	10.3	(6.1)	灰白(N7/)	
119	谷部	須恵器	高杯	11.5	7.9	6.6	灰(N6/)	
120	谷部	須恵器	高杯	—	8.5	(4.4)	灰(N5/)	
121	谷部	須恵器	鉢	15.2	10.0	6.3	灰(5Y5/1)	
122	谷部	須恵器	甗	—	2.8	(10.2)	灰白(N7/)	
123	谷部	須恵器	甗	—	—	(6.9)	灰(N6/)	
124	谷部	須恵器	平瓶	—	—	(3.4)	灰(N4/)	
125	谷部	須恵器	甕	(10.0)	—	(5.8)	灰(N5/)	
126	谷部	須恵器	甕	—	—	(8.4)	灰(N6/)	
127	谷部	須恵器	甕	16.0	—	(6.7)	灰白(2.5Y7/1)	
128	谷部	須恵器	甕	(19.0)	—	(7.5)	灰(N6/)	
129	谷部	須恵器	甕	—	—	(6.1)	灰(N6/)	
130	谷部	土師器	甕	21.9	—	31.3	灰黄褐(10YR5/2)	
131	谷部	土師器	甕	23.7	—	(6.7)	にぶい橙(7.5YR6/4)	
132	谷部	土師器	甕	24.4	—	(10.2)	にぶい橙(7.5YR6/4)	
133	谷部	土師器	甕	(28.6)	—	(11.4)	褐灰(10YR6/1)	
134	谷部	土師器	甕・甗	—	—	(4.1)	にぶい褐(7.5YR5/3)	把手のみ
135	谷部	土師器	甕・甗	—	—	(5.7)	にぶい黄橙(10YR7/3)	把手のみ
136	谷部	土師器	甕・甗	—	—	(5.0)	灰褐(7.5YR6/2)	把手のみ
137	谷部	土師器	高杯	14.2	8.3	10.1	橙(5YR6/6)	ほぼ完形
138	谷部	土師器	高杯	14.4	—	(5.2)	灰褐(7.5YR6/2)	
139	谷部	土師器	高杯	—	9.2	(5.9)	橙(5YR6/6)	
140	谷部	土師器	高杯	—	8.6	(5.7)	橙(5YR6/8)	

掲載 番号	遺構名	種別	器種	計測値(cm)			色調(外面)	備考
				口径	底径	器高		
141	谷部	土師器	椀	10.7	4.7	3.4	にぶい橙(7.5YR7/3)	
142	谷部	土師器	椀	11.0	4.5	3.3	橙(2.5YR6/8)	
143	谷部	土師器	椀	13.9	—	(2.7)	橙(5YR6/8)	
144	谷部	製塩土器	—	—	—	(4.3)	にぶい黄橙(10YR6/3)	
145	古墳時代以前の柱穴	須恵器	杯身	8.9	3.8	4.1	灰(10Y6/1)	
146	古墳時代以前の柱穴	須恵器	高杯	—	7.8	(3.5)	灰(10Y6/1)	
147	古墳時代以前の柱穴	須恵器	甕	32.2	—	(17.5)	灰(N5/)	
148	包含層・遺構に伴わない遺物	弥生土器	壺	11.4	6.6	19.2	橙(7.5YR7/6)	
149	包含層・遺構に伴わない遺物	弥生土器	壺	(11.9)	—	(6.3)	にぶい黄橙(10YR7/3)	
150	包含層・遺構に伴わない遺物	弥生土器	甕	15.0	—	(4.6)	明赤褐(2.5YR5/6)	
151	包含層・遺構に伴わない遺物	弥生土器	甕	—	—	(3.5)	にぶい橙(7.5YR6/4)	
152	包含層・遺構に伴わない遺物	弥生土器	高杯	(20.9)	—	(5.4)	にぶい黄橙(10YR6/4)	
153	包含層・遺構に伴わない遺物	弥生土器	器台	—	—	(8.3)	橙(7.5YR7/6)	
154	包含層・遺構に伴わない遺物	須恵器	杯蓋	10.2	—	(3.3)	灰(N6/)	
155	包含層・遺構に伴わない遺物	須恵器	杯蓋	10.6	—	3.7	灰白(5Y7/1)	
156	包含層・遺構に伴わない遺物	須恵器	杯蓋	12.0	—	(3.4)	灰白(2.5Y7/1)	
157	包含層・遺構に伴わない遺物	須恵器	杯蓋	12.5	—	(4.2)	青灰(5BG5/1)	
158	包含層・遺構に伴わない遺物	須恵器	杯蓋	(13.0)	—	(3.5)	灰(N5/)	
159	包含層・遺構に伴わない遺物	須恵器	杯蓋	14.3	—	(3.4)	灰白(10YR8/2)	
160	包含層・遺構に伴わない遺物	須恵器	杯蓋	12.3	—	3.6	灰(N6/)	
161	包含層・遺構に伴わない遺物	須恵器	杯身	9.8	6.5	3.0	灰白(7.5YR8/1)	
162	包含層・遺構に伴わない遺物	須恵器	杯身	(9.4)	5.2	2.9	灰白(10Y8/1)	
163	包含層・遺構に伴わない遺物	須恵器	杯身	(10.0)	—	(3.2)	灰白(2.5Y7/1)	
164	包含層・遺構に伴わない遺物	須恵器	高杯	13.6	—	(4.9)	灰白(2.5Y8/1)	軟質
165	包含層・遺構に伴わない遺物	須恵器	高杯	—	—	(6.3)	灰(N5/)	
166	包含層・遺構に伴わない遺物	須恵器	高杯	—	—	(4.7)	灰白(2.5Y8/2)	軟質
167	包含層・遺構に伴わない遺物	須恵器	高杯	—	—	(3.0)	灰白(N7/)	
168	包含層・遺構に伴わない遺物	須恵器	高杯	—	—	(2.6)	にぶい黄橙(10YR6/4)	軟質
169	包含層・遺構に伴わない遺物	須恵器	高杯	13.2	9.4	9.9	灰白(5Y7/1)	
170	包含層・遺構に伴わない遺物	須恵器	高杯	—	9.9	(5.9)	灰(N5/)	軟質
171	包含層・遺構に伴わない遺物	須恵器	甕	(43.6)	—	(12.5)	灰(N6/)	
172	包含層・遺構に伴わない遺物	土師器	甕	—	—	(4.5)	にぶい黄橙(10YR6/3)	
173	包含層・遺構に伴わない遺物	土師器	甕	11.8	—	(4.6)	にぶい橙(7.5YR6/4)	
174	包含層・遺構に伴わない遺物	土師器	甕	22.8	—	(7.4)	橙(5YR6/6)	
175	包含層・遺構に伴わない遺物	土師器	甕	22.4	—	(8.5)	にぶい黄橙(10YR7/4)	
176	包含層・遺構に伴わない遺物	土師器	甌	—	—	(1.3)	にぶい橙(7.5YR6/4)	把手のみ
177	包含層・遺構に伴わない遺物	土師器	杯身	—	—	(3.3)	橙(5YR7/6)	赤色顔料
178	包含層・遺構に伴わない遺物	土師器	高杯	—	—	(2.9)	橙(5YR7/8)	
179	包含層・遺構に伴わない遺物	土師器	高杯	14.2	—	(3.8)	橙(5YR6/6)	
180	包含層・遺構に伴わない遺物	土師器	高杯	13.0	—	(4.8)	橙(7.5YR7/6)	
181	包含層・遺構に伴わない遺物	土師器	高杯	14.0	—	(3.9)	橙(5YR6/8)	
182	包含層・遺構に伴わない遺物	土師器	高杯	—	12.0	(4.5)	橙(7.5YR7/6)	
183	掘立柱建物1	須恵器	杯身	—	11.4	(4.6)	灰白(7.5Y8/1)	
184	掘立柱建物1	須恵器	壺	9.0	—	(4.1)	灰白(N7/)	
185	掘立柱建物1	土師器	杯蓋	—	—	(1.6)	橙(7.5YR7/6)	つまみのみ
186	掘立柱建物1	土師器	杯蓋	—	—	(1.4)	橙(5YR6/6)	
187	掘立柱建物1	土師器	杯蓋	16.6	—	(1.7)	橙(7.5YR7/6)	
188	掘立柱建物1	土師器	杯身	—	10.0	(1.1)	にぶい黄橙(10YR7/3)	
189	掘立柱建物1	土師器	杯	17.3	12.0	(4.2)	橙(7.5YR7/6)	
190	掘立柱建物1	土師器	皿	13.6	10.7	1.8	にぶい黄橙(10YR7/4)	
191	掘立柱建物1	土師器	皿	14.4	10.7	1.6	灰黄(2.5Y7/2)	
192	掘立柱建物1	黒色土器	杯	13.9	8.7	3.2	にぶい橙(7.5YR6/4)	ほぼ完形
193	掘立柱建物1	土師器	粗製椀	11.6	4.5	4.8	にぶい赤褐(5YR5/3)	
194	掘立柱建物1	土師器	高杯	—	—	(4.8)	明赤褐(5YR5/8)	
195	掘立柱建物1	土師器	甕	13.5	—	(4.3)	にぶい黄橙(10YR6/3)	
196	掘立柱建物1	土師器	甕	—	—	(6.5)	にぶい黄橙(10YR5/3)	
197	掘立柱建物1	製塩土器	—	—	—	(1.3)	橙(7.5YR7/6)	
198	掘立柱建物1	製塩土器	—	—	—	(1.3)	橙(7.5YR7/6)	
199	掘立柱建物1	製塩土器	—	—	—	(1.5)	にぶい黄橙(10YR7/3)	
200	掘立柱建物5	須恵器	椀	—	(5.0)	(1.7)	灰(7.5Y6/1)	
201	掘立柱建物5	須恵器	高杯	—	(8.8)	(0.9)	灰(N5/)	
202	掘立柱建物8	製塩土器	—	—	—	(3.1)	にぶい黄橙(10YR5/3)	
203	掘立柱建物9	製塩土器	—	—	—	(4.5)	にぶい黄橙(10YR7/4)	
204	掘立柱建物11	土師器	椀	—	—	(5.7)	橙(5YR6/6)	
205	掘立柱建物11	製塩土器	—	—	—	(2.7)	にぶい橙(7.5YR7/4)	
206	掘立柱建物11	製塩土器	—	—	—	(2.9)	にぶい赤褐(2.5YR5/4)	
207	掘立柱建物11	製塩土器	—	—	—	(5.7)	褐(7.5YR4/3)	
208	掘立柱建物12	須恵器	高杯	—	—	(3.5)	灰(N6/)	
209	掘立柱建物12	土師器	甕・甌	—	—	(4.0)	橙(5YR6/6)	把手のみ
210	段状遺構9	土師器	杯蓋	—	—	(1.5)	灰黄(2.5Y7/2)	赤色顔料
211	段状遺構9	土師器	杯身	—	12.2	(1.3)	明赤褐(5YR5/6)	

掲載 番号	遺構名	種別	器種	計測値(cm)			色調(外面)	備考
				口径	底径	器高		
212	段状遺構 9	製塩土器	—	—	—	(3.5)	橙(7.5YR6/6)	
213	段状遺構 9	製塩土器	—	15.6	—	(4.5)	黄橙(7.5YR8/8)	
214	段状遺構11(土器溜まり)	製塩土器	—	—	—	(3.2)	にぶい黄橙(10YR7/4)	
215	段状遺構11(土器溜まり)	製塩土器	—	—	—	(3.2)	にぶい黄橙(10YR7/3)	
216	段状遺構11(土器溜まり)	製塩土器	—	—	—	(2.5)	にぶい橙(7.5YR7/3)	
217	段状遺構11(土器溜まり)	製塩土器	—	—	—	(3.0)	にぶい橙(7.5YR6/4)	
218	段状遺構11(土器溜まり)	製塩土器	—	—	—	(3.1)	橙(5YR6/6)	
219	段状遺構11(土器溜まり)	製塩土器	—	—	—	(3.5)	にぶい橙(7.5YR6/4)	
220	段状遺構11(土器溜まり)	製塩土器	—	—	—	(3.3)	にぶい橙(7.5YR7/4)	
221	段状遺構11(土器溜まり)	製塩土器	—	—	—	(3.2)	にぶい橙(7.5YR7/4)	
222	段状遺構11	須恵器	杯蓋	—	—	(1.7)	灰(N5/)	
223	段状遺構11	須恵器	杯蓋	—	—	(2.4)	灰白(2.5Y8/1)	
224	段状遺構11	須恵器	杯蓋	(17.5)	—	(2.3)	灰白(2.5Y8/1)	
225	段状遺構11	須恵器	杯蓋	20.0	—	(3.0)	黄灰(2.5Y6/1)	
226	段状遺構11	須恵器	杯蓋	—	—	(1.5)	灰(N6/)	瓦質状
227	段状遺構11	須恵器	杯身	—	—	(3.4)	黄灰(2.5Y6/1)	
228	段状遺構11	須恵器	杯身	—	10.1	(1.6)	灰(N6/)	瓦質状
229	段状遺構11	須恵器	壺	—	9.1	(2.4)	灰白(5Y7/1)	
230	段状遺構11	土師器	杯蓋	—	—	(1.6)	淡橙(5YR8/3)	
231	段状遺構11	土師器	甕	—	—	(3.6)	にぶい黄橙(10YR7/4)	
232	段状遺構11	土師器	甌	—	—	(10.8)	にぶい橙(7.5YR6/4)	
233	段状遺構11	土師器	甌	—	—	(7.2)	にぶい赤褐(5YR5/4)	
234	段状遺構11	土師器	甕・甌	—	—	(3.8)	にぶい橙(5YR6/4)	把手のみ
235	段状遺構11	製塩土器	—	—	—	(3.6)	にぶい橙(7.5YR6/4)	
236	段状遺構11	製塩土器	—	—	—	(2.9)	にぶい黄橙(10YR7/3)	
237	段状遺構11	製塩土器	—	—	—	(3.9)	にぶい橙(7.5YR7/4)	
238	段状遺構12	須恵器	甕	—	—	(2.7)	灰白(5Y8/1)	
239	段状遺構12	須恵器	甕	—	—	(4.0)	灰(7.5Y6/1)	
240	段状遺構12	土師器	粗製椀	10.3	4.1	6.2	にぶい黄橙(10YR6/3)	
241	柱穴列 1	土師器	皿	(13.2)	(10.3)	1.9	灰白(10YR8/2)	
242	柱穴列 3	須恵器	高杯	—	—	(1.1)	灰(5Y5/1)	
243	柱穴列 5	製塩土器	—	—	—	(3.0)	にぶい橙(7.5YR6/4)	
244	柱穴列 5	製塩土器	—	—	—	(3.6)	にぶい黄橙(10YR7/3)	
245	柱穴列 5	製塩土器	—	—	—	(1.0)	明赤褐(5YR5/6)	
246	柱穴列 6	黒色土器	椀	—	7.0	(3.1)	浅黄橙(10YR8/3)	
247	柱穴列 6	土師器	鉢	—	—	(2.2)	にぶい黄橙(10YR7/3)	
248	土坑 8	製塩土器	—	—	—	(4.0)	浅黄橙(7.5YR8/4)	
249	土坑 8	製塩土器	—	—	—	(1.4)	浅黄橙(10YR8/4)	
250	土坑12	土師器	羽釜	20.8	—	(6.6)	橙(7.5YR6/6)	
251	土坑13	土師器	甕	—	—	(16.6)	橙(7.5YR6/8)	ほぼ完形
252	土坑13	土師器	杯	12.6	8.8	3.3	橙(5YR7/6)	完形
253	土坑14	土師器	椀	—	—	(4.0)	橙(7.5YR6/8)	
254	土坑14	黒色土器	椀	13.7	7.4	4.5	橙(7.5YR7/6)	
255	土坑14	黒色土器	椀	—	8.9	(2.6)	にぶい橙(7.5YR7/4)	
256	土坑14	土師器	杯	12.1	8.3	3.3	橙(7.5YR7/6)	
257	土坑14	土師器	杯	13.1	8.0	3.6	浅黄橙(10YR8/4)	
258	土坑14	土師器	杯	12.1	8.3	3.5	橙(7.5YR6/6)	
259	土坑14	土師器	杯	12.8	8.7	3.8	橙(7.5YR7/6)	
260	土坑14	土師器	皿	13.3	9.0	1.7	橙(7.5YR7/6)	ほぼ完形
261	土坑14	土師器	皿	14.0	10.5	2.0	赤橙(10R6/8)	
262	土坑14	土師器	甕	—	—	(3.3)	にぶい黄橙(10YR7/3)	
263	土坑14	灰釉陶器	椀・皿	—	—	(1.3)	釉薬:灰白(2.5Y8/2)	黒笹90号窯式
264	土坑15	土師器	杯身	12.3	9.3	3.7	浅黄橙(7.5YR8/4)	
265	土坑15	須恵器	杯身	(13.6)	8.8	3.9	灰白(7.5Y7/1)	
266	土坑19	土師器	甕	27.5	—	(18.7)	にぶい黄橙(10YR7/3)	ほぼ完形
267	土坑19	土師器	甕	(33.1)	—	(27.6)	にぶい黄橙(10YR7/4)	
268	土坑20	須恵器	椀	13.3	7.2	4.0	灰白(10Y8/1)	
269	土坑20	須恵器	椀	15.3	7.0	5.4	灰白(2.5Y7/1)	
270	土坑20	土師器	杯	—	7.0	(1.3)	灰白(2.5Y8/2)	
271	土坑20	土師器	杯	9.8	8.0	2.2	灰黄(2.5Y7/2)	
272	土坑20	土師器	皿	11.0	8.4	2.0	にぶい黄橙(10YR7/4)	
273	土坑20	緑釉陶器	椀	10.6	6.1	4.3	釉薬:根岸(9.5Y4.5/3)	近江産、ほぼ完形
274	土坑22	土師器	杯	—	—	(3.1)	灰白(10YR8/2)	
275	土坑22	土師器	杯	(13.8)	(9.5)	2.6	灰白(2.5Y8/2)	
276	土坑22	土師器	皿	(9.0)	(6.0)	1.3	灰黄褐(10YR6/2)	
277	土坑22	土師器	皿	9.7	7.1	2.0	黄灰(2.5Y4/1)	
278	土坑22	土師器	皿	9.6	6.8	1.6	褐灰(7.5YR4/1)	
279	土坑22	土師器	皿	9.9	7.9	1.3	黒褐(7.5YR3/1)	
280	土坑22	土師器	皿	9.3	7.2	1.5	褐灰(7.5YR4/1)	
281	土坑22	土師器	皿	(10.4)	(8.0)	1.4	褐灰(10YR6/1)	
282	土坑22	土師器	皿	(10.0)	8.0	1.5	黄灰(2.5Y5/1)	

掲載番号	遺構名	種別	器種	計測値(cm)			色調(外面)	備考
				口径	底径	器高		
283	土坑22	土師器	皿	(10.0)	(7.3)	(1.9)	灰黄橙(10YR6/2)	
284	土坑23	土師器	杯	—	—	(3.1)	橙(7.5YR6/6)	
285	土坑23	土師器	甗	—	—	(8.9)	にぶい赤褐(5YR5/4)	
286	竪穴遺構1	須恵器	杯蓋	—	—	(1.3)	暗灰(N3/)	
287	竪穴遺構1	須恵器	杯蓋	—	—	(2.1)	灰白(5Y8/1)	
288	竪穴遺構1	須恵器	杯蓋	—	—	(2.3)	灰白(10Y8/1)	
289	竪穴遺構1	須恵器	杯蓋	—	—	(1.9)	灰白(5Y8/1)	
290	竪穴遺構1	須恵器	杯蓋	14.7	—	(2.3)	灰白(10YR8/1)	軟質
291	竪穴遺構1	須恵器	杯蓋	—	—	(2.3)	灰(5Y6/1)	
292	竪穴遺構1	須恵器	杯蓋	—	—	(1.5)	灰白(5Y8/1)	軟質
293	竪穴遺構1	須恵器	杯蓋	—	—	(1.7)	にぶい黄橙(10YR7/3)	軟質
294	竪穴遺構1	須恵器	杯蓋	—	—	(2.4)	灰白(7.5Y8/1)	
295	竪穴遺構1	須恵器	杯身	13.4	9.2	3.0	灰(5Y6/1)	
296	竪穴遺構1	須恵器	杯身	13.0	9.0	3.6	灰白(5Y7/1)	瓦質状
297	竪穴遺構1	須恵器	杯身	13.2	9.2	3.6	にぶい黄橙(10YR6/3)	瓦質状
298	竪穴遺構1	須恵器	杯身	—	8.6	(1.7)	灰白(5Y8/1)	
299	竪穴遺構1	須恵器	杯身	13.2	8.8	3.9	灰黄(2.5Y7/2)	瓦質状
300	竪穴遺構1	須恵器	杯身	—	10.4	(2.9)	灰白(2.5Y8/2)	瓦質状
301	竪穴遺構1	須恵器	杯身	13.3	10.0	3.8	灰白(2.5Y7/1)	
302	竪穴遺構1	須恵器	杯身	11.9	8.7	3.8	灰白(2.5Y7/1)	ほぼ完形
303	竪穴遺構1	須恵器	杯身	11.8	8.2	2.5	黄灰(2.5Y6/1)	
304	竪穴遺構1	須恵器	皿	(14.3)	10.6	2.4	緑灰(7.5GY6/1)	
305	竪穴遺構1	須恵器	皿	14.6	9.4	1.6	灰白(5Y8/1)	
306	竪穴遺構1	須恵器	菜壺蓋	13.8	—	2.8	灰(7.5Y6/1)	
307	竪穴遺構1	須恵器	甗	—	—	(3.0)	暗青灰(5B3/1)	
308	竪穴遺構1	須恵器	甗	—	—	(4.1)	灰(7.5Y6/1)	
309	竪穴遺構1	須恵器	甗	—	—	(6.2)	灰白(5Y7/1)	
310	竪穴遺構1	須恵器	壺	—	10.0	(2.6)	灰白(5Y7/1)	瓦質状
311	竪穴遺構1	須恵器	壺	—	8.0	(2.0)	灰黄褐(10YR6/2)	瓦質状
312	竪穴遺構1	土師器	杯蓋	(16.9)	—	2.0	橙(7.5YR7/6)	
313	竪穴遺構1	土師器	皿	—	—	(1.8)	橙(7.5YR7/6)	
314	竪穴遺構1	土師器	皿	—	—	(1.4)	橙(7.5YR6/6)	
315	竪穴遺構1	土師器	皿	19.8	(17.8)	2.3	灰黄(2.5Y7/2)	
316	竪穴遺構1	土師器	甗	16.2	—	(8.0)	にぶい黄橙(10YR6/3)	
317	竪穴遺構1	土師器	甗	—	—	(4.3)	明赤褐(5YR5/6)	
318	竪穴遺構1	土師器	甗	—	—	(6.2)	黒褐(5YR3/1)	
319	竪穴遺構1	土師器	粗製碗	—	—	(3.6)	黒(5YR1.7/1)	内面にヘラ記号
320	竪穴遺構1	土師器	粗製碗	—	—	(3.9)	明赤褐(5YR5/6)	
321	竪穴遺構1	土師器	粗製碗	—	—	(4.4)	黒(7.5YR1.7/1)	
322	竪穴遺構1	土師器	粗製碗	—	—	(4.9)	にぶい橙(7.5YR6/4)	
323	竪穴遺構1	土師器	粗製碗	—	—	(4.5)	赤褐(5YR4/6)	
324	竪穴遺構1	土師器	粗製碗	10.5	3.1	4.0	褐灰(10YR5/1)	ほぼ完形
325	竪穴遺構1	土師器	粗製碗	(11.4)	—	(4.1)	にぶい黄橙(10YR6/3)	
326	竪穴遺構1	土師器	粗製碗	(11.4)	(5.6)	3.7	にぶい黄橙(10YR6/3)	
327	竪穴遺構1	土師器	粗製碗	12.0	—	(3.8)	橙(2.5YR6/8)	
328	竪穴遺構1	土師器	粗製碗	11.8	2.8	5.9	にぶい橙(7.5YR6/4)	
329	竪穴遺構1	製塩土器	—	—	—	(4.6)	にぶい黄橙(10YR6/3)	
330	竪穴遺構1	製塩土器	—	—	—	(4.5)	にぶい橙(7.5YR6/4)	
331	竪穴遺構1	製塩土器	—	—	—	(3.2)	にぶい橙(7.5YR7/4)	
332	竪穴遺構1	製塩土器	—	—	—	(3.8)	にぶい橙(7.5YR6/4)	
333	竪穴遺構1	製塩土器	—	(17.3)	—	(8.0)	にぶい黄橙(10YR7/3)	
334	竪穴遺構1	製塩土器	—	—	3.4	(2.0)	にぶい黄橙(10YR6/3)	
335	竪穴遺構1	製塩土器	—	—	—	(1.8)	にぶい黄橙(10YR6/3)	
336	竪穴遺構1	製塩土器	—	—	—	(2.0)	明赤褐(2.5YR5/8)	
337	竪穴遺構2	須恵器	高杯	—	—	(8.2)	灰白(2.5Y8/1)	
338	竪穴遺構2	土師器	甗	—	—	(5.6)	浅黄橙(10YR8/3)	
339	竪穴遺構2	土師器	粗製碗	—	7.1	(3.1)	にぶい橙(7.5YR7/4)	
340	竪穴遺構3	須恵器	杯蓋	—	—	(1.5)	灰白(2.5Y8/1)	
341	竪穴遺構3	須恵器	杯蓋	(15.4)	—	(1.5)	灰白(2.5Y8/1)	
342	竪穴遺構3	須恵器	杯身	12.8	8.7	3.5	灰白(2.5Y8/1)	
343	竪穴遺構3	須恵器	杯身	13.6	10.0	3.4	灰白(2.5Y7/1)	
344	竪穴遺構3	須恵器	杯身	14.6	11.0	(3.9)	灰白(2.5Y8/1)	
345	竪穴遺構3	須恵器	甗	—	—	(10.2)	灰白(N7/)	
346	竪穴遺構3	土師器	杯	15.8	—	(4.1)	浅黄橙(10YR8/3)	赤色顔料
347	竪穴遺構3	土師器	杯	13.2	10.0	2.5	浅黄橙(7.5YR8/4)	赤色顔料
348	竪穴遺構3	土師器	杯	(14.9)	(11.6)	2.8	浅黄橙(7.5YR8/4)	赤色顔料
349	竪穴遺構3	土師器	高台付皿	22.0	18.3	3.4	にぶい黄橙(10YR7/3)	
350	竪穴遺構3	土師器	粗製碗	11.7	—	(4.0)	橙(5YR6/6)	
351	竪穴遺構3	土師器	甗	(22.6)	—	(7.0)	にぶい黄橙(10YR7/4)	
352	溝14	須恵器	杯蓋	(19.4)	—	(1.5)	灰白(5Y8/1)	
353	溝14	土師器	杯蓋	—	—	(1.7)	にぶい橙(5YR7/4)	

掲載 番号	遺構名	種別	器種	計測値(cm)			色調(外面)	備考
				口径	底径	器高		
354	溝14	黒色土器	椀	—	9.0	(1.5)	にぶい橙(7.5YR7/4)	
355	溝14	土師器	皿	—	—	(1.5)	浅黄橙(7.5YR8/4)	
356	溝14	土師器	皿	14.7	12.7	1.8	橙(7.5YR7/6)	赤色顔料
357	溝14	土師器	甕・甑	—	—	(1.8)	にぶい黄橙(10YR7/4)	把手のみ
358	溝14	製塩土器	—	—	—	(2.5)	橙(7.5YR6/6)	
359	溝15	土師器	甕	—	—	(3.6)	にぶい橙(7.5YR6/4)	
360	溝15	黒色土器	椀	—	7.3	(1.3)	灰黄褐(10YR5/2)	
361	溝15	土師器	皿	(8.6)	5.8	2.7	にぶい黄橙(10YR7/3)	ほぼ完形
362	溝15	土師器	高台付皿	8.7	4.9	2.4	浅黄橙(7.5YR8/3)	
363	溝19	黒色土器	椀	—	5.7	(1.2)	橙(2.5YR7/6)	
364	たわみ2	土師器	杯蓋	(18.0)	—	(3.2)	にぶい橙(7.5YR6/4)	
365	たわみ2	須恵器	杯身	—	—	(5.0)	灰(N5/)	
366	たわみ2	製塩土器	—	—	—	(1.7)	橙(2.5YR6/8)	
367	たわみ3	土師器	甕	—	—	(5.3)	灰黄褐(10YR6/2)	
368	たわみ3	土師器	皿	—	—	(1.7)	にぶい橙(7.5YR7/4)	赤色顔料
369	谷部	須恵器	杯蓋	—	—	(1.2)	灰白(N7/)	
370	谷部	須恵器	杯蓋	—	—	(1.7)	褐灰(10YR6/1)	
371	谷部	須恵器	杯身	12.4	8.7	3.8	灰(N6/)	
372	谷部	須恵器	壺	7.8	—	(8.1)	灰(N6/)	
373	谷部	土師器	高杯	—	11.1	(6.8)	橙(5YR6/6)	
374	谷部	土師器	甕・甑	—	—	(5.5)	にぶい黄橙(10YR7/3)	把手のみ
375	谷部	製塩土器	—	—	—	(3.2)	にぶい黄橙(10YR7/3)	
376	谷部	黒色土器	椀	—	10.0	(2.2)	にぶい橙(7.5YR7/4)	
377	谷部	灰釉陶器	皿	13.5	6.0	3.1	釉薬:灰白(7.5Y7/2)	黒笹90号窯式、転用硯
378	奈良～平安時代の柱穴・ピット	須恵器	甕	—	13.0	(9.8)	灰(N5/)	
379	奈良～平安時代の柱穴・ピット	土師器	杯身	12.4	10.5	2.9	にぶい黄橙(10YR7/3)	ほぼ完形、赤色顔料
380	奈良～平安時代の柱穴・ピット	土師器	杯身	13.8	9.2	3.9	浅黄橙(10YR8/3)	
381	奈良～平安時代の柱穴・ピット	土師器	皿	8.5	6.1	1.2	淡橙(5YR8/4)	
382	奈良～平安時代の柱穴・ピット	土師器	皿	9.4	6.5	2.2	橙(5YR7/6)	ほぼ完形
383	奈良～平安時代の柱穴・ピット	黒色土器	椀	—	—	(2.2)	灰白(10YR8/2)	
384	奈良～平安時代の柱穴・ピット	黒色土器	椀	(16.5)	6.8	(6.2)	灰白(2.5Y8/2)	
385	奈良～平安時代の柱穴・ピット	土師器	甕	22.6	—	(14.4)	灰褐(7.5YR5/2)	
386	奈良～平安時代の柱穴・ピット	土師器	甕	—	—	(3.6)	にぶい褐(7.5YR5/4)	
387	奈良～平安時代の柱穴・ピット	土師器	甑	—	20.6	(24.0)	橙(7.5YR7/6)	
388	奈良～平安時代の柱穴・ピット	土師器	甕・甑	—	—	(2.1)	にぶい橙(7.5YR6/4)	把手のみ
389	奈良～平安時代の柱穴・ピット	土師器	甕・甑	—	—	(2.9)	にぶい褐(7.5YR5/4)	把手のみ
390	奈良～平安時代の柱穴・ピット	製塩土器	—	7.8	—	(3.6)	にぶい黄褐(10YR6/3)	
391	奈良～平安時代の柱穴・ピット	製塩土器	—	—	—	(4.1)	にぶい黄橙(10YR7/4)	
392	奈良～平安時代の柱穴・ピット	製塩土器	—	—	—	(3.0)	にぶい黄橙(10YR6/4)	
393	奈良～平安時代の柱穴・ピット	製塩土器	—	(14.3)	—	(6.1)	灰褐(7.5YR4/2)	
394	奈良～平安時代の柱穴・ピット	製塩土器	—	—	—	(4.9)	にぶい黄橙(10YR6/3)	
395	奈良～平安時代の柱穴・ピット	製塩土器	—	—	—	(2.1)	にぶい褐(7.5YR5/3)	
396	奈良～平安時代の柱穴・ピット	製塩土器	—	—	—	(1.9)	橙(5YR7/8)	
397	包含層・遺構に伴わない遺物	須恵器	杯蓋	—	—	(2.6)	黄灰(2.5Y6/1)	
398	包含層・遺構に伴わない遺物	須恵器	杯蓋	14.0	—	2.6	灰白(5Y7/1)	ほぼ完形
399	包含層・遺構に伴わない遺物	須恵器	杯蓋	15.2	—	(2.5)	灰白(5Y8/1)	軟質
400	包含層・遺構に伴わない遺物	須恵器	杯蓋	15.2	—	(1.9)	黄灰(2.5Y6/1)	
401	包含層・遺構に伴わない遺物	須恵器	杯蓋	(16.5)	—	3.2	黄灰(2.5Y6/1)	軟質
402	包含層・遺構に伴わない遺物	須恵器	杯蓋	16.9	—	5.1	灰(N6/)	
403	包含層・遺構に伴わない遺物	須恵器	杯蓋	18.7	—	3.8	灰白(5Y8/1)	
404	包含層・遺構に伴わない遺物	須恵器	杯蓋	—	—	(1.3)	灰白(N7/)	つまみのみ
405	包含層・遺構に伴わない遺物	須恵器	杯蓋	—	—	(1.2)	灰(N6/)	つまみのみ
406	包含層・遺構に伴わない遺物	須恵器	杯蓋	—	—	(1.6)	黄灰(2.5Y6/1)	つまみのみ
407	包含層・遺構に伴わない遺物	須恵器	杯身	13.6	(10.4)	3.8	灰黄(2.5Y8/2)	軟質
408	包含層・遺構に伴わない遺物	須恵器	杯身	—	(8.5)	(1.4)	灰白(N7/)	
409	包含層・遺構に伴わない遺物	須恵器	杯身	—	9.9	(1.3)	灰黄(2.5Y7/2)	
410	包含層・遺構に伴わない遺物	須恵器	杯身	12.0	7.3	3.6	灰白(2.5Y7/1)	
411	包含層・遺構に伴わない遺物	須恵器	杯身	(11.2)	6.0	2.9	灰(N4/)	
412	包含層・遺構に伴わない遺物	須恵器	皿	10.8	7.4	2.0	灰白(2.5Y7/1)	
413	包含層・遺構に伴わない遺物	須恵器	椀	13.4	—	(4.2)	灰白(5Y7/1)	
414	包含層・遺構に伴わない遺物	須恵器	壺	—	10.6	(7.3)	灰白(N7/)	
415	包含層・遺構に伴わない遺物	須恵器	壺	—	10.0	(3.5)	灰(N4/)	
416	包含層・遺構に伴わない遺物	須恵器	壺	18.4	—	(3.8)	灰(7.5Y6/1)	
417	包含層・遺構に伴わない遺物	須恵器	葉壺	9.2	—	(3.9)	灰白(7.5Y7/1)	
418	包含層・遺構に伴わない遺物	須恵器	壺	(5.8)	—	(3.3)	灰白(N7/)	
419	包含層・遺構に伴わない遺物	須恵器	壺	8.0	—	(4.4)	灰白(5Y7/1)	
420	包含層・遺構に伴わない遺物	須恵器	水注	—	2.8	(2.6)	暗灰(N3/)	
421	包含層・遺構に伴わない遺物	土師器	杯蓋	—	—	(1.2)	淡黄(2.5Y8/3)	つまみのみ、赤色顔料
422	包含層・遺構に伴わない遺物	土師器	杯蓋	—	—	(1.3)	淡黄(2.5Y8/3)	つまみのみ
423	包含層・遺構に伴わない遺物	土師器	杯蓋	—	—	(1.7)	浅黄橙(7.5YR8/6)	つまみのみ、赤色顔料
424	包含層・遺構に伴わない遺物	土師器	杯蓋	—	—	(1.4)	灰黄(2.5Y7/2)	つまみのみ

掲載番号	遺構名	種別	器種	計測値(cm)			色調(外面)	備考
				口径	底径	器高		
425	包含層・遺構に伴わない遺物	土師器	杯蓋	—	—	(1.4)	明黄橙(10YR7/6)	
426	包含層・遺構に伴わない遺物	土師器	杯蓋	—	—	(0.9)	橙(7.5YR6/6)	
427	包含層・遺構に伴わない遺物	土師器	杯	(12.5)	9.1	(3.6)	にぶい黄橙(10YR7/4)	
428	包含層・遺構に伴わない遺物	土師器	杯	12.8	7.9	2.6	明赤褐(5YR5/8)	
429	包含層・遺構に伴わない遺物	土師器	杯	12.3	9.2	3.7	にぶい橙(7.5YR7/4)	
430	包含層・遺構に伴わない遺物	土師器	杯	12.2	8.3	3.2	灰白(10YR8/2)	
431	包含層・遺構に伴わない遺物	土師器	杯	12.0	8.1	3.2	橙(5YR7/6)	
432	包含層・遺構に伴わない遺物	土師器	杯	11.8	5.0	3.5	橙(7.5YR7/6)	
433	包含層・遺構に伴わない遺物	土師器	杯	13.2	11.2	2.9	浅黄橙(10YR8/3)	赤色顔料
434	包含層・遺構に伴わない遺物	土師器	杯	15.3	12.8	3.2	浅黄橙(10YR8/3)	赤色顔料
435	包含層・遺構に伴わない遺物	土師器	杯身	13.3	9.4	3.6	浅黄橙(7.5YR8/4)	
436	包含層・遺構に伴わない遺物	土師器	杯	(11.4)	6.0	2.9	にぶい橙(7.5YR7/4)	
437	包含層・遺構に伴わない遺物	土師器	皿	13.8	12.1	2.1	明赤褐(2.5YR5/8)	赤色顔料
438	包含層・遺構に伴わない遺物	土師器	皿	13.6	11.5	1.7	灰白(10YR8/2)	ほぼ完形
439	包含層・遺構に伴わない遺物	土師器	皿	13.8	10.3	1.7	橙(2.5YR6/8)	赤色顔料
440	包含層・遺構に伴わない遺物	土師器	皿	(13.6)	5.2	1.7	明赤褐(2.5YR5/8)	
441	包含層・遺構に伴わない遺物	土師器	皿	13.2	11.6	1.1	にぶい橙(7.5YR6/4)	赤色顔料、ほぼ完形
442	包含層・遺構に伴わない遺物	土師器	皿	19.8	14.0	1.4	橙(5YR6/6)	赤色顔料
443	包含層・遺構に伴わない遺物	土師器	皿	9.5	6.7	2.0	にぶい黄橙(10YR7/3)	完形
444	包含層・遺構に伴わない遺物	土師器	皿	10.2	7.6	2.9	にぶい黄橙(10YR7/4)	ほぼ完形
445	包含層・遺構に伴わない遺物	土師器	高台付皿	9.6	—	(1.2)	橙(7.5YR7/6)	
446	包含層・遺構に伴わない遺物	土師器	皿	—	6.9	(1.8)	浅黄橙(7.5YR8/4)	
447	包含層・遺構に伴わない遺物	土師器	皿	9.1	7.8	(2.0)	にぶい黄橙(10YR7/4)	
448	包含層・遺構に伴わない遺物	土師器	皿	10.4	9.3	(1.8)	にぶい黄橙(10YR6/3)	
449	包含層・遺構に伴わない遺物	土師器	粗製碗	11.6	4.8	4.9	にぶい黄橙(10YR6/3)	
450	包含層・遺構に伴わない遺物	土師器	粗製碗	11.6	6.0	4.5	赤(10R5/6)	
451	包含層・遺構に伴わない遺物	土師器	粗製碗	12.7	4.6	5.2	褐灰(10YR5/1)	
452	包含層・遺構に伴わない遺物	土師器	粗製碗	13.3	—	(4.3)	橙(5YR6/6)	
453	包含層・遺構に伴わない遺物	土師器	粗製碗	(11.2)	(8.3)	3.2	にぶい黄橙(10YR7/4)	内面にヘラ記号
454	包含層・遺構に伴わない遺物	土師器	粗製碗	10.0	—	(2.8)	明褐(7.5YR5/6)	
455	包含層・遺構に伴わない遺物	土師器	碗	—	—	(2.4)	灰(N5/)	
456	包含層・遺構に伴わない遺物	土師器	碗	—	8.4	(2.3)	橙(5YR6/6)	
457	包含層・遺構に伴わない遺物	土師器	碗	—	8.8	(2.5)	にぶい橙(7.5YR7/4)	
458	包含層・遺構に伴わない遺物	土師器	碗	—	7.0	(2.5)	明赤褐(5YR5/6)	
459	包含層・遺構に伴わない遺物	土師器	碗	—	8.7	(2.9)	浅黄橙(10YR8/3)	
460	包含層・遺構に伴わない遺物	製塩土器	—	10.2	—	(3.5)	黒(2.5Y2/1)	
461	包含層・遺構に伴わない遺物	製塩土器	—	9.4	—	(5.0)	黒(10YR2/1)	
462	包含層・遺構に伴わない遺物	製塩土器	—	(14.6)	—	(10.0)	にぶい褐(7.5YR5/4)	
463	包含層・遺構に伴わない遺物	製塩土器	—	—	—	(2.5)	にぶい黄橙(10YR6/3)	
464	包含層・遺構に伴わない遺物	製塩土器	—	—	—	(3.7)	にぶい赤褐(5YR5/4)	
465	包含層・遺構に伴わない遺物	製塩土器	—	—	—	(4.7)	にぶい黄褐(10YR5/3)	
466	包含層・遺構に伴わない遺物	製塩土器	—	—	—	(5.6)	橙(5YR6/6)	
467	包含層・遺構に伴わない遺物	製塩土器	—	—	—	(2.6)	橙(5YR7/6)	
468	包含層・遺構に伴わない遺物	製塩土器	—	—	—	(4.8)	橙(2.5YR6/8)	
469	包含層・遺構に伴わない遺物	製塩土器	—	—	—	(0.6)	橙(7.5YR6/6)	
470	包含層・遺構に伴わない遺物	製塩土器	—	—	—	(1.0)	にぶい黄橙(10YR7/3)	
471	包含層・遺構に伴わない遺物	製塩土器	—	—	—	(1.3)	にぶい橙(5YR6/4)	
472	包含層・遺構に伴わない遺物	製塩土器	—	—	—	(1.4)	にぶい褐(7.5YR5/4)	
473	包含層・遺構に伴わない遺物	製塩土器	—	—	—	(1.9)	にぶい黄橙(10YR7/2)	
474	包含層・遺構に伴わない遺物	製塩土器	—	—	—	(1.7)	橙(5YR7/6)	
475	包含層・遺構に伴わない遺物	製塩土器	—	—	—	(1.2)	にぶい橙(7.5YR7/4)	
476	包含層・遺構に伴わない遺物	製塩土器	—	—	—	(1.0)	にぶい黄橙(10YR7/3)	
477	包含層・遺構に伴わない遺物	製塩土器	—	—	—	(1.9)	浅黄橙(10YR8/4)	
478	包含層・遺構に伴わない遺物	製塩土器	—	—	—	(2.2)	明赤褐(2.5YR5/8)	
479	包含層・遺構に伴わない遺物	製塩土器	—	—	—	(3.1)	明黄褐(10YR7/6)	
480	包含層・遺構に伴わない遺物	土師器	粗製碗か鉢	—	—	(3.1)	灰褐(7.5YR4/2)	線刻あり
481	包含層・遺構に伴わない遺物	土師器	粗製碗か鉢	—	—	(3.5)	にぶい橙(7.5YR6/4)	線刻あり
482	包含層・遺構に伴わない遺物	土師器	竈	—	—	(9.6)	にぶい橙(7.5YR6/4)	
483	包含層・遺構に伴わない遺物	黒色土器	碗	—	—	(2.6)	灰白(10YR8/1)	
484	包含層・遺構に伴わない遺物	黒色土器	碗	—	—	(4.8)	橙(7.5YR7/6)	
485	包含層・遺構に伴わない遺物	黒色土器	碗	14.4	7.2	5.2	浅黄橙(10YR8/4)	
486	包含層・遺構に伴わない遺物	黒色土器	碗	—	6.9	(2.1)	浅黄橙(10YR8/3)	
487	包含層・遺構に伴わない遺物	黒色土器	碗	—	7.3	(1.8)	灰白(2.5Y8/2)	
488	包含層・遺構に伴わない遺物	灰釉陶器	碗	—	—	(2.6)	釉薬:灰オリブ(7.5Y6/2)	光ヶ丘1式
489	包含層・遺構に伴わない遺物	灰釉陶器	碗・皿	—	(7.0)	(1.2)	釉薬:— 素地:灰白(N8/)	黒笹90号窯式、転用碗、墨痕あり
490	包含層・遺構に伴わない遺物	緑釉陶器	碗・皿	—	—	(1.5)	釉薬:オリブ灰(10Y4/2)	京都産、輪花あり
491	包含層・遺構に伴わない遺物	緑釉陶器	碗	—	—	(1.4)	釉薬:根岸(9.5Y4.5/3)	近江産
492	包含層・遺構に伴わない遺物	緑釉陶器	稜碗	(13.8)	—	(3.3)	釉薬:淡黄(5Y8/3)	京都産
493	包含層・遺構に伴わない遺物	緑釉陶器	碗・皿	—	—	(1.0)	釉薬:モスグリーン(6.5GY4/4)	近江産
494	包含層・遺構に伴わない遺物	緑釉陶器	碗	—	—	(3.3)	釉薬:灰白(7.5Y7/2)	京都産

掲載番号	遺構名	種別	器種	計測値(cm)			色調(外面)	備考
				口径	底径	器高		
495	包含層・遺構に伴わない遺物	緑釉陶器	椀	—	6.4	(1.5)	釉薬:根岸(9.5Y4.5/3)	近江産
496	包含層・遺構に伴わない遺物	緑釉陶器	皿	—	6.0	(1.2)	釉薬:山葵(7.5GY7.5/4)	京都(洛北)産
497	包含層・遺構に伴わない遺物	緑釉陶器	稜椀	—	6.1	(2.2)	釉薬:オリーブ黄(5Y6/4)	京都産
498	包含層・遺構に伴わない遺物	緑釉陶器	椀	—	7.8	(2.3)	釉薬:灰白(7.5Y7/2)	京都(洛北)産
499	包含層・遺構に伴わない遺物	瓦	軒丸瓦	長(10.3)	幅(4.5)	厚(2.4)	にぶい橙(7.5YR7/4)	
500	包含層・遺構に伴わない遺物	瓦	丸瓦	長(4.5)	—	厚1.6	浅黄橙(10YR8/4)	
501	包含層・遺構に伴わない遺物	瓦	平瓦	長(4.6)	幅(4.2)	厚1.8	にぶい黄橙(10YR7/4)	
502	包含層・遺構に伴わない遺物	瓦	平瓦	長(5.0)	幅(4.7)	厚1.9	にぶい褐(7.5YR6/3)	
503	包含層・遺構に伴わない遺物	瓦	平瓦	長(8.6)	幅(6.1)	厚1.7	灰(N4/)	
504	包含層・遺構に伴わない遺物	瓦	平瓦	長(9.1)	幅(5.5)	厚2.4	灰オリーブ(5Y5/2)	
505	掘立柱建物15	土師器	椀	10.9	4.4	4.7	灰白(2.5Y8/2)	吉備系土師器椀、ほぼ完形
506	掘立柱建物15	瓦質土器	播鉢	24.0	—	(8.6)	橙(5YR6/6)	
507	掘立柱建物18	土師器	椀	—	6.0	(3.6)	灰白(10YR8/2)	吉備系土師器椀
508	掘立柱建物18	土師器	皿	(7.7)	6.0	1.1	浅黄橙(10YR8/3)	
509	柱穴列9	土師器	椀	14.8	6.4	5.2	灰白(10YR8/2)	吉備系土師器椀、ほぼ完形
510	柱穴列15	土師器	椀	—	—	(3.4)	浅黄橙(10YR8/3)	吉備系土師器椀
511	柱穴列15	土師器	椀	—	6.6	(2.6)	灰白(10YR8/2)	吉備系土師器椀
512	土坑33	土師器	鍋	(34.7)	—	(7.5)	にぶい黄橙(10YR7/3)	
513	土坑34	土師器	皿	—	6.0	(1.1)	灰白(10YR8/2)	
514	土坑35	土師器	椀	(15.9)	—	(3.5)	浅黄橙(7.5YR8/4)	吉備系土師器椀
515	土坑35	土師器	椀	—	7.0	(3.5)	浅黄橙(10YR8/3)	吉備系土師器椀
516	土坑35	土師器	椀	(14.2)	6.0	(4.3)	灰白(10YR8/2)	吉備系土師器椀
517	土坑35	土師器	椀	(13.9)	6.0	(5.0)	浅黄橙(10YR8/3)	吉備系土師器椀
518	土坑35	土師器	皿	8.8	—	(2.3)	灰(N5/)	
519	溝32	土師器	皿	8.4	5.0	1.6	にぶい黄橙(10YR7/3)	
520	溝34	土師器	鍋	—	—	(3.5)	灰褐(7.5YR5/2)	
521	たわみ6	須恵器	甕	—	—	(8.6)	灰(N4/)	
522	河道1	瓦質土器	鍋	—	—	(3.4)	褐灰(10YR4/1)	
523	河道1	瓦質土器	鉢	—	—	(4.0)	にぶい黄橙(10YR6/3)	
524	谷部	土師器	椀	—	7.0	(2.6)	灰白(2.5Y8/2)	吉備系土師器椀
525	谷部	青磁	碗	—	—	(1.3)	釉薬:灰オリーブ(7.5Y6/2)	
526	鎌倉時代以降の柱穴	土師器	椀	13.9	—	(4.8)	淡黄(2.5Y8/3)	吉備系土師器椀
527	鎌倉時代以降の柱穴	土師器	椀	15.4	—	(4.0)	灰白(2.5Y8/1)	吉備系土師器椀
528	鎌倉時代以降の柱穴	土師器	椀	—	—	(3.2)	灰(N5/)	
529	鎌倉時代以降の柱穴	土師器	椀	15.5	5.6	4.7	灰白(10YR8/2)	吉備系土師器椀
530	鎌倉時代以降の柱穴	土師器	椀	(10.9)	4.1	3.3	浅黄橙(10YR8/3)	吉備系土師器椀
531	鎌倉時代以降の柱穴	土師器	椀	(11.5)	3.6	3.8	灰白(10YR8/2)	吉備系土師器椀
532	鎌倉時代以降の柱穴	土師器	椀	9.7	5.2	3.6	浅黄橙(10YR8/3)	吉備系土師器椀、ほぼ完形
533	鎌倉時代以降の柱穴	土師器	皿	8.6	5.3	1.4	灰白(10YR8/2)	ほぼ完形
534	鎌倉時代以降の柱穴	土師器	皿	9.1	6.4	1.5	灰白(10YR8/2)	ほぼ完形
535	鎌倉時代以降の柱穴	土師器	皿	8.6	6.5	1.2	浅黄橙(10YR8/3)	ほぼ完形
536	鎌倉時代以降の柱穴	瓦質土器	播鉢	—	—	(5.8)	黒褐(7.5YR3/2)	
537	鎌倉時代以降の柱穴	白磁	碗	(15.2)	—	(3.3)	釉薬:灰白(7.5Y7/2)	
538	包含層・遺構に伴わない遺物	土師器	椀	11.9	6.3	5.1	浅黄橙(10YR8/3)	
539	包含層・遺構に伴わない遺物	土師器	椀	14.8	6.8	4.7	灰白(10YR8/2)	吉備系土師器椀
540	包含層・遺構に伴わない遺物	土師器	椀	(13.6)	7.0	3.9	浅黄橙(10YR8/3)	
541	包含層・遺構に伴わない遺物	土師器	椀	12.5	5.0	5.1	灰白(2.5Y8/1)	吉備系土師器椀
542	包含層・遺構に伴わない遺物	土師器	椀	10.8	3.6	3.8	淡黄(2.5Y8/3)	吉備系土師器椀、ほぼ完形
543	包含層・遺構に伴わない遺物	土師器	椀	10.7	4.3	3.9	灰白(10YR8/2)	吉備系土師器椀
544	包含層・遺構に伴わない遺物	土師器	椀	10.0	—	(2.4)	淡黄(2.5Y8/3)	吉備系土師器椀
545	包含層・遺構に伴わない遺物	土師器	椀	9.0	—	(2.5)	浅黄橙(10YR8/3)	吉備系土師器椀
546	包含層・遺構に伴わない遺物	土師器	椀	(9.2)	3.4	2.9	にぶい橙(7.5YR7/3)	吉備系土師器椀
547	包含層・遺構に伴わない遺物	土師器	椀	(9.3)	4.1	2.0	浅黄橙(10YR8/4)	吉備系土師器椀
548	包含層・遺構に伴わない遺物	土師器	椀	—	4.2	(1.9)	浅黄橙(10YR8/3)	吉備系土師器椀
549	包含層・遺構に伴わない遺物	土師器	椀	9.5	5.0	4.0	浅黄橙(10YR8/3)	へそ椀
550	包含層・遺構に伴わない遺物	土師器	皿	9.4	5.4	1.8	橙(7.5YR6/6)	
551	包含層・遺構に伴わない遺物	土師器	皿	8.4	6.8	1.2	灰白(2.5Y8/1)	
552	包含層・遺構に伴わない遺物	土師器	皿	7.6	5.6	1.7	浅黄橙(10YR8/3)	
553	包含層・遺構に伴わない遺物	土師器	皿	7.8	6.4	1.3	灰白(10YR8/2)	
554	包含層・遺構に伴わない遺物	土師器	皿	7.8	6.1	1.5	灰白(2.5Y8/2)	
555	包含層・遺構に伴わない遺物	土師器	皿	7.4	5.0	1.3	灰白(2.5Y8/2)	
556	包含層・遺構に伴わない遺物	土師器	皿	7.3	5.8	1.2	灰白(10YR8/2)	
557	包含層・遺構に伴わない遺物	土師器	皿	7.4	5.7	1.2	浅黄橙(7.5YR8/6)	ほぼ完形
558	包含層・遺構に伴わない遺物	土師器	皿	7.0	5.0	1.4	灰白(2.5Y8/2)	完形
559	包含層・遺構に伴わない遺物	土師器	皿	6.5	4.7	1.2	にぶい橙(7.5YR7/4)	
560	包含層・遺構に伴わない遺物	土師器	皿	7.0	5.4	1.2	灰白(2.5Y8/2)	
561	包含層・遺構に伴わない遺物	土師器	皿	(7.0)	4.9	1.3	灰白(2.5Y8/2)	

掲載番号	遺構名	種別	器種	計測値(cm)			色調(外面)	備考
				口径	底径	器高		
562	包含層・遺構に伴わない遺物	土師器	皿	6.2	5.0	1.1	にぶい黄橙(10YR7/3)	完形
563	包含層・遺構に伴わない遺物	瓦質土器	鍋	32.8	—	(6.9)	灰(N4/)	
564	包含層・遺構に伴わない遺物	土師器	鍋	—	—	(9.5)	にぶい黄橙(10YR6/3)	
565	包含層・遺構に伴わない遺物	土師器	鍋	—	—	(6.9)	にぶい橙(7.5YR7/4)	
566	包含層・遺構に伴わない遺物	土師器	鍋	—	—	(4.9)	明黄褐(10YR6/6)	
567	包含層・遺構に伴わない遺物	土師器	鍋	—	—	(10.5)	にぶい黄橙(10YR6/3)	
568	包含層・遺構に伴わない遺物	土師器	鍋	—	—	(7.5)	にぶい橙(7.5YR6/4)	脚部のみ
569	包含層・遺構に伴わない遺物	白磁	碗	(11.0)	4.0	3.2	釉薬:灰白(10Y8/1)	
570	包含層・遺構に伴わない遺物	白磁	碗	—	—	(4.4)	釉薬:灰白(7.5Y7/1)	
571	包含層・遺構に伴わない遺物	白磁	碗	—	—	(2.7)	釉薬:パーチメント(0.5GY8/1.5)	
572	包含層・遺構に伴わない遺物	白磁	碗	—	—	(2.1)	釉薬:灰白(7.5Y7/2)	
573	包含層・遺構に伴わない遺物	白磁	碗	—	—	(1.8)	釉薬:明オリーブ灰(2.5GY7/1)	
574	包含層・遺構に伴わない遺物	白磁	碗	—	—	(2.4)	釉薬:浅黄橙(10YR8/3)	
575	包含層・遺構に伴わない遺物	白磁	碗	—	—	(2.0)	釉薬:灰白(7.5Y7/1)	
576	包含層・遺構に伴わない遺物	白磁	碗	—	—	(2.3)	釉薬:灰オリーブ(5Y6/2)	
577	包含層・遺構に伴わない遺物	白磁	碗	—	—	(2.7)	釉薬:パーチメント(0.5GY8/1.5)	
578	包含層・遺構に伴わない遺物	白磁	碗	—	—	(2.6)	釉薬:灰白(7.5Y7/1)	
579	包含層・遺構に伴わない遺物	白磁	碗	—	—	(2.3)	釉薬:灰オリーブ(5Y6/2)	
580	包含層・遺構に伴わない遺物	白磁	碗	—	—	(2.9)	釉薬:灰白(5Y7/2)	
581	包含層・遺構に伴わない遺物	白磁	碗	—	—	(4.8)	釉薬:灰白(5Y7/2)	
582	包含層・遺構に伴わない遺物	白磁	碗	—	7.0	(2.1)	釉薬:灰黄(2.5Y7/2)	
583	包含層・遺構に伴わない遺物	白磁	碗	—	7.2	(1.9)	釉薬:灰白(7.5Y7/2)	
584	包含層・遺構に伴わない遺物	青磁	碗	—	—	(3.3)	釉薬:オリーブ灰(2.5GY6/1)	
585	包含層・遺構に伴わない遺物	青磁	碗	—	7.0	(3.6)	釉薬:灰オリーブ(5Y6/2)	
586	包含層・遺構に伴わない遺物	青磁	碗	—	—	(3.7)	釉薬:灰黄(2.5Y6/2)	
587	包含層・遺構に伴わない遺物	青磁	碗	—	6.0	(3.1)	釉薬:暗灰黄(2.5Y5/2)	

表42 和田谷遺跡 土製品観察表

掲載番号	遺構名	器種	計測値(mm)			重量(g)	色調	備考
			最大長	最大幅	最大厚			
C 1	溝 3	土錘	48.0	33.0	32.0	46.7	にぶい橙(7.5YR6/4)	管状、孔径6.8mm、ほぼ完形
C 2	掘立柱建物 5	土錘	64.0	15.0	11.0	9.6	にぶい黄褐(10YR5/3)	棒状、孔径6.0mm、完形
C 3	段状遺構11	転用硯	(77.0)	55.0	9.0	47.0	灰白(N7/)	須恵器転用
C 4	土坑 8	土錘	39.5	(26.0)	18.5	17.6	にぶい黄橙(10YR6/3)	有溝
C 5	竪穴遺構 3	土錘	35.0	26.5	23.5	16.6	にぶい赤褐(5YR5/4)	有溝、完形
C 6	竪穴遺構 3	土錘	36.5	25.5	21.0	18.2	灰黄褐(10YR5/2)	有溝、完形
C 7	竪穴遺構 3	土錘	38.0	28.0	20.0	20.8	明赤褐(2.5YR5/6)	有溝、完形
C 8	竪穴遺構 3	土錘	38.5	26.5	20.5	19.7	赤褐(2.5YR4/6)	有溝、完形
C 9	竪穴遺構 3	土錘	36.0	25.0	(19.0)	14.5	黒褐(2.5Y3/1)	有溝
C 10	竪穴遺構 3	土錘	(39.0)	28.0	21.0	20.3	褐灰(10YR4/1)	有溝、ほぼ完形
C 11	竪穴遺構 3	土錘	41.5	26.5	21.0	22.3	にぶい黄橙(10YR7/4)	有溝、完形
C 12	奈良～平安時代の柱穴・ピット	鞆羽口	(58.0)	(78.0)	(29.0)	59.5	橙(2.5YR6/8)	
C 13	包含層・遺構に伴わない遺物	鞆羽口	(57.0)	(48.0)	(30.0)	42.9	橙(7.5YR6/6)	
C 14	包含層・遺構に伴わない遺物	鞆羽口	(78.0)	(64.0)	20.0	118.0	にぶい黄褐(10YR5/3)	
C 15	包含層・遺構に伴わない遺物	土錘	24.0	21.0	23.0	9.5	橙(10YR6/6)	管状、孔径8.5mm、完形
C 16	包含層・遺構に伴わない遺物	土錘	(27.0)	14.0	12.0	3.9	明赤褐(5YR5/8)	棒状、孔貫通せず
C 17	包含層・遺構に伴わない遺物	土錘	(32.0)	12.0	11.0	4.5	褐灰(10YR4/1)	棒状、孔径5.0mm
C 18	包含層・遺構に伴わない遺物	土錘	(34.0)	11.0	10.0	4.2	褐灰(10YR4/1)	棒状、孔径6.0mm
C 19	包含層・遺構に伴わない遺物	土錘	(32.0)	13.0	11.0	5.3	明赤褐(5YR5/6)	棒状、孔径5.0mm
C 20	包含層・遺構に伴わない遺物	土錘	(50.0)	19.0	17.0	17.4	灰黄褐(10YR4/2)	棒状、孔径7.0mm
C 21	包含層・遺構に伴わない遺物	土錘	26.5	17.5	16.5	7.0	にぶい黄橙(10YR6/4)	有溝、ほぼ完形
C 22	包含層・遺構に伴わない遺物	土錘	36.0	23.0	18.0	11.8	橙(2.5YR6/6)	有溝、完形
C 23	包含層・遺構に伴わない遺物	土錘	(30.5)	23.0	(9.0)	6.6	明赤褐(2.5YR5/8)	有溝
C 24	包含層・遺構に伴わない遺物	土錘	35.0	25.0	(10.5)	7.6	明赤褐(2.5YR5/6)	有溝
C 25	包含層・遺構に伴わない遺物	土錘	(36.0)	25.0	(10.0)	8.6	橙(5YR6/6)	有溝
C 26	包含層・遺構に伴わない遺物	土錘	35.0	23.0	(18.0)	10.7	橙(5YR6/6)	有溝
C 27	包含層・遺構に伴わない遺物	土錘	34.5	22.0	16.0	11.8	にぶい黄褐(10YR6/4)	有溝、完形
C 28	包含層・遺構に伴わない遺物	土錘	37.0	24.0	17.0	14.6	明褐(7.5YR5/6)	有溝、完形
C 29	包含層・遺構に伴わない遺物	土錘	(40.5)	27.0	(13.0)	12.2	灰黄褐(10YR5/2)	有溝
C 30	包含層・遺構に伴わない遺物	土錘	33.0	27.5	(13.0)	9.9	にぶい橙(7.5YR6/4)	有溝
C 31	包含層・遺構に伴わない遺物	土錘	(43.0)	27.5	(19.0)	13.7	橙(5YR6/6)	有溝
C 32	包含層・遺構に伴わない遺物	土錘	(48.0)	24.0	19.0	18.4	橙(10YR6/6)	有溝
C 33	包含層・遺構に伴わない遺物	土錘	61.0	35.0	28.0	59.7	にぶい黄橙(10YR6/4)	有溝、完形
C 34	包含層・遺構に伴わない遺物	土錘	60.0	32.0	36.0	69.9	にぶい黄橙(10YR7/4)	有溝、完形
C 35	包含層・遺構に伴わない遺物	土錘	(55.5)	44.0	43.5	101.5	にぶい黄橙(10YR7/3)	有溝
C 36	谷部	土製円板	27.5	29.5	12.0	12.9	灰白(N7/)	須恵器転用
C 37	鎌倉時代以降の柱穴	土錘	85.0	43.0	46.0	177.2	にぶい橙(7.5YR6/4)	管状、孔径16.0mm、完形

掲載番号	遺構名	器種	計測値(mm)			重量(g)	色調	備考
			最大長	最大幅	最大厚			
C38	包含層・遺構に伴わない遺物	土製円板	24.0	21.0	12.0	8.1	灰(N6/)	須恵器転用
C39	包含層・遺構に伴わない遺物	土製円板	21.5	21.0	11.0	7.8	灰(N5/)	須恵器転用
C40	包含層・遺構に伴わない遺物	土製円板	21.5	17.2	14.0	5.1	灰(N6/)	須恵器転用
C41	包含層・遺構に伴わない遺物	土製円板	24.0	22.5	10.0	7.2	にぶい黄橙(10YR7/2)	須恵器転用
C42	包含層・遺構に伴わない遺物	土製円板	22.2	25.8	10.0	7.8	灰白(5Y8/2)	須恵器転用
C43	包含層・遺構に伴わない遺物	土製円板	26.0	27.0	13.0	9.7	灰(N5/)	須恵器転用
C44	包含層・遺構に伴わない遺物	土製円板	27.0	26.0	9.0	8.7	灰(N6/)	須恵器転用
C45	包含層・遺構に伴わない遺物	土製円板	34.5	32.0	12.5	14.0	灰(N5/)	須恵器転用
C46	包含層・遺構に伴わない遺物	土製円板	47.0	45.0	19.0	49.1	にぶい黄褐(10YR5/3)	土師器転用
C47	包含層・遺構に伴わない遺物	土製円板	46.5	42.0	6.5	13.1	灰白(2.5Y7/1)	土師器転用
C48	包含層・遺構に伴わない遺物	土製円板	49.0	55.0	15.0	42.5	褐灰(10YR6/1)	瓦質に近い
C49	包含層・遺構に伴わない遺物	土製円板	41.5	32.0	7.0	8.5	灰白(10YR8/2)	有孔、土師器転用

表43 和田谷遺跡 石製品観察表

掲載番号	遺構名	器種	計測値(mm)			重量(g)	石材	残存状況	備考
			最大長	最大幅	最大厚				
S1	段状遺構4	原石	66.0	37.0	32.0	102.7	水晶	—	煙水晶
S2	溝1	石鏃	24.4	18.1	3.7	1.5	サヌカイト	完形	
S3	溝1	磨製石砲丁	(72.2)	41.1	7.4	31.8	砂質片岩	欠	
S4	溝2	スクレイパー	40.0	(51.5)	10.0	22.1	サヌカイト	欠	
S5	溝3	石鏃	17.0	17.0	3.0	0.4	サヌカイト	完形	
S6	溝12	石鏃	64.0	55.0	52.0	243.0	花崗岩	完形	
S7	包含層・遺構に伴わない遺物	有茎尖頭器	76.4	28.8	6.0	10.7	サヌカイト	完形	
S8	包含層・遺構に伴わない遺物	石鏃	(19.8)	13.0	3.2	0.7	サヌカイト	欠	
S9	包含層・遺構に伴わない遺物	石鏃	(17.0)	17.0	3.0	0.7	サヌカイト	欠	
S10	包含層・遺構に伴わない遺物	石鏃	18.0	16.0	4.0	0.8	サヌカイト	完形	
S11	包含層・遺構に伴わない遺物	石鏃	23.3	15.4	3.0	0.9	サヌカイト	完形	
S12	包含層・遺構に伴わない遺物	石鏃	25.1	14.6	2.5	0.6	サヌカイト	完形	
S13	包含層・遺構に伴わない遺物	石鏃	24.0	19.0	4.0	1.4	サヌカイト	完形	
S14	包含層・遺構に伴わない遺物	石鏃	24.7	13.6	2.6	0.6	サヌカイト	完形	
S15	包含層・遺構に伴わない遺物	石鏃	24.0	16.0	4.0	1.2	黒曜石(隠岐産)	完形	
S16	包含層・遺構に伴わない遺物	石鏃	(23.8)	13.0	4.0	0.8	サヌカイト	欠	
S17	包含層・遺構に伴わない遺物	石鏃	28.2	(17.5)	3.1	1.2	サヌカイト	欠	
S18	包含層・遺構に伴わない遺物	石鏃	31.8	(17.0)	3.8	1.4	サヌカイト	欠	
S19	包含層・遺構に伴わない遺物	石鏃	40.0	19.0	6.0	4.7	サヌカイト	—	未成品か
S20	包含層・遺構に伴わない遺物	打製石砲丁	(39.5)	83.7	14.2	54.2	サヌカイト	欠	
S21	包含層・遺構に伴わない遺物	打製石砲丁	(46.2)	42.2	10.7	30.4	サヌカイト	欠	
S22	包含層・遺構に伴わない遺物	打製石砲丁	(27.5)	35.6	9.0	11.8	サヌカイト	欠	
S23	包含層・遺構に伴わない遺物	打製石砲丁	(28.2)	38.0	7.7	9.5	サヌカイト	欠	
S24	包含層・遺構に伴わない遺物	打製石砲丁	(31.0)	53.5	11.0	19.1	サヌカイト	欠	
S25	包含層・遺構に伴わない遺物	スクレイパー	(40.1)	31.6	6.5	7.5	サヌカイト	欠	
S26	包含層・遺構に伴わない遺物	スクレイパー	(43.7)	24.6	7.7	8.7	サヌカイト	欠	
S27	包含層・遺構に伴わない遺物	スクレイパー	(48.0)	32.0	6.0	10.1	サヌカイト	欠	
S28	包含層・遺構に伴わない遺物	剥片	35.0	43.0	7.0	10.5	サヌカイト	—	使用痕あり
S29	包含層・遺構に伴わない遺物	剥片	29.0	18.0	5.0	4.1	サヌカイト	—	使用痕あり
S30	包含層・遺構に伴わない遺物	石核	56.0	28.1	16.9	16.2	流紋岩	—	
S31	包含層・遺構に伴わない遺物	磨製石斧	(78.0)	54.2	37.0	246.5	安山岩	欠	
S32	包含層・遺構に伴わない遺物	叩石	198.0	55.0	40.0	486.0	細粒安山岩	完形	
S33	掘立柱建物1	砥石	(112.0)	87.0	35.0	526.7	砂岩	欠	
S34	溝14	砥石	(33.0)	(20.0)	15.0	15.6	流紋岩	欠	
S35	包含層・遺構に伴わない遺物	砥石	(33.0)	(30.0)	18.0	20.2	流紋岩	欠	
S36	包含層・遺構に伴わない遺物	砥石	(47.0)	45.0	21.0	56.5	流紋岩	欠	
S37	包含層・遺構に伴わない遺物	砥石	115.0	(49.0)	23.0	167.4	細粒花崗岩	欠	
S38	包含層・遺構に伴わない遺物	砥石	80.0	60.1	48.0	384.0	細粒花崗岩	完形	
S39	包含層・遺構に伴わない遺物	砥石	(92.0)	43.5	27.0	111.9	流紋岩	欠	

表44 和田谷遺跡 木製品観察表

掲載番号	遺構名	器種	計測値(mm)			樹種	木取り	残存状況	備考
			最大長	最大幅	最大厚				
W1	谷部	杵掻き?	(360)	66	18	ヒノキ属	柁目材	欠	

表45 和田谷遺跡 金属製品観察表

掲載 番号	遺構名	器種	材質	計測値(mm)			重量(g)	残存状況	備考
				最大長	最大幅	最大厚			
M 1	段状遺構 3	製錬滓	鉄	53.0	45.0	37.0	138.1	—	分析試料WDT-1
M 2	包含層・遺構に伴わない遺物	鎌	鉄	96.0	25.0	3.0	30.6	完形	
M 3	包含層・遺構に伴わない遺物	鎌	鉄	(41.2)	16.3	3.0	5.7	欠	
M 4	包含層・遺構に伴わない遺物	不明鉄器	鉄	(38.6)	11.5	6.3	4.3	欠	
M 5	包含層・遺構に伴わない遺物	耳環	銅	25.8	23.6	7.2	13.6	完形	
M 6	掘立柱建物 1	不明鉄器	鉄	(18.7)	(22.8)	5.0	3.4	欠	
M 7	段状遺構 11	刀子	鉄	(66.0)	11.5	4.7	5.4	欠	
M 8	竪穴遺構 1	工具?	鉄	(131.5)	(12.5)	3.0	16.3	欠	
M 9	竪穴遺構 1	滓	鉄	60.0	32.0	32.0	78.7	—	
M10	竪穴遺構 3	鎌	鉄	(186.7)	34.5	5.5	78.6	欠	
M11	鍛冶炉 1	椀形鍛冶滓	鉄	77.0	43.0	19.0	50.3	—	分析試料WDT-2
M12	鍛冶炉 5	椀形鍛冶滓	鉄	81.0	75.0	19.0	84.8	—	分析試料WDT-5
M13	奈良～平安時代の柱穴・ピット	釘	鉄	(95.5)	7.2	7.0	20.9	欠	
M14	奈良～平安時代の柱穴・ピット	釘	鉄	(65.0)	5.0	4.0	6.8	欠	
M15	奈良～平安時代の柱穴・ピット	釘	鉄	(28.4)	5.1	4.9	1.6	欠	
M16	奈良～平安時代の柱穴・ピット	釘	鉄	(36.6)	4.5	5.0	4.3	欠	
M17	奈良～平安時代の柱穴・ピット	板状鉄器	鉄	(30.0)	15.0	4.5	10.9	欠	
M18	奈良～平安時代の柱穴・ピット	鎌?	鉄	50.0	28.0	3.2	13.0	欠	
M19	奈良～平安時代の柱穴・ピット	滓	鉄	61.0	42.0	20.0	50.0	—	
M20	奈良～平安時代の柱穴・ピット	鍛冶滓	鉄	69.0	68.0	34.0	181.0	—	ピット 2 出土、分析試料WDT-4
M21	奈良～平安時代の柱穴・ピット	椀形鍛冶滓	鉄	108.0	75.0	23.0	249.9	—	ピット 1 出土、分析試料WDT-3
M22	包含層・遺構に伴わない遺物	釘	鉄	(55.2)	7.5	6.0	11.4	欠	
M23	包含層・遺構に伴わない遺物	釘	鉄	(42.5)	9.1	5.8	4.9	欠	
M24	包含層・遺構に伴わない遺物	釘	鉄	(43.5)	5.5	6.0	7.8	欠	
M25	包含層・遺構に伴わない遺物	釘	鉄	(38.1)	5.0	4.8	5.2	欠	
M26	包含層・遺構に伴わない遺物	釘	鉄	(15.7)	5.7	4.2	0.9	欠	
M27	包含層・遺構に伴わない遺物	釘	鉄	(63.3)	10.1	11.5	8.2	欠	
M28	包含層・遺構に伴わない遺物	釘	鉄	(75.8)	10.9	10.1	29.0	欠	
M29	包含層・遺構に伴わない遺物	釘	鉄	(32.6)	6.0	6.8	6.6	欠	
M30	包含層・遺構に伴わない遺物	釘	鉄	(41.3)	4.5	5.0	5.0	欠	
M31	包含層・遺構に伴わない遺物	釘	鉄	(21.6)	6.7	6.5	3.1	欠	
M32	包含層・遺構に伴わない遺物	釘	鉄	(36.8)	6.5	3.3	2.9	欠	
M33	包含層・遺構に伴わない遺物	釘	鉄	(52.5)	7.8	3.5	22.3	欠	
M34	包含層・遺構に伴わない遺物	釘	鉄	(37.0)	6.5	3.0	4.0	欠	
M35	包含層・遺構に伴わない遺物	釘	鉄	(35.4)	6.6	3.7	2.3	欠	
M36	包含層・遺構に伴わない遺物	釘	鉄	(37.6)	4.2	2.5	2.7	欠	
M37	包含層・遺構に伴わない遺物	不明鉄器	鉄	(55.0)	65.5	7.1	41.1	欠	コ字状
M38	包含層・遺構に伴わない遺物	刀子	鉄	(117.5)	30.2	3.5	47.2	欠	
M39	包含層・遺構に伴わない遺物	刀子	鉄	(67.6)	10.5	4.2	12.2	欠	
M40	包含層・遺構に伴わない遺物	刀子	鉄	(44.5)	14.6	3.0	7.4	欠	
M41	包含層・遺構に伴わない遺物	刀子	鉄	(35.8)	10.0	3.8	5.4	欠	
M42	包含層・遺構に伴わない遺物	刀子	鉄	(33.6)	14.6	3.0	3.2	欠	
M43	包含層・遺構に伴わない遺物	刀子	鉄	(32.8)	21.6	9.9	3.0	欠	
M44	包含層・遺構に伴わない遺物	刀子	鉄	(14.3)	(18.4)	3.0	1.3	欠	
M45	包含層・遺構に伴わない遺物	鋤	鉄	(41.1)	(46.1)	3.5	9.3	欠	儀器か
M46	包含層・遺構に伴わない遺物	紡錘車	鉄	(36.0)	40.4	15.3	56.7	欠	
M47	包含層・遺構に伴わない遺物	椀形鍛冶滓	鉄	68.0	50.0	35.0	152.8	—	分析試料WDT-6
M48	掘立柱建物 14	銭	銅	径24.5	—	1.3	2.1	完形	「皇宋通寶」
M49	鎌倉時代以降の柱穴	銭	銅	径(25.0)	—	1.3	1.0	欠	「元祐通寶」か
M50	鎌倉時代以降の柱穴	釘	鉄	(39.5)	6.3	6.0	8.1	欠	
M51	鎌倉時代以降の柱穴	釘	鉄	(46.3)	10.7	5.5	27.3	欠	
M52	包含層・遺構に伴わない遺物	銭	銅	径24.5	—	1.5	2.9	完形	「開元通寶」
M53	包含層・遺構に伴わない遺物	銭	銅	径24.0	—	1.1	2.3	欠	「天聖元寶」
M54	包含層・遺構に伴わない遺物	銭	銅	径24.0	—	1.4	1.4	完形	「皇宋通寶」
M55	包含層・遺構に伴わない遺物	銭	銅	径24.0	—	1.0	5.2(2枚分)	ほぼ完形	2枚錆着、「嘉祐通寶」他1枚
M56	包含層・遺構に伴わない遺物	銭	銅	径24.5	—	1.2	1.6	欠	「元祐通寶」
M57	包含層・遺構に伴わない遺物	銭	銅	径24.0	—	1.6	1.9	完形	「紹聖元寶」
M58	包含層・遺構に伴わない遺物	銭	銅	径24.8	—	1.3	3.1	完形	「政和通寶」
M59	包含層・遺構に伴わない遺物	銭	銅	径(9.5)	—	1.3	0.8	欠	「宣徳通寶」か
M60	包含層・遺構に伴わない遺物	銃丸	鉛	13.0	12.4	12.3	10.3	完形	

表46 和田谷遺跡 新旧遺構名称対照表

掲載遺構名	旧調査区	旧遺構名	掲載遺構名	旧調査区	旧遺構名	掲載遺構名	旧調査区	旧遺構名
掘立柱建物1古	4	No.30古	柱穴列9	2	No.13	被熱面2	8	No.15
掘立柱建物1新	4	No.30新	柱穴列10	3	No.78	溝1	2・3	No.16
掘立柱建物2	4	No.46	柱穴列11	3	No.79		11	No.26
掘立柱建物3	4	No.53	柱穴列12	3	No.80	溝2	2・3	No.18
掘立柱建物4	4	No.51	柱穴列13	2	No.15		2	No.20
掘立柱建物5	3	No.52	柱穴列14	3	No.74	溝3	3・4	No.47
掘立柱建物6	3	No.65	柱穴列15	8	No.32		11	No.23
掘立柱建物7	3	No.67	土坑1	2	No.22	溝4	3	No.72
掘立柱建物8	3	No.69	土坑2	3	No.76	溝5	3	No.71
掘立柱建物9	10	No.9	土坑3	4	No.59	溝6	2	No.21
	10	No.11	土坑4	4	No.60	溝7	10	No.4
掘立柱建物10	11	No.17	土坑5	8	No.43		10	No.16
掘立柱建物11	11	No.18	土坑6	6	No.12	溝8	10	No.5
掘立柱建物12	11	No.19	土坑7	7	No.7		10	No.14
掘立柱建物13	2	No.14	土坑8	7	No.9	溝9	10	No.6
掘立柱建物14	3	No.54	土坑9	7	No.12	溝10	10	No.15
掘立柱建物15	3	No.68	土坑10	1	No.8	溝11	10	No.3
掘立柱建物16	3	No.70	土坑11	1	No.9	溝12	8	No.26
掘立柱建物17	8	No.30	土坑12	4	No.44	溝13	4	No.39
掘立柱建物18	8	No.11	土坑13	4	No.42	溝14	4	No.38
掘立柱建物19	10	No.10	土坑14	4	No.41	溝15	8	No.8
段状遺構1	7	No.10	土坑15	4	No.35	溝16	8	No.10
	7	No.11	土坑16	4	No.36	溝17	8	No.13
段状遺構2古	4	No.75a	土坑17	4	No.37	溝18	8	No.6
段状遺構2新	4	No.75b	土坑18	3	No.62	溝19	8	No.5
段状遺構3	4	No.55	土坑19	4	No.27	溝20	10	No.7
段状遺構4古	3	No.56a	土坑20	4	No.28	溝21	10	No.1
	3	No.56被熱面1	土坑21	8	No.46	溝22	11	No.21
	3	No.56被熱面2	土坑22	8	No.25	溝23	6	No.3
段状遺構4新	3	No.56b	土坑23	8	No.22	溝24	6	No.2
段状遺構5	3	No.57	土坑24	8	No.18	溝25	6	No.5
	3	No.58	土坑25	10	No.8	溝26	7	No.4
段状遺構6	8	No.45	土坑26	10	No.2	溝27	7	No.2
段状遺構7	8	No.35	土坑27	1	No.3	溝28	2・4	No.11
段状遺構8	8	No.39	土坑28	1	No.4	溝29	2	No.24
	8	No.42	土坑29	1	No.1	溝30	10	No.12
段状遺構9	4	No.49	土坑30	1	No.7	溝31	10	No.13
段状遺構10	4	No.61	土坑31	1	No.6	溝32	11	No.22
段状遺構11	8	No.27	土坑32	3	No.64	溝33	8	No.16
	8	No.36	土坑33	3	No.63	溝34	8	No.7
	8	No.37	土坑35	8	No.3	たわみ1	7	No.8
	8	No.44	竪穴遺構1古	6	No.11下層	たわみ2	4	No.45
段状遺構12	8	No.20	竪穴遺構1新	6	No.11上層	たわみ3	8	No.21
柱穴列1	4	No.40	竪穴遺構2	7	No.5	たわみ4	8	No.23
柱穴列2	4	No.29	竪穴遺構3	7	No.6	たわみ5	6	No.7
柱穴列3	3	No.77	鍛冶炉1	6	No.14	たわみ6	11	No.24
柱穴列4	3	No.66	鍛冶炉2	6	No.15	河道1	9	—
柱穴列5	3	No.81	鍛冶炉3	6	No.4	谷部	9	—
柱穴列6	8	No.31	鍛冶炉4	6	No.13	柱穴1	11	P111
柱穴列7	8	No.28	鍛冶炉5	8	No.34	柱穴2	11	P110
柱穴列8	8	No.29	被熱面1	8	No.33			

表47 マキサヤ遺跡 竪穴住居一覽

遺構名	平面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	床面積 (㎡)	床面標高 (m)	柱穴	中央穴 (cm)			土坑 (cm)			被熱面	壁体溝	時期
							平面形	長×短	深さ	平面形	長×短	深さ			
竪穴住居1	不整形	487	(317)	(13.98)	34.77	2	—	—	—	—	—	—	1か所	×	弥生時代中期中葉
竪穴住居2	隅丸方形	426	396	16.46	35.03	2	不整形	45×40	18	不整形	110×72	16	×	○	古墳時代前期初頭

表48 マキサヤ遺跡 柱穴列一覧

遺構名	規模	全長(cm)	柱間距離(cm)	方向	柱掘り方	時期	備考
柱穴列1	4間	616	139~191	N-32°-W	円	室町時代	

表49 マキサヤ遺跡 土坑一覧

遺構名	平面形	断面形	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	底面標高(m)	時期	備考
土坑1	楕円形	皿形	143	94	36	35.25	縄文時代か	
土坑2	不整形	逆台形(有段)	142	108	65	33.40	縄文時代後期前葉	
土坑3	楕円形	凹凸	222	(107)	46	32.67	弥生時代中期中葉	
土坑4	楕円形	凹凸	165	98	33	33.47	弥生時代中期中葉	
土坑5	楕円形	皿形	173	96	20	33.66	弥生時代中期中葉	
土坑6	楕円形	U字形	(69)	52	39	34.12	弥生時代中期中葉	
土坑7	楕円形	逆台形	109	59	53	34.35	弥生時代中期	
土坑8	円形	逆台形	81	68	24	35.36	弥生時代中期	
土坑9	楕円形	箱形	91	65	24	35.19	弥生時代中期	
土坑10	円形	箱形	63	57	17	35.88	弥生時代中期	
土坑11	不整形	逆台形	77	65	28	35.61	平安時代~	
土坑12	不整形	逆台形	137	92	31	34.70	中世	

表50 マキサヤ遺跡 集石一覧

遺構名	集石範囲			土坑						時期	備考
	平面形	長軸(cm)	短軸(cm)	平面形	断面形	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	底面標高(m)		
集石1	楕円形	260	150	楕円形	皿形(有段)	279	227	49	32.87	弥生時代中期中葉	
集石2	不整形	430	310	不整形	皿形	382	335	21	33.72	弥生時代中期中葉	

表51 マキサヤ遺跡 たわみ一覧

遺構名	平面形	断面形	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	底面標高(m)	時期	備考
たわみ1	不整形	皿形	(630)	(270)	15	35.27	縄文時代	
たわみ2	不整形	凹凸	307	91	50	35.14	縄文時代後期	
たわみ3	不整形	凹凸	185	113	26	34.92	縄文時代中期~後期	
たわみ4	不整形	皿形	320	160	18	34.86	縄文時代中期末~後期初頭	
たわみ5	不整形	皿形	680	94	18	35.12	弥生時代中期	
たわみ6	楕円形	皿形	632	492	41	34.80	弥生時代	
たわみ7	不整形	皿形	(1010)	270	19	34.87	弥生時代中期	
たわみ8	不整形	皿形	524	178	14	34.18	鎌倉時代	

表52 マキサヤ遺跡 土器観察表

掲載番号	遺構名	河道1地区・層位等	種別	器種	部位(形状)	計測値(cm)			文様	調整	色調(外面)	備考
						口径	底径	器高				
1	土坑2		縄文土器	深鉢	胴部	-	-	(4.9)	沈線文(人組文)	巻貝条痕、ナデ	にぶい黄褐(10YR5/3)	緑帯文成立期
2	土坑2		縄文土器	深鉢	口縁部(平縁)	-	-	(4.2)		巻貝条痕、ナデ	にぶい黄橙(10YR6/4)	
3	土坑2		縄文土器	浅鉢	口縁部(平縁)~胴部	(13.6)	-	(7.2)		巻貝条痕、ナデ	にぶい黄褐(10YR5/3)	
4	土坑2		縄文土器	深鉢	底部(平底)	-	(8.6)	(2.4)		ナデ	明赤褐(2.5YR5/8)	
5	土坑2		縄文土器	深鉢	底部(平底)	-	(8.4)	(4.4)		巻貝条痕、ナデ	にぶい黄橙(10YR6/4)	
6	たわみ2		縄文土器	深鉢	口縁部	-	-	(3.9)	口唇部に沈線文、縄文	ナデ	橙(7.5YR6/6)	津雲A式か
7	たわみ2		縄文土器	深鉢	胴部	-	-	(4.9)	沈線文、磨消縄文	ナデ	にぶい黄橙(10YR7/4)	
8	たわみ2		縄文土器	深鉢	口縁部(平縁)	-	-	(10.3)		巻貝条痕、ナデ	にぶい黄褐(10YR5/3)	
9	たわみ2		縄文土器	深鉢	胴部	-	-	(8.6)		巻貝条痕、ナデ	にぶい黄橙(10YR6/4)	
10	たわみ2		縄文土器	深鉢	底部(高台底)	-	(10.6)	(3.2)		ナデ	にぶい褐(7.5YR5/4)	
11	たわみ3		縄文土器	深鉢	口縁部(平縁)	-	-	(4.2)	口縁部上端に刻目、刺突文、縄文(RL)	ナデ	にぶい褐(7.5YR5/3)	船元式
12	たわみ3		縄文土器	深鉢	胴部	-	-	(3.3)	沈線文	ナデ	にぶい褐(7.5YR5/4)	緑帯文成立期か
13	たわみ3		縄文土器	深鉢	頸部	-	-	(5.1)	沈線文(区画文)、磨消縄文(RL)	巻貝条痕、ナデ	灰黄褐(10YR5/2)	津雲A式か
14	たわみ4		縄文土器	深鉢	口縁部(波状)	-	-	(7.8)	沈線文(区画文)	巻貝条痕、ナデ	にぶい黄橙(10YR6/4)	中津式
15	たわみ4		縄文土器	深鉢	口縁部(平縁)	-	-	(5.0)	口縁部上面に刻目	巻貝条痕	にぶい黄橙(10YR6/3)	中津式
16	たわみ4		縄文土器	深鉢	胴部	-	-	(5.4)		二枚貝条痕	にぶい黄橙(10YR6/3)	

掲載番号	遺構名	河道1地区・ 層位等	種別	器種	部位(形状)	計測値(cm)			文様	調整	色調(外面)	備考
						口径	底径	器高				
17	たわみ4		縄文土器	深鉢	口縁部(平縁)	—	—	(4.0)		巻貝条痕	にぶい黄橙 (10YR6/3)	
18	河道1	北地区・底面	縄文土器	深鉢	口縁部(波状)	—	—	(11.4)	沈線文、磨消縄文(RL)		にぶい黄橙 (10YR7/2)	中津I式
19	河道1	北地区	縄文土器	深鉢	口縁部(波状)	—	—	(7.7)	口縁部刻目、沈線文		にぶい橙 (7.5YR6/4)	中津I式
20	河道1	北地区・底面	縄文土器	深鉢	口縁部(平縁)	—	—	(3.3)	沈線文、磨消縄文	ミガキ	にぶい黄褐 (10YR5/3)	中津式
21	河道1	北地区	縄文土器	深鉢	口縁部(平縁)	—	—	(4.8)	沈線文	条痕、ナデ	にぶい黄褐 (10YR5/3)	中津(新)式
22	河道1	北地区・ 土器溜まり	縄文土器	深鉢	口縁部(波状) ～頸部	—	—	(10.3)	波頂部に円孔、口縁部上面に沈線1条、 沈線文		にぶい橙 (7.5YR6/4)	福田K2式段階
23	河道1	北地区	縄文土器	深鉢	口縁部～頸部 (波状)	—	—	(8.9)	口縁部上面に沈線1条、山形突起の頂 部に円形刺突文2、垂下する沈線文、 縄文、内面に段あり	条痕	にぶい黄橙 (10YR6/3)	福田K2(新)式段 階～緑帯文成立期
24	河道1	北地区	縄文土器	深鉢	口縁部～胴部	25.9	—	(8.2)	口縁部上面に沈線1条、口唇部に短沈 線刻目、2本沈線磨消縄文(RL)	条痕	にぶい橙 (7.5YR7/4)	緑帯文成立期
25	河道1	北地区	縄文土器	深鉢	口縁部(平縁) ～頸部	22.0	—	(5.9)	口唇部に縄文、口縁部上面に沈線1条、 磨消縄文(RL)	ミガキ、巻貝 条痕	にぶい黄褐 (10YR5/3)	緑帯文成立期
26	河道1	北地区・ 土器溜まり	縄文土器	深鉢	口縁部(平縁) ～胴部	20.2	—	(9.7)	口縁部上面沈線文・縄文、沈線文(区 画文)、磨消縄文(RL)	ミガキ	褐 (7.5YR4/4)	緑帯文成立期
27	河道1	北地区・ 土器溜まり	縄文土器	深鉢	口縁部(平縁) ～胴部	(44.0)	—	(17.2)	口唇部に縄文、口縁部上面に沈線1条、 縦位の沈線文、磨消縄文(RL)		褐 (7.5YR4/4)	緑帯文成立期
28	河道1	北地区	縄文土器	深鉢	口縁部	—	—	(5.1)	口縁部上面沈線1条	条痕	橙 (7.5YR6/6)	緑帯文成立期
29	河道1	北地区・ 集中部①	縄文土器	深鉢	口縁部(平縁)	(26.0)	—	(3.9)	口縁部上面に沈線2条		にぶい黄橙 (10YR7/3)	緑帯文成立期
30	河道1	北地区	縄文土器	深鉢	口縁部(平縁)	—	—	(4.1)	口縁部上面に沈線文、縄文RL	巻貝条痕、 ナデ	灰黄褐 (10YR4/2)	緑帯文成立期
31	河道1	北地区・ 土器溜まり	縄文土器	深鉢	口縁部(平縁)	—	—	(3.1)	口縁部上面に沈線1条、縄文		にぶい黄褐 (10YR5/3)	緑帯文成立期
32	河道1	北地区	縄文土器	深鉢	口縁部(波状)	—	—	(3.5)	口縁部上面に区画文	ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/2)	緑帯文成立期
33	河道1	北地区	縄文土器	深鉢	口縁部(平縁)	—	—	(5.5)	口縁部上面に沈線1条、口唇部に短沈 線刻目	巻貝条痕	黒褐 (10YR3/1)	緑帯文成立期
34	河道1	北地区・ 集中部①	縄文土器	深鉢	口縁部(平縁) ～頸部	—	—	(5.5)	口唇部に短沈線刻目、口縁部上面に沈 線1条、沈線文、磨消縄文	条痕	にぶい褐 (7.5YR5/3)	緑帯文成立期
35	河道1	北地区・ 土器溜まり	縄文土器	深鉢	口縁部(平縁)	—	—	(4.7)	口縁部上面に沈線文、口唇部に短沈線 刻目、縄文RL	条痕	にぶい黄褐 (10YR4/3)	緑帯文成立期
36	河道1	北地区・底面	縄文土器	深鉢	口縁部～胴部	(30.3)	—	(12.0)	口縁部上面に円文・沈線文、短沈線刻 目、刺突文、沈線文(入組文、山形文)、 磨消縄文(RL)		にぶい黄橙 (10YR7/3)	緑帯文成立期
37	河道1	北地区・土器溜 まり・集中部①	縄文土器	深鉢	口縁部(平縁) ～胴部	41.2	—	(31.4)	口唇部に短沈線刻目、口縁部上面に沈 線1条、沈線文(麻手文)、磨消縄文(RL)	条痕	黒褐 (7.5YR3/1)	緑帯文成立期
38	河道1	北地区	縄文土器	深鉢	突起部	—	—	(8.4)	橋状突起、4方向に円形透かし		にぶい褐 (7.5YR5/4)	緑帯文成立期
39	河道1	北地区・ 土器溜まり	縄文土器	深鉢	突起部	—	—	(9.5)	耳状突起、口唇部に縄文		にぶい橙 (7.5YR6/4)	緑帯文成立期
40	河道1	北地区	縄文土器	深鉢	突起部	—	—	(10.0)	耳状突起、沈線文、短沈線刻目、縄文 RL	条痕	褐 (7.5YR4/3)	緑帯文成立期
41	河道1	北地区	縄文土器	深鉢	口縁部～胴部	—	—	(9.5)	口縁部上面沈線1条、刻目	ナデ、条痕	にぶい橙 (7.5YR7/4)	
42	河道1	北地区	縄文土器	深鉢	口縁部	—	—	(4.4)	沈線文(区画文)		にぶい黄橙 (10YR7/3)	津雲A式
43	河道1	北地区	縄文土器	深鉢	胴部	—	—	(4.6)	斜線文	条痕	灰黄褐 (10YR6/2)	彦崎K1式か
44	河道1	北地区	縄文土器	深鉢	口縁部	—	—	(2.8)	口縁部内面沈線1条、縄文		淡黄 (2.5Y8/3)	四元式前後
45	河道1	北地区	縄文土器	深鉢	口縁部(平縁)	—	—	(3.8)	口縁部内面沈線1条、縄文		にぶい黄褐 (10YR5/3)	彦崎K2式
46	河道1	北地区	縄文土器	深鉢	口縁部～胴部	—	—	(6.6)	沈線1条、円形刺突文、結節縄文	ミガキ	にぶい黄橙 (10YR6/4)	彦崎K2式
47	河道1	北地区	縄文土器	深鉢	胴部	—	—	(5.0)	沈線文(区画文)、磨消縄文(RL)	ミガキ	にぶい黄褐 (10YR5/4)	彦崎K2式
48	河道1	北地区	縄文土器	浅鉢	口縁部(平縁)	—	—	(4.6)	沈線文(区画文)、磨消縄文(RL)		にぶい黄橙 (10YR6/3)	福田K2式
49	河道1	北地区	縄文土器	浅鉢	口縁部(平縁)	—	—	(4.9)	2本沈線磨消縄文、赤彩	条痕、ナデ	灰黄褐 (10YR6/2)	福田K2式
50	河道1	北地区	縄文土器	浅鉢	口縁部	—	—	(3.7)	沈線文(入組文、区画文)、磨消縄文 (RL)	ナデ	灰黄褐 (10YR5/2)	福田K2式
51	河道1	北地区	縄文土器	浅鉢	口縁部	—	—	(4.7)	沈線文、2本磨消縄文(RL)	条痕、ミガキ	灰黄褐 (10YR4/2)	福田K2式
52	河道1	北地区	縄文土器	浅鉢	口縁部(平縁)	—	—	(5.3)	沈線文	ミガキ	にぶい黄橙 (10YR7/4)	福田K2式
53	河道1	北地区	縄文土器	浅鉢	口縁部	(27.5)	—	(4.0)	沈線文、2本磨消縄文(RL)	条痕、ナデ	にぶい黄橙 (10YR6/3)	福田K2式
54	河道1	北地区・ 集中部①	縄文土器	浅鉢	口縁部(平縁)	(29.9)	—	(4.5)	沈線文(入組文)、磨消縄文(RL)	ミガキ	にぶい黄橙 (10YR6/3)	福田K2式
55	河道1	北地区・ 土器溜まり	縄文土器	浅鉢	口縁部(平縁) ～底部	20.1	9.0	9.9	沈線文(区画文、入組文)、磨消縄文 (RL)	ミガキ	褐灰 (10YR4/1)	福田K2式
56	河道1	北地区・底面	縄文土器	浅鉢	胴部～底部	(22.8)	9.9	8.0	沈線文(入組文、区画文)、2本沈線磨 消縄文(RL)	ミガキ	灰黄褐 (10YR5/2)	福田K2式
57	河道1	北地区	縄文土器	浅鉢	胴部	—	—	(5.9)	2本沈線磨消縄文(RL)、入組文	ナデ	にぶい黄橙 (10YR6/3)	福田K2式
58	河道1	北地区・ 土器溜まり	縄文土器	浅鉢	胴部	—	—	(5.7)	沈線文(区画文、入組文)、磨消縄文 (RL)	ミガキ	にぶい黄橙 (10YR6/3)	福田K2式
59	河道1	北地区	縄文土器	浅鉢	口縁部	(30.9)	—	(2.9)	口縁部上面に沈線文、円文、沈線文(入 組文)、磨消縄文(RL)、内面に段		にぶい黄橙 (10YR7/3)	福田K2式
60	河道1	北地区	縄文土器	浅鉢	口縁部～胴部	—	—	(5.1)	口縁部上面に沈線1条、口唇部に縄文、2 本沈線磨消縄文(RL)	ナデ	灰黄褐 (10YR6/2)	福田K2式

掲載 番号	遺構名	河道1地区・ 層位等	種別	器種	部位(形状)	計測値(cm)			文様	調整	色調(外面)	備考
						口径	底径	器高				
61	河道1	北地区・ 土器溜まり	縄文土器	浅鉢	口縁部(平縁)	-	-	(4.4)	口唇部縄文、口縁部上面に沈線文、沈 線文(区画文)、磨消縄文(RL)	ミガキ	にぶい黄橙 (10YR6/3)	福田K2式
62	河道1	北地区	縄文土器	浅鉢	口縁部~胴部	-	-	(7.0)	口縁端部に沈線文、2本沈線磨消縄文 (RL)		にぶい橙 (7.5YR7/4)	福田K2式
63	河道1	北地区	縄文土器	浅鉢	口縁部	-	-	(3.0)	口縁端部に沈線1条、2本沈線磨消縄文 (RL)		暗灰黄 (2.5Y5/2)	福田K2式
64	河道1	北地区・底面	縄文土器	浅鉢	口縁部(平縁)	-	-	(5.3)	2本沈線磨消縄文(RL)、口唇部に沈線 1条、磨消縄文(RL)	ミガキ	にぶい橙 (7.5YR7/4)	福田K2式
65	河道1	北地区	縄文土器	浅鉢	口縁部~頸部	(23.0)	-	(4.1)	口縁部上面に沈線文、凹形刺突文、沈 線文(区画文)、磨消縄文(RL)	ミガキ	灰黄褐 (10YR4/2)	
66	河道1	北地区	縄文土器	浅鉢	口縁部(平縁) ~胴部	29.2	-	(7.1)	沈線文(方形渦巻文)、磨消縄文(RL)	ミガキ	黒褐 (10YR3/1)	緑帯文成立期
67	河道1	北地区	縄文土器	浅鉢	口縁部~胴部	-	-	(6.0)	沈線文(同心円文、区画文)、磨消縄文 (RL)	ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/3)	緑帯文成立期
68	河道1	北地区・底面	縄文土器	浅鉢	口縁部(平縁) ~底部	23.6	-	(12.1)	沈線文(区画文・円文)、浮線文(渦巻 文)	ミガキ	にぶい黄橙 (10YR7/2)	緑帯文成立期
69	河道1	北地区・底面	縄文土器	浅鉢	胴部~底部	-	-	(9.7)	浮線文(渦巻文)、磨消縄文(RL)	ミガキ	にぶい橙 (7.5YR6/4)	緑帯文成立期
70	河道1	北地区・底面	縄文土器	浅鉢	肩部~胴部	-	-	(5.9)	浮線文(区画文、渦巻文)、縄文		橙 (7.5YR6/6)	緑帯文成立期
71	河道1	北地区・底面	縄文土器	鉢	口縁部(平縁)	-	-	(6.4)	沈線文(区画文)、磨消縄文(RL)	ミガキ	にぶい黄褐 (10YR5/3)	緑帯文成立期
72	河道1	北地区	縄文土器	鉢	胴部	-	-	(4.4)	沈線文(区画文)、縄文RL	ナデ	にぶい黄橙 (10YR6/3)	緑帯文成立期
73	河道1	北地区・ 土器溜まり	縄文土器	鉢	口縁部(平縁) ~胴部	-	-	(12.8)	沈線文(矢羽根文)、縄文(RL)	巻貝条痕	黒褐 (10YR3/1)	緑帯文成立期
74	河道1	北地区・ 集中部①	縄文土器	鉢	胴部	-	-	(6.4)	沈線1条、縄文(RL)		にぶい黄橙 (10YR7/3)	緑帯文成立期
75	河道1	北地区	縄文土器	鉢	胴部	-	-	(4.8)	縄文(RL)	巻貝条痕	にぶい褐 (7.5YR5/4)	彦崎K1式
76	河道1	北地区	縄文土器	壺	口縁部(平縁)	-	-	(3.9)	口縁端部刻目、沈線文(山形文)、磨消 縄文(RL)	条痕	橙(5YR6/6)	中津式
77	河道1	北地区	縄文土器	鉢	胴部	-	-	(2.7)	沈線内刺突文、縄文	ナデ	にぶい黄橙 (10YR6/4)	福田K2式段階、 日本海側か
78	河道1	北地区・底面	縄文土器	深鉢	口縁部(平縁)	-	-	(7.5)	口縁端部に刻目	巻貝条痕	橙(5YR6/6)	
79	河道1	北地区	縄文土器	深鉢	口縁部~頸部	(34.0)	-	(8.2)	口縁端部に刻目	条痕、ナデ	にぶい黄褐 (10YR5/3)	
80	河道1	北地区・ 土器溜まり	縄文土器	深鉢	口縁部(平縁) ~胴部	28.0	-	(17.5)		巻貝条痕	にぶい橙 (7.5YR7/4)	
81	河道1	北地区・ 集中部①	縄文土器	深鉢	口縁部(波状) ~胴部	27.0	-	(15.7)		巻貝条痕	にぶい黄橙 (10YR6/3)	
82	河道1	北地区・ 出土位置あり	縄文土器	深鉢	口縁部(平縁) ~胴部	36.0	-	(12.1)		条痕、ナデ	橙 (7.5YR6/6)	
83	河道1	北地区・底面	縄文土器	深鉢	口縁部(平縁) ~胴部	21.2	-	(9.3)		条痕、ナデ	にぶい褐 (7.5YR6/3)	
84	河道1	北地区・ 土器溜まり	縄文土器	深鉢	口縁部(平縁) ~胴部	31.6	-	(12.3)		巻貝条痕、 ナデ	明赤褐 (5YR5/6)	
85	河道1	北地区・ 集中部②	縄文土器	深鉢	口縁部(平縁) ~胴部	25.7	-	(11.6)		巻貝条痕	にぶい黄橙 (10YR7/2)	
86	河道1	北地区	縄文土器	浅鉢	口縁部(波状) ~胴部	31.2	-	(3.0)		巻貝条痕	にぶい黄橙 (10YR7/2)	
87	河道1	北地区・底面	縄文土器	浅鉢	口縁部(平縁)	-	-	(5.0)	内面に段	ミガキ	にぶい橙 (7.5YR6/4)	福田K2式
88	河道1	北地区・ 集中部①	縄文土器	浅鉢	口縁部(平縁) ~胴部	(39.3)	-	(6.7)	口縁部上面に沈線1条、内面に段		にぶい黄橙 (10YR7/2)	福田K2式
89	河道1	北地区	縄文土器	浅鉢	口縁部~胴部	-	-	(4.1)	口縁部内面肥厚	ミガキ	にぶい褐 (7.5YR5/3)	緑帯文成立期
90	河道1	北地区・底面	縄文土器	浅鉢	口縁部(平縁) ~胴部	24.0	-	(6.4)		条痕、ミガキ	にぶい橙 (7.5YR7/4)	
91	河道1	北地区・ 出土位置あり	縄文土器	浅鉢	口縁部~胴部	(24.0)	-	(6.0)	口縁部外面肥厚	ミガキ、条痕	灰黄褐 (10YR4/2)	福田K2式
92	河道1	北地区	縄文土器	浅鉢	口縁部(平縁) ~胴部	24.4	-	(7.8)		条痕、ナデ	黒褐 (10YR3/2)	
93	河道1	北地区・底面	縄文土器	浅鉢	口縁部(平縁) ~底部	12.1	6.6	5.2		巻貝条痕、 擦痕、ナデ	にぶい黄橙 (10YR6/3)	ほぼ完形
94	河道1	北地区・底面	縄文土器	鉢	口縁部(平縁) ~胴部	(14.3)	-	(8.5)		条痕、ナデ	灰褐 (7.5YR5/2)	
95	河道1	北地区・底面・ 集中部②	縄文土器	鉢	口縁部(平縁) ~底部	(15.7)	7.2	16.2		巻貝条痕、 ナデ	にぶい黄橙 (10YR6/4)	ほぼ完形
96	河道1	北地区	縄文土器	器種不明		14.0	-	(2.0)		ナデ	浅黄橙 (7.5YR8/4)	
97	河道1	北地区	縄文土器	器種不明		14.0	-	(2.0)		ナデ	橙 (7.5YR7/6)	
98	河道1	北地区	縄文土器	器種不明		-	-	(1.8)		ナデ	にぶい橙 (7.5YR7/4)	
99	河道1	北地区	縄文土器	深鉢	口縁部~頸部	-	-	(6.9)			にぶい黄橙 (10YR7/3)	補修孔1
100	河道1	北地区	縄文土器	深鉢	胴部	-	-	(4.8)		条痕	にぶい橙 (7.5YR6/4)	補修孔1
101	河道1	北地区・ 土器溜まり	縄文土器	深鉢	胴部	-	-	(6.7)		巻貝条痕	明褐 (7.5YR5/6)	補修孔1
102	河道1	北地区・ 集中部①	縄文土器	深鉢	底部(平底)	-	8.6	(2.1)			灰黄褐 (10YR6/2)	
103	河道1	北地区	縄文土器	鉢	底部(平底)	-	8.4	(3.9)		条痕	にぶい褐 (7.5YR5/3)	
104	河道1	北地区・ 土器溜まり	縄文土器	深鉢	底部(平底)	-	8.4	(10.5)		ナデ	にぶい黄橙 (10YR6/4)	
105	河道1	北地区・ 土器溜まり	縄文土器	深鉢	底部(平底)	-	8.3	(6.6)		条痕、ナデ	にぶい褐 (7.5YR5/3)	

掲載 番号	遺構名	河道1地区・ 層位等	種別	器種	部位(形状)	計測値(cm)			文様	調整	色調(外面)	備考
						口径	底径	器高				
106	河道1	北地区・底面	縄文土器	深鉢	底部(平底)	—	9.1	(12.8)	縄文	巻貝条痕、 ナデ	にふい黄橙 (10YR7/2)	
107	河道1	北地区	縄文土器	深鉢	底部(高台底)	—	8.8	(2.1)		条痕、ナデ	橙 (2.5YR6/8)	
108	河道1	北地区	縄文土器	鉢	底部(高台底)	—	—	(2.8)		条痕、ナデ	にふい黄橙 (10YR7/2)	
109	河道1	北地区	縄文土器	鉢	底部(凹底)	—	4.8	(3.4)		条痕、ナデ	にふい橙 (7.5YR7/3)	彦崎K1式以降
110	河道1	北地区	縄文土器	鉢	底部(凹底)	—	3.8	(2.1)			にふい黄橙 (10YR7/4)	
111	河道1	北地区・底面	縄文土器	鉢	底部(凹底)	—	4.4	(2.5)		条痕、ナデ	橙(5YR6/6)	
112	河道1	北地区	縄文土器	鉢	底部(凹底)	—	4.1	(2.5)		条痕、ナデ	にふい橙 (7.5YR7/3)	彦崎K1式以降
113	河道1	北地区	縄文土器	浅鉢	底部(平底)	—	10.0	(2.4)		ナデ	にふい黄橙 (10YR6/3)	
114	河道1	北地区	縄文土器	鉢	底部(平底)	—	11.0	(4.0)		ミガキ	にふい黄橙 (10YR6/3)	
115	河道1	北地区	縄文土器	鉢	底部(平底)	—	10.0	(1.4)		ミガキ	にふい黄褐 (10YR5/3)	
116	河道1	北地区・底面	縄文土器	鉢	底部(平底)	—	—	(4.6)	2本沈線磨消縄文、入組文	条痕	褐灰 (10YR4/1)	福田K2式
117	河道1	北地区	縄文土器	鉢	底部(丸底)	—	4.0	(3.8)		ナデ	にふい橙 (7.5YR6/4)	
118	河道1	北地区	縄文土器	鉢	底部(平底)	—	—	(2.8)		ナデ、ミガキ	にふい黄橙 (10YR7/3)	
119	河道1	南地区・上層	縄文土器	深鉢	胴部	—	—	(8.2)	沈線文(入組文)、磨消縄文(RL)	ミガキ、条痕	にふい橙 (7.5YR7/4)	
120	河道1	南地区・上層	縄文土器	深鉢	口縁部(波状)	—	—	(6.1)	沈線文、磨消縄文?		橙(5YR6/6)	
121	河道1	南地区・上層	縄文土器	深鉢	口縁部(平縁)	—	—	(6.5)	口唇部縄文(RL)	ミガキ、条痕	にふい黄橙 (10YR7/2)	津雲A式
122	河道1	南地区・上層	縄文土器	鉢	胴部	—	—	(5.6)	縄文(RL)	ナデ	にふい黄橙 (10YR6/4)	彦崎K1式
123	河道1	南地区・上層	縄文土器	深鉢	口縁部(平縁)	—	—	(3.5)	口縁部に刻目	巻貝条痕	灰黄 (2.5Y6/2)	
124	河道1	南地区・上層	縄文土器	深鉢	口縁部(平縁)	—	—	(6.4)	口縁部に刻目	条痕	黄灰 (2.5Y5/1)	
125	河道1	南地区・上層	縄文土器	深鉢	口縁部(平縁) ~頸部	(36.8)	—	(11.7)		巻貝条痕	暗灰黄 (2.5Y5/2)	
126	河道1	南地区・ 下層土器溜まり	縄文土器	深鉢	口縁部	—	—	(2.9)	貝殻圧痕文	ナデ	にふい黄橙 (10YR6/3)	船元式
127	河道1	南地区・下層	縄文土器	深鉢	口縁部	—	—	(2.6)	口縁部に沈線文、縄文	条痕、ナデ	にふい黄橙 (10YR6/3)	福田K2式
128	河道1	南地区・下層	縄文土器	深鉢	口縁部(波状) ~頸部	—	—	(4.1)	口縁部に刻目、沈線文(区画文)	条痕	褐灰 (10YR5/1)	福田K2式
129	河道1	南地区・ 下層土器溜まり	縄文土器	深鉢	口縁部	—	—	(2.9)	口縁部上面に沈線1条、縄文RL		にふい橙 (7.5YR7/4)	緑帯文成立期
130	河道1	南地区・ 下層土器溜まり	縄文土器	深鉢	口縁部(平縁) ~頸部	34.0	—	(5.4)	口縁部正面に沈線文・縄文RL、外面 に沈線文	条痕	にふい黄橙 (10YR5/3)	緑帯文成立期
131	河道1	南地区・ 下層土器溜まり	縄文土器	深鉢	口縁部~胴部	—	—	(14.5)	口縁部上面沈線1条・刻目、外面に沈 線文	条痕	にふい黄橙 (10YR7/2)	緑帯文成立期
132	河道1	南地区・下層	縄文土器	深鉢	口縁部(平縁)	—	—	(5.8)	垂下する沈線文	巻貝条痕	にふい黄橙 (10YR6/3)	緑帯文成立期
133	河道1	南地区・ 下層土器溜まり	縄文土器	深鉢	口縁部	—	—	(6.2)	垂下沈線文、磨消縄文(RL)		にふい黄褐 (10YR5/3)	緑帯文成立期
134	河道1	南地区・ 下層土器溜まり	縄文土器	深鉢	突起部	—	—	(6.6)	口縁部上面に沈線1条、突起部端に沈 線1条・刻目、外面に沈線文	条痕、ナデ	にふい褐 (7.5YR5/4)	緑帯文成立期
135	河道1	南地区・ 下層土器溜まり	縄文土器	深鉢	胴部	—	—	(4.1)	沈線文、縄文RL		にふい黄橙 (10YR7/2)	緑帯文成立期
136	河道1	南地区・下層	縄文土器	深鉢	口縁部(波状)	—	—	(6.4)	口縁部外面に同心円文、縄文RL	巻貝条痕	褐灰 (10YR5/1)	津雲A式
137	河道1	南地区・下層	縄文土器	深鉢	口縁部(平縁)	—	—	(4.7)	沈線文		にふい橙 (7.5YR7/3)	津雲A式
138	河道1	南地区・下層	縄文土器	深鉢	口縁部(平縁)	—	—	(4.6)	口縁部上端に刻目、沈線文	条痕	橙 (7.5YR7/6)	津雲A式
139	河道1	南地区・ 下層土器溜まり	縄文土器	深鉢	口縁部	—	—	(3.8)	口縁部上端刻目、外面沈線文、縄文 RL		灰黄褐 (10YR6/2)	津雲A式か
140	河道1	南地区・下層	縄文土器	深鉢	口縁部	—	—	(4.0)	沈線文、縄文	条痕	灰黄褐 (10YR6/2)	津雲A式
141	河道1	南地区・下層	縄文土器	深鉢	口縁部(平縁)	—	—	(4.4)	口縁部外面縄文RL	条痕	灰黄褐 (10YR6/2)	緑帯文期
142	河道1	南地区・下層	縄文土器	深鉢	口縁部(平縁)	—	—	(4.8)	口縁部外面縄文RL	条痕	灰黄褐 (10YR5/2)	緑帯文期
143	河道1	南地区・ 下層土器溜まり	縄文土器	浅鉢	口縁部(波状) ~胴部	—	—	(5.6)	口縁部に沈線文、沈線文(入組文)、 磨消縄文(RL)	ミガキ	にふい橙 (7.5YR6/4)	福田K2式
144	河道1	南地区・ 下層土器溜まり	縄文土器	浅鉢	胴部	—	—	(6.9)	沈線緑取りの浮文、縄文	条痕	橙(5YR7/8)	緑帯文成立期
145	河道1	南地区・下層	縄文土器	浅鉢	口縁部(平縁) ~胴部	—	—	(4.6)	沈線文	条痕、ミガキ	灰黄褐 (10YR6/2)	緑帯文成立期
146	河道1	南地区・下層	縄文土器	深鉢	口縁部	—	—	(2.1)	口縁部上端刻目	巻貝条痕	にふい黄橙 (10YR7/2)	
147	河道1	南地区・下層	縄文土器	深鉢	口縁部	—	—	(2.3)	口縁部上端刻目	ナデ	にふい黄橙 (10YR7/3)	
148	河道1	南地区・ 下層土器溜まり	縄文土器	深鉢	口縁部(平縁)	—	—	(7.0)	口縁部上端刻目	巻貝条痕、 ナデ	にふい褐 (7.5YR6/3)	
149	河道1	南地区・ 下層土器溜まり	縄文土器	深鉢	口縁部(平縁) ~頸部	(22.0)	—	(4.5)	口縁部上端刻目	巻貝条痕	にふい黄橙 (10YR7/4)	
150	河道1	南地区・上層・ 下層	縄文土器	深鉢	口縁部(波状) ~胴部	31.5	—	(9.5)	口縁部外面に斜め短沈線刻目	条痕、ナデ	灰黄褐 (10YR5/2)	

掲載 番号	遺構名	河道1地区・ 層位等	種別	器種	部位(形状)	計測値(cm)			文様	調整	色調(外面)	備考
						口径	底径	器高				
151	河道1	南地区・ 下層土器溜まり	縄文土器	深鉢	口縁部(平縁) ~胴部	23.5	-	(29.8)		巻貝条痕、 ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/3)	補修孔1
152	河道1	南地区・ 下層土器溜まり	縄文土器	深鉢	口縁部(平縁) ~胴部	26.0	-	(24.7)		条痕、ナデ	灰黄褐 (10YR6/2)	
153	河道1	南地区・ 下層土器溜まり	縄文土器	深鉢	口縁部(平縁) ~胴部	20.0	-	(13.9)		巻貝条痕、 ナデ	明黄褐 (10YR7/6)	
154	河道1	南地区・ 下層土器溜まり	縄文土器	深鉢	口縁部(平縁) ~胴部	20.0	-	(12.6)		巻貝条痕、 ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/3)	
155	河道1	南地区・ 下層土器溜まり	縄文土器	深鉢	口縁部(平縁) ~胴部	31.2	-	(14.2)		巻貝条痕	にぶい黄橙 (10YR6/3)	
156	河道1	南地区・ 下層土器溜まり	縄文土器	深鉢	口縁部(平縁) ~胴部	-	-	(19.8)		条痕、ナデ	褐灰 (7.5YR4/1)	
157	河道1	南地区・ 下層土器溜まり	縄文土器	浅鉢	口縁部~胴部	(21.6)	-	(4.3)	口縁部肥厚	ミガキ	灰(N6/)	緑帯文成立期
158	河道1	南地区・下層	縄文土器	鉢	底部(平底)	-	(8.5)	(1.5)		条痕	にぶい黄橙 (10YR7/3)	
159	河道1	南地区・ 下層土器溜まり	縄文土器	深鉢	底部(平底)	-	8.0	(1.9)		条痕、ナデ	にぶい橙 (7.5YR7/4)	
160	河道1	南地区・ 下層土器溜まり	縄文土器	浅鉢	底部(平底)	-	9.0	(1.4)		ナデ	黄灰 (2.5Y5/1)	
161	河道1	南地区・下層	縄文土器	鉢	底部(平底)	-	10.0	(1.8)		ナデ・ミガキ	灰褐 (7.5YR6/2)	
162	河道1	南地区・ 下層土器溜まり	縄文土器	深鉢	底部(平底)	-	9.5	(4.6)		条痕、ナデ	橙(5YR6/6)	
163	河道1	南地区・下層	縄文土器	深鉢	底部(平底)	-	11.0	(3.1)		条痕、ナデ	にぶい黄橙 (10YR6/3)	
164	河道1	南地区・ 下層土器溜まり	縄文土器	深鉢	底部(平底)	-	7.8	(4.2)		条痕、ナデ	橙 (7.5YR6/6)	
165	河道1	南地区・ 下層土器溜まり	縄文土器	深鉢	底部(平底)	-	9.8	(1.9)			にぶい黄橙 (10YR7/3)	
166	河道1	南地区・下層	縄文土器	鉢	底部(高台底)	-	8.7	(2.4)		ナデ・ミガキ	黄灰 (2.5Y4/1)	
167	河道1	南地区・下層	縄文土器	深鉢	底部(高台底)	-	10.9	(1.7)		ナデ	黄灰 (2.5Y6/1)	
168	河道1	南地区・下層	縄文土器	鉢	底部(高台底)	-	(7.6)	(4.2)		条痕、ナデ	明赤褐 (2.5YR5/6)	
169	河道1	南地区・下層	縄文土器	深鉢	底部(凹底)	-	7.0	(2.0)		ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/4)	
170	河道1	南地区・下層	縄文土器	深鉢	底部(凹底)	-	(12.0)	(4.5)		ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/3)	
171	河道1	南地区・ 下層土器溜まり	縄文土器	鉢	底部(平底)	-	-	(2.5)	沈線文	ナデ	明褐 (7.5YR5/6)	
172	河道1		縄文土器	深鉢	口縁部	-	-	(5.5)	貼付突帯上に刻目	ナデ、ミガキ	にぶい橙 (7.5YR6/4)	
173	河道1		縄文土器	深鉢	口縁部	-	-	(3.8)	貼付突帯上に刻目	ナデ	黒 (10YR2/1)	
174	河道1		縄文土器	深鉢	口縁部	-	-	(3.1)	口縁部上面に刻目、貼付突帯上に刻目	ナデ	灰黄褐 (10YR5/2)	
175	河道1		縄文土器	深鉢	口縁部	-	-	(3.3)	口縁部上面に刻目、貼付突帯上に刻目	ナデ	灰白 (10YR8/2)	
176	河道1		縄文土器	深鉢	口縁部	-	-	(5.7)	口縁部上面に刻目、貼付突帯上に刻目	ナデ、ミガキ	にぶい橙 (7.5YR7/4)	
177	河道1		縄文土器	深鉢	口縁部	-	-	(3.2)	貼付突帯上に刻目	ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/3)	
178	遺構に伴わ ない遺物		縄文土器	深鉢	口縁部	-	-	(3.5)	刺突文	ナデ	にぶい褐 (7.5YR5/4)	磯の森式
179	遺構に伴わ ない遺物		縄文土器	深鉢	頸部	-	-	(7.0)	貝殻刺突文、縄文(RL)	ナデ	にぶい黄橙 (10YR6/4)	船元I式
180	遺構に伴わ ない遺物		縄文土器	深鉢	頸部	-	-	(4.7)	爪形文	ナデ	黒褐 (2.5Y3/1)	船元II式
181	遺構に伴わ ない遺物		縄文土器	深鉢	頸部	-	-	(2.2)	貼付突帯、刺突文	ナデ	にぶい橙 (7.5YR6/4)	船元II式
182	遺構に伴わ ない遺物		縄文土器	深鉢	口縁部	-	-	(2.4)	口唇部に沈線2条	ナデ	橙 (7.5YR6/6)	里木III式
183	遺構に伴わ ない遺物		縄文土器	深鉢	口縁部(波状)	-	-	(3.5)	沈線文(区画文)、磨消縄文(RL)	ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/4)	矢部奥田式
184	遺構に伴わ ない遺物		縄文土器	深鉢	胴部	-	-	(4.9)	沈線文(入組文・区画文)、磨消縄文(RL)	ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/4)	矢部奥田式
185	遺構に伴わ ない遺物		縄文土器	深鉢	口縁部	-	-	(3.3)	沈線文(羽状文)	ナデ	にぶい黄橙 (10YR6/4)	矢部奥田式
186	遺構に伴わ ない遺物		縄文土器	深鉢	口縁部	-	-	(3.4)	沈線文、縄文(RL)	ナデ	にぶい赤褐 (5YR5/4)	中津I式
187	遺構に伴わ ない遺物		縄文土器	深鉢	口縁部	-	-	(3.9)	沈線文(区画文)、磨消縄文(RL)	ナデ	黒(2.5Y2/1)	中津式
188	遺構に伴わ ない遺物		縄文土器	深鉢	口縁部(平縁)	-	-	(3.0)	沈線文、磨消縄文(RL)	ナデ	灰黄 (2.5Y6/2)	福田K2(古)式
189	遺構に伴わ ない遺物		縄文土器	多孔底 土器	底部	-	-	(0.8)		ナデ	にぶい黄橙 (10YR6/4)	福田K2式
190	遺構に伴わ ない遺物		縄文土器	深鉢	口縁部(波状)	-	-	(4.5)	口唇部に沈線1条+短沈線刻目、垂下 沈線3条	ナデ	にぶい黄橙 (10YR6/4)	福田K2(新)式
191	遺構に伴わ ない遺物		縄文土器	深鉢	口縁部	-	-	(2.5)	口唇部に線状刻目	ナデ、ミガキ	にぶい黄橙 (10YR6/4)	緑帯文成立期
192	遺構に伴わ ない遺物		縄文土器	深鉢	口縁部	-	-	(2.5)	口縁部上面に沈線1条	ナデ	にぶい黄橙 (10YR6/4)	緑帯文成立期
193	遺構に伴わ ない遺物		縄文土器	深鉢	口縁部(波状)	-	-	(2.6)	口唇部に沈線文、縄文(RL)	ナデ	にぶい黄橙 (10YR6/4)	緑帯文成立期か津 雲A式
194	遺構に伴わ ない遺物		縄文土器	深鉢	口縁部(波状)	-	-	(4.8)	沈線文(同心円文)、縄文	ナデ	にぶい黄橙 (10YR6/4)	津雲A式か (緑帯文期か)

掲載番号	遺構名	種別	器種	計測値(cm)			色調(外面)	備考
				口径	底径	器高		
195	竪穴住居1	弥生土器	甕	—	—	(2.9)	橙(5YR6/6)	
196	竪穴住居1	弥生土器	甕	17.4	—	(12.5)	明赤褐(2.5YR5/6)	
197	竪穴住居1	弥生土器	鉢?	(19.0)	—	(2.7)	にぶい黄橙(10YR7/3)	
198	竪穴住居1	弥生土器	高杯	—	—	(7.4)	橙(5YR6/6)	
199	竪穴住居2	土師器	壺	22.6	—	(1.3)	橙(7.5YR7/6)	
200	竪穴住居2	土師器	壺	—	5.0	(4.7)	灰黄褐(10YR5/2)	
201	竪穴住居2	土師器	壺	—	(14.1)	(4.5)	にぶい黄橙(10YR7/4)	
202	竪穴住居2	土師器	甕	(13.8)	—	(2.3)	にぶい黄橙(10YR6/4)	
203	竪穴住居2	土師器	甕	20.6	4.3	16.4	にぶい黄橙(10YR7/4)	ほぼ完形
204	竪穴住居2	土師器	甕	—	6.1	(2.6)	にぶい黄褐(10YR5/3)	
205	竪穴住居2	土師器	甕	—	4.3	(7.5)	にぶい黄橙(10YR6/4)	
206	竪穴住居2	土師器	甕	—	3.5	(2.7)	にぶい黄橙(10YR7/3)	
207	竪穴住居2	土師器	鉢	9.6	3.3	8.0	にぶい黄橙(10YR7/4)	
208	竪穴住居2	土師器	鉢	(13.8)	—	(5.5)	浅黄橙(10YR8/3)	
209	竪穴住居2	土師器	鉢	(10.4)	(3.0)	(2.9)	にぶい黄橙(10YR7/4)	
210	竪穴住居2	土師器	鉢	19.8	—	(5.9)	にぶい黄橙(10YR7/4)	
211	竪穴住居2	土師器	高杯	21.9	—	(6.3)	にぶい黄橙(10YR7/4)	赤色顔料
212	竪穴住居2	土師器	高杯	20.6	—	(5.6)	にぶい黄橙(10YR6/4)	赤色顔料
213	竪穴住居2	土師器	鉢	7.5	—	(2.7)	にぶい黄橙(10YR6/3)	
214	土坑3	弥生土器	壺	15.0	—	(5.5)	にぶい黄橙(10YR6/4)	
215	土坑3	弥生土器	壺	—	9.8	(2.8)	赤褐(5YR4/6)	
216	土坑3	弥生土器	甕	—	—	(2.6)	灰黄褐(10YR4/2)	
217	土坑3	弥生土器	甕	18.8	—	(4.8)	明赤褐(5YR5/6)	
218	土坑3	弥生土器	甕	(17.0)	—	(6.0)	明赤褐(5YR5/6)	
219	土坑3	弥生土器	甕	—	5.6	(3.6)	明赤褐(5YR5/6)	
220	土坑3	弥生土器	甕	—	7.0	(8.1)	にぶい黄褐(10YR5/3)	
221	土坑4	弥生土器	壺	18.4	—	(6.2)	にぶい橙(7.5YR6/4)	
222	土坑4	弥生土器	壺	—	—	(2.8)	にぶい橙(7.5YR6/4)	
223	土坑4	弥生土器	甕	—	—	(7.0)	明赤褐(5YR5/6)	
224	土坑4	弥生土器	甕	—	—	(11.5)	にぶい黄褐(10YR5/3)	
225	土坑4	弥生土器	甕	—	(5.6)	(6.8)	にぶい黄橙(10YR6/3)	
226	土坑4	弥生土器	壺	—	(8.6)	(8.9)	にぶい赤褐(5YR5/3)	
227	土坑4	弥生土器	高杯	25.2	—	(18.4)	明赤褐(2.5YR5/6)	
228	土坑5	弥生土器	壺	—	—	(9.2)	にぶい黄橙(10YR6/3)	
229	土坑5	弥生土器	壺	—	—	(7.9)	にぶい黄橙(10YR6/4)	
230	土坑5	土師器	甕	—	—	(2.2)	橙(7.5YR6/6)	
231	土坑6	弥生土器	台付鉢	—	12.4	(8.1)	にぶい黄橙(10YR6/4)	
232	集石1	弥生土器	壺	—	—	(4.3)	灰黄褐(10YR5/2)	
233	集石1	弥生土器	甕	—	—	(2.5)	にぶい黄橙(10YR7/3)	
234	集石1	弥生土器	甕	—	—	(3.5)	にぶい黄橙(10YR7/4)	
235	集石1	弥生土器	甕	—	(5.0)	(3.9)	明赤褐(2.5YR5/8)	
236	集石1	弥生土器	壺	—	7.8	(4.5)	にぶい橙(7.5YR6/4)	
237	集石1	弥生土器	壺	—	8.0	(3.1)	赤褐(2.5YR4/6)	
238	集石1	弥生土器	壺	—	(10.2)	(5.9)	にぶい黄橙(10YR6/4)	
239	集石1	弥生土器	高杯	—	(11.4)	(3.5)	にぶい黄橙(10YR7/3)	
240	集石1	弥生土器	高杯	—	—	(5.8)	にぶい黄橙(10YR7/3)	
241	集石2	弥生土器	壺	(17.4)	—	(1.9)	明褐(7.5YR5/6)	
242	集石2	弥生土器	壺	—	—	(3.9)	橙(5YR7/6)	
243	集石2	弥生土器	壺	—	(6.2)	(3.8)	橙(5YR6/6)	
244	集石2	弥生土器	甕	(16.4)	—	(2.9)	橙(5YR6/6)	
245	集石2	弥生土器	甕	(16.8)	—	(3.0)	にぶい黄褐(10YR4/3)	
246	集石2	弥生土器	甕	(12.6)	—	(7.8)	にぶい橙(7.5YR7/3)	
247	集石2	弥生土器	甕	—	5.4	(3.9)	赤褐(2.5YR4/6)	
248	集石2	弥生土器	甕	—	(4.6)	(4.4)	黒褐(10YR3/2)	
249	集石2	弥生土器	甕	—	(6.0)	(3.7)	明赤褐(5YR5/6)	
250	集石2	弥生土器	甕	—	5.4	(5.1)	にぶい赤褐(5YR5/4)	
251	集石2	弥生土器	甕	—	(6.8)	(4.3)	明赤褐(5YR5/6)	
252	集石2	弥生土器	甕	—	7.8	(5.4)	明赤褐(2.5YR5/8)	
253	集石2	弥生土器	鉢	—	—	(2.9)	にぶい褐(7.5YR5/4)	
254	集石2	弥生土器	鉢	—	—	(3.6)	にぶい黄橙(10YR7/3)	
255	集石2	弥生土器	鉢	—	—	(2.9)	灰黄褐(10YR4/2)	
256	集石2	弥生土器	高杯	—	—	(5.1)	にぶい橙(5YR6/4)	
257	集石2	弥生土器	高杯	—	—	(5.1)	橙(5YR6/6)	
258	たわみ7	弥生土器	甕	—	—	(3.7)	明赤褐(5YR5/6)	
259	たわみ7	弥生土器	甕	—	—	(3.8)	にぶい褐(7.5YR5/4)	
260	たわみ7	弥生土器	甕	—	5.8	(3.5)	明赤褐(5YR5/6)	
261	たわみ7	弥生土器	高杯	—	—	(2.3)	橙(7.5YR6/6)	
262	河道1	弥生土器	甕	29.3	—	(9.7)	灰黄褐(10YR5/2)	
263	河道1	弥生土器	甕	(30.5)	—	(3.6)	にぶい黄橙(10YR7/3)	
264	河道1	弥生土器	甕	16.6	—	(18.3)	にぶい橙(7.5YR7/3)	
265	河道1	弥生土器	甕	(16.2)	—	(7.5)	にぶい橙(7.5YR6/4)	

掲載 番号	遺構名	種別	器種	計測値(cm)			色調(外面)	備考
				口径	底径	器高		
266	河道1	弥生土器	壺	9.5	—	(6.1)	にぶい橙(5YR6/4)	
267	河道1	弥生土器	高杯	—	—	(4.7)	にぶい黄橙(10YR7/3)	
268	遺構に伴わない遺物	弥生土器	無頸壺	(10.4)	—	(6.6)	赤褐(5YR4/6)	
269	遺構に伴わない遺物	弥生土器	高杯	—	—	(12.6)	灰黄褐(10YR6/2)	
270	たわみ8	土師器	椀	—	4.0	(1.1)	にぶい黄橙(10YR7/4)	
271	河道2	黒色土器	椀	—	5.4	(1.3)	にぶい橙(5YR6/4)	内黒
272	河道2	土師器	椀	—	5.0	(2.2)	浅黄(2.5Y8/3)	吉備系土師器椀
273	河道2	土師器	椀	11.7	—	(3.7)	浅黄(2.5Y8/3)	吉備系土師器椀
274	河道2	土師器	椀	—	5.0	(2.8)	灰白(2.5Y8/2)	吉備系土師器椀
275	河道2	土師器	椀	11.7	—	(4.2)	にぶい黄橙(10YR7/4)	吉備系土師器椀
276	河道2	土師器	椀	—	5.1	(3.0)	淡黄(2.5Y8/3)	吉備系土師器椀
277	河道2	土師器	皿	6.0	4.7	0.8	にぶい橙(5YR6/4)	
278	河道2	土師器	鍋	—	—	(5.2)	にぶい橙(7.5YR7/4)	
279	河道2	青磁	碗	—	—	(2.0)	釉薬:灰(10Y6/1)	
280	遺構に伴わない遺物	土師器	椀	(11.0)	—	(2.5)	浅黄橙(10YR8/3)	吉備系土師器椀
281	遺構に伴わない遺物	土師器	椀	(13.4)	5.0	4.6	浅黄橙(10YR8/3)	吉備系土師器椀
282	遺構に伴わない遺物	土師器	椀	(13.6)	—	(3.3)	浅黄橙(10YR8/4)	吉備系土師器椀
283	遺構に伴わない遺物	土師器	椀	—	8.6	(2.2)	にぶい橙(7.5YR7/4)	
284	遺構に伴わない遺物	土師器	椀	—	—	(2.3)	にぶい橙(7.5YR6/4)	
285	遺構に伴わない遺物	土師器	皿	6.9	5.5	1.3	にぶい黄橙(10YR7/2)	ほぼ完形
286	遺構に伴わない遺物	土師器	皿	(8.4)	(7.6)	1.6	黒褐(10YR3/1)	
287	遺構に伴わない遺物	土師器	鍋	—	—	(3.9)	にぶい黄橙(10YR6/3)	
288	遺構に伴わない遺物	土師器	鍋	—	—	(6.8)	にぶい黄橙(10YR6/3)	
289	遺構に伴わない遺物	土師器	鍋	29.4	—	(12.7)	浅黄橙(10YR8/3)	
290	遺構に伴わない遺物	土師器	鍋	(31.8)	—	(14.4)	灰黄褐(10YR4/2)	
291	遺構に伴わない遺物	須恵器	鉢	(23.0)	—	(4.2)	灰白(2.5Y7/1)	

表53 マキサヤ遺跡 土製品観察表

掲載 番号	遺構名	器種	計測値(mm)			重量(g)	色調	備考
			最大長	最大幅	最大厚			
C 1	河道1	土製円板	22.0	22.0	6.5	3.4	浅黄橙(10YR8/3)	円孔あり
C 2	遺構に伴わない遺物	土製円板	32.0	36.0	7.5	9.7	灰黄褐(10YR5/2)	土師質
C 3	遺構に伴わない遺物	土製円板	37.0	41.0	8.0	13.2	褐灰(10YR5/1)	瓦質
C 4	遺構に伴わない遺物	土製円板	76.0	72.5	6.5	41.8	にぶい黄橙(10YR6/3)	瓦質

表54 マキサヤ遺跡 石製品観察表

掲載 番号	遺構名	器種	計測値(mm)			重量(g)	石材	残存状況	備考
			最大長	最大幅	最大厚				
S 1	河道1	縦長剥片	53.9	15.5	8.0	6.1	黒曜石(隠岐産)	—	
S 2	河道1	残核	27.0	51.0	21.8	23.1	黒曜石(隠岐産)	—	
S 3	河道1	石棒	(150.2)	(38.0)	(20.0)	125.0	結晶片岩(砂質片岩・三波川変成帯か)	欠	転用時に加工か
S 4	河道1	石鎌	(16.1)	17.9	3.3	0.8	サヌカイト	欠	
S 5	河道1	石鎌	(24.0)	14.5	3.0	0.7	サヌカイト	欠	
S 6	河道1	石鎌	(17.7)	14.2	2.6	0.5	サヌカイト	欠	
S 7	河道1	石鎌	(16.5)	19.5	2.8	0.9	サヌカイト	欠	
S 8	河道1	石鎌	(21.0)	15.8	4.0	1.4	サヌカイト	欠	
S 9	河道1	石鎌	(32.4)	17.6	3.9	1.3	サヌカイト	欠	
S10	河道1	横型石匙	66.2	40.7	4.7	9.4	サヌカイト	完形	
S11	河道1	横型石匙	70.8	56.9	10.0	35.4	サヌカイト	完形	
S12	河道1	スクレイパー	66.0	37.7	9.7	28.7	サヌカイト	完形	
S13	河道1	スクレイパー	66.2	33.8	5.9	10.2	サヌカイト	欠	
S14	河道1	スクレイパー	98.5	40.5	12.6	39.8	サヌカイト	完形	
S15	河道1	楔形石器	32.4	41.2	10.0	14.9	サヌカイト	完形	
S16	河道1	スクレイパー	100.2	36.0	20.5	46.5	サヌカイト	完形	
S17	河道1	石鎌	(25.0)	19.5	4.0	2.2	サヌカイト	欠	
S18	河道1	縦型石匙	60.6	26.1	9.9	12.7	サヌカイト	完形	
S19	河道1	スクレイパー	136.1	65.0	16.9	117.7	サヌカイト	完形	
S20	河道1	スクレイパー	(47.5)	67.6	7.9	26.9	サヌカイト	欠	
S21	河道1	石鎌	21.6	13.3	3.0	0.6	サヌカイト	欠	
S22	河道1	スクレイパー	43.4	32.0	7.6	9.9	サヌカイト	ほぼ完形	
S23	河道1	スクレイパー	46.0	29.0	11.1	14.2	サヌカイト	完形	
S24	遺構に伴わない遺物	石鎌	16.0	12.7	2.6	0.4	サヌカイト	完形	
S25	遺構に伴わない遺物	石鎌	21.7	12.0	4.0	0.7	サヌカイト	ほぼ完形	
S26	遺構に伴わない遺物	石鎌	18.9	13.0	2.3	0.5	サヌカイト	ほぼ完形	
S27	遺構に伴わない遺物	石鎌	27.9	(16.8)	3.2	0.8	サヌカイト	欠	

掲載番号	遺構名	器種	計測値(mm)			重量(g)	石材	残存状況	備考
			最大長	最大幅	最大厚				
S28	遺構に伴わない遺物	横型石匙	55.1	(43.5)	5.6	12.9	サヌカイト	欠	
S29	遺構に伴わない遺物	スクレイパー	79.4	54.2	10.0	36.0	サヌカイト	完形	
S30	遺構に伴わない遺物	石棒	(91.6)	38.1	20.0	118.7	結晶片岩(砂質片岩・三波川変成帯か)	欠	
S31	土坑3	スクレイパー	49.8	39.8	5.6	14.4	サヌカイト	完形	
S32	土坑4	スクレイパー	65.4	48.2	7.0	14.6	サヌカイト	完形	
S33	土坑6	石鎌	(21.3)	14.7	3.6	1.0	サヌカイト	欠	
S34	集石2	石鎌	(25.3)	19.8	3.6	1.5	サヌカイト	欠	
S35	集石2	スクレイパー	69.4	34.0	9.7	21.5	サヌカイト	完形	
S36	たわみ7	石鎌	21.3	9.2	2.7	0.4	サヌカイト	完形	
S37	たわみ7	砥石	(77.8)	40.0	22.0	91.6	ホルンフェルス	欠	
S38	河道1	石鎌	25.4	17.3	6.2	2.0	サヌカイト	完形	
S39	河道1	スクレイパー	38.0	65.0	8.8	19.6	サヌカイト	完形	
S40	遺構に伴わない遺物	石鎌	24.6	15.7	3.8	1.4	サヌカイト	完形	
S41	遺構に伴わない遺物	石鎌	27.0	17.0	4.4	1.5	サヌカイト	完形	
S42	遺構に伴わない遺物	磨製石砲丁	(70.8)	45.3	9.0	28.6	結晶片岩(砂質片岩・三郡変成帯か)	欠	若干の使用痕(光沢)有り
S43	遺構に伴わない遺物	石核	74.4	(81.3)	21.0	160.1	サヌカイト	欠	

表55 マキサヤ遺跡 木製品観察表

掲載番号	遺構名	器種	計測値(mm)			樹種	木取り	残存状況	備考
			最大長	最大幅	最大厚				
W1	河道2	杭	(203)	69	43	コナラ亜属クヌギ節	丸太材	欠	試料No20、AMS年代測定実施
W2	護岸1	横木	(348)	35	36	クリ(根?)	丸太材	欠	試料No17、AMS年代測定実施
W3	護岸1	横木	(293)	40	32	アワブキ属	丸太材	欠	試料No18
W4	護岸1	横木	(227)	36	37	アワブキ属	丸太材	欠	試料No19
W5	護岸1	杭	(398)	57	53	コナラ亜属クヌギ節	丸太材	欠	試料No2、AMS年代測定実施
W6	護岸1	杭	(285)	53	53	コナラ亜属クヌギ節	丸太材	欠	試料No5
W7	護岸1	杭	(288)	54	49	コナラ亜属クヌギ節	丸太材	欠	試料No6、AMS年代測定実施
W8	護岸1	杭	(542)	51	52	アワブキ属	丸太材	欠	試料No9、AMS年代測定実施
W9	護岸1	杭	(407)	38	44	コナラ亜属クヌギ節	丸太材	欠	試料No11
W10	護岸1	杭	(443)	39	39	アワブキ属	丸太材	欠	試料No12
W11	護岸1	杭	(447)	99	93	コナラ亜属クヌギ節	丸太材	欠	試料No14、AMS年代測定実施
W12	護岸1	杭	(365)	55	49	コナラ亜属クヌギ節	丸太材	欠	試料No15
W13	護岸1	杭	(324)	50	46	コナラ亜属クヌギ節	丸太材	欠	試料No16

表56 マキサヤ遺跡 金属製品観察表

掲載番号	遺構名	器種	材質	計測値(mm)			重量(g)	残存状況	備考
				最大長	最大幅	最大厚			
M1	柱穴列1	銭	銅	径24.0	—	1.5	29.3 (8枚分)	完形	8枚鑄着、「至道元寶」他7枚、銭緋紐残る
M2	柱穴列1	銭	銅	径(22.2)	—	1.5	1.5	欠	「咸淳元寶」
M3	柱穴列1	銭	銅	径24.0	—	1.5	3.4	ほぼ完形	「嘉■元寶」
M4	柱穴列1	銭	銅	径24.0	—	1.5	3.2	完形	「元豐通寶」
M5	遺構に伴わない遺物	釘	鉄	(75.8)	14.3	13.5	44.8	欠	

表57 マキサヤ遺跡 新旧遺構名称対照表

掲載遺構名	旧調査区	旧遺構名
竪穴住居1	3 A	No32
竪穴住居2	3 A	No20
柱穴列1	3 B	No15
土坑1	3 A	No26
土坑2	3 A	No34
土坑3	2 A	No23
土坑4	3 B	No12
土坑5	3 B	No11
土坑6	3 B	No14
土坑7	3 A	No28

掲載遺構名	旧調査区	旧遺構名
土坑8	3 A	No27
土坑9	3 A	No25
土坑10	3 A	No31
土坑11	3 A	No29
土坑12	3 A	No19
集石1	2 B	No8
集石2	3 B	No13
たわみ1	3 A	No24-1
たわみ2	3 A	No24-2
たわみ3	3 A	No33

掲載遺構名	旧調査区	旧遺構名
たわみ4	3 A	No30
たわみ5	3 A	No21
たわみ6	3 A	No18
たわみ7	3 A	No22
たわみ8	3 B	No9
河道1	5	No37
河道2	4	No36
護岸1	4	No36護岸
柱穴1	3 B	No46

1 1区から北を望む
(南東上空から)



2 1区全景
(南西上空から)

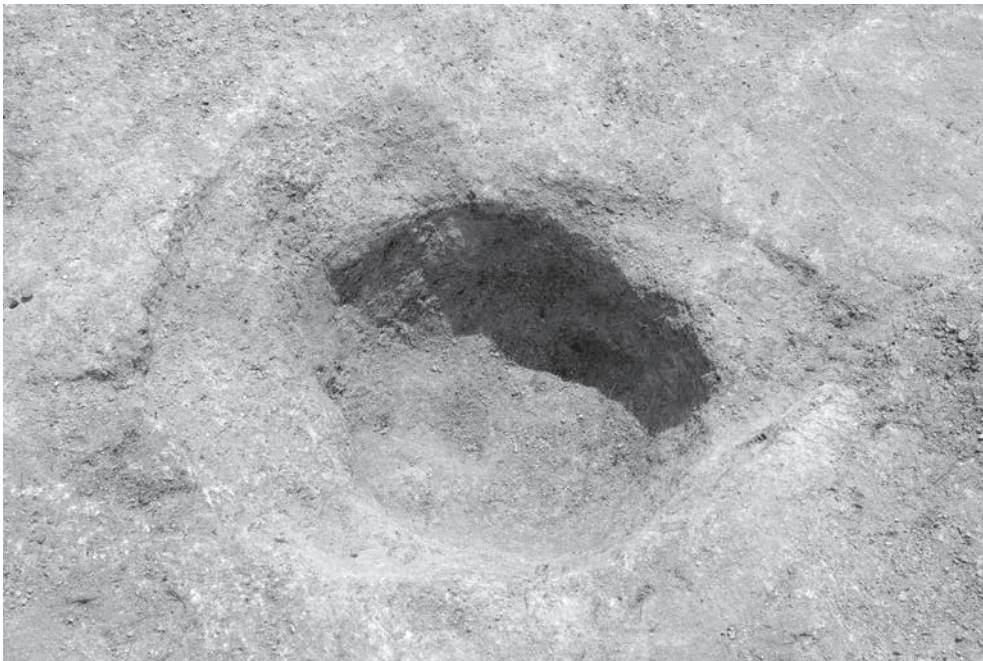


3 掘立柱建物1・
柱穴列1
(北西から)





1 柱穴列 2
(南から)



2 土坑 1
(東から)



3 溝 5
(北東から)



1 埋葬施設 1～5 (北上空から)



2 埋葬施設 4～6・石列 (西から)



1 埋葬施設 1～3
(北東から)



2 埋葬施設 1
(北から)



3 埋葬施設 1
鉄剣出土状況
(西から)

1 埋葬施設2
(南から)



2 埋葬施設3
(南東から)



3 埋葬施設4・5
(西上空から)





1 埋葬施設 4
(東から)



2 埋葬施設 4
(西から)



3 埋葬施設 5
(西から)

1 埋葬施設6
(西から)

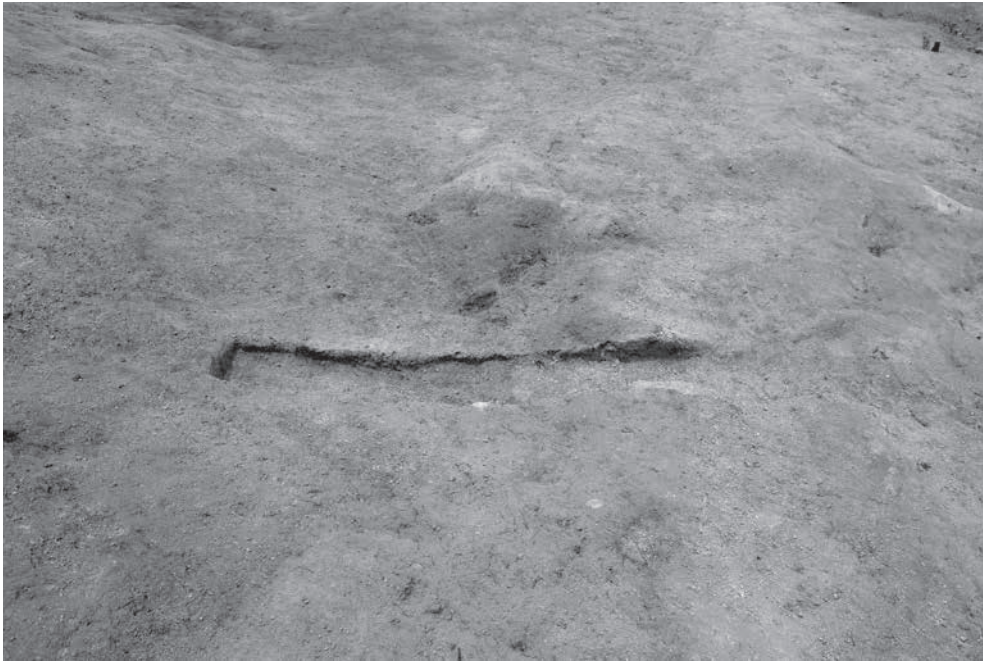


2 埋葬施設6
(北西から)



3 石列
(南西から)

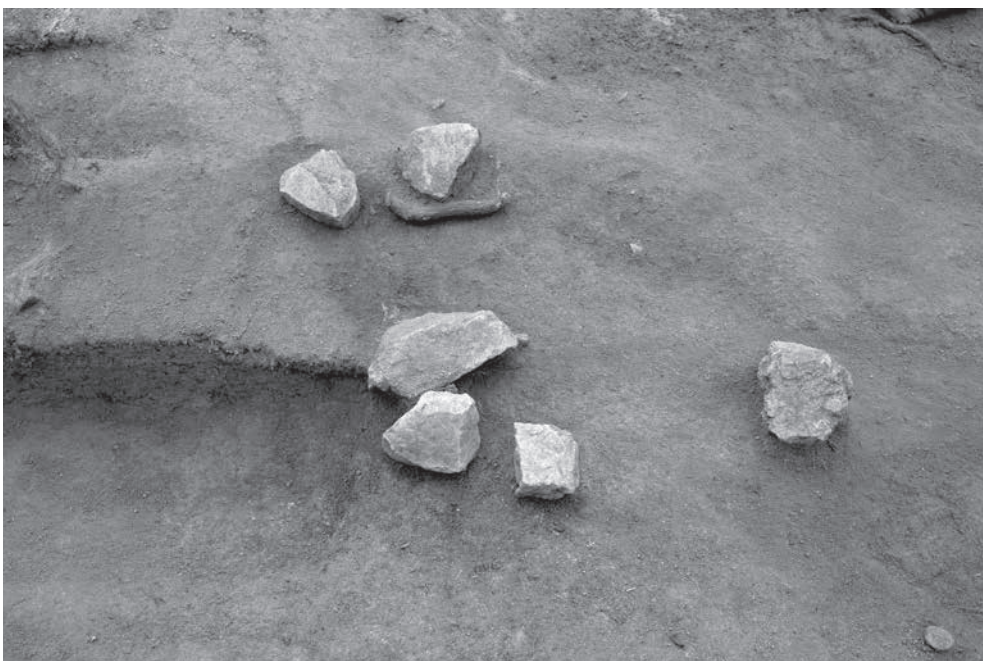




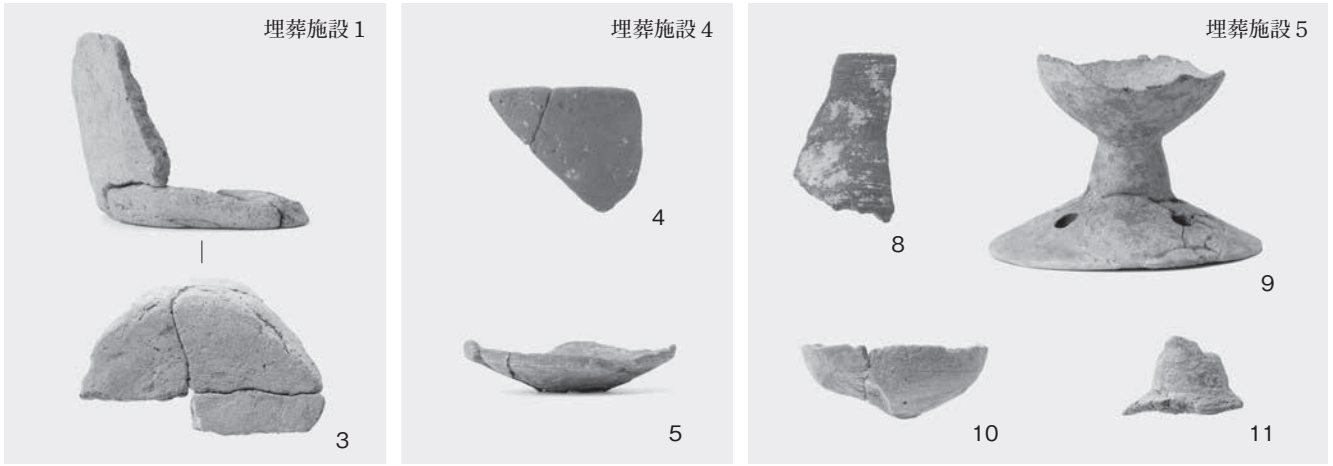
1 土坑 2
(北から)



2 土坑 3
(南西から)



3 土坑 9
(南東から)



1 埋葬施設 1・4・5 出土土器

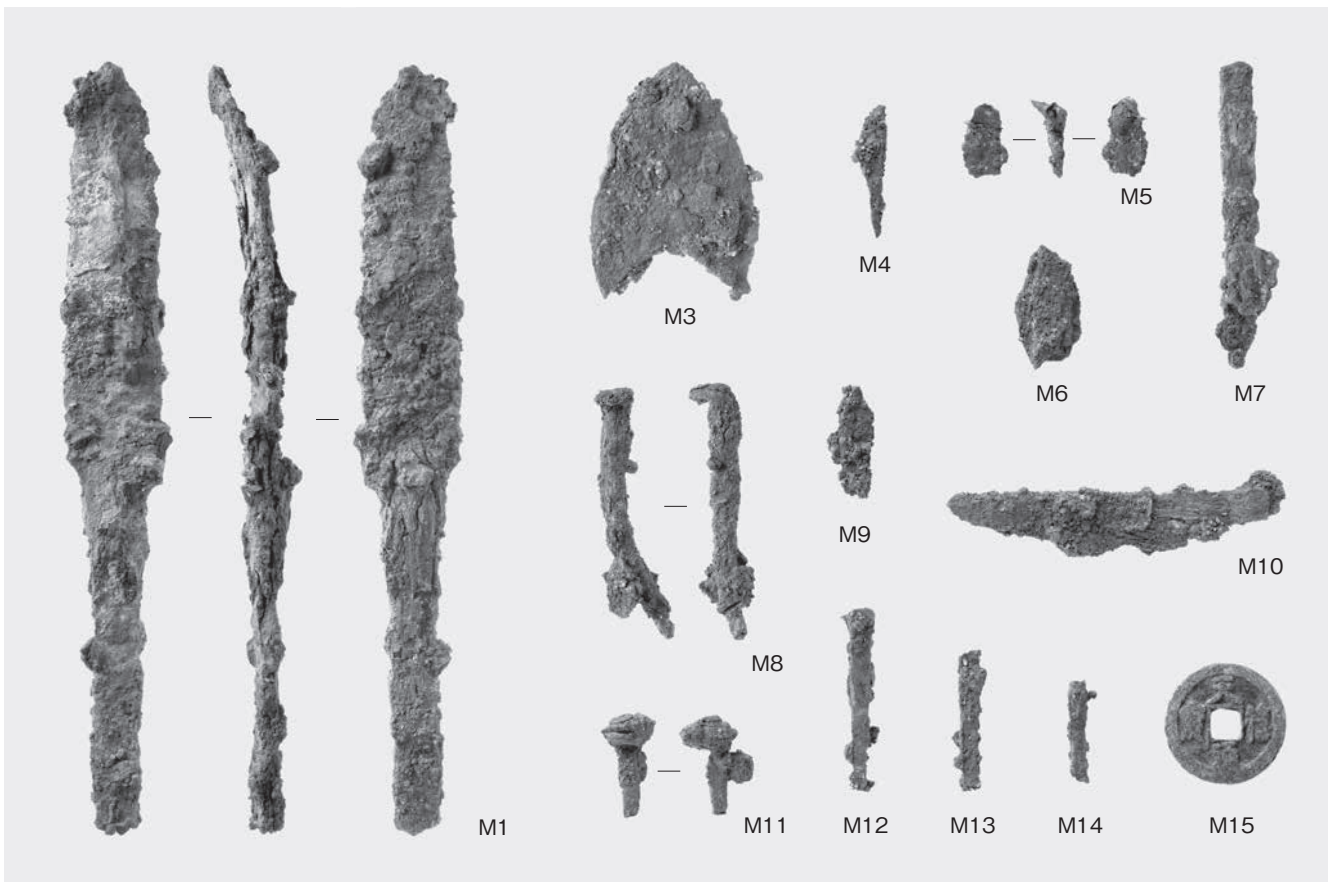


2 石列・周辺出土土器



3 溝 7 出土土器

4 遺構に伴わない土器



5 金属製品



1 遺跡全景（北西上空から）



2 遺跡全景（南東上空から）



1 溝1～6 (北西から)



2 掘立柱建物1・2、段状遺構9、柱穴列1 (南西から)



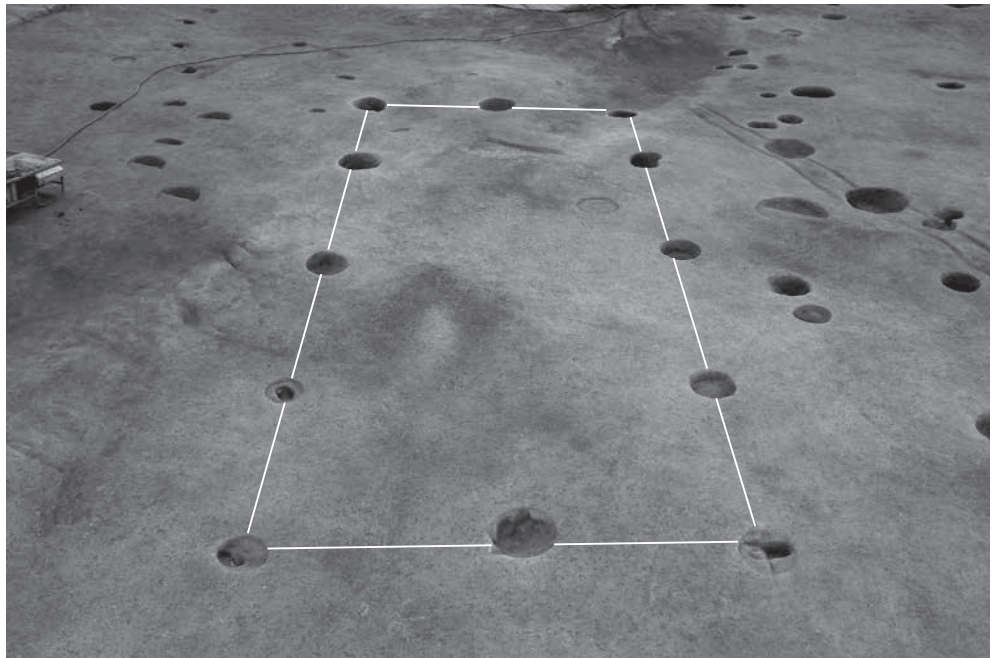
1 掘立柱建物3～5（北東から）



2 掘立柱建物10～12（東から）



1 掘立柱建物 1
(南から)



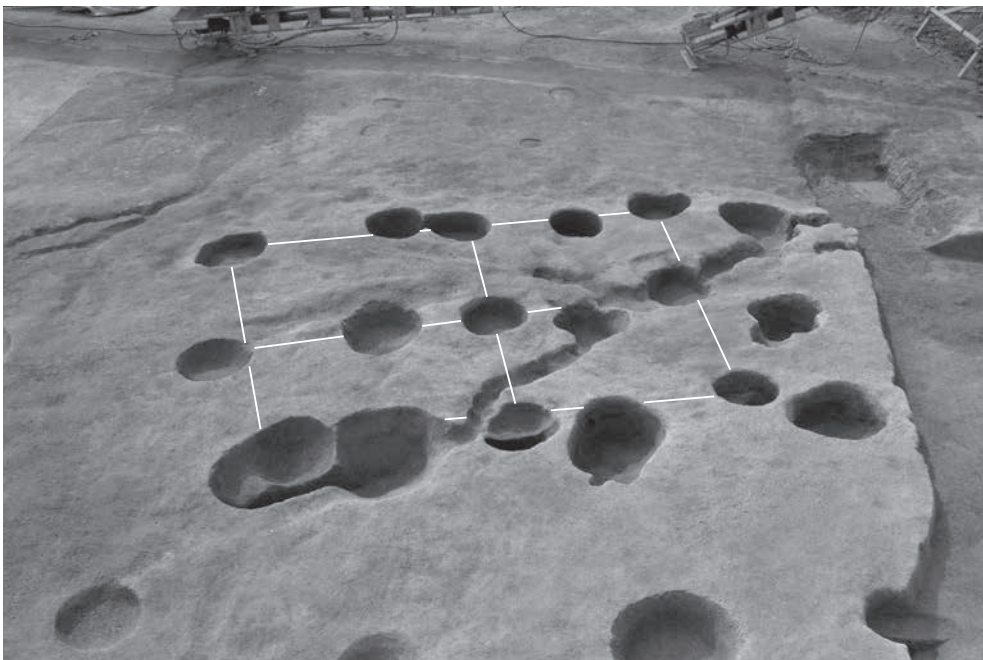
2 掘立柱建物 8
(北西から)



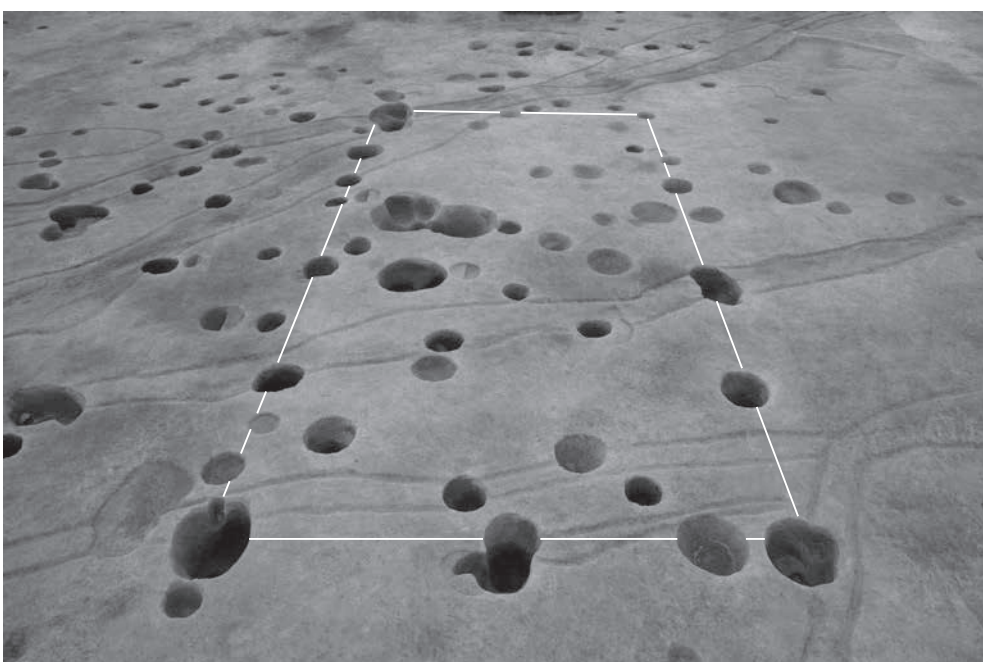
3 掘立柱建物 9・19
(北西から)



1 掘立柱建物13・
柱穴列9
(北から)



2 掘立柱建物14
(北東から)



3 掘立柱建物15
(北東から)

1 段状遺構 1
(南西から)



2 段状遺構 1
被熱面
(南西から)



3 段状遺構 2・3
(西から)





1 段状遺構 4
(北西から)



2 段状遺構 8
(南から)

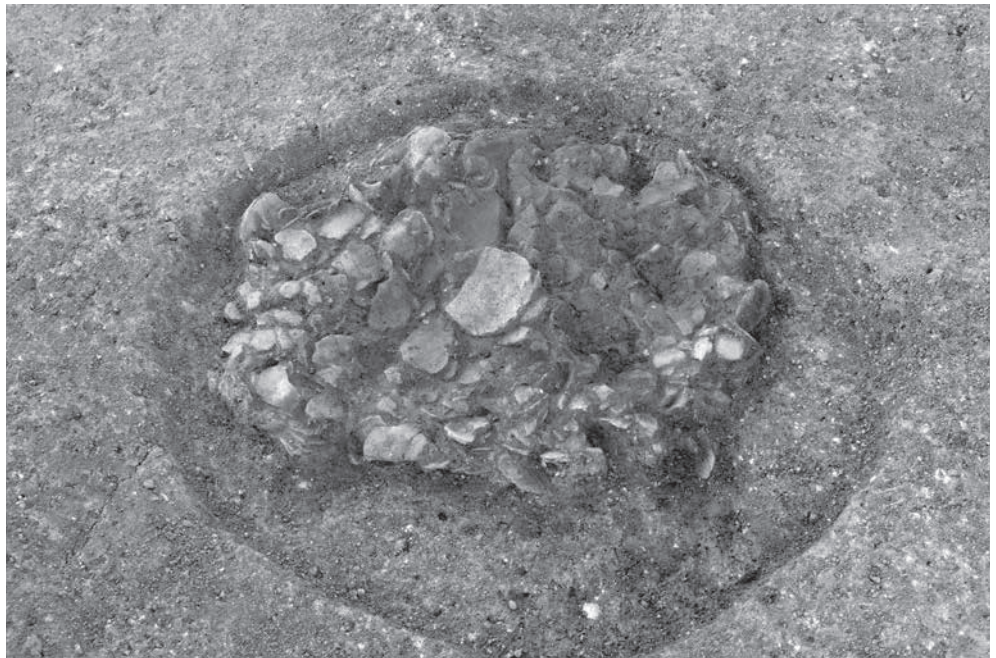


3 段状遺構 9
(西から)

1 段状遺構11
(西から)

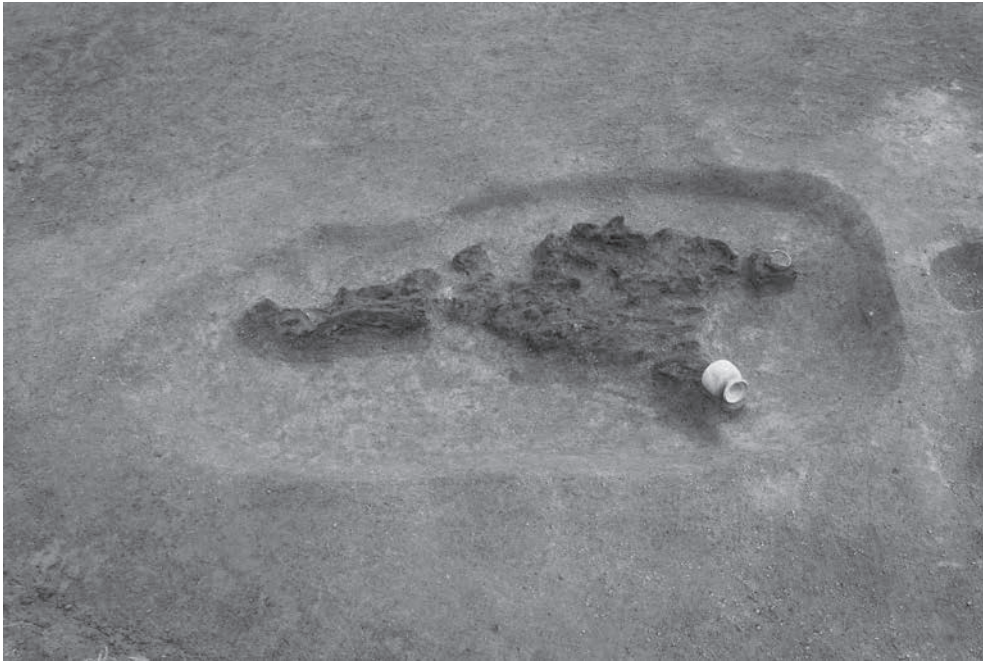


2 段状遺構11
土器溜まり
(南西から)

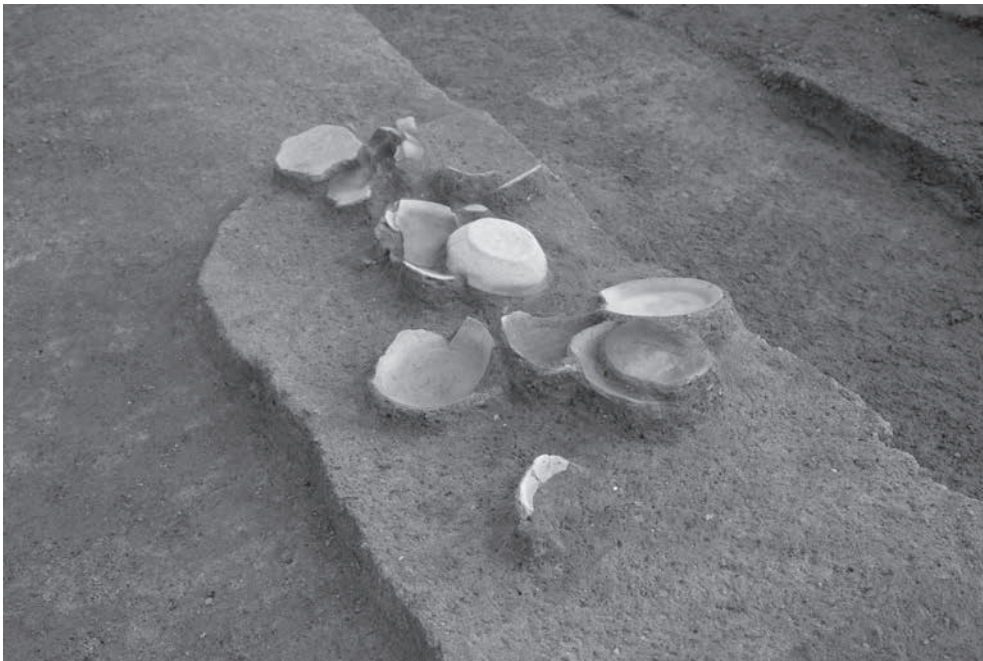


3 段状遺構11
被熱面
(南西から)

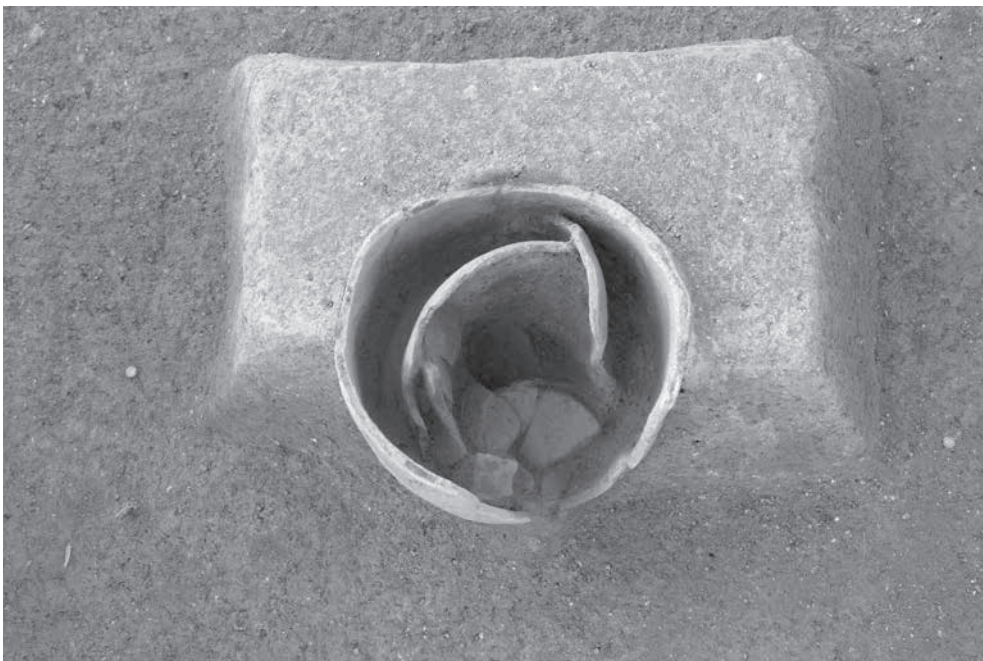




1 土坑2
(南西から)

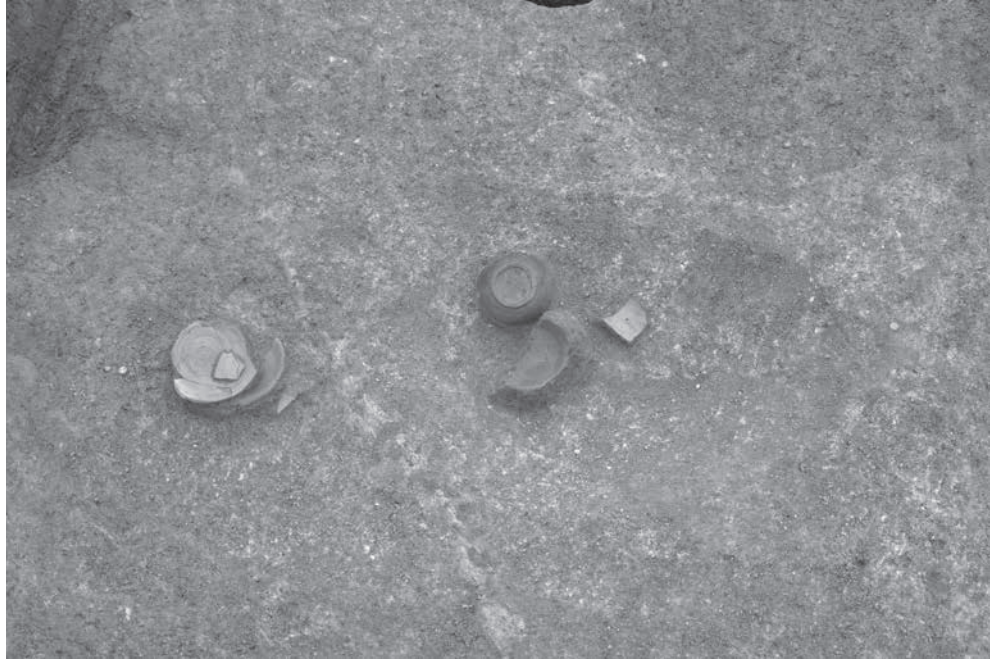


2 土坑14
土器出土状況
(西から)

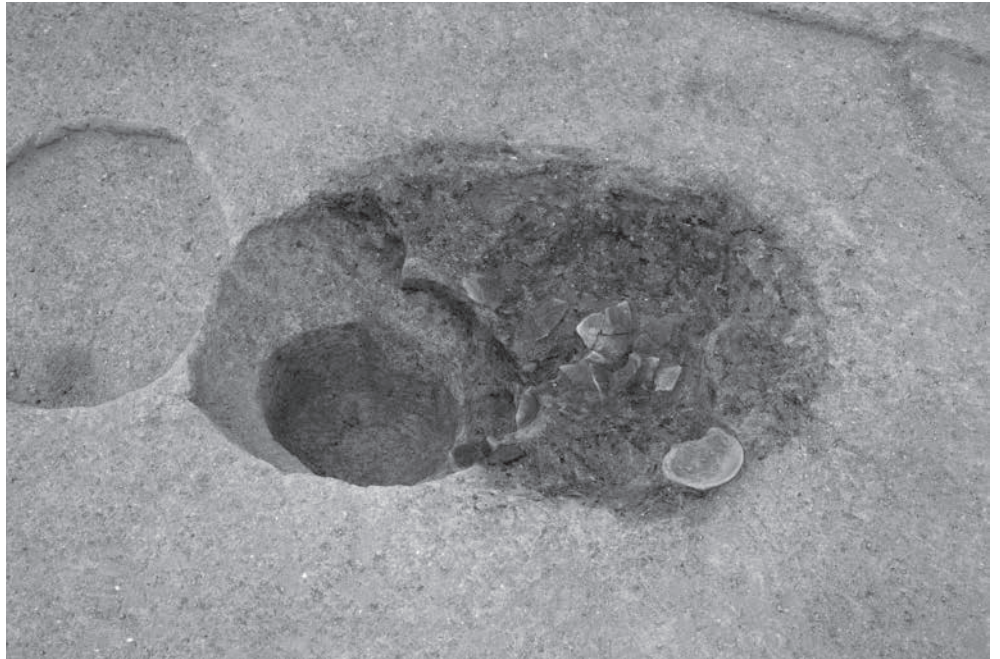


3 土坑19
土器出土状況
(南から)

1 土坑20
土器出土状況
(東から)



2 土坑22
(東から)

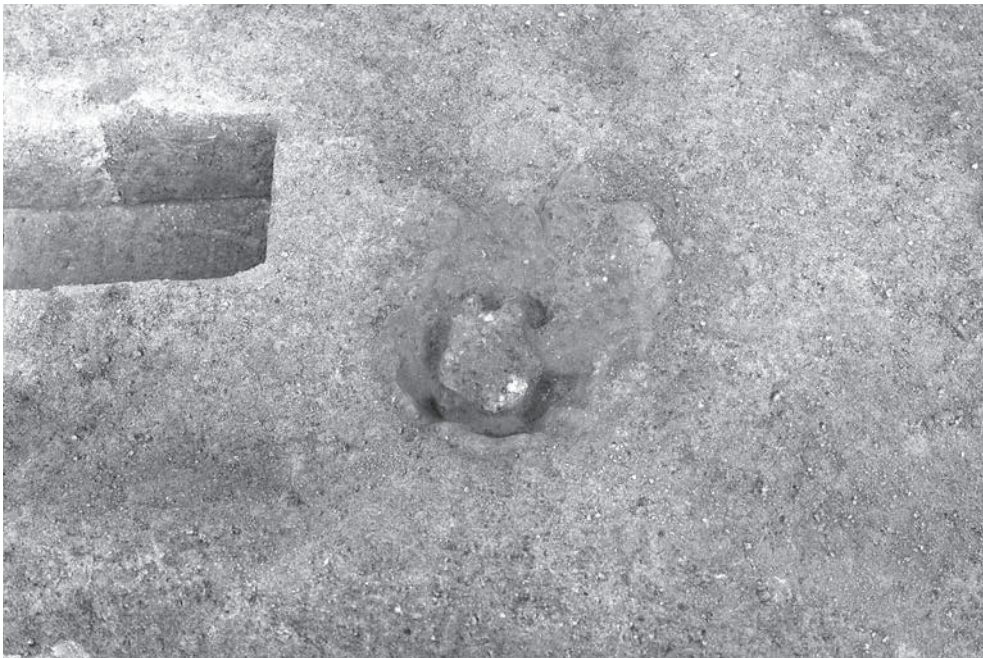


3 竪穴遺構 1
(南西から)

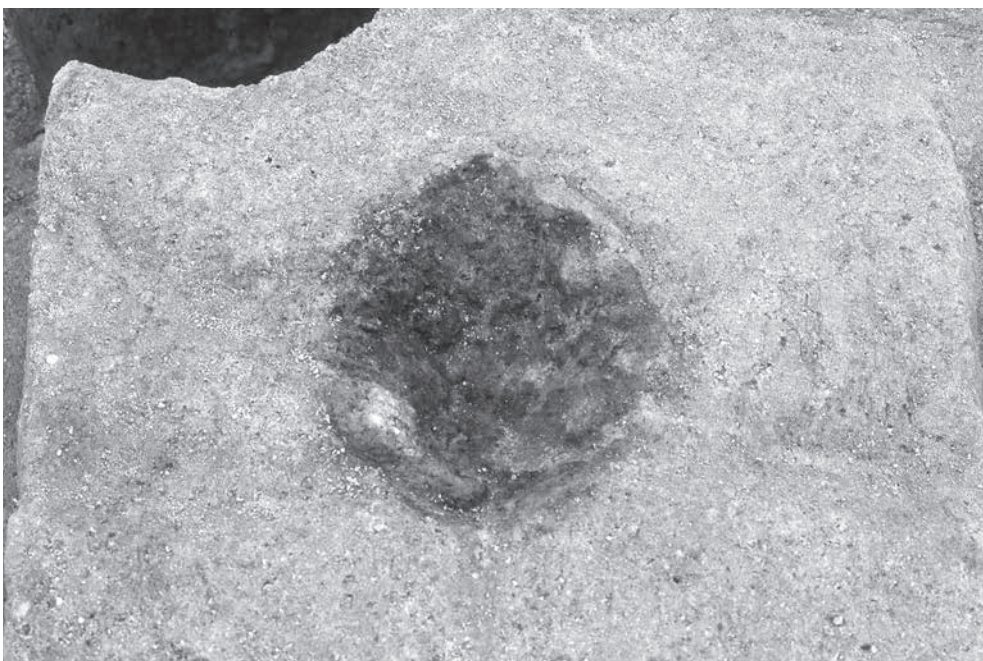




1 鍛冶炉 1
(南西から)



2 鍛冶炉 2
(南西から)



3 鍛冶炉 3
(南東から)

1 鍛冶炉4
(南西から)

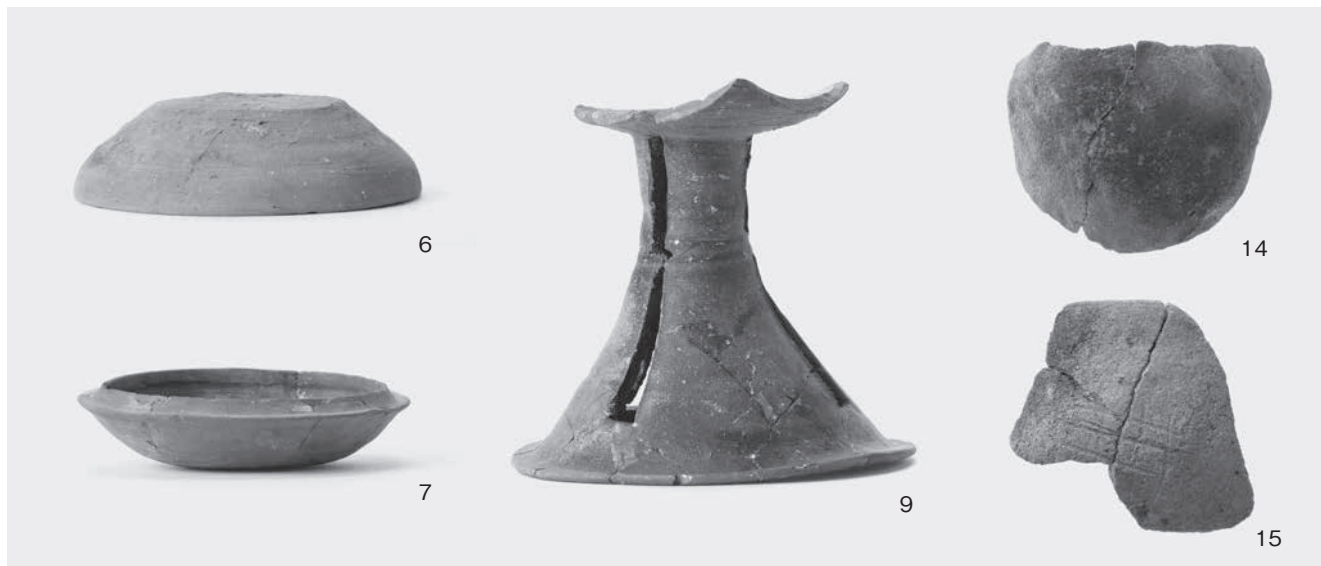


2 鍛冶炉5
(南西から)



3 谷部
木製品出土状況
(南西から)





1 段状遺構3出土土器



2 段状遺構4、土坑2・4出土土器



3 溝3・7出土土器



1 谷部（古墳時代）出土土器



2 掘立柱建物 1 出土土器



3 段状遺構11・12、土坑13・14出土土器

土坑 19



266



267

土坑 20



268



273

土坑 22



278



279

1 土坑19・20・22出土土器

竪穴遺構 1



293



294



295



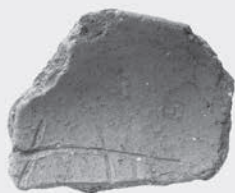
302



324



328



319



333



329



332

竪穴遺構 2



337

2 竪穴遺構 1・2 出土土器



1 竪穴遺構3出土土器

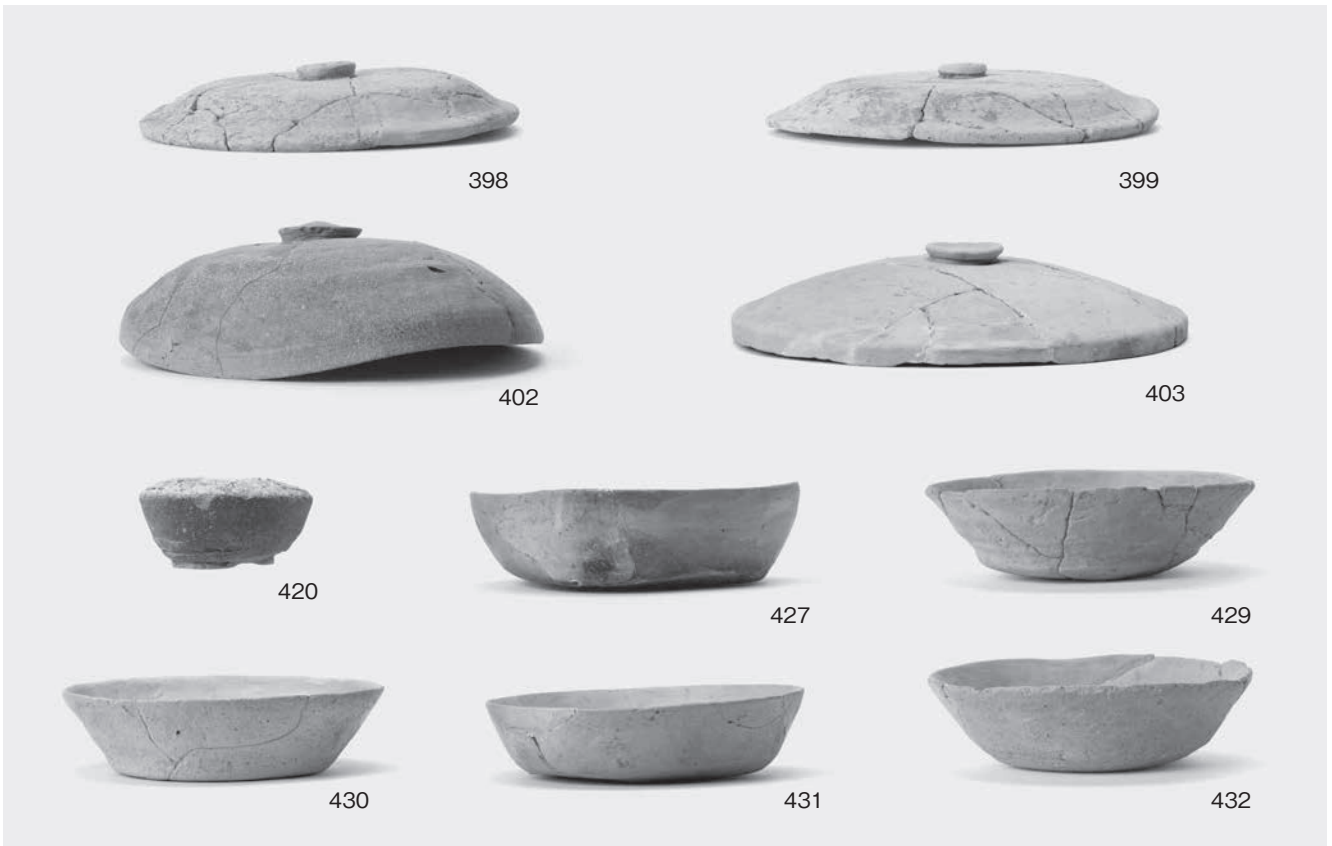


2 溝15出土土器

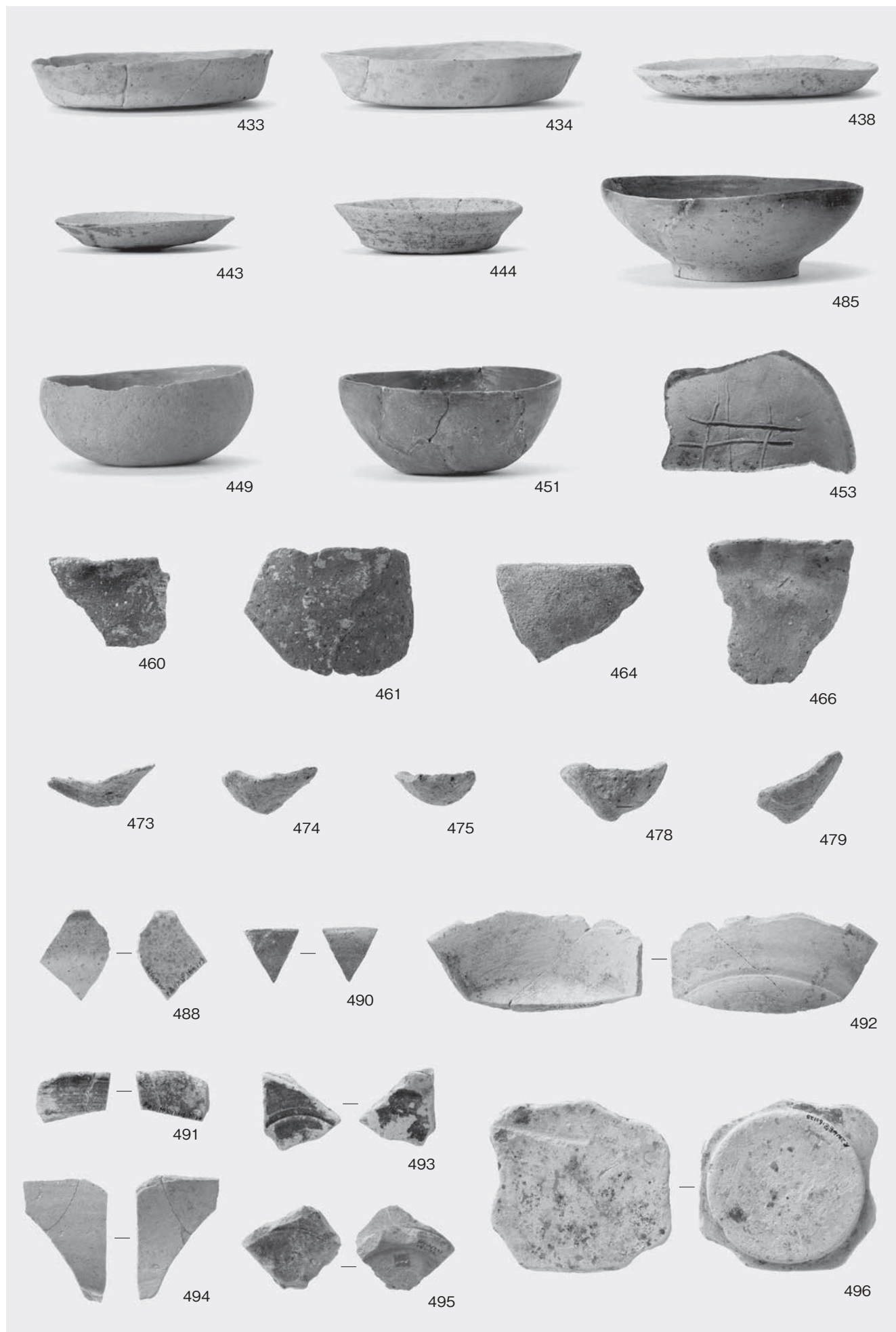
3 谷部（古代）出土土器



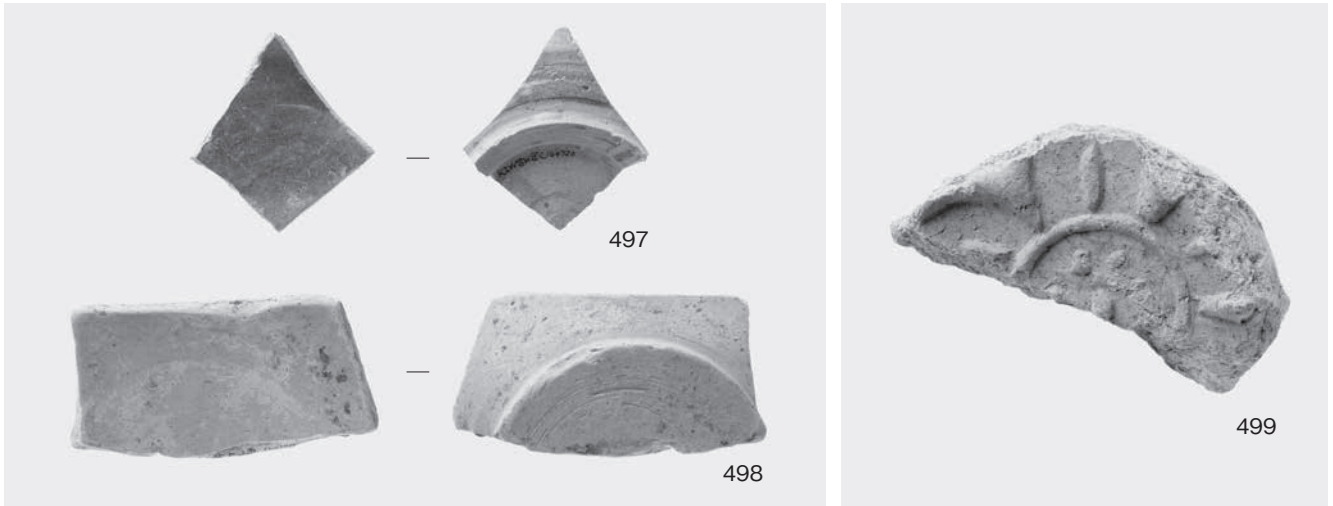
4 柱穴・ピット（古代）出土土器



5 遺構に伴わない土器（古代）①



1 遺構に伴わない土器 (古代) ②



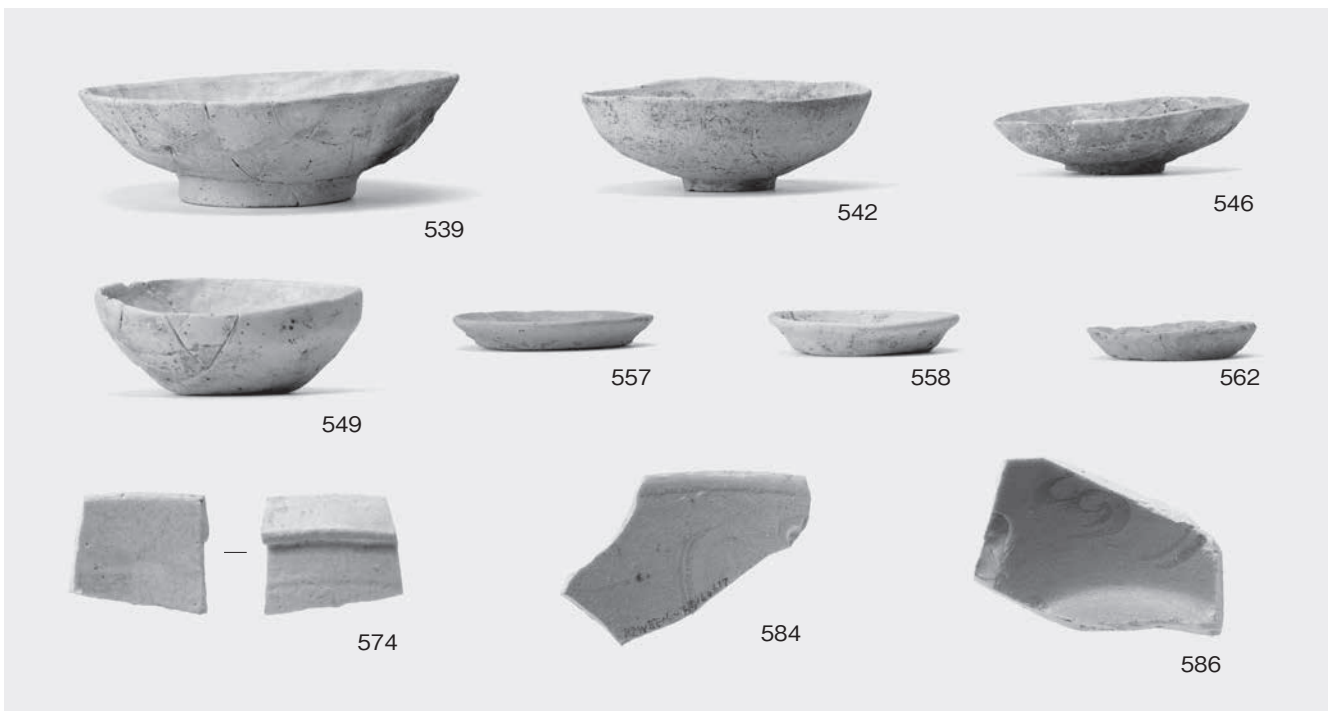
1 遺構に伴わない土器 (古代) ③・瓦



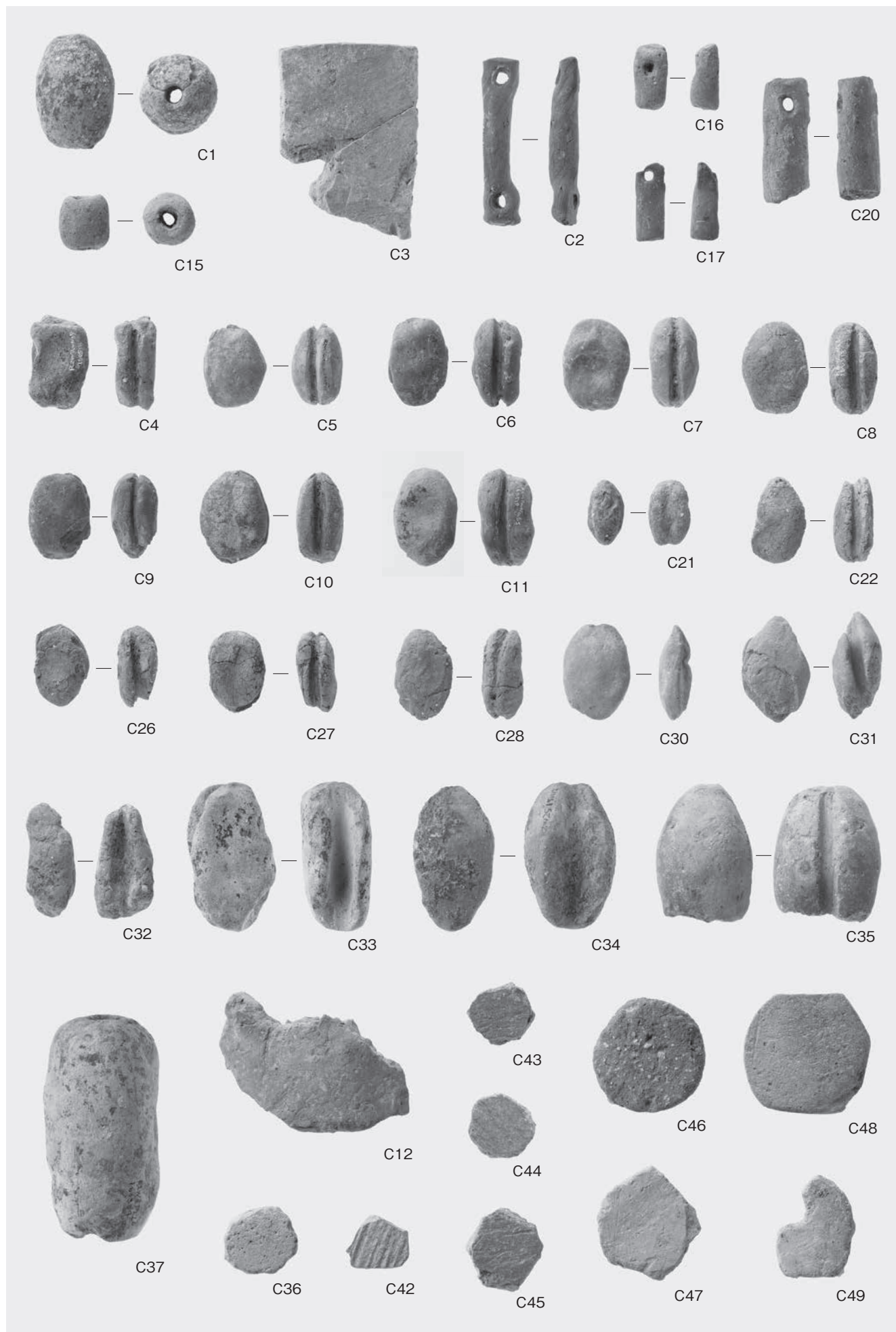
2 掘立柱建物15・柱穴列9・土坑35出土土器

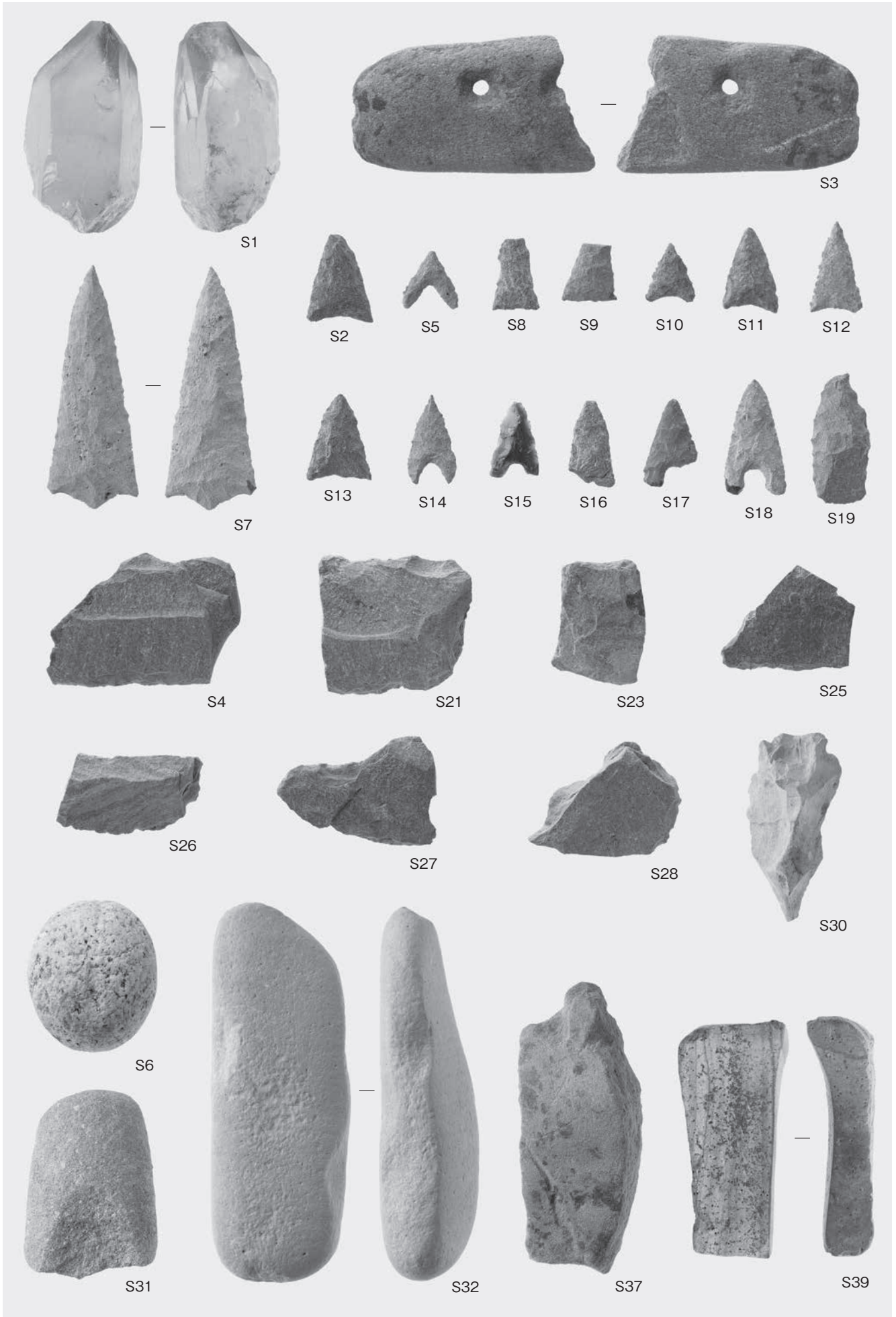


3 柱穴 (中世) 出土土器



4 遺構に伴わない土器 (中世)

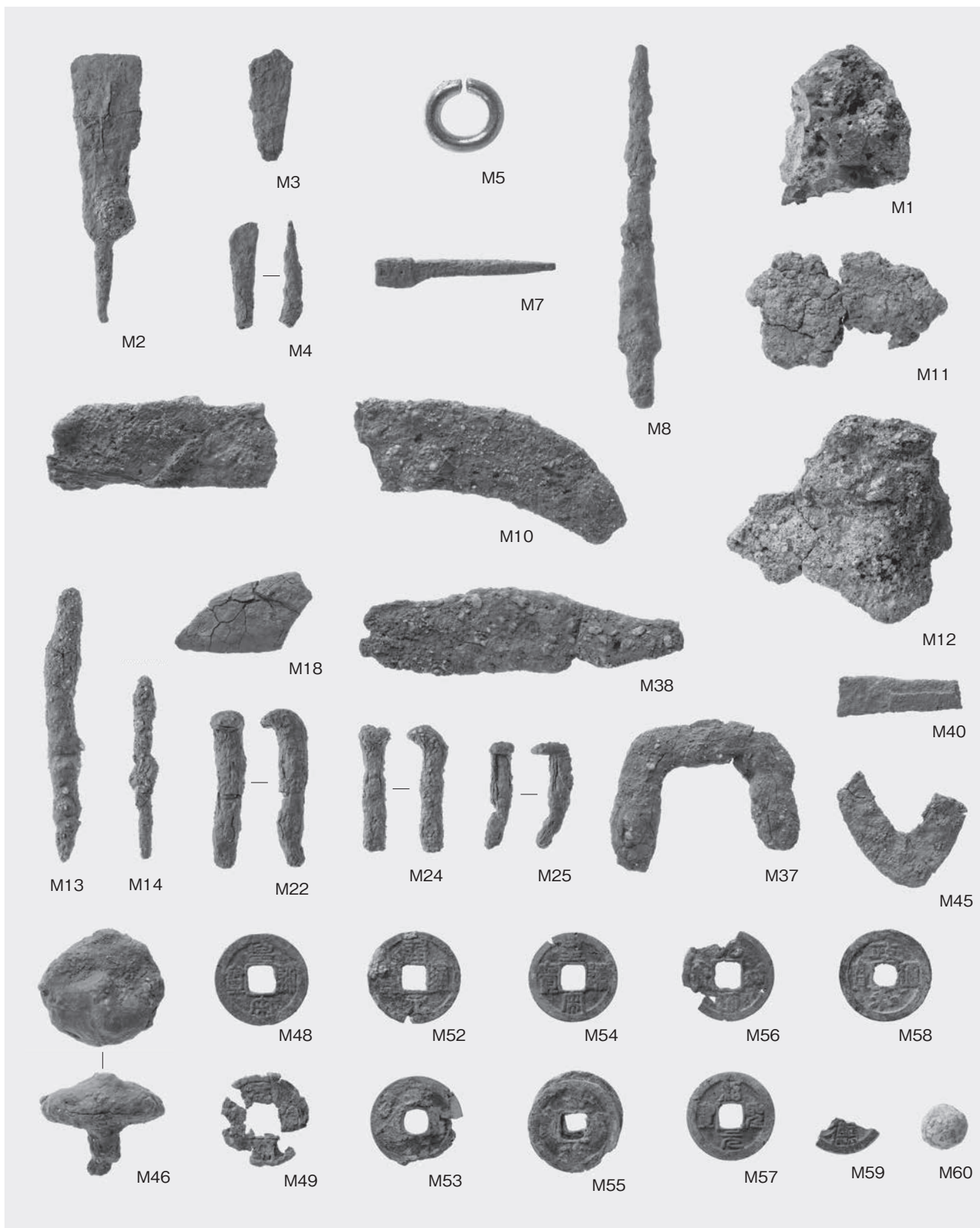




1 石製品



1 木製品



2 金属製品

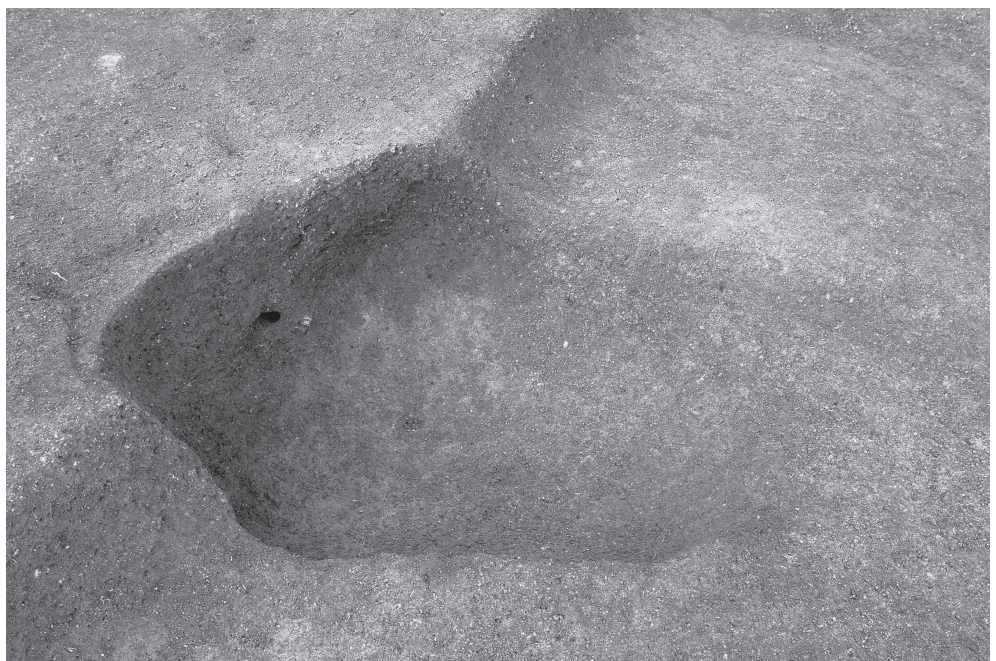
1 遺跡全景
(北西上空から)



2 土坑 1
(北東から)



3 土坑 2
(南東から)





1 たわみ 1～4
(南東から)



2 河道 1 南半上層
(北から)

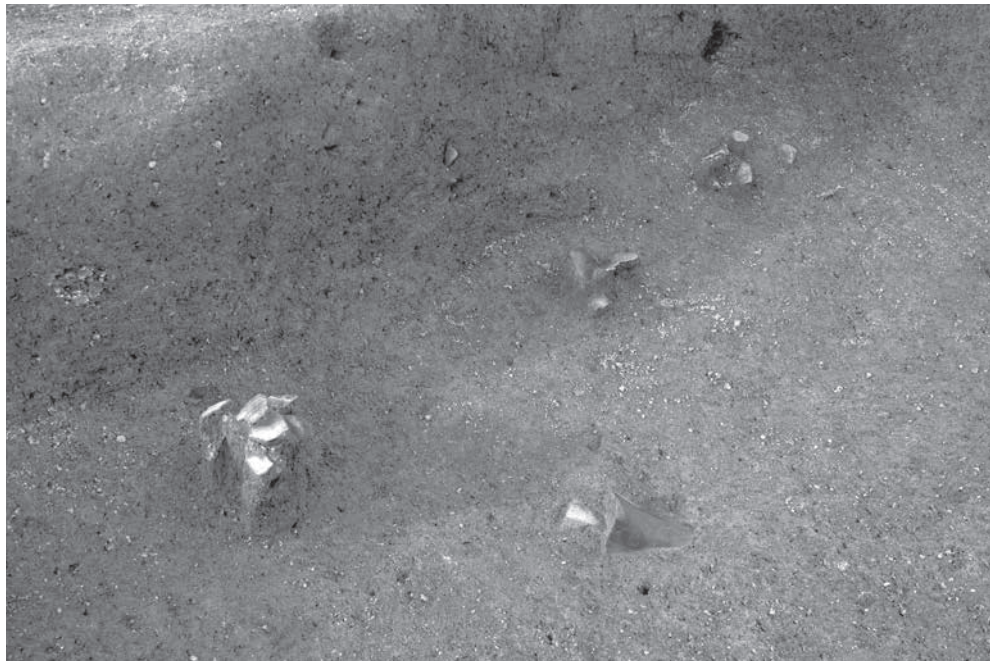


3 河道 1 北地区
土器溜まり
(南から)

1 河道1北地区
集中部①
(南から)

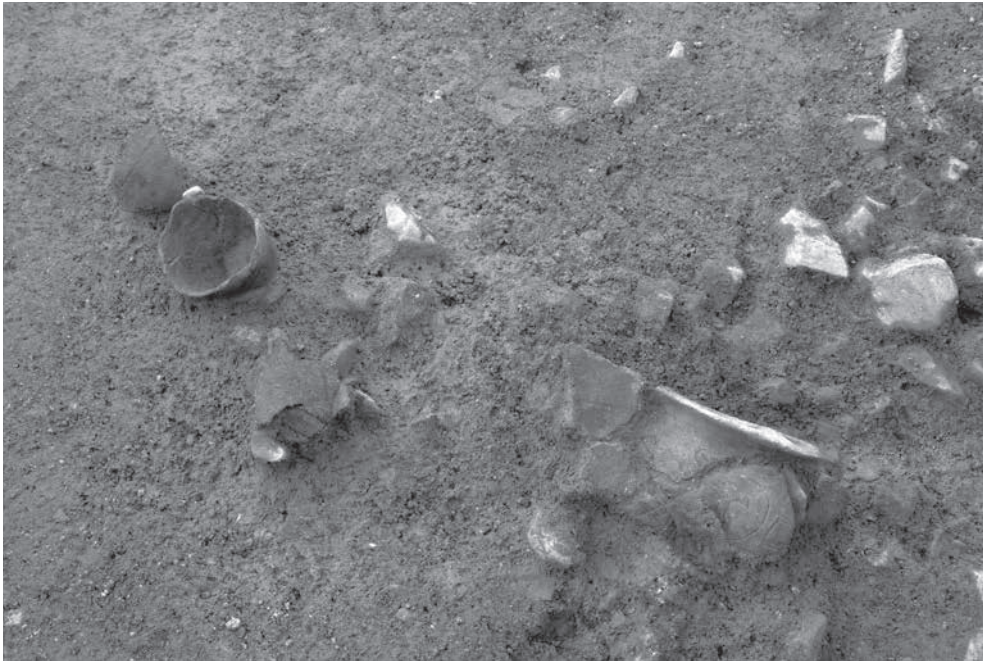


2 河道1北地区
集中部②
(南東から)



3 河道1北地区
底面土器68周辺
(東から)





1 河道1北地区
底面土器36・95
(東から)



2 河道1南地区
下層土器溜まり上部
(北西から)

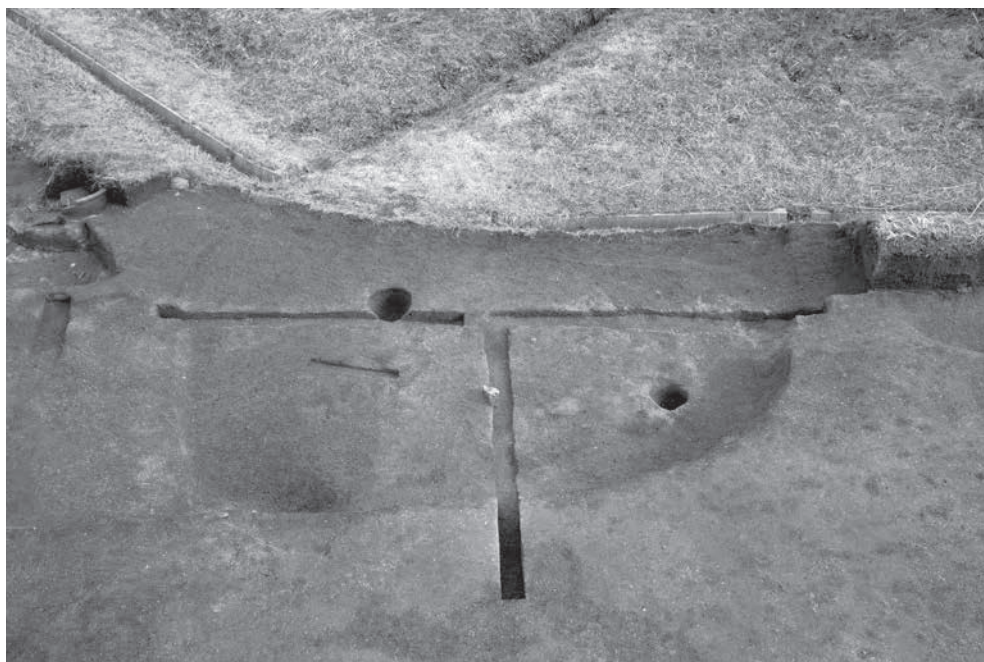


3 河道1南地区
下層土器溜まり下部
(北から)

1 調査地南西部全景
(北から)

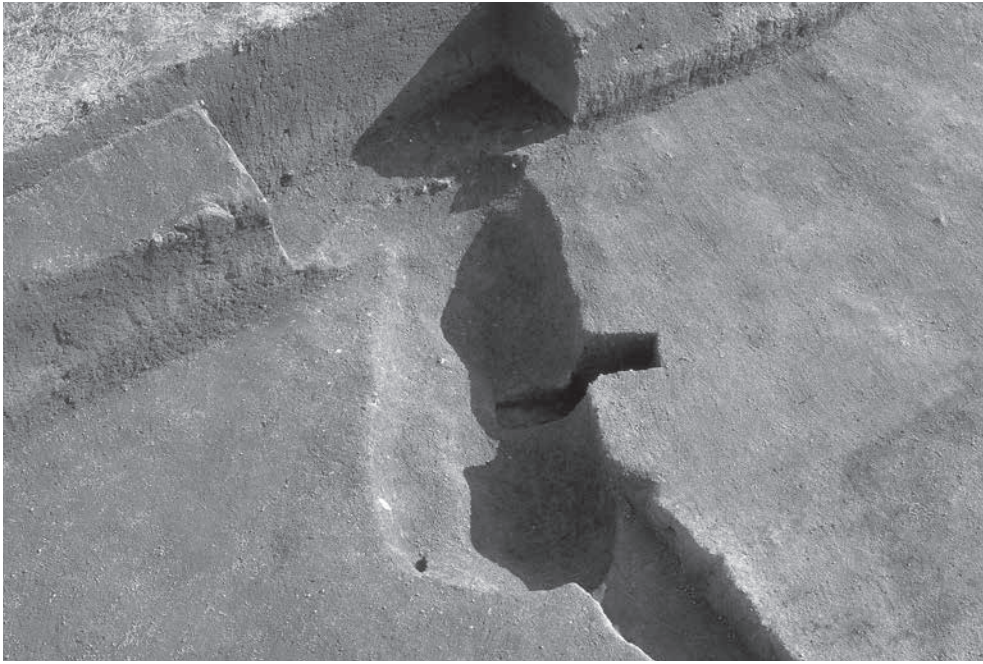


2 竪穴住居 1
(南西から)



3 竪穴住居 2
(北西から)





1 土坑3
(西から)



2 土坑4
(北から)



3 土坑5
(北から)

1 集石1上面
(東から)

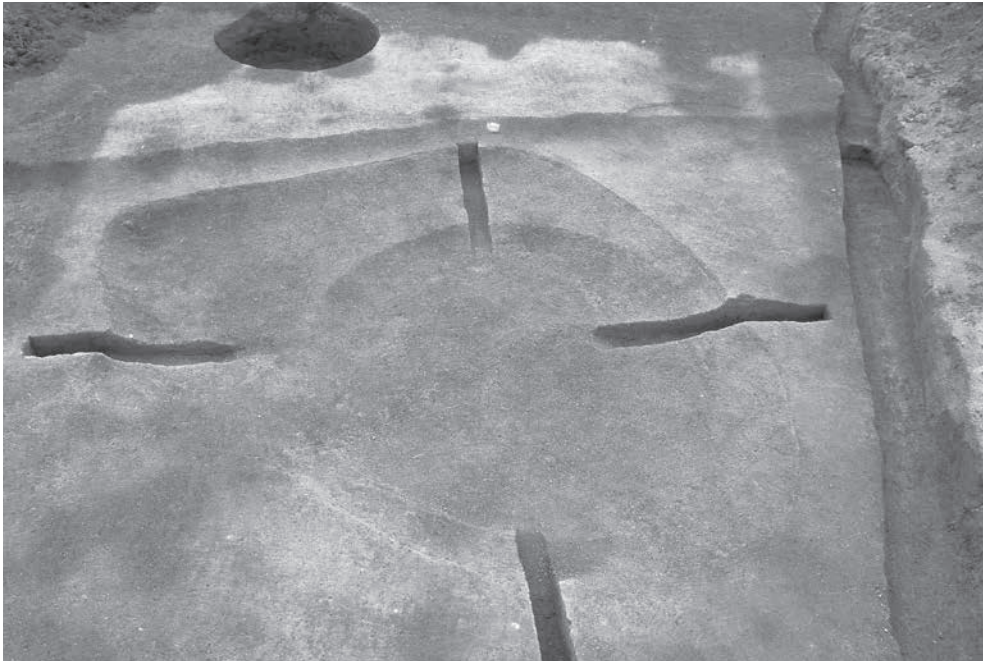


2 集石1完掘状況
(北西から)



3 集石2上面
(北東から)





1 集石2完掘状況
(北東から)

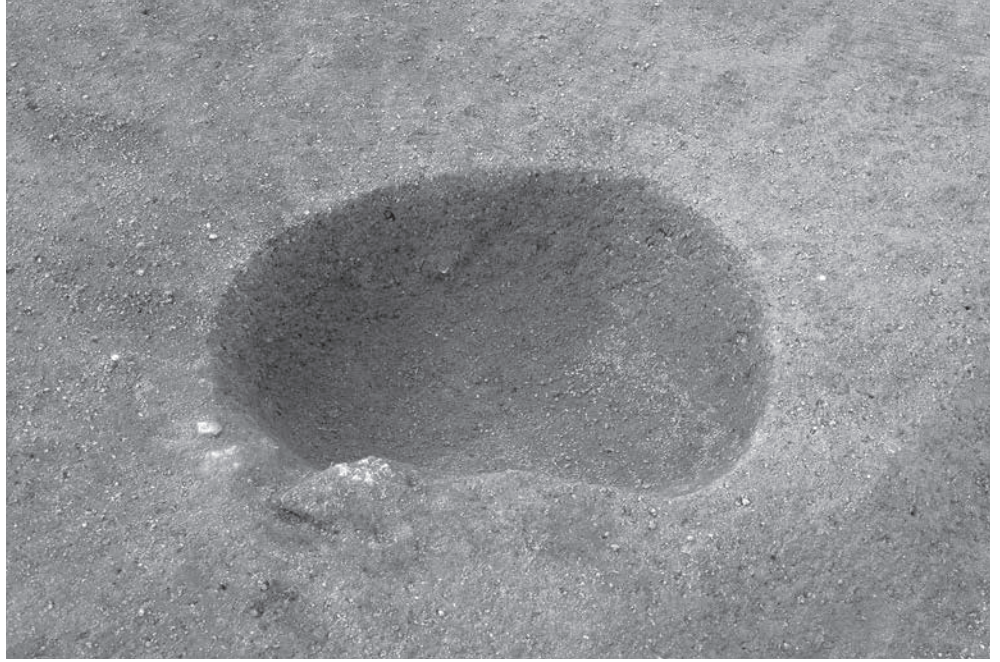


2 たわみ6
(北西から)

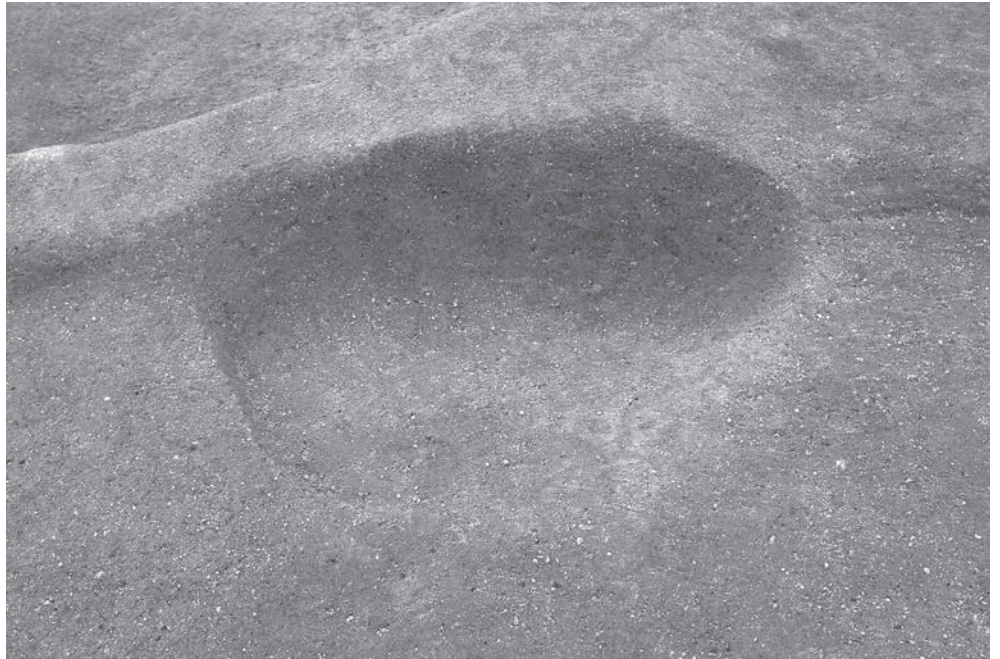


3 柱穴列1
(北から)

1 土坑11
(東から)

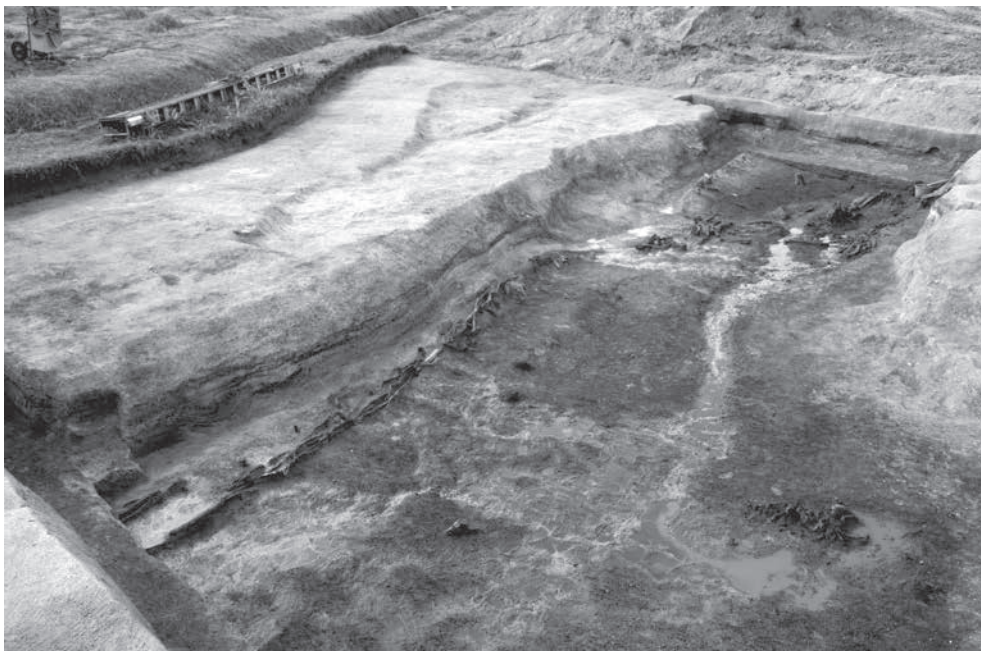


2 土坑12
(北東から)



3 河道2・護岸1北端
(北東から)





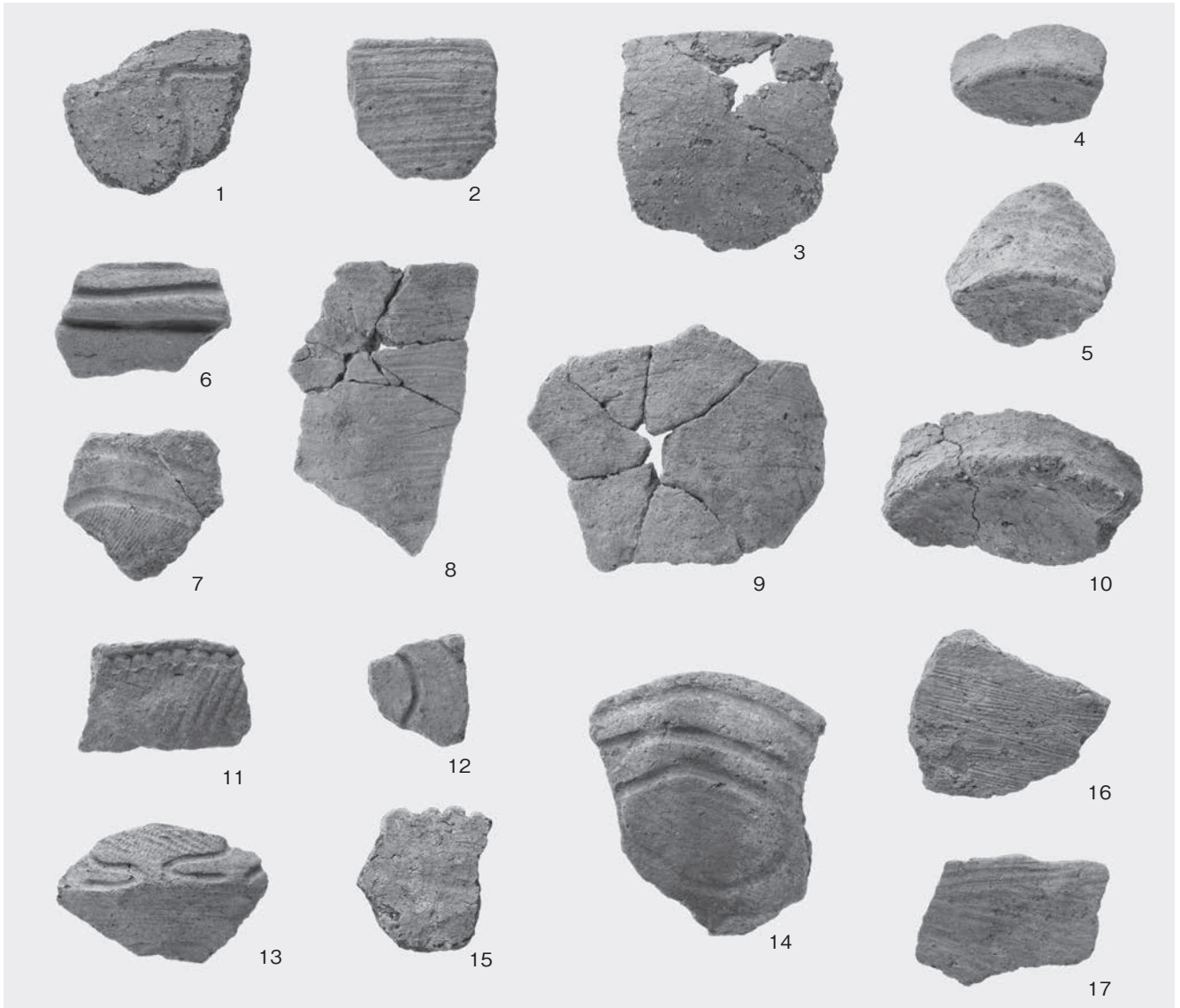
1 河道2・護岸1
(南東から)



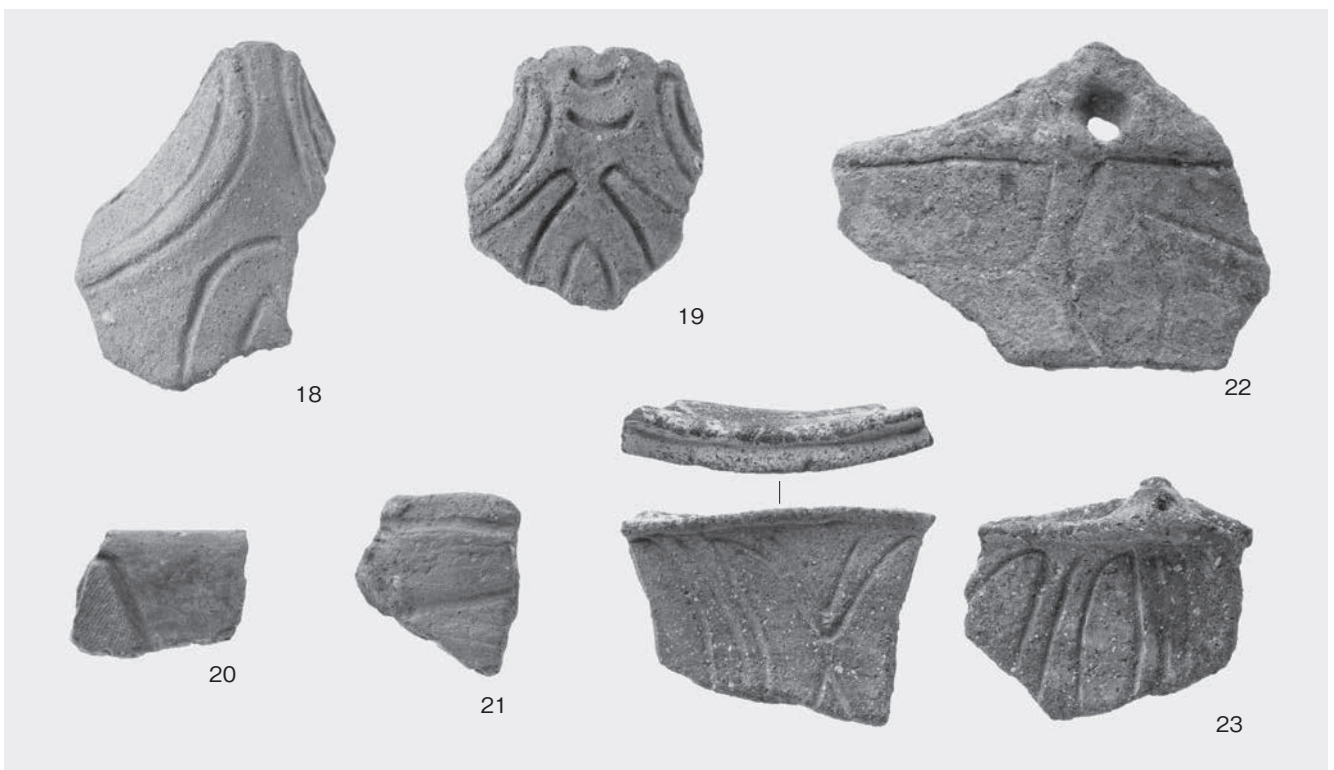
2 護岸1南半
(南東から)



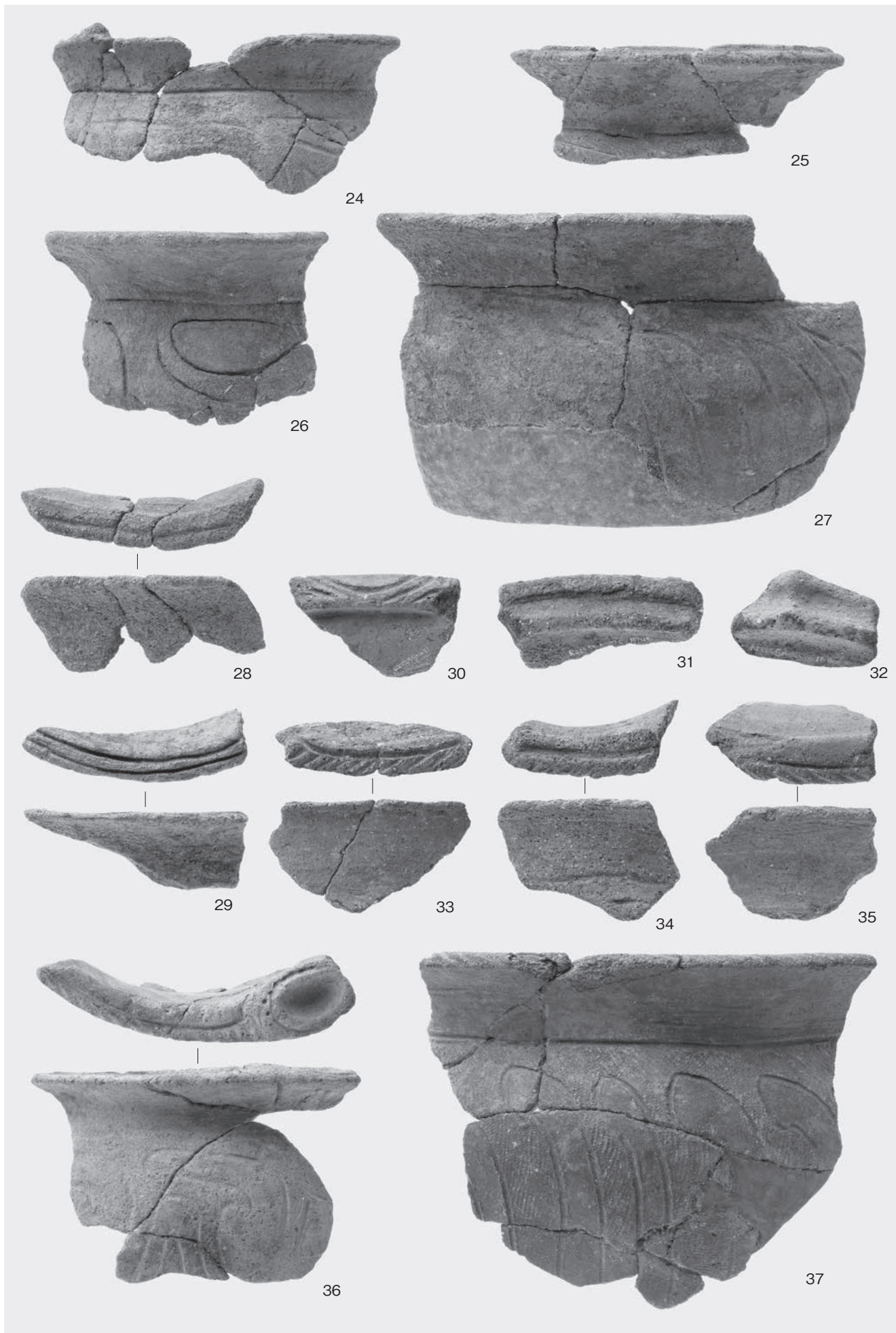
3 護岸1南端
W11~W13周辺
(南東から)



1 土坑2、たわみ2～4出土土器



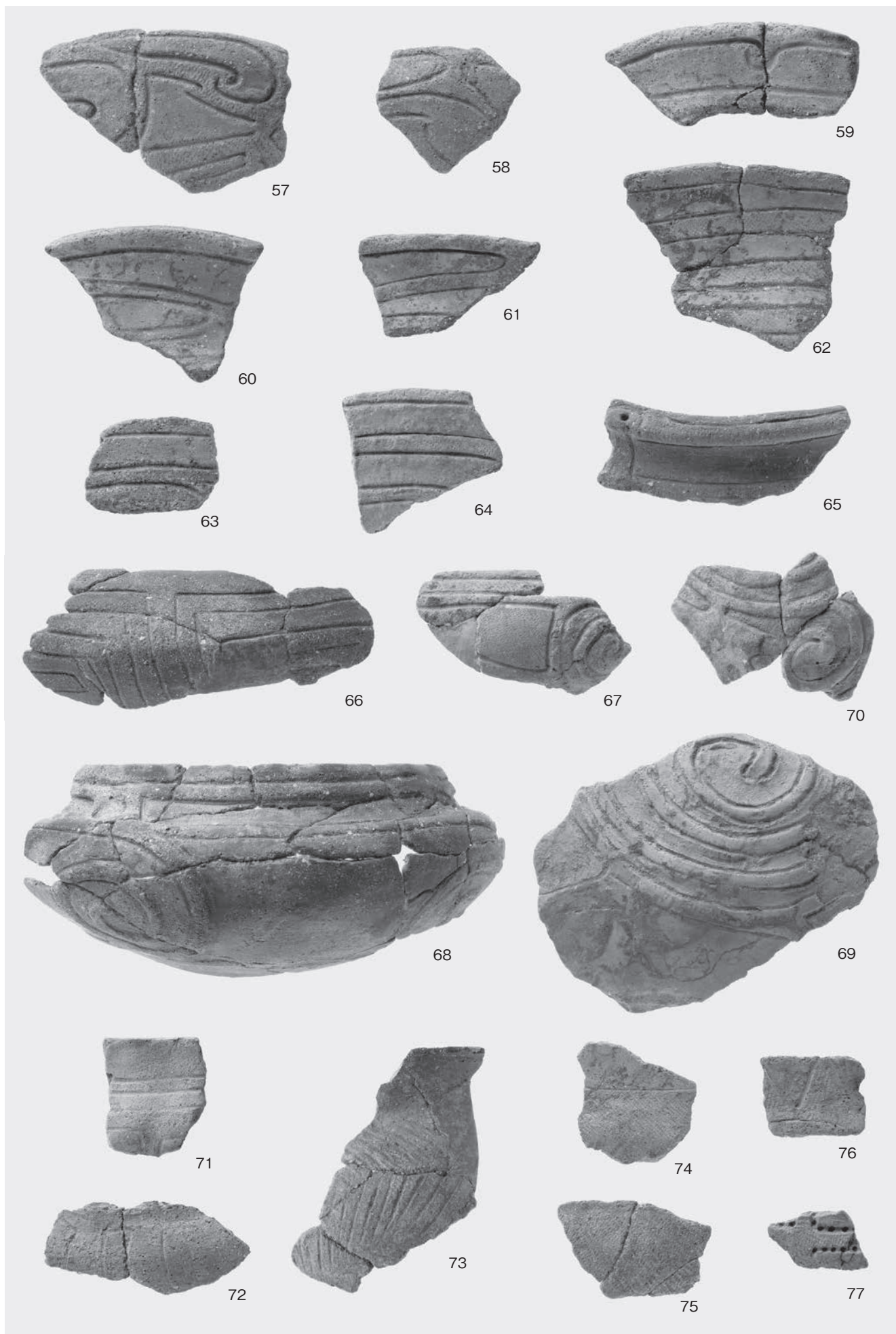
2 河道1北地区出土土器①



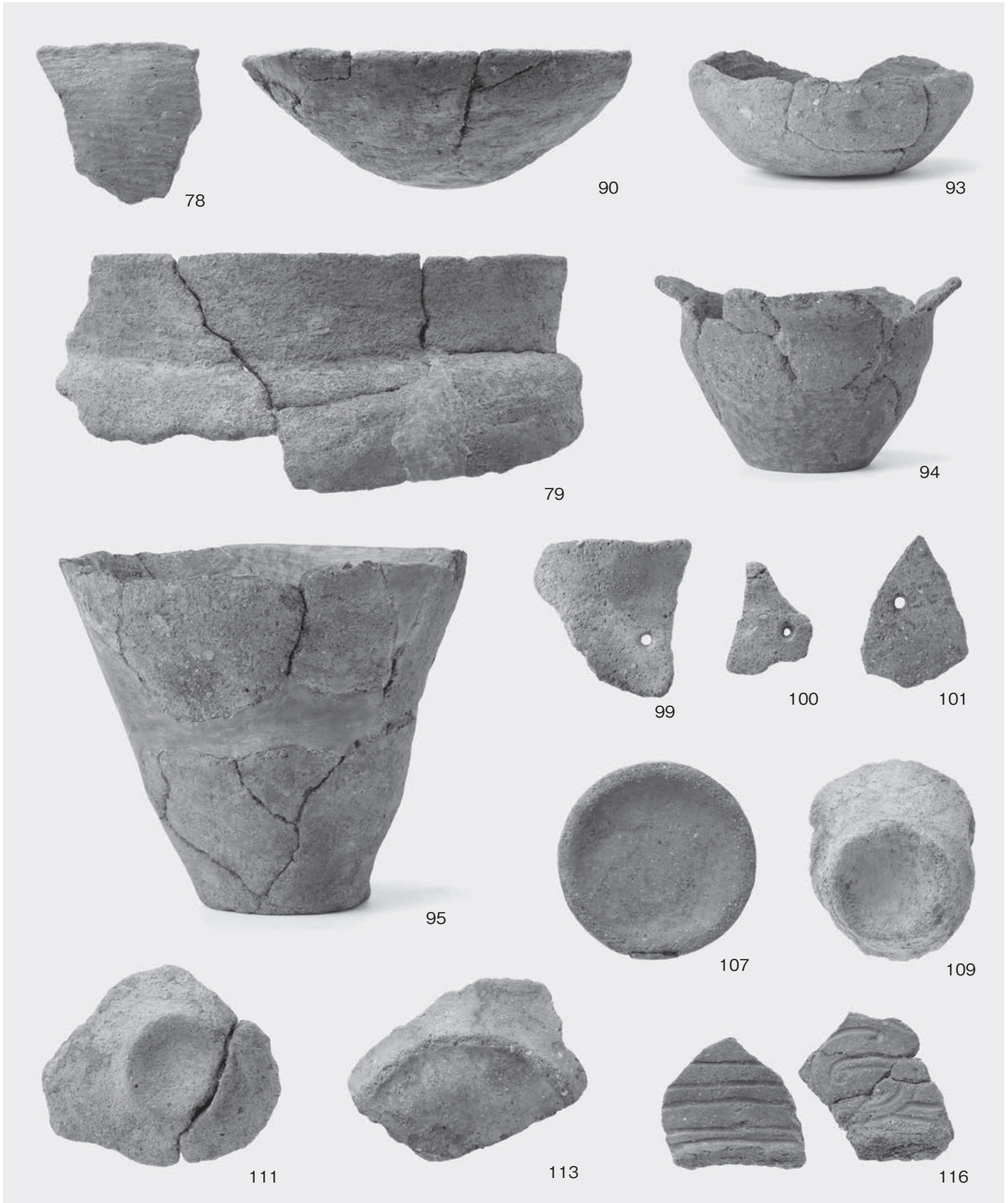
1 河道1北地区出土土器②



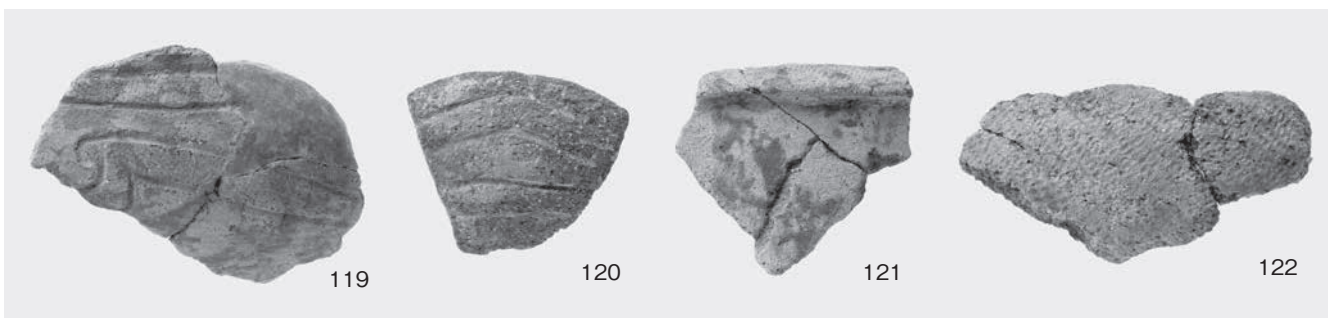
1 河道1北地区出土土器③



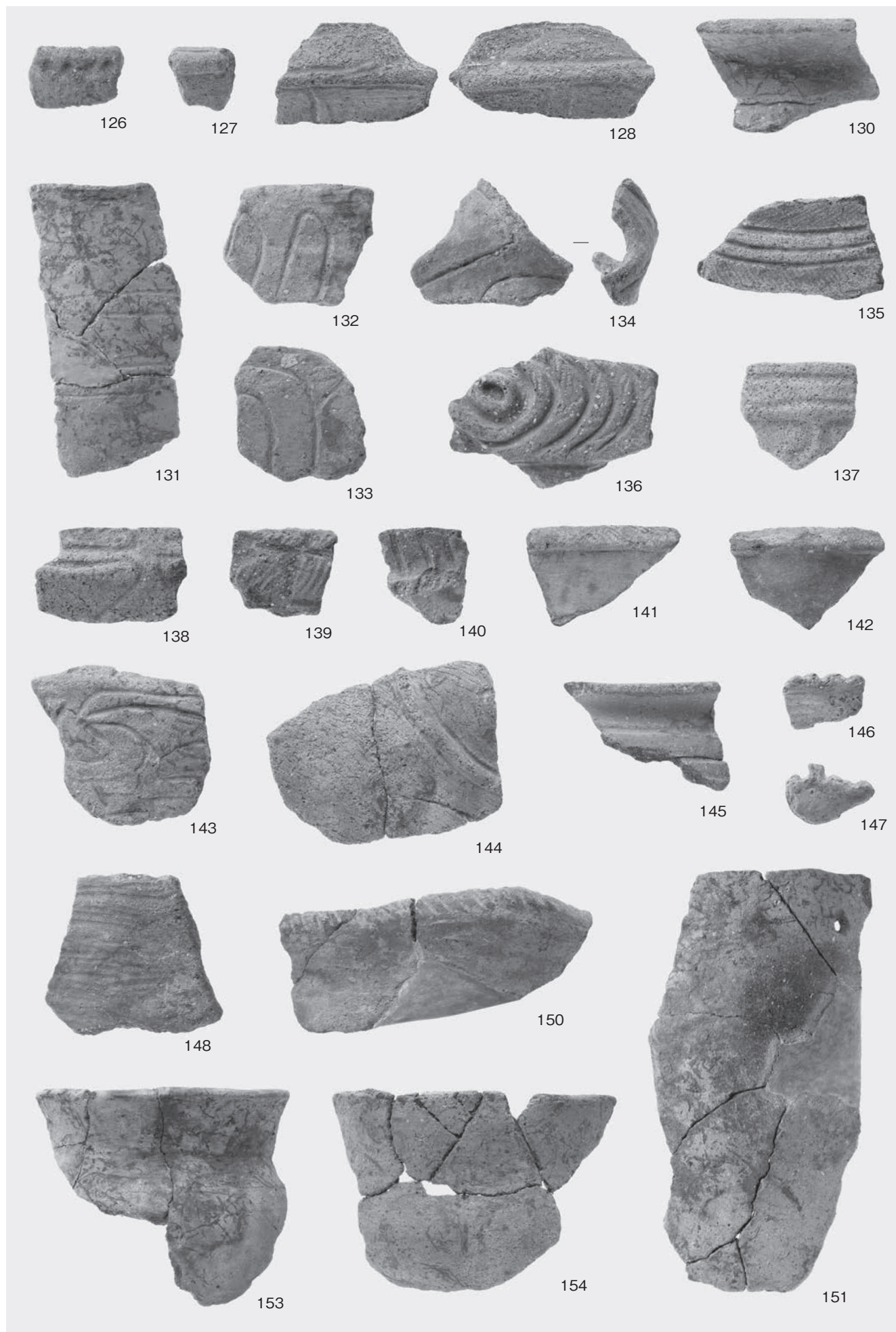
1 河道1北地区出土土器④



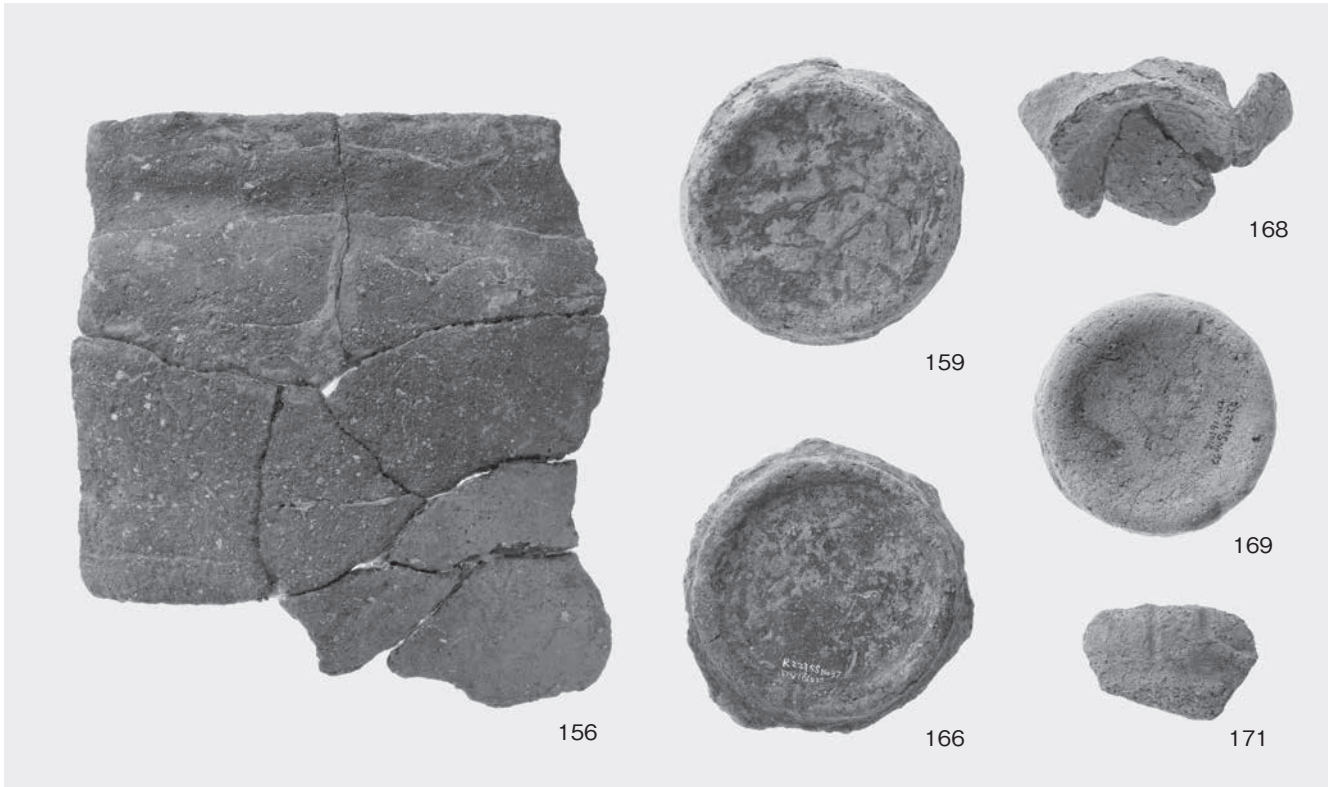
1 河道1北地区出土土器⑤



2 河道1南地区上層出土土器



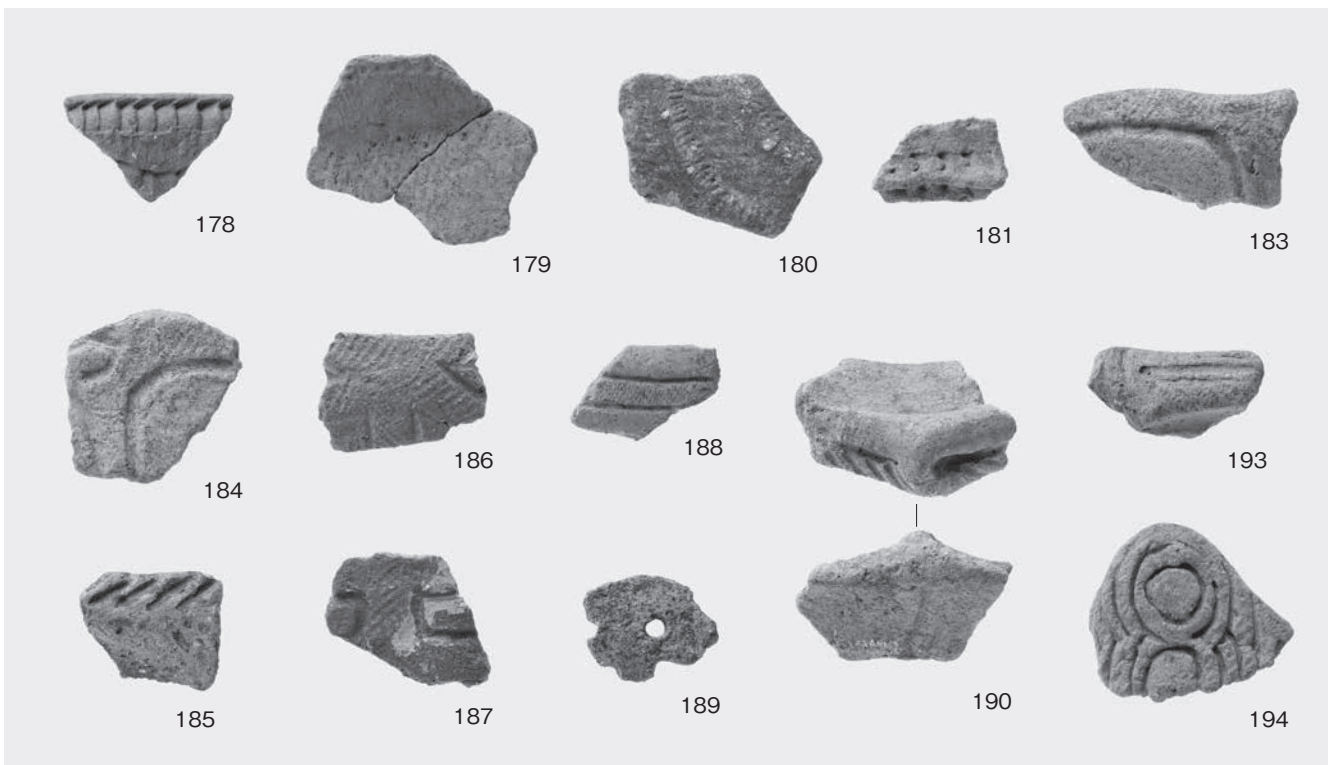
1 河道 1 南地区下層出土土器①



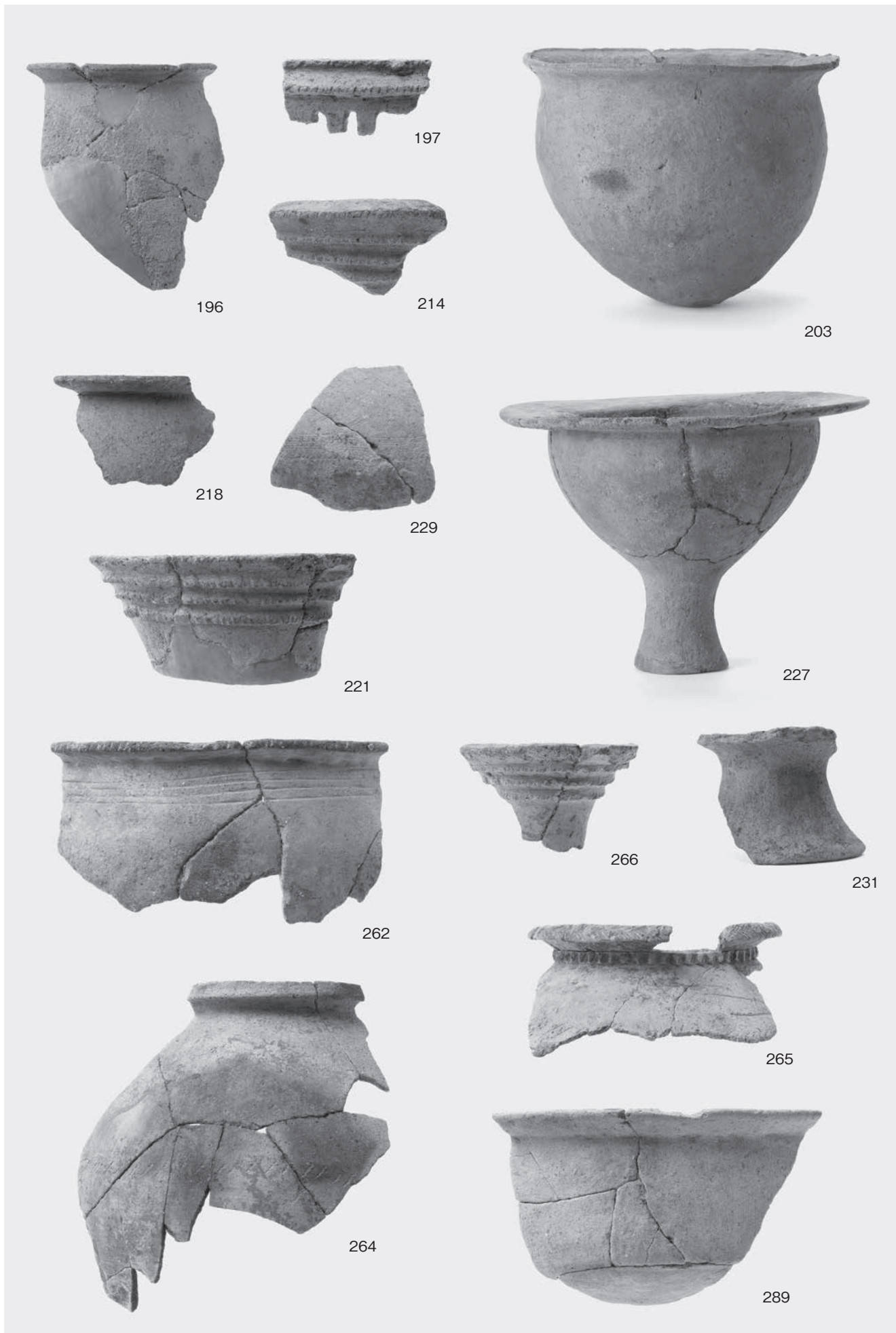
1 河道1南地区下層出土土器②

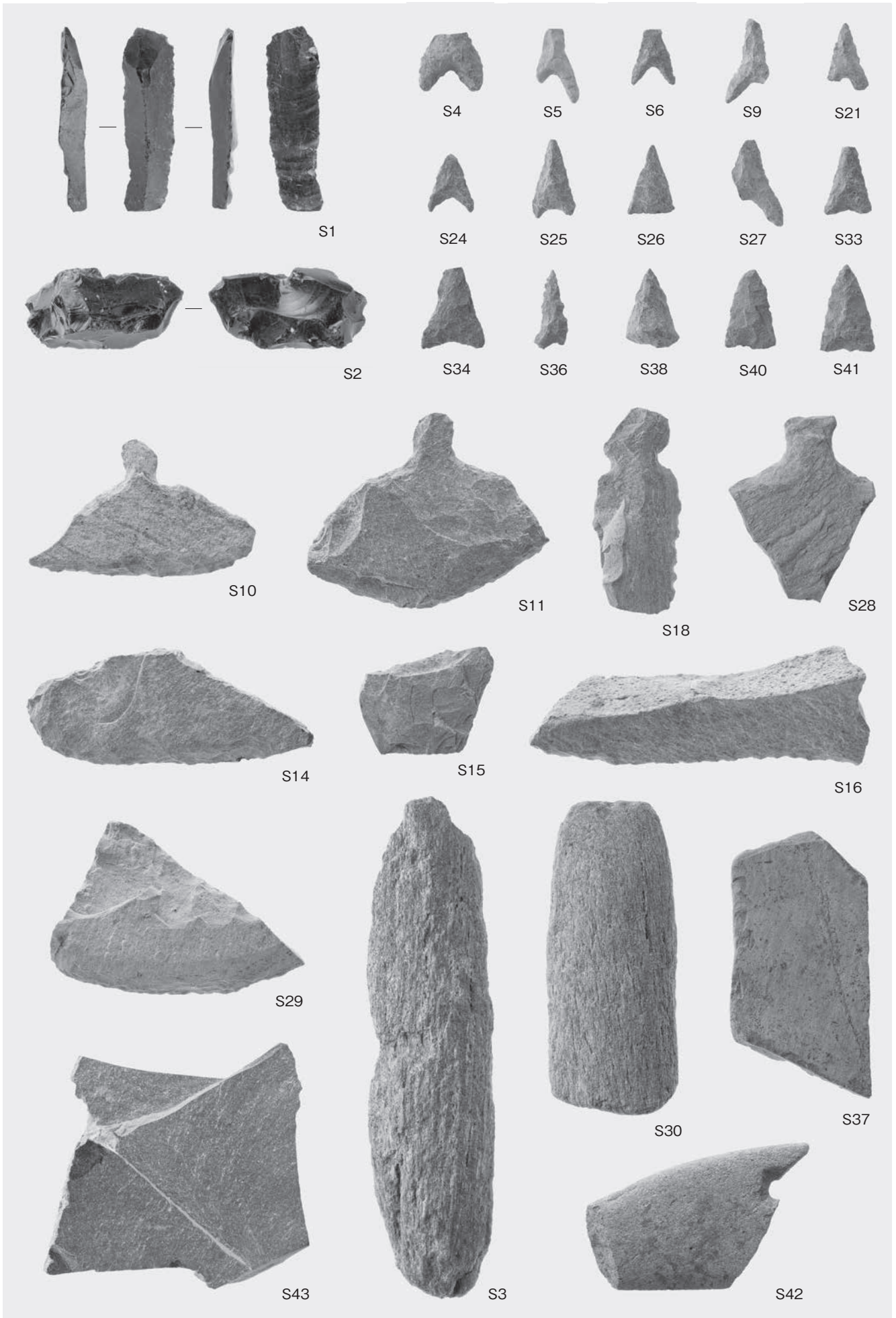


2 河道1出土土器（縄文時代晩期）

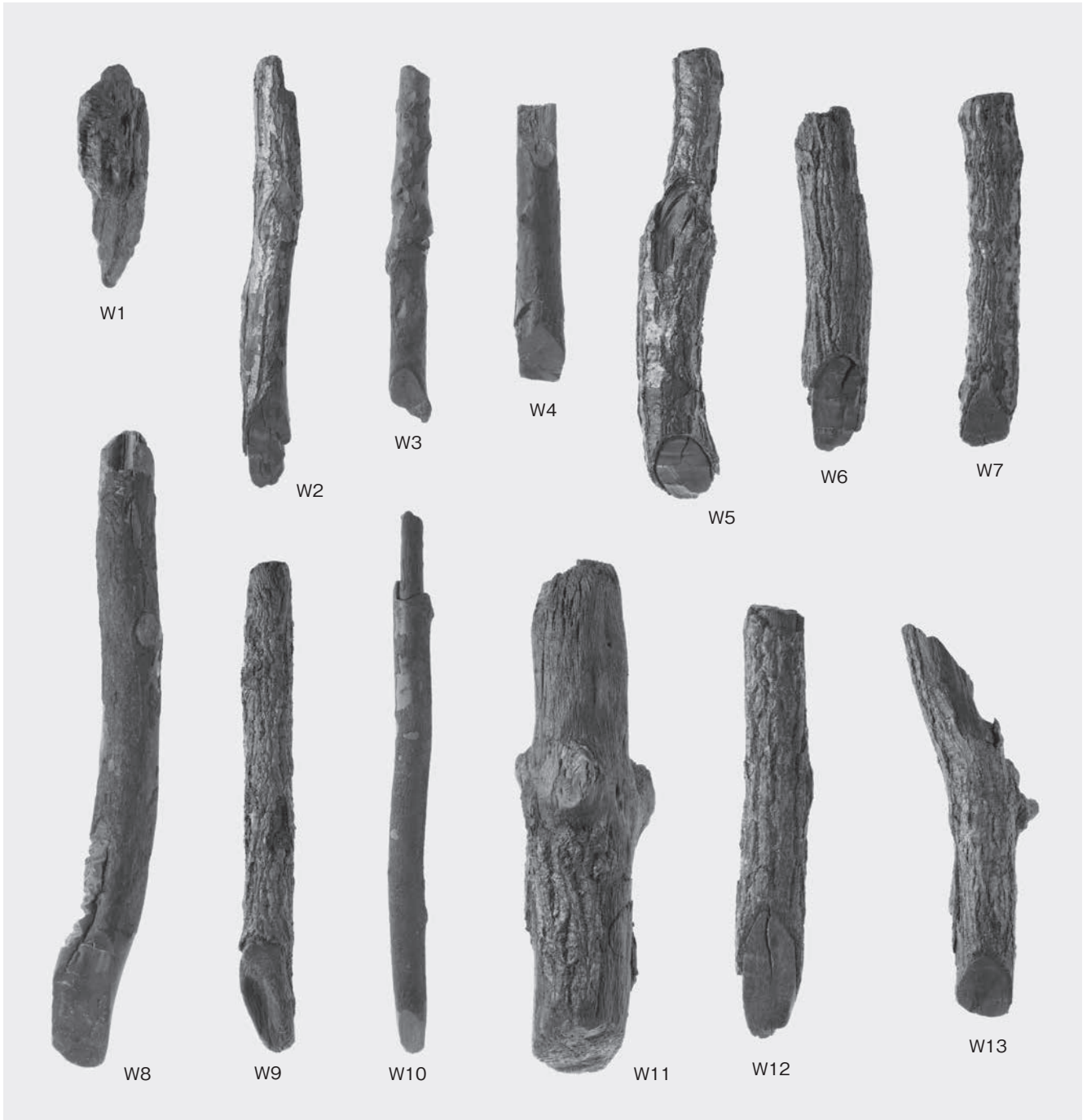


3 遺構に伴わない縄文土器

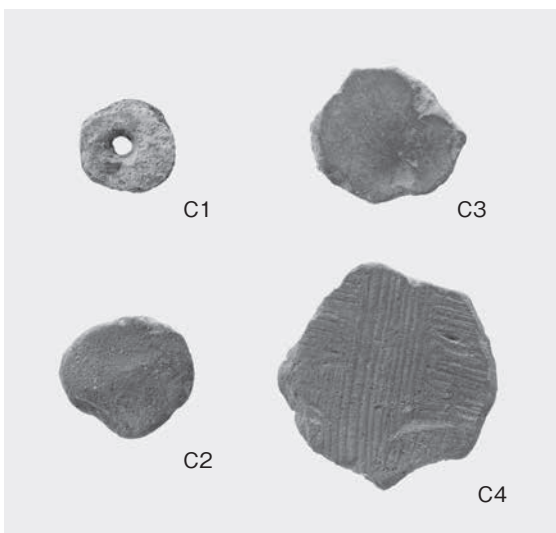




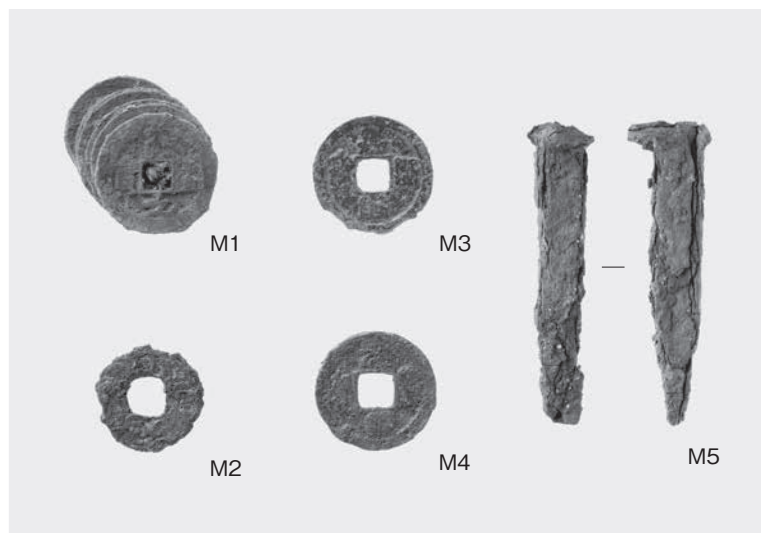
1 石製品



1 木製品



2 土製品



3 金属製品

報告書抄録

ふりがな	じょうでんごんいせき わだだにいせき まきさやいせき								
書名	城殿山遺跡 和田谷遺跡 マキサヤ遺跡								
副書名	一般国道2号(玉島・笠岡道路)改築工事に伴う発掘調査								
巻次	2								
シリーズ名	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告								
シリーズ番号	256								
編著者名	石田爲成・大橋雅也・高田恭一郎・澤山孝之・柴田英樹・渡邊恵里子・氏平昭則・小林利晴・河合 忍・松尾佳子・藤井翔平・森本直人・北門幸二郎・田村朋美・白石 純・鈴木瑞穂・株式会社パレオ・ラボ・パリオ・サーヴェイ株式会社								
編集機関	岡山県古代吉備文化財センター								
所在地	〒701-0136 岡山県岡山市北区西花尻1325-3 TEL 086-293-3211 URL https://www.pref.okayama.jp/site/kodai/								
発行機関	岡山県教育委員会								
所在地	〒700-8570 岡山県岡山市北区内山下2-4-6 TEL 086-224-2111								
発行年月日	2022年3月18日								
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 。、”	東経 。、”	発掘期間	発掘面積 (㎡)	発掘原因	
		市町村	遺跡番号						
じょうでんごんいせき 城殿山遺跡	おかやまけんあさくらし 岡山県浅口市 かもがたちろうくじょういん 鴨方町六条院 にし 西3163ほか	33216	334430196	34° 30’ 28”	133° 34’ 33”	20200407～20200731	1,175	記録保存調査	
わだだにいせき 和田谷遺跡	おかやまけんあさくらし 岡山県浅口市 かもがたちろうくじょういん 鴨方町六条院 にし 西2839-1ほか	33216	334430190	34° 30’ 26”	133° 34’ 26”	20151014～20160314 20160411～20160912 20170802～20171220	5,450 2,400 2,315		
まきさやいせき マキサヤ遺跡	おかやまけんあさくらし 岡山県浅口市 さとしろうくじょういん 里庄町新庄 3885ほか	33445	334450092	34° 29’ 58”	133° 33’ 32”	20151014～20160128 20160516～20170124	2,250 2,873		
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物			特記事項
城殿山遺跡	墳墓・集落	弥生時代～古墳時代		埋葬施設6、石列1		弥生土器、勾玉、ガラス小玉、鉄剣、鉄鏃			
		室町時代		掘立柱建物1、柱穴列2、土坑9、溝9		土師器、亀山焼、瓦質土器			
和田谷遺跡	集落	弥生時代		土坑1、溝11		弥生土器、土錘、石鏃、磨製石庖丁			
		古墳時代		段状遺構8、土坑4、溝1		須恵器、土師器、製塩土器、石錘、耳環、鉄鏃、鉄滓			
		奈良時代～平安時代		掘立柱建物12、柱穴列8、段状遺構4、土坑21、竪穴遺構3、鍛冶炉5、被熱面1、溝10、たわみ4		須恵器、土師器、製塩土器、緑釉陶器、灰釉陶器、瓦、土錘、鉄釘、鉄鏃、刀子、鉄製紡錘車、鉄滓			
		鎌倉時代～室町時代		掘立柱建物7、柱穴列7、土坑9、被熱面1、溝12、たわみ2、河道1		土師器、瓦質土器、青磁、白磁、土製円板、砥石、鉄釘、銅銭、銃丸			

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
マキサヤ遺跡	集落	縄文時代	土坑2、たわみ4、河道1	縄文土器、石鏃、石匙、石棒	河道から縄文時代後期前葉の土器が多量に出土。
		弥生時代	竪穴住居1、土坑8、集石2、たわみ3、河道1	弥生土器、石鏃、磨製石庖丁	
		古墳時代	竪穴住居1	土師器	
		奈良時代～平安時代	河道1、護岸1	土師器、木杭	
		鎌倉時代～室町時代	柱穴列1、土坑2、たわみ1	土師器、青磁、銅銭	
要約	城殿山遺跡 標高約73mの丘陵頂部付近で弥生時代後期後半から古墳時代初頭にかけての埋葬施設を6基確認、内3基は大型の墓坑をもつ木棺墓。埋葬施設1から鉄剣や楽浪系土器、埋葬施設4から翡翠製勾玉、水晶製勾玉、ガラス小玉、青銅片、埋葬施設5から鉄鏃など貴重な副葬品が出土しており、有力首長層の墳墓と想定される。また、これらの埋葬施設と重複して室町時代の土坑や溝を確認。				
	和田谷遺跡 低丘陵の頂部から斜面部に位置。弥生時代中期後葉の溝群、古墳時代後期の段状遺構や土坑、奈良時代の鍛冶炉と関連の竪穴遺構、平安時代から鎌倉時代の掘立柱建物・柱穴列・段状遺構等を確認。遺物では、縄文時代草創期の有茎尖頭器、古墳時代から奈良時代にかけての製塩土器がまとめて出土。平安時代から鎌倉時代にかけては大規模な掘立柱建物を伴い、施釉陶器等も出土することから、豪族居宅等の有力集落と考えられる。				
	マキサヤ遺跡 丘陵裾の斜面部から谷部に位置。縄文時代中期末から室町時代にかけての遺構を確認。斜面部では、縄文時代前期から後期にかけての土器が土坑や包含層から出土。弥生時代中期中葉の竪穴住居・土坑・集石、古墳時代初頭の竪穴住居、室町時代の柱穴列などを検出。谷部では、縄文時代～古代の河道1と古代～中世にかけての河道2を確認。河道1左岸では、縄文時代後期前葉を中心とする土器が多量に出土。瀬戸内東部では、これまで空白であった縁帯文成立期の様相を示す資料群。また、河道2左岸では、約29mにわたって木杭や横木で構築された平安時代の護岸を検出。				

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 256

城殿山遺跡
和田谷遺跡
マキサヤ遺跡

一般国道2号(玉島・笠岡道路)
改築工事に伴う発掘調査2

令和4年3月18日 印刷

令和4年3月18日 発行

編集 岡山県古代吉備文化財センター
岡山県岡山市北区西花尻1325-3

発行 岡山県教育委員会
岡山県岡山市北区内山下2-4-6

印刷 サンコー印刷株式会社
岡山県総社市駅南1-1-5